

# 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(その1)報告書

縄文時代～近世編

第1分冊 本文編

2008

国 土 交 通 省  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(その1)報告書  
《本文編》

二〇〇八

国 土 交 通 省  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(その1)報告書

縄文時代～近世編

第1分冊 本文編

2008

国 土 交 通 省  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





荒砥北三木堂Ⅱ遺跡 発掘区 全景（南から）



1・2区出土 高坏形器台



2区出土石製・土製模造品（ $\frac{1}{2}$ ）



## 序

一般国道17号バイパス、通称「上武道路」は埼玉県深谷市と本県前橋市を結ぶ基幹道路として、国道50号周辺までの区間が開通・供用されております。

上武道路の通過地域には多くの埋蔵文化財が包蔵されています。国道50号以南の区間でも道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が実施され、35もの遺跡が明らかになりました。

平成11年からは国道50号以北の建設工事が始まり、当事業団が主体となり埋蔵文化財の発掘調査を進めております。本書はそのうち、平成12年から15年にかけて発掘調査を実施した、前橋市今井町にあります荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の発掘調査報告書です。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡では、赤城山南麓の台地縁辺で古墳時代中期から後期の集落を中心とした遺構が多数みつかりました。低地部では古墳時代前期から水田がつけられていたことも判明しました。

本遺跡の北側には初期須恵器が多く出土することで知られる荒砥北三木堂遺跡が隣接しています。遺跡南方には今井神社古墳という大型前方後円墳もあり、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡周辺の遺跡は、古墳時代の荒砥地域を考えるうえで重要な遺跡群といえるでしょう。

発掘調査から報告書刊行まで、国土交通省関東地方建設局高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導・ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されることを願ひ序といたします。

平成20年2月15日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 高橋 勇 夫



## 例 言

1. 本書は平成12年度・13年度・15年度の一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その1)で実施された荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の発掘調査報告書(縄文時代～近世編)である。
2. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は、群馬県前橋市今井町538、547～558、581～583、591、592、596～600、623、626～629番地に所在した。遺跡名は、昭和56年度に荒砥南部團場整備事業にともなって発掘調査された「荒砥北三木堂遺跡」に隣接する同じ遺跡であることから、Ⅱを付けて命名した。
3. 発掘調査は、国土交通省の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

期 間 平成12年4月1日～平成13年3月31日

平成13年4月1日～平成14年3月31日

平成15年10月1日～平成15年12月25日

管理指導 小野宇三郎(理事長)、吉田豊・赤山容造(常務理事)、住谷進(管理部長)、能登健(調査研究部長)  
小山友孝(調査研究第2課長)、大島信夫(総務課長)

事務担当 笠原秀樹(総務係長)、小山建夫(経理係長)、須田朋子・吉田有光・森下弘美(係長代理)、  
片岡徳雄(主事)、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、  
狩野真子、松下次男、吉田 茂(補助員)

調査担当 12年度 石塚久則・小島敦子・関根慎二・新倉明彦(主幹兼専門員)、金子伸也(専門員)、  
池田政志・亀山幸広(主任調査研究員)、金井仁史・今泉晃(調査研究員)、小宮山達雄・  
前田和昭(嘱託員)

13年度 飯塚卓二(主幹兼課長)、小島敦子(主幹兼専門員)、今泉晃・佐藤理重(調査研究員)

15年度 山口逸弘(主幹兼専門員)、石原良人(調査研究員)

4. 発掘資料の整理作業は、国土交通省の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。平成16年度については、両県教育委員会と交わした平成14年3月27日付け「埋蔵文化財保護の協力に関する協定書」に基づき、その一部を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託した。

(1)平成16年度埋蔵文化財資料整理業務委託

期 間 平成16年4月1日～平成17年3月31日

整理担当 金子直行、大谷 徹、亀田直美(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)

業務内容 2区住居出土遺物の接合・復元・実測・トレース・拓本・遺物観察・写真撮影・遺構計測

(2)平成17年度・18年度

期 間 平成17年10月1日～平成19年3月31日

管理指導 小野宇三郎・高橋勇夫(理事長)、住谷永市・木村裕紀(常務理事)、神保佑史・津金沢吉茂(事業局長)、矢崎俊夫・萩原勉(総務部長)、右島和夫・西田健彦(調査研究部長)、中東耕志・佐藤明人(資料整理部長)、大木紳一郎(資料整理第2GL)、相京建史(資料整理GL)、丸岡道雄・宮前結城雄(総務課長)

事務担当 高橋房雄・石井清(経理係長)、竹内 宏・笠原秀樹(総務係長)、須田朋子・吉田有光・今泉大作(主幹)、栗原幸代・佐藤聖行・阿久沢玄洋・清水秀紀(主任)、今井もと子・内山佳子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・松下次男、吉田 茂、武藤秀典(事務補助員)



- 整理担当 小島敦子(主任専門員(総括))
- 遺物整理 木暮芳枝、馬場信子、新井雅子、吉澤照恵、生果由美子、星野幸恵、富沢スミ江(整理補助員)
- 保存処理 関 邦一(主幹(総括))、土橋まり子(嘱託員)、小材浩一(整理補助員)
- 器械実測 田所順子、伊東博子、岸 弘子(整理補助員)
5. 本書の作成に関わる分担は以下の通りである。
- 編 集 小島敦子
- 本文執筆 大木神一郎(資料整理第2GL-第5章4)、原 雅信(主席専門員-第5章5(2)a・第7章6)、  
岩崎泰一(専門員(総括)-第5章5(2)b)、大谷 徹(第5章3(2))、小島敦子(第5章3(2)他)
- 遺構写真 調査担当者
- 遺物写真 佐藤元彦(主幹(総括))、大原道則(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
- 遺物観察 縄文土器：原 雅信、弥生土器：大木神一郎、縄文石器：岩崎泰一、  
土師器・須恵器：小島敦子・大谷 徹、陶磁器・ガラス瓶：大西雅広(専門員(総括))
- 図版作成 木暮芳枝、吉澤照恵、生果由美子、星野幸恵、富沢スミ江
- 委託業務 挿図デジタル原稿作成：(株)測研、土器トレース：(株)測研、  
テフラ・植物珪酸体・花粉分析：古環境研究所 出土炭化種実・炭化材同定：パレオ・ラボ  
出土土器の金属考古学的調査：岩手県文化振興事業団
6. 石材同定は飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
7. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関よりご助言・ご協力を得た。記して感謝の意を表します。
- 杉山秀宏(敬称略)、国土交通省関東建設局・高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会  
整理作業においては、当事業団職員坂口一、原雅信、藤巻幸男、大木神一郎、徳江秀夫、大西雅広、岩崎泰一、深澤敦仁の助言を得た。
8. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センター及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

## 凡 例

1. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡内のグリッドの座標値は国家座標(座標第Ⅸ系)を用いて測量した。1-98-A-1の座標は、旧座標でX=40.90km、Y=-60.70km、新座標にすれば概ねX=41.25km、Y=-60.99kmである。
2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用した。
3. 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を使用している。
4. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。  
遺構図 住居1:80 住居炉・竈1:40 掘立柱建物1:80 土坑・井戸1:40  
遺物図 土器1:4 土器破片拓影1:3 石器・石製品1:3または1:2 大型石器1:6  
小型石器1:1
5. 遺物番号は挿図ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
6. 図中で使用したスクリーン・インレタは以下のことを表す。



7. 竪穴住居の平面図のうち、床面の図を上あるいは左に配置し、掘り方面の図を下あるいは右に配置した。
8. 竪穴住居の横断面図は平面図の下方に編集したもので、反転トレースしたものがある。特に、北側から記録した東西方向の断面図については、これによる。したがってこれらの土層断面の写真とは一致しない。また、竪の断面図は四分法で記録し隣り合った部分を反転合成したもので、同様に土層断面写真とは一致しない。
9. 遺物写真図版の倍率は、土器は原則として1/4、石器のうち礫・剥片石器は大きさに応じて1/3あるいは1/2、石鏃等の小型のものは1/1に近づけるようにした。
10. 遺物の重量の計測にあたっては6000gまでは1g単位、20kgまでは50g単位、20kg以上は100g単位の秤を使用して計測した。
11. 各地図の使用は以下のとおりである。
  - 第1図 国土地理院発行、20万分の1地勢図(長野・宇都宮)
  - 第2図・第7図 国土地理院発行、2万5千分の1地形図「大湖」
  - 第3図・第6図 前橋市発行、昭和49年測図現形図57
  - 第5図 『群馬県史』通史編1付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡1』第5図を修正して使用。
12. 本遺跡の1区・2区の遺構全体図の作成にあたっては、圃場整備事業にともなって調査・報告された荒砥北三木堂遺跡の1区および2区との合成をおこなった。この際荒砥北三木堂遺跡報告書に記載された座標値で合成すると、遺構の規格性から同一住居の可能性がきわめて高いと思われる荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2区58号住居と荒砥北三木堂遺跡1区12号住居が合成できなかつた。そこで荒砥北三木堂遺跡の報告者と検討した結果、荒砥北三木堂遺跡の全体図座標値は製図上の数値であり精度は高いことが判明した。協議の結果、両区の合成にあたっては、今回の調査の座標値を用い、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2区58号住居と荒砥北三木堂遺跡1区12号住居は同一住居として合成できるように全体図を作成した。
13. 各遺構の記述にあたっては以下のような点に留意して記述した。

**住居** 位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形には分類して記載した。規模は遺構確認面での上場で計測した。なお、竈付設住居では竈の部分を含んでいない。面積は床面積とし、住居の下場でプランメーターの3回平均値を計測した。方位は北方向に最も近い主軸あるいは壁の方向を計測した。床面は傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。本遺跡の埋没土中にあるテフラについては、それぞれの名称と記号を併用した。使用したテフラの名称・記号・降下年代は下記のとおりである。浅間Bテフラ = As-B(1108年)、榛名ニツ岳火山灰 = Hr-FA(6世紀初頭)、浅間C軽石 = As-C(3世紀末) 炉・竈はそれぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。また出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載したが、表現は不統一である。縄文時代は土器型式名、古墳時代については出土遺物の分類・編年から本遺跡の時期設定をおこない、これで表記した。時期区分や隣接する荒砥北三木堂遺跡との対比については第7章-2で詳述した。

**その他の遺構** 土坑・溝・墓等については、住居に準じて記述した。

# 目次

序

口絵

例言

凡例

報告書抄録

## 第1章 調査に至る経過

1. 国道17号改良工事と発掘調査 …………… 1

## 第2章 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法
  - (1) 遺跡・調査区・グリッドの設定 …………… 4
  - (2) 基本土層と遺構確認 …………… 6
  - (3) 発掘調査の記録 …………… 6
2. 発掘調査の経過 …………… 9
3. 発掘区の概要 …………… 11
4. 整理作業の経過 …………… 13
5. 整理作業の方法 …………… 14

## 第3章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地形 …………… 15
2. 周辺の遺跡分布 …………… 18

## 第4章 1区の遺構と遺物

1. 概要 …………… 25
2. 1面(表土直下)の遺構と遺物 …………… 31
  - (1) 溝 …………… 31
  - (2) 土坑 …………… 45
  - (3) 井戸 …………… 47
  - (4) 池状遺構 …………… 48
  - (5) 耕作痕跡 …………… 54
  - (6) 1面の遺構外出土遺物 …………… 55
3. 2面(浅間Bテフラ直下)の遺構と遺物 …… 57
  - (1) 水田 …………… 57
  - (2) 土坑 …………… 59
  - (3) 2面の遺構外出土遺物 …………… 63

4. 3面(浅間C混土中)の遺構と遺物 …………… 63
  - (1) 溝 …………… 63
  - (2) 土坑 …………… 70
  - (3) 竪穴住居 …………… 74
  - (4) 古墳時代遺物包含層 …………… 80
  - (5) 3面の遺構外出土遺物 …………… 90
5. 4面(浅間C軽石下)の遺構と遺物 …………… 92
  - (1) 水田 …………… 92
  - (2) 溝 …………… 94
  - (3) 土坑 …………… 99
6. 弥生時代の遺物 …………… 99
7. 縄文時代の遺物 …………… 100

## 第5章 2区の遺構と遺物

1. 概要 …………… 103
2. 中世以降の遺構と遺物 …………… 105
  - (1) 墓坑 …………… 105
  - (2) 道跡 …………… 108
  - (3) 竪穴住居 …………… 110
  - (4) 掘立柱建物 …………… 111
  - (5) ビット …………… 111
  - (6) 溝 …………… 114
  - (7) 井戸 …………… 120
  - (8) 土坑 …………… 129
  - (9) 遺構外の出土遺物 …………… 144
3. 古墳時代の遺構と遺物 …………… 145
  - (1) 概要 …………… 145
  - (2) 竪穴住居 …………… 146
  - (3) 竪穴状遺構 …………… 330
  - (4) 土坑 …………… 331
  - (5) 遺構外の出土遺物 …………… 369

4. 弥生時代の遺物	372
5. 縄文時代の遺構と遺物	373
(1) 土坑	373
(2) 遺構外の出土遺物	376
<b>第6章 3区の遺構と遺物</b>	
1. 概要	400
2. 中世以降の遺構と遺物	401
(1) 竪穴住居	401
(2) 井戸	402
(3) 溝	403
(4) 土坑	406
(5) ビット	417
(6) 遺構外の出土遺物	417
3. 奈良時代の遺構と遺物	418
(1) 竪穴住居	418
4. 縄文時代の遺構と遺物	421
(1) 土坑	421
(2) 遺構外の出土遺物	424
<b>第7章 発掘調査の成果と課題</b>	
1. 調査の成果	430
2. 古墳時代の集落構成とその変遷	431
3. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土の古式須恵器	448
4. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土の石製模造品	452
5. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土の擦石・砥石	456
6. 諸磯a式土器の竹管文について	458
<b>参考文献</b>	461

## 第8章 科学分析報告

1. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1a区・1b区の テフラ・植物珪酸体分析	463
2. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1c区の テフラ・植物珪酸体分析	470
3. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1a区埋没谷の テフラ・植物珪酸体分析および年代測定	477
4. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2c区・3b区の テフラ・植物珪酸体分析・花粉分析	490
5. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2a区の古墳時代 大型土坑のテフラ・植物珪酸体分析・ 種実同定	520
6. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡から出土した炭化種実	521
7. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定	523
8. 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土鉄器の 金属考古学的調査結果	526

奥付

## 第2分冊

遺構一覧・遺物観察表  
写真図版

付図

## 挿図目次

第 1 図	群馬県の地勢と荒砥北三木堂Ⅰ遺跡……………	1
第 2 図	上武道路と荒砥北三木堂Ⅱ遺跡……………	2
第 3 図	荒砥北三木堂Ⅰ遺跡の発掘区……………	5
第 4 図	荒砥北三木堂Ⅰ遺跡のグッドと基本土層……………	7
第 5 図	群馬県中央部の地形と荒砥北三木堂Ⅰ遺跡……………	15
第 6 図	荒砥北三木堂Ⅰ遺跡の立地と周辺の発掘された遺跡……………	17
第 7 図	荒砥北三木堂Ⅰ遺跡周辺の遺跡……………	19
第 8 図	荒砥北三木堂Ⅰ遺跡周辺の古墳時代の遺跡分布……………	23
第 9 図	1 区の土層観察地点と 1 a 区・1 c 区の基本土層……………	26
第 10 図	1 b 区の基本土層……………	29
第 11 図	1 区 1～3 号、44 号溝土層断面……………	32
第 12 図	1 区 1～3 号、44 号、45 号、51 号溝土層断面と出土遺物……………	33
第 13 図	1 区 4 号、5 号、7 号、8 号溝土層断面……………	35
第 14 図	1 区 11～13 号溝土層断面……………	37
第 15 図	1 区 13 号、14 号溝土層断面と 13 号溝出土遺物……………	38
第 16 図	1 区 15～17 号溝土層断面と 17 号溝出土遺物……………	40
第 17 図	1 区 18～24 号、42 号、43 号、46 号溝土層断面……………	43
第 18 図	1 区 1 号、6 号、11 号土坑……………	46
第 19 図	1 区 1 号井戸と出土遺物……………	47
第 20 図	1 区 1 号池状遺構土層断面(1)……………	48
第 21 図	1 区 1 号池状遺構土層断面(2)……………	49
第 22 図	1 区 1 号池状遺構出土遺物……………	50
第 23 図	1 区 2 号池状遺構土層断面(1)……………	51
第 24 図	1 区 2 号池状遺構土層断面(2)……………	52
第 25 図	1 区 2 号池状遺構出土遺物(1)……………	53
第 26 図	1 区 2 号池状遺構出土遺物(2)……………	54
第 27 図	1 区 1 号、2 号耕作痕跡土層断面……………	55
第 28 図	1 区 1 面の遺構外出土遺物……………	56
第 29 図	1 区(浅間 B)テフラ下木田出土遺物……………	57
第 30 図	1 区(浅間 B)テフラ下木田……………	58
第 31 図	1 区 2 号、3 号土坑……………	59
第 32 図	1 区 2 号土坑出土遺物……………	60
第 33 図	1 区 1、2 面全体図……………	61
第 34 図	1 区 25 号、29 号、31 号、33～35 号、36 A 号、39 号溝土層断面と 34 号、35 号溝出土遺物……………	65
第 35 図	1 区 40 号、41 号、47 号～50 号溝土層断面……………	69
第 36 図	1 区 4 号、5 号、10 号土坑と 5 号土坑出土遺物……………	71
第 37 図	1 区 8 号、9 号、12 号土坑と出土遺物……………	73
第 38 図	1 区 1 号住居……………	75
第 39 図	1 区 1 号住居儀と出土遺物……………	76
第 40 図	1 区 2 号住居……………	77
第 41 図	1 区 2 号住居儀……………	78
第 42 図	1 区 2 号住居出土遺物……………	79
第 43 図	1 区古墳時代遺物包含層遺物分布と土層断面……………	81
第 44 図	1 区 3 面全体図……………	83
第 45 図	1 区古墳時代遺物包含層出土遺物(1)……………	85
第 46 図	1 区古墳時代遺物包含層出土遺物(2)……………	86
第 47 図	1 区古墳時代遺物包含層出土遺物(3)……………	87
第 48 図	1 区古墳時代遺物包含層出土遺物(4)……………	88
第 49 図	1 区古墳時代遺物包含層出土遺物(5)……………	89
第 50 図	1 区 1～3 面の古墳時代遺構外出土遺物……………	91
第 51 図	1 区(浅間 C)軽石下水田……………	93
第 52 図	1 区 4 面出土弥生土層……………	94
第 53 図	1 区 30 号、32 号溝土層断面……………	96
第 54 図	1 区 4 面全体図……………	97
第 55 図	1 区 7 号土坑……………	99
第 56 図	1 区出土の弥生土層……………	99
第 57 図	1 区出土の縄文土層……………	100
第 58 図	1 区出土の縄文石器(1)……………	101
第 59 図	1 区出土の縄文石器(2)……………	102
第 60 図	2 区の遺構分布……………	103
第 61 図	2 区 13 号、50 号、91 号土坑と出土遺物……………	106
第 62 図	2 区 96 号、97 号土坑と出土遺物……………	107
第 63 図	2 区遺状遺構……………	109
第 64 図	2 区 60 号住居と出土遺物……………	110
第 65 図	2 区 1 号孤立柱建物と出土遺物……………	112
第 66 図	2 区ピット群……………	113
第 67 図	2 区 1 号、2 号、4 号、7 号溝……………	115
第 68 図	2 区 3 号溝と出土遺物……………	117
第 69 図	2 区 5 号、6 号溝と出土遺物……………	118
第 70 図	2 区 8 号溝……………	119
第 71 図	2 区 1 号、2 号井戸……………	121
第 72 図	2 区 3 号井戸と出土遺物(1)……………	122
第 73 図	2 区 3 号井戸出土遺物(2)……………	123
第 74 図	2 区 4 号井戸と出土遺物……………	124
第 75 図	2 区 5 号井戸と出土遺物……………	126
第 76 図	2 区 6 号、7 号井戸と出土遺物……………	127
第 77 図	2 区 8 号、9 号井戸と出土遺物……………	128
第 78 図	2 区竊入方形の土坑……………	130
第 79 図	2 区長方形の土坑(1)……………	131
第 80 図	2 区長方形の土坑(2)……………	132
第 81 図	2 区長方形の土坑(3)……………	133
第 82 図	2 区方形・円形の土坑(1)……………	134
第 83 図	2 区円形の土坑(2)……………	135
第 84 図	2 区円形の土坑(3)……………	136
第 85 図	2 区楕円形の土坑(1)……………	137
第 86 図	2 区 147 号土坑と出土遺物……………	139
第 87 図	2 区楕円形の土坑(2)……………	140
第 88 図	2 区不定形の土坑(1)……………	141
第 89 図	2 区不定形の土坑(2)……………	142
第 90 図	2 区不定形の土坑(3)……………	143
第 91 図	2 区中世以降の遺構外出土遺物……………	144
第 92 図	2 a 区の古墳時代遺構の分布……………	145
第 93 図	2 区 1 号住居……………	147
第 94 図	2 区 1 号住居儀と出土遺物……………	148
第 95 図	2 区 2 号住居……………	149
第 96 図	2 区 2 号住居……………	150
第 97 図	2 区 2 号住居出土遺物……………	151
第 98 図	2 区 3 号住居出土遺物……………	152
第 99 図	2 区 3 号住居……………	153
第 100 図	2 区 4 号住居……………	154
第 101 図	2 区 4 号住居……………	155
第 102 図	2 区 4 号住居出土遺物……………	156
第 103 図	2 区 5 号住居……………	157
第 104 図	2 区 5 号住居儀と出土遺物……………	158
第 105 図	2 区 6 号住居……………	159
第 106 図	2 区 6 号住居……………	160
第 107 図	2 区 6 号住居出土遺物……………	161
第 108 図	2 区 7 号住居と出土遺物……………	163
第 109 図	2 区 8 号住居……………	164
第 110 図	2 区 8 号住居儀と出土遺物……………	165
第 111 図	2 区 9 号、10 号住居……………	167
第 112 図	2 区 9 号住居儀と 9 号、10 号住居出土遺物……………	168
第 113 図	2 区 11 号住居……………	170
第 114 図	2 区 11 号住居出土遺物……………	171
第 115 図	2 区 12 号住居と出土遺物……………	173
第 116 図	2 区 13 号住居……………	174
第 117 図	2 区 13 号住居出土遺物……………	175
第 118 図	2 区 14 号住居……………	176
第 119 図	2 区 14 号住居……………	177
第 120 図	2 区 14 号住居出土遺物(1)……………	178
第 121 図	2 区 14 号住居出土遺物(2)……………	178
第 122 図	2 区 15 号住居儀と出土遺物……………	179
第 123 図	2 区 15 号住居……………	180
第 124 図	2 区 16 号住居……………	182
第 125 図	2 区 16 号住居出土遺物……………	183
第 126 図	2 区 17 号住居……………	184
第 127 図	2 区 17 号住居儀と出土遺物(1)……………	186
第 128 図	2 区 17 号住居儀と出土遺物(2)……………	187
第 129 図	2 区 18 号住居儀と出土遺物……………	188
第 130 図	2 区 18 号住居……………	189
第 131 図	2 区 19 号住居……………	190

第1329区	2区19号住居出土文物	191
第1330区	2区20号住居	192
第1340区	2区20号住居	193
第1350区	2区20号住居出土文物	194
第1360区	2区20号住居	195
第1370区	2区21号住居出土文物(1)	196
第1380区	2区21号住居出土文物(2)	197
第1390区	2区22号住居出土文物	198
第1400区	2区22号住居出土文物	199
第1410区	2区22号住居	200
第1420区	2区24号住居出土文物(1)	202
第1430区	2区24号住居出土文物(2)	203
第1440区	2区25号住居	205
第1450区	2区25号住居出土文物	206
第1460区	2区26号住居	207
第1470区	2区26号住居出土文物(1)	208
第1480区	2区26号住居出土文物(2)	209
第1490区	2区27号住居	210
第1500区	2区27号住居出土文物	211
第1510区	2区28号住居	212
第1520区	2区28号住居出土文物	214
第1530区	2区29号住居	216
第1540区	2区29号住居	218
第1550区	2区29号住居出土文物(1)	219
第1560区	2区29号住居出土文物(2)	220
第1570区	2区29号住居出土文物(3)	221
第1580区	2区30号住居	222
第1590区	2区30号住居出土文物	223
第1600区	2区30号住居	224
第1610区	2区31号住居	227
第1620区	2区31号住居	228
第1630区	2区31号住居出土文物(1)	232
第1640区	2区31号住居出土文物(2)	233
第1650区	2区31号住居出土文物(3)	234
第1660区	2区32号住居	235
第1670区	2区32号住居出土文物	236
第1680区	2区32号住居出土文物	237
第1690区	2区32号住居	238
第1700区	2区34号、44号住居	242
第1710区	2区34号、44号住居出土文物	244
第1720区	2区35号住居	246
第1730区	2区35号住居	248
第1740区	2区35号住居出土文物(1)	249
第1750区	2区35号住居出土文物(2)	250
第1760区	2区35号住居出土文物(3)	251
第1770区	2区36号住居出土文物(1)	252
第1780区	2区36号住居出土文物(2)	253
第1790区	2区36号住居	254
第1800区	2区37号住居	257
第1810区	2区37号住居	258
第1820区	2区38号住居出土文物	260
第1830区	2区39号住居	261
第1840区	2区39号住居	262
第1850区	2区39号住居出土文物	263
第1860区	2区41号住居出土文物(1)	264
第1870区	2区41号住居出土文物(2)	265
第1880区	2区41号住居	266
第1890区	2区42号住居	269
第1900区	2区42号住居出土文物	270
第1910区	2区43号住居	271
第1920区	2区43号住居出土文物	272
第1930区	2区45号住居出土文物	274
第1940区	2区46号住居出土文物(1)	277
第1950区	2区46号住居出土文物(2)	278
第1960区	2区48号住居	281
第1970区	2区48号住居出土文物出土状况	282
第1980区	2区48号住居出土文物(1)	283

第1990区	2区48号住居出土文物(2)	284
第2000区	2区48号住居出土文物(3)	285
第2010区	2区48号住居出土文物(4)上墓	286
第2020区	2区49号住居	288
第2030区	2区49号住居出土文物(1)	289
第2040区	2区49号住居出土文物(2)上墓	290
第2050区	2区50号住居出土文物	292
第2060区	2区51号住居出土文物(1)	294
第2070区	2区51号住居出土文物(2)	295
第2080区	2区51号住居	296
第2090区	2区52号住居	299
第2100区	2区52号住居出土文物	300
第2110区	2区54号、55号住居出土文物	301
第2120区	2区56号住居出土文物(1)	304
第2130区	2区56号住居出土文物(2)	306
第2140区	2区56号住居出土文物(3)	307
第2150区	2区56号住居出土文物(4)	308
第2160区	2区57号住居出土文物	309
第2170区	2区57号住居	310
第2180区	2区58号住居出土文物	312
第2190区	2区58号住居	313
第2200区	2区59号住居	314
第2210区	2区59号住居	315
第2220区	2区59号住居出土文物	316
第2230区	2区60号住居	317
第2240区	2区60号住居	318
第2250区	2区60号住居出土文物(1)	320
第2260区	2区60号住居出土文物(2)	321
第2270区	2区61号住居	322
第2280区	2区61号住居出土文物	324
第2290区	2区62号住居	325
第2300区	2区62号住居出土文物	326
第2310区	2区63号住居	327
第2320区	2区63号住居出土文物	328
第2330区	2区64号住居出土文物	329
第2340区	2区1号、2号整伙坟墓出土文物	330
第2350区	2区4号、5号整伙坟墓出土文物	332
第2360区	2区81号土坑出土文物	333
第2370区	2区81号土坑	334
第2380区	2区77号土坑出土文物	335
第2390区	2区77号土坑	336
第2400区	2区79号土坑出土文物	338
第2410区	2区32号、33号土坑和32号土坑出土文物	339
第2420区	2区33号土坑出土文物	340
第2430区	2区72号土坑出土文物	341
第2440区	2区75号、29号土坑出土文物	342
第2450区	2区52号土坑出土文物	344
第2460区	2区44号、99号土坑和44号土坑出土文物	345
第2470区	2区3号土坑出土文物	347
第2480区	2区88号、89号土坑和88号土坑出土文物	348
第2490区	2区15号、41号、48号土坑出土文物	350
第2500区	2区1号土坑出土文物	351
第2510区	2区66号土坑出土文物	352
第2520区	2区83号土坑出土文物	354
第2530区	2区84号土坑	355
第2540区	2区84号土坑出土文物	356
第2550区	2区110号土坑出土文物	356
第2560区	2区61号土坑出土文物	358
第2570区	2区95号、101号土坑出土文物	359
第2580区	2区105号、19号、37号、18号土坑和19号土坑出土文物	361
第2590区	2区68号、69号、115号土坑和115号土坑出土文物	362
第2600区	2区116号土坑出土文物	364
第2610区	2区5号土坑出土文物	365
第2620区	2区62号、112号、119号土坑出土文物	366
第2630区	2区4号、21号、30号土坑出土文物	368
第2640区	2区28号土坑上棚面出土文物	369
第2650区	2区古碑时代墓葬出土文物(1)	370

第266頁	2区古墳時代遺構外出土遺物(2).....	371
第267頁	2区出土の弥生土器.....	372
第268頁	2区・3区および周辺の縄文時代遺構分布.....	374
第269頁	2区104号・108号・138号・142号土坑と出土遺物.....	375
第270頁	2区出土縄文土器の分布の変遷.....	378
第271頁	2区出土の縄文土器(1).....	381
第272頁	2区出土の縄文土器(2).....	382
第273頁	2区出土の縄文土器(3).....	383
第274頁	2区出土縄文土器の分布の変遷.....	386
第275頁	2区出土の縄文土器(1・打製石斧).....	392
第276頁	2区出土の縄文土器(2・打製石斧).....	393
第277頁	2区出土の縄文土器(3・尖形部・石鏝・石砦).....	394
第278頁	2区出土の縄文土器(4・削形).....	395
第279頁	2区出土の縄文土器(5・削形・使用痕ある湖片).....	396
第280頁	2区出土の縄文土器(6・加工痕ある湖片).....	397
第281頁	2区出土の縄文土器(7・石槌).....	398
第282頁	2区出土の縄文土器(8・礫石器).....	399
第283頁	3区の遺構分布.....	401
第284頁	3区2号住居と出土遺物.....	402
第285頁	3区1号井戸.....	403
第286頁	3区2号井戸と出土遺物.....	404
第287頁	3区1号・4号溝土層断面.....	405
第288頁	3区1号溝出土遺物.....	406
第289頁	3区方形土坑群土層断面.....	407
第290頁	3区組長方形土坑土層断面(1).....	408
第291頁	3区組長方形土坑土層断面(2)と出土遺物.....	409
第292頁	3区組長方形土坑土層断面(3).....	410
第293頁	3区長方形土坑(1).....	411
第294頁	3区長方形土坑(2).....	412
第295頁	3区長方形土坑(3).....	413
第296頁	風例本取跡の土層断面.....	413
第297頁	3区円形・楕円形土坑と出土遺物.....	414
第298頁	3区不定形土坑(1).....	415
第299頁	3区不定形土坑(2).....	416
第300頁	3区中世以降の遺構外出土遺物.....	417
第301頁	3区1号住居.....	418
第302頁	3区1号住居跡.....	419
第303頁	3区1号住居出土遺物.....	420
第304頁	3区122号・123号土坑.....	421
第305頁	3区19号・25号・47号・48号土坑.....	423
第306頁	3区2-29R-13グリッド土層断面.....	424
第307頁	3区出土の縄文土器.....	425
第308頁	3区出土の縄文土器(1・打製石斧・石鏝・石砦・削形).....	426
第309頁	3区出土の縄文土器(2・削形・湖片・石槌).....	427
第310頁	3区出土の縄文土器(3・石槌).....	428
第311頁	3区出土の縄文土器(4・礫石器).....	429
第312頁	荒砥北三本堂遺跡出土土器年層.....	432
第313頁	荒砥北三本堂遺跡古墳時代分布の変遷(1).....	433
第314頁	荒砥北三本堂遺跡古墳時代分布の変遷(2).....	434
第315頁	荒砥北三本堂遺跡古墳時代分布の変遷(3).....	437
第316頁	荒砥北三本堂遺跡出土原始型弥生年層.....	449
第317頁	群馬県出土の高坏形器合と比較資料.....	451
第320頁	荒砥北三本堂遺跡出土の石製・土製模造品.....	453
第321頁	荒砥北三本堂遺跡出土の糠石・砥石.....	457
第322頁	縄織a式土器の竹管文.....	459

## 第8章

1-1	表1	1 a区・1 b区の土層柱状図.....	466
1-1	表2	1 a区北側における植物性炭素分析結果.....	469
2-1	表1	1 c区の土層柱状図.....	472
2-2	表1	1 c区の植物性炭素分析結果.....	476
3-1	表1	1 a区埋没谷の土層柱状図.....	482
3-2	表1	1 a区埋没谷第1断面第1地点における植物性炭素分析結果.....	486

3-2 表2 1 a区埋没谷第1断面第2地点における

3-2	表3	1 a区埋没谷第2断面における植物性炭素分析結果.....	487
4-1	表1	3 b区第1地点の火山ガラスダイアグラム.....	494
4-1	表2	3 b区29R-13グリッド土層柱状図.....	495
4-2	表1	3 b区29R-13グリッドにおける植物性炭素分析結果.....	498
4-2	表2	3 b区29R-13グリッドにおける花崗ダイアグラム.....	504
5-1	表1	2区土坑の土層柱状図.....	511
5-2	表1	2区土坑の植物性炭素分析結果(1).....	514
5-2	表2	2区土坑の植物性炭素分析結果(2).....	515
5-2	表3	2区土坑の植物性炭素分析結果(3).....	516
8-1	表1	No.3の実験区と抽出した試料の組織観察結果.....	532
8-1	表2	No.4の実験区と抽出した試料の組織観察結果.....	533
8-1	表3	No.1・No.5・No.7の実験区と抽出した試料の組織観察結果.....	534
8-1	表4	No.2の実験区と抽出した試料の組織観察結果.....	534
8-1	表5	No.6の実験区と抽出した試料の組織観察結果.....	535
8-1	表6	調査機器に含まれる含有率のCu・Ni・Co三成分比.....	536

付図1	荒砥北三本堂遺跡全体図 1/1000
付図2	1 a・1 b区 1・2面平面図 1/200
付図3	1 c区 1・2面平面図 1/200
付図4	1 a・1 b区 3面平面図 1/200
付図5	1 c区 3面平面図 1/200
付図6	1 a・1 b区 4面平面図 1/200
付図7	2 a区全体図 1/200
付図8	2 b・2 c・3区全体図 1/400

## 表目次

第1表	上武道路発掘調査一覧表(7区その1).....	2
第2表	荒砥北三本堂遺跡発掘調査一覧表.....	12
第3表	別添道路の概要.....	20
第4表	2区1号組立建物住居状況計測表.....	112
第5表	2区2号住居住居状況計測表.....	229
第6表	2区古墳時代土坑一覧表.....	332
第7表	縄文土器型式別一覧表.....	378
第8表	石器の器種と編分.....	385
第9表	縄文時代石器器種別一覧表.....	386
第10表	縄文時代石器器種別石質別一覧表.....	390
第11表	5世紀-6世紀の土器年層の対比.....	435
第12表	荒砥北三本堂遺跡全体の外郭別住居数.....	441
第13表	荒砥北三本堂遺跡遺構重複一覧表.....	443
第14表	荒砥北三本堂遺跡出土の玉・石製模造品出土状況.....	455
第15表	荒砥北三本堂遺跡出土の糠石・砥石出土状況.....	457

## 第8章

1-1	表1	1 a区・1 b区のチアラ検出分析結果.....	466
1-1	表2	1 a区の植物性炭素分析結果.....	469
2-1	表1	1 c区のチアラ分析結果.....	472
2-2	表1	1 c区の植物性炭素分析結果.....	476
3-1	表1	1 a区埋没谷第1断面におけるチアラ検出結果.....	481
3-1	表2	1 a区埋没谷第1断面における炭素分析結果.....	482
3-2	表1	1 a区埋没谷分析結果.....	488
4-1	表1	3 b区のチアラ検出分析結果.....	494
4-1	表2	3 b区の火山ガラス北分析結果.....	494
4-1	表3	3 b区の火山ガラス原始型測定結果.....	495
4-2	表1	3 b区29R-13グリッドにおける植物性炭素分析結果.....	499
4-2	表2	3 b区29R-13グリッドにおける花崗分析結果.....	503

5-1 表1	2区土壌のチフク検出分析結果	510
5-1 表2	2区土壌の屈折率測定結果	510
5-II 表1	2区土壌の植物団塊体分析結果	517
6-表1	炭化種実出土一覧表	522
7-表1	栗紙北三本堂II遺跡出土炭化材樹種同定結果一覧	524
8-表1	調査資料の概要	531
8-表2	鉄器の分析結果	531

## 写真図版目次

### 第8章

1-II 写真1	1 a区・1 b区の 植物団塊体顕微鏡写真	469
2-II 写真1	1 c区の植物団塊体顕微鏡写真	475
3-III 写真1	1 a区埋没谷の植物団塊体顕微鏡写真	489
4-II 写真1	3 b区29-R13グリッドの植物団塊体顕微鏡写真	500
4-III 写真1	3 b区29-R13グリッドの花殻・胞子の顕微鏡写真	505
5-II 写真1	2区土壌の植物団塊体顕微鏡写真	519
6-図版1	出土した炭化種実	522
7-図版1	栗紙北三本堂II遺跡出土炭化材組織の 走査電子顕微鏡写真	525



## 報告書抄録

書名ふりがな	あらときたさんきどうにいせき じょうもんじだいからきんせいへん
書 名	荒砥北三木堂Ⅱ遺跡 縄文時代～近世編
副 書 名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻 次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	421
編著者名	小島敦子 大谷徹 原雅信 大木紳一郎 岩崎泰一 大西雅広
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080215
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橋町下箱田7 8 4 番地2
遺跡名ふりがな	あらときたさんきどうにいせき
遺 跡 名	荒砥北三木堂Ⅱ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししいまいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市今井町
市町村コード	10201
遺跡番号	
北緯 (日本測地系)	
東経 (日本測地系)	
北緯 (世界測地系)	362223
東経 (世界測地系)	1390905
調査期間	20000403-20010331 / 20010401-20020331 / 20020601-20020910
調査面積	20979
調査原因	道路建設
種 別	集落
主な時代	旧石器／縄文／弥生／古墳／奈良／中世／近世／近現代
遺跡概要	集落-縄文-土坑10+包含層-縄文土器+縄文石器/その他-弥生-遺構外-弥生土器/集落-古墳-竪穴住居64+土坑48+竪穴状遺構2+水田跡-土師器+須恵器+石製根製品+石製品+鉄製品/集落-奈良-竪穴住居1-土師器+管玉/集落-中世-竪穴住居2+水田跡-陶器+軟質土器/近世-墓壇4+井戸12-陶器+磁器+軟質土器+石製品/近現代-池状遺構3-陶器+磁器+ガラス瓶/時期不明-溝65+土坑225+ピット57+耕作痕跡2+遺状遺構1
特記事項	旧石器は「上武道路・旧石器遺跡群(1)」(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第418集,2008)で報告。
要 約	旧石器時代から近現代までの複合遺跡。昭和56年に調査された荒砥北三木堂遺跡の北側および南に隣接する。赤城山南麓の開析谷に面した台地上に立地する。特に台地南縁辺に分布する古墳時代5世紀前葉から6世紀初頭の住居64軒は、荒砥北三木堂遺跡で検出された59軒と合わせて、合計123軒の連続する大集落である。本遺跡でも古式須恵器の出土が多く、南方500mにある5世紀後半の大型前方後円墳である今井神社古墳との関連性が注目されている。

## 第1章 調査に至る経過

### 1・国道17号改良工事と発掘調査

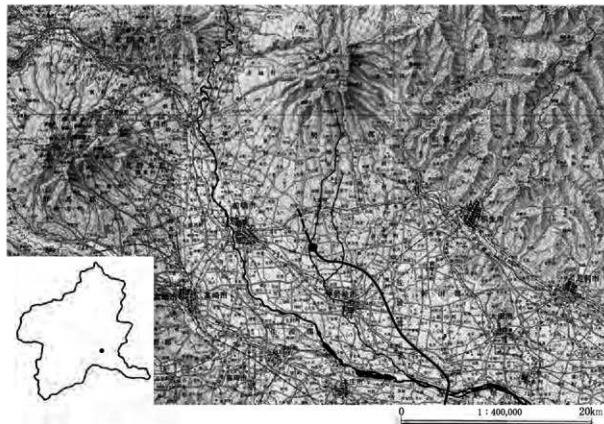
荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は群馬県前橋市の東南部今井町にある。J R 両毛線の駒形駅から北北東に約3.7kmの距離に位置する(第1図)。遺跡のある地域は前橋市街地の東に広がる農村地帯である。赤城山南麓の裾野にあたり、緩斜面の火山山麓性の台地とそれを開析する谷地形が入り組んだ地形を見せている。

遺跡は、国道17号の改良工事に伴って発掘調査が実施された。群馬県内の国道17号の改良工事は、埼玉県の深谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する通称「上武道路」建設として実施されている。上武道路は県内の平野部を斜めに縦断する基幹道路であり、すでに平成元年度に前橋市今井町の国道50号線までの1期工事が完了し、供用が開始された。

1期工事に先だって昭和48年度から昭和63年度の

15年間にわたって、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が実施された。調査された遺跡は35遺跡、面積は延べ534,000㎡に及んだ。これらの整理作業は昭和56年から平成7年度の14年間、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、旧石器時代から近世にわたる遺構・遺物が26冊にのぼる発掘調査報告書にまとめられている。

国道50号以北の工事(7工区)は平成11年から開始された。上武道路が通過する地域は埋蔵文化財包蔵地が多くあり、考古学的にも注目される地域である。国道50号以北の道路建設工事に先立ち、建設省(現国土交通省)関東地方建設局と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地を道路建設の対象区域から除外することが不可能であり、かつ事業の実施



第1図 群馬県の地勢と荒砥北三木堂Ⅱ遺跡

## 第1章 調査に至る経過

によって埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託されることとなり、平成11年4月1日付けで3者の協定書が交わされた。協定書では、国道50号から前橋市堤町までの調査に関する基本的事項が確認され、整理作業を含めた発掘調査を平成18年3月31日までに終了することとなった。

発掘調査は協定書に基づき、平成11年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が「国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その1)」として受託し実施した。本事業全体で発掘調査された遺跡は、当初、国道50号に接する今井道上Ⅱ遺跡から荻野Ⅱ遺跡までの12遺跡で、表面積は20万9000㎡に及んだ。

事業の進捗に伴って、平成11年4月1日付けの協定書は変更の必要が生じ、平成16年11月10日付けで新しい協定書が締結された。新協定書では、①当初7工区(その1)に東半分が含まれていた荻野Ⅱ遺跡

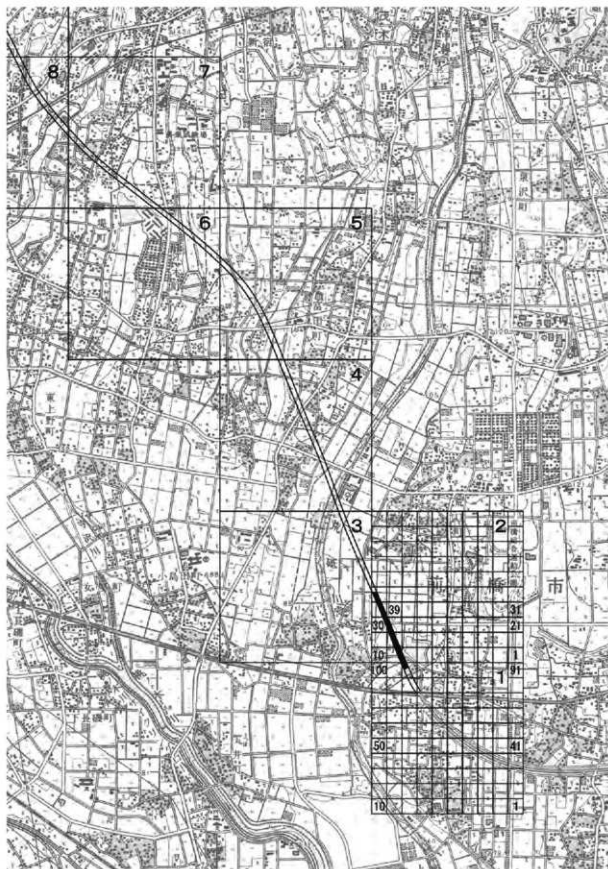
について、同一遺跡であることから7工区(その2)の協約に移行・統合し、②7工区(その1)の調査期間を、整理期間を含めて平成22年3月31日までとすることに改めることとなった。最終的な7工区その1の各遺跡の発掘調査は第1表の通りである。

出土遺物等の整理作業は、平成11年の協定書に基づき、平成15年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東建設局の委託を受け、開始された。平成16年以降は平成16年11月10日付けの新しい協定書によって、整理事業が進められた。この間、荒砥北三木堂Ⅱ・富田下大日・江木下大日遺跡の整理作業の一部を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託している。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の整理作業は平成16年4月1日～平成17年3月31日で2区の古墳時代住居の整理作業を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施し、平成17年10月1日から平成18年3月31日で、その他の遺物整理ならびに報告書編集作業をおこなった。

第1表 上武道路発掘調査遺跡一覧表(7工区その1)

遺跡番号	遺跡名	調査区	調査担当書 ( )内は職託	調査期間
JK36B	今井道上Ⅱ遺跡		飯塚卓二、小島敦子、今泉英、夜藤理恵	13.4.1～14.3.31
		未収地	河口正史、新井英樹	14.6.1～14.9.10
JK37	荒砥北三木堂Ⅱ遺跡	1区	新倉明彦、轟山幸弘、(小宮山達雄)	12.4.3～12.9.30
		2区	飯塚卓二、小島敦子、今泉英、夜藤理恵	13.4.1～14.3.31
		3区	石塚久則、小島敦子、関根慎二、金子博也、池田政志、金井仁史、今泉英、(前田和昭)	12.4.3～13.3.31
		未収地	山口浩志、石原典人	15.10.1～15.12.25
JK38	荒砥北原Ⅱ遺跡	1区	小島敦子、今泉英	13.4.1～14.3.31
		2、3区	小島敦子、関根慎二、池田政志、金井仁史、今泉英、(前田和昭)	12.4.3～13.3.31
JK39	荒砥前田Ⅱ遺跡	1区	小島敦子、今泉英	13.4.1～14.3.31
		2、3区	石塚久則、小島敦子、関根慎二、金子博也、池田政志、金井仁史、今泉英、(前田和昭)	12.4.3～13.3.31
JK40	荒砥畑田遺跡	4区	田村公夫、今井和久、平方廣行、岡部恵	14.7.1～15.2.4
			児島良高、津島秀幸、山村英二、(黒澤はるみ)	11.4.1～11.9.30
JK41	荒砥宮下遺跡		児島良高、津島秀幸、山村英二、久保孝、石田真、西原和久、(黒澤はるみ、小宮山達雄)	11.8.2～12.3.31
JK42	荒砥西原遺跡		中安信、安口一、徳江秀夫、榎淳仁、新井英樹、西原和久	12.4.3～13.3.31
			女屋和志雄、安藤剛志、青木さおり	11.9.1～12.3.31
JK43	荒砥尾石遺跡		飯塚卓二、女屋和志雄、安藤剛志	12.4.3～13.3.31
		未収地	女屋和志雄、青木さおり	13.4.1～13.9.30
		未収地	河口正史、新井英樹	14.4.1～14.7.5
JK44	荒砥畑田遺跡		飯塚卓二、女屋和志雄、木津博明、児島良高、田村公夫、安藤剛志	12.4.3～13.3.31
		田石露	女屋和志雄、木津博明、吉田和夫、青木さおり	13.4.1～14.3.31
		未収地	河口正史、新井英樹	14.4.1～14.5.15
JK45	荒砥下大日遺跡		木津博明、児島良高、田村公夫	12.4.3～13.3.31
			木津博明、吉田和夫	13.4.1～14.3.31
JK46	江木下大日遺跡		女屋和志雄、河口正史、木津博明、吉田和夫、新井英樹、高柳弘道、青木さおり	13.4.1～14.3.31
		未収地	河口正史、新井英樹	14.8.1～14.10.25



第2図 上武道路と荒砥北三木堂Ⅱ遺跡

0 1:25,000 1km

## 第2章 調査の方法と経過

### 1. 発掘調査の方法

#### (1) 遺跡・調査区・グリッドの設定

上武道路は赤城山南麓を斜めに横断し、発掘区は7工区(その1)だけでも総延長が5kmにもおよぶ。

赤城山南麓には多くの帯状開析谷が発達しており、上武道路の路線は台地と谷地を交互にくりかえして通る地形になっている。加えて本地域には埋蔵文化財が豊富で、台地上はほとんどが遺跡であり、谷部にも埋没水田等が検出される。したがって遺跡が連続的に分布することになり、遺跡の区切りをどこにするか、遺跡名をどうつけるかが調査上の問題となった。

これについて調査担当者間で原案をつくり、前橋市教育委員会と協議した結果、今回の調査では一つの台地とその南側に接する谷地を含む一単位を一遺跡とすることとした。また既調査の遺跡には同名称をつけ後ろに「Ⅱ」を付すこととした。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は、隣接地で荒砥北部圃場整備事業に伴う発掘調査が昭和56年に施されていることから、同名称にⅡを付した。今回の調査の範囲は、「今井沼」のある谷から台地を縦断して、北側にある荒砥北原Ⅱ遺跡南側の開析谷に接する南側台地北端までである。今井沼の谷を隔てた南側には平成18年度に報告書を刊行した今井道Ⅱ遺跡がある。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡内の調査区は、調査の進行単位ごとに南側から1、2、3区を設定した。1区は今井沼のある谷部で、北半分は北側台地の南斜面になっている。1区では、調査区内の既存道路が生活道路として不可欠であることから調査対象外となった。この道路に区切られた3つの調査区-1a・1b・1c区に分けて実施した。

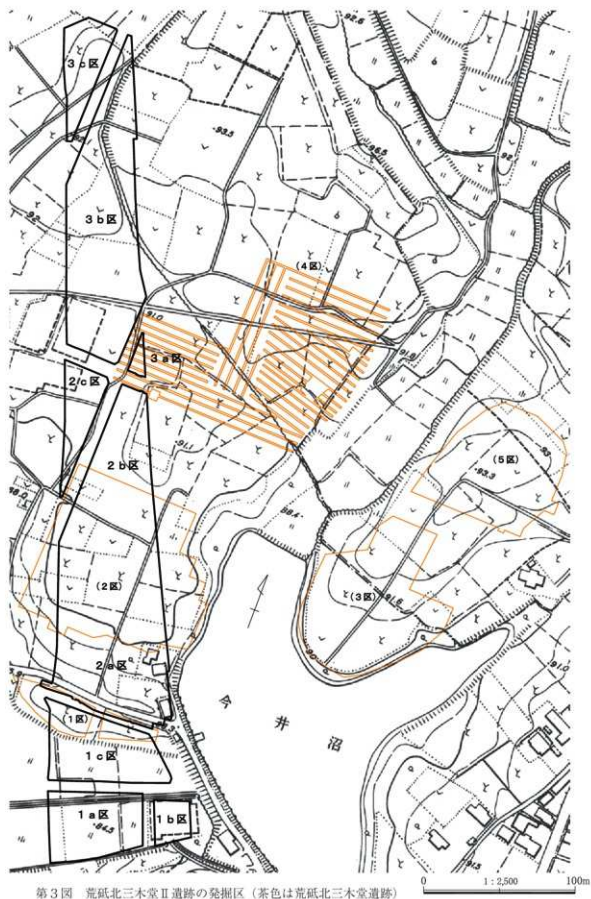
2区は1区の北側の台地上で、工事工程との調整の結果、ほぼ中央にある現道で3区と区切った。1区との間の現道については遺構が多数検出されたこ

とから、調整の結果、最終時に調査対象とすることとなった。また西側の現道は遺構が少ないことから調査対象から除外された。

3区は台地上の北半分で、現道で3つの区に分けて調査した。現道部分は当初調査対象から除外されたが、西側の現道については旧石器の出土の可能性があったため調整の結果、旧石器の対象地になった。なお国土交通省との調整では、工事区全体の現道に区切られた最小単位に連番をつけた地区名を用いた。しかし、これは考古学的な遺跡の動向とは関連しないので本報告書では用いないこととする。

平面図を記録する測量用のグリッドは、路線上の遺跡相互の関連性が把握しやすいように、1000m四方の大グリッド-100m四方の中グリッド-5m四方の小グリッドの階層的なグリッド網を設定した。グリッド名称は各階層で異なる。1000m四方の大グリッドは全線を1~9でカバーした。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は大グリッド「1」と「2」に含まれる。グリッド呼称が煩雑になるので、報告書の記載や個々の図面では大グリッドを省略している場合がある。中グリッドは大グリッドを100個に区切り、南東隅からZ方向に1から100までとした。小グリッドは中グリッドの中を5mずつ区切り、東から西へAからT、南から北へ1~20とした。グリッド呼称は南東隅の交点をあて、独立した単位の100m中グリッドと5m小グリッドを並立して「98-A-1」のように呼称した。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡内のグリッドの座標値は、国家座標(旧座標第Ⅳ系)を用いて測量し、2-9-A-1が旧座標でX=41.00km、Y=-60.80km、新座標にすれば概ねX=41.355km、Y=-61.092kmである。2-40-A-1が旧座標でX=41.30km、Y=-60.90km、新座標にすれば概ねX=41.655km、Y=-61.192kmである。



## (2) 基本土層と遺構確認

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の基本土層は低地部の1区と、台地上にある2区・3区では異なっている。それぞれの基本土層の詳細については各区の記述(第4章から第6章)のなかで述べたが、概要は下記のとおりである。第4図に各区の代表的な土層断面柱状図を示した。

1区は低地内に堆積した沖積土層の上に攪乱を受けた盛り土が堆積していた。これは昭和56年の圃場整備事業に伴って土砂の切り盛りが実施されたことによる。また、沖積土の間には、上位から浅間Bテフラ(As-B)・榛名二ツ岳火山灰(Hr-F A)・浅間C軽石(As-C)層が挟んでいる。沖積地内の遺構確認は盛り土を除去した面、浅間Bテフラ直下面、浅間C軽石(As-C)混土層内、浅間C軽石直下面、周囲のローム台地斜面部では遺構確認は盛り土を除去した面およびローム層上面でおこなった。低地内の榛名二ツ岳火山灰は残存状態が一様でなく、全体としてテフラ下面を遺構確認面とすることはできなかった。

2区および3区はローム台地上であり、圃場整備の切り盛りの程度によって盛り土が置う面や地層が異なるが、概ね地表の盛り土を除去するとローム層の上位にある黄褐色土(I b層)上面となり、ここが古墳時代以降の以降確認面となった。一部にはこの上層に白色軽石粒を含む褐色～灰褐色土(I a層)が残存している地点もあったが、台地上ではこれも重機で除去して遺構確認面とした。

台地上の縄文時代の遺構確認についてはI b層上面から手作業で徐々に掘り下げていき、浅間板鼻軽石層塊を含む黄褐色土(Ⅱ層)上面で確定した。I b層からは縄文土器破片や石器・剥片が集中して出土する地点があり、そこではトレンチ調査を実施し、遺構確認に努めた。

遺跡のある赤城山麓の末端低台地では、通常、表土(耕作土)の下位には黒ボク土の堆積が希薄である。特に圃場整備が完了している荒砥北三木堂Ⅱ遺跡では表土下の黒色土がほとんど見られず、1区東

壁ではわずかに層厚4～10cmの灰色がかった褐色砂質土(I a層)が記載されているのみである。本層位には浅間山や榛名山の完新世以降の噴火で降下したテフラを構成していた各種の軽石粒が含まれているが、混在した状態で堆積しており、鍵層となる純堆積層ではなかった。

また、I a層とローム層の間には軟質の褐色土(I b層)が堆積している。本層は黒ボク土中に堆積する二次堆積ローム層で、「淡色黒ボク土」と呼ばれている土層であると推定される。淡色黒ボク土は黒ボク土中に挟む褐色土で、腐食の少ない部分であると考られているが、成因は未解明である。赤城山麓末端の低台地上では下位の黒ボク土がないことが多く、淡色黒ボク土から漸移的に黄色みの強くなるソフトロームへと変化している。

本遺跡では、3 b区南東部や2 c区および2 a区の一部でI b層が堆積していたが、3 b区の中央から北寄りにほとんど残存していなかった。

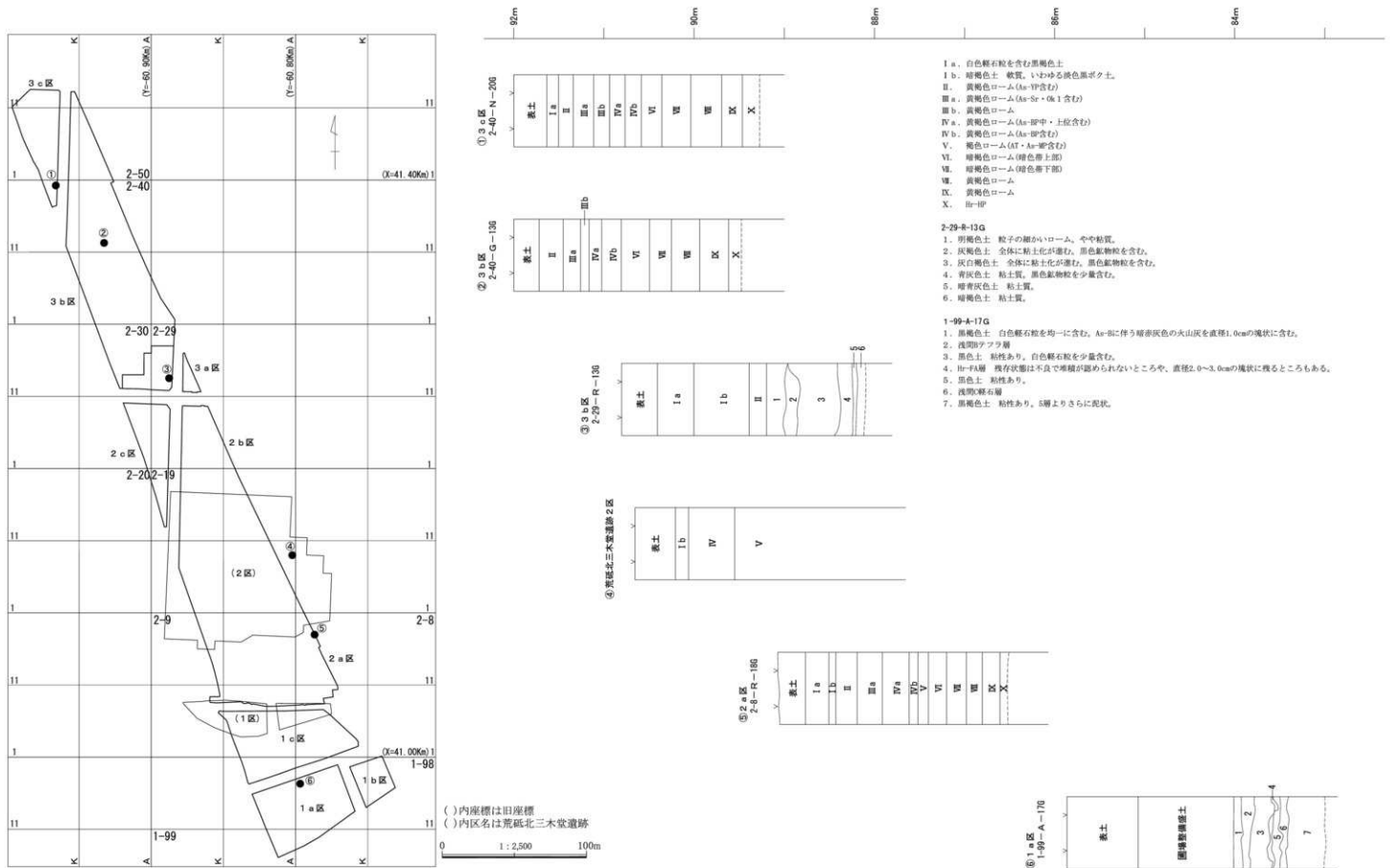
I b層には縄文時代前期を中心とした縄文土器と時期不明ではあるが石器類が含まれていた。特に2 c区から3 b区に続く帯状低地内にはやや厚く淡色黒ボク土が堆積しており、遺物が比較的集中して出土した。前述のようにこのI b層を掘り下げて縄文時代の遺構確認を実施したが、確認できた遺構は2 a区で2基の土坑が、2 c区で3基の土坑が確認できたにとどまる。3 b区の陥穴群は表土下のⅡ層上面で確認することができた。

なお、Ⅱ層以下のローム層の堆積状況は「上武道路・旧石器遺跡群(1)」(2008 群理工文第418集)で詳述している。

## (3) 発掘調査の記録

発掘調査にあたっては、図面・写真および調査所見メモを記録した。

図面は各遺構の断面図と平面図を作成した。平面図は竪穴住居・土坑等の遺構は20分の1、溝跡等については40分の1の個別平面図を平板測量で委託し作成した。断面図は遺構図に対応する縮尺で発掘作



第4図 荒砥北三木堂II遺跡のグリッドと基本土層



業員が実測した。これらの実測図については調査後、遺構図面のデジタル化を目的に、平面断面図のスキマニングを委託した。

1区の低地部については、重層する遺構確認ごとに主として航空測量による図化を委託した。断面図と一部の遺構平面図は実測および平板測量を委託した。

各遺構の埋没状況については、土層観察用の土手を十字に設定し、すべての遺構で土層断面図を作成した。断面図の土層の注記は調査担当者各自の観察に委ねたので、色名の記載や硬度について不統一な部分がある。また埋没土には軽石粒が混在するが、遺構内には純堆積層がなかったことから同定作業は行わなかった。土層の注記では確定できる場合を除き、「白色軽石」との記述にとどめた。1区の低地部に堆積するテフラ層やローム層に介在するテフラについては、遺構・遺物を理解するにあたって必要不可欠であるので、土壌の自然科学分析を委託し、記載した。

遺構写真は35mmモノクロフィルムとカラー 슬라이ドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて撮影対象・撮影日・撮影方向を添付し、地上撮影した。1区～3区の大型遺構や旧石器調査状況は高所作業車から全景写真を撮影した。また、1区の各遺構面の全景写真、2a区古墳時代住居群の全景写真は、ラジコンヘリにより空中写真撮影を委託した。撮影した写真はバケ焼きを遺構ごとに35mmとブローニーを網羅して整理し、撮影対象・撮影日・撮影方向を記入したネガ検索台紙を作成した。

調査所見メモは調査担当者ごとに書式は異なるが、野帳や遺構平面図に直接、遺構調査時の所見を記載した。

また、1区のテフラ直下の黒色土および2a区古墳時代大型土坑の埋没土については土壌を採取し植物珪酸体の分析をおこなった。さらに1区1号・2号住居、2区11号・29号・31号・49号住居から出土した土器内部にあった土壌8試料から水洗選別法により炭化種実を採集する調査を実施した。

## 2. 発掘調査の経過

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の発掘調査は、1区が平成12年4月から10月まで、2区が平成12年11月から平成13年2月までと平成13年4月から14年2月まで、3区は平成12年4月から平成13年1月まで実施した。この間の調査体制は複数の調査班が対応しており、調査工程により隣接する他遺跡の調査も平行して実施している。各区の調査経過の概略は次の通りである。

### 1区の調査

[平成12年度]

- 4月13日 1区表土掘削開始。
- 4月19日 1b区から遺構調査開始。
- 5月12日 調査区内テフラ分析試料採取。
- 5月24日 1b区1面全景写真撮影。
- 6月7日 1c区遺構精査
- 6月15日 1a区2面(浅間Bテフラ直下面)全景写真撮影。
- 6月19日 1c区2面精査開始
- 6月23日 降雨により1a区西端の民地との調査区境界で、掘削壁面崩落の危険が生じたため、協議の結果、簡易シートパイルを打設した。
- 7月13日 1c区2面全景写真撮影。
- 8月2日 1a区3・4面全景写真撮影。
- 8月4日 1c区浅間C混土層掘り下げ作業。古墳時代遺物包含層出土遺物取りあげ開始。  
1a・1c区土壌分析試料採取
- 8月21日 1c区1号・2号住居調査開始。
- 9月19日 1b区浅間C混土層掘り下げ作業。
- 9月29日 1b・1c区3・4面全景写真撮影。
- 10月3日 1c区土壌分析試料採取。
- 10月6日 1a区土壌分析試料採取。
- 10月11日 調査終了。

### 2区の調査

[平成12年度]

第2章 調査の方法と経過

4月13日	2 a 区北部旧石器試掘調査	3 区の調査
5月11日	2 a 区北部旧石器試掘全景写真撮影。旧石器の出土無く調査終了。 2 b 区土壌分析試料採取。	[平成12年度]
11月20日	2 b 区・2 c 区表土掘削開始。	4月11日 3 b 区南半遺構確認作業開始。
12月1日	2 b 区・2 c 区遺構精査開始。	4月12日 3 b 区1号溝・土坑群調査開始。遺構のない北西部は旧石器試掘作業開始。
12月7日	2 b 区・2 c 区ローム上面確認遺構全景写真撮影。	4月24日 3 b 区南東部縄文土器・石器包含層調査開始。
12月11日	2 b 区・2 c 区ローム上面確認遺構調査終了。平行して旧石器試掘調査開始。	4月28日 3 b 区1号住居調査開始。
2月5日	2 b 区・2 c 区旧石器試掘調査状況全景写真撮影。旧石器の出土無く調査終了。	5月10日 平行して北側にある荒砥前田Ⅱ遺跡および荒砥北原Ⅱ遺跡の試掘調査を始める。
[平成13年度]		5月11日 3 b 区南東部縄文土器・石器包含層全景写真撮影。
4月16日	2 a 区表土掘削開始。	5月20日 荒砥北原Ⅱ遺跡の旧石器試掘調査開始。
4月23日	2 a 区遺構確認作業開始。	5月29日 荒砥北原Ⅱ遺跡の旧石器試掘調査終了。
5月8日	2 a 区遺構の調査開始。遺構のない部分は旧石器の試掘も同時に実施。	6月1日 荒砥前田Ⅱ遺跡の本調査開始。
6月5日	今井道上Ⅱ遺跡表土掘削。	6月15日 3 b 区南東部縄文土器・石器包含層調査終了。旧石器試掘調査開始
7月2日	今井道上Ⅱ遺跡遺構確認作業。	6月22日 3 a 区遺構確認作業開始。
8月24日	今井道上Ⅱ遺跡2区調査開始。	6月29日 古環境研究所土壌分析試料採取
10月2日	2 a 区の調査、2班体制になる。	7月3日 3 b 区北半旧石器本調査開始
10月11日	古墳時代土坑埋没土壌分析試料採取。	7月18日 3 a 区全景写真撮影。
10月15日	古墳時代土坑埋没土壌分析試料採取。	荒砥北原Ⅱ遺跡1区北側表土掘削開始。
10月16日	2 a 区全景写真撮影。 今井道上Ⅱ遺跡3区遺構確認作業開始。	8月8日 3 a 区旧石器試掘調査終了全景写真撮影。
11月16日	2 a 区ローム上面確認遺構調査終了。 今井道上Ⅱ遺跡1区遺構確認作業開始。	9月28日 3 b 区旧石器調査一時終了。
11月21日	2 a 区旧石器試掘調査、土工対応で開始。	11月20日 3区旧石器調査再開。
2月26日	2 a 区旧石器試掘調査終了。旧石器の出土無く調査終了。	1月19日 3 b 区土壌分析試料採取。
[平成15年度]		2月5日 3 b 区北半表土掘削開始。
10月1日	未収地になっていた2 a 区の一部（国土交通省区画番号№9区・№10区）調査開始。	2月12日 3 b 区北半遺構調査開始。
10月10日	縄文時代以降の遺構確認と、旧石器試掘調査を併行して実施。	2月20日 3 b 区北半全景写真撮影。
12月10日	2区63号住居全景写真撮影。	3月23日 3 b 区旧石器調査終了。
12月11日	全景写真撮影。旧石器の出土は無かった。	[平成13年度]
12月25日	調査終了。	4月24日 3 c 区旧石器調査開始。
		9月3日 3 c 区旧石器調査終了。
		9月4日 2・3区調査資料基礎整理作業開始。
		9月28日 2・3区調査資料基礎整理作業終了。
		1月18日 3 b 区・3 c 区間水路下旧石器調査開始。
		1月26日 3 b 区・3 c 区間水路下旧石器調査終了。

### 3. 発掘区の概要

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡では、上武道路が台地上を縦断に近い位置で通過する地点にあたったことから、総延長580mにおよぶ長大な発掘区を調査することとなった。調査工程が年度や区域で分かれることとなり、記録の整理を効率化するために、既存道路によって1～3区の調査区に分割することにした。(付図1)

また、本遺跡は昭和56年の荒砥北部圃場整備事業に伴って、荒砥北三木堂遺跡として既に発掘調査が行なわれている。第3図のように両調査の発掘区は重複あるいは近接しており、本遺跡を理解するにあたり前調査の成果も併せて確認しておきたい。

1区は遺跡の南端で、荒砥川左岸のローム台地を開析した帯状の谷部と北側台地の緩斜面部にあたる。現状では発掘区の東側に今井沼が造られている。1区では沖積土の間にテフラ層が介在していることから、現代から古墳時代前期までの間に4面の遺構確認面を設定し重層的な調査を行なった。1面では中世から現代までの遺構・遺物を検出した。遺構はいずれも谷内の耕作に関わると推定される溝群や土坑である。1a区では出土遺物から近代の掘り込みとみられる池状遺構が検出されたが、機能は判然としなかった。

谷の南縁には用水路と考えられる複数の溝が平行して掘られている。これらの用水路は新しくなるほどに谷斜面の高所に位置が移動しており、水田耕地拡大に伴った結果と考えられる。

古代の水田面は浅間Bテフラ直下と浅間C軽石直下で検出されている。間には部分的に榛名二ツ岳火山灰層が堆積していたが、水田面を検出するには至らなかった。浅間C軽石下水田では用水路が谷の中央部にあり、この前後に灌漑水系の変更があったこととなる。1区の遺構群は4面の遺構の変遷を追うことで、開析谷の土地利用の変化を追うことのできる好資料となるであろう。

北側の緩斜面にあたる1c区では2区の台地上に

展開する古墳時代中後期の集落の南限を示す住居2軒を検出した。これらの住居が検出された地点は圃場整備に伴って調査された荒砥北三木堂遺跡1区にあたる。住居群の南側の斜面裾部では古墳時代中後期の遺物を中心とする5000点におよぶ遺物包含層を検出した。台地上の住居出土土器と接合する破片もあり、台地上部からの廃棄が想定される。

2区は1区北側の現道路以北で、上武道路工事で今井跨道橋が造られた道路以南の区域である。2区の南端2a区は圃場整備事業では掘削対象外になっていた部分で、今回の上武道路の調査でも62軒の古墳時代中後期の竪穴住居群が密集して検出された。また同時期の土坑が41基検出されており、注目される。圃場整備に伴って調査された区域とあわせると、5世紀から6世紀にかけての住居が120軒以上も検出されたことになり、周辺の遺跡のなかでは突出した古墳時代の集落といえる。荒砥北三木堂遺跡は古い須恵器の出土頻度が高いことでも知られており、南方500mのところにある今井神社古墳との関連も見逃せない重要な集落遺跡である。

2a区の遺構の埋没土からは少量ではあるが、弥生時代の土器が出土した。荒砥北三木堂遺跡2区では弥生時代中期後半の住居5軒が検出されており、これらの使用土器が混在したと推定されるが、そのほかに弥生時代後期の土器が少量含まれていた。荒砥地域では弥生時代後期の集落は希薄とされるが、遺物の出土が確認できる遺跡も少なからずあるのも事実である。

また、2a区北部では縄文時代の陥穴2基が検出されている。縄文時代前期の住居が、圃場整備に伴って調査された荒砥北三木堂遺跡2区で検出されており、それらとの関連が想定される。

また、2a区の調査では、旧石器の試掘調査を5mおきに3×3mの試掘坑を設定して実施したが、旧石器は検出されなかった。また、その北側の荒砥北三木堂遺跡2区があった地点は圃場整備事業で切り土対象区域であったが、旧石器の調査が十分であったとは言い難かった。そこで土層を確認したとこ

ろ、八崎軽石層の上層20cmまで削平されていた。今回はその八崎軽石層の上位厚さ20cmのローム層を対象に、5mおきに2×5mの試掘坑を設定して試掘調査を実施したが、旧石器は検出されなかった。

さらにその北側はほぼ中央を既存道路が縦断する。道路の東側を2b区、西側を2c区とする。2b区では古墳時代前期の住居1軒、各時期の土坑16基、井戸2基が検出された。また2～8基の小ピットが12列検出されている。ピットの規模や埋没土が共通しており、ピット群は新しい時期のもので建造物あるいは耕作によるものと推定されたので、本書の遺構記載からは除外した。

2c区では、中世の堅穴1棟、各時期の土坑23基、井戸1基、道路状遺構1基、溝1条が検出された。出土遺物が少ないことから時期の判明しなかった遺構もいくつか含まれている。また、ほぼ中央部に縄文時代にはほぼ埋没していた谷が南から北に向かって入り込んでおり、その埋没土層を中心として縄文土器が集中して出土した。なお、この埋没谷はさらに北側の3b区につながっている。

2b・2c区でも5mおきに2×5mの試掘坑を設定して、旧石器の試掘調査を実施したが、旧石器は検出されなかった。

3区は、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の北側にある荒砥北原Ⅱ遺跡に南面する谷地までの台地部分にあたる。縦断する2本の既存道路で3区域に分かれている。

南東部の3a区では中世と考えられる堅穴住居1棟、土坑1基、溝2条が検出された。

中央の3b区では奈良時代の堅穴住居1棟、土坑121基、溝4条、井戸2基が検出された。土坑にはいくつかの形態のものが混在しており、時期も様ではない。なかでも細長長方形の土坑は長軸が同一線上に並び、何らかの地割りを示していると推定され

る。特に中央部に南北方向に並ぶ細長長方形の土坑列と4号溝は走向が連続しており、注目される。このような細長長方形の遺構個別図(1/40)は煩雑を避けるために割愛し、土層断面図のみ掲載することとした。また、土坑のなかには7基の縄文時代の陥穴が含まれている。その分布と圃場整備に伴って調査された荒砥北三木堂遺跡4区の縄文時代遺構との関連で理解できるであろう。なお、3b区で検出された溝4条のうち、1号溝は100m以上の長いもので、ガラス破片等の現代の遺物が出土している。昭和56年の圃場整備直前まで使われていた溝である。

3b区南東部には2c区からつながる帯状凹地があり、縄文時代には埋没が進み、淡色黒ボク土がやや厚く堆積していた。その淡色黒ボク土中には縄文時代前期を中心にした縄文土器と石器類が集中して出土した。なおこの帯状凹地の南端は、今井沼の谷につながっており、2a区西側では圃場整備直前まで凹んだ低地として確認できた。

北西の3c区では土坑22基が検出された。いずれもふかふかした締まりのない土で埋まっており、東部に短軸を揃えて並ぶ土坑群のあり方などからは新しい様相を看取できる。

3区でも全域で5mおきに2×5mの試掘坑を設定して、旧石器の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、3b区はほぼ中央部と3c区の2カ所で旧石器の存在が確認され、本調査を実施した。その結果全体で903点の旧石器が、4文化層に分かれて出土した。3区を中心に検出された荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の旧石器の詳細については、「上武道路・旧石器遺跡群(1)」(2008 群埋文第418集)で報告した。

なお、今回の調査で出土した遺物資料は60×37×15cmの遺物収納箱で、1区17箱、2・3区で139箱である。

第2表 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡検出遺構数一覧表

期代	旧石器時代		縄文時代				古代		中世以降時期不明						近世		近代
	土	坑	住居	土	遺構	住居	建	住居	溝	土	ピ	痕	遺	井	遺		
別	石	坑	堅	坑	行	堅	築	堅		坑	ット	跡	構	戸	地		
	器		穴		列	穴	物	穴				作	柱		状		
1区	-	-	2	7	-	-	-	-	53	5	2	-	-	-	1	3	
2区	-	4	62	41	2	-	1	1	8	105	18	-	1	4	9	-	
3区	903	6	-	-	-	1	-	1	4	115	39	-	-	-	2	-	

#### 4. 整理作業の経過

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は、旧石器時代から近代までの遺構・遺物が検出された複合遺跡である。全時代を網羅した報告書は大部になること、旧石器は上武道路地域内の他の遺跡と併せて作業することが効率的であることから、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の報告書の構成は、旧石器時代編と縄文時代以降編に分けることとした。旧石器の整理は平成17年度に実施したが、これについては「上武道路・旧石器遺跡群(1)」(2008群理字第418集)で報告した。ここでは縄文時代以降の遺構・遺物整理作業について報告する。

縄文時代以降の発掘成果・出土資料の整理作業および報告書編集作業は平成16年4月1日～平成17年3月31日および平成17年10月1日～平成19年3月31日に実施し、平成19年度に報告書を刊行した。

平成16年度の整理作業は、最も多くの出土遺物量があった2区の古墳時代住居群を対象に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に一部委託して実施した。整理事業の財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団への一部委託については、群馬県教育委員会と埼玉県教育委員会が平成12年11月から協力的体制協議を開始し、平成14年3月27日付けで「埋蔵文化財の協力に関する協定書」を締結し、同日付けで群馬県教育委員会教育長から財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団あて「埋蔵文化財保護の協力に関する協定について」依頼があり、平成14年度事業から整理事業の一部委託が開始された。

委託した業務は、①出土遺物の接合・復元・実測・トレース・写真撮影・遺物観察表原稿執筆、②遺構図の修正、③遺構規模の計測、④本文素原稿である。

また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団委託事業によって修正・確認された遺構図について、別途業者委託してデジタルトレースをおこなった。

平成17年度は下半期に、2区住居群以外の遺構出土遺物について、接合・復元・実測・トレース・写真撮影・遺物観察を実施した。また2区住居群以外の遺構断面図の修正や、遺構規模の計測などを

おこなった。これらの修正・確認された遺構図については、業者委託してデジタルトレースをおこなった。また平行して本文の執筆をおこなった。

平成18年度は遺構外出土遺物について、分類・接合・復元・実測・トレース・写真撮影・遺物観察を行った。8月以降は、報告書の全体レイアウト、挿図・写真図版版下作成作業をおこなった。デジタルトレースした遺構図はレイアウトに沿って頁ごとに配置・編集する作業を委託した。遺物図も頁ごとに配置した遺物トレース図を委託してスキャニングし、挿図原稿については、すべてデジタルデータとして作成した。また本文・遺物観察表等の文字原稿の執筆・推敲・編集を行い、来年度の報告書刊行に備えて編集作業を行った。

平成19年度は原稿整理の上、報告書刊行の入札事務を行い、3回の校正を経て納本を迎えた。

#### 5. 整理作業の方法

##### (1) 遺物整理

**土器** 土器は遺構ごとに接合記録を作成しながら接合を行った。接合状況および遺構内の遺物出土状況を確認しながら、報告書に掲載する遺物を選択した。実測した土器・土製品は1345点である。掲載できなかった遺物は遺構・出土位置ごとに種別・器種(縄文土器は細別型式まで)を分類し、出土遺構ごとに計数し、収納した。

掲載土器は復元彩色し、写真撮影をおこなった。遺物写真は2a区の古墳時代住居群出土土器については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団でデジタルカメラ(500万画素)を用いて撮影した。当事業団では1/8～1/2の倍率でブルーニー6×9フィルムを用いて銀塩写真を撮影した。

遺物実測図は等倍で作成した。完形に近い土器はスリースペースシステムで測点し、その印刷出力図を補測・製図した。破片土器は当初から人力で復元実測を行った。縄文土器破片は断面実測し、縄文原形が読み取れるように留意して採拓した。トレース

は掲載倍率ごとに縮小し、ロットリングを用いて人力で行った。2 a 区住居群以外の出土土器のトレースは業者に委託した。

土器の観察は表形式にまとめた。色調は『標準土色帖』を用いて記載し、口径・底径・高さは実測図から計測した。胎土は特徴的な夾雜物を中心に記載した。特徴は文様および整形技法の特徴を記載した。

**石器類** 石器類は遺構の内外から多数出土したが、出土位置を確認しながら、概ね縄文時代、古墳時代、中世以降の遺物に分けて、器種分類と石材同定を実施した。石材の同定は群馬県地質研究会の飯島静男氏に依頼した。掲載できなかった石器類は石材・器種・出土位置・重量のデータを作成し、収納した。

縄文時代の石器についてはすべての石器・剥片・砕片・礫・礫片を形態分類し、石材を同定した。

本遺跡で検出された縄文時代の遺構は8基の土坑のみであったが、遺構外のグリッドや表面採集の遺物にも多くの縄文時代の石器類が含まれていた。その総数は1065点で、このうち石器は236点、砕片・剥片・礫片・礫は829点である。これらの縄文時代の石器236点についてすべて実測図を掲載することはできなかったため、出土位置ごとに器種が網羅できるように、図化する石器159点を選択した。実測できなかった石器77点は写真のみ掲載することとした。なお、時期の特定できない砕片・剥片・礫片・礫は縄文時代石器類に含めた。

古墳時代の石器については、そのほとんどが2 a 区の古墳時代住居から出土した。これらは石器および使用痕跡・加工痕跡のある遺物を選択し、石材を同定し、実測・写真撮影をおこなった。住居以外の地点で出土した石器類については同様に選択図化した。

中世以降の遺構出土の礫は、器種分類と石材同定をおこない、明瞭な使用痕跡・加工痕跡が残っているものを実測し、報告書に掲載した。

**金属製品** 金属製品は当事業団保存処理室でレントゲン撮影をして残存状態を確認した上でクリーニングを行った。鉄釘1点、鉄鏃1点、板状鉄片1点、

刀子1点、鉄鎌1点、鉄製鉄鋤先1点と、六文銭として近世幕場に副葬された布包み古銭8点、単独で出土した古銭6枚を実測・写真撮影し、報告書に掲載した。

鉄釘、鉄鎌、板状鉄片、刀子、鉄鎌、鉄製鉄鋤先については素材製作方法および来歴を解明するために、金属考古学的調査を実施した。

本報告の中で資料化し、何らかの形で本書中に掲載した資料は1776点である。資料の内訳は土器・土製品1338点、石器408点、古銭14点、鉄および関連遺物9点、ガラス瓶13点である。

以上の作業によってトレースした遺物実測図は、頁ごとに貼付した上、委託によりスキャニングし、報告書印刷原稿としてデジタルデータを編集した。

## (2) 遺構図面写真整理

遺構図は、すべての図面に通し番号を付し、台帳を作成した。遺構図はすべて報告書に掲載することとし、平面図と断面図の照合・修正作業をおこなった後、デジタルトレースした。個々のデジタルトレースをレイアウトの通り配置し、報告書印刷原稿としてデジタルデータを編集した。遺構全体図もデジタルデータで作成した。これらのデジタルデータ化の作業は業者委託して実施した。遺構断面図の土層注記は若干の用語統一を行ってデジタル入力を行い、委託作成した遺構図印刷データに配置した。

遺構写真はすべてのネガに通し番号を付し、台帳およびネガ検索台帳を作成し資料管理に備えた。報告書に掲載する写真を選択して、引伸し写真を台紙に貼付して印刷原稿版下を作成した。遺物写真も同様に倍率を揃えて写真を引伸し、レイアウト通りに台紙に貼り込み印刷原稿版下を作成した。

## (3) 報告書編集・刊行

以上のような作業で作成した印刷原稿版下に、調査所見の詳細な事実記載に努めた本文をあわせ、報告書として編集し、レイアウトを作成した。

### 第3章 遺跡の立地と環境

#### 1. 遺跡の位置と地形

##### (1) 赤城山麓の地形

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は、県北の山地と南東平野部が接する群馬県中央部に位置する。県央地域には西に榛名山、東に赤城山があり、その裾野には丘陵性の台地が広がっている。遺跡はこのうち東側に位置する赤城山の南麓に形成された火山麓状地端部にある。

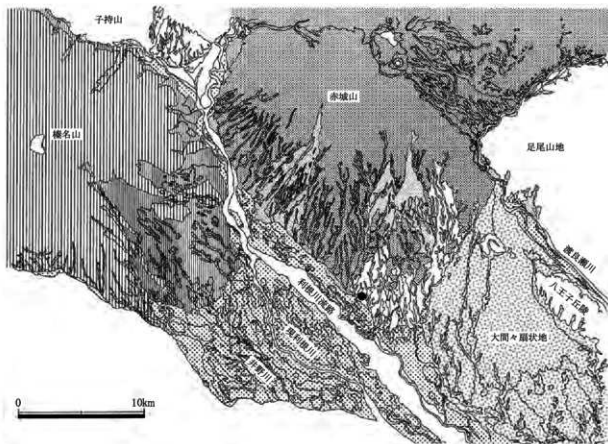
赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山で、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った火山活動はなく、火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓の扇状地にはさらに新期の扇状地が一部にのびるが、遺跡の西側を流下する荒砥川以西は同

じ赤城山の山体でも基底に大胡火砕物が堆積する古い地形面である。(第5図)。

赤城山南麓には荒砥川、宮川、神沢川、江龍川などの中小河川が流下している。これらの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。

赤城山南麓の地形はローム台地、砂壤土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地は火山麓扇状地の原形面に関東ローム層が堆積した台地である。いわゆる暗色帯の堆積が認められ、旧石器時代の文化層が包含されている。

ローム台地に付随するように存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降



第5図 群馬県中央部の地形と荒砥北三木堂Ⅱ遺跡

雨災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。縄文時代後期以降の遺跡はローム台地あるいは、この微高地に分布する。本地域では微高地を形成する再堆積土の下層から検出される縄文時代早期の遺跡も存在する。沖積地は前述した山麓を開析する谷地形内にあり、古墳時代以降の埋没水田が検出されている。

## (2) 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の立地

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡はこのような赤城山の南麓末端に近い、標高90～93m前後の緩傾斜の台地上および台地南側を開析する帯状低地に立地する。遺跡周辺の地形は後期更新世前半に形成された山麓扇状地で、山麓に水源をもつ小河川と、山麓に谷頭をもつ細長い低地とその支谷が樹枝状に入り込んだ様相を呈している。

これらの樹枝状に広がった多くの帯状低地は、谷内の小流水を集めながら、主要河川につながっている。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の西側を流れる荒砥川は、標高920m前後の山頂近くに水源をもち、流域長23km余りの、荒砥地域の主要河川の一つである。付随する沖積地の幅は赤城山末端部の現状で600mあり、荒砥地域最大である。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡のあるローム台地は、西側を荒砥川に侵食され、南部から東部にかけては今井沼のある開析谷に区切られた東西幅300mほどの広い台地で、発掘区のほぼ中央には今井沼の谷から開析した小規模な帯状低地が遺跡のすぐ西側に入り込んでいる。今回の調査では台地をほぼ斜めに横切る形で発掘が実施されたことになる。

このローム台地には、ブロック状の浅間板鼻褐色軽石群と始良丹沢バミスの層序である暗色帯、さらにその下層に八崎軽石層が堆積しており、赤城山南麓地域の更新世ローム台地の一般的土層堆積である。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3b区ではこのローム層中に4層の旧石器文化層が検出された。また、発掘区中央部に入り込む小規模な帯状低地は縄文時代にはほぼ

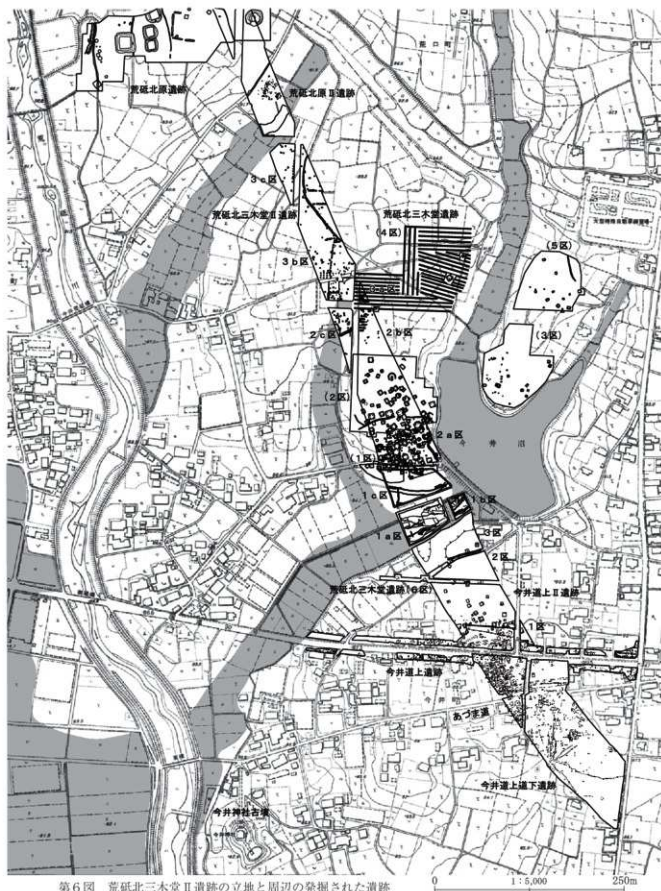
埋没していた谷で、凹地中央にやや厚く淡色黒ボク土が堆積していた。この土層には縄文時代前期を中心にした土器や石器が包含されていた。(第4図③1b層)YPより下位の地層は粘土質で低地の様相を見せているが、北側の3b区で出土した石器出土層位と対応する指標テフラは検出できなかった。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡では縄文時代の遺構は土坑8基がまばらに分布しているのみであったが、圃場整備に伴って、今井沼の帯状低地西縁の荒砥北三木堂遺跡1・2区で3軒、中央の台地先端の3区で同時期の住居が調査されている。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡で調査された土坑はこれらの住居と関連した分布状況をみせている。また、今井沼の谷の南側の今井道上Ⅱ遺跡でも縄文時代前期の住居が3軒、低地に面するローム台地北縁で検出された。周辺の縄文時代の遺構は散漫な分布状況であるが、樹枝状に展開する帯状低地に面して分布しており、低地を水場や漁業活動の舞台にした縄文時代前期の集落群が今井沼の谷周辺に展開していたのである。

この「今井沼」のある帯状低地は、谷頭が北方の上流350mほどのところであり、低地内の沖積土には上位から浅間Bテフラ、榛名二ツ岳軽石層序、浅間C軽石層が堆積している。古墳時代には既に帯状低地が形成されていたことがわかる。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1a・1b区では浅間Bテフラと浅間C軽石層の直下から水田面が確認された。低地内が古墳時代前期以降、生産域として使用されていたことが判明した。

北側の台地上の集落は、荒砥北三木堂遺跡および荒砥北三木堂Ⅱ遺跡をあわせて、古墳時代中・後期122軒、飛鳥時代1軒、奈良時代3軒、平安時代5軒が調査されており、古墳時代中後期に集中的に居住された地点といえる。台地の東側や南側は複数の帯状低地が合わさる部分で、農耕適地が広がっていたと推定される。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡は低地に望む台地のほぼ全体を掘ったことになり、今井沼の谷を生産域にした古墳時代の集落群が復元できる地域といえよう。





第6図 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の立地と周辺の発掘された遺跡

## 2. 周辺の遺跡分布

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡がある地域は、赤城山南麓の農村地帯である。前述したように火山性の山麓扇状地で、湧水と地表面の侵食によって刻まれた開析谷が発達しており、数条の小河川が流下している。本地域には農耕集落を成立させる基盤が整っていた。

しかし、本地域は火山性地形特有の保水性の乏しい地質で、流下する小河川の水量のみでは水確保は困難である。農耕地拡大が不可欠であった古墳時代以降の農耕社会発展過程にあつては、人々の生活は用水確保の歴史でもあった。そして農業用水確保の歴史は近年まで続き、大正用水や群馬用水の掘削によって農村として安定した発展を遂げたのである。

ここでは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために、最も多くの遺物が出土した縄文時代前期と、検出された遺構が最も多かった古墳時代に重点をおき、周辺の遺跡分布および歴史的環境についてふれておきたい。遺跡分布図を示した範囲は、西は荒砥川、東は神沢川に挟まれた荒砥地域で、北は標高120m付近、南は荒砥川・神沢川合流点で便宜上限った(第7図)。また、古墳時代の荒砥地域については、範囲を広げて地域動向を概観した(第8図)。

なお、本地域の縄文時代全体の遺跡動向については『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団埋蔵文化財調査報告第350集2005)に評述されているので参照されたい。

## (1) 縄文時代前期の遺跡分布

群馬県では標高250～400mの丘陵性地形のところに縄文時代前期の遺跡分布が卓越する傾向がある。標高80～150mの荒砥地域はこの丘陵性地形の末端部分にあたり、中期の遺跡分布が多くなる台地地形も広がっている。したがって縄文時代の遺跡はやや小規模な前期の遺跡と、比較的大きな中期・後期の遺跡が分布している。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡周辺の縄文時代前期の遺跡は、

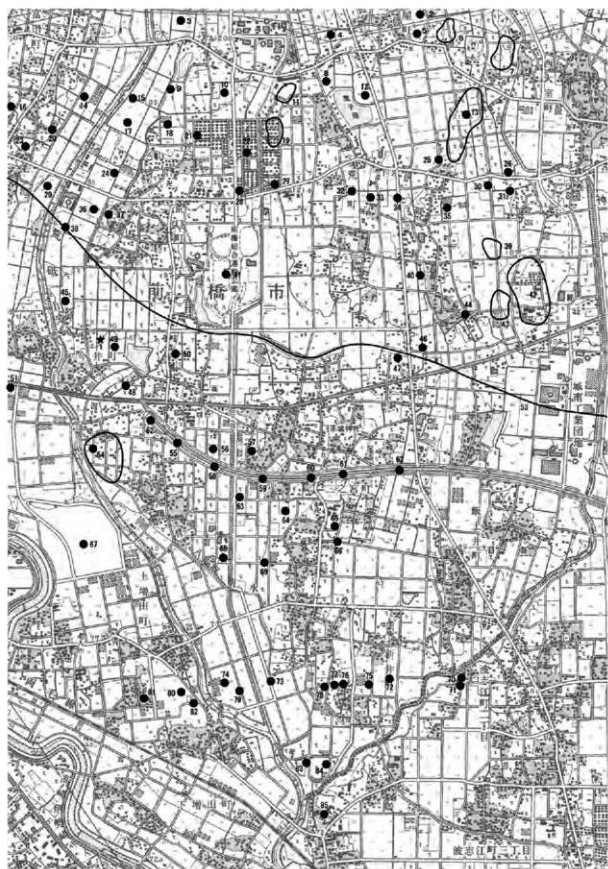
今井道上Ⅱ遺跡(48)・荒砥宮田遺跡(24)・荒砥北原遺跡(45)・荒砥上ノ坊遺跡(47)、柳久保遺跡群下鶴ヶ谷遺跡(28)、荒砥上諏訪遺跡、荒砥二ノ堰遺跡、熊の穴遺跡等で調査されている。これらの遺跡では1～数軒の竪穴住居や土坑を検出している。遺跡の立地は赤城山南麓の小河川の支流の台地縁辺や、開析谷の谷頭周辺であり、飲料水の確保がその前提と考えられる。

## (2) 弥生時代の遺跡分布

荒砥地域の弥生時代の遺跡数は少ない。荒砥地域で弥生時代の遺跡が見られるようになるのは中期後半である。荒砥北三木堂遺跡(1)、荒砥島原遺跡(69)、萩原遺跡(78)、荒砥前原遺跡(84)で弥生時代中期後半の住居群が、頭無遺跡(27)、荒口前原遺跡(37)、鶴ヶ谷遺跡(41)、荒砥宮川遺跡(63)の4遺跡で土坑が検出されている。住居が検出された遺跡はいずれも2～数軒の住居群で構成されており、この時期の集落が小規模であったことを示している。

後期の遺跡は荒砥前原遺跡で住居が、荒砥大日塚遺跡(50)で土坑が、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(1)、増田越渡Ⅳ遺跡(74)、萩原遺跡(78)で遺物が出土したと報告されている。荒砥地域には櫛形波状文を主文様とする樽式土器と縄文を主文様とする赤井戸式土器の両者が出土する。後期前半の遺跡はほとんど確認できない状況であり、後期とされている遺跡もほとんど弥生時代終末期の遺跡である場合が多い。従来赤井戸式や樽式土器を単純に弥生時代後期とみるが多かったが、古墳時代初頭まで残るそれらの土器群があることが知られるようになっていく。近年では赤井戸式土器は埼玉県北部の吉ノ谷式土器の分布が古墳時代初頭に広がったものとする研究者もいる。いずれにしても荒砥地域の弥生時代後期の遺跡については再検討の余地がある。

弥生時代中期後半の遺跡は、標高80m～100m付近の帯状低地沿いでいくつかの低地が合わさる地点に散在している。この立地は水田耕作を目的にしたものと考えられるが、このような立地が群馬県西部



第7図 荒砥北三木堂Ⅱ遺跡周辺の遺跡

## 第3章 遺跡の立地と環境

第3表 周辺遺跡の概要

凡例 ●住居 ◆溝 ○土坑 △遺物のみ出土  
 ただし藩城壕では□河溝跡、○古墳。生産域では□水田、○南(畑)。  
 平安時代生産域では□As-B下水田 ■B18年洪水層下水田。  
 中近世では、○遺構・遺物の検出を表す。

No	遺跡名	縄文時代					弥生時代			古墳時代		中世		備考		
		前期	中期	後期	前期	中期	前期	中期	後期	前期	中期	中世				
												前期	後期			
1	宮城北三木堂Ⅰ遺跡		△	△	△	△	△	△	●	□	●	●	●	□	○	
2	中塚遺跡															
3	北岸遺跡								●	□	●	●	●	●	●	
4	上西原遺跡															繁多野原と行儀谷間と想定される遺跡。
5	北浜下遺跡								●							
6	伊勢山遺跡									□						伊勢山古墳を含む古墳16基。
7	伊勢山古墳群										○					
8	川原宿戸遺跡									□						
9	溝田遺跡															As-B以前の溝。方形周溝跡13基。
10	久保遺跡										●	●	●	●	●	
11	元子小学校跡遺跡											●	●	●	●	古代遺構密集地。
12	堤東遺跡									□						方形周溝跡2基(前方後方1)。平安小銀治。 古墳22基。
13	岡久山古墳群															
14	おとうか山遺跡										●	●	●	●	●	
15	溝田西遺跡										●	●	●	●	●	時期不詳古墳2
16	溝田西原遺跡													□	○	◎
17	宮城溝田西遺跡													□	○	◎
18	宮城溝田遺跡															As-B以前の溝
19	中郷古遺跡											●	●	●	●	
20	東原遺跡															古墳11基。中世墳墓群。寺院。
21	溝田遺跡															As-B以前の溝
22	柳久保遺跡											●	●	●	●	◎
23	下郷遺跡															◎
24	宮城府田遺跡									△	●	●	●	●	●	◎
25	下郷Ⅰ・Ⅱ遺跡															◎
26	富士山Ⅰ・Ⅱ遺跡															◎
27	遠無遺跡															◎
28	下郷ヶ台遺跡															◎
29	溝田堀田遺跡															◎
30	稲山Ⅰ遺跡															◎
31	池原Ⅰ遺跡															◎
32	宮城中屋敷Ⅰ・Ⅱ遺跡															◎
33	宮城下坪切遺跡Ⅰ・Ⅱ遺跡															◎
34	舞西遺跡															◎
35	舞西遺跡															◎
36	宮城府田遺跡															◎
37	宮城南原Ⅰ遺跡															◎
38	宮城南原Ⅱ遺跡															◎
39	西大塚丸山遺跡															◎
40	宮城元子遺跡															◎
41	舞ヶ台遺跡															◎
42	天神山古墳群															◎
43	上郷川遺跡															◎
44	柳田遺跡															◎
45	宮城北岸遺跡															◎
46	元聖敷遺跡															◎
47	宮城上ノ原遺跡															◎
48	中井遺上Ⅰ遺跡															◎
49	宮城北三木堂遺跡															◎
50	宮城大日本堂遺跡															◎
51	中井山遺跡															◎
52	中井遺上遺下遺跡															◎
53	坂城															◎
54	今井神社古墳群															◎
55	二之宮谷地遺跡															◎
56	宮城浅井遺跡															◎
57	宮城高野遺跡															◎
58	二之宮天徳遺跡															◎
59	二之宮十道遺跡															◎
60	二之宮宮下西遺跡															◎

No.	遺跡名	縄文時代					古墳時代					弥生時代		中世		備考
		前期	中期	後期	中後期	終末期	前期		中期		後期		前期	後期		
							土器	石	土器	石	土器	石				
61	二之宮南下層遺跡															
62	二之宮東遺跡															Hi-F A 下米田以降7期の水田。古杉小畑古。
63	荒砥馬川遺跡															
64	荒砥元之宮遺跡															番付
65	荒砥南郷遺跡															
66	荒砥南郷遺跡															
67	中野遺跡															
68	荒砥北原遺跡															
69	荒砥南郷遺跡															
70	中野遺跡															
71	浪志江中野遺跡															
72	新井大田園遺跡															
73	下郷田原遺跡															
74	下郷田原遺跡															
75	新井大田園遺跡															
76	新井遺跡															
77	新井遺跡															
78	新井遺跡															
79	下郷田原遺跡															
80	下郷田原遺跡															
81	上郷田原遺跡															
82	下郷田原遺跡															
83	新土塚															
84	荒砥南郷遺跡															
85	八郎遺跡															

地域のように後期に継続しないのはなぜか、荒砥地域の遺跡分布を考える上で大きな課題となっている。

### (3) 古墳時代の遺跡分布

荒砥地域の古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期の遺跡に比べると激増することが知られている。弥生時代中期竜見町式土器を出土した住居を検出した遺跡が5遺跡、後期と報告された遺跡が5遺跡であるのに対して、古墳時代前期の遺構を検出した遺跡は60遺跡余に増えているのである。これらの遺跡は集落と考えられるが、その分布は荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。

古墳時代前期の遺跡は、谷頭周辺や小河川縁地に立地するが、なかでも小河川とその支流の合流点に面した台地縁地に立地する遺跡が多い。またこれらの遺跡はそれぞれの水系ごとに500~1000mほどのほぼ一定の間隔をおいて立地している。このような遺跡すなわち集落の立地は、河川合流点の比較的広い地点を生産域として、小河川の流水や谷頭からの湧水を効率的に利用した農業経営をおこなっていたこ

とを示していると考えられる。

本遺跡周辺の古墳時代前期の集落(第8図■)は、荒砥川左岸台地の開析谷に接して、北から北原遺跡(3)、丸山遺跡、荒砥諏訪西遺跡(17)(集落・方形周溝墓群)、諏訪遺跡(9)(方形周溝墓群)、荒砥宮田遺跡(24)、荒砥前田II遺跡(38)、荒砥北原遺跡(45)が分布しており、まとまった数の住居や方形周溝墓群が検出されている。荒砥川左岸台地上には、大泉坊川流域に面して北から富田高石遺跡、富田西原遺跡(16)、富田宮下遺跡(23)が近年調査されている。

また、宮川流域では上流部に柳久保遺跡(22)、中流部に鶴ヶ谷遺跡(41)、下流域に荒砥島原遺跡(69)がある。宮川には奥行き長い開析谷が入り込んでいるが、北側の大きな開析谷の流域には前方後方形周溝墓の群在する中山A・B遺跡や東原B遺跡、村主遺跡が調査されている。また中流域に大型の前方後方形周溝墓が調査された堤東遺跡がある。宮川下流域の開析谷には荒砥上ノ坊遺跡(47)がある。江龍川上流域では熊の穴・熊の穴II遺跡、大道遺跡、明神山遺跡(6)、小輪荷遺跡などがある。

古墳時代前期の生産域を示す遺跡も検出されている。二之宮千足遺跡(59)や二之宮宮下東遺跡(61)では浅間C軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡(64)G区や荒砥宮川遺跡(63)の微高地では浅間C軽石を勘込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡(47)では浅間C軽石に埋没した畠が検出されている。

この時期の集落には墓域が居住域に付随している。住居群に隣接して周溝墓が築造される事例が多い。前述の源訪遺跡(9)や荒砥源訪遺跡(18)、荒砥北原遺跡のように居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その中、上縄引遺跡1基、阿久山遺跡1基、堤東遺跡(12)1基、中山A遺跡1基、東原B遺跡4基の合計8基の前方後方形周溝墓が検出されている。また、荒砥川左岸の富田高石遺跡でも前方後方形周溝墓1基が検出されている。

荒砥地域においては前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある主要古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。

古墳時代中期の集落(第8図赤□)としては荒砥川左岸台地の開析谷に接して丸山遺跡、北原遺跡(3)、荒砥宮田遺跡(24)、荒砥前田II遺跡(38)がある。宮川上流域に柳久保遺跡群(22)がある。これらは古墳時代前期から継続する遺跡である。荒砥川左岸台地上の荒砥北三木堂遺跡(49)や宮川下流域の荒砥天之宮遺跡(64)は5世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡である。このような遺跡は前期の遺跡の間や、周辺の開析谷に新たに出現している。

また荒砥周辺地域には、古墳時代中期の方形区画遺構が4基検出されている。江竜川右岸の微高地にある荒砥荒子遺跡(40)、荒砥川の一支出の右岸台地縁辺で検出された丸山遺跡、桂川右岸の台地縁辺の梅木遺跡、貴船川右岸の台地上に検出された箕井八日市遺跡である。全体像が明確でない遺跡も含まれているが、これらは5世紀代の有力者層の居宅の可能性が考えられている。

古墳時代後期の集落(第8図赤■)は、荒砥源訪西遺跡(17)、荒砥北原遺跡(45)、柳久保遺跡群(22)、大久保遺跡(10)、北原遺跡(3)、丸山遺跡、新山遺跡などをはじめてとして多くの遺跡をあげることができる。これらの集落のなかには古墳時代前期・中期から継続するものと、中期からあるいは後期になってから居住が始まる遺跡とがある。これは生産域の拡大ともなった居住域の変遷を示していると考えられる。

古墳時代前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。このような前期から継続する集落は居住域の範囲を台地内部に変えながら継続する。これは水田耕作地を台地縁辺の傾斜地部分に拡大していくからである。

それと併行して、中後期には、新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。それまで遺跡ではなかった地点に集落がつくれるようになるのである。荒砥天之宮遺跡(64)では、溜井掘削によって農業用水を得た古墳時代中期から始まる集落が調査されている。このような「新開集落」成立の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに、溜井の掘削や灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられるのである。

これらの分布を第8図に示したが、地域内の生産域となる開析谷沿いに集落の密度が増えていく過程を看取することができる。そこには標高差や地点別の分布差等では説明できない複雑な様相がみえている。各地点地点において、農耕地拡大過程における生産域の諸条件に規制された集落立地があったものと考えられる。

一方、荒砥地域の古墳は450基を超え、群馬県のみならずでもひときわ多い分布状況を示している。

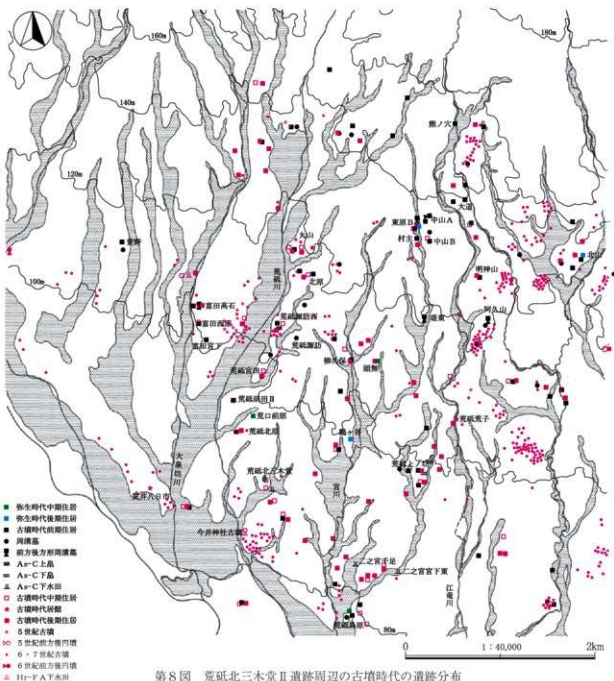
5世紀前半の古墳は周辺には伊勢崎市御富士山古墳・赤堀茶臼山古墳があるが本地域には未確認である。5世紀後半の前方後円墳では、今井神社古墳(54)、舞台1号墳がある。特に今井神社古墳は、今井道上II遺跡から南500mの至近距離にある。

この時期には小円墳がいくつかの地点で造られる

よくなる。荒砥川右岸には5世紀後半とされる直径29mのおとうか山古墳がある。南側の東原遺跡では6基の5世紀後半の円墳が調査されており、初期群集墳の形成が開始されているのがわかる。荒砥宮川・宮原遺跡でもそれぞれ4基、2基の5世紀後半の小円墳が検出されている。また新山遺跡でも5世紀後半の円墳が1基調査されている。現在のところ、本地域の5世紀後半の小円墳の分布は、荒砥川流域

に偏在しているように見える。

6世紀になると、前方後円墳が東大室町五料沼周辺に、江竜川中流域の台地上に帆立貝形古墳がつけられるようになる。特に大室古墳群には首長墓と考えられる大形の3基の前方後円墳がつけられた。一方小円墳は6世紀、7世紀と小地域ごとに立地、形成内容を変化させながら群集化が進行している。群集墳の分布は地域全体にあるが、特に江竜川の東側



の地域では、古墳群の分布する地点が集落と離れて集中するようになる。本地域の古墳分布の特徴は現在わかっている範囲という限定付きであるが、5世紀前半の古墳が未確認であること、江竜川をほぼ境にして西側より東側に濃密であること等があげられる。このような偏在傾向の背景についてはまだ結論が出ていない。群集墳の北の限界は標高150m前後であり、集落の分布と一致している。古墳時代の「里集み集落」地域の範囲がここまでであったのであろう。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の古墳時代集落も、このような古墳時代の地域社会のなかで位置づけられるべきであろう。

#### (4) 古代・中世の遺跡分布

荒砥地域は古代、勢多郡に属していたと考えられている。上西原遺跡(4)では8世紀から9世紀後半に機能していたと考えられている方形区画内の礎石基壇建物や掘立柱建物などが検出され、瓦・瓦塔・塑像・墨書土器などが出土している。この遺構は官衙遺構とそれに付属する寺院遺構と推定されている。勢多郡衙とも目される遺構が荒砥地域にあることは古代の中心的な存在であったことを示唆している。荒砥地域の奈良・平安時代の集落遺跡は、住居分布域を多少変化させながらも、古墳時代後期(7世紀を含む)から継続する例が多い。これは古墳時代以降拓いた水田耕作地を継承して、集落が営まれることを示している。また古墳時代の遺跡のない地点にも遺跡は分布するようになり、さらに集落域の密度が増していくのが奈良・平安時代である。

その背景には生産の場である水田域の拡大があると考えられる。富田西原遺跡(16)、宮下遺跡(23)、富田西田遺跡(29)や、荒砥大日塚遺跡(50)、二之宮谷地遺跡(55)、二之宮千足遺跡(59)、二之宮宮東遺跡(62)、荒砥島原遺跡(69)、荒砥天ノ宮遺跡(64)、萩原遺跡(78)などの多くの遺跡で浅間B下水田が検出されている。本地域では、開析谷に設定される発掘区のはほとんどで、天仁元(1108)年に降下した浅間Bテフラに埋没した水田跡が検出されているのであ

る。(「荒砥宮田遺跡Ⅱ・荒砥前田遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第336集・2004 第7図参照) 谷内が全面開田されていたかどうかは発掘区に限られているために不明だが、12世紀初頭までには、相当な面積の水田耕作地の開発が進められていたことがわかる。これらの生産域を開発・維持していたのは古墳時代以降、古代に継続する農耕集落群であったのであろう。

群馬県地域は、1108(天仁元)年に浅間山が噴火したことによって甚大な災害を被った。降灰は高崎・前橋地域で40~50cmと推定されている。この火山灰直下からは前述のように水田跡が検出されるが、荒砥地域では、用水系が被災して生産不能になった水田域の上層に火山灰を踏み込んだ畠が、荒砥前田遺跡(36)で見ついている。この畠は女堀(53)の複数の地点で掘削排土下からみつかり、広範囲に水田から畠への復旧が行われていたことを示している。

女堀は、赤城山南麓に掘られた総延長12kmの農業用水路である。荒砥地域を横断するこの用水路は、天仁元(1108)年の噴火後、濁名荘の再開発のために掘られたと考えられている。調査では工事途中とみられる遺構がみつかり、掘削工事が中断・失敗したことが判明した。

中世の集落遺跡についてはわかっていないが、平安時代の集落分布と中世文書に残る地名が一致することから、遺構に残らない形で一般農耕集落は継続していたと考えられている。本遺跡から2kmほど南の二之宮町地内では複数の館の存在が確認され、二之宮環濠遺跡群と呼ばれている。二之宮宮下西遺跡(60)や二之宮宮下東遺跡(61)、二之宮宮東遺跡(62)で中世の館とみられる堀や掘立柱建物・礎石建物が検出されている。また墓や火葬跡が東原遺跡(20)、鶴ヶ谷遺跡、下境Ⅰ遺跡、荒砥北三木堂遺跡などで14世紀代とみられる墓が検出されている。断片的ではあるが、荒砥地域の中世史解明へ向けて有効な考古資料が蓄積されてきている。



## 第4章 1区の遺構と遺物

### 1. 概要

1区では、調査区内の既存道路は生活道路として不可欠であり寸断が難しいため、道路敷下は調整の結果、発掘調査対象外になった。したがって1区の調査は、道路に区切られた1a・1b・1c区の3つの調査区に分けて実施した。

南東側の1a区・1b区は今井沼の北側に谷頭をもつ帯状低地内にあたり、近現代から古墳時代初頭までの遺構が4つの遺構面で検出された。上位から1面：表土除去面、2面：浅間Bテフラ直下面、3面：浅間C軽石を含む黒色土面および層内(一部に榛名二ツ岳火山灰も残る)、4面：浅間C軽石直下面の4面である。2面および4面は広域テフラの直下面である。(P.L2・3)

1c区は今井沼の谷北側台地の裾部斜面にあたり、北側の2/3は関東ローム層からなる台地部分、南側の1/3は低地へ緩やかに傾斜する部分にあっている。台地部では関東ローム層上面で、古墳時代後期の堅穴住居2軒を含む複数時期の遺構が確認された。南側の傾斜地部分では、黒色土の堆積がやや厚くなり、浅間Bテフラ、榛名二ツ岳火山灰、浅間C軽石の3層のテフラ層も挟在する。調査区境界の道路下で地形変換点をむかえ、傾斜が著しくなり、黒色土の堆積状況は1a区へ連続している。

以上のような遺構確認面と遺構そのものの時期を考慮して、本章では、1区の遺構を下記のような4面の遺構確認面ごとに報告した。以下、第9図・第10図に示したような各調査区の土層観察所見と遺構確認面、および各面の遺構概要について述べる。

なお、遺構平面図は遺構ごとに掲げることが困難であるため、調査区および面ごとに付図とした。土層断面図は遺構ごとに本文中に掲載した。面ごとの遺構全体図は1・2面(第33図)、3面(第44図)、4面(第54図)の3葉に編集した。

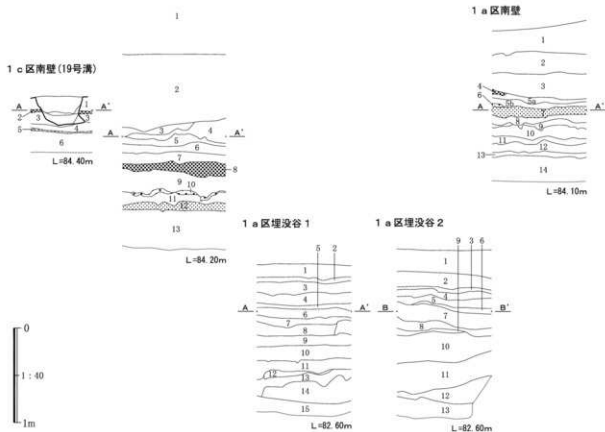
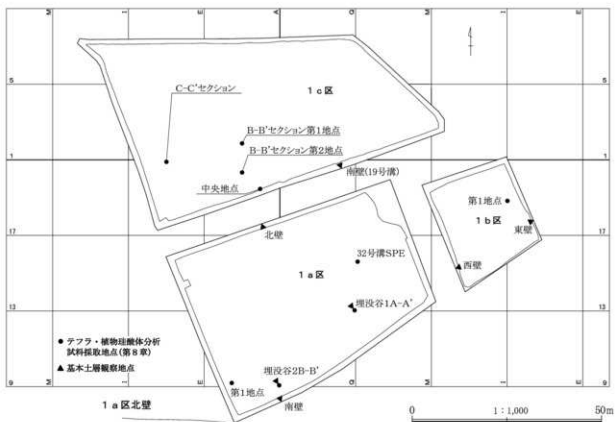
#### (1) 1面

表土および圃場整備によって切り盛りされた土砂を除去した面を1面とした。浅間B軽石降下以降、現代の圃場整備事業以前の土層は、各調査区によって堆積状況が異なる。中世から近代の時間幅のある遺構群を同一面で検出した場合もあるが、概ね1a区では第9図北壁7層、南壁3層上面で遺構検出を行った。1b区では西側は第10図6層下面で、東側は第10図2層下面および3層下面で遺構確認を行った。1c区では詳細な土層記録がないが、厚さ20cmほどの表土層下面で遺構確認を行った。

1a区では南台地の裾に沿って掘削された溝群と、直角に屈曲する溝を含む直線の溝が北部・西部で検出された。これらの直線の溝はその形状と走向から何らかの地割の溝と推定される。また、北東部には浅間Bテフラ降下以降の耕作痕跡と推定される不定型な並行する溝群等が検出された。埋土内にBテフラが混在することからテフラ被災後の耕作地を復旧するために掘削されたものと考えられるが、水田域であったか畑地であったかは不明である。

1b区では南台地の裾の溝群が1a区から続き、その北側に接して方形の池状遺構3基が検出された。これらの池状遺構は東側に検出された直線的な地割の溝と方向が一致している。北側に1mほどの間隔をとって並ぶ2基は1号、2号として記録した。その南側に溝群と重複して同様な方形の遺構があったと推定されたが、形状が不明確であり、番号を付すことはしなかった。北側の2基は出土遺物には近現代の磁器・陶器・ガラス瓶などがある。池状遺構の底面には木枕列があり、隣接する4号溝にも同様な木枕列と護岸用の枕列・シガラムが検出されている。

また表土直下より下層で、後述する2面との間の層位で検出された溝3条(42・43・46号溝)があるが、これらは浅間B軽石直下より新しいことから、1面検出の遺構に含めた。厳密には1面検出の遺構より



第9図 1区の土層観察地点と1a区・1c区の基本土層

## 1 a 区北壁 A-A'

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 硬表土。ローム土混じる。また乾~塊状 (直径0.5~3.0cmほど) に含む。
2. 黄褐色土 (10YR6/8) ローム主体土にローム塊 (直径3.0~7.0cm) が混じり、締まりにばらつきある。ローム塊は硬く締まる。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 黒色土 (10YR2/1) と白色砂子少量含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 砂質で硬く締まる。直径0.5mmほどの小石含む。
5. 暗褐色~近い黄褐色土 (10YR3/4~4/3) 4層より灰色味帯びる。直径1.0mmほどの砂粒含む。また直径5.0mmほどの小石少量含む。数分沈着少量認められる。
6. 近い黄褐色土 (10YR3/3) 5層より更に灰色味帯びる。5層と同じ様な砂粒 (直径1.0mmほど) や多く含む。数分沈着部分的に認められる。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 白色軽石粒 (直径0.5~5.0mmほど) 均一に含む。また暗赤灰色 (5B4/1~3/1) の灰 (As-B) に伴うも塊状 (直径1.0cmほど) に少量含む。
8. 黒褐色~塊状赤土 (10YR3/1~4/1) As-B層。部分的に下層と混じる所もある (流れた様な痕跡)。硬く締まり、6.0~18.0cmほど (黒色土混。混じらない部分は10.0cmほど) に堆積。
9. 黒色土 (10YR2/1) 粘性有。植物炭 (ビート)。白色軽石粒 (直径0.5~5.0mmほど) 少量含む。
10. 近い黄褐色土 (10YR3/4) FA層。硬く締まり、厚さ5.0cmほどに堆積。稜りは良くなく、認められない所もある。直径2.0~3.0cmほどの塊状に認められる所もある。
11. 黒色土 (10YR2/1) 粘性有。9層に似るが、黒色味強く軽石認められない。
12. As-C層 軽石粒の直径は0.5~5.0mm程度。7.0~10.0cmの厚さで堆積している。
13. 黒褐色土 (10YR1.7/1)。11層に似て更に状況。植物炭 (ビート) が、11層ほどではない。

## 1 a 区南壁 A-A'

1. 暗褐色土 (10YR3/4) ローム土混じる。また乾~塊状 (直径0.5~3.0cmほど) に含む。
2. 明黄褐色土 (10YR6/8) ローム主体土にローム塊 (直径3.0~7.0cm) が混じり、締まりにばらつきある。ローム塊は硬く締まる。
3. 近い黄褐色粘質土 (10YR7/2) とローム (2層の土) の混土。黒褐色土 (10YR2/2) も部分的に塊状 (長径1.0~4.0cmほど) に含む。
4. 黒褐色土 (10YR3/1~4/1) As-B層。部分的に下層と混じる所もある (流れた様な痕跡)。硬く締まり、黒色土が混じる所は厚さ6.0~18.0cmほど、混じらない部分は10.0cmほどに堆積。
5. 黒色土 (10YR2/1) 粘性有。植物炭 (ビート)。白色軽石粒 (直径0.5~5.0mmほど) 少量含む。
6. 近い黄褐色土 (10YR3/4) FA層。硬く締まり、厚さ5.0cmほどに堆積。稜りは良くなく、認められない所もある。直径2.0~3.0cmほどの塊状に認められる所もある。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) As-C層。厚さ7.0~10.0cmほどに堆積。
8. 黒褐色土 (10YR3/1) シルト質。As-C少量混じる。
9. 暗褐色土 (10YR3/1) シルト質。白色砂子微量含む。厚さ10.0cmほどに堆積。
10. 黒褐色土 (10YR3/1) シルト質。8層に似るがAs-C含まず。
11. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 8~10層よりやや砂子粗い。
12. 灰黄褐色土 (10YR5/2) シルト~細砂粒 (直径1.0mmほど、小石)。
13. 灰黄褐色土 (10YR6/2) 12層同様。シルト~細砂粒。12層よりやや白色味ある。
14. 明灰褐色~明緑灰色土 (7.5G6/1~7/1から10YR1/1~7/1) 埋没谷1の15層に対応するが、色調は薄い。硬く締まり粘性やや強い。

## 1 a 区埋没谷 1A-A'

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート多く含む。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性有。泥状。ビート含む。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート含む。
4. 黒色土 (10YR2/1) 粘性有。泥状。ビート含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート含む。
6. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性有。泥状。ビート含む。
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート含む。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート含む。
9. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性有。泥状。ビート含む。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート含む。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) ややシルト質。ビート少量含む。
12. 黒褐色土と砂粒の混じり (10YR2/2~3/1) 直径1.5mmほどの小石含む。ビート少量含む。
13. 黒褐色土 (10YR2/2) 11層に似てややシルト質。ビート少量含む。
14. 灰黄褐色~近い黄褐色砂粒 (10YR4/2~4/3) 直径0.5mm以下。15層の土を粒状 (直径5.0mmほど) に含む。ビート少量含む。
15. 緑灰色土 (5G5/1) 水成シルト質。粘性やや強く硬く締まる。

## 1 a 区埋没谷 2B-B'

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性有。泥状。ビート多く含む。黒色味強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 1層より粘性弱く、ややシルト質。白色軽石 (直径1.0~2.0mmほど) 少量含む。ビート含む。
3. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 細か~砂粒。黒褐色土を粒~塊状 (直径0.4~1.5cmほど) に含む。硬く締まり、直径0.5~2.0cmほどの小石含む。泥水層が、ビート含む。
4. 黒色土 (10YR2/1) 白色砂子 (直径1.0mmほど)、浅間総社軽石、As-Sjらしい上方にまばらに含む。ビート含む。
5. 3層に似た土。ビート含む。
6. 灰黄褐色土 (10YR6/2) シルト質。3層に似るが白色味ある。黒色土混じる。ビート少量含む。
7. 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 直径0.5mm以下の均一な砂質の土。他の層より締まり強い。ビート少量含む。
8. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 黒色土混じる。ビートごく少量混じる。
9. 8層に似るが、白色粒 (直径3.0mmほど、浅間大塚灰砂石、As-0kらしい) 含む。ビートごく少量含む。
10. 灰黄褐色砂粒 (10YR5/2、直径0.5mmほど) 直径1.0~3.0mmほどの小石含む。灰黄褐色粘質土少量混じる。底部に黒褐色砂粒 (直径0.5mm以下) が認められる部分もある。ビートごく少量含む。
11. 灰黄褐色砂粒と灰黄褐色粘質土・黒色土の混じり。8層と10層の混じりの土。ビートごく少量含む。
12. 塊状~灰黄褐色砂粒 (10YR5/1~5/2、直径1.0mmほど) 直径0.5~1.0mmほどの小石含む。ビートごく少量含む。
13. 緑灰色土 (5G5/1) 水成シルト質。粘性やや強く硬く締まる。ビート含まず。

## 1 a 区南壁 (19号溝 A-A')

1. 暗褐色土
2. 浅間総社層
3. 粒子の大家細かい黒褐色土
4. 3層よりやや黒味のあかい黒褐色土
5. 浅間総社層
6. 粒子のやや粗い黒褐色土

#### 第4章 1区の遺構と遺物

古いことになるが、出土遺物がなかったことから、これらの溝の時期を特定することはできなかった。

1c区では中央部に地形に沿った2条の溝と、南西部には1a区から連続するとみられる直線的な溝3条、南部に傾斜面に直交する溝2条が検出された。傾斜に直交する東側の溝は竹材が敷設されており、暗渠排水用の溝である。また南東隅には1b区と同規模の池状遺構が延長線上に検出された。1a区の土坑と長軸方向が異なるが同様な機能をもつものと推定される。

##### (2) 2面

暗褐色～黒褐色の砂質土とその下層に堆積する浅間Bテフラ層を除去した面を2面とした。同テフラで直接覆われていた面は、テフラが降下した1108(天仁元)年当時の地表面を検出したことになる。

1a区では第9図北壁8層、南壁4層下面で遺構検出を行った。ここでは厚さ6～18cmの厚さで浅間Bテフラが堆積していた。検出された遺構は浅間Bテフラ直下の水田跡である。20m×40mの範囲に、やや低いアゼが区画する方形の水田面が残存していた。1a区では南端の台地北斜面を除くほぼ全体に浅間Bテフラは残存していたが、アゼを確認できたのは上述の範囲のみである。また1a区北東部に、列状に連続した不定形な掘削痕が2か所検出されている。埋没土は浅間Bテフラのブロックと下位の黒褐色土のブロックの混土で、これは浅間Bテフラ堆積後に掘り込まれた耕作痕跡であろう。

1b区では浅間Bテフラの堆積は、西壁付近ではほとんど認められなかった。東壁付近では部分的にテフラの堆積を確認することができたが、直下の遺構は検出されなかった。

1c区では浅間Bテフラが南1/3ほどの傾斜地下位に残存していた。検出できたテフラ下の遺構は埋没土中にテフラ層が認められた土坑2基のみである。浅間Bテフラ下で水田区画は検出できなかった。テフラ下の黒色土については、植物珪酸体分析を実施したが、イネは検出されなかった。(第8章-2参照)

##### (3) 3面

浅間Bテフラ下の黒色粘質土およびその下位にある浅間C軽石混黒色土を除去する過程あるいは除去した面で見つかった遺構をまとめて、3面とした。1a区では第9図北壁9・10層、南壁5・6層、1b区では西側は第10図西壁A-A'5・6層で、東側は第10図B-B'21・22層、1c区では第9図11が相当する。ここでは概ね古墳時代の遺物・遺構が検出された。最終的な遺構検出面は台地部ではローム層上面、低地部分では浅間C軽石層上面である。

1a区では溝4条と土坑3基が検出された。3条の溝は南台地の北裾部に並行して掘られていた。もう1条は北台地裾部に単独で掘られていた。土坑はいずれも楕円形で、南台地の裾部にあった。そのうちの9号土坑からは細かく割れた土師器壺形土器が出土し半完形ほどに復元された。1a区では浅間Bテフラと浅間C軽石層の間に榛名二ツ岳火山灰層が薄く部分的に残存していた。水田等の榛名二ツ岳火山灰層で直接埋まった遺構は検出されなかった。火山灰層下の土壌からはイネとヒエ属型の植物珪酸体が少量検出されている。(第8章-1参照)

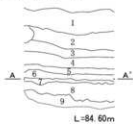
1b区では溝3条が検出された。いずれも南台地から低地におりた部分に掘られていた。

1c区では古墳時代後期の堅穴住居2軒と、溝8条、土坑2基が検出された。いずれも北台地上縁に掘られていた。堅穴住居は2区南端に密集する堅穴住居群の南限にあたる。溝はその南側に台地を縁取るように掘られており、3条が並行する部分も見られた。このうち40号溝は台地縁の傾斜に直交する方向の溝である。また南東部を中心に4700点におよぶ古墳時代後期土器の包含層が検出された。37号溝や40号溝に沿った遺物集中部があり、これらの溝に伴う遺物も多数含まれているとみられたが、上層での溝検出が困難であったため、これらの遺物も包含層出土として報告した。

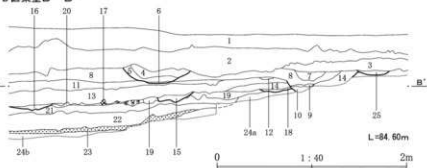
##### (4) 4面

浅間C軽石直下面で検出された遺構をまとめ、4

## 1 b 区西壁A-A'



## 1 b 区東壁B-B'



## 1 b 区西壁A-A'

1. 褐色土(10YR4/4) 現表土。硬く締まる。粘性余りなく、サラサラの土。ローム粒～塊状(直径0.1~2.5cmほど)含む。白色粒子(直径1.0~4.0mm, FA概石?) 均一に少量含む。小石やビニールを含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6~5/8) 内いローム土(内い)と明るいろーム土。暗褐色土(10YR3/4)塊(長径3.0~3.5cmほど)少量。にぶい黄褐色シルト塊～塊(直径0.3~1.5cmほど)、暗褐色土(10YR3/3)塊(直径4.0~7.0cm, 部分的)含む。暗褐色土(10YR3/3, 3/4)は白色軽石粒(直径1.0~5.0mmほど、角閃石認められない)含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 白色粒子(直径0.5~3.0mmほど)、軽石、角閃石認められない均一に含む。炭化物粒状に少量含む。直径1.0mmほどの小石を少量含む。鉄分沈着粒状に少量認められる。ビニール被覆土。硬く締まる。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3層よりやや薄い。色調(白っぽい)。含まれるものは(ビニール含め)3層と同じ。硬く締まる。
5. 暗褐色土(10YR3/3) 3、4層に比べややシルトっぽい(粒子細かい)。白色軽石粒子(直径0.5~4.0mmほど)、FA(バミス)均一に含む。炭化物粒状に少量含む。鉄分沈着粒状に均一に認められる。硬く締まる。
6. にぶい黄褐色土～暗褐色土(10YR4/3~3/3) 含まれるものは5層と同じだが、白色軽石粒子は5層ほど含まない。硬く締まる。
7. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒(直径0.1~1.0cmほど)含む。白色軽石粒子(直径0.1~1.5mmほど、角閃石なし)含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2) やや硬く締まる。白色～黄褐色色軽石粒子(直径0.5mmほど、黄褐色のものもたまにあるもの?)含む。
9. 黄褐色土～にぶい黄褐色土(10YR5/6~6/4)シルト。粘性やや強。やや硬く締まる。鉄分沈着塊状に認められる。

## 1 b 区東壁B-B'

1. 褐色土(10YR4/4) 硬く締まる。ローム土を粒～塊状(直径0.2~2.5cmほど)に含む。白色粒子(直径1.0~8.0mmほど)、軽石?・小石(直径4.0mmほど)を含む。鉄分沈着粒状に均一に認められる。ビニール等混じる。現表土。
  2. 黄褐色土(10YR5/6) 白色粒子(直径0.5~1.0mmほど、また5.0mmほどのものも、軽石?)含む。暗褐色土(10YR3/4)を粒～塊状(直径1.0~12.0cmほど)・褐色粘質土(10YR4/6)を塊状(直径2.0~9.0cmほど)・また湿じりのないローム土を粒～塊(直径0.5~4.0cmほど)が混じっている。暗褐色土・褐色粘質土・ローム土に全く白色粒子(直径1.0mmほど)を含む。他の壁面のローム土客土が、塊状のローム土以外の締まりがやや弱いのに対し、全体的に硬く締まる。
  3. にぶい黄褐色土(10YR4/5) 白色粒子(直径0.5~8.0mmほど、軽石?) 均一に含む。直径2.0~2.5mmほどの小石も少量含む。ビニール・プラスチック等混じる。硬く締まる。
- 5号溝
4. にぶい黄褐色土 3層に似た土。同様に白色粒子やビニール等含む。但し黄褐色～褐色砂粒(10YR5/6~4/6)を部分的にマーブル状に含む。硬く締まる。
  5. にぶい黄褐色土 3層に似た土。白色粒子やビニール等も含む。4層ほどではないが、褐色砂粒含む。硬く締まる。
- 2号・3号溝
7. にぶい黄褐色砂土(10YR4/3)と褐色～黒褐色砂粒(10YR4/6~2/3)。前者は直径1.0mmほどで主体的。後者は直径1.0mm以下で、比較して細かい。客体的の混土。下方に砂・上方に砂質土に近い。下方にローム土を粒状(直径0.5~2.0cmほど)に含む。白色粒子は認められない。硬く締まる。
  8. 灰黄褐色シルト(10YR2/2)とにぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)の混土。白色粒子(直径1.0~5.0mmほど、軽石?) 均一に含む。硬く締まる。
  9. 暗褐色砂粒(10YR3/4) 8層の土も混じる。
  10. にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) やや粘性有。裏側はやや黄味を帯び、特に西側に黒褐色シルト塊(直径1.5~3.0cmほど)含む。硬く締まる。
  11. 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒子(直径0.5~5.0mmほど、軽石?) 均一に含む。ローム土を粒状(直径0.2~1.5cmほど)に少量含む。
  12. 暗褐色土(10YR3/3, やや粘性有)と褐色～暗褐色砂粒(10YR6~3/4, 直径1.0mm以下)との混土。ローム土を粒～塊状(直径1.0~2.0cmほど)に含む。硬く締まる。
  13. 黒褐色土(10YR2/5) やや砂質。ローム土粒状(直径0.3~2.0cmほど)に含む。白色粒子(直径0.5~5.0mmほど、軽石?) 均一に含む。
  14. 黒褐色土(10YR2/2) やや砂質。白色粒子(直径0.5~4.0mmほど、軽石?) 特に上方に少量含む。
- 43号溝
15. 黒褐色土～暗褐色砂粒(10YR2/2~3/3) 部分的に19層の土を混じる。ローム粒・塊状(直径0.5~4.5cmほど)に少量。黒色粘質土(10YR1.7/1)を塊状(長径2.0~8.0cmほど)にごく少量含む。硬く締まる。
- 42号溝
16. 黒褐色砂粒(10YR2/2~2/2) 直径0.5~3.0mmほど。白色粒子(軽石?)も少量含む。硬く締まる。
  17. 暗褐色軽石(10YR3/3~3/4) A-B=3B 部分的に20層の土混じり。攪りはよくない。
- 44号溝
18. 暗褐色土(10YR3/3)
  19. 20層の土主体で、13・17層の土混じり。部分的ににぶい淡紫色の灰(A-Bの灰)認められる。硬く締まる。
  20. 黒色土(10YR1.7/1) やや粘性有。白色粒(軽石?)も含む。
  21. 黒色土(10YR1.7/1) やや粘性有。白色粒子(直径1.0~3.0cmほど、軽石?)を均一に含む均と少量しか認められない均とがある。鉄分沈着粒状～粒状に認められる。
  22. 黒色土(10YR1.7/1) やや粘性有。
  23. 灰黄褐色軽石(10YR4/2) 直径2.0mmほど、A=C。厚さ10.0cmほどに堆積。
  - 24a. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性強。鉄分沈着粒状(植物の根か葉の痕)に少量認められる。
  - 24b. 黒色粘質土(10YR1.7/1)
  25. 暗褐色土(10YR3/4) やや硬く締まる。ローム粒を含む。

第10図 1 b 区の基本土層

面とした。各調査区で浅間C軽石の堆積状況は異なっているが、1a区では第9回北壁12層、南壁7層下面で遺構検出を行った。浅間C軽石の堆積は7～10cmである。1b区では東側は第10回23層下面で遺構確認を行ったが、西側は浅間C軽石の残存が不明瞭であった。東側の浅間C軽石の堆積は10cmほどである。1c区では浅間C軽石の堆積は認められなかった。

1a区では水田とそれに伴う溝4条が検出されている。水田面は不定形の長方形にアゼで区切られており、水口も検出されている。埋没の長い過程で谷の傾斜に対応して凹んでおり、水平な水田面は保たれていない。また、アゼの一部で、被災後に木材を芯材としていて復旧を試みているところがあり、注目される。溝は谷南縁の用水路と考えられる27号溝の他、水田面の表流水による帯状凹地あるいは、アゼ脇の凹地と推定される26号、30号、32号溝が検出されている。また北西隅では浅間C軽石で埋まった7号土坑が検出されたが、全体を調査できなかったため、詳細は不明である。

1b区では水田のアゼを検出した。水田は1a区より小さく区画されていた。また1a区同様に谷中央は埋没過程の間に凹んでおり、水平な水田面は保たれていなかった。

1c区では浅間C軽石直下の遺構は検出されなかった。

#### (5)埋没谷

1a区では、浅間C軽石下の水田を調査後、水田耕土の黒褐色土を掘り下げ古墳時代以前の遺構検出を試みたが、遺構は検出されなかった。

しかし、黒褐色土下層に、埋没する古い谷地形を確認したので、旧石器時代以降の赤城山南麓の谷形成についての所見を得ることを目的として、土層の記載と土壌分析および年代測定をおこなった。(第8章-3参照)

この調査の結果、古墳時代前期以降には一条の谷地形である今井沼の谷は、浅間C軽石直下の黒褐色

土層下に新田二条の谷が埋没していることが判明した。古い方の谷は谷基底まで確認することはできなかったが、浅間大窪沢第1軽石が混在する層、浅間板鼻黄色軽石層、浅間総社軽石層が検出され、浅間板鼻褐色軽石が検出されなかったことから、約1.9～2.4万年前以降、約1.1万年前以前に形成された谷であることが判明した。

また新しい谷は、谷全体の南縁に沿って形成されている。これには上記のテフラが堆積せず、谷の中心に別のテフラが混在していた。このテフラについては給源の識別は困難であったが、谷最下部にあった樹木片とテフラ凝集層直下の放射性炭素年代を測定したところ、それぞれ $3010 \pm 70$  y. B.Pと $3060 \pm 70$  y. B.Pの値を得た。同種の試料と比較していないので詳細は不明としながらも、「これらの値は、腐植質堆積物による谷の埋没が、かなり短期間のうちに行われたことを示唆している。従来、このような降灰年代をもつテフラは関東平野北西部では知られていない。」と分析者は報告している。

これらの分析から新しい谷は、下位の樹木片の放射性炭素年代からすれば、浅間総社軽石層が堆積した約1.1万年前以前以降、 $3010 \pm 70$  y. B.P以前に形成され、今から3000年ほど前に埋没したと推定される。植物珪酸体の分析ではこの時期にはタケ亜科のうちネザサ節が占める割合が増加しており温暖な気候であったと推定される。またヒエ属型が700個/gと少量ながら検出されている。現在、栽培種のヒエは識別できないが注目される。

現在縄文時代から弥生時代の暦年代は見直しの議論が行われているが、この谷形成の年代は概ね縄文時代にあたる。新しい年代観によれば、新しい谷の埋没は縄文時代晩期から弥生時代にかけての可能性もでてきている。遺跡周辺で検出されている縄文時代の遺構は前期が中心であるが、谷の南側にある今井道土Ⅱ遺跡では縄文時代晩期の破片も出土しており、赤城山南麓の地形発達と縄文時代の遺跡との関連性には今後も注意する必要がある。

詳細は第8章の分析報告書に拠られたい。

## 2. 1面(表土直下)の遺構と遺物

## (1)溝

## 1区1号溝

(付図2 第11・12図 PL.4 遺物観察表P.562)

**位置** 1b区1-98-H~J-15~16G**重複** 北側に並行する2号・3号溝より新しい。**形状** 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝。地形に沿ってやや彎曲する。東西端は3号溝と重複しているために不明瞭であった。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.2mほど高い。**規模** 調査長 12.92m 最大幅 0.53m  
最小幅 0.30m 深さ 0.12m**断面形** 浅い皿形**埋没土** 硬く締まった褐色砂質土で埋まっていた。ローム粒や粘性土を混じる部分もある。**遺物と出土状況** 遺物は少なく、埋没土中から土師器破片3点、須恵器破片1片が出土したのみである。図示したのは土師器高环脚部破片で、混入であるので遺構外として第50図に掲載した。**所見** 具体的な時期は不明であるが、台地縁辺に掘られた溝の中では最も新しい。

## 1区2号溝

(付図2 第11・12図 PL.4・5 遺物観察表P.557)

**位置** 1b区1-98-G~I-15~17G**重複** 南側に並行する3号溝より新しく、1号溝より古い。**形状** 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝。ほぼ直線である。東端は調査区外に伸びる。西端は前出する3号池状遺構と重複するが、さらに西方向に伸びる部分は検出できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.14mほど高い。**規模** 調査長 14.51m 最大幅 1.85m  
最小幅 0.98m 深さ 0.19m**断面形** 浅い皿状**埋没土** 硬く締まった暗褐色砂と褐色シルト質土の互層で埋まっていた。ローム粒・ローム塊を混じる

部分もある。

**遺物と出土状況** 遺物の出土はほとんどない。埋没土中から土管の破片が1点出土しているのみである。**所見** 具体的な時期は不明であるが、台地縁辺に掘られた現代まで使われた水路であろう。

## 1区3号溝(付図2 第11・12図 PL.4)

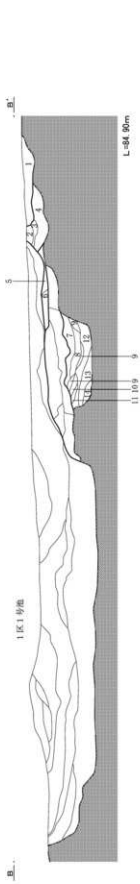
**位置** 1b区1-98-G~K-14~17G**重複** 北側に並行する1号・2号溝より古い。**形状** 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝。地形に沿って一部蛇行する。東端は調査区外に伸びる。西端は1a区13号溝に連続する可能性が高い。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.13mほど高い。**規模** 調査長 23.78m 最大幅 1.05m  
最小幅 0.53m 深さ 0.15m**断面形** 浅い皿形**埋没土** ローム粒・白色軽石粒を含む暗褐色砂質土で埋まっていた。**遺物と出土状況** 遺物の出土はなかった。**所見** 具体的な時期は不明であるが、台地縁辺に掘られた用水路であろう。

## 1区44号溝(付図2 第11・12図 PL.5)

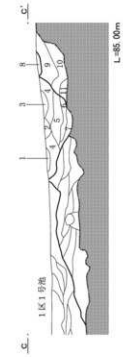
**位置** 1b区1-98-G~K-15~17G**重複** 2号溝の下層から検出されたことから、2号溝より古い。中央部は南側のもう1基の池状遺構に壊されている。

45号溝より古い。

**形状** 谷の南縁に掘られた北東-南西方向の溝。ほぼ直線である。西端・東端ともに発掘区域外に伸びている。底面はやや凹凸があり、その標高は東端が西端より0.27m高い。遺構確認を地山(関東ローム層)面でおこなっているため、南法面は確認できるが、北側の掘り込み面は浅くなっている。**規模** 調査長 22.89m 最大幅 1.02m  
最小幅 0.28m 深さ 0.29m**断面形** 浅い皿形



- 1区1号溝**
- 1号溝 1. 褐色土 砂質、粘性のある土が混じる。ローム灰を含む部分があり、その部分は黄色味帯びる。  
 2号溝 2. 灰褐色土 1層に広がる砂質の土や多く含む。ローム灰を少量含む。ローム灰を少量含む黄色味帯びる。  
 3号溝 3. 灰褐色土 1層に広がる。ローム灰を少量含む黄色味帯びる。  
 4. 褐色～灰褐色土 砂質の土、粘性のある土混じる。ローム灰～黄(褐色土)を含む部分(黄色味帯びる) (黄褐色土)。  
 8号溝 5. 灰褐色土 粘性有する灰質の土。  
 6. 暗褐色土 砂質の土主体、5層に広がる。  
 7. 暗褐色土 暗褐色土を多く含む。ローム灰(直径0.5cmほど)を含む。硬く締まる。  
 8. 暗褐色砂状土(0.075/1) 直径0.5mmほど主体、部分的にシルトを含む。ローム土を軟～塊状(直径0.3～1.0cmほど)に少量含む。硬く締まる。  
 9. 灰褐色シルト(0.075/1) 硬く締まる。  
 10. 暗褐色土(0.075/1) 砂質の部分あり。A～B区(赤紫色)認められる。  
 11. 近い黄褐色土(0.075/3-4/3) やや粘性有。  
 12. 明褐色土(0.075/6) 地山ローム土主体、粘性ほとんどなし。北に打くに近い砂状(直径1.0cmほど)を含む。硬く締まる。  
 13. 暗褐色砂状土(0.075/1) 直径0.5mm以下の細かい砂粒。ローム灰(直径2.5cmほど)部分的に多く含む。  
 14. 13層の砂粒。ローム灰のまじり方が1層より少なく、やや固味帯びる。また黒色土層(0.075/7)も直径0.5cmほど含む。



- 1区1号溝**
- 1号溝 1. 暗褐色土(0.075/2) シルト質、やや粘性有。6層の砂粒を含む。下にローム灰(直径0.3～2.5mmほど)を含む。硬く締まる。  
 2号溝 2. 暗褐色砂質土(0.075/4) 硬く締まる。  
 3号溝 3. 暗褐色土(0.075/1) シルト主体、暗褐色砂状土(0.075/4)を含む。ロームも含まれ、砂粒と共に混れたような感じで見える。  
 4号溝 4. 近い黄褐色土(0.075/3) 暗褐色土(0.075/2)を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。  
 5号溝 5. 暗褐色土(0.075/3) 土を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。  
 6号溝 6. 暗褐色土(0.075/2) シルト質、やや粘性有。6層の砂粒を含む。下にローム灰(直径0.3～2.5mmほど)を含む。硬く締まる。  
 7号溝 7. 暗褐色土(0.075/2) シルト質、やや粘性有。6層の砂粒を含む。下にローム灰(直径0.3～2.5mmほど)を含む。硬く締まる。  
 8号溝 8. 暗褐色砂質土(0.075/4) 硬く締まる。  
 9号溝 9. 暗褐色土(0.075/1) シルト主体、暗褐色砂状土(0.075/4)を含む。ロームも含まれ、砂粒と共に混れたような感じで見える。  
 10号溝 10. 暗褐色土(0.075/3) 土を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。  
 11号溝 11. 10層の暗褐色土を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。



第11図 1区1～3号・44号溝土層断面

1区1・2・3号溝C-C'

- 1号溝 1. 暗褐色土(0.075/2) シルト質、やや粘性有。6層の砂粒を含む。下にローム灰(直径0.3～2.5mmほど)を含む。硬く締まる。  
 2号溝 2. 暗褐色砂質土(0.075/4) 硬く締まる。  
 3号溝 3. 暗褐色土(0.075/1) シルト主体、暗褐色砂状土(0.075/4)を含む。ロームも含まれ、砂粒と共に混れたような感じで見える。  
 4号溝 4. 近い黄褐色土(0.075/3) 暗褐色土(0.075/2)を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。  
 5号溝 5. 暗褐色土(0.075/3) 土を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。  
 6号溝 6. 暗褐色土(0.075/2) シルト質、やや粘性有。6層の砂粒を含む。下にローム灰(直径0.3～2.5mmほど)を含む。硬く締まる。  
 7号溝 7. 暗褐色土(0.075/2) シルト質、やや粘性有。6層の砂粒を含む。下にローム灰(直径0.3～2.5mmほど)を含む。硬く締まる。  
 8号溝 8. 暗褐色砂質土(0.075/4) 硬く締まる。  
 9号溝 9. 暗褐色土(0.075/1) シルト主体、暗褐色砂状土(0.075/4)を含む。ロームも含まれ、砂粒と共に混れたような感じで見える。  
 10号溝 10. 暗褐色土(0.075/3) 土を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。  
 11号溝 11. 10層の暗褐色土を塊状(直径0.5cmほど)に含む。硬く締まる。



**埋没土** ローム粒・塊、暗褐色砂粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 台地南斜面下の台地縁辺に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。掘り直しを重ねて使われてきた台地裾の用水路のうちの1条と推定される。掘削時期については、浅間Bテフラ降下以降と推定されるが特定できない。

#### 1区45号溝 (付図2 001200 PL.5)

**位置** 1b区1-98-G~I-16・17G

**重複** 2号溝、3号溝の下層から検出されたことから、これらの溝より古い。44号溝より新しい。

**形状** 谷の南縁に掘られた北東-南西方向の溝。ほぼ直線である。東端ともに発掘区域外に伸びている。西端は南側の池状遺構に壊されており、その西側については確認できなかった。また、44号溝と一緒に

調査したため、北側の法面を掘り下げて記録した。このため44号溝・45号溝は階段状の平面図となった。底面はやや凹凸があり、その標高は東端が西端より0.03m高い。

**規模** 調査長 9.39m 最大幅 測定不可  
最小幅 測定不可 深さ 0.16m

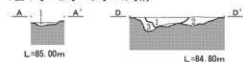
**断面形** 浅い皿形

**埋没土** ローム粒・塊、暗褐色砂粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 台地南斜面下の台地縁辺に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。掘り直しを重ねて使われてきた台地裾の用水路のうちの1条と推定される。掘削時期については、浅間Bテフラ降下以降と推定されるが、44号溝より新しいということ以外特定できない。

#### 1区1号・2号・3号・45号溝



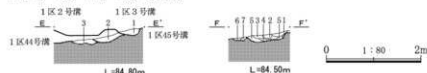
##### 1区1号溝 A-A'

1. 褐色土 やや砂質の土。ローム土が混じる(特に南側)。また粒状(直径1.0cmほど)にも含む。

##### 1区2・3・45号溝 D-D'

- 2号溝  
1. 褐色色砂質土  
3号溝  
2. 1層より黒色床あり  
45号溝  
3. 記載なし

#### 1区2号・3号・44号・45号・51号溝



##### 1区44・45号溝 E-E'

1~3号溝 濃褐色~暗褐色土で、埋没土に差がない。やや硬く締まる。ローム粒~塊(直径0.5~5.0cmほど)・暗褐色砂粒(直径5.0mmほどの小石少量含む)。この部分が暗褐色土に混じる。1層(3号溝)は他に比べややローム土の混じり多い。粒子の流れやベルト前後の掘下げ状況により分層。

##### 1区44・45号溝 F-F'

- 44号溝  
1. 灰黄褐色砂質土 ローム粒(直径0.5~1.0cmほど)少量含む。硬く締まる。  
2. 灰褐色粘質土 砂粒を含む。  
3. 黒褐色粘質土 砂粒を含む。  
4. 灰黄褐色砂質土 1層に類似するがローム粒を混入しない。  
5. 褐色シルト土 硬く締まる。

- 51号溝  
6. 暗褐~黒褐色粘質土 3層に類似する。  
7. 灰褐色土 2層に類似する。

第12図 1区1~3号・44号・45号・51号溝土層断面と出土遺物

#### 第4章 1区の遺構と遺物

##### 1区4号溝

(付図2 第13・50図 PL5 遺物観察表P.562)

**位置** 1b区1-98-I・J-19・20G

**重複** 2号池状遺構と重複するが、埋没土の観察や、施設の共通性から同時期と推定される。

**形状** 低地内のほぼ中央に掘られた南西-北東方向の溝。走向はほぼ直線である。北東端は調査区外に伸びる。南西端は2号池状遺構に接するが、それより以南は検出できなかった。底面に凹凸が著しいが、その標高は南端が北端より0.37m高い。

**規模** 調査長 8.13m 最大幅 1.60m  
最小幅 1.09m 深さ 0.54m

**断面形** 箱形

**埋没土** 黒褐色土、黒色土粒を含む暗黄褐色土、暗褐色砂質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片10片、須恵器破片1片が出土した。すべて混入と考えられる。土師器高坏を遺構外として第50図に掲載した。

**所見** 本溝内には2号池状遺構と同様な木杭列が残り、壁面には護岸設備が設置されていることから、2号溝に伴う水路跡と推定される。

##### 1区5号溝 (付図2 第13図 PL5)

**位置** 1b区1-98-H・I-16・17G

**重複** 西側にある1号池状遺構と重複するが、池状遺構埋没土層断面には明確に本溝の土層は確認できなかったことから、5号溝は1号池状遺構より古いと考えられる。

**形状** ほぼ直線の南西-北東方向の溝。東端は痕跡のみ確認できる程度で調査区外に伸びるかどうかは不明である。西端は後出する1号池状遺構と重複するが、さらに西方向に伸びる部分は検出できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.13m高い。

**規模** 調査長 8.55m 最大幅 0.61m  
最小幅 0.56m 深さ 0.10m

**断面形** 浅い皿状

**埋没土** 灰褐色砂質土と暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 具体的な遺構の時期は不明である。周辺で検出された7~9号溝と規模が類似し、走向も並行あるいは直交することから、地割に関連する溝と推定される。

##### 1区7号溝 (付図2 第13図 PL6)

**位置** 1b区1-98-J・K-19・20G

**重複** 南側にある4号溝・2号池状遺構と重複するが、それらの埋没土層断面に本溝の土層が確認できたことから、7号溝は4号溝・2号池状遺構より新しいと考えられる。

**形状** ほぼ直線の南西-北東方向の溝。東端は痕跡のみ確認できる程度で調査区外に伸びるかどうかは不明である。西端は後出する1号池状遺構と重複するが、さらに西方向に伸びる部分は検出できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.04m高い。

**規模** 調査長 6.03m 最大幅 0.61m  
最小幅 0.36m 深さ 0.10m

**断面形** 浅い皿状

**埋没土** 灰褐色砂質土やシルトで埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 具体的な遺構の時期は不明である。周辺で検出された7~9号溝と規模が類似し、走向も並行あるいは直交することから、時間差はあるものの地割に関連する溝と推定される。

##### 1区8号溝 (付図2 第13図 PL6・7)

**位置** 1b区1-98-J・K-15G

**重複** 東側にある池状遺構と重複するが、8号溝が古い。

**形状** ほぼ直線の南西-北東方向の溝。東端は痕跡のみ確認できる程度で池状遺構に先行するが、土坑以東の形状は不明である。西端は調査区外に伸びるが、隣接する1a区に連続する遺構は検出されなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は東西端ともにほぼ同一であった。

**規模** 調査長 7.11m 最大幅 0.37m  
最小幅 0.21m 深さ 0.09m

**断面形** 浅い皿状

**埋没土** ローム粒を含む濃褐色砂質土。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 具体的な遺構の時期は不明である。周辺で検出された7～9号溝と規模が類似し、走向も並行あるいは直交することから、時間差はあるものの地割に関連する溝と推定される。

1区9号溝(付図2 PL.6)

**位置** 1b区1-98-I-16・17G

**重複** 南側にある2号溝と重複する。新旧関係は不明である。

**形状** 直線の北西-南東方向の溝。走向は池状遺構の短辺に一致する。南端は2号溝と重複するが、北5号溝の0.14m南側で立ち上がっていた。底面はほぼ平坦で、その標高は南端が北端より0.04m高い。

**規模** 調査長 4.61m 最大幅 0.34m  
最小幅 0.21m 深さ 0.10m

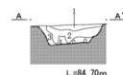
**断面形** 浅い皿状

**埋没土** 上層は白色軽石を含む弱粘性褐色土、下層は褐色砂質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 具体的な遺構の時期は不明である。周辺で検出された7～9号溝と規模が類似し、走向も並行あるいは直交することから、時間差はあるものの地割に関連する溝と推定される。

#### 1区4号溝



#### 1区4号溝A-A'

1. 暗褐色土 やや砂っぽい部分ある。植物を多く含む。
2. 暗褐色土 土の感じは1層に近いが、黄色味帯びたシルトっぽい土が混じる。黒色土粒(直径1.0cmほど)・3層の土も少量混じる。
3. 黒褐色土 黒色土粒(直径1.0cmほど)少量含む。

#### 1区5号溝



#### 1区5号溝A-A'

1. 灰褐色土 シルトっぽい土。7号溝の埋没土に似るが、やや黒褐色味強い。鉄分沈着痕状に含む。
2. 暗褐色土 1層に比べやや砂っぽい土(比較して砂っぽい土であり、いわゆる砂質土ではない)。

#### 1区7号溝



#### 1区7号溝A-A'

1. 2号池・4号溝接合部の1層。灰褐色シルト主体、やや硬く締まり、鉄分沈着痕状に含む。
2. 灰褐色土 砂質土。
3. 1層に似るが、締まりやや弱い。

#### 1区8号溝



#### 1区8号溝A-A'

1. 濃褐色砂質土 砂質の土主体で泥質の暗褐色土少量混じる。黄褐色土(ローム)粒(直径0.5cmほど)少量混じる。
- 2号池状遺構
3. 灰褐色土 1層に似るがやや黒味帯びる。
4. 暗褐色土 砂質の土主体の黄褐色土を含み、13層より黄色味帯びる。ややシルト質で、白色軽石含む。
5. 暗褐色土 砂質の土と泥質の土をフミ字状に含む。灰褐色土塊(直径1.5～10.0cmほど、1・3層の土に似る)少量、白色軽石含む。鉄分沈着痕状に認められる。
6. 暗褐色土 黒色土塊(直径1.0～5.0cmほど)含む。植物含む。1号池の4層より黒味を帯び、白色シルトは含まない。やや泥質の土。

#### 1区9号溝



#### 1区9号溝A-A'

1. 濃褐色砂質土 砂質の土主体で泥質の暗褐色土少量混じる。黄褐色土(ローム)粒(直径0.5cmほど)少量混じる。

9号溝: 褐色土 溝の縁部の上より粘性があるが、黒味は少ない(縁部の上の方が黒味帯びている)。下方に薄く褐色砂質土が認められる。10号溝: この溝の縁部面上(暗褐色土)が主体で、砂質の土が混じる。削平された溝の底部付近と思われる。

0 1:80 2m

第13図 1区4号・5号・7号・8号溝土層断面

#### 第4章 1区の遺構と遺物

##### 1区10号溝 (付図2 PL.6)

**位置** 1b区1-98-I・J-19・20G

**重複** 南西側にある4号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** ほは直線の南西-北東方向の溝。北東端は痕跡のみ確認できる程度で調査区外に伸びると推定された。南端は4号溝に重複するが、それ以南の形状は不明である。底面はほぼ平坦で、その標高は南端が北端より0.02m高い。

**規模** 調査長 6.95m 最大幅 0.75m  
最小幅 0.30m 深さ 0.24m

**断面形** 浅い皿状

**埋没土** 暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 具体的な遺構の時期や機能は不明である。

##### 1区11号溝

(付図2 第14・50図 PL.6・7 遺物観察表P.561)

**位置** 1a区1-98-M-Q-10-13G

**重複** 北側に重複・並行する12号溝より新しい。

**形状** 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝。地形に沿ってやや彎曲する。遺構確認面では東端は1-98-M-13グリッド内で立ち上がっている。西端は先行する12号溝と一緒に調査したために、本溝の重複部の浅い部分は検出できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.26m高い。

**規模** 調査長 22.35m 最大幅 0.68m  
最小幅 0.30m 深さ 0.13m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** ローム粒を多く含み、硬く締まった褐色砂質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片23点が出土した。すべて混入と思われるが、残存度の大きい坏破片を遺構外として第50図に示した。

**所見** 具体的な時期は不明であるが、台地縁辺に掘られた溝の中では最も新しい。また、位置や層位が類似することから、1b区の1号溝に連続する可能性が高いが、確認はない。

##### 1区12号溝 (付図2 第14図 PL.6・7)

**位置** 1a区1-98-M-T-9-13G

**重複** 南側に重複・並行する11号溝より古く、北側に重複・並行する13号溝より新しい。

**形状** 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝。地形に沿ってやや彎曲する。東端は調査区外に伸びており、1b区の溝群に連続すると推定される。西端は先行する13号溝と一緒に調査したために、重複部では本溝の浅い部分は検出できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.13m高い。しかし中央部には底面標高が東端より0.06m高いところがあった。

**規模** 調査長 43.10m 最大幅 0.65m  
最小幅 0.19m 深さ 0.07m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 砂層を挟み、ローム粒や暗黄褐色シルトを含む黄褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 具体的な時期は不明であるが、台地縁辺に掘られた溝の中では11号溝に次いで新しい。11号溝に掘り変えられる前の溝と考えられる。また、位置や層位が類似することから、11号溝が本溝が1b区の1号溝に連続する可能性が高いが、判断できなかった。

##### 1区13号溝 (付図2 第14・15・50・58・59図 PL.6・7・148 遺物観察表P.562・611)

**位置** 1a区1-98-M-T-8-13G

1-99-A-E-8-12G

**重複** 南側に重複・並行する12号溝より古い。1号土坑より古い。

**形状** 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝(13A溝)と、1-99-C-8グリッドで北方向に分岐する(13B号溝)がある。13A号溝は地形に沿ってやや彎曲する。東端は調査区外に伸びており、1b区の溝群に連続すると推定される。西端も発掘区域外に伸びる。13B号溝は谷を横断する位置にあり、14-16

号溝と直交あるいは同方向の位置にある。13A号溝の底面には凹凸があるが、全体としての床面標高は東端が西端より0.42m高い。13B号溝の底面はほぼ平坦で、南端が北端より0.25m高い。

#### 規模

13A号溝	調査長 60.95m	最大幅 1.40m
	最小幅 0.80m	深さ 0.06~0.28m
13B号溝	調査長 24.40m	最大幅 1.12m
	最小幅 0.50m	深さ 0.11m

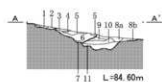
**断面形** 13A号溝 浅い箱形

13B号溝 浅いU字形

**埋没土** 13A号溝は砂層を挟み、ローム粒や暗黄褐色シルトを含む灰黄褐色土で埋まっていた。13B号溝は下位に浅間Bテフラの火山灰塊を含む黄褐色砂で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片53点、須恵器破片2点が出土した。また凹石・石籬1点ずつのほか、剥片4片、棒状礫1点が出土した。いずれ

#### 1区11号・12号・13号溝



#### 1区11・12・13号溝A-A'

##### 11号溝

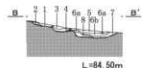
1. 暗褐色土 やや硬く締まりはやや弱い。ローム粒をやや多く含む、黄色味がかる。
2. 暗黄褐色土 1層より粒子細かい、ローム粒をやや多く含む。

##### 12号溝

3. 暗黄褐色土 やや硬くややもろい、ローム粒をやや多く含む。
4. 暗緑味を帯びる 直径1.0cm内外の砂粒層。
5. 黄褐色土 ローム粒を主体とし、暗黄褐色のシルト質の土塊を含む。
6. 灰色がかる暗褐色土 粒子細かく、やや硬い、黄味の強いローム粒をやや多く、白黄色のローム塊(直径1.0~2.0cm)の塊を帯状含む。
7. 灰黄褐色土 粒子細かい、フカフカする。白黄色のローム塊をわずかに含む。

##### 13号溝

8. 暗褐色土 やや硬く、やや締まり良い、ローム粒わずかに含む。鉄分が斑点状にみられる。aよりbはローム粒が多い。
9. 灰褐色土 粒子が細かくシルトがかる。3層の塊をわずかに含む。
10. 灰黄褐色土 ごく細かい砂粒子層。
11. 灰褐色土 軟らかく、粒子細かい、シルト質のローム塊(直径1.0cm内外)黄色の砂粒子をわずかに含む。



#### 1区11・12・13号溝B-B'

##### 11号溝

1. 暗褐色土 やや硬く締まりはやや弱い。ローム粒をやや多く含む、黄色味がかる。
2. 暗黄褐色土 1層より粒子細かい、ローム粒をやや多く含む。

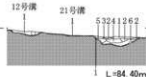
##### 12号溝

3. 灰色がかる暗褐色土 粒子細かく、やや硬い、黄味の強いローム粒をやや多く、白黄色のローム塊(直径1.0~2.0cm)の塊を帯状含む。
4. 灰黄褐色土 粒子細かい、フカフカする。白黄色のローム塊をわずかに含む。

##### 13号溝

5. 暗褐色土 やや硬く、やや締まり良い、ローム粒わずかに含む。鉄分が斑点状にみられる。
6. a 灰黄褐色土 ごく細かい砂粒子層。  
b a層よりやや黄味が強い。
7. 灰黄褐色土 粒子大変細かくシルトがかる。やや軟らかく他の粒子の混入が少ない。
8. 灰黄褐色土 3層より粒子粗く、細かい砂粒子をわずかに含む。

#### 1区12号・21号・13号溝



#### 1区12・21・13号溝D-D'

##### 12号溝

1. 灰黄褐色土 硬く、やや締まり悪い。ローム粒、白色粒子、直径0.5~1.0cmのローム塊わずかに含む。

##### 21号溝

1. 灰黄褐色土 やや硬く、やや締まり悪い。白色粒子、直径5.0mmほどのローム塊わずかに、ローム粒をやや多く含む。

##### 13号溝

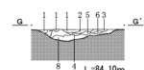
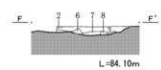
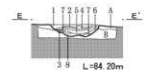
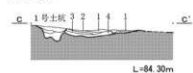
1. 灰黄褐色土 硬く、やや締まり悪い。ローム粒をやや多く含む。
2. 灰黄褐色土 ごく細かい砂粒子層。
3. 黄褐色土 直径1.0cm内外の砂粒子層。
4. 暗灰黄褐色土 やや硬い、やや砂質。粒子の細かい暗黄褐色の塊(直径1.0~2.0cm)を斑点状に含む。
5. 黄褐色土 やや硬い、やや砂質。ローム粒を多く含む。
6. 灰黄褐色土 やや軟らかい、やや砂質。ローム粒をやや多く含む。直径0.5~1.0cmのローム塊わずかに含む。

0 1:80 2m

第14図 1区11~13号溝土層断面

第4章 1区の遺構と遺物

1区13号溝



1区13号溝 C-C'

13号溝

1. 暗褐色土 やや硬く、やや締まり良い。ローム粒子わずかに含む。鉄分が斑点状にみられる。aよりbはローム粒子が多い。
2. 灰褐色土 粒子が細かくシルトがかる。3層の境をわずかに含む。
3. 灰黄褐色土 ごく細かな砂粒子層。
4. 灰黄褐色土 やや硬く、やや砂質。ローム粒子やや多く、シルト質のローム塊(直径5.0mm~1.0cm)わずかに含む。

1区13号溝 E-E'

13号溝

1. 暗褐色土 硬く、やや締まる。粘性やや弱い。炭屑軽石粒子をやや多く含む。
2. 灰褐色土 硬く、良く締まる。粒子細かく、粘性ややあり。鉄分のしみあり。
3. 暗褐色土 硬く、良く締まる。粘性弱い。白色粒子、乳白色粒子やや多く含む。
4. 灰褐色土 やや硬く、粒子細かく、粘性弱い。直径1.0cm内外の暗褐色塊をわずかに含む。
5. 暗褐色土 硬く、粒子やや細かい。2層土(直径5.0mmほど)を塊で含む。
6. 黄褐色土 淡い色調のごく細かな砂粒。
7. 暗褐色土 硬く、やや良く締まる。黄色の砂粒子やや多く含む。
8. 灰黄褐色土 やや硬く、粒子細かい。
9. 黒褐色土 やや硬く、締まりやや悪い。
10. 黄褐色砂質土 直径1.0mm内外の砂粒子(黄褐色)を主体とし、緑色がる微砂粒を混存する砂層。

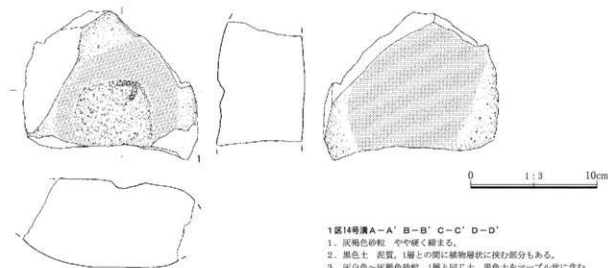
1区13号溝 F-F' G-G'

13号溝

1. 暗褐色土 やや軟らかく、締まりやや悪い。粘性弱い。ローム粒子わずかに含む。
2. 灰黄褐色土 A-A'の3層に類似。
3. 灰黄褐色土 やや硬い。粒子粗い。直径1.0mm内外の黄色砂粒子を不定形の塊状に含む。
4. 黄褐色砂粒 直径1.0mm内外(3層も含まれる)黄色砂粒子を主体とする砂質層。
5. 暗黄褐色土 やや軟らかい。締まり悪い。直径1.0cm内外の黄色砂粒子を多く含む。
6. 灰黄褐色土 粒子やや粗く、砂質。
7. 灰黄褐色土 粒子やや粗く、砂質。
8. 暗褐色土 灰黄褐色土、ローム塊、黒色土の直径2.0~3.0cmの塊を斑点状に混存する。直径1.0cm内外の砂粒子もわずかに含む。

1区13号溝 H-H'

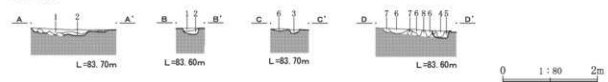
1. 黄褐色砂粒 下段に淡紫色のAs-B丸山灰が塊状に少量認められる。



1区14号溝 A-A' B-B' C-C' D-D'

1. 灰褐色砂粒 やや硬く締まる。
2. 黒色土 泥質。1層との間に植物層状に挟む部分もある。
3. 灰白色~灰褐色砂粒 1層と同じ土。黒色土をマール状に含む。
4. 暗褐色土 白色軽石層。黄褐~灰白色砂粒を塊状に含む。
5. 黒色土 8層に似るが、4層の砂粒が混じる。
6. 暗褐色土 白色軽石含む。確認面の黒色土の上層の土。
7. 黄褐~灰白色砂粒 4層のものと同。
8. 黒色土 確認面の土。黒ベタの土。

1区14号溝



第15図 1区13号・14号溝土層断面と13号溝出土遺物

も混入と推定されるが、残存度の大きい甕破片や須恵器破片、石器を遺構外として第50・58・59図に示した。溝の時期を示すような遺物は出土しなかった。

**所見** 両溝とも具体的な時期は不明であるが、13A号溝は台地縁辺にある溝群のうち最も低位にあり、最も古い。浅間Bテフラ降下以降に整備された谷水田に伴う最初の水路といえよう。また、位置や層位が類似することから1b区の3号溝に連続する可能性が高いが、確証はない。

#### 1区14号溝 (付図2 第150図 PL7)

**位置** 1a区1-98-T-14-16G

1-99-A-E-13-14G

**形状** 低地の北縁に掘られた南西-北東方向の溝。ほぼ直線で、1-98-T-15グリッドで北側にはほぼ直角に曲がる。西端は調査区外に伸びており詳細は不明である。北端は東側に南北1.0m、東西1.2mの突出部があり、深が20個ほどまとまって出土した。溝底面はほぼ平坦で、底面標高は北端突出部が西端より0.25m高い。

**規模** 調査長 36.17m 最大幅 1.36m  
最小幅 0.28m 深さ 0.12m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 上層は灰褐色砂、下層は黒色泥質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片4点、須恵器破片1点、剥片1点が出土した。いずれも混入と思われるが、小破片で図示できる遺物はなかった。

**所見** 具体的な時期は不明である。本溝の南側で検出された浅間B軽石下水田のアゼと方向が一致している。水田造成あるいは地割りに関わる溝と推定されるが、詳細は確認できなかった。

#### 1区15号溝

(付図2 第16・57・58図 PL7 遺物観察表P.605・610)

**位置** 1a区1-98-T-16G

1-99-A-F-15-16G

**重複** 16号溝と重複するが新旧関係は不明である。

**形状** 低地の北縁に掘られた南西-北東方向の溝。ほぼ直線で、東端は1-98-T-16グリッドで不明瞭になる。西端は16号溝と重複するがその西側については確認できなかった。溝底面はほぼ平坦で、底面標高は東端が西端より0.23m高い。

**規模** 調査長 27.58m 最大幅 0.79m  
最小幅 0.44m 深さ 0.11m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 暗灰色砂層で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から縄文土器深鉢破片1点、土師器破片24点、土管破片1点、棒状礫1点、加工痕ある剥片1点、剥片3点、礫片1点が出土した。いずれも小破片で混入と思われる。縄文土器片および加工痕ある剥片を第57・58図に示した。

**所見** 具体的な時期は不明である。本溝の南側で検出された14号溝と平行する位置にあり、規模や埋没土も共通する。14号溝と同様に水田造成あるいは地割りに関わる溝と推定されるが、詳細は確認できなかった。

#### 1区16号溝 (付図2 第160図 PL8)

**位置** 1a区1-99-F-14-15G

**重複** 15号溝と重複するが新旧関係は不明である。

**形状** 低地の北縁に掘られた15号溝に直交する位置にある北西-南東方向の溝。ほぼ直線で、南端は1-98-F-15グリッド内で西にほぼ直下に曲がり始めているが、調査区域外に伸びるため詳細は不明である。北端は調査区外に伸びるが、方向は1c区の23号溝に一致する。溝底面はほぼ平坦で、底面標高は北端が南端より0.15m高い。

**規模** 調査長 5.22m 最大幅 0.64m  
最小幅 0.40m 深さ 0.26m

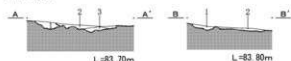
**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 下層は柔らかい細粒の黒褐色土、上層は暗灰色砂質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片2点、剥片1点、礫片1点が出土した。いずれも小破片で混入と思われる。図示できる遺物はなかった。

第4章 1区の遺構と遺物

1区15号溝



1区15号溝A-A' B-B'

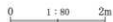
1. 暗灰色砂粒 13号溝H-1'より粒子の粗い砂、1号畝跡や1号溝作直に認められる様な砂粒混じる。
2. 暗灰色土 白色礫石含む、麻器面の黒色土の上層の土。B-B'では1層同様、1号畝跡等に認められる砂粒混じる。
3. 暗灰色砂粒 1層に似る。地山黒色土が混じる。

1区16号溝

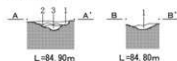


1区16号溝A-A'

1. 灰褐色土 やや軟らかく、締まりやや悪い、粒子大変細かくシルトがかかる。混入粒子少ない。
2. 暗褐色砂質土 やや硬く締まり悪い、上層微砂粒、下層直径1.0mm内外の砂粒層。
3. 暗褐色土 やや軟らかく、締まりやや悪い、粒子細かく、混入粒子少ない。
4. 黒褐色土 やや軟らかく(たまった水にゆっくり沈殿したような土。粒子大変細かい)締まりやや悪い、シルトがかかる。混入粒子少ない。

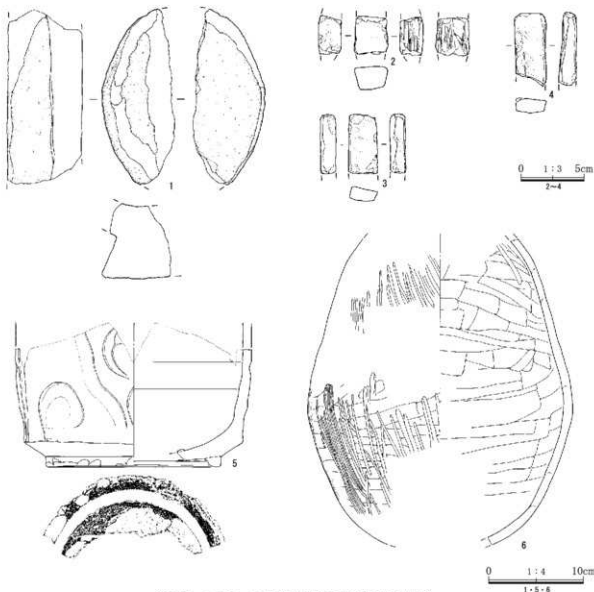


1区17号溝



1区17号溝A-A' B-B'

1. 褐色土 やや硬く、締まり悪い、砂質がかかる。鉄分の赤みをおびる。
2. 褐色土 やや硬く、やや締まり悪い、1層よりやや粒子細かい、直径2.0~3.0mmの黒褐色。鉄分の塊わずかに含む。
3. 暗褐色土 やや硬く、やや締まり悪い、直径1.0cmほどの褐色砂粒の塊をわずかに含む。締がかり、のろがたまったような土。



第16図 1区15~17号溝土層断面と17号溝出土遺物



**所見** 具体的な時期は不明である。本溝の東側で検出された15号溝と直交する位置にあり、規模や埋没土も共通する。14号・15号溝と同様に水田造成あるいは地割りに関わる溝と推定されるが、詳細は確認できなかった。

1区17号溝 (付図3 第16・50・57・58図 PL.8・148 遺物観察表P.557・604・610)

**位置** 1c区2-8-P~T-4・5G  
2-9-A~F-3・4G

**重複** なし

**形状** 低地北側の緩斜面の最高位に掘られた南西-北東方向の溝。ほぼ直線で、東端は2-8-P-5グリッド内で、西端は2-9-F-3グリッド内で立ち上がってしまう。底面は凹凸が著しく、その標高は東端が西端より0.1mほど高い。

**規模** 調査長 50.32m 最大幅 1.32m  
最小幅 0.26m 深さ 0.17m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** しまりの悪い褐色土・暗褐色土で埋まる。  
**遺物と出土状況** 埋没土中から陶器破片19片、磁器破片19片、中世~現代の軟質土器破片16片、縄文土器破片1点、土師器破片568点、須恵器破片10点、石臼1点、砥石3点、打製石斧2点、加工痕ある剥片2片、剥片11点、礫片6点が出土した。現代の遺物が出土していることから、中世軟質土器や土師器・須恵器・打製石斧・剥片類はいずれも混入と思われるが、土師器甕の大型破片も含まれていた。陶器水甕(瀬戸・美濃)底部破片(第16図5)、石臼(1)、砥石(2~4)を図示した。土師器甕、縄文土器破片、打製石斧等は遺構外遺物として第50図および第56~58図に示した。

**所見** 埋没土中から現代の陶磁器類が出土していることから、中近世以降現代まで使用されていた溝と推定される。

走向は1a区14・15号溝や1c区22~24号溝と共通あるいは直交する位置にあり、関連する地割りの溝である可能性が考えられる。

1区18号溝

(付図3 第17・50・58図 PL.8 遺物観察表P.610)

**位置** 1c区2-8-O~T-2~5G  
2-9-A~F-2・3G

**重複** 20号溝と重複する。新旧関係を記録した土層断面図はないが、遺構検出時の埋土の観察から、本溝の方が古い。

**形状** 低地北側の緩斜面の中位に掘られた北西-南東-北東方向の溝。中央部が大きく南に膨らむ。東端は2-8-O-4グリッド内で、西端は2-9-F-3グリッド内で立ち上がってしまう。底面にはやや凹凸があるが、その全体としての底面標高は東端が西端より0.23m高い。

**規模** 調査長 57.34m 最大幅 0.94m  
最小幅 0.30m 深さ 0.14m

**断面形** 浅い箱形

**埋没土** 砂粒塊を含む褐色砂質土で埋まっていた。  
**遺物と出土状況** 埋没土中から近世~現代の陶器片5点、磁器破片4点、軟質土器破片3点、不明2点、土師器破片406点、削器2点、剥片2点が出土した。現代の遺物が出土していることから、土師器・削器・剥片類はいずれも混入と思われる。また、須恵器坏口縁部破片が2区79号土坑出土の破片と接合した。(第240図2)

削器1点を遺構外として第58図に示した。

**所見** 17号溝と走向は異にするが、埋没土中から現代の陶磁器類が出土しており、本溝も中近世以降現代まで使用されていた溝と推定される。

1区19号溝 (付図3 第17図 PL.8・9)

**位置** 1c区1-98-Q・R-20G  
2-8-Q~S-1・2G

**重複** なし

**形状** 低地北側の緩斜面に交差する北西-南東方向の溝。北端は2-8-S-2グリッド内で立ち上がり、南端は発掘区域外に伸びるが、1a区でその延長を確認することはできなかった。溝幅が中央部で広がっていた。底面にはやや凹凸があるが、その

#### 第4章 1区の遺構と遺物

全体としての底面標高は北端が南端より0.34m高い。

**規模** 調査長 11.25m 最大幅 2.70m

最小幅 0.89m 深さ 0.40m

**断面形** 中央部の幅が広い地点では浅い箱形を呈するが、南端の発掘区際際ではU字形。

**埋没土** 下層は黒褐色土塊や暗灰黄褐色土塊を含む暗褐色土で、上層は締まりのない黄褐色土で埋まっていた。南端の土層断面では本溝が浅間Bテフラ、浅間C軽石の両層より新しく掘削されたことが確認できた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から近世の陶器片1点、近世～現代の磁器破片2点、近世の軟質土器破片3点、土師器破片13点、須恵器破片1点が出土した。現代の遺物が出土していることから、土師器・須恵器破片はいずれも混入の小破片で図示できる遺物はなかった。

**所見** 低地を横断する方向に掘られた不定型な溝である。機能については明らかにできなかった。

#### 1区20号溝 (付図3 第17図 PL.9)

**位置** 1c区2-8-Q-R-1~4G

**重複** 18号溝と重複するが、遺構確認時の埋土の観察から、本溝が新しいと思われた。

**形状** 低地北側の緩斜面に交差する北～南方向の溝。北半分は二方向に分岐し、Y字状の平面形になっていた。東側の北端は2-8-Q-4グリッド内で、西側の北端は2-8-R-3グリッド内で立ち上がる。南端は発掘区域外に伸びるが、1a区でその延長を確認することはできなかった。底面はほぼ平坦で、底面標高は北端が南端より0.02m高い。

**規模** 調査長 17.30m 最大幅 0.81m

最小幅 0.22m 深さ 0.27m

**断面形** 箱形

**埋没土** 底面には竹が敷かれており、白色粒子や淡褐色土塊を含む黒色土で埋まっていた。黒色土は地山とほとんど区別がつかないほどで、本溝を掘削した土で竹を敷いた後に埋め戻したと推定される。

**遺物と出土状況** 埋没土中から近世の陶器片1点、

軟質土器破片2点、土師器破片9点、須恵器破片2点が出土した。近世遺物が出土していることから、土師器・須恵器破片はいずれも混入の小破片で図示できる遺物はなかった。

**所見** 低地を横断する方向に掘られた溝で、底面に竹束が敷かれていることからすれば、斜面の湧水を排水するための暗渠と推定される。掘削時期については明らかにできなかった。

#### 1区21号溝 (付図2 第14図)

**位置** 1a区1-99-Q~S-10・11G

**重複** 13号溝と重複するが、21号溝が古い。

**形状** 南台地縁辺に沿った南西～北東方向の溝。地形に沿ってやや彎曲する。東西両端は13号溝に切られており、13A号溝の南側に一部が残存していたのみである。底面はほぼ平坦で、床面標高は東端が西端より0.02m高い。

**規模** 調査長 13.86m 最大幅 0.37m

最小幅 0.19m 深さ 0.04m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 白色粒子・ローム塊・ローム粒を含む灰黄褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 低地脇に掘られた溝であるが、時期や機能は明確にできなかった。

#### 1区22号溝 (付図3 第17図 PL.9・10)

**位置** 1c区1-99-E~G-19・20G

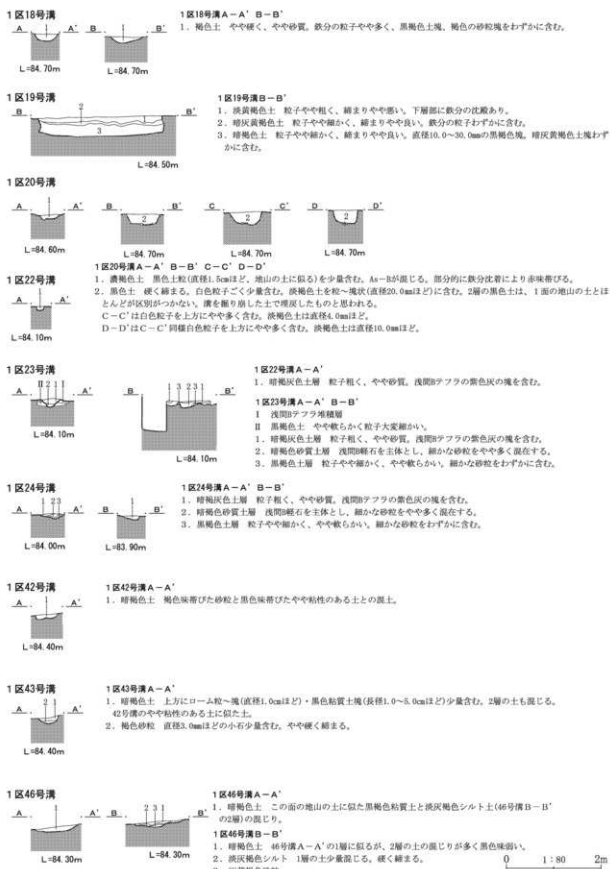
**重複** 23号溝と重複するが、同時期の溝と推定されている

**形状** 低地北側の緩斜面に平行する西～東方向の溝。東端は1-99-E-20グリッド内で不明瞭になる。西端は調査区外へ伸びる。底面の一部に半月形の掘削痕跡が残る。底面標高は東端が西端より0.15m高い。浅間Bテフラ層を切って掘られていた。

**規模** 調査長 10.39m 最大幅 0.56m

最小幅 0.21m 深さ 0.04m

**断面形** 浅い箱形



第17図 1区18~24号・42号・43号・46号溝土層断面

#### 第4章 1区の遺構と遺物

**埋没土** 浅間Bテフラの紫色火山灰層の塊を含む砂質の暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 1a区の15号・16号溝と平行に掘られており、層位や形状も類似することから、同様の機能をもった溝と推定される。

##### 1区23号溝 (付図3 第17図 PL10)

**位置** 1c区1-99-G・H-18~20G

**重複** 22号溝と重複するが、同時期の溝と推定されている

**形状** 低地北側の緩斜面に直交する北-南方向の溝。北端は1-99-H-20グリッド内で不明瞭になる。南端は1-99-G-18グリッドで立ち上がった。底面はほぼ平坦で、底面標高は北端が南端より0.15m高い。浅間Bテフラ層を切って掘られていた。

**規模** 調査長 11.89m 最大幅 0.45m  
最小幅 0.23m 深さ 0.12m

**断面形** 浅い箱形

**埋没土** 浅間Bテフラの軽石を多量に含む暗褐色砂質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 谷を横断する方向に掘られている。1a区の16号溝や13B号溝に連続するような位置にあり、関連性も想定できる。これらの溝と層位や形状も類似することから、同様の機能をもった溝と推定される。

##### 1区24号溝 (付図3 第17図 PL10)

**位置** 1c区1-99-C~G-17~19G

**重複** なし

**形状** 低地北側の緩斜面下位に平行して掘られた南西-北東方向の溝。北端は1-99-C-18グリッド内で立ち上がる。西端は発掘調査区外へ伸びる。底面はほぼ平坦で、底面標高は東端が西端より0.13m高い。浅間Bテフラ層を切って掘られていた。

**規模** 調査長 15.94m 最大幅 0.57m  
最小幅 0.17m 深さ 0.10m

**断面形** 浅い箱形

**埋没土** 浅間Bテフラの、軽石を多量に含む暗褐色砂質土や紫色火山灰塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 1a区の15号溝や16号溝に平行する位置に掘られていた。これらの溝と層位や形状も類似することから、同様の機能をもった溝と推定される。

##### 1区42号溝 (付図2 第17図 PL10・11)

**位置** 1b区1-98-H-17・18G

**重複** なし

**形状** 谷の南縁に掘られた北東-南西方向の溝。ほぼ直線である。西端は1-98-H-17グリッド内で確認できなくなる。東端は発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、底面の標高は北東端が南西端より0.03m低くなっている。

**規模** 調査長 6.44m 最大幅 0.53m  
最小幅 0.25m 深さ 0.08m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 褐色砂を混じる暗褐色粘質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 台地南斜面したの谷部縁下に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。遺構確認面は浅間B軽石の上層にある黒褐色砂質土下面である。他の1面の遺構が表土直下で検出されていることからすれば、やや古い遺構と考えることができる。何の目的で掘られたかを明らかにすることはできなかった。

##### 1区43号溝 (付図2 第17図 PL10・11)

**位置** 1b区1-98-G・H-17・18G

**重複** なし

**形状** 谷の南縁に掘られた北東-南西方向の溝。ほぼ直線である。西端は1-98-H-17グリッド内で確認できなくなる。東端は発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、底面の標高は東端が西端より0.04m高い。

**規模** 調査長 4.93m 最大幅 0.49m

最小幅 0.39m 深さ 0.14m

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 上層はローム塊や褐色砂を混じる暗褐色粘質土で、下層は褐色砂層で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 台地南斜面下の谷部縁辺に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。遺構確認面は浅間B軽石の上層にある黒褐色砂質土下面である。他の1面の遺構が表土直下で検出されていることからすれば、やや古い遺構と考えることができる。何の目的で掘られたかを明らかにすることはできなかった。

1区46号溝 (付図2 第17図 PL10・11)

**位置** 1b区1-98-H-17・18G

1b区1-98-I-16・17G

**重複** なし

**形状** 谷の南縁に掘られた北東-南西方向の溝。ほぼ直線である。西端は1-98-I-16グリッド内で確認できなくなる。東端は発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、底面の標高は北東端が南西端より0.03m低くなっている。

**規模** 調査長 12.03m 最大幅 1.16m

最小幅 0.53m 深さ 0.09m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 上層は褐色砂を混じる暗褐色粘質土、中層は灰褐色シルト、下層は灰黄褐色砂で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 台地南斜面したの谷部縁辺に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。遺構確認面は浅間B軽石の上層にある黒褐色砂質土下面である。他の1面の遺構が表土直下で検出されていることからすれば、やや古い遺構と考えることができる。埋没土下層に砂層があることから流水の可能性が考えられるが、部分的な遺構面の確認にとどまったため、何の目的で掘られたかを明らかにすることはできなかった。

(2)土坑

1区1号土坑 (付図2 第18図 PL11)

**位置** 1a区1-98-Q・R-11G

**重複** 13号・21号溝より新しい。

**形状** 不整楕円形

**規模** 長軸0.98m 短軸0.46m 残存壁高0.35m

**長軸方位** N-77°-E

**断面形** 箱形。中央がやや突出する。

**埋没土** ローム粒やシルト質のローム塊を含む暗黄褐色土や黄褐色土で埋まっていた。

**底面** 中央がやや突出する。

**遺物と出土状況** 底面から円礫が出土している他は、遺物は出土しなかった。

**所見** 出土遺物もなく、時期・機能は明らかにできなかった。

1区6号土坑 (付図3 第18図)

**位置** 1c区1-99-A-20G

**重複** なし

**形状** 楕円形

**規模** 長軸1.10m 短軸0.90m 残存壁高0.16m

**長軸方位** N-82°-W

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 層は暗褐色土、中位は厚さ5cmの浅間Bテフラ層、上層は浅間Bテフラ塊を含む褐色土で埋まっていた。南西部の楕円形土坑には礫が出土したが、その下層にも浅間B軽石が入り込んでいた。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 深くなった楕円形土坑の底面から6~9cmほど浮いたところで擦石2点が、東側の浅いところで敲石1点が出土した。出土遺物はこの石器3点のみである。

**所見** 谷の北縁斜面の上位で検出された。南縁では調査時に湧水が見られた。出土遺物もなく、詳細な時期や機能は不明であるが、浅間Bテフラの堆積は乱れていることから、テフラ降下以降の土坑と考えられる。

第4章 1区の遺構と遺物

1区11号土坑 (付図3 第18図 PL11)

位置 1c区2-8-Q-7G

重複 なし

形状 楕円形

規模 長軸0.95m以上 短軸0.79m

残存壁高0.14m

長軸方位 N-10°-W

断面形 浅い皿形

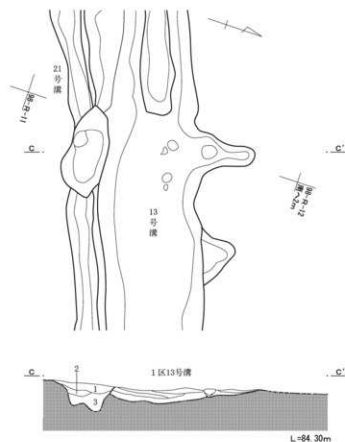
**埋没土** ローム粒・塊を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**底面** はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 谷の北傾斜面の上位で検出された。出土遺物がなく詳細な時期を想定するのは難しいが、埋没土の特徴から中世以降の土坑と考えたい。

1区1号土坑

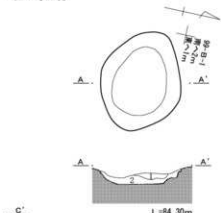


1区1号土坑C-C'

1号土坑

1. 暗黄褐色土 やや硬く締まり悪い。粘性弱い。ローム粒子やや多く、シルト質のローム塊(長辺1.0~3.0cmの扁平なもの)わずかに含む。3層より黄味が強い。
2. 黄褐色土 やや軟らかく、やや締まり良い。粘性やや強いシルト質のローム塊(長辺1.0cm程度の塊)の底在層。
3. 暗黄褐色土 やや硬く、やや締まり悪い。1層よりやや軟らかい。シルト質のローム塊やや多く含む。

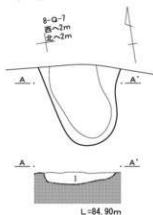
1区6号土坑



1区6号土坑A-A'

1. 暗灰色土 やや軟らかい、やや締まり悪い。直径3.0~10.0mmの浅階テフラの紫色灰と軽石をわずかに含む。
2. 淡褐色砂質土 塊状軽石を主体とし、塊状の暗灰色土をまだらに混じる。やや軟らかく、締まり悪い。

1区11号土坑



1区11号土坑A-A'

1. 暗黄褐色土 締まりやや悪い。ローム粒子。直径5.0mm内外のローム塊わずかに含む。

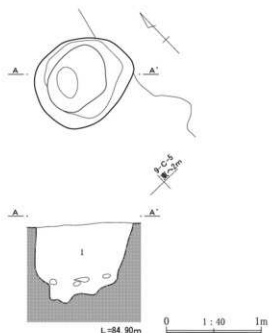


第18図 1区1号・6号・11号土坑

## (3)井戸

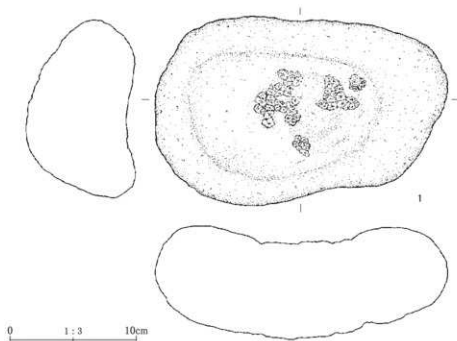
## 1区1号井戸

(付図3 第19図 PL11・148 遺物観察表P610)

**位置** 1c区2-9-B-5G**重複** 1区2号住居より新しい。**形状** 楕円形**規模** 長軸1.08m 短軸0.92m 残存壁高0.86m**長軸方位** N-60°-W**断面形** 筒形**埋没土** 浅間C軽石粒、榛名山二ツ岳火山灰塊を含む暗褐色砂質土で埋まっていた。**底面** 底面西部に凹みがある。**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片13点、石製品1点が出土した。この他に埋土下層には直径10cm前後の礫が混在していた。土師器は小破片で混入と推定される。石製品は大型の多孔石あるいは凹石(第19図1)である。**所見** 出土遺物が少なく詳細な時期を想定するのは難しいが、大型凹石は中世以降の石製品と推定される。

1区1号井戸A-A'

1. 暗褐色砂質土。As-C限じる。FA塊(長径6.0cmほど)1点を限じる。



第19図 1区1号井戸と出土遺物

#### 第4章 1区の遺構と遺物

##### (4) 池状遺構

1区1号池状遺構(付図2 第20～22図 PL12・148・149  
遺物観察表P557・605・610)

位置 1b区1-98-1-K-16G

1-98-1-J-17G

重複 1～3号溝より新しい。 形状 長方形

規模 長軸7.67m 短軸4.04m 残存壁高0.51m

長軸方位 N-59°-E 断面形 箱形

埋没土 最上層はローム層、上層は黒色土塊、灰褐色砂質土、灰褐色粘質土塊を含む灰褐色土で、下層は黒色土塊、白色シルト塊を含む灰褐色土で埋まっていた。

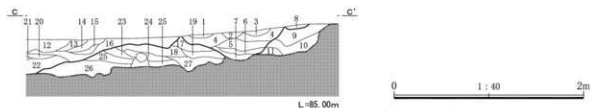
底面 はほぼ平坦であるが、東壁沿いと南壁中央部はやや凹んでいる。

遺物と出土状況 埋没土中から陶磁器33点・軟質土器11点、石器・石製品6点、土師器11点、須恵器5

点等が出土した。このうち磁器5点、陶器1点、軟質土器1点、砥石4点、石鉢1点、石盤1点を図化した(第22図)。縄文土器3点が出土したが遺構外として第57図に掲載した。

所見 谷内に掘られた大型の方形の土坑である。規模の一定した土坑が2基並んでいる。「池状遺構」と名称を付したが、これらの遺構の機能・用途は不明と言わざるを得ない。埋没土下層は自然堆積の様相で、上層はローム塊を主体とすることから掘削土の一括埋填の可能性が高いと思われる。時期は出土遺物から現代と考えられる。

なお1号池状遺構の南側には方形の掘り込みの痕跡がある。規模や深さ、形態は本池状遺構とは異なるので遺構名はつけなかったが、方向に共通性があり、何らかの関連があった可能性があるが、重複や複乱が著しく明確にすることはできなかった。



1区1号池状遺構南端C-C'

1～7、2号溝

8、1号溝

9～11、3号溝

1号池状遺構

12. 濃い黄褐色～暗褐色(10YR3/3～3/3) 白色軽石粒(直径1.0～5.0mmほど、FAバミス)均一に含む。硬く締まる。

13. 暗褐色土(10YR3/3) シルト主体。ローム粒～塊(直径1.0～3.0cmほど)少量、白色軽石粒(直径1.0mmほど、FAバミス?)含む。14層の砂質土層じる。硬く締まる。

14. 暗褐色砂質土(10YR3/3) 白色軽石粒(直径1.0mmほど)も少量含むが、砂質土との判別困難。硬く締まる。

15. 濃い黄褐色～暗褐色(10YR3/4～4/4) ローム主体。14層の土も混じる。硬く締まる。

16. 暗褐色土(10YR3/4、南側)～黒褐色土(10YR3/2、北側)シルト 10YR3/4土はやや砂質。白色粒子(直径1.0mmほど)、ローム塊(長径3.0～5.0cmほど)少量含む。硬く締まる。

17. 濃い黄褐色土(10YR6/4) 黒褐色土(10YR3/1)土混じり部分があるが、ほとんど混じりは認められない。硬く締まる。

18. 17層に同じ。19層が挟在する為、分離した。

19. 濃い黄褐色砂粒(10YR4/3) 直径0.5mm以下～2.0mmほど。ローム粒(直径1.0cmほど)均一に含む。硬く締まる。

20. 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒子(直径1.0～1.5cmほど、FAバミス)含む。硬く締まる。

21. 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒子(直径1.0～4.0cmほど、FAバミス?)少量含む。硬く締まる。

22. 暗褐色砂質土(10YR3/3) 黒褐色土～塊(10YR2/2、長径2.5～4.0cmほど)少量含む。ローム粒～塊(直径0.5～2.5cmほど)少量含む。

23. 黒褐色砂質土(10YR2/2～2/3) 硬く締まる。

24. 暗褐色砂粒(10YR3/3) ローム土混じる。また粒～塊状(直径2.5cmほど)にも含む。硬く締まる。

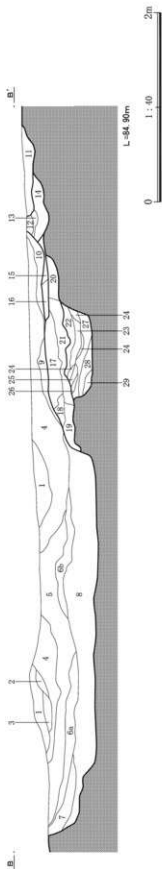
25. 暗褐色土(10YR3/2) ローム土混じり黄色味帯びる部分もある。下方にローム塊も。

26. 黒褐色砂粒(10YR3/1、直径0.5～1.0mmほど)と黒褐色土(10YR3/2、シルト質)の混土。上方は10YR3/1、下方は10YR3/2多い。ローム土混じり。また粒～塊状(直径0.3～4.0cmほど)にも含む。硬く締まる。

27. 19層に似た土。下方にローム土多量混じる。

第20図 1区1号池状遺構土層断面(1)

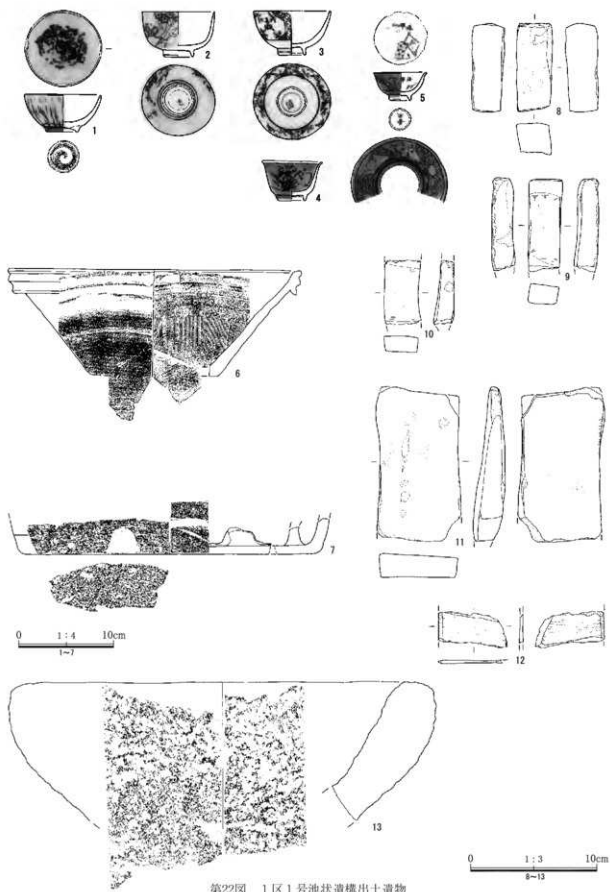




1区1号池遺構0-D'

1. 明褐色土 ローム土が主体の上。
2. 淡褐色土 3層より白色層の心。ローム土が主体の上。
3. 淡褐色土 ローム土が主体の上。
4. 淡褐色土 断面の断面による黄色(暗褐色)が認められる。ローム土が主体の上。
5. 灰褐色土 砂質土と灰質土が交互に認められる。白色層を含む。黒色土塊(直径1.0~10.0cmほど)を含む。
6. 灰褐色土 粘質土の土主体。黒色土塊(直径1.0~2.0cmほど、5層のものと同含む)。白色層石を含む。白色シルト(直径0.5~2.0cmほど、下の黒山より少量含む)とシルト(直径0.5~2.0cmほど、下の黒山より少量含む)を含む。
7. 灰褐色土 上部より砂質の土質が、5層ほどではない。黒色土塊(直径1.0~2.0cmほど、5層のものと同含む)。白色層石を含む。白色シルト(直径1.0~3.0cmほど、下の黒山より少量含む)。
8. 灰褐色土 砂質土主体だが、粘性のある土も少量含む。砂質土の部分は層状状相により赤味帯びる。
9. 灰褐色土 黒色土塊(直径1.0~10.0cmほど、6層より多く含む)。白色シルト塊(直径1.0~7.0cmほど、6層より多く含む、下の黒山土)。植物の根痕跡が認められる。やや粘質。
10. 灰褐色土 黒色土塊(直径1.0~8層より灰色強く明るい色塊)。
11. 粉色土 砂質。粘土のある土が混じり、ローム殻を含む部分があり、その部分は灰色味帯びる。
12. 灰褐色土 11層に似るが砂質の土や多く含む。ローム殻を少量含む。その部分は黄色味帯びる。
13. 灰褐色土 11層に似た土。ローム殻を少量含む黄色味帯びる。
14. 黒色~灰褐色土 砂質の土。粘性のある土層の上。ローム殻~塊(直径1.0cmほど)を含む部分は灰色味帯びる(黄褐色土)。

- 8号溝
15. 明褐色土 粘性のある土質の上。
16. 暗褐色土 砂質の土主体。15層に似られる。
17. 黒褐色土(107K2/2) 砂質の部分あり。白色層石(直径1.0~3.0cmほど、15層ほど、15層より多く含む)。
18. 黒褐色土(107K2/1) 下層より多く含む。
19. 黒褐色土(107K2/2) 砂質の部分あり。白色層石(直径1.0cmほど、15層ほど、15層より多く含む)。
20. 灰褐色土(107K2/3) 直径1.0cm以下の砂粒。ローム殻(直径0.5~1.5cmほど)少量含む。黒く締まる。
21. 黒褐色土(107K2/2) 20層より黒色味帯び、部分的に黒色シルト(107K2/1)がややブロック状を含む。ローム殻(直径0.5~1.5cmほど)少量含む。黒く締まる。
22. 21層に似る。
23. 暗褐色砂粒(107K2/3) 直径0.5mmほど主体。部分的にシルトを含む。ローム土を塊~塊状(直径0.5~1.0cmほど)に少量含む。黒く締まる。
24. 灰褐色シルト(107K2/2) 黒く締まる。
25. 黒褐色土(107K2/1) 砂質の部分がある。A~B区(赤褐色)認められる。
26. 土に多い黄褐色土(107K5/2~4/3) やや粘質。
27. 明褐色土(107K5/6) 黒山ローム土主体。粘土はほとんどなし。北に行くに従い砂粒(直径1.0cmほど)を含む。黒く締まる。
28. 黒褐色土(107K2/1) 直径0.5mm以下の黒い砂粒。ローム殻(直径0.5cmほど)部分的に多く含む。
29. 28層の砂粒。ローム殻のまじり度が28層より少なく、やや黒味帯びる。また黒色土塊(107K1/7)粘土10.0cmほど含む。



第22図 1区1号池状遺構出土遺物

1区2号池状遺構(付図2 第23~26図 PL12・13・149・150遺物観察表P.557・610・618)

位置 1b区1-98-K-16G

1-98-J・K-17・18G

重複 4号溝と重複するが、埋没土の観察や、杭列の共通性から同時期と推定される。7号溝より古い。

形状 長方形

規模 長軸7.78m 短軸4.41m 残存壁高0.62m

長軸方位 N-59°-E

断面形 箱形

埋没土 最上層はロームを含む灰褐色土、上層は白色軽石、黒色土塊を含む灰褐色砂質土で、下層は黒色土塊を含む暗灰褐色土で埋まっていた。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から近現代陶磁器51点、軟質土器17点、石器・石製品9点、土師器32点、縄文土器3点、瓦3点、鉄製品2点(不明・雁口)、ガラス瓶21点が出土した。このうち磁器14点、陶器1点、土製円盤1点、砥石3点、石盤1点、薬瓶13点、火打ち石1点、ガラス瓶13点を図化した(第25-26図)。

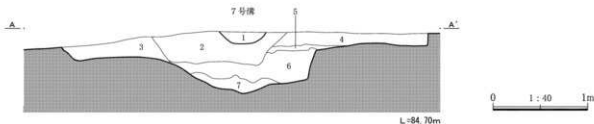
所見 谷内に掘られた大型の方形の土坑である。1号池状遺構と同規模で、同一規格の土坑が2基並んでいる。「池状遺構」と名称を付したが、これらの遺構の機能・用途は判然としない。埋没土下層は自然堆積の様相で、上層はローム塊を主体としているこ

とから掘削土の一括埋填の可能性が高いと思われる。時期は出土遺物から現代と考えられる。

本池状遺構の底面には杭列が残されている。重複する4号溝内にも同様な木杭列が残り、壁面には護岸設備が設置されている。これらの共通性から本池状遺構は4号溝と同時期であり、水路(4号溝)を伴う水利施設とも推定される。

遺物は埋没土内に混在して出土した。陶磁器類やガラス瓶、砥石等の生活用品が主体を占め、廃棄されたものと考えられる。1号池状遺構とともに陶磁器には、第2次大戦中に生産されたことを示す生産地番号が付された碗や湯飲み、内面に「海軍・・・」と日章旗の上絵がみられる杯が含まれ、現代史を生々しく感じさせる。また、ガラス瓶は薬・染料・インク等の容器で、これも生活史研究においては貴重な資料である。

また、図示はしなかったが、ボタン状の磁器製遺物が出土した。(P.L149) 直径10mm、厚さ3mmで縁は丸く、中央部はやや膨らんでいる。これは絹織物関連の機械の部品と推定されるが、詳細は明らかにできなかった。



1区2号池状遺構・7号溝A-A'

7号溝

1. 黄褐色土(砂質の土面じり。2号池・7号溝の埋没土と同)。灰褐色シルト(灰色味強い。4層に似るがシルトっぽい)の混土。鉄分沈着粒状を含む。

2号池状遺構

2. 暗褐色土 白色軽石含。3層との境はボンヤリしており明確ではない。7号溝との間にガラス片含む。

3. 灰褐色土 ローム土少量混じる。白色軽石含む。

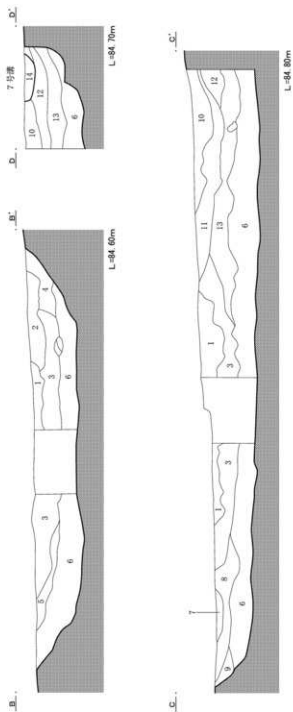
4. 灰褐色土(灰色味強い) 白色軽石少量含。鉄分沈着粒状を含む。6層には灰褐色土塊(長径7.0cmほど。変性したローム土か)1点のみ含む。

5. 暗褐色土 ローム粒〜塊(直径3.0cmほど)含。白色シルト塊(下の地山土。長径10.0cmほど)1点含む。

6. 黒褐色土 砂質の土。泥質の土ラミナ状に含む。2号池の6層とは感じが若干異なる。雑物含む。

7. 暗灰褐色砂質土 砂が主体。

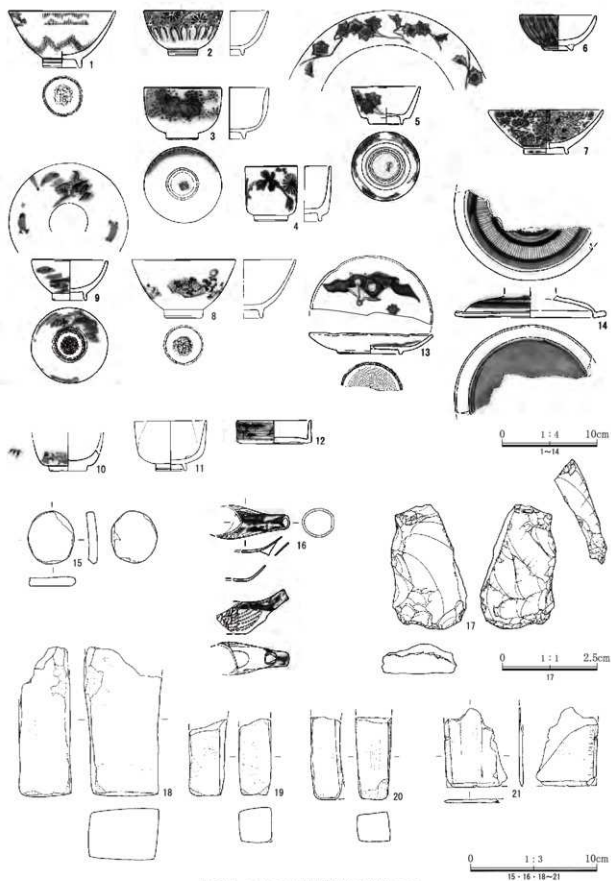
第23図 1区2号池状遺構土層断面(1)



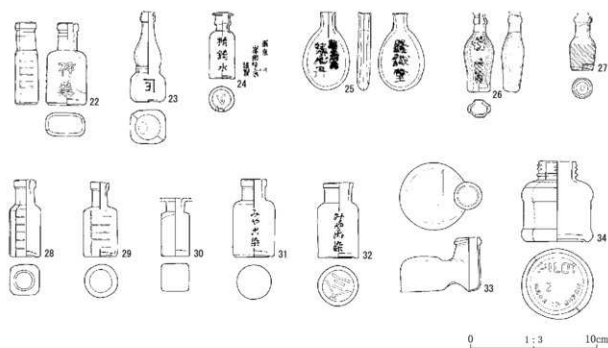
1区2号池状遺構0-10' C-C'・D-D'

1. 灰褐色土 ローム土少量混入。白色軽石含む。  
 2. 灰褐色土 ローム土混入。白色軽石含む(少量)。  
 3. 暗褐色～黄褐色(ローム土)の混入する部分。土 砂質の土。炭質の土。炭質の土がラミナ状に認められる。白色軽石含む。黒色土塊(直径1.0cmほど)少量含む。部分花崗岩状に認められる。  
 4. 3層に混入するが、ローム土の混入りが多く黄色味帯びる。またローム土を和～層状にも含む(直径4.0cmほど)。暗褐色土块層の上が混入する。白色シルト(片層の通山土)を覆状(直径5.0cmほど)にごく少量(1片)含む。  
 5. 暗褐色土 砂質の土。炭質の土がラミナ状に認められる。ローム土少量混入。植物含む。  
 6. 暗褐色土 黒色土塊(直径1.0～5.0cmほど)含む。植物含む。1号池の8層より形塊を帯び、白色シルトは含まない。やや設置の上。  
 7. 3層に似る(暗褐色土)が、ローム土は混じらない。白色軽石含む。植物が薄く層状に帯びており、そこで8層と分離。  
 8. 暗褐色土 3層と6層の間の色調。白色軽石少量含む。  
 9. 暗褐色土 黄色味帯びた砂質土。灰色味帯びた炭質土がラミナ状に認められる。植物含む。  
 10. 灰褐色土 1層に混入するがやや黒味帯びる。  
 11. 灰褐色土 黄褐色土 粘灰を有する灰褐色土。ローム土主体の黄褐色土。黒褐色土の混入。黒褐色土を有する灰褐色土主体。部分花崗岩状に認められ、白色軽石含む。  
 12. 灰褐色土 ローム土主体の黄褐色土を含む。ローム土質で、白色軽石含む。  
 13. 暗褐色土 砂質の土と炭質の土をラミナ状に含む。灰褐色土塊(直径1.5～10.0cmほど)。1・3層の土に混入する。白色軽石含む。部分花崗岩状に認められる。  
 14. 黄褐色土 砂質の土を混入する。

第24図 1区1号池状遺構土層断面(2)



第25図 1区2号池状遺構出土遺物(1)



第26図 1区2号池状遺構出土遺物(2)

(5)耕作痕跡

1区1号耕作痕跡

(付図2 第2・50図 PL13 遺物観察表P.562)

位置 1a区1-98-S-R-15・16G  
1-98-R-17G

重複 なし

形状 南北方向の不定型な9条の小溝が東西に、東西方向の2条が南北に並ぶ。それぞれは小さな掘削痕跡の集合で、凹凸・蛇行が著しい。全体の形状は長方形である。

規模 全体：長軸8.08m 短軸4.55m

最大溝：幅0.31～0.52m 長さ4.22m、

残存深度0.15m 方位N-46°-W

断面形 不定形。一つ一つの掘削痕は明確でないが、先端の尖った農具で斜めに突き刺した断面形状の小孔が連続している。

埋没土 浅間Bテフラ塊と地山の黒褐色粘質土塊の混土で埋まっていた。底面 凹凸が著しい。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器高坏脚部破片(第50図11)が出土しているが、混入である。

所見 浅間Bテフラ被災の耕地を復旧するための耕

作痕跡と考えられる。掘削は不定形であり、底面の凹凸は個々の掘削痕をとどめている。また埋没土は浅間Bテフラのブロックと地山黒褐色土の混土であり、下層の黒褐色土を表層に出すための天地返しがおこなわれたものと推定される。本耕作痕跡では小溝が列状にならぶが、形態が乱れていること、埋没土が塊状の混土であることから、畑の畝間溝でないとは判断した。天地返し作業が列状におこなわれた痕跡と考えられる。

この耕作痕跡は下層の浅間Bテフラ下水田の地割りの一角の延長線上にあり、掘削痕跡の小溝の方向も地割りを意識しているように見える。本耕作痕跡は、浅間Bテフラ被災前の地割りに沿った農作業の痕跡と推定される。

1区2号耕作痕跡(付図2 第27図 PL13)

位置 1a区1-98-O-Q-17G  
1-98-O-P-16G

重複 なし

形状 不定型な凹凸が東西方向に広がっている。それぞれは小さな掘削痕跡の集合で、凹凸が著しい。

全体の形状は不定形状である。

**規模** 全体：長軸8.40m 短軸3.50m

**断面形** 不定形

**埋没土** 浅間Bテフラ塊と地山の黒褐色粘質土塊の混土で埋まっていた。 **底面** 凹凸が著しい。

**遺物と出土状況** 埋没土中から軟質土器鍋胴部破片が出土しているが、小片のため実測できなかった。

**所見** 浅間Bテフラ被災の耕地を復旧するための耕作痕跡と考えられる。掘削は不定形であり、底面の凹凸は個々の掘削痕をとどめている。また埋没土は浅間Bテフラのブロックと地山黒褐色土の混土であり、下層の黒褐色土を表層に出すための天地返しがおこなわれたものと推定される。

本耕作痕跡は1号耕作痕跡と異なり、列状ではなく不定形な掘削が全体としておこなわれていたが、全体としての痕跡は1号耕作痕跡の東側に隣接して

いる。1号耕作痕跡は下層の浅間Bテフラ下水田の地割りに沿った農作業の痕跡と推定されることから、2号耕作痕跡も同様な農作業の結果、残されたものと考えたい。

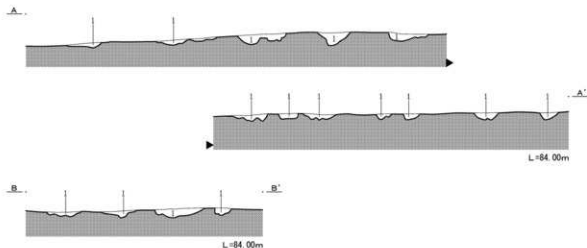
#### (6) 1面の遺構外出土遺物

(第28回 PL151 遺物観察表P.558・562・610・617)

ここでは1区1面で出土した遺物と、層位が確定できなかった表探遺物を報告する。出土遺物数は表2(P.553)に示すとおりである。なお、本面で出土した遺物でも、古墳時代の土師器・須恵器は本章第4節第50図に、縄文土器および縄文時代の石器は本章第5節第57～59図にまとめて掲載した。

1a区では土師器・須恵器7点、中世～現代土器1点、石器類3点が出土した。いずれも小片であったため、図化はできなかった。

#### 1区1号耕作痕跡



#### 1区2号耕作痕跡



#### 1区1・2号耕作痕跡

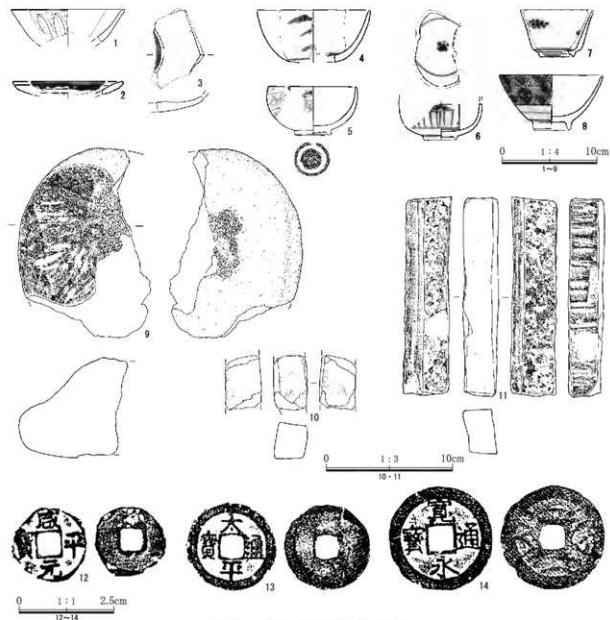
1. 黄褐色砂粒(Aa-B)塊を挟む黒褐色土 軟分の比量により赤味帯びる部分もある。硬く締まる。

第27図 1区1号・2号耕作痕跡土層断面

1b区では縄文土器1点、土師器・須恵器50点、中世～現代土器23点、石器類5点が出土した。土師器・須恵器はいずれも小片であった。そのうち比較的大型の破片である土師器短頸壺(第50図16)を図化した。混入の土器である。

1c区では最も多くの遺物が出土した。その数は縄文土器2点、土師器・須恵器1868点、中世～現代土器80点、石器類52点であった。そのうち図化可能な遺物を器種ごとに選択して陶磁器6点を第28図に土師器4点を第50図に掲載した。

1面出土遺物として図化したのは、陶磁器8点、砥石2点、大型凹石1点である。陶磁器のなかには13世紀と見られる龍泉窯系の鍋連弁椀(第28図1)や15～16世紀の古瀬戸または大瀬戸緑釉皿(2)がある。3～7は17世紀～19世紀にかけての美濃系あるいは肥前の碗である。また近現代の瀬戸美濃系磁器碗(8)もあり、中世から現代の陶磁器が混在して出土している。石製品は大型の凹石(第28図9)、砥石(10・11)を図化した。銭貨3点(12～14)はそれぞれが単独で出土した。



第28図 1区1面の遺構外出土遺物



## 3. 2面(浅間Bテフラ直下)の遺構と遺物

## (1)水田

## 1区浅間Bテフラ下水田

(付図2 第29・30図 PL.14・15・51 遺物調査表P.508)

1 a区の南西部、1-98-P-S-12~14G、1-98-T-10~13G、1-99-A~D-9~13Gにわたって、浅間Bテフラに埋まった水田面が検出された。水田面を覆っていた浅間Bテフラは1108(天仁元)年に浅間山が噴火した際に噴出したテフラで、遺跡のある赤城山南麓地域では5~10cmの堆積がある。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1区では、谷の中に堆積が残り、当時の水田面を保存していた。

しかし、発掘区内の浅間Bテフラの残存状況は一律ではなく、1 b区では東壁付近の一部に掘削痕底部に入り込む浅間B軽石を確認したが(第10図)、テフラを介して遺構を確認できるような状況ではなかった。1 c区では、台地斜面の裾部に付図2に示した範囲で、厚さ約5cmの浅間Bテフラが堆積していた。軽石層を除去し直下遺構の検出作業をおこなったが、水田面の広がりには確認できなかった。

浅間Bテフラの残存状態が最も良かったのは、1 a区北端で、厚さ10cmでテフラ層が残存していた。南壁付近では台地南縁にあたるため、一部に5cmほどの堆積があったのみである。また軽石層上面は後世の耕作行為によると考えられる土層攪乱が及んでおり、全面的に軽石が水田面を覆っている状態ではなかった。

1 a区で検出された水田区画は、全部で14面である。田面は谷の方向にあわせて格子状に区画されており、形態はほぼ長方形である。全形が把握できたのは6、7、9、10、11の5区画であった。各水田面の規模は、6が19.66㎡、7が11.02㎡、9が26.39㎡、10が22.81㎡、11が15.70㎡で、大小が混在している。区画2や4はアゼが確認できなかった可能性もあることから全形がわからないが、それぞれ最大78.13㎡、106.38㎡ほどの面積になる可能性もある。谷内の傾斜に合わせて大小の区画がされているので

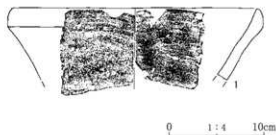
あろう。

アゼはほとんど高さ1~2cmが残存しているのみで、かろうじて水田区画を残している状態であった。1-98-P-12~14Gの南北アゼは高さ5cmでアゼの形状を比較的保っていた。いずれのアゼにも水口は検出されなかった。水田耕作土は夾雑物の少ない黒色粘質土である。

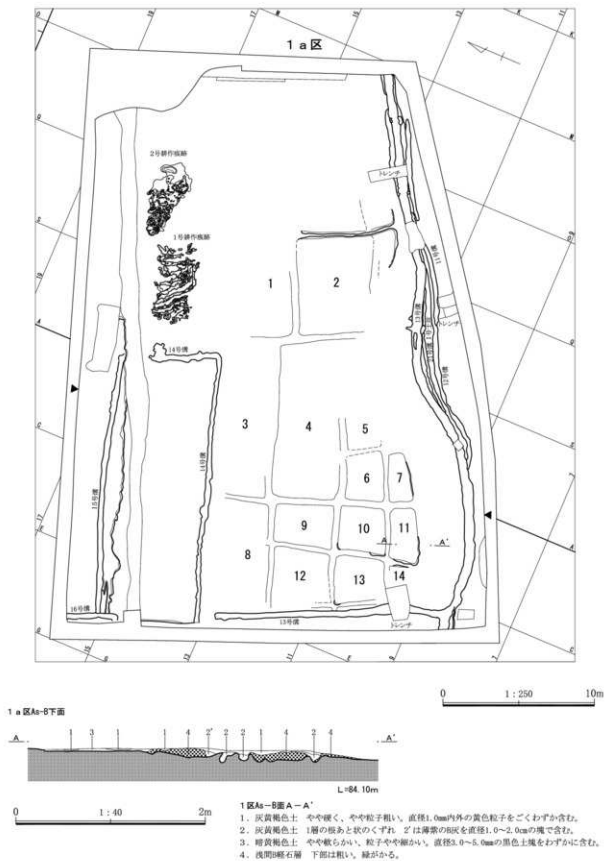
給配水方法は不明である。水田面に伴う浅間Bテフラで埋没した水路は発掘区内では検出されなかった。南側の台地縁辺の11~13号溝や21号溝や、アゼ方向に沿っている14~16号溝はいずれも浅間Bテフラより新しい時期に埋没している。しかし、谷の最高位に水路を配置する技術は、古墳時代から行われており、低地南縁の11~13号溝や21号溝が水田に伴う時期から使われていた可能性が高いであろう。

一方、水田面北側に検出された耕作痕跡は浅間Bテフラ降下後の復旧痕跡である。この復旧痕跡の範囲や列方向は浅間Bテフラ下水田のアゼ方向に近似しており、テフラ被災後の復旧や開発が同地割の中でおこなわれたことを推定させる。これらの復旧・再開発の所作がかろうじて及ばなかった範囲で、浅間Bテフラ直下の水田面が残されていたのであろう。

耕作土に混在して土師器154点、須恵器2点、石器類1点、軟質土器1点、近現代置産破片1点が出土した。最も時期の近い軟質土器すり鉢(第29図1)を図示したが、これも混入と見られる。水田面の時期を示す出土状態で出土した土器はなかった。



第29図 1区浅間Bテフラ下水田出土遺物



第30図 1区浅間Bテフラ下水田

## (2) 土坑

## 1区2号土坑

(付図3 第31・32図 PL15・151・152 遺物観察表P.610)

位置 1c区1-98-S-20G

2-8-S-1G

重複 なし 形状 不整楕円形

規模 長軸1.83m 短軸0.98m

残存壁高0.12~0.39m

長軸方位 N-67°-E

断面形 浅い箱形。南西部に楕円形の筒状に深くなったところがあった。

埋没土 下層は暗褐色土、中位は厚さ5cmの浅間Bテフラ層、上層は浅間Bテフラ塊を含む褐灰色土で埋まっていた。南西部の楕円形土坑には礫が出土したが、その下層にも浅間B軽石が入り込んでいた。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 深くなった楕円形土坑の底面から6~9cmほど浮いたところで擦石2点が、東側の浅いところで敲石1点が出土した。出土遺物はこの石器3点のみである。

所見 谷の北緩斜面の上位で検出された。南縁では調査時に湧水が見られた。時期・機能は不明である。

## 1区3号土坑 (付図3 第31図 PL15)

位置 1c区2-9-C-1G

重複 なし

形状 楕円形

規模 長軸0.52m 短軸0.44m 残存壁高0.21m

長軸方位 N-14°-W

断面形 浅い箱形。南西部に楕円形の筒状に深くなったところがあった。

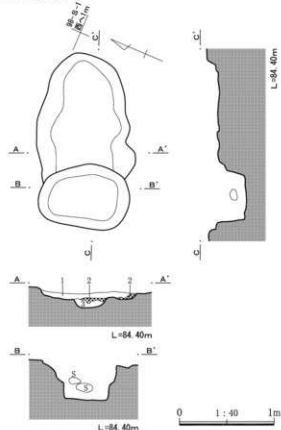
埋没土 下層は厚さ10cmの浅間Bテフラ層、上層は黄褐色砂質土で埋まっていた。

底面 ボール状の緩やかな曲面を呈する。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 谷の北緩斜面の上位で検出された。時期・機能ともに不明である。

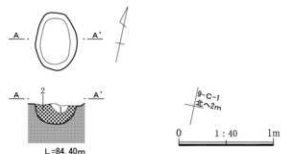
## 1区2号土坑



## 1区2号土坑A-A'

1. 褐灰色土 やや軟らかい。褐灰色土塊と浅間B軽石塊の混入を主体とし、直径10.0~20.0mmの黒褐色土塊(地山類似)直径5.0mm内外の紫色灰をわずかに含む。
2. 褐灰色砂 浅間B軽石の堆積層。直径2.0~5.0mmの紫色灰と黒褐色土塊をごくわずかに含む。
3. 暗褐色土 やや軟らかい。締まりやや良い。粒子の細かい土塊。浅間B軽石をごくわずかに含む。

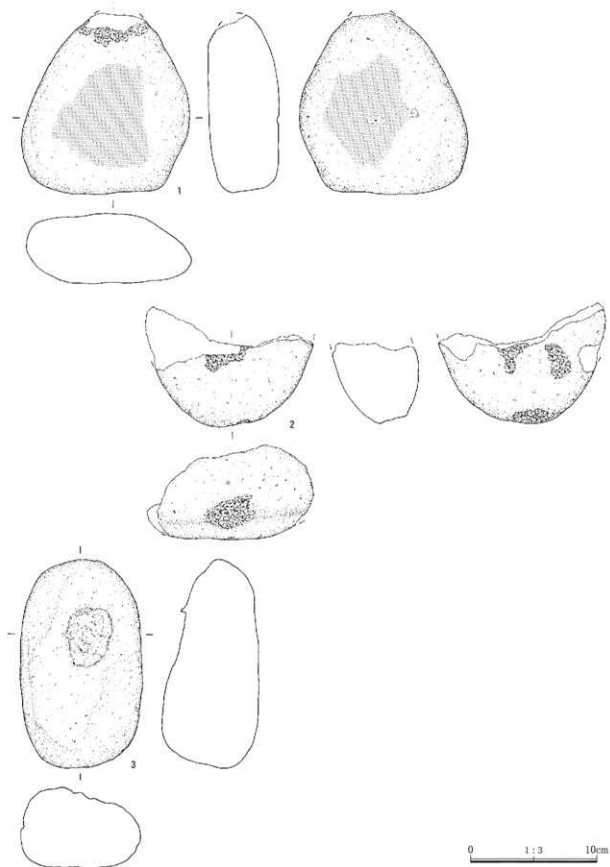
## 1区3号土坑



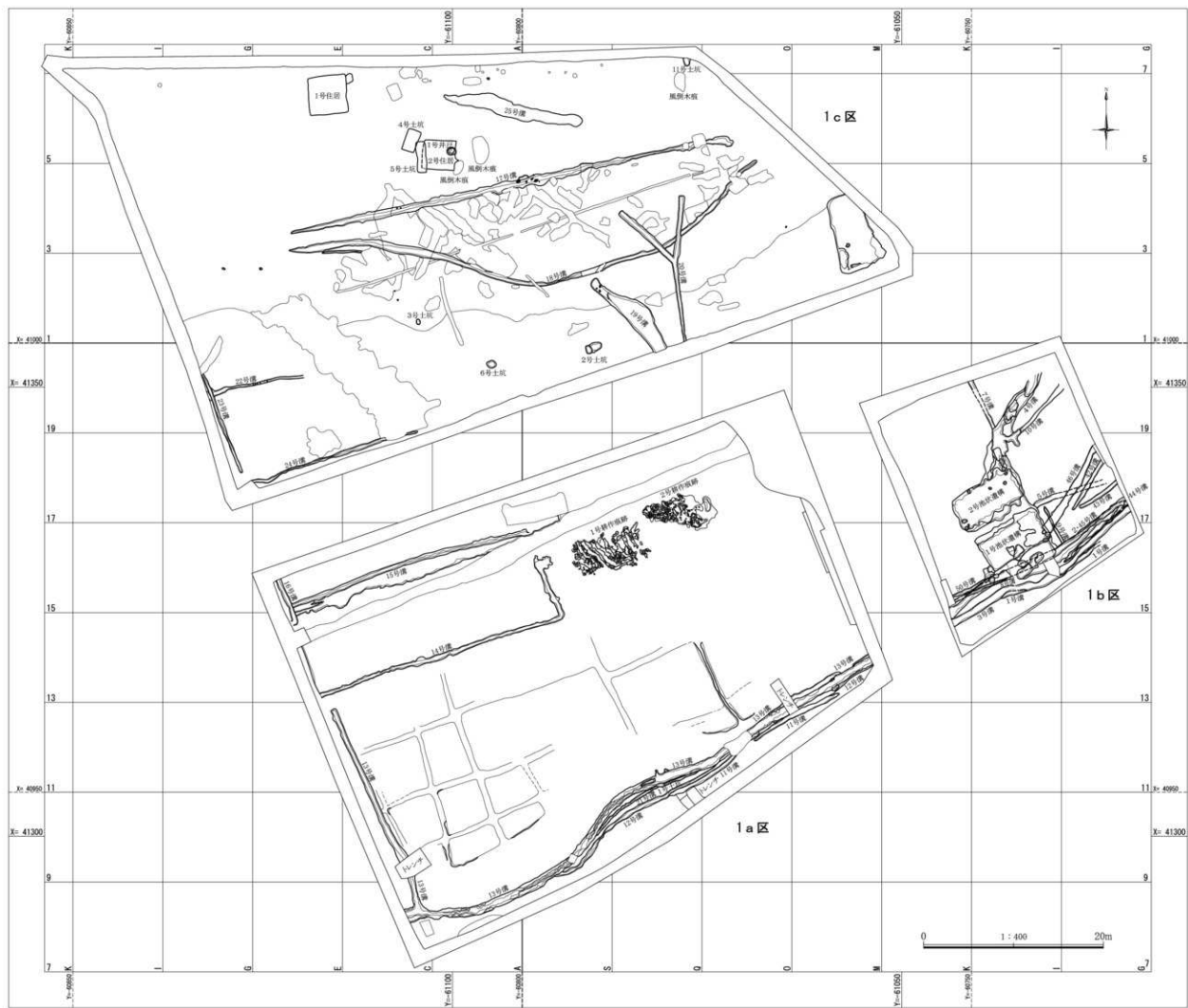
## 1区3号土坑A-A'

1. 黄褐色砂質土 直径1.0~4.0mmほどの粒を主体とし2層より全体的に粗い。
2. As-B層 概灰~赤褐色を呈し、直径0.5mm以下の粒が主体。直径1.0mm程度の粒もある。

第31図 1区2号・3号土坑



第32図 1区2号土坑出土遺物



(破損は旧程度)

第33図 1区1・2面全体図

#### 4. 3面(浅間C混土中)の遺構と遺物

##### (3) 2面の遺構外出土遺物

(第50図 PL157 遺物観察表P.561・562)

ここでは1区2面で出土した遺物を報告する。出土遺物数は表欄2(P.553)に示すとおりである。浅間Bテフラ直下に限定できる遺物は出土しなかった。いずれも混入の遺物である。なお、古墳時代土師器は本章第4節(第50図)、縄文土器および縄文時代の石器は本章第7節(第57～59図)にまとめて掲載した。

1a区では最も多くの遺物が出土した。出土数は縄文土器1点、土師器351点、須恵器6点、中世～現代土器10点、石器類8点である。いずれも小片であった。特に多量の土師器は北側台地にある古墳時代集落からの投棄遺物が混入したものであろう。比較的大型の坏形土器2点(第50図6・7)を図示した。

1b区では浅間Bテフラの堆積がなかったことから2面の調査を割愛した。したがってこの層位での遺構外出土遺物はない。

1c区では土師器74点、中世～現代土器10点、石器類8点が出土した。いずれも小片であったが、土師器は北側台地にある古墳時代集落からの投棄遺物が混入したものであろう。そのうち図化可能な比較的大型の土師器坏と土師器瓶を第50図(3・21)に図示した。

#### 4. 3面(浅間C混土中)の遺構と遺物

##### (1) 溝

1区25号溝(付図5 第34図 PL17)

位置 1c区2-8-S・T-5・6G  
2-9-A・B-6G

重複 南側に50号溝が重複するが、新旧関係は不明である。

形状 北台地縁に沿った北西-南東方向の溝。走向は直線である。遺構確認面では西端は2-9-B-6グリッド内で、東端は2-8-S-5グリッドで立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.01m高い。

規模 調査長 15.82m 最大幅 1.60m

最小幅 0.73m 深さ 0.27m

断面形 浅いU字形

埋没土 ローム粒を多く含み、硬く締まった褐色砂質土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片107点、須恵器破片2点、石器類2点が出土した。いずれも小破片で図示できる遺物はなかった。

所見 1区谷内の遺構の中では最も高位にあり、住居群と隣接する立地を示す。確認面は関東ローム層上面であり3面の遺構とは断定できないが、埋没土が類似していること、古墳時代後期遺物が多数出土していることから、本面で報告した。

1区29号溝(付図4 第34図 PL17)

位置 1a区1-98-T-10G

1-98-Q~T-11G

1-98-P・Q-12G

1-99-B~D-9G

1-99-A~C-10G

重複 1-99-B-9グリッド内で南北方向の溝と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 谷の南縁、台地縁に掘られた北東-南西方向の溝。中央部でやや北に影らんで蛇行する。西端は発掘区域外に伸びている。東端は1-98-P-12グリッド内で確認できなくなる。底面にはやや凹凸があり、その標高は東端が西端より0.39m高い。

規模 調査長 40.37m 最大幅 1.07m

最小幅 0.16m 深さ 0.22m

断面形 浅いU字形

埋没土 上層は浅間C軽石を含む黒色土、下層は灰褐色砂質土で埋まっていた。

遺物と出土状況 土師器甕・坏破片が7点出土した。いずれも小破片である。また本溝埋没土中の破片と1-99-A-10グリッド内の溝脇の地山出土の樽式系土器(第52図)が接合しているが、出土層位から溝より古い遺物である。

所見 谷の南斜面下で検出された。水田域の外縁部に掘られた用水路と推定される。

#### 第4章 1区の遺構と遺物

1区33号溝 (付図4 第34図 PL17)

位置 1a区1-98-S-10・11G  
1-98-T-10G

重複 なし

形状 谷の南縁、台地縁辺に掘られた北東-南西方向の溝。中央部でやや北に膨らんで蛇行する。この膨らみは北側にある29号溝と似ており、地形に即したものであろう。西端は1-99-A-10杭周辺で、東端は1-98-S-11グリッド内で確認できなくなる。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.09m高い。

規模 調査長 12.27m 最大幅 0.93m  
最小幅 0.42m 深さ 0.04m

断面形 浅い皿形

埋没土 灰褐色シルト粒や黒色砂質土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 谷の南斜面下、水田域の外縁部に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。並行して34号溝、36号溝があることから、畝の畝間溝の可能性も考えられるが、詳細を明らかにすることはできなかった。

1区36A号溝 (付図4 第34図 PL17・18)

位置 1a区1-98-S-11G  
1-98-T-10・11G  
1-99-A-10G

重複 なし

形状 谷の南縁、台地縁辺に掘られた北東-南西方向の溝。中央部でやや北に膨らんで蛇行する。この膨らみは北側にある29号溝や南側の33号・34号溝と似ており、地形に即したものであろう。西端は1-99-A-10グリッド内で、東端は1-98-S-11グリッド内で確認できなくなる。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.19m高い。

規模 調査長 8.84m 最大幅 0.59m  
最小幅 0.17m 深さ 0.05m

断面形 浅い皿形

埋没土 浅間C軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 谷の南斜面下、水田域の外縁部に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。並行して33号溝、36号溝があることから、畝の畝間溝の可能性も考えられるが、詳細を明らかにすることはできなかった。

1区31号溝 (付図4 第34図 PL18)

位置 1a区1-98-S・T-12G  
1-99-A・B-12G

重複 26号溝より新しい。

形状 谷内を谷の南縁に沿って掘られた北東-南西方向の溝。中央部でやや北に膨らんで蛇行する。西端は発掘区域外に伸びている。東端は1-98-S-12グリッド内で確認できなくなる。底面にはやや凹凸があり、その標高は東端が西端より0.05m高い。

規模 調査長 16.21m 最大幅 0.35m  
最小幅 0.11m 深さ 0.11m

断面形 U字形

埋没土 暗褐色土と浅間C軽石の混土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 谷の南斜面下、水田域の外縁部に掘られた29号溝の下位にはほぼ平行するように掘られている。用水路と推定される。

1区34号溝

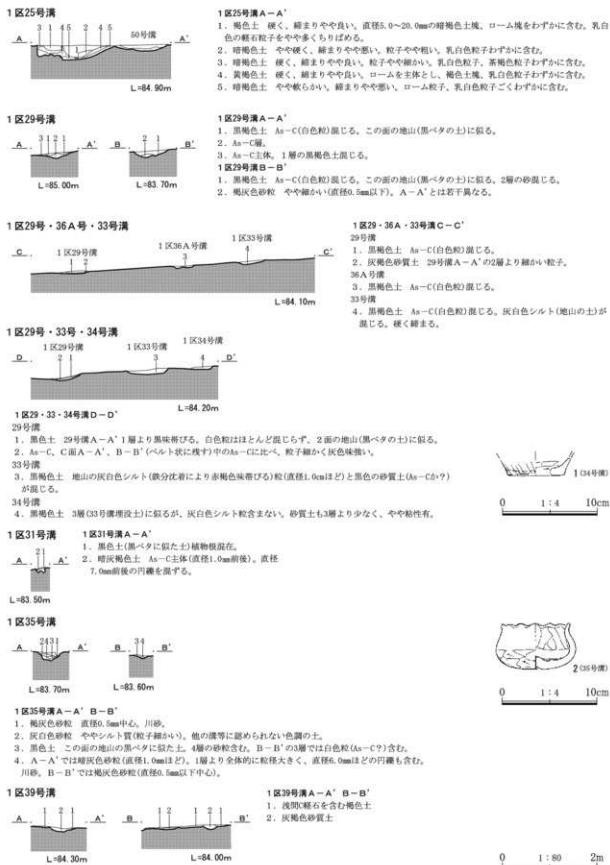
(付図4 第34・50図 PL17・18 遺物観察表P.558・561)

位置 1a区1-98-Q~S-11G  
1-98-S・T-10G

重複 なし

形状 谷の南縁、台地縁辺に掘られた北東-南西方向の溝。中央部でやや北に膨らんで蛇行する。この膨らみは北側にある29号溝や33号・36号溝と似ており、地形に即したものであろう。西端は1-98-T-10グリッド内で、東端は1-98-Q-11グリッド内で確認できなくなる。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.06m高い。

規模 調査長 16.05m 最大幅 0.83m



第34図 1区25号・29号・31号・33~35号・36A号・39号溝土層断面と34号・35号溝出土遺物



#### 第4章 1区の遺構と遺物

最小幅 0.31m 深さ 0.06m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 黒色砂質土粒を含む黒褐色土。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器・須恵器の小破片7点と銅片1点が出土した。このうち土師器甕底部破片(第34図1)と須恵器坏口縁部破片(第50図10)を図示した。いずれも溝に伴う遺物かどうかは判然としない。

**所見** 谷の南斜面下、水田域の外縁部に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。並行して33号溝、36号溝があることから、畝の畝間溝の可能性も考えられるが、詳細は明らかにすることができなかった。

#### 1区35号溝

(付図4 第34回 PL18・152 遺物観察表P.558)

**位置** 1a区1-98-R・S-16G

1-98-O~R-17G

1-98-O-18G

**重複** 浅間C軽石下水田より新しい。

**形状** 谷内の北部に掘られた北東-南西方向の溝。直線的な走向を示す。西端は1-98-S-16グリッド内で確認できなくなる。東端は発掘区域外に伸びている。底面には凹凸があり、特に東端部には水流による陥穴も見られた。底面の標高は東端が西端より0.18m高い。

**規模** 調査長 22.39m 最大幅 0.63m

最小幅 0.17m 深さ 0.41m

**断面形** 台形

**埋没土** 上層は砂粒や浅間C軽石を含む黒色粘質土で、下層は褐灰色砂層で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器・須恵器の小破片3点が出土した。このうち土師器手づくね土器口縁~底部破片(第34図2)を図示した。溝に伴う遺物かどうかは判然としない。

**所見** 浅間C軽石下水田のアゼを壊して掘られている。砂層の堆積や陥穴からは、一定量の流水があったことが推察される。

#### 1区36B号溝(付図5 第44回 PL18・19)

**位置** 1c区2-9-E-H-2G

**重複** なし。

**形状** 谷の南縁、台地縁辺に掘られた南東-北西方向の溝。ほぼ直線である。西端は発掘区域外に伸びている。東端は2-9-E-2グリッド内で確認できなくなる。底面の標高は東端が西端より0.15m高い。

**規模** 調査長 16.02m 最大幅 0.55m

最小幅 0.18m 深さ 0.05m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 埋没土は記載がないため、不明である。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 谷の北斜面の台地縁辺に掘られている。なだらかな斜面部にあたる。何の目的で掘られたかを明らかにすることはできなかった。

#### 1区37号溝(付図5 第43回 PL18・19)

**位置** 1c区2-8-O~T-1・2G

2-9-A~H-1・2G

**重複** 48号溝と重複するが新旧関係は不明である。

**形状** 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。中央部が南側に膨らんでおり、台地縁辺の等高線に沿った走向を示している。西端は2-9-H-2グリッド内で確認できなくなった。東端は2-8-O-2グリッド内で北に走向を変え、立ち上がっていた。その東側にはさらに48号溝が台地縁辺に沿って伸びるが、連続した同一の溝かどうかは不明である。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.18m高い。

**規模** 調査長 66.55m 最大幅 0.85m

最小幅 0.32m 深さ 0.14m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 上層は浅間C軽石を含む褐色土、下層は軽石をほとんど含まない黒褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 土師器坏1片が出土した。1c区の南東部を中心に浅間C軽石を混じる黒褐色土層中に4500点を越える遺物が包含されていた。そのほとんどは古墳時代後期の土師器破片である。この遺物分布の集中部分と37号溝の走向が重複している地点

があった。これらの遺物が37号溝に伴う遺物である可能性が高いが、確定が困難であるため、本報告ではこの集中部の遺物は古墳時代遺物包含層として図化・掲載した。37号溝に関連すると思われる図示遺物は、第45図25の土師器高坏と第47図48の土師器瓶である。

**所見** 谷の北側斜面で検出された。流水の痕跡がないことから、用水路でなく何らかの区画溝と考えられる。包含層遺物が走向に重複するのは、37号溝の掘り込み面が遺構を確認した面より上であったことを示唆するが、上層で明確に溝の走向を確認することはできなかった。

#### 1区38号溝(付図5 第43図 PL19)

**位置** 1c区2-9-F~H-2G

**重複** なし

**形状** 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。37号溝の西部に沿うような彎曲した走向を示す。西端は発掘区域外に伸びている。東端は2-9-F-2グリッド内で確認できなくなった。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.08m高い。

**規模** 調査長 12.89m 最大幅 0.28m  
最小幅 0.15m 深さ 0.03m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 浅間C軽石を含む褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。前述した1c区南東部の古墳時代遺物包含層と走向が重複する地点もなかった。

**所見** 谷の北側斜面で検出された。流水の痕跡がないことから、用水路でなく何らかの区画溝と考えられる。溝の規模や立地は1a区29号溝や35号溝に似ている。

#### 1区39号溝(付図5 第34図 PL19)

**位置** 1c区1-98-Q~T-20G

1-99-A~E-1G

2-8-M~Q-1~3G

2-9-E~H-1G

**重複** 40号溝より新しい。

**形状** 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。37号溝の南側に約5.2mの間隔をあけて同じ彎曲で並行する。西端、東端ともに発掘区域外に伸びている。1-98-Q~S-20グリッド内では削平のため、確認できなかったが、連続して溝が掘削されていたと推定される。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.39m高い。

**規模** 調査長 82.24m 最大幅 0.69m  
最小幅 0.23m 深さ 0.11m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 上層は浅間C軽石を含む褐色土で、下層は灰褐色砂質土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。前述した1c区南東部の古墳時代遺物包含層と走向が重複する地点もなかった。

**所見** 谷の北側斜面で検出された。流水の痕跡がないことから、用水路でなく何らかの区画溝と考えられる。溝の規模や立地は1a区29号溝や35号溝に似ている。

#### 1区40号溝(付図5 第35図 PL19)

**位置** 1c区1-99-F-17~20G  
2-9-F-1・2G

**重複** 39号溝より古い。41号溝との新旧関係は不明であるが、層位および埋没土が類似することから、同時期の溝と推定される。

**形状** 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。ほぼ南北方向の直線である。1-99-F-18グリッド内では土坑状に幅や深さが増している。その東側に41号溝が接続している。その北側の境と、東の境には木材片が出土した。1-99-F-19・20グリッドでは強い流水の影響と見られる陥穴が検出された。底面は平坦で、その標高は北端が南端より0.50m高い。

**規模** 調査長 21.35m 最大幅 2.23m  
最小幅 0.49m 深さ 0.18m

**断面形** 浅い皿形

#### 第4章 1区の遺構と遺物

**埋没土** 上層は榛名山起源の黒石を含む褐色土、下層は浅間C軽石を少量含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 土師器破片63点が出土したが、いずれも小破片で図示できる遺物はなかった。

1c区の南東部を中心に浅間C軽石とBテフラの間のC軽石を混じる黒褐色土層中に4500点を越える遺物が含まれていた。そのほとんどは古墳時代後期の土師器破片である。この遺物分布の集中部分と40号溝の走向がほとんど重複していた。これらの遺物が40号溝に伴う遺物である可能性が高いが、確定が困難であるため、本報告では集中部の遺物は古墳時代遺物包含層として図化・掲載した。40号溝に関連すると思われる図示遺物は、第45図21・22の土師器杯、32の埴、34の壺、第49図49・50の甕である。40号溝の北半分と土坑状の深みの境界部には木材が検出されている。

**所見** 谷の北側斜面に直交する溝である。流水の痕跡があることから、台地縁辺部の排水機能をもっていたと推定される。中央の土坑状の深みの北側には木材が検出されているが、これは41号溝との境界部にも検出されており、41号溝と複合して何らかの施設があった可能性もある。また、包含層遺物が走向に重複するのは、40号溝の掘り込み面が遺構を確認した面より上であったことを示唆するが、上層で明確に溝の走向を確認することはできなかった。

1区41号溝 (付図5 第35図 PL19)

**位置** 1c区I-99-E・F-18G

**重複** 40号溝との新旧関係は不明であるが、層位と埋没土が類似することから同時期の溝と推定される。

**形状** 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。走向は東西方向のほぼ直線で、やや小さく蛇行する。西端は40号溝が接続している。南東端は発掘区域外に伸びる。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.03m高い。

**規模** 調査長 6.46m 最大幅 0.91m

最小幅 0.39m 深さ 0.06m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 上層は榛名山起源の黒石を含む褐色土、下層は浅間C軽石を少量含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 土師器破片5点が出土したが、いずれも小破片で図示できる遺物はなかった。

1c区の南東部を中心に浅間C軽石を混じる黒褐色土層中に4500点を越える遺物が含まれていた。そのほとんどは古墳時代後期の土師器破片である。この遺物分布と40号溝との関連はほとんど看取できなかった。

**所見** 谷の北側斜面に直交する40号溝に接続する東西方向の溝である。流水の痕跡は著しくないが、40号溝中央部の土坑状の深み部分に接続し、境界部には木材が検出されている。木材は40号溝の北半分と土坑状の深みの境界部にも検出されている。深みを囲むような何らかの施設があった可能性もある。

1区47号溝 (付図5 第35図 PL19)

**位置** 1c区2-8-N・O-2・3G

**重複** 49号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。走向は東西方向で、北側に彎曲する。西端は2-8-O-2グリッドで途切れる。さらに南西部に連続する位置に不定型な凹地が伸びていたが、本溝の延長と確定できなかった。東端は49号溝と重複する。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.13m低い。

**規模** 調査長 6.83m 最大幅 1.17m

最小幅 0.58m 深さ 0.15m

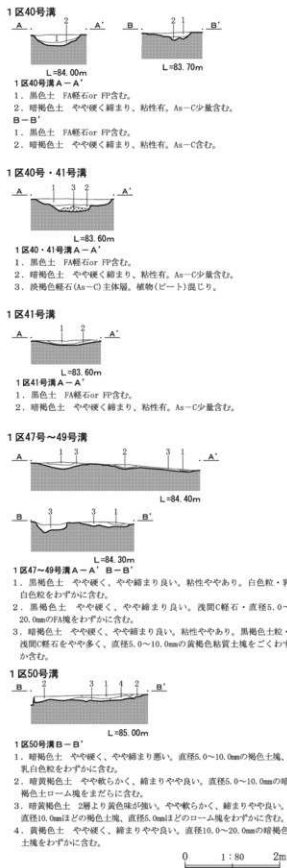
**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 埋没土の記載がないため、不明。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

1c区の南東部を中心にした古墳時代後期の遺物包含層の分布集中からははずれており、1点本溝と重複する遺物はあったが、確定できなかったので本溝出土遺物とはしなかった。

**所見** 谷の北側斜面に掘られた不定型な溝である。浅間C軽石を含む黒色土を除去した面で検出した。溝の機能や時期について詳細を検討することは困難である。



第35図 1区40号・41号・47号～50号溝土層断面

## 1区48号溝(付図5 第35図)

位置 1c区2-8-N・O-2G

重複 37号溝、49号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。走向は北東-南西方向で、ほぼ直線である。西端は37号溝と重複する。東端は49号溝と重複する。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.03m低い。

規模 調査長 5.99m 最大幅 0.87m

最小幅 0.53m 深さ 0.07m

断面形 浅い皿形

埋没土 埋没土の記載がないため、不明。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

1c区の南東部にある古墳時代後期の遺物包含層の分布集中からははずれており、数点本溝と重複する遺物はあったが、確定できなかったので本溝出土遺物とはしなかった。

所見 谷の北側斜面に掘られた不定型な溝である。浅間C軽石を含む黒色土を除去した面で検出した。37号溝の東側に連続する位置にあるが、同一溝であるかどうかは、不明である。溝の機能や時期について詳細を検討することは困難である。

## 1区49号溝(付図5 第35図 PL19)

位置 1c区2-8-N・O-2・3G

重複 47号溝、48号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 谷の北縁、台地縁辺に掘られた溝である。走向は北東-南西方向で、ほぼ直線である。西端は48号溝と重複し、2-8-O-2グリッドで確認できなくなる。東端は発掘区域外に伸びている。底面は平坦で、その標高は東端が西端より0.19m高い。

規模 調査長 8.18m 最大幅 1.57m

最小幅 0.39m 深さ 0.17m

断面形 浅い皿形

埋没土 埋没土の記載がないため、不明。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

1c区の南東部にある古墳時代後期の遺物包含層

#### 第4章 1区の遺構と遺物

の分布集中からははずれており、1点本溝と重複する遺物はあったが、確定できなかったので本溝出土遺物とはしなかった。

**所見** 谷の北側斜面に掘られた不定型な溝である。浅間C軽石を含む黒色土を除去した面で検出した。溝の機能や時期について詳細を検討することは困難である。

##### 1区50号溝 (付図5 第36図 PL20)

**位置** 1c区2-8-S・T-6G

2-9-A・B-6G

**重複** 南側に25号溝が重複するが、新旧関係は不明である。

**形状** 北台地上縁辺に沿った西-東方向の溝。走向はほぼ直線である。遺構確認面では西端は2-9-B-6グリッド内で、東端は2-8-S-5グリッドで立ち上がっている。全体の形状は不定形で、底面にも凹凸が著しい。底面標高は東端が西端より0.05m高い。

**規模** 調査長 11.50m 最大幅 2.40m

最小幅 0.82m 深さ 0.17m

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 埋没土の記載がないため不明

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片9点、陶器1片が出土した。いずれも小破片で図示できる遺物はなかった。

**所見** 1区谷内の遺構の中では最も高位にあり、住居群と隣接する立地を示す。確認面は関東ローム層上面であり3面の遺構とは断定できないが、埋没土が古墳時代住居と類似していること、南側に隣接した25号溝と同機能と考えられること、古墳時代後期遺物が出土していることから、本面で報告した。ただし陶器も1片出土しており、1面相当の遺構とも考えられる。

#### (2)土坑

##### 1区4号土坑 (付図5 第36図 PL20)

**位置** 1c区2-9-C-5G

**重複** 5号土坑より古い。

**形状** 長方形

**規模** 長軸2.52m 短軸1.43m 残存壁高0.43m

**長軸方位** N-21°-E

**断面形** 箱形

**埋没土** 白色粒子を含む暗褐色土あるいは濃褐色土で埋まっていた。

**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 谷の北縁斜面の上位で検出された。単独では時期や機能は決しがたいが、台地縁辺の古墳時代中後期集落内で検出された池状遺構と規模や形状が類似しており、同様の機能をもった土坑である可能性がある。

##### 1区5号土坑

(付図5 第36図 PL152 遺物観察表P.558・610)

**位置** 1c区2-9-C-4・5G

**重複** 4号土坑・1区2号住居より新しい。

**形状** 細長方形

**規模** 長軸3.49m 短軸0.94m 残存壁高0.05m

**長軸方位** N-0°-E

**断面形** 浅い箱形

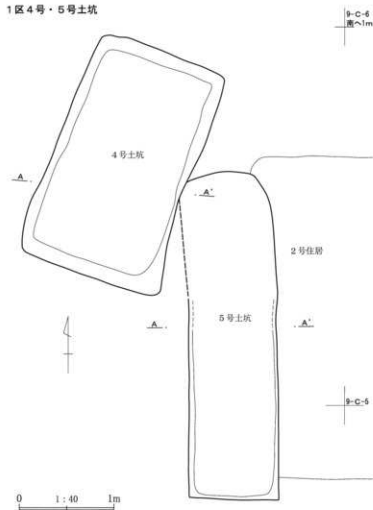
**埋没土** 少量の白色粒子とローム塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** ほほ平坦である。

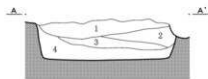
**遺物と出土状況** 土師器破片154点、擦石2点、金床石と推定される円礫1点が出土した。土師器坏・甕、擦石を図示した。

**所見** 谷の北縁斜面の上位で検出された。時期や機能は明らかにできなかった。出土した土師器は古墳時代後期の破片が多く、埋没土も他の古墳時代の遺構の埋没土に類似していたことから、古墳時代の遺構と考えておきたい。

1区4号・5号土坑

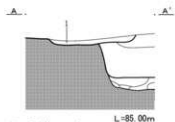


B-C-4  
深へ1m



1区4号土坑A-A'

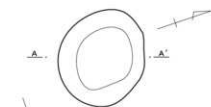
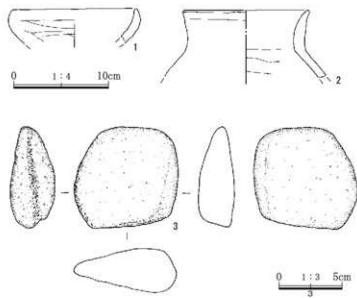
1. 褐色土 白色粒子(As-C?) 均一に含む。ローム粒(直径0.3~1.0cmほど)少量含む。
2. 濃褐色土 1層より黒色味少ない。白色粒子(As-C?) 均一に含む(1層と同程度)。ローム粒~塊(直径0.3~2.5cmほど)やや多く含む。
3. 暗褐色土 1層に似た土。白色粒子・ローム粒子の含み方は1層より少ない。
4. 濃褐色土 白色粒子(As-C?) 少量含む。ローム粒~塊(直径4.0cmほど、平均して直径0.8~1.0cmほどのものが多い)やや多く含む。



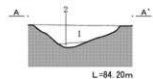
1区5号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-C・FA軽石ごく少量含む。ローム塊(径2.5~8.0cmほど)少量含む。

1区10号土坑



B-C-5  
深へ1m



1区10号土坑A-A'

1. 褐色~暗褐色土主体で、濃褐色土(白色粒子=As-C多く含む)が混じる。やや硬く締まる。
2. 黒色粘質土と灰白色シルト(鉄分沈着により赤褐色味帯びる)の混土。

0 1:40 1m

第36図 1区4号・5号・10号土坑と5号土坑出土遺物

#### 第4章 1区の遺構と遺物

##### 1区10号土坑 (付図4 第36図 PL21)

**位置** 1a区1-98-S・T-10G

**重複** なし

**形状** 楕円形

**規模** 長軸1.06m 短軸0.90m 残存壁高0.18m

**長軸方位** N-46°-W

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 下層は硬く締まる黒色土、上層は浅間C軽石粒を含む黒色土で埋まっていた。

**底面** ボール状

**遺物と出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所見** 谷の南緩斜面の下位で検出された。出土遺物がなく詳細な時期を想定するのは難しいが、埋没土の様相から古墳時代後期の遺構と考えられる。

##### 1区8号土坑 (付図4 第37図 PL20)

**位置** 1a区1-98-P-12G

**重複** なし

**形状** 楕円形

**規模** 長軸1.55m 短軸0.93m 残存壁高0.22m

**長軸方位** N-54°-E

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 下層は褐灰色土、上層は淡褐灰色シルトで埋まっていた。

**底面** ボール状で凹凸はない。

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 谷の南緩斜面の下位で検出された。単独では時期や機能は決しがたいが、浅間C軽石を含んだ黒色土を地山としていることから、古墳時代前期以降の遺構と推定される。

##### 1区9号土坑

(付図4 第37図 PL20・21・152 遺物観察表P.558)

**位置** 1a区1-98-P-12G

**重複** なし

**形状** 楕円形

**規模** 長軸1.45m 短軸1.01m 残存壁高0.13m

**長軸方位** N-72°-E

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 下層は硬く締まる黒色土、上層は榛名二ツ岳火山灰層塊を含む黒色土で埋まっていた。

**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 土坑南半部から多数の割れた土器破片が集中して出土した。ほとんど同一の破片であるが、土師器壺(第37図3)が半完形に接合できた。また須恵器高環(1・2)が出土している。

**所見** 谷の南緩斜面の下位で検出された。出土遺物の年代から古墳時代後期6世紀中葉の土坑と推定される。出土した須恵器高環は口縁部付近と脚部接合部の2カ所を実測した。接合することはできなかったが同一個体と推定される。坏部底部外面は平らな面を作り、下位に櫛状工具の刺突文、上位に櫛描き波状文を施している。坏部の小型化が進み、長脚2段の脚部がつくものと推定される。脚部接合部の残存状態から透孔は1段に3孔である。TK-10型式に比定できる。

また土師器壺半個体分の破片が密集して出土した。これらの遺物の出土状態から特定の機能があることが推定されるが、隣接する8号土坑とともに土坑の機能を特定することはできなかった。

##### 1区12号土坑

(付図5 第37図 PL21 遺物観察表P.558)

**位置** 1c区2-9-I-6G

**重複** なし

**形状** 楕円形

**規模** 長軸0.54m 短軸0.43m 残存壁高0.08m

**長軸方位** N-7°-E

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 埋没土の記載はできなかった。

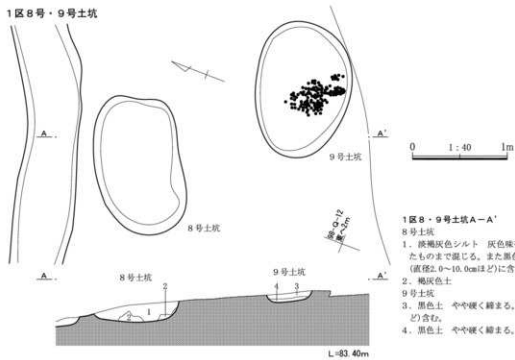
**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 底面上2cmで土師器壺胴部破片(第37図4)が出土した。

**所見** 谷の北緩斜面の最上位で検出された。埋没土の記録がないので確定はできないが、出土した大型破片から古墳時代の遺構と考えておきたい。

4. 3面(浅間C混土中)の遺構と遺物

1区8号・9号土坑



1区8・9号土坑A-A'

8号土坑

1. 灰褐色シルト 灰色麻帯びたものから白麻帯びたものまで混じる。また黒色土(白層の土)を粒~塊状(直径2.0~10.0cmほど)に含む。

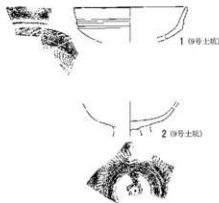
2. 純灰色土

9号土坑

3. 黒色土 やや硬く締まる。FAを(長さ1.5~3.0cmほど)含む。

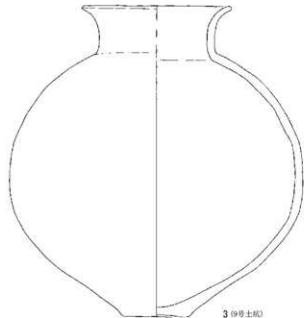
4. 黒色土 やや硬く締まる。

L=83.40m



1 (8号土坑)

2 (9号土坑)



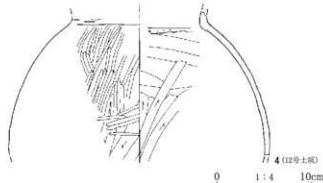
3 (9号土坑)

1区12号土坑



1区12号土坑A-A'

1. 暗褐色土 やや硬く、やや締まりが悪い。直径2.0~5.0mmのローム殻・ローム殻をごくわずかに含む。



4 (12号土坑)

0 1:4 10cm

第37図 1区8号・9号・12号土坑と出土遺物



#### 第4章 1区の遺構と遺物

##### (3) 竪穴住居

###### 1区1号住居

(付図5 第38・39図 PL22・152 遺物観察表P.558・559)

**位置** 1c区2-9-D・E-6G

**形状** 正方形と推定される。重複遺構なし。北東隅は攪乱がおよび、確認できなかった。削平が著しく確認面から10cm弱の壁高がcaろうじて残っていた。

**規模** 長軸4.42m 短軸4.37m 壁高0.09m

**面積** (19.14)㎡ **長軸方位** N-4°-W

**埋没土** 浅間C軽石と思われる白色軽石粒とローム粒・塊を含む暗褐色土で埋まっていた。周溝内は軽石粒を含まない暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁中央に竈が構築されていた。残存状態が悪いため測定不能。焚き口部と推定される位置には焼土面が残り、礫や土師器裏破片が出土した。また左袖部の芯として立てられたと推定される礫が掘り方面まで埋められた状態で残っていた。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が58×52×66cm、P2が52×52×42cm、P3が48×41×52cm、P4が37×35×44cmである。

**周溝** 周溝は北東隅を除いて全周する。幅は概ね16cm、深さは8cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.80m、短径0.64m、深さ0.42mの不整長方形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.46m、短径0.39mである。貯蔵穴底面からは土師器杯(第39図2)が出土した。

**床面** 床面は平坦である。中央から西側には炭化物が床面に残る部分があった。また北西隅とP1上には焼土が床面に残されていた。

**掘り方** 掘り方は細かな凹凸が著しく、淡褐色土や黒褐色土塊を混じる黄褐色土で埋まっていた。

掘り方でP1と西壁の間、P2と南壁の間に間仕切り溝が検出された。大きさはそれぞれ、長さ0.79m・幅0.18m・深さ0.09m、長さ0.92m・幅0.16m・深さ0.10mである。

**遺物と出土状況** 遺物は貯蔵穴周辺の南壁際と中央部から北西隅にかけて比較的多量に出土した。

竈前には土師器小型甕(第39図4)や甕(11)が床面直上で出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

###### 1区2号住居

(付図5 第40~42図 PL23・24・153 遺物観察表P.559)

**位置** 1c区2-9-B・C-4・5G

**形状** 正方形と推定。1区1号井戸に切られる。

**規模** 長軸3.72m 短軸3.54m 壁高0.47m

**面積** 12.91㎡ **長軸方位** N-89°-E

**埋没土** 浅間C軽石と思われる白色軽石粒とローム粒・塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長1.20m、燃焼部幅0.50m。袖の残存長は向かって右側が1.10m、左側が0.85m。壁外に0.18m煙道が伸びる。燃焼部に支脚と推定される礫が据えられていた。燃焼部から土師器環(第42図3)、小形甕(8)、土師器甕(9・11)が出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が25×24×22cm、P2が23×22×17cm、P3が24×23×19cmである。南東部の柱穴は検出できなかったが、検出漏れと考えられる。

**周溝** 周溝は検出できなかった。

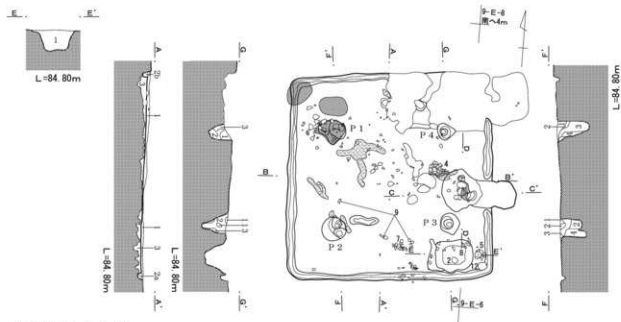
**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面はほぼ平坦である。

**掘り方** ローム粒や塊を混じる黒褐色土で埋まっていた。北東隅に長軸0.52m、短軸0.46m、深さ0.12mの不定形の1号土坑が検出された。断面形は接続形で、底面は平坦である。土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性がある。

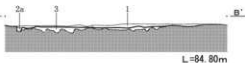
**遺物と出土状況** 遺物は竈と南壁際から南西隅に比較的多量に出土した。土師器甕(第42図10)は北東隅床面直上で出土した。土師器壺(1)は南部とP2周辺から出土した破片が接合した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。



## 1区1号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 やや硬く締まる。浅間C軽石、ローム粒および塊(直径2.0cmほど)を含む。
- 2a. ローム主体 暗褐色土少量混じる。
- 2b. 暗褐色土主体 浅間C軽石は認められない、ローム混じる。
3. ローム主体 汚いローム(暗褐色土、黒褐色土混じる)。やや硬く締まる。



## 1区1号住居貯蔵穴E-E'

1. 暗褐色土 ローム粒(直径0.1~1.0cmほど)含む。1号住居床面1層に似るが、締まりが1層に比べ弱く、浅間C軽石も含まない。部分的に鉄分による紫色(赤褐色)が認められる。

## 1区1号住居柱穴F-F' G-G'

## P1

1. 暗褐色土 ローム粒(直径1.0~4.0cmほど)含む。暗褐色土塊(直径1.0~2.0cmほど)少量含む。機土粒状に少量含む。
2. ローム塊
3. 暗褐色土 1層に似るが比較してローム粒を多く含む。やや黄色味帯びる。暗褐色土塊(直径1.0~5.0cmほど)を少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒(直径2.0cmほど)を少量含む。

## P2

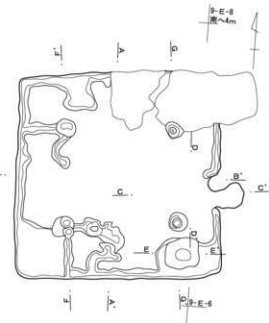
1. 灰褐色土とロームの混土 やや硬く締まり、やや粘性有。
2. 黒褐色土 ビット1の4層より黒味強い。ローム混じる。
3. ローム主体 暗褐色土が少量混じる。きれいなロームではない。やや硬く締まる。
4. 3層に似るが、黒褐色土がやや多く混じる。

## P3

1. ローム主体の塊。汚いローム。黒褐色土(2層の土か)が混じる。
2. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径3.0cm位)を少量含む。
3. ローム主体 黒褐色土塊(直径1.0cm位)を少量含む。やや硬く締まる。

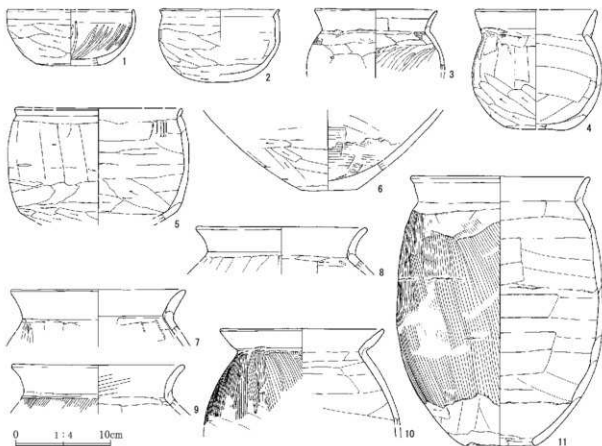
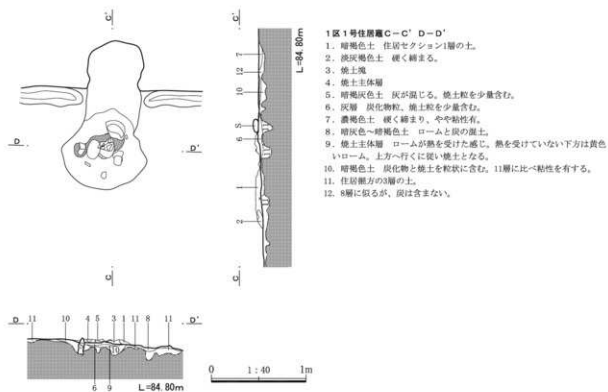
## P4

1. 暗褐色土 ローム主体。暗褐色土混じる。
2. 暗褐色土 ローム粒(直径5.0cmほど)をごく少量含む。
3. 暗褐色土 ローム主体。1層よりロームの割合多い。暗褐色土を少量含む(塊状、直径1.0~2.0cmほど)。やや硬く締まる。

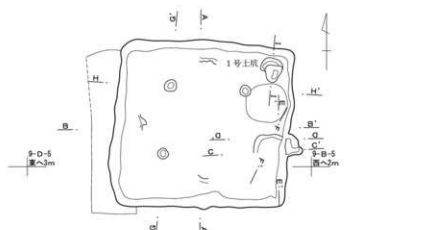
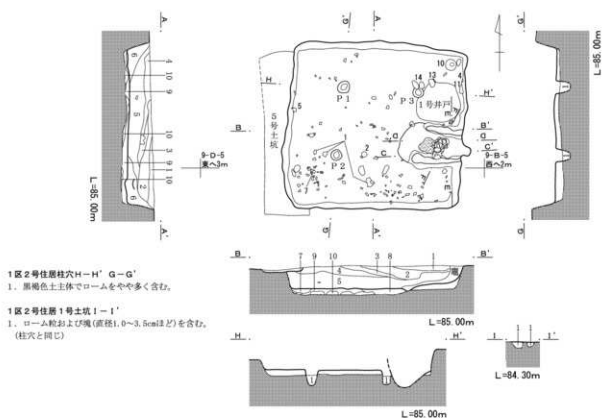


0 1:80 4m

第38図 1区1号住居

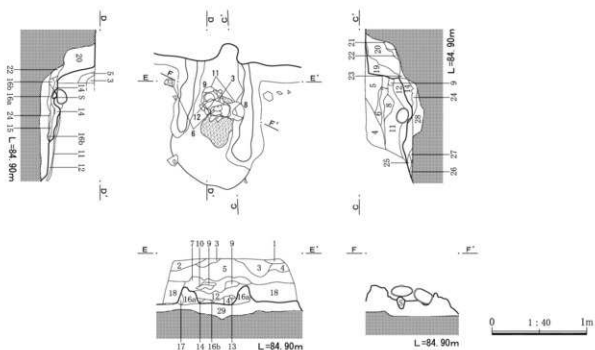


第39図 1区1号住居断と出土遺物



第40図 1区2号住居

第4章 1区の遺構と遺物

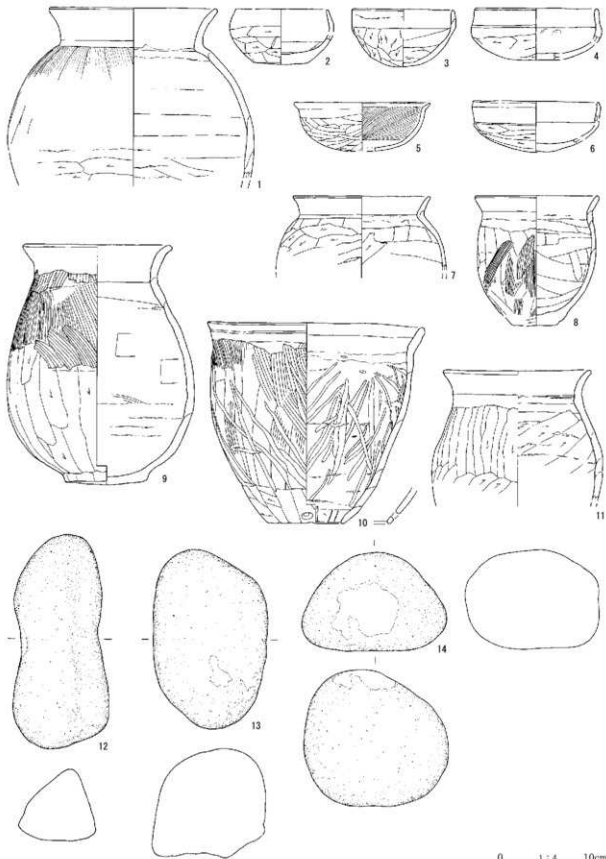


1区2号住居断C-C' D-D' E-E'

1. 黒褐色土 白色粒子(軽石?)をやや多く含む。
2. 黒褐色土 白色粒子(軽石?)的-にやや多く含む。住居1層の上。
3. 濃褐色土~暗褐色土 4層に似るが、白色粒子ほとんど含まず。ローム粒子および塊(直径0.1~1.5cmほど)を多く含む。黒色土粒子(直径3.0cmほど)焼土粒子をごく少量含む。
4. 暗褐色土 1層より締りやや強い、白色粒子(軽石?)をやや多く含む。ローム粒子(直径1.0~5.0mmほど)を少量含む。黒色土粒子(直径1.0~2.0cmほど)をごく少量含む。
5. 濃褐色土~暗褐色土 3層に似る。ローム粒子の混じり方は3層より少ない。黒色土粒子および塊(直径0.3~2.0cmほど)を少量、焼土粒子をごく少量含む。住居2層の上。
6. 暗褐色土 4層に似るが、黒色土粒子を含まず。焼土粒子をごく少量含む。
7. 明黄褐色土 ローム主体。暗褐色土(5層の土か?)混じる。露天井の南岸土。
8. 暗褐色土 やや粘性有。黒色土粒子を含まず。焼土粒子をごく少量含む。6層に似るが、7層を挟み為分離。
9. 暗褐色土塊 やや粘性有。ローム粒子(直径5.0mmほど)をごく少量含む。焼土粒子を少量含む。
10. 焼土塊
11. 暗褐色土 やや粘性有。ローム粒子(直径5.0mmほど)をごく少量含む。焼土粒子を少量含む。
12. ロームと焼土の混土。
13. 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子が少量混じる。
14. 灰土主体層 炭化物・ロームを粒状に少量含む。上位(B-B'では東側上方)に行くに従いローム粒の混じりが多くなる。
15. 灰土主体層 焼土粒(直径0.5cmほど)含む。
- 16a. ローム 硬く締まる。壘構築土。
- 16b. 淡黄褐色土 ローム主体。
17. 黒褐色土 ローム粒(直径1.0mmほど)混じる。
18. 黒褐色土 白色粒子(軽石?)を含む。やや粘性有。淡黄褐色土粒および塊(直径0.3~1.0cm、長径7.0cmほど)を含む。焼土粒子を少量含む。住居5層の土。
19. ロームと焼土の混土。
20. 暗褐色土 白色粒子を含む。地山の土に似るが。ローム粒および塊(直径0.3~2.0cmほど)を少量含む。
21. ローム主体=16b
22. 淡黄褐色土 ローム主体。19層の土が混じる。
23. 暗灰褐色土 暗褐色土に灰が混じる。
24. 黒色土 28層より締まり弱い。焼土が混じる。
25. 15層と25層の混じり。焼土粒が混じる。
26. 黒褐色土 締まり弱い。
27. ローム主体 黒褐色土が混じる。
28. 黒褐色土 下層の地山に似るがローム塊(長径2.0cmほど)・淡褐色土混じり、また塊状(長径3.0~4.0cmほど)を含む。下層の地山より締まりも弱い。
29. 暗褐色土 ローム粒(直径1.0mmほど)・焼土粒子を少量含む。

第41図 1区2号住居断

4. 3面(浅間C 混土中)の遺構と遺物



第42図 1区2号住居出土遺物

## (4) 古墳時代遺物包含層

(第43～49図 PL154～156 遺物観察表P.559～561・610)

1c区の緩斜面の南西部で、基本土層第9図南壁A-A'5層の浅間C軽石を混じる黒色土中から、古墳時代中後期の遺物を中心に5414点の遺物が出土した。内訳は土師器・土製品5236点、須恵器9点、縄文土器9点、弥生土器4点、中世～現代土器8点、石器類142点である。土師器・須恵器はほとんどが古墳時代中期・後期のものであり、北側台地上に展開する当該期の集落から投棄され、土壌攪乱とともに遺物包含層が形成されたものと推定される。

遺物が包含されていた土層は、浅間C軽石を混じる黒色土あるいは黒褐色土で、層厚は10～30cmである。その中で37号溝、39号溝が掘り込まれていることが南北方向の土層観察によってわかっている。(第43図)本遺物包含層の下位には浅間Cが堆積していたが、1c区の南西隅(土層断面C-C'のCポイント付近)に厚さ5～15cmほど確認できるのみである。包含層に含まれる土師器は古墳時代前期のもの無く、層位の矛盾はない。浅間C軽石降下以降に土師器の投棄とともに土壌攪乱が加えられ、遺物包含層が形成されたものと考えられる。

第43図はその出土地点を示したドットマップである。平面的には、南西部の広い範囲と南東部の一部に集中して遺物が分布している。南西の集中部には遺物が筋状に密集する部分がある。これは浅間C軽石を混じる黒色土層の下面で検出された溝群に対応していると考えられる。これらの溝は浅間C軽石を混じる黒色土層中で掘り込まれていることは土層断面から判明しているが、土壌の識別が困難なことから掘り込み面で遺構平面を確認することは断念した。したがって溝に対応して分布する遺物群は、溝内出土の可能性がきわめて高いと推定される。しかし、ここでは厳密に遺構に伴うかどうかを断定できないことから、包含層出土の遺物として取り扱った。

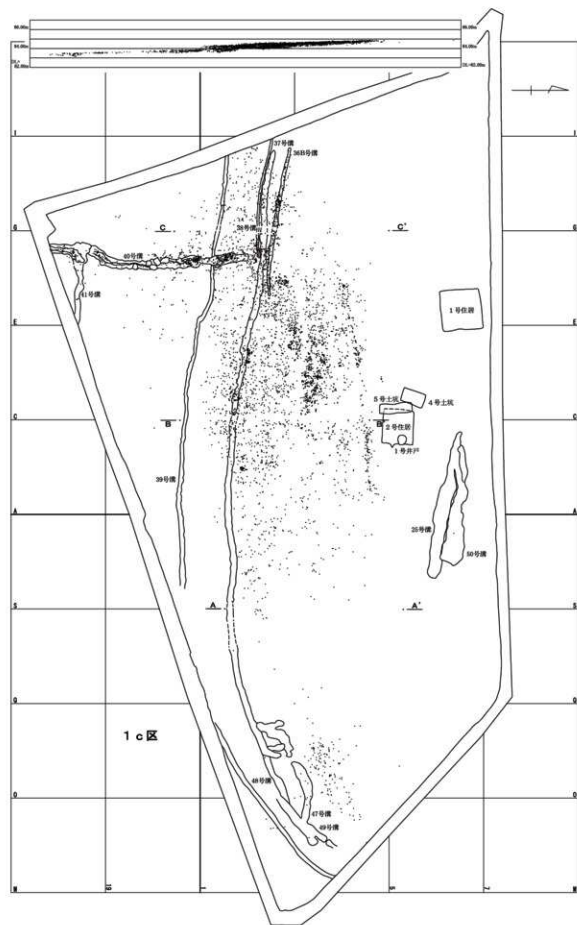
垂直分布は谷の傾斜にそって堆積する土層に対応して南に傾斜していた。39号溝より南側の谷縁辺部には分布の広がりは少なかった。

出土した遺物は、全点について種別・器種・残存部位を観察し、データベース化した。時期差を示す属性の分類は時間の都合で実施できなかった。その後器種ごとに分類し、同一個体と思われる破片を集めて接合作業をおこなった。接合率は全破片5414片のうち、398例7.3%ときわめて低い。

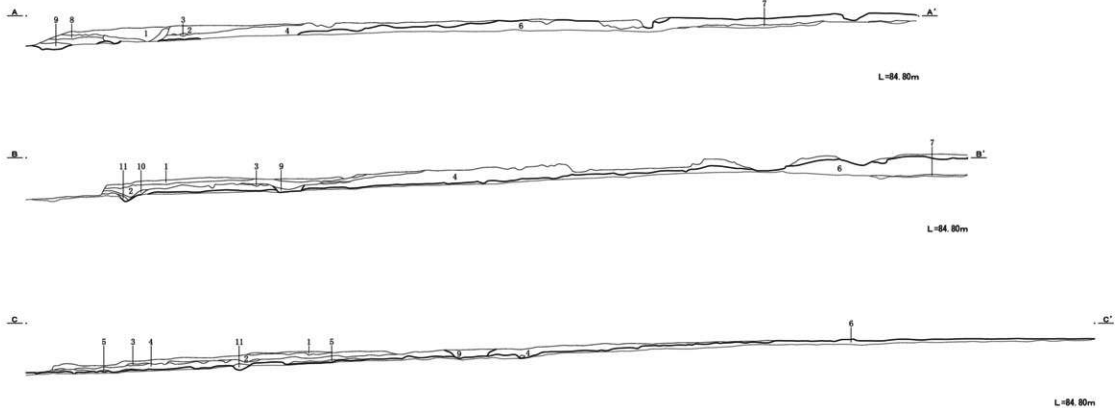
なお、すべての土器には実施できなかったが、特徴のある須恵器については、台地上の住居出土の破片との接合作業をおこなった。荒砥北三木堂遺跡・荒砥北三木堂Ⅱ遺跡では古墳時代中後期の住居から古式須恵器が比較的多く出土することが特徴である。包含層中からも9点の須恵器破片が出土した。このうち2区17号住居から出土した高坏形器台に包含層出土の破片が接合した。今回実施した接合作業は、土器に特徴があつて出土数の少ない須恵器のみに限ったため、9点中1例の接合にとどまった。

この遺物包含層は土壌攪乱をうけていると見られる堆積状況であり、遺物の時期も古墳時代中期・後期に偏っているため、器種ごとの分布図作成および時期差を示す属性の分類はおこなわなかった。時期ごとに土器の分布範囲が変化するのか、器種との関連はどうかといった空間的分析は実施できていない。

全体的な出土遺物の器種は甕が最も多く、ついで土師器環である。比較的大型に復元できた個体について第45～47図に実測図を掲げた。土師器環は①体部が彎曲するもの、②彎曲した体部から口縁部が短く外反するもの、③体部と口縁部を画する段差から外反する口縁部に至るもの、④体部と口縁部を画する段差から直立する高い口縁部に至るもの、⑤体部と口縁部を画する段差から外反する口縁部に至るもの、⑥平底から緩やかに直立する口縁部に至るものなどがある。①・②・⑥には内面および外面に磨耗が顕著である。高坏形土器の出土数は少ない。脚部の残存が多かったが、屈折脚のタイプと、高さが短く裾部が緩やかに開くタイプがあり、やや時間差を看取できる。壺形土器はいくつかの形態があるが、破片資料が多く全体形状を把握できたものは少ない。甕は中位に最大径をもつ膨らんだ胴部を呈し、外面

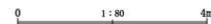


1c区古墳時代遺物包含層土層



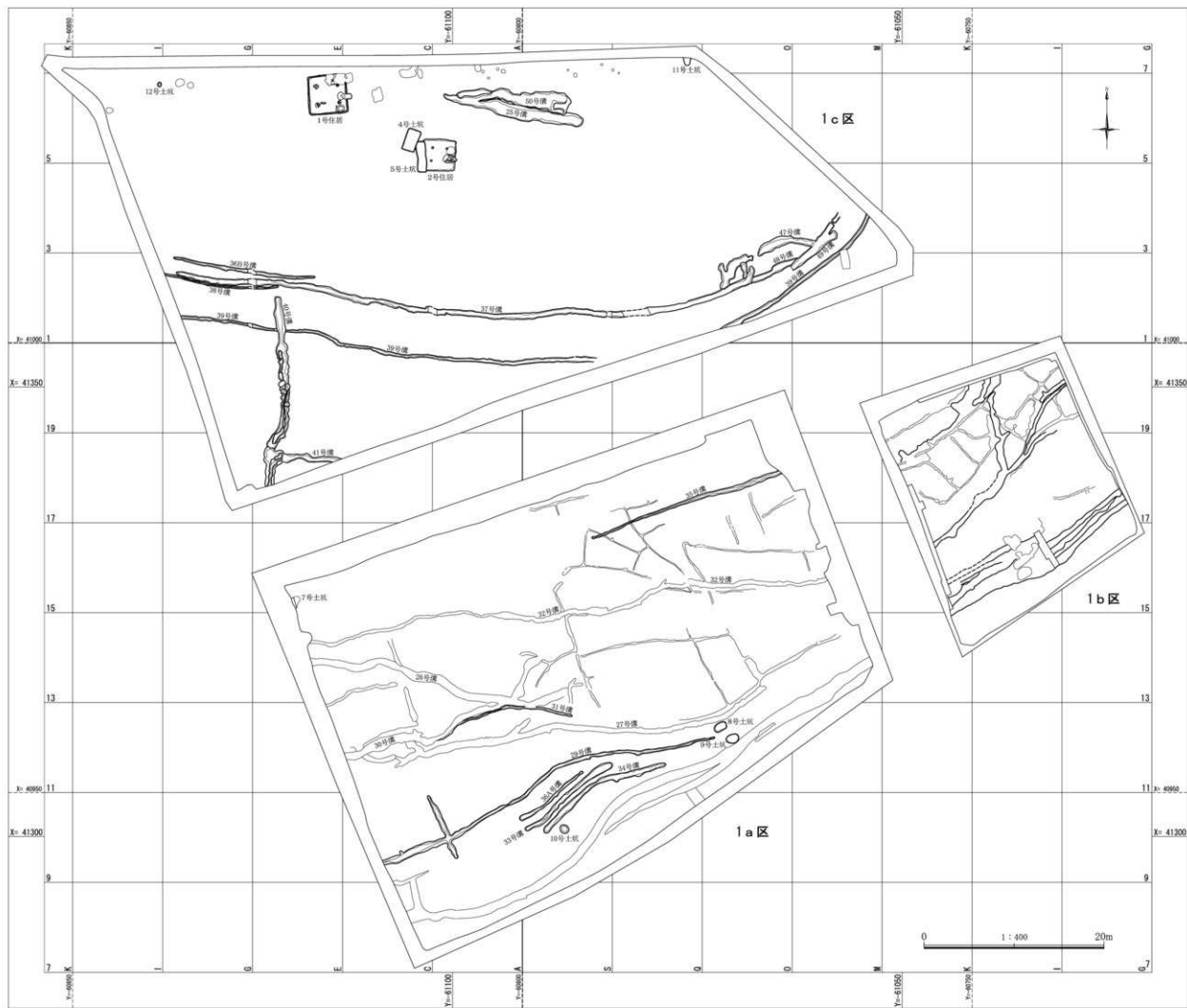
1c区古墳時代遺物包含層A-A' B-B' C-C'

1. 礫石層を含む褐色土
  2. 浅間C礫石等を多く含む褐色土
  3. 褐色ニッ片礫石層 部分的に凝集して残存する。
  4. 浅間C礫石を多量に含む黒褐色土
  5. 浅間C礫石層 1c区南西部の一部に薄く残存する。
  6. 灰褐色粘質土
  7. 黄褐色粘質土
  - 37号溝 8. 黒色粘質土 9. 黒褐色粘質土
  - 39号溝 10. 浅間C礫石を含む褐色土 11. 灰褐色砂質土
  - 38号溝・39号溝はC-C'のA層の部みとして表れている。
- (本図の土層記号は、写真や線々の土層断面図から統合して復元した。)



第43図 1c区古墳時代遺物包含層遺物分布と土層断面

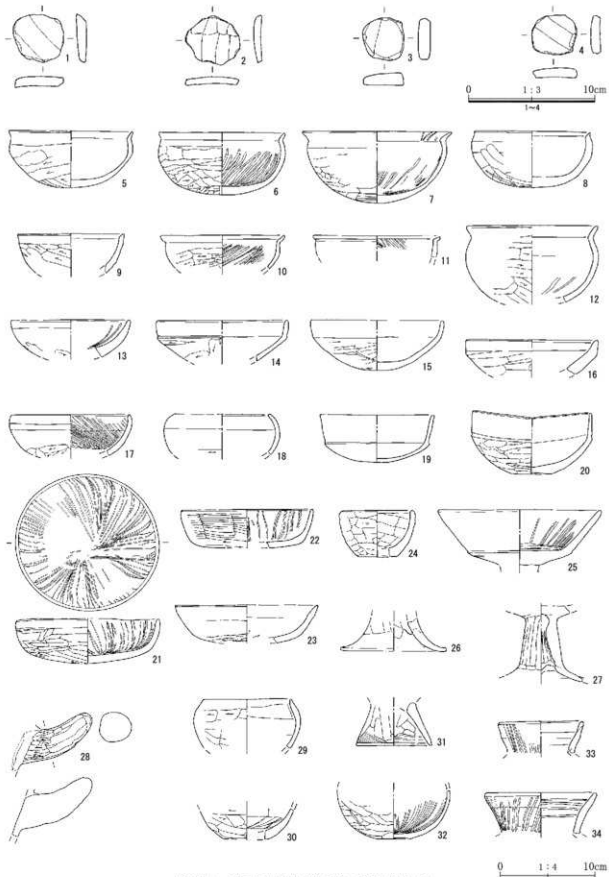




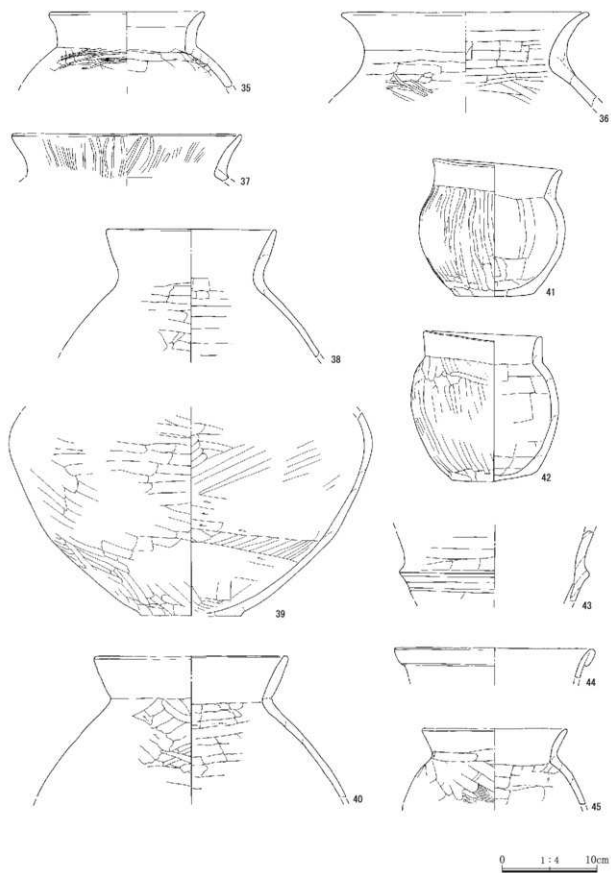
(破線は旧河床)

第44图 1区3面全体图

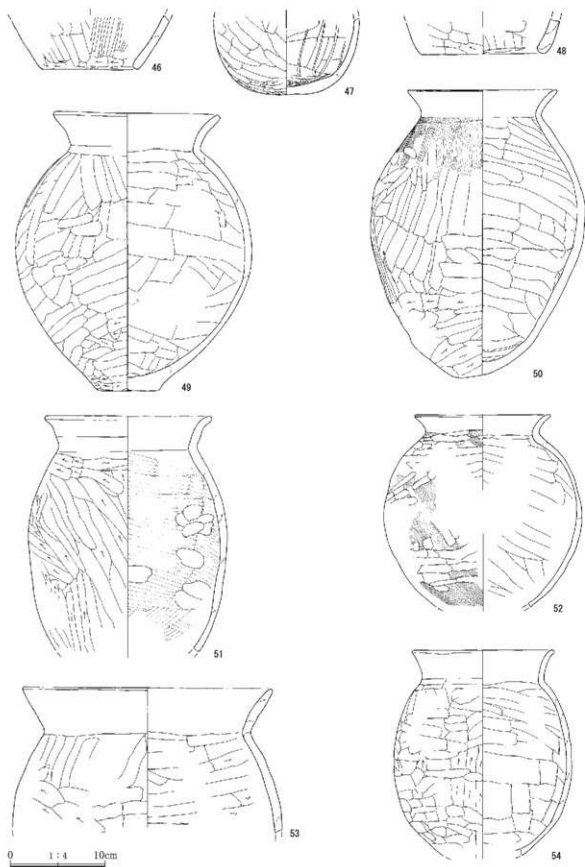
4. 3面(浅間C混土中)の遺構と遺物



第45図 1区古墳時代遺物包含層出土遺物(1)



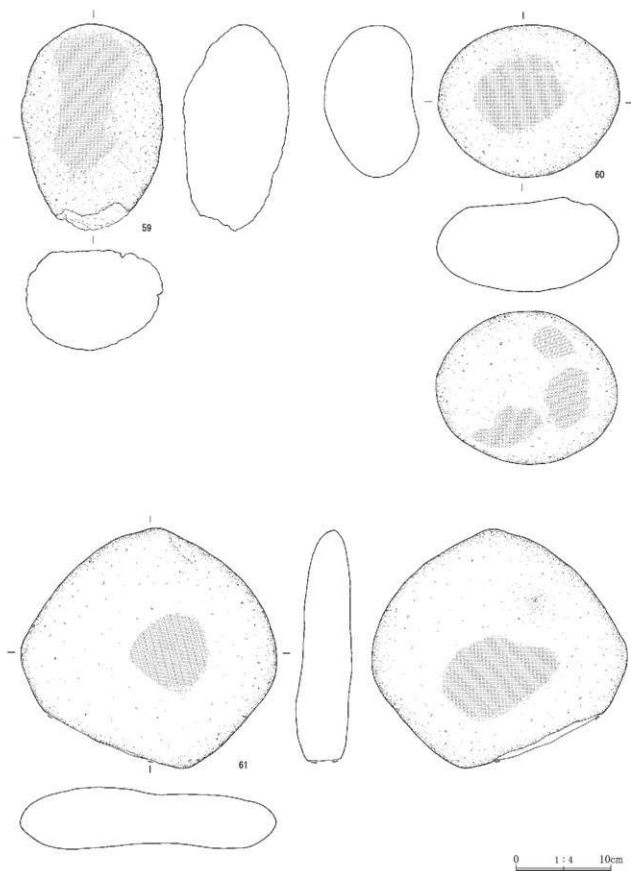
第46図 1区古墳時代遺物包含層出土遺物(2)



第47図 1区古墳時代遺物包含層出土遺物(3)



第48図 1区古墳時代遺物包含層出土遺物(4)



第49図 1区古墳時代遺物包含層出土遺物(5)

#### 第4章 1区の遺構と遺物

には剝削り、内面には撫でを施す。外面には刷毛目整形が残るものもみられた。これらの土師器は概ね6世紀前半の土器であろう。土器型式からみて、1c区の包含層と台地上住居群との関連性は明らかであると考えられる。また土製円盤が4点出土している。

須恵器は大甕や坏などの小破片や高坏形器台の口縁部破片などが出土したが、いずれも小破片のため、図示することはできなかった。また、前述のように器台の口縁部は2区17号住居出土の個体に接合した。

また、この他に縄文土器16点、弥生土器4点が出土している。縄文土器は諸磯a式土器1点、諸磯b式土器3点、称名寺式土器6点である。特に称名寺式土器は、出土数は少ないが発掘区内でも偏在傾向があり、2区台地縁辺に集中している。その台地に面した本区の称名寺式土器は台地上からの混入と考えられる。

弥生土器はいずれも中期後半の竜見町式土器に並行する時期のものである。今回の調査の発掘区では当該期の遺構は検出されていないが、荒砥北三木堂遺跡の調査では5軒の中期後半の住居が2区台地頂部で検出されており、それらからの混入と考えられる。なお、これらの包含層出土の縄文土器と弥生土器は、本章第6節弥生時代(第56図)、第7節縄文時代(第57図)の項で、1区の他地点の出土遺物とともに報告した。

また、古墳時代遺物包含層からは、縄文時代の打製石斧や削器、剥片類と、大型の擦石や凹石、砥石が出土している。これらの打製石斧や小型剥片石器は縄文時代の石器が混入したと判断し、本章-第7節縄文時代(第57-59図)で報告した。

一方、大型の礫石器は古墳時代以降の可能性もあることから、本項で報告した。特に大きな凹みのある大型の凹石や長さ15-20cmを超える擦石は、中世以降の遺物の可能性が高く、第48図57のような軽石製の砥石は古墳時代の可能性が考えられる。大型の凹石は1c区2号土坑出土石器(第32図2・3)に類似がある。

#### (5) 3面の遺構外出土遺物

(第50図 PL157 遺物観察表P.561-562)

3面で遺構に伴わないで出土した遺物は、土師器・須恵器189点、中世～現代土器12点、石器類9点である。

1a区では土師器甕・壺破片4点と坏破片1点が3面遺構外で出土した。このうち比較的大型の高坏形土器および坏形土器を図示した。また1-98-Q・P-12グリッドで、土師器壺の口縁部破片が集中して出土している。この出土地点は29号溝の南縁にあたり、出土層位も共通することから、同溝に伴う出土遺物の可能性もある。しかし29号溝の確認面が浅間C軽石を含む黒色土除去後であったので、共存関係を確定することはできなかった。なおこの壺形土器口縁部は近接する9号土坑で出土した壺形土器と同一個体と推定される。

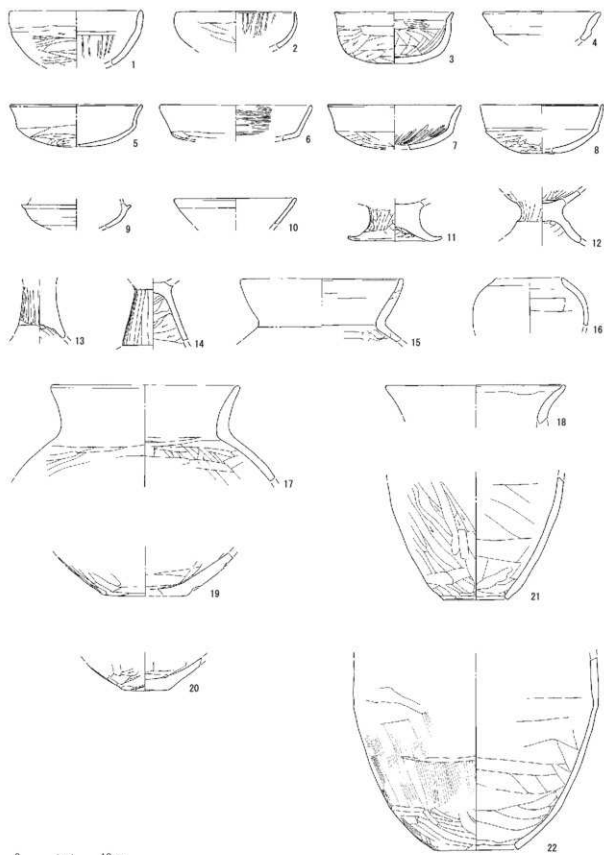
1b区では遺物は出土しなかった。

1c区では土師器185点、陶器2点、軟質土器10点、石器類9点が出土した。

この他に層位は明確でないが、土師器1694点、須恵器4点、陶器9点、時期4点、軟質時3点、石器類12点が1区グリッドおよび遺構確認作業時の表面採集遺物として取りあげられている。これらの遺物は全体としては古墳時代の遺物が大半を占める。古墳時代包含層出土遺物に接合したのも多かった。ここではこれらの遺物のなかで古墳時代に比定できる遺物については、第50図に掲載した。また、1・2面で出土した古墳時代遺物も含めて掲載した。

この多くの古墳時代の遺物は、土器の形式や器種が共通することから、2区にある古墳時代中後期の集落で使用されたものと推定される。

4. 3面(浅間C混土中)の遺構と遺物



第50図 1区1～3面の古墳時代遺構外出土遺物



## 5. 4面(浅間C軽石下)の遺構と遺物

## (1)水田

## 1区浅間C軽石下水田

(付図6 第51回 P.25・26・157 遺物観察表P.604)

1a区および1b区の低地部分のほぼ全域で、浅間C軽石に覆われた水田が検出された。水田面には表流水の痕跡と思われる小溝が残り、良好な残存状態とはいえない状況であった。また、軽石に埋まった小溝上位にアゼがつくられている部分があり、災害復旧の所作の一つと推定された。

水田面を埋めていた浅間C軽石層は、西暦300年前後に浅間山が噴出した際のテフラである。遺跡のある前橋市周辺では厚さ5cm程度の堆積が残されている。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1区では厚さ7～10cmの軽石層が水田面を覆っていた。

水田の検出された1区は赤城山南麓に開析された帯状低地で本来の沖積地の幅は50mと狭く長い沖積地である。下位には縄文時代晩期以前に形成されたと推定される埋没谷が隠れており、谷は極端に狭く深い。したがって検出された水田面は谷の凹みに対応して谷中央部がへこんだ傾斜面になっており、耕作当時の水田面の形状を残していない状況であった。したがって水田面の高低差から給配水の状況を判断することはできない。平面図から水田区画や水口の関係を検討するのにとどまることになる。

水田の耕作土は黒色粘質土である。扶雑物はほとんど含まれない黒色土で、一部に植物遺体を含む。

アゼは比較的明瞭に残っていた。1a区の最も状態の良いところで上幅0.54m、下幅0.64m、高さ6cm、1b区では高さ8cmのところもあった。水口は10数カ所で見つかるが、アゼの中央にある場合と、アゼの端にある場合があった。

水田区画は1a区と1b区では多少異なっていた。谷の幅がやや広い1a区では谷の方向に長い長方形を基調にした区画(8・9・18・20・21・22)であった。一部に傾斜に合わせてさらに細かく区切るアゼが設けられ、小さな長方形の区画(7)も見られた。

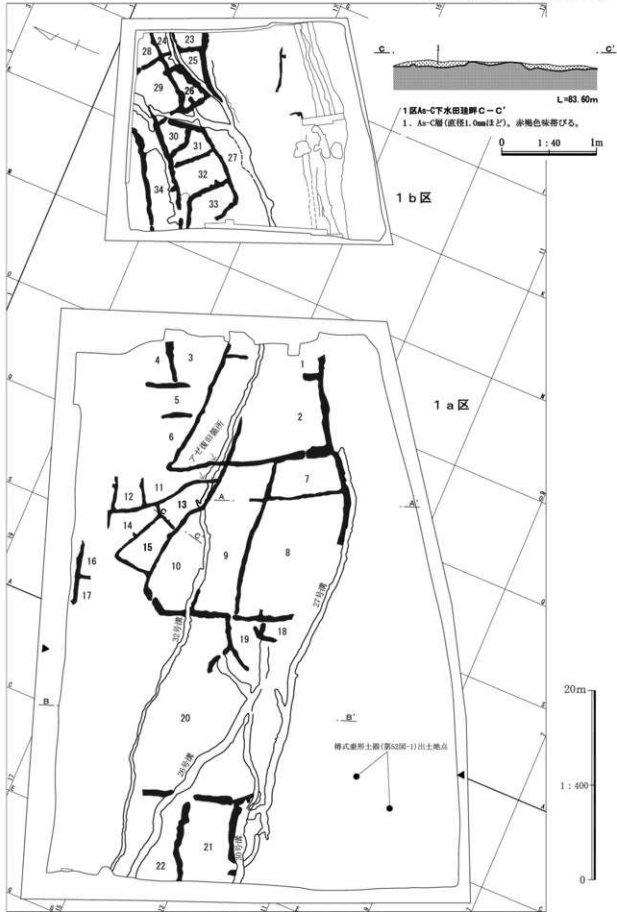
また谷の北縁付近の緩斜面では、斜めに区切る不規則なアゼが設けられており、水田区画は台形や三角形になっていた(11～15)。南縁は谷の端まで水田面が検出され、アゼの外側には凹地(27号溝)が検出された。27号溝は掘り込みが無いことや流水を推定させる埋没土がないことから、用水路というには躊躇する遺構である。ここではアゼ際の凹地と考えておきたい。しかし、1-99-D-11グリッドでは27号溝に沿ってアゼに切れた部分があり、水口の可能性もある。1-a区の北縁には浅間C軽石の堆積は厚さ7～10cmあったが、アゼを明瞭に確認することはできなかった。したがって水田域の北縁の限界を確認することはできなかった。

1b区では北側2/3ほどの範囲に浅間C軽石が堆積していたが、アゼが確認できたのはそのうちの北側1/2の範囲である。南半部は一部でアゼの痕跡が検出されたのみである。北半部はアゼの残存は良好で水田区画を看取できた。谷幅を三列に長く区切り、それぞれの列内を区画している。南側の列は一部に方形、三角形に区切るアゼを確認した(23～26)。中央の列は傾斜に合わせて小さく長方形に区切っている(28～33)。北側の列は細かく区切るアゼは検出できなかった。

水田の用水および給水方法については、発掘内の調査所見からは明確にすることはできなかった。谷部中央の最も低いところに水路が検出されていないことから、谷上流部からの水路を谷上位にまわし、そこから給水して水田面を掛け流して配水していたと推定される。発掘区内の水田面には、10数カ所の水口が検出されており、東(上流)から西(下流)へ掛け流されていたと考えられる。

水田面には1a区で26号、27号、30号、32号溝が検出されているが、これは後述するように水田面に残された表流水の痕跡あるいはアゼ造成時の凹地である可能性が高い。これらの溝は①直接浅間C軽石で覆われており、流水を推定させる埋没土がない、②水口を結ぶ線あるいはアゼに沿っている、③掘り込みがなく浅いという共通点がある。以上のことか

5. 4面(浅間C軽石下)の遺構と遺物



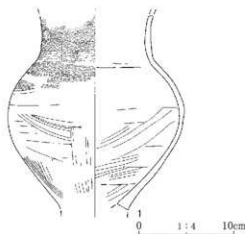
第51図 1区浅間C軽石下水田

ら、これらの溝は水田に伴う水路の可能性は少ないであろう。

1a区の32号溝には軽石被災後の所作が見られた。32号溝の土層断面Fでは、溝を埋めた浅間C軽石を含む暗褐色土層上でアゼの芯材と推定される木片が認められた。この芯材は区画13水田の東西の2本のアゼの延長線上にあり、アゼは浅間C軽石降下後に溝上に構築されたことになる。これは、軽石被災後余り時を経ないうちにアゼの復旧がおこなわれたものと考えられる。他の地点でも浅間C軽石を含む黒褐色土が水田面上にある地点があり、軽石降下後の所作が部分的に残されているのであろう。

水田に直接かかわる出土遺物はないが、1a区の南側台地裾部の1-99-A-10グリッドおよび1-99-B-9グリッドから樽式3期(飯島・若狭1986)と思われる壺形土器(第52図1)が出土した。この壺は、頸部にスパンの広い5連止め縲状文を描き、口縁部には上から順に櫛描波状文を重ね、肩には3段の櫛描波状文を重ねている。器形は直立する長い頸部と球胴形が特徴といえる。以上から樽式3期でも末期段階に位置づけられよう。

出土層位は浅間C軽石層下の黒～黒褐色土層で、水田耕作土の時期と同じと考えられる。発掘区内で同時期の遺構は検出されていないが、谷内には対応する時期の水田耕作地があることから、周辺には弥生時代末から古墳時代初頭の集落の存在を推定することができよう。



第52図 1区4面出土弥生土器

(2)溝

1区26号溝 (付図6 第53・54図 PL27)

位置 1a区1-98-T-12・13G

1-98-S-13G

1-99-A~E-13G

1-99-A-12G

重複 30号溝、31号溝より古い。

形状 谷の中を斜めに縦断する北西-南東方向の溝。やや蛇行するが、ほぼ直線的な走向である。西端は発掘区域外に伸びている。東端は1-99-T-13杭付近でアゼ状の起伏に遮られていた。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.39m高い。

規模 調査長 30.33m 最大幅 1.15m  
最小幅 0.42m 深さ 0.12m

断面形 浅い皿形

埋没土 上層は黒色土、下層は浅間C軽石層で直接埋まっていた。

遺物と出土状況 出土遺物はなかった。

所見 本溝は水田を埋めているのと同じ浅間C軽石で直接覆われていることから、水田に伴う遺構と考えられる。しかし、底面が平坦で掘り込まれた形跡がないことから水路とするには疑問が残る。後述する30号溝と同様に水口を結ぶ線にあることからすれば、水田面に残された表流水の痕跡とも考えられる。また、アゼの交点を結ぶ線にあり北側法面の立ち上がりが不明瞭であることから、南側に想定できるアゼに沿った凹地である可能性もある。アゼを構築するのにともなって、すぐ脇を採土のために掘削することから凹地が形成されると考えられる。ここでは南側に明瞭なアゼは確認できていないが、断面形状や水田区画規模の点から、凹地である可能性も考えておきたい。

1区27号溝 (付図6 第54図)

位置 1a区1-98-O~T-12G

1-98-O・P. -13G

1-99-B~D-11・12G

1-99-A-12G

**重複** なし

**形状** 谷の南端に沿って検出された北東-南西方向の溝状遺構。谷の縁辺に沿って緩やかに蛇行する。西端は30号溝と交差して水田面(21)に入っている。東端は1-98-O-13グリッド内で確認できなくなる。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.40m高い。

**規模** 調査長 46.83m 最大幅 1.33m  
最小幅 0.22m 深さ 0.02m

**断面形** 浅い皿形。南側の壁高の方が高い。

**埋没土** 浅間C軽石層で直接埋まっていた。

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 水田を埋めているのと同じ浅間C軽石で直接覆われていることから、水田に伴う遺構と考えられる。ただし底面が平坦で、南法面の立ち上がりが北法面に比べて明瞭であることから、水田面南端の凹地である可能性もある。本溝が検出された位置は谷内の沖積土がとぎれるところにあり、水田面の南端と一致している。水路状の掘りこみがない断面形状から考えても、用水路等の溝ではなく水田区画の南端の凹地である可能性も考えておきたい。

1区30号溝 (付図6 第53・54図 PL27)

**位置** 1a区1-98-T-12・13G  
1-99-D-11G  
1-99-A-D-12G  
1-99-A-13G

**重複** 26号溝と交差するが、同じ浅間C軽石で覆われており、新旧関係はない。31号溝よりは埋没土の相違から古いと判断される。

**形状** 谷の中を縦断する北東-南西方向の溝。やや蛇行する。西端は発掘区域外に伸びている。東端は1-99-T-13枕東でアゼのとぎれた水口状のところで確認できなくなっていた。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.08m高い。底面高は26号溝との交差点の東では0.06mほど東端より高まっていた。

**規模** 調査長 25.93m 最大幅 1.46m

最小幅 0.41m 深さ 0.15m

**断面形** 浅い皿形

**埋没土** 上層は黒色土、下層は浅間C軽石層で直接埋まっていた。

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 本溝は水田を埋めているのと同じ浅間C軽石で直接覆われていることから、水田に伴う遺構と考えられる。しかし、底面が平坦で掘り込まれた形跡がないことから水路とするには疑問が残る。先述した26号溝と同様に水口を結ぶ線にあることからすれば、水田面に残された表流水の痕跡とも考えられる。また、アゼの交点を結ぶ線にあり北側法面の立ち上がりが不明瞭であることから、南側に想定できるアゼに沿った凹地である可能性もある。アゼを構築するのにともなって、すぐ脇を採土のために掘削することから凹地が形成されると考えられる。ここでは南側に明瞭なアゼは確認できていないが、断面形状や水田区画規模の点から、凹地である可能性も考えておきたい。

1区32号溝 (付図6 第53・54図 PL27・28)

**位置** 1a区1-98-S・T-14G  
1-98-N~T-15G  
1-99-A~E-14G  
1-99-A・B-15G

**重複** 浅間C軽石下水田より新しい。

**形状** 谷の中を縦断する北東-南西方向の溝。やや蛇行する。西端は発掘区域外に伸びている。東端も発掘区域外に伸びている。底面は跡痕跡のような凹凸や筋状の掘削痕跡などが残る。その標高は東端が西端より0.76m高い。

**規模** 調査長 59.26m 最大幅 0.77m  
最小幅 0.15m 深さ 0.06m

**断面形** U字形

**埋没土** 西半分の下層の埋没土は浅間C軽石層と記載されているが、東半分は暗褐色～褐色の砂質土と記載されている。特にアゼと交差する1-98-Q-15・16グリッドでは溝底面を埋めているのは浅間C

第4章 1区の遺構と遺物

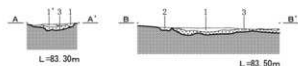
軽石でなく暗褐色～褐色砂質土である。

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 西半分の下流側では水田を埋めているのと同じ浅間C軽石で直接覆われていることから、水田に伴う遺構と考えられる。しかし1-98-Q-15・16グリッド付近では砂質土で埋まり、その上層に木材

を芯とする浅間C軽石を少量含む黒色土で造られたアゼが横断している。このアゼは浅間C軽石下の水田区画の延長にあり、浅間C軽石降下後にアゼの復旧がおこなわれたことを示していると考えられる。

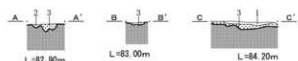
1区30号溝



1区30号溝 A-A' B-B'

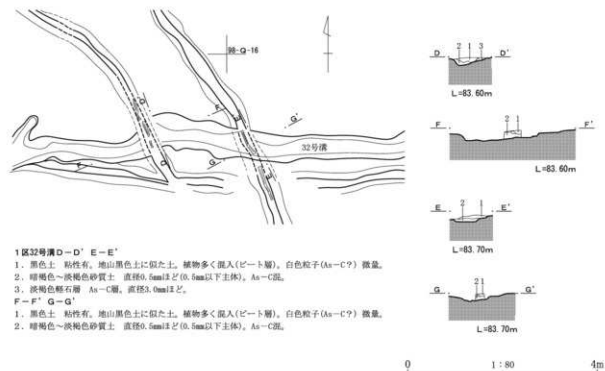
1. 黒色土 土壌粒子大変細かく、やや軟らかい。植物質の繊維わずかに含む。
- 1' 黒色土 1層に比べてやや土壌粒子粗い。C軽石の粒子ごくわずかに含む。
2. 暗褐色土 ややもろい。直径1.0mm内外のAs-C軽石と暗褐色土粒子を均一に混じる。
3. As-C軽石層 直径1.0mm内外の軽石。混入物少ない。

1区32号溝



1区32号溝 A-A' B-B' C-C'

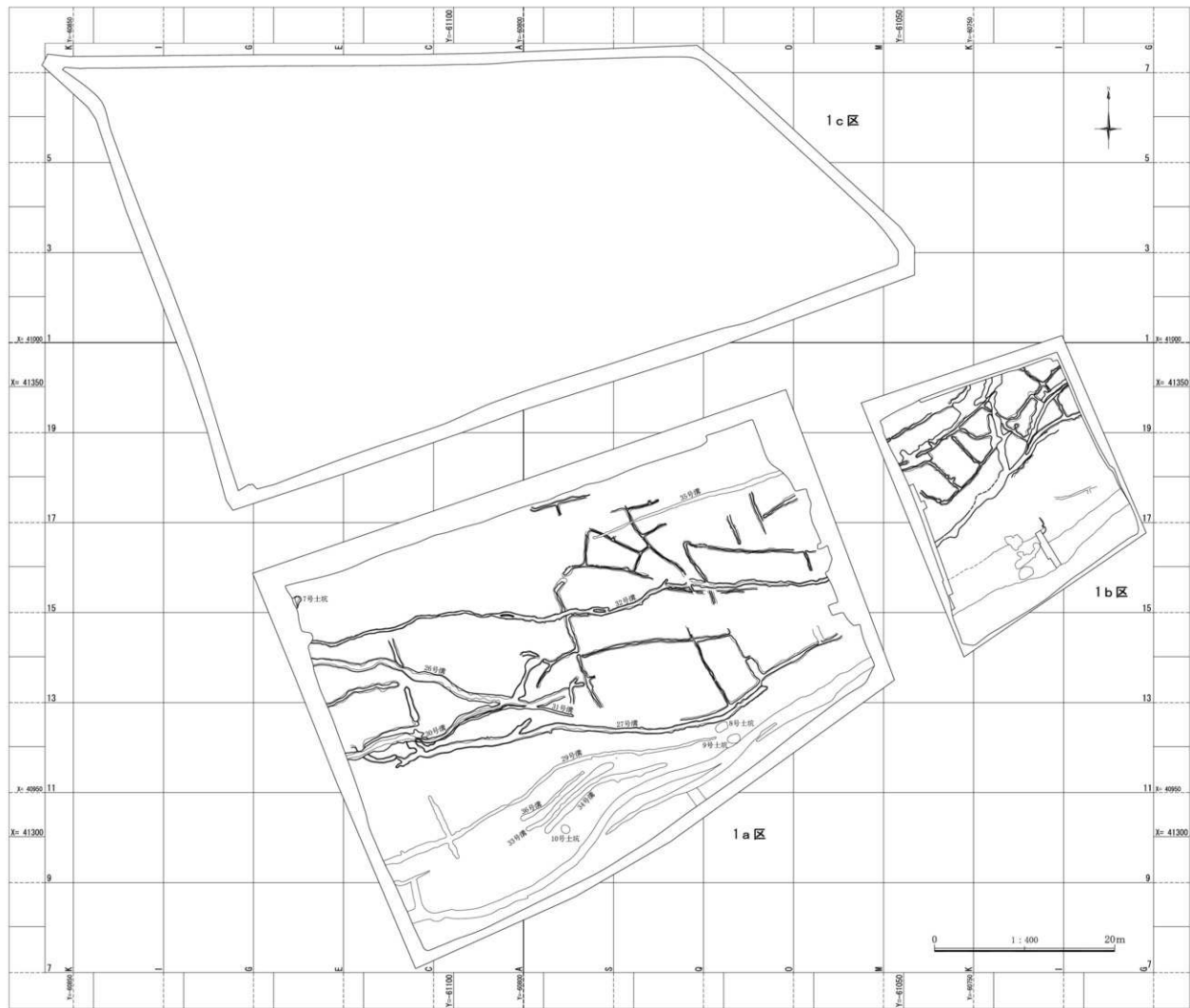
1. 黒色土 土壌粒子大変細かく、やや軟らかい。植物質の繊維わずかに含む。
2. 暗褐色土 ややもろい。直径1.0mm内外のAs-C軽石と暗褐色土粒子を均一に混じる。
3. As-C軽石層 直径1.0mm内外の軽石。混入物少ない。



1区32号溝 D-D' E-E'

1. 黒色土 粘性有。地山黒色土に似た土。植物多く混入(ビート層)。白色粒子(As-C?) 微量。
  2. 暗褐色～淡褐色砂質土 直径0.5mmほど(0.5mm以下主体)。As-C混。
  3. 淡褐色軽石層 As-C混。直径3.0mmほど。
- F-F' G-G'
1. 黒色土 粘性有。地山黒色土に似た土。植物多く混入(ビート層)。白色粒子(As-C?) 微量。
  2. 暗褐色～淡褐色砂質土 直径0.5mmほど(0.5mm以下主体)。As-C混。

第53図 1区30号・32号溝土層断面



第54图 1区4面全体图

## (3) 土坑

1区7号土坑 (付図6 第55図 PL28)

位置 1a区1-99-E・F-15G

重複 なし

形状 上方の開いた筒状。

規模 長軸0.81m以上 短軸0.80m

残存壁高0.31m以上

長軸方位 N-63°-E 断面形 U字形

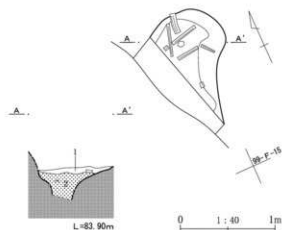
埋没土 下層は浅間C軽石で、上層は軽石粒を含む黒褐色砂質土で埋まっていた。

底面 はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 上層および下層の埋没土中から木片が出土したのみで、土器・石器などは出土しなかった。

所見 1a区の北西隅で検出された。谷の北緩斜面の上位にあたる。浅間C軽石に直接埋没していることから、古墳時代前期の遺構とみられる。出土した木片に加工痕跡はなく自然木である。西半分は発掘区域外で全体をとらえることはできなかった。何のために掘られたかは不明である。

## 1区7号土坑



## 1区7号土坑A-A'

1. 黒褐色土 2面の地山(黒べたの土)に似るが、やや砂質。As-C型か? (白色粒ではない)。植物炭じる。
2. As-C層 赤褐色味帯び、C面A-A'ベクトル中のAs-Cと同じ。但し、植物炭じる。

第55図 1区7号土坑

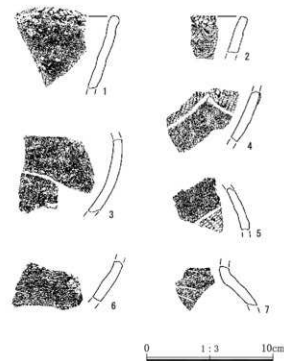
## 6. 弥生時代の遺物

(第56図 PL157 遺物観察表P.604)

1区では弥生時代の遺構は検出されなかったが、弥生土器の破片が7点(第56図)出土した。弥生時代後期から古墳時代初頭まで下る帯状縄文帯や、沈線区画のなかを縄文で充填する弥生時代中期後半の遺物がある。遺物の詳細については、2区遺構外出土の弥生土器とともにP372で記載した。

1区で弥生土器が出土したのは、いずれも台地南斜面の1c区である。17号溝埋没土中から1点、古墳時代包含層中から4点、2-J-4、2-F-2グリッドの遺構確認時にそれぞれ1点ずつが出土した。遺構に伴う出土状態でなく、混入である。

荒砥北三木堂Ⅱ遺跡の北側に隣接する荒砥北三木堂遺跡2区では5軒の弥生時代中期後半の住居が検出されている。また、本遺跡1区谷内には古墳時代初頭に降下した浅間C軽石で直接覆われた水田が検出されており、その開田時期が弥生時代まで遡る可能性もある。これらの弥生土器は、弥生時代の遺構が1区周辺にもある可能性を示唆している。



第56図 1区出土の弥生土器

## 7. 縄文時代の遺物

1区では縄文時代の遺構は検出されなかったが、17点の縄文土器と、236点の石器類が出土した。このうち礫や礫片は縄文時代のものとの確認は得られないが、縄文時代の石器と出土位置や層位が一致していることから、報告の便宜上、本項であつた。

## a. 縄文土器 (第57図 PL157 遺物観察表P.605)

**土器型式と分布** 縄文土器18点は、いずれも古墳時代の住居や近世以降の溝や池状遺構の埋没土中に混入してみつかった。これらの縄文土器を型式ごとに分布状況を示したのが第270図(第5章P.378)である。

黒浜式土器1点は1a区2面で出土した。諸磯a式土器4点・諸磯b式土器4点は1a区15号溝、1b区池状遺構、1c区2号住居、古墳時代包含層から出土し、散在していた。加曾利E式土器2点は1c区1面と2号住居埋没土中から出土しており、数は少ないが偏在していた。また、称名寺式土器は、1c区古墳時代包含層中から6点が比較集中して出土している。2a区南縁部にも称名寺式土器が偏在しており、連続するものと推定される。

**縄文土器の特徴** 1区で出土した縄文土器のうち、脆弱な2点を除く15点を実測・採拓して第57図に掲載した。各型式の土器の特徴は、最も資料数の多い

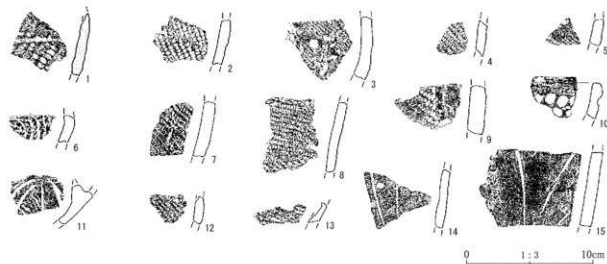
2区(第5章P.376~380)でまとめて記載した。

## b. 石器類 (第58・59図 PL157~159 遺物観察表P.610~611)

**石器類の器種と分布** 石器類は石器35点、剥片68点、砕片24点、礫片53点、礫97点が出土した。石器には打製石斧・石鎌・削器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・スタンプ形石器・石核・凹石・擦石・敲石が認められた。

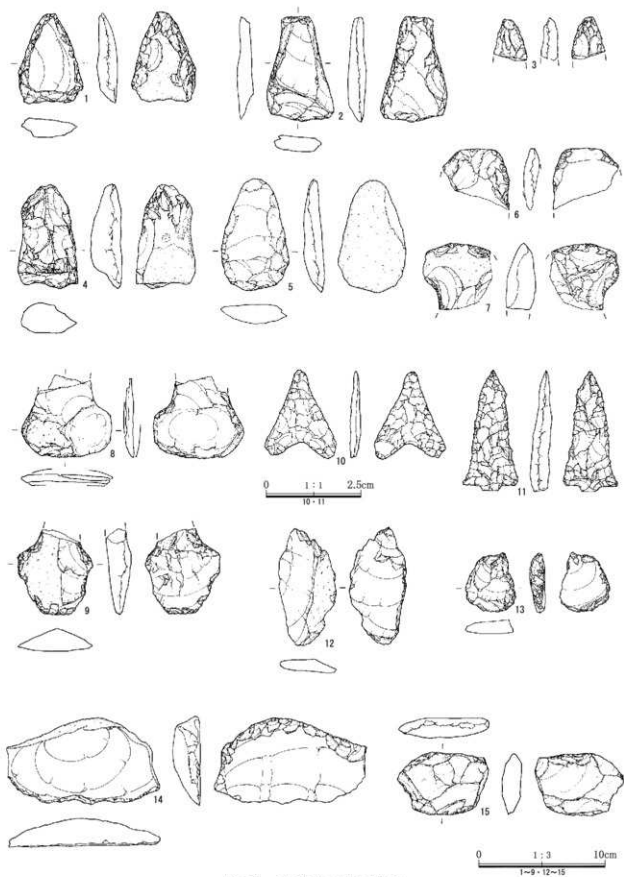
打製石斧は9点出土したが、いずれも台地縁辺の1c区から出土した。石鎌2点はいずれも黒色頁岩製であるが採探資料と1a区13号溝混入資料である。削器5点は1a区に1点、他は1c区の溝等に混入して出土した。加工痕ある剥片は9点は、1a区に2点、1b区に1点、1c区に6点と1c区に偏在していた。使用痕ある剥片は1a区と1b区で1点ずつが出土した。スタンプ形石器は1a区の15号溝の埋没土に混入して出土した。石核は1c区から黒色頁岩の1点が出土した。凹石3点・擦石2点が1a区の2面および13号溝で出土した。擦石1点と敲石1点が1c区の古墳時代遺物包含層に混入して出土した。1区では特別な偏在傾向は認められない。

**石器の分類とその特徴** 1区出土の35点の石器のうち25点の石器を第58・59図に掲載し、その他は写真のみ掲載した。各石器の分類と特徴は、最も資料数の多い2区(第5章P.384)でまとめて記載した。

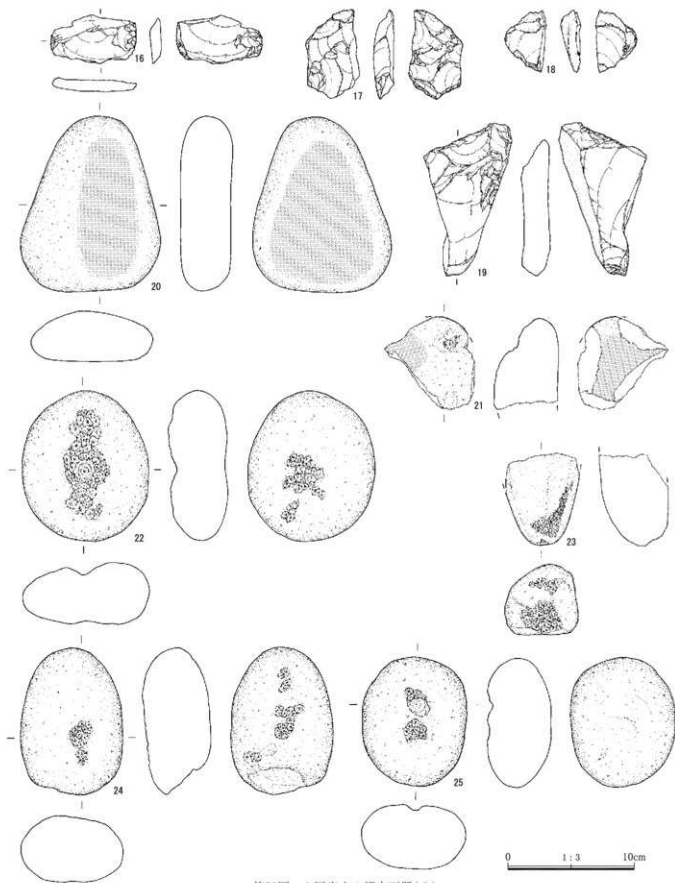


第57図 1区出土の縄文土器





第58図 1区出土の縄文石器(1)



第59図 1区出土の縄文石器(2)

## 第5章 2区の遺構と遺物

### 1. 概要

2区は、1区谷部の北側の台地縁辺から、今井袴道橋の設置される既存道路までの間とした。これは①工事工程との調整が2区と3区間の既存道路を境におこなわれたこと、②2区はローム台地が長く広がる地点であり、ここを地形的に分割することができなかったことによる。したがって、3区と遺構分布がつながっていても区を分けることとなった。2区は広い範囲を複数の年度および体制で調査したことから、若干の記録の齟齬や混乱があったことは否めない。これらについては報告書作成時に遺構番号の付け替え等を最小限でおこなっている。

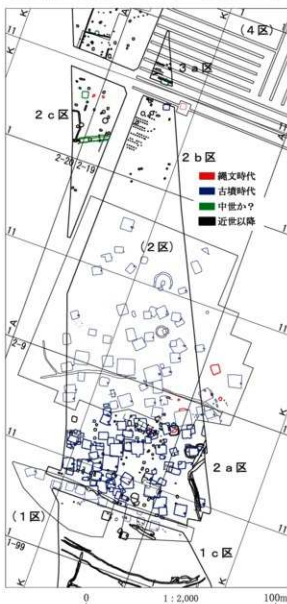
また、本道橋は昭和49年に実施された県営荒砥南部園地整備に伴って既に発掘調査がおこなわれている。2区周辺では、北側で流山部分を切り土する部分(園地整備調査2区)が調査された。この時には古墳時代中後期を中心とした集落が検出されているが、今回の上武道路に関わる調査では、南側にさらに集落が展開することが明らかになり、今井沼の谷に面した古墳時代集落の範囲がさらに明確になったことになる。

2区の遺構確認面はいずれの時期の遺構についても、関東ローム層上面(基本土層第4図⑤I b層上面)である。一部縄文時代の遺構は同図II層上面まで下げないと遺構の平面形をとらえられなかったため、掘り下げてから遺構確認をおこなった。

2区で検出した遺構は、近世、中世、古墳時代中後期・縄文時代にわたるが、時期を特定できなかったものもあった。特に中世以降は遺構に伴うと判断できる出土遺物が少ないことから、時期を判断できない遺構が多い。また弥生時代中期後半の土器が出土した。本節では、かろうじて時期区分できる中世以降、古墳時代、弥生時代、縄文時代に分けて、各遺構を記載する。なお、記載の方法には煩雑さを避

ける為、遺構一つ一つを記載したものと同種のをまとめて記載したものとがある。また遺構の分布は2a区を付図7、2b・2c区を付図8に掲げた。中世以降の遺構は、墓坑5基、道跡1カ所、住居1棟、掘立柱建物1棟、ピット18基、溝8条、井戸9基、土坑100基が検出された。

墓坑は4基が2区南端の台地縁辺に、1基がやや北側に離れて検出された。いずれの墓坑からも布に



第60図 2区の遺構分布

包まれた状態の銭貨が出土している。北側の1基については人歯骨や陶磁器の出土はなく、銭貨以外に墓坑とする積極的理由はないが、本項で報告した。周辺には埋没土の共通した同規模同形態の土坑が集中して検出されている。これらも墓坑の可能性はあるが、本書では近世以降の円形土坑として報告した。なお古墳時代の46号住居からも布に包まれた銭貨が出土したが混入である。周辺に墓坑があったことが想定できよう。

道跡は2区の北端2c区で検出された。側溝状の凹地が両側にある硬化面である。時期は不明であるが層序からは中世以降の可能性が高い。

堅穴住居も2区の北端2c区で検出された。上記道跡の北方約20mのところである。溝の走向と住居壁方位は概ね一致する。南北壁際に2本柱穴をもつ中世特有の堅穴で、出土遺物も12～13世紀の常滑焼壺破片、中世と見られる土器鍋底部破片が出土しており、当該期の堅穴と推定される。

また、古墳時代の住居に後出し、それ以降としか時期が確定できない掘立柱建物1棟が2a区で検出されている。3間×2間の総柱の建物で形態からは中世のものとも推定されるが、断定はできない。周辺には単独の小ピットが分布していたが、建物棟の柱穴と考えることはできなかった。

溝は8条が検出された。1号・2号・4号・7号溝は2a区の東端に平行して掘られていた。台地の縁辺を画する溝と推定される。特に1号溝は深い薬研堀で砂の堆積が見られた。時期は近世以降と見られる。3号・4号・5号溝は隅丸方形に巡る周溝状の溝で、2a区北東部に集中して検出された。古墳時代の堅穴住居と重複しているがいずれも住居より新しい。8号溝は2区北端の2c区で検出された。L字状に屈曲していた地割に関連する溝と推定される。時期の詳細は不明であるが、近世以降と推定される。

井戸は8基が検出された。2区南端に5基、北端3基が偏在していた。出土遺物は縄文時代や古墳時代のものも混在しているが、中近世の石造物破片が

多い。また中世の軟質土器すり鉢破片が出土している例が多く、中世に掘られた可能性が高いと推定される。

土坑は100基が検出された。このうち2c区147号土坑は中世の軟質土器すり鉢破片や大型の擦石が出土しており、中世の可能性が高い。他の土坑は時期を明確にする出土遺物などがなく、中世以降で時期不明と言わざるを得ない。本節ではこれらを平面形で分類し、隅丸方形、長方形、円形、楕円形、不整形円形に分けて記載報告する。

長方形の土坑は3区に見られるような地割にそって掘られた農耕用の土坑と同規模のものがあるが、2区では単独で分布している。2a区の円形の土坑の中には直径1m前後で浅間B軽石を多く含む黒褐色土で埋まったものがある。この埋没土の特徴は六文銭を出土した近世墓坑と共通し、大きさも近似することから、近世の土坑と考えられるが、墓坑とは断定できなかった。2b・c区には不整形の土坑が多く分布していたが、何のために掘られたかについては、明確にできなかった。

古墳時代の遺構は住居61軒、土坑40基が検出された。住居は古墳時代前期の住居1軒が2b区北端で、古墳時代中期から後期にかけての住居63軒が台地縁辺にあたる2a区で検出された。

古墳時代前期の遺構は、浅間C軽石下水田と古墳時代前期の樽式土器が1区で出土しているほかは、2b区64号住居が唯一である。一方、2a区古墳時代中期・後期の住居群は密集しており著しく重複していた。一辺8mの大型の住居が含まれており、圃場整備調査区を含めると比較的大きな集落が想定できる。圃場整備に伴って調査された荒砥北三木堂遺跡の住居では初期および古式須恵器が比較的多量に出土したことが特徴としてあげられている。本遺跡でも大型甕破片とともに、二重甕、把手付高坏形土器が出土しており、注目される。

土坑は長方形、隅丸方形、円形、楕円形に分けられる。長方形、隅丸方形の土坑は大型のものと小型のものがあり、特に大型の方形土坑が特筆される。

これらの土坑には5世紀中葉から6世紀前半の住居と重複関係を示すことから、集落の存続期間内に住居と共存していたと考えられる。埋没土最下層に焼土を混じる例が多くあり、土坑の機能を考える上で重要と考えられる。また、埋没土壌の植物珪酸体分析を実施したところ、土坑埋没土の堆積当時はネザサ節などの竹筴類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られる草原的な環境であったことがわかった。イネやムギ類の植物珪酸体も検出されているが、比較的微量のため、土坑埋没土に混入したのか、土坑の機能に関わるものなのかを明確にすることはできなかった。

弥生時代の遺構は検出されなかったが、古墳時代住居等の埋没土から中期後半の土器片が出土した。北側の圃場整備調査区では当該期の住居が検出されていることから、何らかの活動空間であったことが推定される。その詳細については古墳時代以降の開発にあたって掘乱されたものと考えられる。

縄文時代の遺構は土坑4基があり、2a区で陥穴2基、2c区で円形・楕円形土坑2基が検出された。陥穴の時期は出土遺物が少ないことから確定できなかった。108号土坑からは花積下層式および諸磯a式土器が出土している。

また古墳時代の住居埋没土や遺構確認中の表土など遺構に伴わない状態で縄文土器破片や石器類が多数に出土した。出土した縄文土器の時期は早期から後期にわたっていたが、最も多く出土したのは黒浜式と諸磯a式である。石器類の時期は不明であるが、縄文土器の分布とほぼ重なっており、黒浜式期から諸磯a式期の石器類が多いと推定される。

## 2. 中世以降の遺構と遺物

### (1) 墓坑

2区13号土坑 (第61図 PL30-160 遺物観察表P.617)

位置 2a区2-9-D-15G

重複 なし 形状 ほぼ円形

規模 長軸1.04m 短軸0.97m 残存壁高0.32m

長軸方位 N-37°-E 断面形 U字形

埋没土 下層はローム粒・塊を多く含む黄褐色土、上層は浅間Bテフラとローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。 底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から銭貨6枚が布に包まれた状態で出土した。

所見 人歯骨は出土していないが、形態と六枚包みの銭貨の存在から墓坑と考えられる。浅間Bテフラを含む暗褐色土で埋まった円形の土坑は第83図に示したように、10基余が検出されている。しかし本土坑のように用途を推定できる出土遺物がなく、これらは円形土坑として報告した。形態の類似性からすれば墓坑の可能性もあり得る。

### 2区90号土坑

(第61図 PL30-160 遺物観察表P.562-617)

位置 2a区2-9-K-9G

重複 なし 形状 長方形

規模 長軸0.93m 短軸0.67m 残存壁高0.30m

長軸方位 N-78°-W 断面形 U字形

埋没土 やや砂質の暗灰褐色土で埋まっていた。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 北東部に集中して人歯骨と布に包まれた銭貨6枚が出土した。人歯骨は底面から7~15cm、銭貨は6cm浮いた状態で出土した。また埋没土中から陶器皿(第61図3)と陶器碗(4)が出土した。

所見 人歯骨や6枚包みの銭貨が存在したことから墓坑と考えられる。人歯骨については鑑定中であり、結果は隣接する荒砥前田II遺跡出土人骨とともに報告する予定である。

### 2区91号土坑 (第61図 PL30-160 遺物観察表P.617)

位置 2a区2-9-K-9G

重複 なし 形状 隅丸方形

規模 長軸0.67m 短軸0.66m 残存壁高0.47m

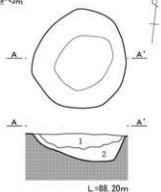
長軸方位 N-89°-E 断面形 箱形

埋没土 90号土坑と同様にやや砂質の暗灰褐色土で埋まっていた。

第5章 2区の遺構と遺物

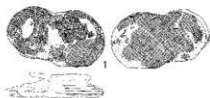
2区13号土坑

F-D-15  
北~2m  
西~3m

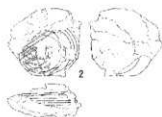


2区13号土坑A-A'

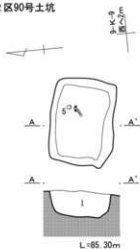
1. 暗褐色土 As-Bを多く含む、ローム粒を含む。
2. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊を多く含む。



2区46号住居内出土銭貨

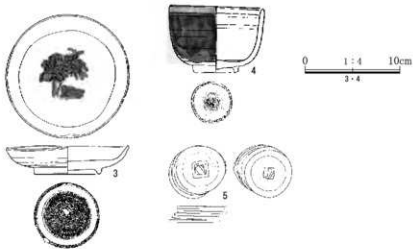


2区90号土坑

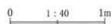
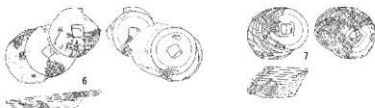
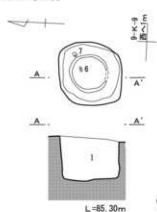


2区90号・91号土坑A-A'

1. 暗褐色土 やや砂質の土。白色軽石粒(直径1.0mmほど)ごく少量含む。黄褐色土(ローム)を粒状(直径5.0mmほど)ごく少量含む。

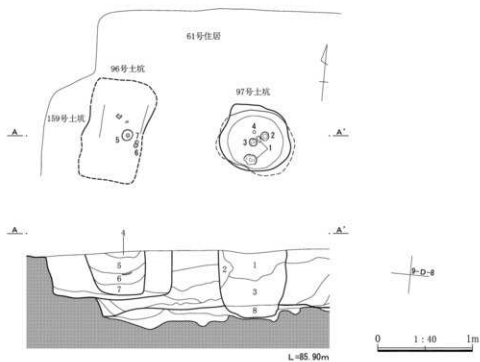
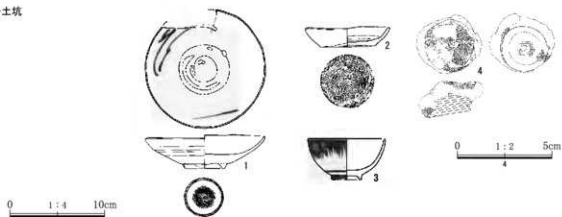


2区91号土坑

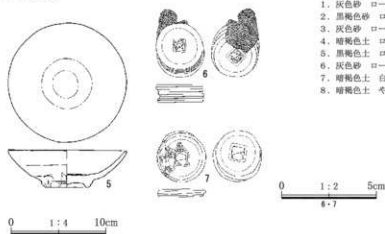


第61図 2区13号・90号・91号土坑と出土遺物

## 2区97号土坑



## 2区96号土坑



## 2区96・97号土坑 A-A'

1. 灰色砂 ローム粒、炭粒を少量含む。
2. 黒褐色砂 ローム粒、炭粒をごく少量含む。
3. 灰色砂 ローム粒を多く含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を少量含む、やや砂質。
5. 黒褐色土 ローム粒、機土粒、炭粒をごく少量含む、やや砂質。
6. 灰色砂 ローム粒をごく少量含む。
7. 暗褐色土 白色軽石粒(直径0.5~2.0mmほど)均一に含む。
8. 暗褐色土 やや砂質で、ローム粒(直径0.5~1.0mmほど)含む。

第62図 2区96号・97号土坑と出土遺物

## 第5章 2区の遺構と遺物

**底面** 平坦である。底面中央には内径0.34mの円形の圧痕が残されていた。

**遺物と出土状況** 北東側の円形圧痕の内外から1包みずつ、合計2組の布包み銭貨が底面から5cm浮いた状態で出土した。銭貨はそれぞれ7枚、10枚が包まれていた。

**所見** 人歯骨は出土していないが、形態と六枚包みの銭貨の存在から墓坑と考えられる。底面の円形圧痕は座席の槽の痕跡とも考えられる。

### 2区96号土坑

(第62図 PL31・160 遺物観察表P.562・617)

**位置** 2a区2-9-D-8G

**重複** 62号住居に後出する。**形状** 長方形と推定。

**規模** 長軸1.07m 短軸0.60m 残存壁高0.48m

**長軸方位** N-6°-E **断面形** 箱形

**埋没土** ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。中位よりやや下層は灰色砂で埋まっていた。

**底面** ほほ平坦であると推定される。

**遺物と出土状況** 中央部東壁際で2組の布包み銭貨が底面からそれぞれ30cm、23cm浮いた状態で出土した。また中央部で陶器皿(第62図5)が出土した。また図示しなかったが、土師器坏破片が出土した。

**所見** 当初の掘り下げ作業を、遺構重複を認識できずに始めたために、全体形状を記録することはできなかった。土層観察用ベルト部分のみ調査することができた。人歯骨は出土していないが、形態と六枚包みの銭貨の存在から墓坑と考えられる。

### 2区97号土坑

(第62図 PL31・160 遺物観察表P.562・617)

**位置** 2a区2-9-K-9G

**重複** 61号住居より新しい。**形状** 不整形円形

**規模** 長軸0.76m 短軸0.68 残存壁高0.68m

**長軸方位** N-94°-E **断面形** 箱形

**埋没土** とともにローム粒を含む灰色砂と暗褐色土が互層に堆積していた。

**底面** 平坦である。

**遺物と出土状況** 中央部から布包み銭貨1組が底面から14cm浮いて出土した。またかわらけ(第62図2)、陶器碗(3)が底面直上で出土した。南部壁際で磁器皿(1)が底面直上で出土した。銭貨は10枚が包まれていたと推定される。

**所見** 人歯骨は出土していないが、形態と六枚包みの銭貨の存在から墓坑と考えられる。2-9-K-9Gで検出された90号・91号土坑も長方形と円形の墓坑が並んで検出されたが、本土坑も96号・97号土坑が並んでいる。何らかの意図があったと推定されるが、明確にすることはできなかった。

### 2区46号住居内出土古銭

(第61図 PL160 遺物観察表P.617)

**位置** 2a区2-9-D-11G

**遺物と出土状況** 2区46号住居の北東隅の床面上6cmで布包み銭貨1組が出土した。

**所見** 46号住居は古墳時代後期の住居であり、銭貨は混入と考えられる。周辺に墓坑があったと推定される。北東部に近接してある85号土坑は近世以降の円形土坑として報告したが、形態から推せば墓坑の可能性も考えられる。

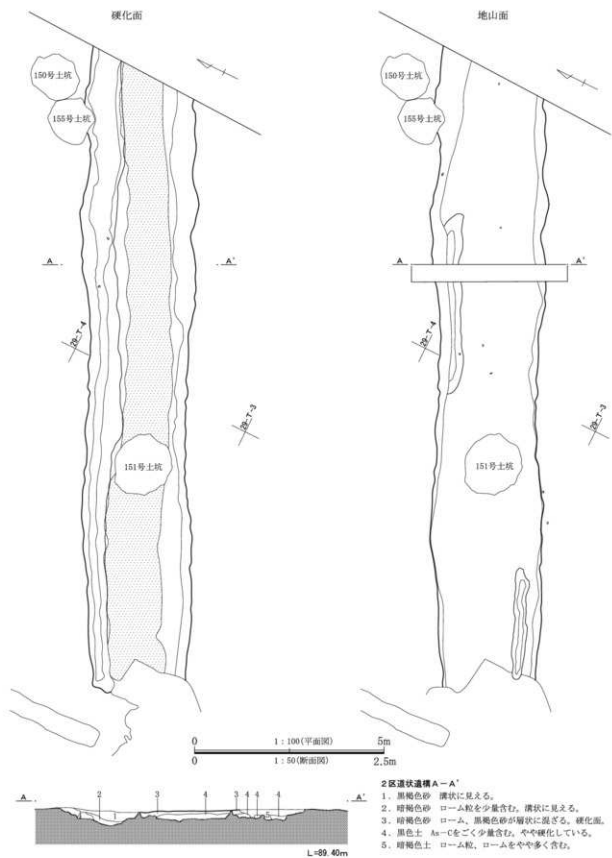
### (2)道跡(第63図 PL31・32)

2区北端2c区のローム上面で、両側に側溝状の落ち込みを伴う硬化面を検出した。その形状から道跡と推定される。

硬化面が確認できたのは2-29・30-R-A-3～5グリッドで、溝の走向はN-64°-Eである。西端は後世の攪乱により、2-30-A-2・3グリッド内で硬化面を検出できなくなるが、東端は発掘区外に伸びている。しかし東に隣接する2b区でその延長部分は検出されなかった。

検出された硬化面の長さは16.28m、幅は6.0～7.0mで、北側には硬化面にそって幅0.64～1.0m、深さ0.18～0.59mの溝が検出された。南側は明確な溝状ではないが硬化面にそって幅0.24～0.56mの凹地が確認できた。側溝の痕跡と推定される。





第63図 2区遺状遺構

硬化面を覆っていたのは全体に砂質で粘性に乏しい褐色土である。浅間山起源のテフラが多く混入していると観察されたが、テフラを特定することはできなかった。路面は、深さ15cmほどの掘り方を下層は白色軽石を少量含む黒色土、上層を厚さ3~7cmのロームと黒褐色砂の互層で埋めて硬化層が形成されていた。側溝内はローム粒を含む黒褐色砂で埋まっていた。硬化面のほぼ中央および北東端には151号・155号土坑が重複して掘り込まれているが、いずれも土坑の方が新しい。なお土坑の時期は近世以降と考えられるが詳細は不明である。

出土物は硬化面北側側溝内で土器が2点、硬化層内で近世土器3点、縄文土器2点、縄文時代石器2点、剥片1点が出土した。北側側溝内の土器は遺憾ながら所在不明である。調査では道跡の時期を確定できなかった。

(3) 竪穴住居

2区65号住居(第64図 PL.32・160 遺物観察表P.562)

位置 2b区2-30-B-7G

形状 ほぼ正方形 重複 なし

規模 長軸3.47m 短軸3.33m 壁高0.50m

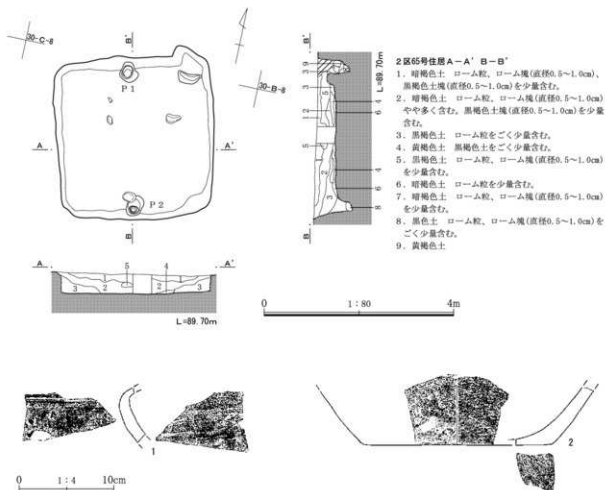
面積 9.06㎡ 長軸方位 N-14°-W

埋没土 ローム粒・塊を含む黄褐色土・黒褐色土で埋まっていた。

竈 検出されなかった。竈に替わる地床炉等の施設も検出されなかった。

柱穴 南北壁のほぼ中央に壁柱穴P1・P2を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が87×40×40cm、P2が45×32×49cmである。柱穴はほぼ住居下場に最深部がくるような位置で、ほぼ垂直に掘られていた。

周溝 周溝は検出されなかった。



第64図 2区65号住居と出土遺物

**貯蔵穴** 明確な貯蔵穴と判断できる遺構は検出されなかったが、北東隅に長径0.53m、短径0.22m、深さ0.17mの不整楕円形の土坑が検出された。北壁もやや膨らむ。不定型な掘り込みであるが、何らかの施設の可能性もある。

**床面** 床面は平坦である。地山掘削面を床面としており、掘り方は検出されなかった。

**遺物と出土状況** 北部で土器片が1点、南東隅で土器片が1点、埋没土中から土師器杯・甕破片が数点出土した。記録の混乱により図化した2点の土器の出土位置の確認がとれないが、最も新しい常滑焼甕(第64図1)と軟質土器鍋(2)が遺構の時期を示すと考えられる。また大型の自然踏3点が出土した。特にP2脇では床面直上で出土した。

**所見** 出土遺物から12~13世紀の遺構と考えられる。火処の施設がないことから住居でない可能性もあるが、相対する2本の壁柱穴の竪穴は中世の住居遺構に類例があり、本報告では住居とした。

#### (4) 掘立柱建物

##### 2区1号掘立柱建物

(第65図 PL33・160 遺物観察表P.562・563)

**位置** 2a区2-8-D・E-16・17G

**主軸方位** N-8°-E

**重複** 17号住居・22号住居に後出する。21号・29号・30号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

**形態** 3×2間(8.23m×4.28m・27.5尺×14.25尺)の身舎に南壁中央に幅3尺の張り出しをもつ。面積49.13㎡。棟方向は東西棟。柱間は東西辺2.11~2.2m、南北辺2.71~2.79m。

北辺の柱穴は柱軸にのる。西から2番目の柱穴は17号住居柱穴と一部が重なり、埋没土の識別が困難で検出できなかった。東辺はいずれの柱穴も柱軸にのるが柱間は南側のP4・P5間が北側のP3・P4間よりやや長くなっている。南辺はほぼ柱軸にのるが、P6のみやや南西にずれている。西辺はほぼ等間隔に柱軸にのる。張り出しの南東部P13はやや柱軸からはずれ、P6と同様に南西側に少しずれる。

いずれの柱穴でも柱痕跡は検出できなかった。柱穴は楕円形あるいは円形で、長径0.3~0.54m、短径0.27~0.42m、深さ0.29~0.42mとやや幅がある。張り出し部の柱穴はやや小さく浅い傾向がある。

**内部施設** 無し

**出土遺物** 掘立柱建物検出時に須恵器壺(第65図1)が出土したが、これと同一個体とみられる破片(2)が本建物P3の北側で検出されたビット1(第65図)から出土している。また本建物南張り出しの西側の柱穴(P12)から、青磁皿破片(3)が出土している。

**所見** 出土遺物から、近世の遺構である可能性が高いと考えられる。

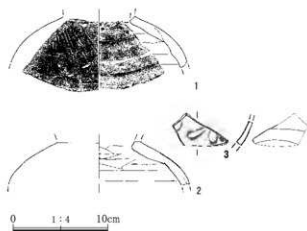
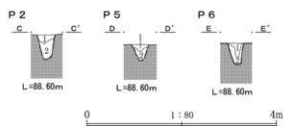
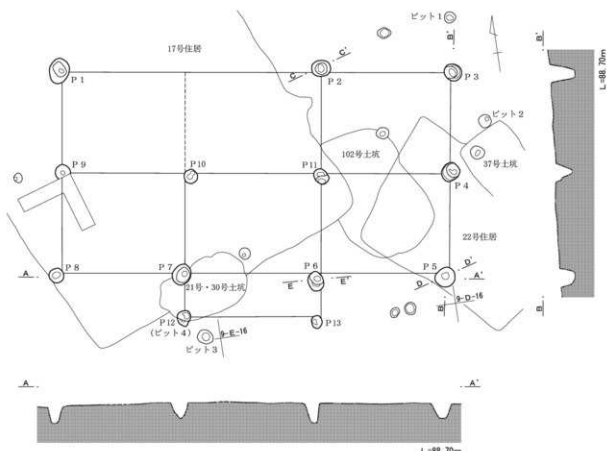
#### (5) ビット (第66図 PL33・34・160)

1号掘立柱建物の東側・南側で、建物柱穴以外のビットを検出した。ごく小さく浅いものを除き18基に番号を付して埋没土や断面形の記録を行った。

ビット1・2は1号掘立柱建物の北東外側、ビット3は南側にある。ビット1からは須恵器壺破片(第65図2)が出土した。ビット4は、報告書作成時の検討から、1号掘立柱建物の南張り出し南西隅の柱穴(P12)と判断した。ビット5~8は記録の不備から、遺憾ながら平面図中のどのビットにあたるのかは不明である。ビット9~16は第66図のように、1号掘立柱建物の東側に不規則に分布していた。

ビット12・15・17・18はいずれも深さが0.4~0.6m以上で柱穴状の形態と深さを備えているが、他のビットは柱穴と断定できる根拠はない。上記の4つのビットも空間的には関連性がなく、もう1棟建物を想定できるものではなかった。このうち、ビット18は古墳時代の110号土坑北壁に接しており、位置的には土坑に付属するビットの可能性はあるが、土層の詳細な観察はできていない。

以上のことから、これらのビットは1号掘立柱建物柱穴と判断できる4を除き、単独のビットとして報告せざるを得ない。掘削された時期についても、古墳時代より新しいが、詳細は不明である。



2区1号掘立柱建物

P2 C-C'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含み、ザラザラしている。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

P5 D-D'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含み、ザラザラしている。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

P6 E-E'

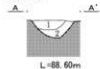
1. 暗褐色土 As-Bを多く含み、ザラザラしている。
2. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。

第4表 2区1号掘立柱建物跡柱穴計測表

建物全体規模		3×2間		面積		49.13㎡	
主軸方向		N-8°-E		施設		南辺中央に張り出し	
前・業行の規模(m)	柱穴No	規模(m)		深さ	形状	次柱穴との間隔(m)	
		長さ	短径				
北辺 8.23	P1	0.54	0.42	0.44	楕円形	5.48	
	P2	0.4	0.35	0.56	円形	2.73	
東辺 4.28	P3	0.4	0.35	0.55	円形	2.11	
	P4	0.43	0.37	0.34	円形	2.2	
南辺 8.23	P5	0.44	0.4	0.32	円形	2.71	
	P6	0.41	0.33	0.45	楕円形	2.79	
	P7	0.46	0.39	0.35	楕円形	2.72	
西辺 4.30	P8	0.32	0.3	0.34	円形	2.18	
	P9	0.31	0.28	0.29	楕円形	2.15	
	P10	0.3	0.28	0.39	円形	2.72	
南張り出し	P11	0.35	0.27	0.54	楕円形	P4へ2.8	
	P12	0.35	0.28	0.2	楕円形	2.72	
	P13	0.28	0.22	0.21	楕円形	P6へ0.9	

第65図 2区1号掘立柱建物と出土遺物

ビット9



## 2区ビット9A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒混入。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。

ビット10



## 2区ビット10A-A'

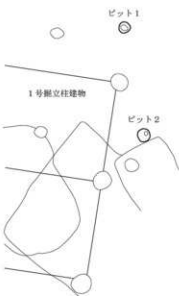
1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒混入。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。

ビット11

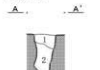


## 2区ビット11A-A'

1. やや明るい暗褐色土 白色 軽石を含む、やや締まりなし。
2. 暗褐色土 ローム塊、炭粒を含む。



ビット12



## 2区ビット12A-A'

1. 暗黄褐色土 白色軽石、ローム粒、暗褐色粒を含む。焼土粒わずかに混入。
2. 暗黄褐色土 小ローム塊含む、やや締まりなし。

ビット13



## 2区ビット13A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を含む。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。

ビット14



## 2区ビット14A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒混入。

ビット15



## 2区ビット15A-A'

1. やや明るい暗褐色土 白色軽石・ローム土まだらに含む。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土まだらに含む、白色軽石わずかに混入。
3. 暗褐色土 ローム塊やや多く含む。炭粒少量混入。
4. 暗黄褐色土 ローム塊やや多く含む。ボソボソしている。

ビット17



## 2区ビット17A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒混入。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。



## 2区ビット18A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、炭粒焼土粒、ローム粒やや多く混入。
2. やや明るい暗褐色土 白色軽石含む、炭粒、焼土粒、ローム塊少量混入。
3. 暗褐色土 ローム塊やや多い。
4. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに混入。ローム塊やや多く混入。締まりなく、ボソボソしている。

ビット16



## 2区ビット16A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒混入。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。

第66図 2区ビット群

第5章 2区の遺構と遺物

(6)溝

2区1号溝 (第67図 PL35・36)

**位置** 2a区2-8-O-9G、P-9~12G  
R-12~15G、Q-11~15G

**形状** 北端は南西方向のほぼ直線の溝で、2-8-R-13グリッドで緩やかに南東方向に方向を変えている。屈曲点付近で前出する4号溝・7号溝と重複する。また10号住居、57号住居に後出する。

**規模** 調査長 35.71m 最大幅 1.94m  
最小幅 0.32m 深さ 1.38m

**走向** 北端N-27°-E 南端N-36°-W

**断面形** 下半部は底面の幅が1.0mほどの箱形で、上半部は大きく外方に開く。

**埋没土** 下層は砂を多量に含む黒褐色土で、上層はローム粒・塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から縄文土器破片3点、土師器破片129点、須恵器破片1点、陶磁器1点が出土した。土師器破片が多いのは古墳時代の10号住居、57号住居を壊して掘られているためである。火鉢の高台部と推定される破片が1片出土しているが、小片のため図化できなかった。土師器5点、須恵器1点を遺構外遺物として図示した(第265・266図)が、いずれも混入の土器である。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区2号溝 (第67図 PL36)

**位置** 2a区2-8-R-14~17G、Q-17G

**形状** 南北方向のほぼ直線の溝。10号住居に後出。

**規模** 調査長 15.57m 最大幅 1.77m  
最小幅 1.08m 深さ 0.13m

**走向** N-10°-E

**断面形** 浅い皿形。

**埋没土** 褐色土を斑に含む砂質の暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片50点、須恵器破片1点、円筒埴輪片1点、円礫片1点、剥片2点が出土した。土師器破片が多いのは古墳時代の

10号住居、57号住居を壊して掘られているためである。いずれも混入の土器である。円筒埴輪破片1点を遺構外として図示した(第266図49)。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区4号溝 (第67図 PL35)

**位置** 2a区2-8-P-10・11G  
R-12~14G、Q-11~13G

**形状** 北端は南東方向のほぼ直線の溝で、2-8-R-13グリッドで1号溝南縁から占地していた。1号溝には前出する。北端は7号溝と重複するが、埋没土が同様であるために新旧関係が判断できなかった。また57号住居に後出する。

**規模** 調査長 19.67m 最大幅 0.66m  
最小幅 0.21m 深さ 0.04m

**走向** 南端部でN-33°-W

**断面形** U字形

**埋没土** 炭化物粒・ローム粒を多く含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片2点、円礫1点が出土したのみである。

**所見** 周辺は削平を受けており、溝の残存状態は不良である。上層の攪乱土中には現代の磁器破片等も出土している。掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

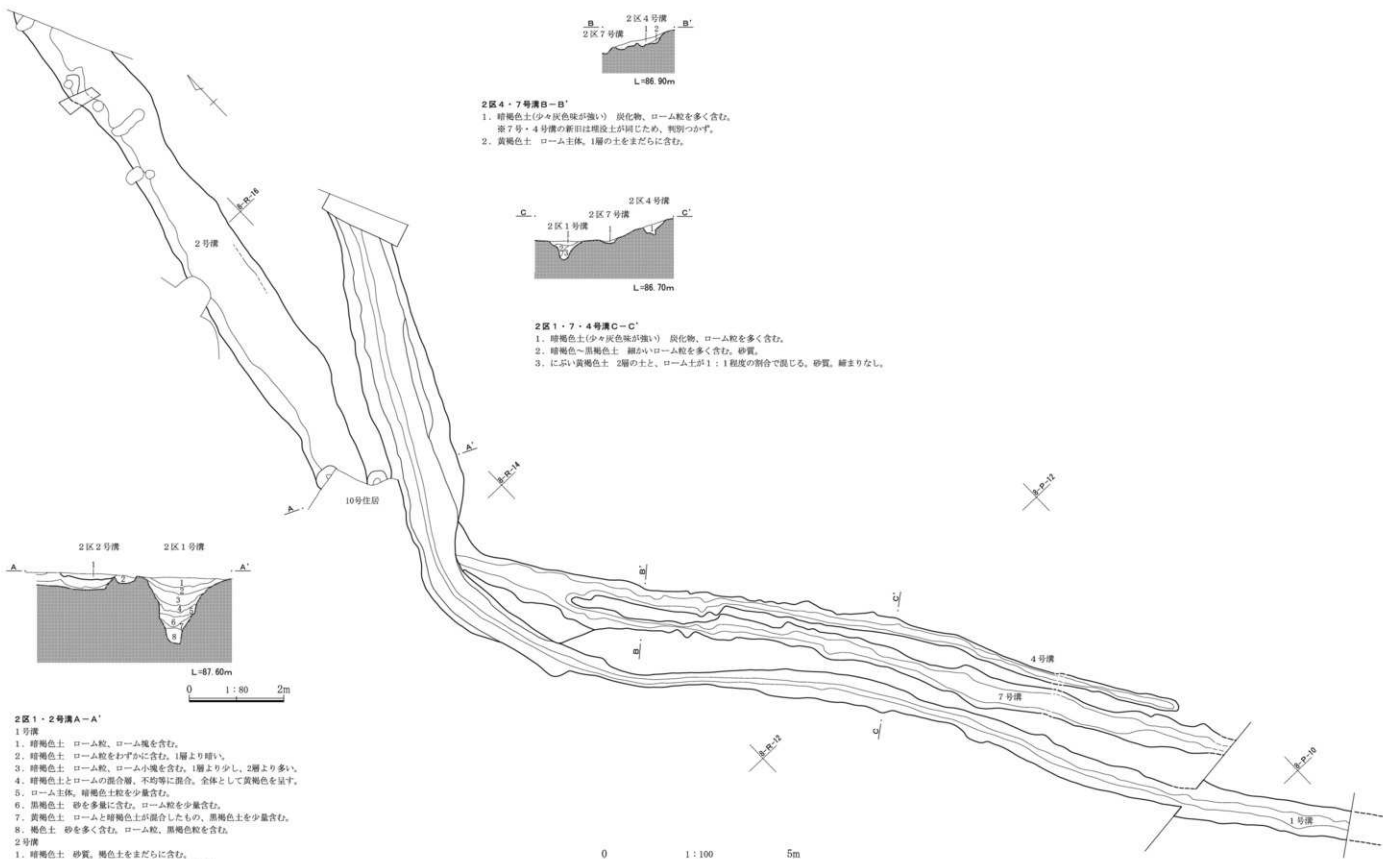
2区7号溝 (第67図 PL35)

**位置** 2a区2-8-P-10・11G

R-12~14G、Q-11~13G

**形状** 北端は南東方向のほぼ直線の溝で、4号溝の西側に平行して掘られている。2-8-R-13グリッドで1号溝南縁から占地していた。1号溝には前出する。北端は4号溝と重複するが、埋没土が同様であるために新旧関係が判断できなかった。また57号住居に後出する。

**規模** 調査長 20.91m 最大幅 0.93m  
最小幅 0.19m 深さ 0.21m



第67図 2区1号・2号・4号・7号溝

**走向** 南端部でN-33°-W

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 炭化物粒・ローム粒を多く含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片5点、陶磁器破片4点が出土したのみである。

**所見** 周辺は削平を受けており、溝の残存状態は不良である。出土遺物のなかには焙烙の底部破片や、鉄軸の掛け分け碗の破片があり、時期を示す可能性があるが、圃場整備前後の攪乱も想定される。掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区3号溝 (第68図 PL36・161 遺物観察表P.563)

**位置** 2a区2-9-A-16~18G、B-17G

**形状** 隅丸方形の周溝状の溝。北西部は1号住居と、北部は110号土坑が重複しているが、3号溝が後出。

**規模** 調査長 13.95m 最大幅 0.44m

最小幅 0.18m 深さ 0.05m

外径 5.56m 内径 5.06m

**走向** 南北軸方位N-28°-W

**断面形** 浅いU字形

**埋没土** 下層は黄褐色土で、上層は白色軽石を多く含み、ローム塊を斑に含む暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から縄文土器破片3点、土師器破片44点、陶器1点、銅片1点が出土した。縄文土器および土師器破片は混入である。1片の陶器は灰釉のかかる碗の口縁部破片(第68図1)であるが、溝にともなうかどうかは断定できない。

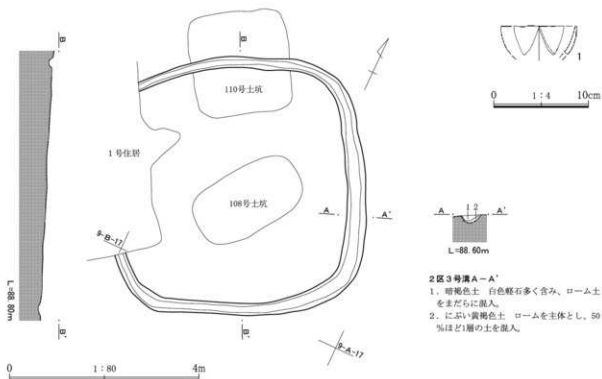
**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、出土遺物が少なく明確にはできなかった。

2区5号溝 (第69図 PL36・161 遺物観察表P.563)

**位置** 2a区2-8-Q-15・16G、R-15~17G

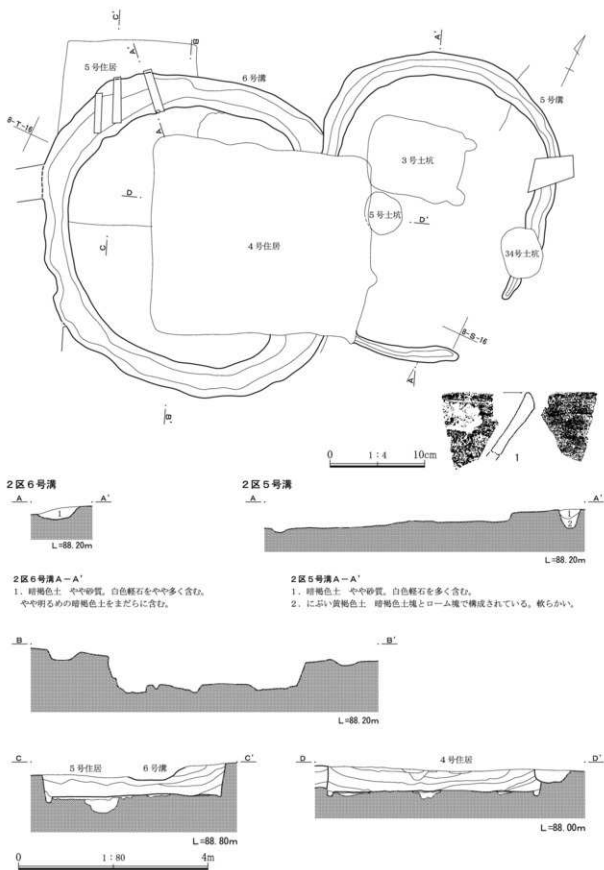
**形状** やや楕円に近い円形の周溝状の溝。南東部に途切れた部分がある。東部は34号土坑と、南西部は4号住居が重複しているが、5号溝が後出する。位置的には6号溝とも重複するが、4号住居を先に掘り下げてしまったために新旧関係は不明である。

**規模** 調査長 13.95m 最大幅 0.44m



第68図 2区3号溝と出土遺物





第69図 2区5号・6号溝と出土遺物

最小幅 0.18m 深さ 0.05m  
 外長径 6.58m 内長径 5.78m  
 外短径 5.04m 内短径 4.24m

**走向** 長軸方位 N-20°-W **断面形** U字形  
**埋没土** 下層はローム塊を含む黄褐色土で、上層は白色軽石を多く含む砂質の暗褐色土で埋まっていた。  
**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片9点、軟質土器1点、剥片2点、棒状緑色片岩1点、加工痕ある剥片1点が出土した。土師器は环形土器破片であるが、混入である。軟質土器は13世紀前半と見られるすり鉢口縁部破片(第69図1)である。  
**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、すり鉢の時期を重視すれば中世に掘られた可能性がある。

## 2区6号溝(第69図 PL37)

**位置** 2a区2-8-S・R-15・16G

**形状** 円形の周溝状の溝。東部は4号住居と、北西部は5号住居が重複しているが、5号溝が後出する。位置的には5号溝とも重複するが、4号住居を先に掘り下げてしまったために新旧関係は不明である。

**規模** 調査長 15.28m 最大幅 0.98m

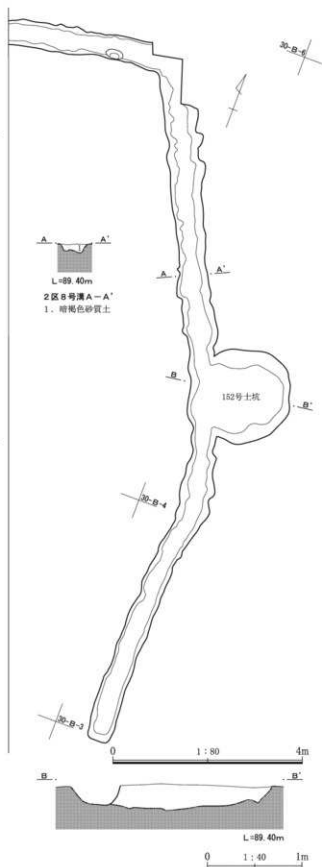
最小幅 0.44m 深さ 0.12m  
 外長径 7.16m 内長径 5.56m

**走向** 長軸方位 N-43°-W **断面形** 皿形  
**埋没土** 白色軽石を多く含む、暗褐色土塊を斑らに含む砂質の暗褐色土で埋まっていた。  
**遺物と出土状況** 埋没土中から縄文土器破片2点、土師器破片54点、須臾器甕破片1点、剥片1点が出土した。土師器は壺・甕類の破片で混入である。  
**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。3号溝や5号溝と形態の類似からすれば、同様な機能が考えられ、本溝も中世に掘られた可能性がある。

## 2区8号溝(第70図)

**位置** 2c区2-30-A~C-2~5G

**形状** 北辺は東西方向のほぼ直線の溝で、2-30-



第70図 2区8号溝

## 第5章 2区の遺構と遺物

B-5グリッドで緩やかに南東から南方向に方向を変えている。2-30-A-4グリッド内で152号土坑と重複するが、5号溝が後出する。

**規模** 調査長 18.25m 最大幅 0.78m  
最小幅 0.43m 深さ 0.14m

**走向** 北端N-80°-E 南端N-0°-E

**断面形** やや上方が開く箱形

**埋没土** 砂質の暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片1点、須恵器破片1点が出土した。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

### (7)井戸

2区1号井戸 (第71図 PL37)

**位置** 2a区2-9-H-10G **形状** 楕円形

**規模** 長軸1.55m 短軸1.16m 残存壁高1.30m

**長軸方位** N-66°-W

**断面形** 上方がラッパ状に開く筒状である。また確認面から1.2m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

**埋没土** 上層は浅間B軽石を多く含む暗褐色土で、下層はローム小塊を含み軽石を含まない暗褐色土で、最下層はローム粒。塊を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片30点、剥片1、小礫2点が出土した。いずれも小破片で図示できなかった。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区2号井戸 (第71図 PL37)

**位置** 2a区2-9-C・D-8・9G

**形状** 楕円形

**規模** 長軸1.53m 短軸0.87m 残存壁高1.45m

**長軸方位** N-12°-E

**重複** 79号土坑に後出する。

**断面形** 上方がラッパ状に開く筒状である。

**埋没土** 上層は白色軽石を多く含む黒褐色土で、中層は白色軽石を多く含む砂質黒色土で、最下層はローム粒・塊を多く含む砂質黒灰色土で埋まっていた。

**底面** 長径0.5m、短径0.3mほどの楕円形の小きな掘り込みになっていた。

**遺物と出土状況** 下層に2個の大型礫が出土した。また埋没土中から縄文土器2点、土師器破片48点、須恵器破片1点、羽口破片1点、粘土塊1点、剥片1点、軽石2点が出土した。

**所見** 出土遺物の大半は古墳時代のものであるが、これは79号土坑を壊して掘られているため、混入と推定される。本井戸の掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区3号井戸

(第72・73図 PL37・161 遺物観察表P.611)

**位置** 2a区2-9-A・B-8・9G

**形状** 楕円形

**規模** 長軸1.55m 短軸1.36m 残存壁高2.47m

**長軸方位** N-68°-E

**重複** なし

**断面形** 上方がラッパ状に開く筒状である。

**埋没土** 上層は白色軽石を多く含む黒褐色土で埋まっていた。確認面から0.4m下で大型礫が23個集中して出土した。その下位は直径が狭くなり、埋没土の観察は困難で記載できなかった。

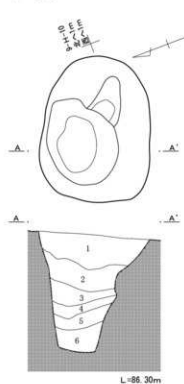
**底面** ほほ平坦であった。

**遺物と出土状況** 前述のように確認面から0.4m下で大型礫が23個集中して出土した。井戸埋設に際して投げ込まれた礫群と推定される。その中に石製骨蔵器の蓋が2点(第72図1・第73図2)、何らかの整形を施した大型礫1点(PL161)が確認された。他は自然礫である。また埋没土中から縄文土器3点、土師器破片22点、須恵器破片1点(第266図42)、羽口破片1点、剥片2点が出土した。土器はいずれも混入と推定される。

**所見** 石製骨蔵器のうち第72図1は自然礫の形態を

生かし最小限の整形で成形している。第73図2は鋭い稜線で屋根形を整形し、外面は撃をねかせて平滑に仕上げられている。内面には撃痕跡が残る。やや古い様相を見せている。骨蔵器の年代は9世紀後半ごろと考えられ、後世になって片付けられたものが井戸埋填に伴って捨てられたものであろう。本井戸の掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区1号井戸



2区1号井戸 A-A'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ガラガラしている。ローム小塊を含む。
2. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ガラガラしている。ロームをわずかに含む。上層より暗い。
3. 暗褐色土 As-B含まず。ローム小塊を含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粒子細かく粘性なし。
5. 暗褐色土 砂粒をやや多く含む。ローム粒をわずかに含む。
6. 黄褐色土 ローム粒。ローム小塊を多く含む。

2区2号井戸(79号土坑含む) A-A'

2号井戸

1. As-BとAと思われる軽石。FP粒を多く含む。黒色土。直径1.0~3.0cmの褐色土小塊を含む。
2. As-BとAと思われる軽石。FP粒を含む。黒褐色砂質土。

2区4号井戸(第74図 PL.38・161 遺物観察表P.611)

位置 2a区2-8-R・S-10・11G

形状 楕円形

規模 長軸1.55m 短軸1.30m 残存壁高2.15m

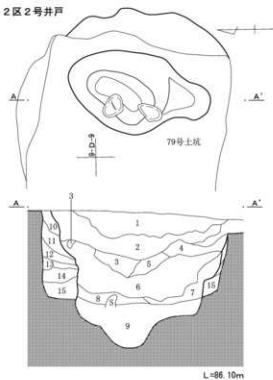
長軸方位 N-23°-W 重複 なし

断面形 上方が緩やかに開く筒状である。

埋没土 上層はローム粒・塊を含む黒褐色土で埋まっていた。下半部は直径が狭くなり埋没土の観察は困難で記載できなかった。底面 ほぼ平坦

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片61点、大

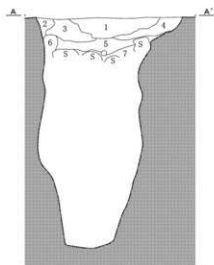
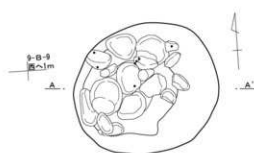
2区2号井戸



3. 白色軽石。直径3.0~5.0cmの褐色土塊を多量に含む。黒色砂質土。
4. 細粒の白色軽石。直径1.0~3.0cmの褐色土小塊を含む。黒色砂質土。
5. 白色軽石を多量に含む黒色砂質土。
6. 白色軽石。褐色土塊を多量に含む黒褐色砂質土。
7. 直径3.0~5.0cmの黄色土塊。直径1.0~3.0cmの灰褐色土小塊を多く含む黒色砂質土。
8. 直径0.5~1.0cmの黄色粒を含む黒褐色粘質土。
9. 黄色土粒 直径1.0~3.0cmの黄色土小塊を多く含む黒灰色砂質土。79号土坑
10. 白色軽石 直径3.0~5.0cmの黄色土塊を多く含む灰褐色土。
11. 白色軽石 直径0.5~1.0cmの灰褐色土小塊。ローム粒を含む黒褐色土。
12. 白色軽石。ローム粒を含む黄褐色土。
13. 白色軽石。ローム粒を含む黒褐色土。
14. 白色軽石。ローム粒を少量含む褐色土。
15. 白色軽石。ローム粒。直径0.5~1.0cmの黄色土小塊を多く含む褐色土。

0 1:40 1m

第71図 2区1号・2号井戸

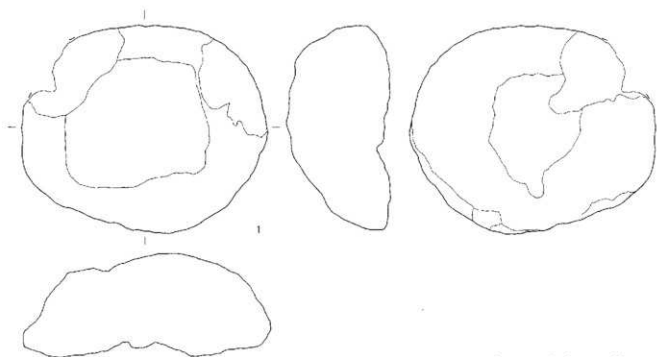


L=86.00m

0 1:40 1m

2区3号井戸A-A'

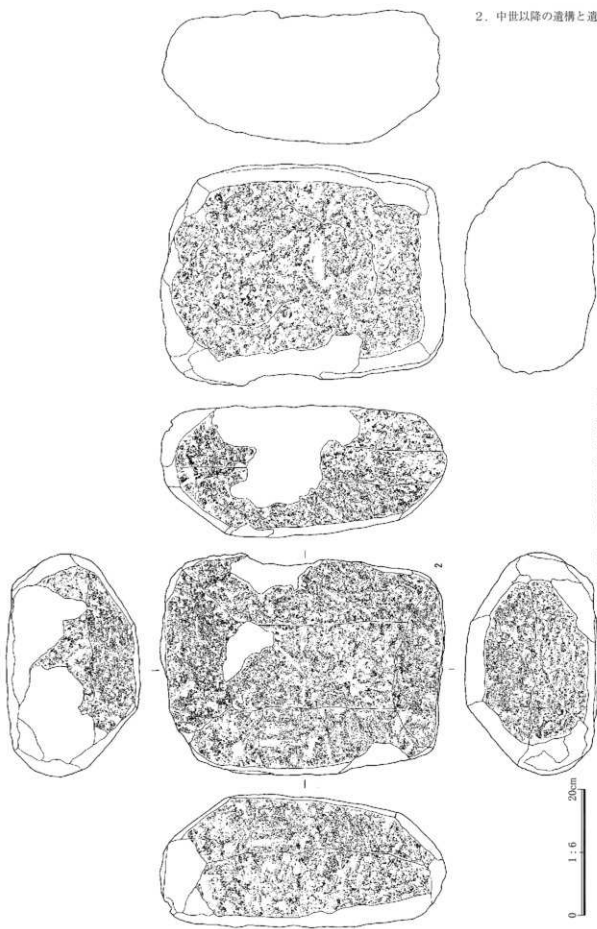
1. 白色軽石を少量含む黒色土。直径3.0~5.0cmの灰褐色土塊を含む。
2. 白色軽石を少量含む黒褐色土小塊と、褐色土小塊の混土。
3. 白色軽石を含む黒色砂質土。
4. 直径3.0~5.0cmの褐色土塊を含む黒色砂質土。
5. 白色軽石を含む黒灰色砂質土。
6. ローム粒を含む黒灰色土。
7. 枝葉物を含む黒褐色土。



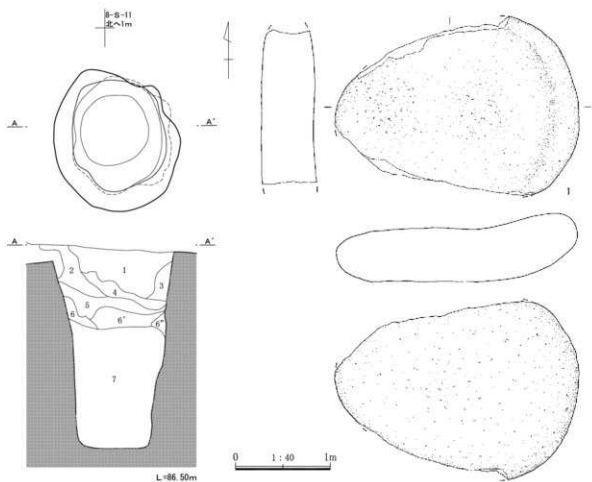
0 1:6 20cm

第72図 2区3号井戸と出土遺物(1)

2. 中世以降の遺構と遺物



第73図 2区3号井戸出土遺物(2)



2区4号井戸A-A'

1. 黒褐色土 ローム小塊、ローム粒、軽石粒を含む。
2. 黒褐色土 ローム小塊を含む。
3. 黒褐色土 ローム小塊を多く含む。
4. ローム塊、暗褐色土、黒褐色土が不均等に混合。
5. 黒褐色土 1層にほぼ同じ。
6. 黒褐色土 ローム粒、ローム大塊を含む。
- 6' 黒褐色土 6層よりもやや暗い。
- 6'' ローム粒を多く含む。大塊少ない。
7. 黒褐色土 やや粘性有。締まっている。ローム粒、ローム塊若干含む。



第74図 2区4号井戸と出土遺物

型擦石 2点(第74図1・2)、砥石 1点(第74図3)、棒状礫 1点、扁平礫 1点、礫片 1点が出土した。土器はいずれも混入と推定される。

**所見** 本井戸の掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

## 2区5号井戸

(第75図 PL38・161・162 遺物観察表P.611)

**位置** 2a区2-8-T-8G **形状** 楕円形**規模** 長軸1.69m 短軸1.44m 壁高0.63m以上**長軸方位** N-59°-E

**断面形** 上方がやや外側に開く筒状である。確認面から0.6m程までの掘削は可能であったが、壁の崩落が著しく、下位の調査はできなかったため、断面形および底面の状況は不明である。

**遺物と出土状況** 埋没土中から須恵器甕破片(第266図46)、擦石 2点(第75図2・4)、大型凹石(1)、砥石(3)、石臼破片 1点が出土した。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

## 2区6号井戸

(第76図 PL38・162 遺物観察表P.563・611)

**位置** 2c区2-29-O-8G **形状** 楕円形**規模** 長軸2.19m 短軸1.93m 残存壁高2.41m**長軸方位** N-5°-W

**断面形** 上方がラップ状に開く筒状である。また確認面から1.9m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

**埋没土** 上層はローム粒・下位を含む黒褐色土で、中層はローム粒・小塊を少量含む暗褐色土および黄褐色土で埋まっていた。埋没土下半は掘削の安全確保のために全掘したため、観察できなかった。

**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片 2点(内 1点第76図2)、13世紀後半から14世紀前半と見られるすり鉢 1点(1)、砥石 1点(3)が出土した。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考え

られるが、明確にはできなかった。すり鉢の時期を重視すれば中世に掘削された可能性もある。

2区7号井戸(第76図 PL38・162 遺物観察表P.563)

**位置** 2c区2-29-O・P-8G**形状** 不整形円形**規模** 長軸2.04m 短軸1.82m 残存壁高2.60m**長軸方位** N-71°-W**断面形** 上方がラップ状に開く筒状である。

**埋没土** 上層はローム粒・下位を含む砂質の黒褐色土で、中層はローム粒・小塊を少量含む暗褐色土で埋まっていた。埋没土下半は掘削の安全確保のために全掘したため、観察できなかった。

**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 埋没土中から磁器碗破片 1点と軟質土器 3点が出土した。第76図6は13世紀後半、5は14世紀前半と見られるすり鉢の口縁部破片である。もう 1点はすり鉢体部小破片で図示できなかった。4の碗は龍泉窯系磁器で13世紀中頃から後半のものと思われる。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、出土遺物が13～14世紀に限られていることから、この時期にあてることが可能と考えられる。

## 2区8号井戸

(第77図 PL38・162 遺物観察表P.563・611)

**位置** 2c区2-29-S-5・6G **形状** 円形**規模** 長軸2.82m 短軸2.75m 残存壁高2.47m**長軸方位** N-8°-W

**断面形** 上方が大きくラップ状に開く筒状である。確認面から1.7mのところには西壁に抉りがあり、滲水層があったことが推定される。

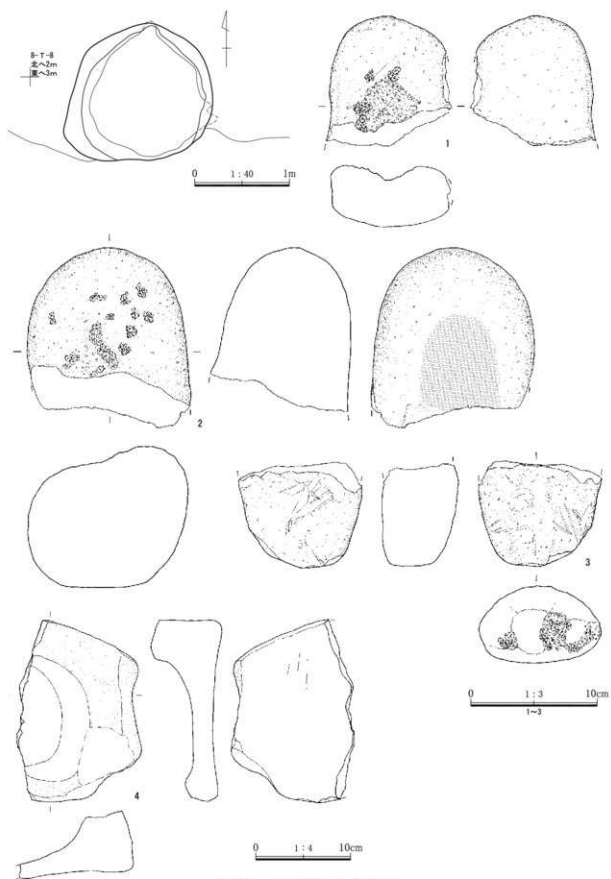
**埋没土** 上層は灰色粘土粒塊・ローム粒を含む黒褐色土で、中層はローム粒・小塊を少量含む暗褐色土で埋まっていた。埋没土下半は掘削の安全確保のために全掘したため、観察できなかった。

**底面** ほほ平坦である。

**遺物と出土状況** 埋没土中から土師器破片 2点、常

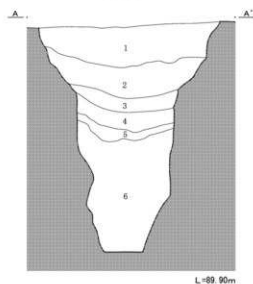
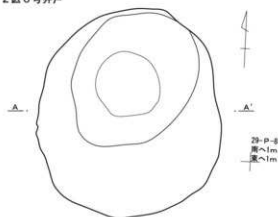


第5章 2区の遺構と遺物



第75図 2区5号井戸と出土遺物

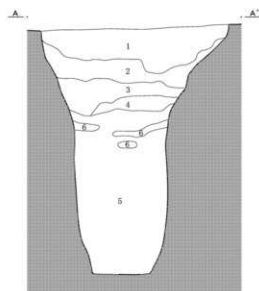
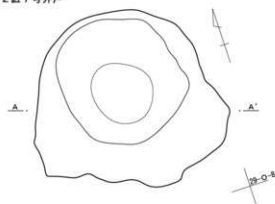
2区6号井戸



2区6号井戸A-A'

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む、やや砂質。
2. 黒褐色土とロームの混土。
3. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
4. 暗褐色土 ローム塊(直径0.5~1.0cm)をごく少量含む。
5. 黒色土 ローム粒をごく少量含む。
6. 黄褐色土

2区7号井戸



2区7号井戸A-A'

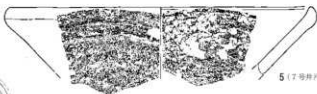
1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む、やや砂質。
2. 黄褐色土 やや軟質、ローム粒をごく少量含む。
3. 黒褐色土 やや軟質、ローム粒をごく少量含む。
4. 黄褐色土
5. 暗褐色土 ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
6. ローム塊



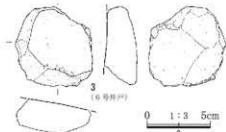
1 (6号井戸)



2 (6号井戸)

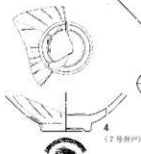


5 (7号井戸)



3 (6号井戸)

4 (6号井戸)

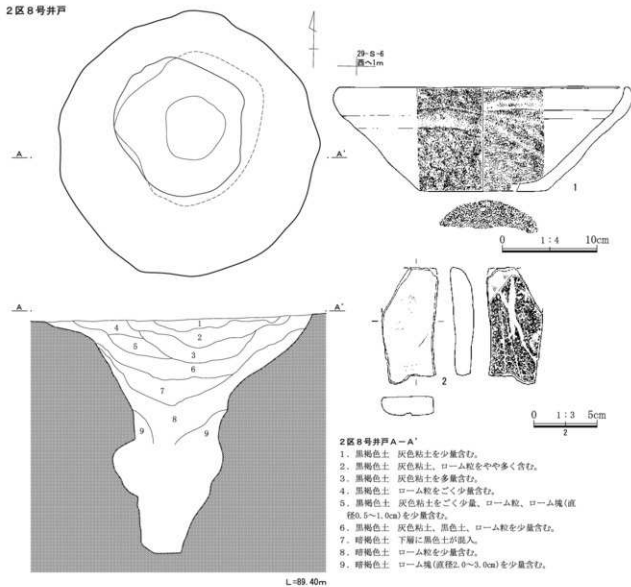


6 (7号井戸)

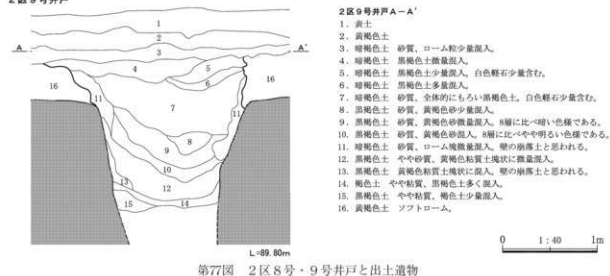
7 (7号井戸)

第76図 2区6号・7号井戸と出土遺物

2区8号井戸



2区9号井戸



第77図 2区8号・9号井戸と出土遺物

滑の陶器裏破片1点、軟質土器すり鉢1点、軟質土器破片1点、砥石1点が出土した。第77図1は14世紀前半と見られるすり鉢で1/4ほどが残存していた。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、出土遺物が中世に限られていることから、この時期にあてることが可能と考えられる。

#### 2区9号井戸 (第77図 PL38)

**位置** 2区c区詳細な位置は不明 **形状** 不明

**規模** 南北軸長1.60m 残存壁高1.50m

**断面形** 上方がラッパ状に開く筒状である。

**埋没土** 上層は砂質の暗黒褐色土で、中層はローム塊を含む黒褐色土で埋まっていた。埋没土下半は掘削の安全確保のために全掘できなかった。

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にすることはできなかった。

#### (8)土坑

2区では148基の土坑が検出された。このうち40基は古墳時代の土坑で、埋没土に古墳時代住居と共通する炭化物粒・焼土粒を顕著に含む特徴が確認できる。また4基は斑状にローム塊を含む土壌によって埋没しており縄文時代の土坑と判断した。

残りの104基の土坑は、後述する147号土坑を除いては、出土遺物がなく掘削時期を特定することができなかった。これらは浅間山起源と推定される軽石を多く含み、やや砂質の埋没土で埋まっていることが共通する。ここではこれらの土坑を中世以降の土坑として報告する。

土坑は平面形によって、隅丸方形・長方形（不整形を含む）・円形・楕円形・不定形の5つの形態に分けることができた。また形態によっては大型・小型の分類も可能であった。ここでは、その形態ごとに記載、報告する。なおそれぞれ個々の土坑の位置や計測値は巻末遺構一覧表に記載した。いずれの土坑も出土遺物は少なく、時期を示すようなものはほとんど無かった。なお、104基のうち、14号・28号・

106号土坑は平面図の記録がないため平面形による分類から除外し、図示していない。

#### 隅丸方形の土坑 (第78図 PL39~40)

隅丸方形の土坑は形態の不安定なものも含めて7基の土坑が検出された。隅の丸い正方形に近い平面形を呈する。断面形は浅い箱形・皿形であるが、109号土坑は0.63mと深く、底面は小さな楕円形になっていた。17号・64号・109号・107号・23号土坑は2a区に、136号・157号土坑は2c区に分布する。109号土坑からは33点、64号土坑からは24点、23号土坑からは8点、17号土坑からは2点の土師器破片が出土しているが、いずれも小破片であり、土坑の掘削時期を示すような出土遺物はなかった。

また128号土坑は正方形である。隅が丸くないが、編集の都合上本図に掲載した。128号土坑は2b区に分布する。

#### 長方形の土坑 (第79~82図 PL39~45)

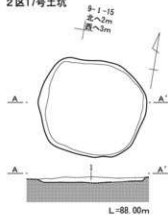
長方形の土坑は26基検出された。長方形土坑には隅の丸いもの、台形に近いもの、帯状に細長いものなどがある。大きさは各種あり、特に46号土坑は隅の丸い大型長方形土坑で特異な形態である。また26号・139号・145号土坑は細長く帯状である。断面形は箱形あるいは浅い皿形である。埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色土であるが、22号・118号土坑は浅間B軽石を含む暗褐色土で埋まっていた。

なお63号・73号・103号・92~94号・76号・80号土坑は重複によって全体形状がとらえられなかったが、長方形と推定される。76号・80号土坑は古墳時代の75号土坑と重複しており、平面図は75号土坑平面図（第244図）とともに掲載した。

長方形土坑はほとんど2a区に分布するが、121号・122号・123号・135号・141号・146号・153号土坑は2b区に分布する。

46号土坑に59点、2号土坑に52点、22号土坑に29点、87号土坑に25点、34号土坑に15点、74号土坑に10点、118号土坑に5点、71号土坑に4点の比較的多

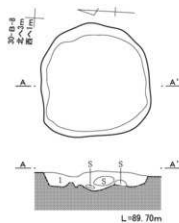
2区17号土坑



2区17号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、軽石粒を含む。

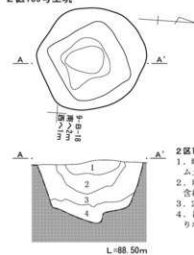
2区157号土坑



2区157号土坑A-A'

1. 暗褐色砂質土 ローム粒、ローム塊(直径0.5cm以下)を多く含む。

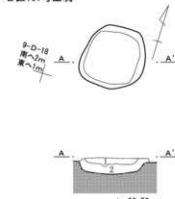
2区109号土坑



2区64号土坑A-A'

1. 褐色土 ローム粒、ローム塊、黒褐色土塊を含む。  
2. 褐色土 1層よりもローム塊多き含み、全体として明るい。

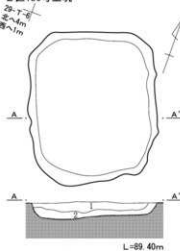
2区107号土坑



2区107号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石を含む。暗黄褐色土をまだらに含む。  
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。

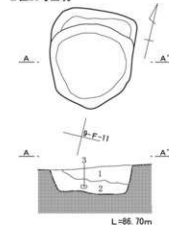
2区136号土坑



2区136号土坑A-A'

1. 黄褐色土 砂質土。  
2. 黄褐色土 ローム粒を含む。

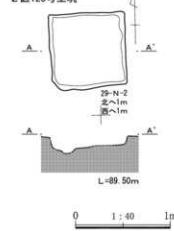
2区23号土坑



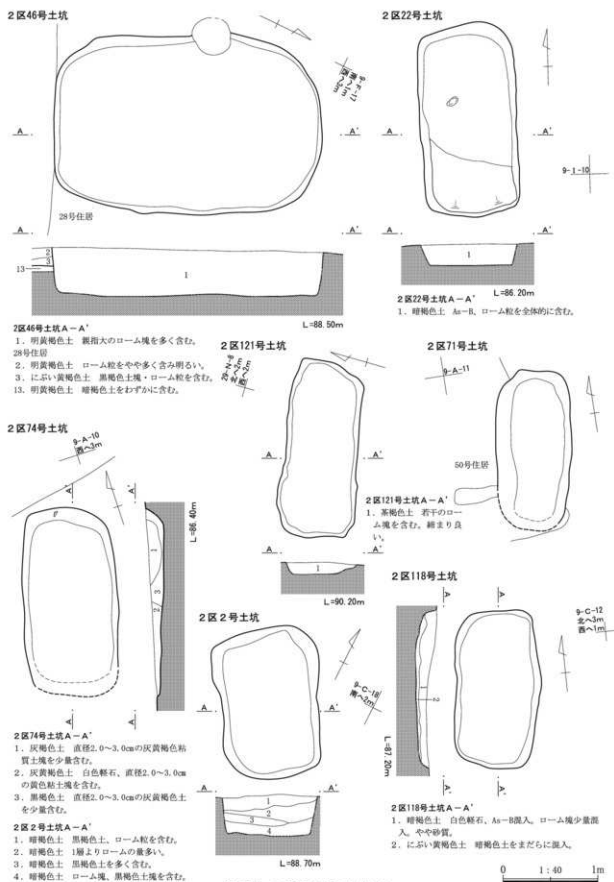
2区23号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。  
2. 暗褐色土 ローム小塊、ローム粒を含む。  
3. 黒色土

2区128号土坑

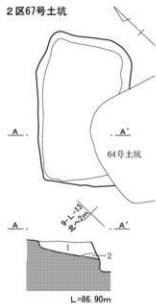


第78図 2区隅丸方形の土坑



第79図 2区長方形の土坑(1)

2区67号土坑

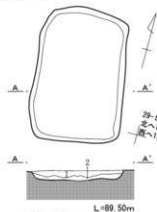


L=86.90m

2区67号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm内外)を含む。
2. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土を少量含む。

2区135号土坑

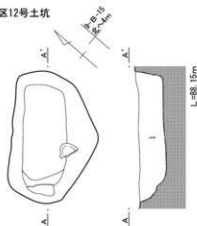


L=89.50m

2区135号土坑A-A'

1. 茶褐色土 砂質土
2. 黄褐色土 ローム塊

2区12号土坑



L=88.15m

2区12号土坑A-A'

1. 暗褐色土 暗褐色土とローム粒、ローム小塊を含む。

2区141号土坑

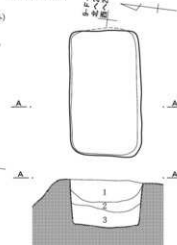


L=89.60m

2区141号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土とロームの混土

2区87号土坑

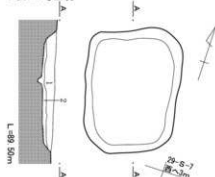


L=87.70m

2区87号土坑A-A'

1. 暗黄褐色～濃黄褐色土 暗褐色土と黄褐色土(ローム土)の混じり。中～下位にかけて特にローム土の混じりが多い。またローム土は粒～塊状(直径3.0cmほど)にも含む。
2. 暗褐色土 ローム粒～塊(直径0.5～1.0cmほど)少量含む。ややサラサラした土。
3. 暗黄褐色土 ローム粒～塊(直径0.5～4.0cmほど)均一に多く含む。土の感じは1層に類似。

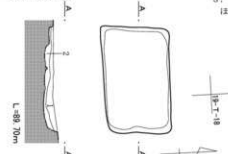
2区146号土坑



2区146号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5～1.0cm)を少量含む。
2. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。

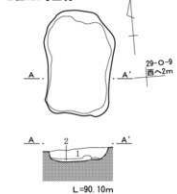
2区153号土坑



2区153号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5～3.0cm)をやや多く含む。砂質。
2. 暗赤褐色土 鉄分による変色。

2区123号土坑



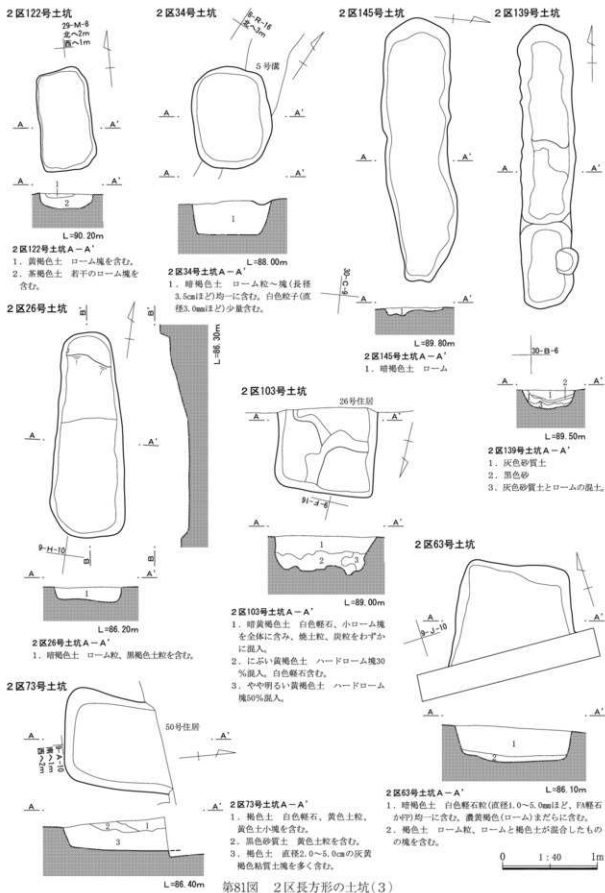
L=90.10m

2区123号土坑A-A'

1. 茶褐色土 白色軽石を含む。締まり良い。
2. ローム塊

0 1:40 1m

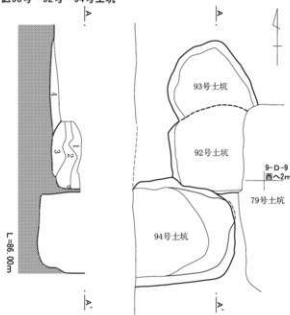
第80図 2区長方形の土坑(2)



第81図 2区長方形の土坑(3)



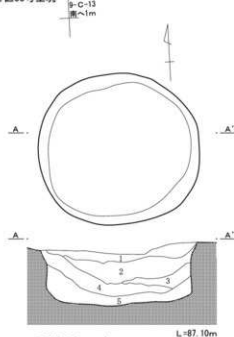
2区93号・92号・94号土坑



2区92・93・94号土坑A-A'

1. 褐色土 白色軽石、ローム粒をやや多く含む。
2. 黒褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)をごく少量含む。
3. 黒褐色土 ローム粒をごく少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を少量含む。

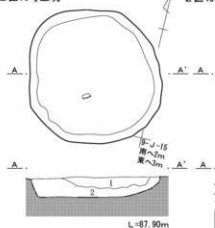
2区55号土坑



2区55号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土塊、ローム粒を含む。
2. 褐色土 ローム塊、黄褐色土を含む。
3. 褐色土 2層より暗い。
4. 褐色土 2層よりローム塊多く含む、明るい。
5. 暗褐色土 ローム塊、黒褐色土塊を含む。

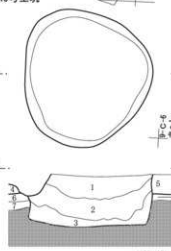
2区16号土坑



2区16号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム塊、軽石粒、黒褐色土塊を含む。
2. 黄褐色土 黒褐色土粒を含む。

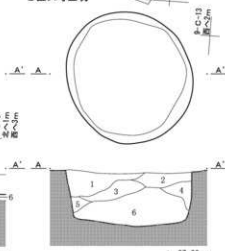
2区45号土坑



2区45号土坑・23号住居A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
  2. 暗褐色土 上層よりローム小塊、ローム粒の量が多い。
  3. 暗褐色土 上層よりロームの量さらに多くなる。
- 23号住居
4. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を少量含む。
  5. 暗褐色土 ローム塊(直径1.0~3.0cm)、黒褐色土を含む。
  6. ロームが主体、暗褐色土粒を全体に含む。暗褐色土及び黒褐色土の小塊を多く含む。
  7. ローム主体、暗褐色土粒を全体に含む。池山ロームよりやや暗い。

2区54号土坑



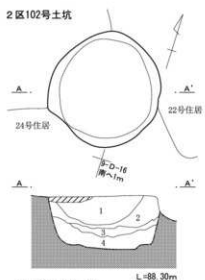
2区54号土坑A-A'

1. 褐色土 ローム小塊を含む。
2. 黄褐色土
3. 黄褐色土 2層より明るい、ローム粒、ローム小塊を多く含む。
4. 黄褐色土 2層よりやや明るい。
5. 黄褐色土 4層に同じ。
6. 全体として暗褐色 黄褐色土、ローム粒、暗褐色土、黒褐色土小塊の混合層。



第82図 2区方形・円形の土坑(1)

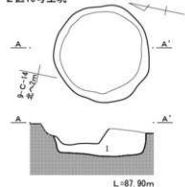
2区102号土坑



2区102号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 ローム主体、明黄褐色ローム塊を少量混入。
2. 暗黄褐色土 小ローム塊混入。暗褐色土を少量まだらに混入。
3. 暗褐色土 炭化物、炭土を多く含む。
4. 暗黄褐色土 小ローム塊、白色軽石、炭粒混入。

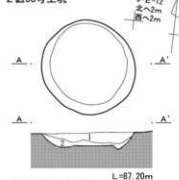
2区10号土坑



2区10号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ローム粒、ローム小塊を含む。

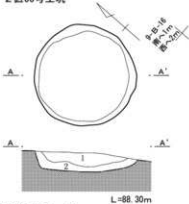
2区58号土坑



2区58号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土粒を全体に含む。
2. 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合。

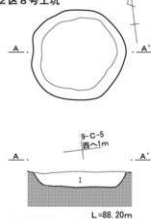
2区60号土坑



2区60号土坑A-A'

1. やや明るい暗褐色土 ローム塊少量、白色軽石全体に混入。砂質。As-B混土か？
2. 暗褐色土 ローム塊やや多く含む。砂質。As-B混土か？細まりあり。

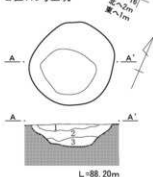
2区8号土坑



2区8号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ローム粒、ローム小塊を含む。

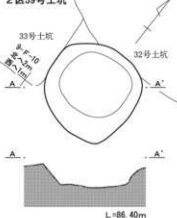
2区113号土坑



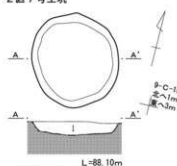
2区113号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石を多く含む。ロームをまだらに含む。塊土粒わずかに混入。
2. やや明るい暗褐色土 ロームをまだらに含む。白色軽石を少量含む。
3. 黄褐色土 ローム主体、ハードローム塊を含む。

2区39号土坑



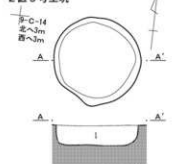
2区7号土坑



2区7号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ローム粒、ローム小塊を含む。

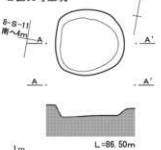
2区9号土坑



2区9号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ローム粒、ローム小塊を含む。

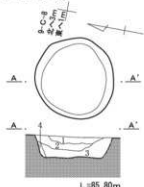
2区53号土坑



第83図 2区円形の土坑(2)

0 1:40 1m

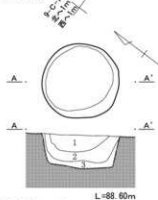
2区100号土坑



2区100号土坑A-A'

1. 暗褐色土
2. 黒褐色土 ローム粒をごく少量含む。白色軽石を少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石をごく少量含む。
4. 暗褐色土と黒褐色土の混土。

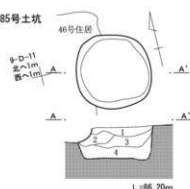
2区59号土坑



2区59号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム小塊をやや多く含む。白色軽石全体に混入。
2. 1層よりやや暗い暗褐色土。ロームを少量まだらに混入。
3. 黒褐色土と黄褐色土を1:1程度の割合で混入。

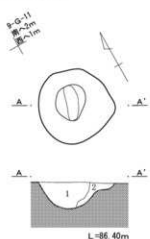
2区85号土坑



2区85号土坑A-A'

1. 黒色土 直径0.5~1.0cmの黄色土小塊、黄色土粒を多く含む。
2. 黒色土 白色軽石、炭化物粒を含む。
3. 黒褐色土 黄色土塊、黄色土粒を含む。
4. 黒褐色土 直径2.0~3.0cmの黄色土塊、黄色土粒を含む。

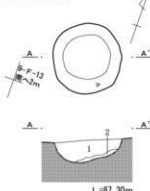
2区25号土坑



2区25号土坑A-A'

1. 黒褐色土 軽石粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。

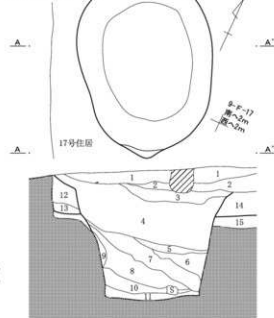
2区56号土坑



2区56号土坑A-A'

1. 褐色土 ローム粒、ローム塊を含む。
2. 黄褐色土 ローム主体、褐色土を含む。

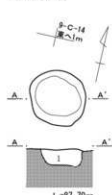
2区29号土坑



2区29号土坑・17号住居A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、軽石粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊、黒褐色土をまだら状に含む。
3. 黄暗褐色土 ローム小塊、黒褐色土を含む。
4. 黄暗褐色土 ローム塊を含む。
5. 暗褐色土 ローム粒~塊(直径0.3~5.0cmほど)均一に含む。炭化物粒状に少量含む。
6. 黄褐色土 ローム主体土。暗褐色土少量混入。
7. 暗褐色土 5層に似た土。6層同層に含む為、分離。
8. 暗褐色土 5層に似た土。5・7層より黒色味少ない。
9. 黄褐色土 ローム主体土。6層より細より弱くフカフカしている。
10. 暗褐色土 5~7・8層に似ているが最も黒色味強い。ローム塊は長径1.0~2.0cmほどで、5・7・8層に比べ目立たない。
11. 黄褐色土~暗褐色土 ローム土と暗褐色土の混土。ローム土多い部分は黄褐色土。暗褐色土の混じり多い部分は暗褐色土。

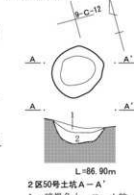
2区6号土坑



2区6号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-Bを多く含む。ローム粒、ローム小塊を含む。

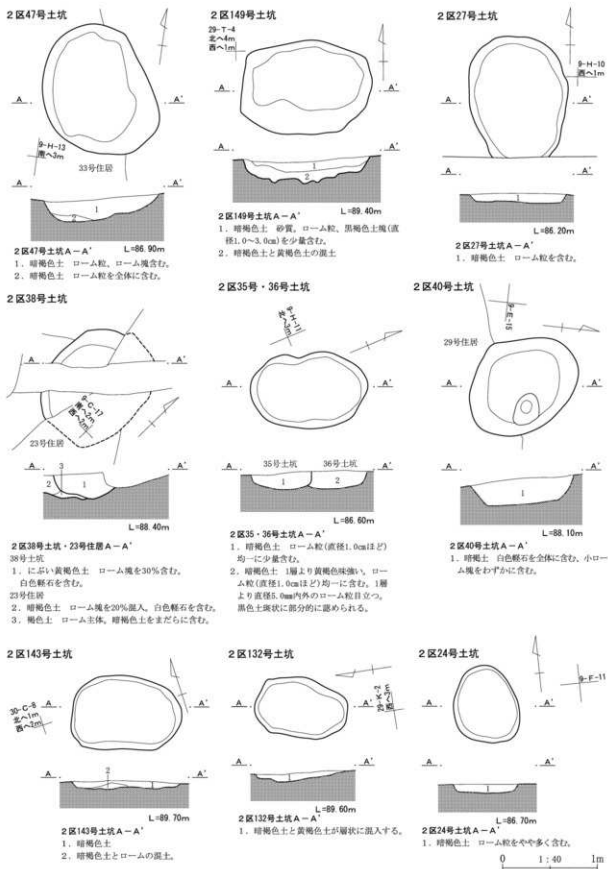
2区50号土坑



2区50号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、白色軽石少量含む。
2. 暗黄褐色土 ローム小塊、ローム粒をやや多く含む。

第84図 2区円形の土坑(3)



第85図 2区楕円形の土坑(1)

くの土師器破片が出土しているが、これらの土坑は古墳時代の住居が多く分布している2a区にある。これらの土坑から出土した土師器は周辺の古墳時代以降からの混入の可能性が高い。

円形の土坑 (第82・84図 PL45・49・51)

円形の土坑は21基検出された。大きさから直径1.4～1.7mの大型、0.9～1.1mの中型、0.6～0.8mの小型の3種類に分けられた。

大型の土坑は深さが0.6m前後で比較的深いのが特徴である。中型・小型の円形土坑の埋没土には2種類があった。一つは浅間B軽石を含む暗褐色土で埋まっているもので、中型の7～10号土坑・60号・39号・113号土坑、小型の6号・53号土坑がそれにあたる。もう一つは浅間B軽石を含まず、ローム粒や塊を含むもので、中型の85号・59号・100号・58号土坑、小型の50号・56号土坑がそれにあたる。断面形は比較的深い箱形と、浅い皿形があるが浅間B軽石を含むものは皿形が多い傾向がある。

中型の円形土坑は規格的で、形態および浅間B軽石を含む埋没土の特徴は、布包み銭貨が出土した2区13号土坑に類似する。土坑の位置も13号土坑東側の6号住居西側に集中する傾向がある。これらのことから、この中型の円形土坑は墓壇である可能性もあると考えられる。

出土遺物は、45号土坑から64点、85号土坑から38点、55号土坑から17点、60号土坑から15点、102号土坑から14点、10号土坑から11点、8号・54号土坑から8点、16号・59号土坑から6点、6号・113号土坑から4点、9号土坑から2点、39号・56号土坑から1点の土師器破片が出土している。円形土坑も古墳時代の遺構が集中する2a区に分布しており、これらの土師器破片は混入と考えられる。土坑の掘削時期示すような出土遺物はなかった。

楕円形の土坑 (第85・87図 PL43・48・53)

楕円形の土坑は20基検出された。やや不整形のものや、重複によって全形がわからないが楕円形と推

定される111号・117号土坑や全形がわからないが楕円形と推定される3基も含む。いずれも白色軽石・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。特に29号土坑(第84図)は長径0.98m、短径0.72mの大型である。古墳時代の17号土坑に後出する。土師器破片が57点出土しているが、いずれも小破片で重複による混入と判断した。

他に中型のもの、小型のものがある。小型楕円形として報告したが、51号土坑と86号土坑は断面形がピット状であり、柱穴等の土坑とは別の機能が考えられる。楕円形の土坑は132号・143号・149号土坑が2b区に分布する他は、2a区に分布していた。

楕円形土坑の出土遺物は29号土坑の57点をはじめとして、27号土坑で7点、114号土坑で6点、36号土坑で5点、24号土坑で3点、11号・70号・117号土坑で1点ずつの土師器が出土しているが、いずれも混入と考えられる。掘削時期は中世以降のある時期と言わざるを得ない。

このように大部分の土坑が掘削時期不明であるなかで、2区147号土坑は、中世以降の遺構と判断し、ここに記載した。

2区147号土坑

(第86図 PL53・201 遺物観察表P.563・611)

**位置** 2a区2-29・30-T・A-6 G

**形状** 不整楕円形

**規模** 長軸1.19m 短軸0.83m 残存壁高0.26m

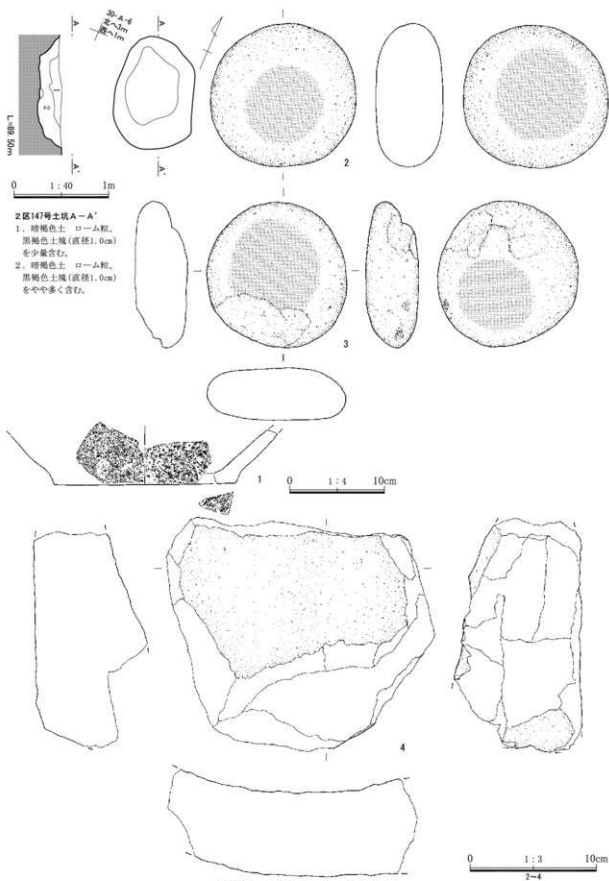
**長軸方位** N-23°-W **断面形** 皿形

**埋没土** 上層はローム粒・黒褐色土塊を少量含む暗褐色土で、下層はローム粒・黒褐色土塊を多く含む暗褐色土で埋まっていた。

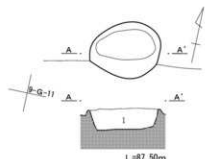
**底面** 底面はやや凹凸がある。

**遺物と出土状況** 陶器常滑壺(壺)鉢底部破片(第86図1)が埋没土中から、撥石2点(2・3)と台石(4)がほぼ底面直上で出土した。遺憾ながら出土位置の図記録はない。出土状況写真はPL53-5。

**所見** 本土坑は、調査時には埋没土の特徴から縄文時代の土坑の可能性があると判断したが、埋没土中



2区70号土坑

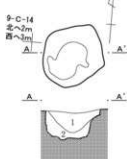


L=87.50m

2区70号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土(ローム土)を粒状(直径1.0cmほど)に含む。上位に褐色シルト少量混じる。

2区11号土坑

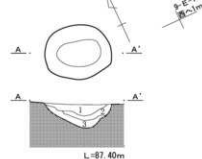


L=86.00m

2区11号土坑A-A'

1. 暗褐色土 As-Bをやや多く含む。
2. 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合層。

2区57号土坑

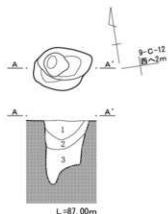


L=87.40m

2区57号土坑A-A'

1. 褐色土 ローム粒を全体に含む。
2. 黄褐色土 やや暗い、褐色土に近い。
3. 黄褐色土 上層よりやや明るい。

2区51号土坑

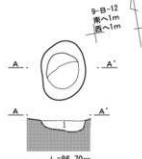


L=87.00m

2区51号土坑A-A'

1. やや明るい暗褐色土 ローム粒、白色軽石少量含む。
2. 1層に類似しているが、ややローム味が強い。
3. 暗黄褐色土 ローム塊を含む。暗褐色土まだらに少量含む。

2区49号土坑

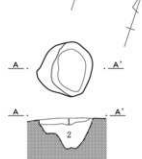


L=86.70m

2区49号土坑A-A'

1. 暗黄褐色土 暗褐色土塊、ローム塊をやや多く含む。白色軽石含む。

2区114号土坑

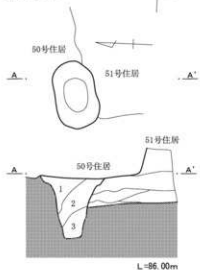


L=88.30m

2区114号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石を多く含む。ロームをまだらに含む。焼土粒わずかに混入。
2. やや明るい暗褐色土 ロームをまだらに含む。白色軽石を少量含む。

2区86号土坑

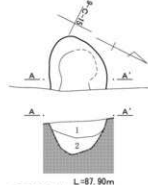


L=86.00m

2区86号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム塊(直径3.0~5.0cm)を10%混入。焼土粒、炭化物粒をわずかに混入。やや砂質。
2. 暗褐色土 ローム粒、炭化物粒、焼土粒を全体的に5%混入。やや砂質。
3. 暗褐色~暗黄褐色土 大ローム塊20%、炭化物粒わずかに混入。

2区117号土坑

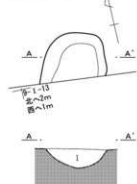


L=87.90m

2区117号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石、炭粒を少量含む。ロームをまだらに含む。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土塊を30%混入。

2区111号土坑



L=87.30m

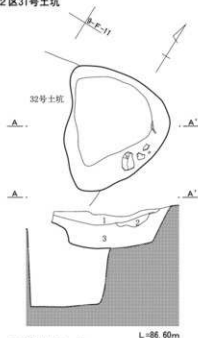
2区111号土坑A-A'

1. 明るい暗褐色土 白色軽石少量含む。ローム土をまだらに含む。ローム粒を少量含む。

0 1:40 1m

第87図 2区楕円形の土坑(2)

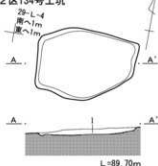
2区31号土坑



2区31号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒(直径1.0cm程度)をA'側に少量含む、白色粒子少量含む。
2. 暗褐色土 1層に似るが、黒色土やや多く(60%ほど、A'側に特に多く)混じる。
3. 暗褐色～暗黄褐色土 1層に似る。A側はローム土の混じりやや多く、暗黄褐色土を呈する。

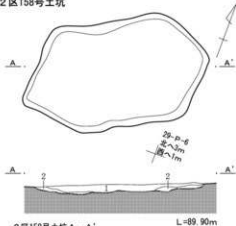
2区134号土坑



2区134号土坑A-A'

1. 暗褐色土と黄褐色土が層状に混入する。

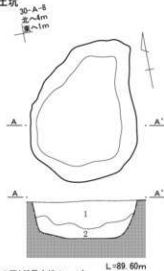
2区158号土坑



2区158号土坑A-A'

1. 黄褐色土 若干の軽石を含む。
2. 黄色土 ローム塊。

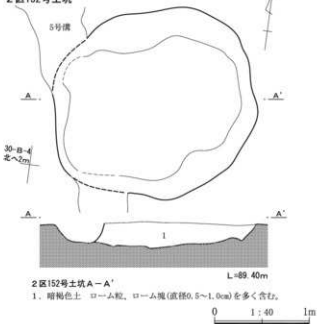
2区148号土坑



2区148号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0～2.0cm)を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0～2.0cm)を少量含む。

2区152号土坑



2区152号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5～1.0cm)を多く含む。

第88図 2区不定形の土坑(1)



2区151号土坑

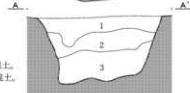


L=89.30m

2区151号土坑A-A'

1. 暗褐色砂質土 ローム塊(直径2.0~3.0cm)を多く含む。
2. 暗褐色砂質土 ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径2.0~3.0cm)を多く含む。

2区156号土坑

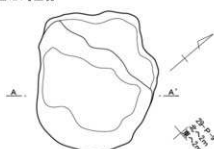


L=89.40m

2区156号土坑A-A'

1. ロームと暗灰色砂の混土。
2. 暗灰色砂と黒色砂の混土。(互層に堆積)
3. ロームと暗褐色土の混土。

2区124号土坑

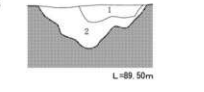
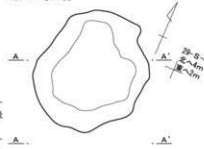


L=90.10m

2区124号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム塊含む。細まり良い。
2. 明褐色土 ローム塊含む。
3. 黄褐色土 ローム混土。
4. ローム塊

2区150号土坑

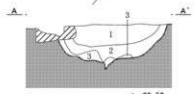


L=89.50m

2区150号土坑A-A'

1. 暗褐色砂質土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~2.0cm)を多く含む。

2区155号土坑

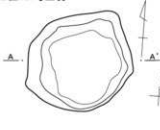


L=89.50m

2区155号土坑A-A'

1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土 ローム塊(直径1.0~3.0cm)をやや多く含む。
3. 黄褐色土 暗褐色砂質土を少量含む。

2区120号土坑

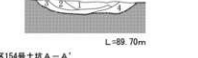
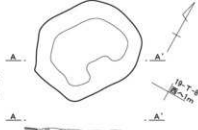


L=90.00m

2区120号土坑A-A'

1. 明茶褐色土 ローム塊含むラミナ状。
2. 茶褐色土 ロームがタミナ状に入る。
3. 黄褐色土 ローム塊多い。

2区154号土坑



L=89.70m

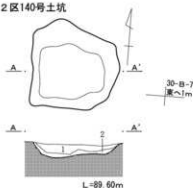
2区154号土坑A-A'

1. 灰色砂質土 ローム粒、ローム塊(直径2.0cm)をごく少量含む。
2. 灰色砂質土 ローム塊(直径2.0~5.0cm)を多く含む。
3. 暗褐色砂質土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~0.8cm)を多く含む。
4. 黄褐色土(ローム)と暗褐色砂質土の混土。

0 1:40 1m

第89図 2区不定形の土坑(2)

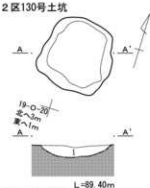
2区140号土坑



2区140号土坑A-A'

1. 灰色砂質土 ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
2. 灰色砂質土とロームの混土。

2区130号土坑



2区130号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径2.0~3.0cm)を多く含む。

2区131号土坑



2区131号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
2. 黄褐色土

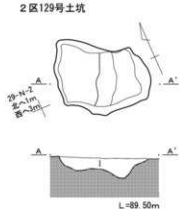
2区133号土坑



2区133号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。

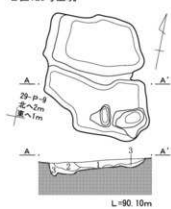
2区129号土坑



2区129号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。

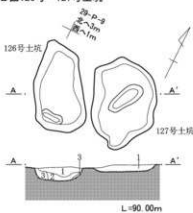
2区125号土坑



2区125号土坑A-A'

1. 黒色土 白色輝石(As-C5)を含む。
2. 明黄褐色土 ロームのごったもの。
3. 黄褐色土 ローム固じり土。

2区126号・127号土坑



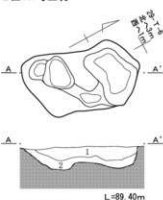
2区126号土坑A-A'

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土と黄褐色土の混土
3. 黄褐色土

2区127号土坑A-A'

1. 黒色土 やや砂質、As-Cを少量含む。

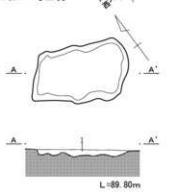
2区137号土坑



2区137号土坑A-A'

1. 黒色土 As-Cを含む粘質土。
2. ロームと暗褐色土の混土

2区144号土坑



2区144号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色輝石(直径0.5cm)を少量、ローム粒、ローム塊(直径2.0~3.0cm)をやや多く含む。



第90図 2区不定形の土坑(3)

の陶器破片や台石の石材、擦石の形態、本土坑がある2c区に中世遺構が分布していること等からして、中世の土坑である可能性が高いと考えられる。

不定形の土坑 (第88-90図 PL.43・44・53-55)

この他に不定形の土坑が23基確認されている。不定形の土坑には前述した平面形態に分類できないものを集めた。断面形も不定形で底面に凹凸が著しい。

特に2区北端の2b・2c区には図示した不定形な土坑が18基検出された。大きさに各種あるが、いずれも底面等に凹凸が著しい。ここでは土坑として報告したが、これは何らかの機能のあるものではなく、木の根の痕跡等も含まれている可能性が大きい。

このうち31号土坑は、古墳時代の土師器が53点出土しているが、①形態が不定形で、②重複する古墳時代の32号土坑とは埋没土が明らかに異なることから、中世以降の土坑として報告した。出土遺物は混入品と考えたい。出土遺物はこのほかに156号土坑で2点の土師器破片が出土したのみである。これも混入であろう。

#### (9) 遺構外の出土遺物

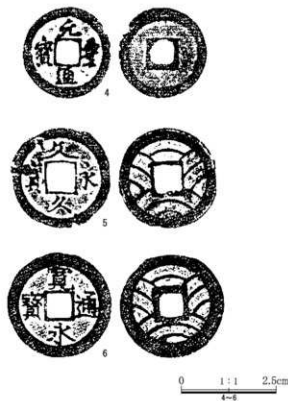
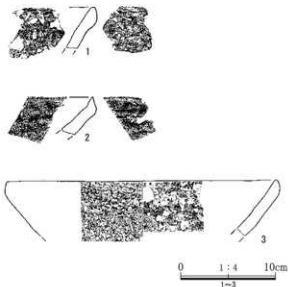
(第91図 PL.162 遺物観察表P.563・617)

2区からは遺構に伴わない状態で、陶器破片11点、磁器破片7点、軟質土器破片47点、銭貨3点、石壺小破片2点が出土した。

陶器は江戸時代の瀬戸美濃系の徳利破片が2点が含まれているが、大半は近・現代の器種不詳の破片である。磁器は肥前碗口縁部破片1点が含まれるが、大半は近現代の瀬戸美濃系碗破片である。軟質土器は、江戸時代の鍋や焙烙の破片の他は大半が器種不詳の破片である。そのなかで13世紀後半から14世紀前半と見られるすり鉢口縁部破片が6点出土している。そのうち3点を図示した。(第91図1~3)いずれも表探遺物である。3が出土した2-29-T-4グリッド周辺には中世の堅穴と見られる2区65号住居や6~8号井戸、常滑陶器甕破片を出土した147号土坑がある。また、その南側には時期は不明であるが、

道跡が区画するようにあることから、住居・井戸・道等からなる中世の生活域の想定も可能である。

銭貨は表探で、5・6は2-9-D-12グリッドで出土した。2-9-D-12グリッド周辺には、墓塚の可能性を示唆した円形中型土坑が分布しており、これらの墓に供えられた銭が混入したものと推定される。



第91図 2区中世以降の遺構外出土遺物

### 3. 古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 遺構の概要と分布

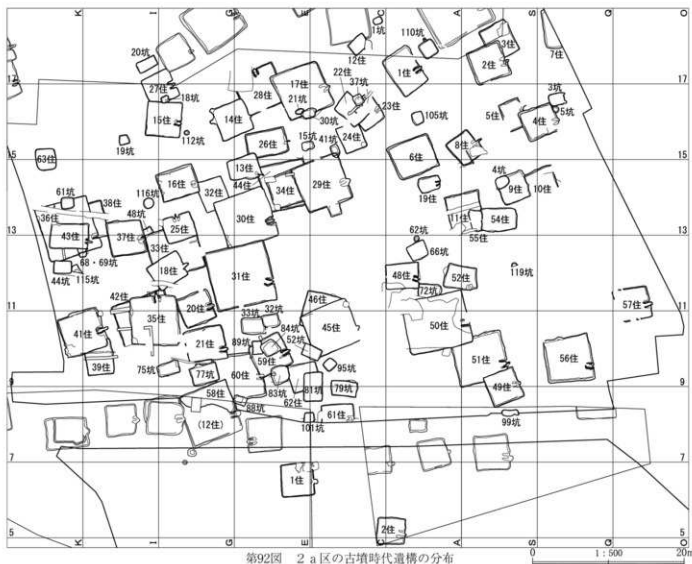
2区で古墳時代の遺構は本遺跡で確認された遺構の大半を占め、本遺跡を理解する上で重要である。ここでは、2区で検出された古墳時代の遺構の記述に先立ち、その概要と分布を特に記述しておく。

2区で検出された古墳時代の遺構は堅穴住居63軒、堅穴状遺構2棟、土坑40基である。遺構の分布は台地南端の2a区に偏っており、住居1軒が2b区北端で検出された他はすべて2a区で検出された。あとの1軒は2b区北端で検出された64号住居で古墳時代前期の堅穴住居である。なお40号住居は調査工

程の都合上、欠番となっている。

2a区に偏在する堅穴住居群は、古墳時代中・後期概ね5世紀から6世紀にかけてのものである。1c区で検出された2軒も同時期のものである。62軒のうち、竪敷設住居は8軒、竪を敷設する住居は43軒、不明11軒である。群馬県内の竪の導入は5世紀中葉と考えられているが、本遺跡の出土遺物の時期からしても同様の時期が考えられよう。

郊の住居の分布はやや北側の台地内部に偏る傾向がある。(第92図) 5.65×4.83mの6号住居を最大としてやや小型の長方形住居が多いことが特徴である。竪敷設住居は、2a区全体に分布している。全体として2～3回の重複が認められ、5世紀後半から



第92図 2a区で古墳時代遺構の分布

6世紀にかけての竪穴住居の建て替えを示している。形態は正方形あるいは長方形のものがある。竈は東壁に敷設されている住居がほとんどであるが、北壁・南壁にある住居もまれに含まれている。規模は、最大が31号住居の8.24×8.02m、最小が19号住居の3.02×1.97mと幅がある。時期および形態と規模の分類は後に第7章で詳述した。

竪穴状遺構は、2棟は重複して検出された。古墳時代の遺構かどうかの判断は困難であったが、出土遺物の大半が土師器であること、他の古墳時代遺構と同様な土で埋没していることから、本書では古墳時代の遺構として報告した。

また古墳時代の土坑は、42基が検出されている。形態は長方形・隅丸方形・円形に分けられる。

長方形の土坑は、22基が検出された。長軸が3mを越す超大型、長軸3m前後の大型、長軸1.5m前後の中型、長軸1.0m前後の小型に分けて、配列し報告した。特に超大型・大型の長方形土坑は深さが0.8m前後と深いものが多く、出土遺物も豊富である。第235図のように、これらは2a区の南部に偏在しており、一定の分布域を持っている。竪穴住居との新旧関係は土坑の方が新しいが、出土遺物からはさほどの時間差は看取できない。中型・小型の長方形土坑は2a区全体に散在している。

隅丸方形の土坑は長方形土坑より数は少なく、11基が検出された。隅丸方形の土坑の分布も2a区に散在している。規模によって3種に分けられる。底面に焼土が残る土坑もあり、土坑の機能を考える上で重要である。出土遺物も一定量認められる。

円形の土坑は9基が検出され、規模によって3種に分類できる。土師器甕3個体が出土した5号土坑をはじめとして、遺物を出土する例が多い。

2区では以上のような古墳時代の遺構が検出されたが、前述のように本遺跡は圃場整備事業に伴って調査された荒砥北三木堂遺跡と隣接していることから、集落全体としては、両者のデータを合わせて考える必要がある。これについては、第7章で詳述した。

## (2) 竪穴住居

### 2区1号住居

(第93・94図 PL.56・163 遺物類表P.563・564)

**位置** 2a区2-9-A-16・17G、2-9-B-16~18G、2-9-C-17G

**形状** 長方形。109号土坑、3号溝に切られる。

**規模** 長軸5.66m 短軸4.17m 壁高0.43m

**面積** 22.49㎡ **長軸方位** N-34°-W

**埋没土** ローム粒・塊を含む黄褐色土・暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居北東壁東寄りに竈が構築されていた。確認長1.12m、燃焼部幅0.41m。袖の残存長は向かって右側が0.97m、左側が1.05m。壁外に0.21m煙道が伸びる。燃焼部に土師器環(第94図2)が逆位に置かれていた。煙道部の外側には石が出土したが、本住居竈に関連するものであるかどうかは不明である。

**柱穴** P1・P2を掘り方面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が39×36×11cm、P2が32×29×26cmである。

**周溝** 周溝は掘り方の北西壁と北東壁南西壁の一部に巡る。幅は概ね23cm、深さは18cmである。

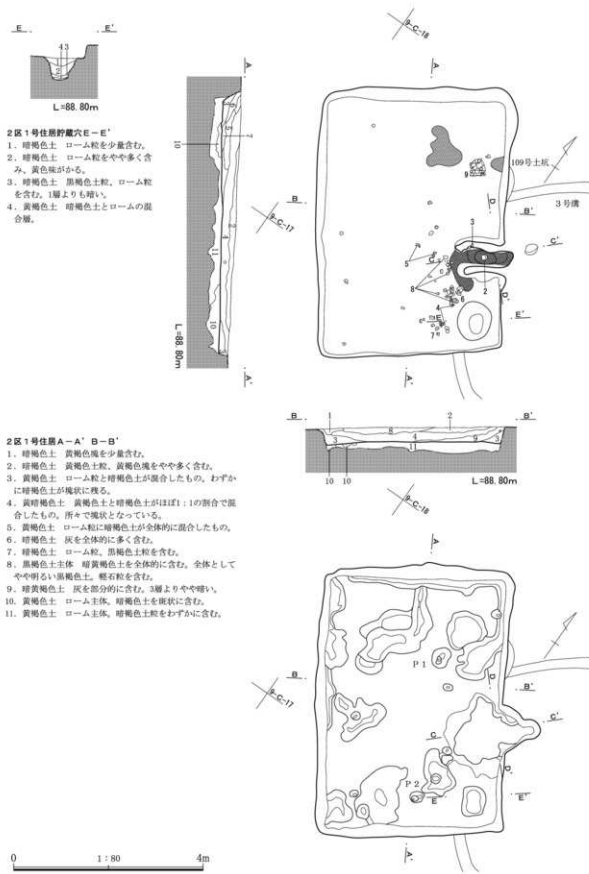
**貯蔵穴** 東隅に長径0.81m、短径0.73m、深さ0.49mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.43m、短径0.29mの楕円形である。

**床面** 床面は平坦である。北東隅と北東壁際の二箇所から粘土塊が床面から出土している。

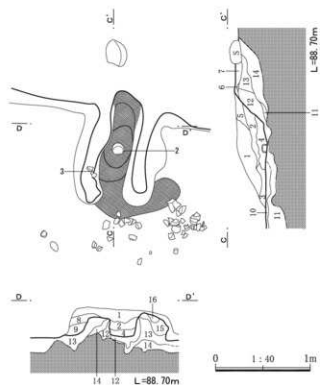
**掘り方** 周辺部がやや不定形に掘り込まれていた。暗褐色土塊を含む黄褐色土が埋められていた。

**遺物と出土状況** 竈手前から貯蔵穴周辺にかけて比較的遺物が集中して出土した。土師器甕(第94図9)は北東壁寄りの床面直上で出土した。また土師器環(6)、台付鉢(4)、甕(8)は竈手前床面直上で出土した。ここで図示した遺物の他、縄文土器破片34点、弥生土器4点、土師器破片447点、剥片12片が出土している。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

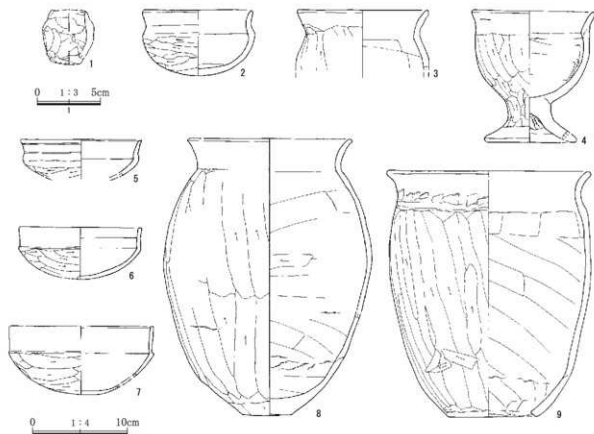


第93図 2区1号住居



2区1号住居層C-C' D-D'

1. 暗褐色土 焼土小塊、ローム粒を少量含む。
2. 焼土、ロームが塊状に暗褐色土中に存在。
3. 暗黄褐色土 焼土粒、焼土小塊、ローム土を少量含む。
4. 焼土塊、焼土粒が主体で、黄褐色土(ローム主体)内に存在。
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
6. 暗褐色土 ローム粒を多く含む、焼土粒をわずかに含む。
7. 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合。
8. 暗褐色土 暗褐色土中にローム粒、ローム小塊を含む。
9. 暗褐色土 ローム粒を全体に少量含む。
10. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土をわずかに含む。
11. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土をわずかに含む。
12. 暗褐色土 黄褐色土小塊、焼土をやや多く含む。
13. 暗褐色土 黄褐色土を少量であるが塊状に含む。
14. 黄褐色土 ほぼ純粋なローム(ごく少量暗褐色土含む)。
15. 黄褐色土粘質土
16. 黄褐色土粘質土 ローム粒を少量含む。



第94図 2区1号住居層出土遺物

## 2区2号住居

(第95-97図 PL57・163・164 遺物観察表P.564・611)

位置 2区2-8-S-17・18G、  
2-8-T-16~18G

形状 正方形と推定される。3号住居に切られる。

規模 長軸4.82m 短軸4.74m 壁高0.67m

面積 20.56㎡ 長軸方位 N-72°-E

埋没土 下位は黄褐色土、中位は黒褐色土、上位は黒色土粒を含む黄褐色土で埋まっていた。

竈 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.45m、燃焼部幅0.62m。袖の残存長は向かって右側が0.95m、左側が0.84m。壁外に0.30m煙道が伸びる。燃焼部に石を用いた支脚が設置され、土師器鉢(第97図10)が逆さにかがせてあった。左袖前に緩やかな傾斜があった。また燃焼部には土師器甕(14)、坏(8)が、煙道部には土師器甕(17)が出土した。

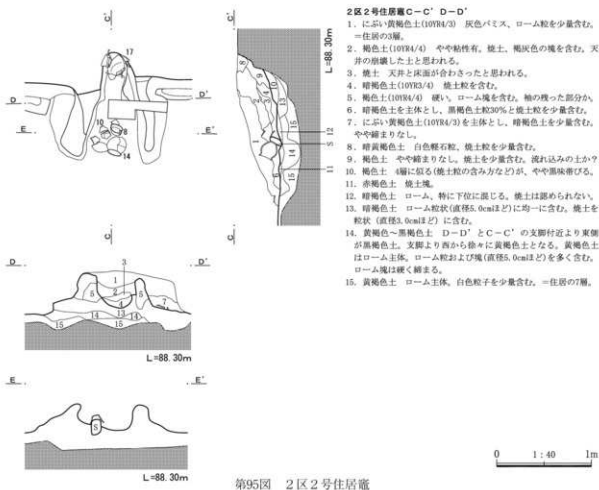
柱穴 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を掘り方面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が42×25×35cm、P2が37×36×22cm、P3が35×30×31cm、P4が32×28×40cmである。

周溝 周溝は南壁の一部を除いて全周する。幅は概ね16cm、深さは3cmである。

貯蔵穴 1号貯蔵穴は南東隅に検出され、長径0.78m、短径0.68m、深さ0.75mの隅丸方形である。底面は長径0.41m、短径0.33mである。2号貯蔵穴は北西隅に検出され、長径0.80m、短径0.75m、深さ0.27mの不定円形である。底面は長径0.42m、短径0.34mである。2号貯蔵穴からは粘土塊が出土している。

床面 床面は平坦である。

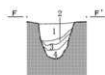
掘り方 中央に長軸1.13m、短軸1.03m、深さ0.32mの円形の床下土坑が検出された。断面形は皿形で、



第95図 2区2号住居竈



第5章 2区の遺構と遺物



L=87.90m



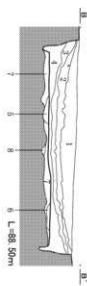
L=87.90m

2区2号住居1号貯蔵穴F-F'

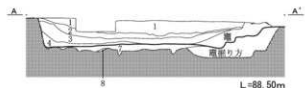
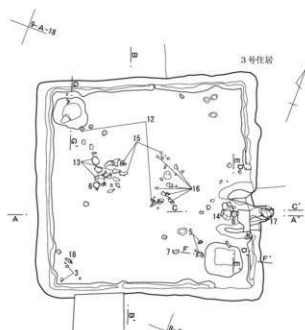
1. 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合。
2. 黄褐色土 ローム塊を含む。
3. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊を多く含む。
4. 暗褐色土 灰白色粘土塊を含む。

2区2号住居2号貯蔵穴(西隅)G-G'

1. 粘土塊 黄味がかった灰色。暗褐色土をまだらに10%ほど含む。
2. 褐色土 ローム主体。ボツボツしている。



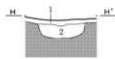
L=88.50m



L=88.50m

2区2号住居A-A' B-B'

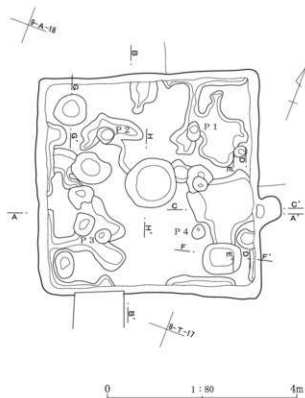
1. 黄褐色土 黒色土粒、ローム粒。ローム小塊を多く含む。
2. 黒褐色土 黄褐色土塊、ローム粒、軽石粒を含む。灰を部分的に含む。
3. 黄褐色土 黒褐色土塊、黄褐色土(明るい)塊を含む。1層より薄い。
4. 黄褐色土 ローム粒を全体的に多く含む。
5. 黄褐色土 ローム粒および塊状(直径0.5cm、また長径1.0~4.0cmほど)を含む。白色粒子を少量含む。
6. 黄褐色土 白色粒子を均一に含む。硬く締まる。
7. 黄褐色土 ローム主体。ローム粒(直径1.0cmほど)、白色粒子を含む。
8. 黄褐色土 ローム主体。ローム粒(直径1.0cmほど)を含む。7層に比べ締まり弱い。



L=87.90m

2区2号住居床下土坑H-H'

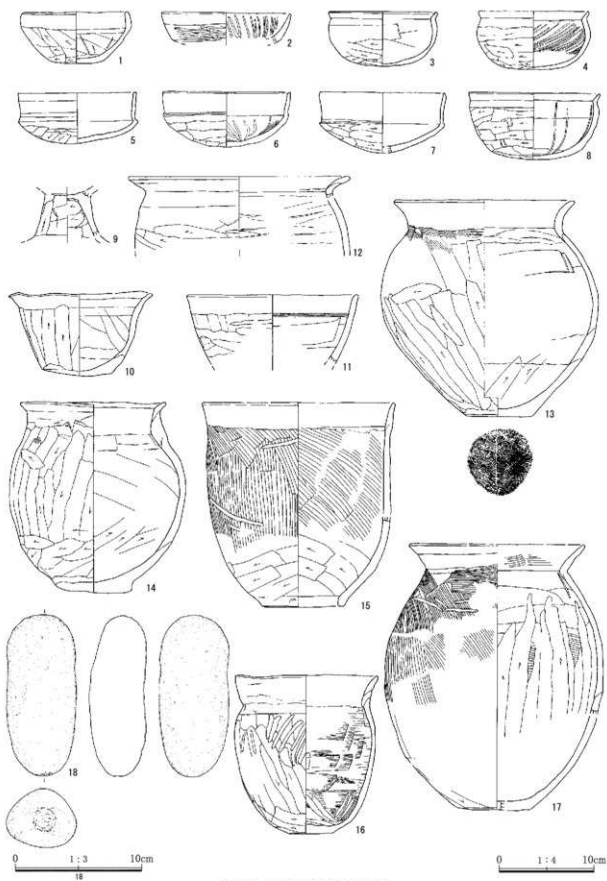
1. 黄褐色土 ローム主体。ローム粒(直径1.0cmほど)、白色粒子を含む。
2. 黄褐色土 1層(住居7層)に比べ締まりやや弱い。ローム塊(長径1.0~5.0cmほど)を均一に多く含む。ローム塊は硬く締まる。



0 1:80 4m

第96図 2区2号住居

3. 古墳時代の遺構と遺物



第97図 2区2号住居出土遺物

第5章 2区の遺構と遺物

底面は平坦である。土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性がある。掘り方は東壁・西壁沿いがやや深く掘り込まれており細かな凹凸が著しかった。

**遺物と出土状況** 甕および中央部周辺に比較的遺物が集中して出土した。中央部からは土師器坏(第97図6)、甕(12・13・16)が床面直上で出土した。南隅からは棒状礫の小口を使用した敲石(18)、土師器坏(3)が床面直上で出土した。ここで図示した遺物のほかに、縄文土器44点、弥生土器3点、土師器破片1264点、須恵器小破片1点、粘土塊1点、台石・棒状礫・剥片など15点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

2区3号住居

(第98・99図 PL58・164 遺物観察表P.564・565)

**位置** 2a区2-8-S・T-17・18G

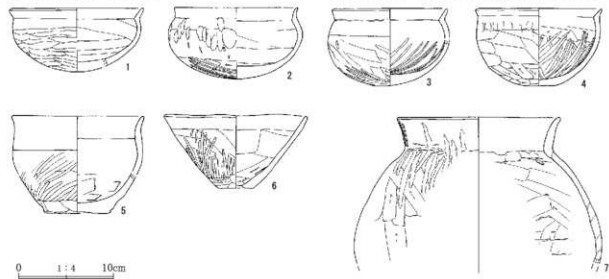
**形状** 長方形と推定される。北西隅は2号住居に切られていた。また、北東部は掘乱によって床面が壊されていた。

**規模** 長軸4.67m 短軸3.94m 壁高0.32m

**面積** (17.38)㎡ **長軸方位** N-28°-W

**埋没土** 下位はローム粒を含む黄褐色土、中位はローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**甕** 甕は検出されなかった。



第98図 2区3号住居出土遺物

**炉** 1号炉は住居の中央部に検出された。炉の凹みは長径0.81m、短径0.56m、深さ0.10mの不定楕円形で、焼土の厚さは10cmほどである。2号炉は住居の中央東壁寄りに検出された。炉の凹みは長径0.79m、短径0.59m、深さ0.09mの不定楕円形で、焼土の厚さは8.5cmほどである。

**柱穴** P1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が34×34×25cm、P2が32×29×29cm、P3が30×24×41cm、P4が25×17×27cmである。P2は主柱穴と考えられるが対応する柱穴は検出できなかった。

**周溝** 周溝は北壁・西壁一部を除いて全周する。幅は概ね10cm、深さ4cmである。

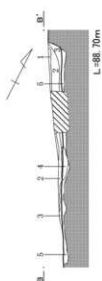
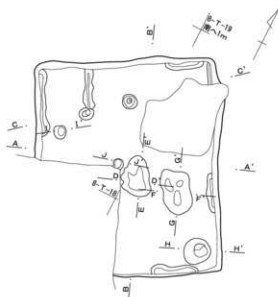
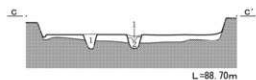
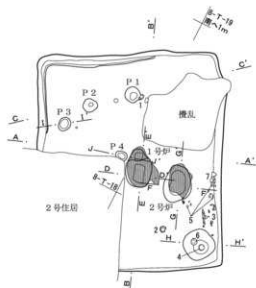
**貯蔵穴** 南東隅に長径0.69m、短径0.67m、深さ0.50mの円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.31m、短径0.28mの円形である。

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 暗褐色土塊を混じる黄褐色土で埋められていた。P2と北壁を結ぶ線上に幅20cm、深さ12~15cmのいわゆる小溝が掘り方で検出された。

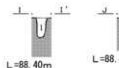
**遺物と出土状況** 遺物は貯蔵穴および2号炉周辺の東壁際にまとも出土した。土師器坏(第98図4)、小型甕(6)は貯蔵穴底面上11~16cmで出土した。2号炉南では土師器坏(第98図2)、鉢(5)が床面直上で出土した。P1周辺では土師器坏(1)が床面直上

3. 古墳時代の遺構と遺物



2区3号住居附貯蔵穴H-H'

1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒を多く含み、小ローム塊をわずかに含む。
2. 褐色土 白色軽石粒をわずかに含む。ボソボソしている。
3. 暗褐色土 細まりなし。ロームをまだらに少し含む。
4. やや明るい褐色土 暗褐色土を30%ほどまだらに含む。

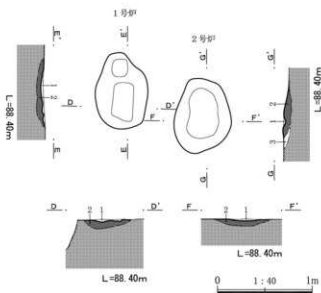


2区3号住居附柱穴I-I' J-J'

1. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム粒、ローム小塊(直径1.0~2.0cm)を含む。

2区3号住居A-A' B-B' C-C'

1. にぶい黄褐色土 ロームの混入が多い。白色軽石粒を少し含む。
2. やや明るい暗褐色土 白色軽石粒を多く含む。ロームをまだらに20%ほど含む。
3. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少し含む。
4. 赤褐色土 焼土を多量に含む。
5. 黄褐色~濃黄褐色土 ローム主体。上位に暗褐色土少量含む部分あり。またB-B'の南側(壁端辺)はやや暗色(濃黄褐色土)。



2区3号住居1・2号炉D-D' E-E' F-F' G-G'

1. 暗褐色土 サラサラしている。焼土粒を含む。
2. 赤褐色土 焼土。
3. にぶい黄褐色土 ローム主体。暗褐色土をまだらに含む。

第99図 2区3号住居

で出土した。ここで図示した遺物のほかに縄文土器10点、弥生土器1点、土師器58点、剥片3点が出土している。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。

2区4号住居

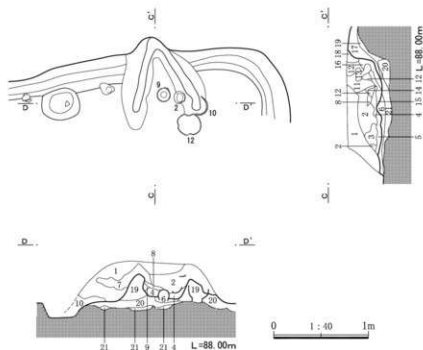
(第100~102図 PL59・164 遺物観察表P.065)

**位置** 2a区2-8-R・S-15・16G

**形状** 長方形と推定される。5号住居、3・5号土坑、2・5・6号溝に切られる。

**規模** 長軸4.63m 短軸4.0m 壁高0.62m

**面積** 18.32㎡ **長軸方位** N-67°-E



2区4号住居断 C-C' D-D'

1. 暗褐色土 やや締まりなし、ローム塊(20%)、焼土塊、炭化物を全体的に含む。
2. 暗褐色土 ローム小塊(10%)を含む。焼土粒をわずかに含む。
3. 褐色土 天井崩落土か?ロームを主体とし2層の土を30%ほどまじらに含む。
4. 焼土塊
5. 暗褐色土を主体とするがほとんどが焼土。天井の焼け面か?
6. 暗褐色土主体 灰層。使用面か。焼土粒も含む。
7. にぶい黄褐色土 ローム塊を全体的に含む。焼土粒を少量含む。
8. 灰色の粘土主体 やや粘りあり。焼土粒を含む。
9. にぶい黄褐色土主体 焼土を多く含む。
10. 暗褐色土主体に黒色土を30%ほど含む。ローム粒、焼土粒を含む。

**埋没土** 下位はローム塊を含むにぶい黄褐色土で、上位は白色軽石を含む暗褐色土やローム粒・白色軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長0.92m、燃烧部幅0.58m。袖の残存長は向かって右側が0.76m、左側が0.83m。壁外に0.17m煙道が伸びる。右袖先端に土師器甕(第102図10)が逆さに立てられていた。燃烧部には土師器小型甕(9)が倒立して置かれ支脚として使われていた。

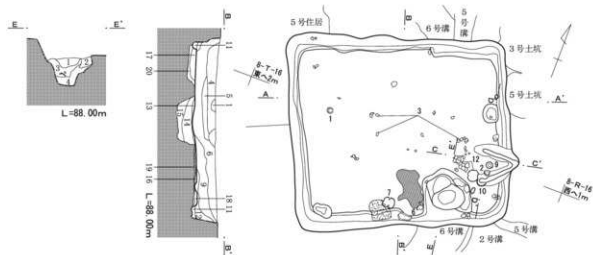
**柱穴** 調査範囲の中では主柱穴は検出できなかった。

**周溝** 周溝は全周する。幅は概ね18cm、深さは9cmである。

**貯蔵穴** 南壁東寄りに長径1.21m、短径0.79m、深

11. 褐色土 直径0.5~1.5cmの焼土粒、ローム粒を含む。炭化物もわずかに含む。
12. 黄褐色土 全体的に焼土が混ざる。ローム粒を少量含む。
13. 焼土塊 褐色土をまじらに含む。竈天井部の崩落土か?
14. 灰黄褐色土 粘土を主体とし、ロームが全体的に混ざっている。
15. にぶい黄褐色土 焼土塊を30%含む。
16. 赤褐色土 ローム主体で焼土を60%含む。
17. 黄褐色土
18. 黄褐色土 焼土粒直径0.2~0.5cmを含む。黒褐色土を少量含む。
19. 黄褐色土 ローム主体。D-D'では暗褐色土。その為、竈内面は部分的に火を受けての灰色(黄色味帯びる)が認められる。
20. 暗褐色土 ローム混じる。塊状(長径0.8~6.0cmほど)にも含む。
21. 黄褐色土 ローム主体。やや硬く締まる。暗褐色土が少量混じる。

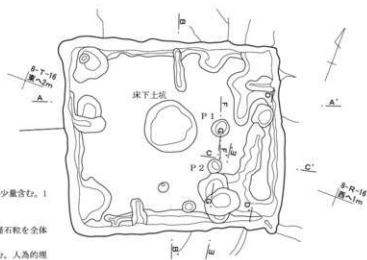
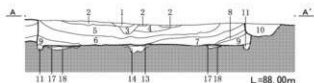
第100図 2区4号住居竈



## 2区4号住居貯蔵穴E-E'

1. 暗褐色土 締まりなし。ローム中塊を15%含む。焼土粒を少々含む。
2. 黒褐色土 ローム塊多く含む。白色軽石粒を含む。
3. 暗褐色土 締まりなし。軟らか。ローム粒を全体的に含む。粘性有。
4. やや濃い暗褐色土 粘性あるが、砂質土を全体的に含んでいる。ローム小塊を少し含む。

0 1:80 4m

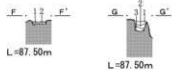


## 2区4号住居・5号土坑A-A'・B-B'

1. 灰色土 砂質。灰を主体とし、暗褐色土を少量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒。1層の灰をまだらに含む。
3. 暗褐色土 主体に40%ほど褐色土を含む。白色軽石粒を少量含む。1層の灰を少量含む。
4. 暗褐色土主体 褐色土。白色軽石粒を全体的に含む。
5. 黒褐色土 暗褐色土をまだらに含み、ローム粒、白色軽石粒を全体的に含む。
6. 褐色土主体 ローム塊を全体的に含み、焼土を少量含む。人為的埋設土。
7. 褐色土主体 ローム塊を全体的に含み、焼土および炭化物を少量含む。人為的埋設土。
8. 暗褐色土 褐色土をまだらに含む。ローム粒を少量含む。
9. にぶい黄褐色土 ローム塊を30%ほど全体的に含む。
11. にぶい黄褐色土 締まりなし。フカフカ。褐色土をまだらに含む。
12. 暗褐色土 やや砂質。ローム塊を全体的に含む。
13. 暗褐色土 硬く締まる。ローム粒および塊(直径2.0cmほど)全体的に含む。
14. 暗褐色土 13層に似るが、締まり硬くない。ローム塊径大きい(4.0cmほど)。全体的に含む。(長径)
15. にぶい黄褐色土 ローム塊(直径0.5~3.5cmほど)を全体的に含む。
16. 黄褐色土 ローム主体で硬く締まる。褐色土を少量含む。
17. にぶい黄褐色土 褐色土をまだらに含む。
- 17層に似るが、褐色土の割合やや多い(40~50%)。
19. 黄褐色土 16層に似るが、ほとんど褐色土は認められない。
20. にぶい黄褐色土 締まり無くフカフカ。

5号土坑

10. 暗褐色土 やや砂質。ローム粒、白色軽石粒を含む。

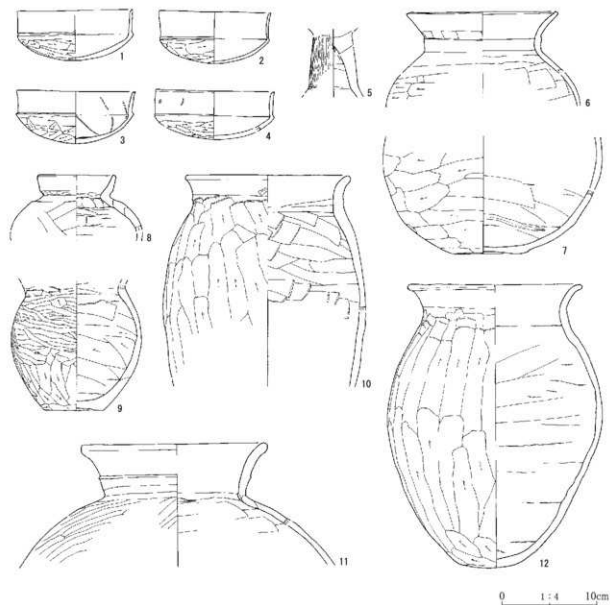


## 2区4号住居P1 F-F'

1. 暗褐色土 北平部、南側下位に焼土が認められ、赤褐色帯帯びる。
2. 黄褐色土 ローム主体。褐色土を少量含む。

## 2区4号住居P2 G-G'

1. 暗褐色土 焼土粒および塊(直径1.0~4.0cmほど)を含む。
2. にぶい黄褐色土 やや締まり弱く、暗褐色土を少量含む。ローム主体。
3. 暗褐色土 やや締まり弱く、ローム粒(直径0.5cmほど)を均一に少量含む。



第102図 2区4号住居出土遺物

さ0.64mの不定形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.38m、短径0.27mである。

**床面** 床面は平坦である。貯蔵穴脇に焼土・粘土がある。

**掘り方** ローム粒・塊を混じる暗褐色土や褐色土を含む黄褐色土で埋められていた。掘り方面の中央に長軸1.14m、短軸1.05m、深さ0.39mの不整形の床下土坑が検出された。断面形は台形で、底面は平坦である。土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性はある。

**遺物と出土状況** 竈および貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器甕(第102図12)は竈前床面直上で出土した。貯蔵穴の西側には粘土と焼土が床面から出土し、壁沿いには礫と土師器壺(6・7)が出土した。ここで図示した遺物のほかに、縄文土器8点、弥生土器1点、土師器636点、礫4点が出土した。  
**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

## 2区5号住居

(第103・104図 PL60・164・165 遺物調査表P.565・611)

位置 2区2-8-S-15・16G、T-16G

形状 長方形と推定される。4号住居、6号溝に切られる。

規模 長軸3.91m 短軸2.96m 壁高0.65m

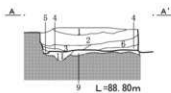
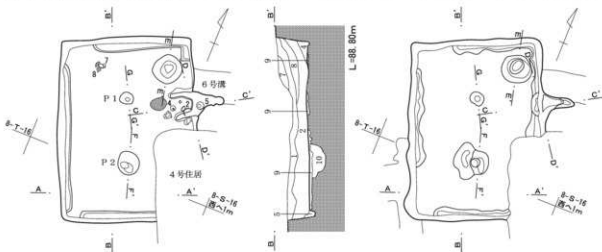
面積 (11.20)㎡ 長軸方位 N-23°-W

埋没土 上層はローム粒・ローム塊、白色軽石を含む暗褐色土・褐色土で、下層はローム粒を含む黄褐色土・明るい褐色土で埋まっていた。

竈 住居東壁北寄りに竈が構築されていた。確認長

1.12m、燃焼部幅0.39m。袖の残存長は向かって右側が0.48m、左側が0.58m。壁外に0.60m煙道が伸びる。燃焼部入り口中央に支脚と思われる円礫が据えられていた。竈袖は芯に円礫を並べて粘土で覆って造られていた。向かって左袖には3個、右袖には2個の礫が粘土製の袖の内部に遺存していた。燃焼部入り口使用面下層には掘り方より深い横長の掘り込みがあり、ローム層と暗褐色土が充填していた。

柱穴 住居中央部にP1・P2を検出した。規模(長径×短径×深さ)はそれぞれ、P1が28×25×63cm、P2が52×46×45cmである。いずれも支柱穴と考え



## 2区5号住居A-A' B-B'

1. だいぶ黄褐色土 直径1.5~2.0cmのローム粒、炭化物、白色軽石を多く含む。
2. 暗褐色土 中ローム塊を多く含む。1層より白色軽石が少ない。
3. 褐色土 ローム主体。黒褐色土をまだらに含む。
4. 暗褐色土 中ローム塊を10%ほど含む。
5. だいぶ黄褐色土 ポツポツしている。ローム粒をわずかに含む。
6. 2層に炭化物が混入している。
7. やや明るい暗褐色土 白色軽石を多く含む。崩まっている。
8. 黒褐色土 ローム塊30%、白色軽石を多く含む。
9. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。崩れあり。
10. 黄褐色土 ツフトローム主体に、ハードローム塊を全体的に含む。
11. やや明るい暗褐色土 粘性少々あり。ローム粒を少量含む。



## 2区5号住居の竈E-E'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を含む。軟らかい。
2. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。1層より明るい。軟らかい。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を多く含む明るい。軟らかい。



## 2区5号住居P1 G-G'

1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む軟らかい。
2. 暗褐色土 1層よりロームの量が多い。
3. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少量含む。

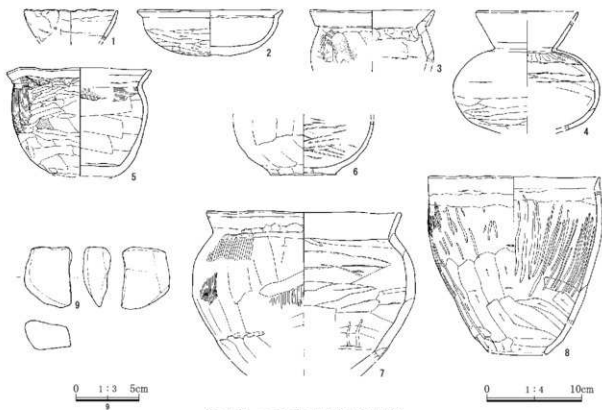
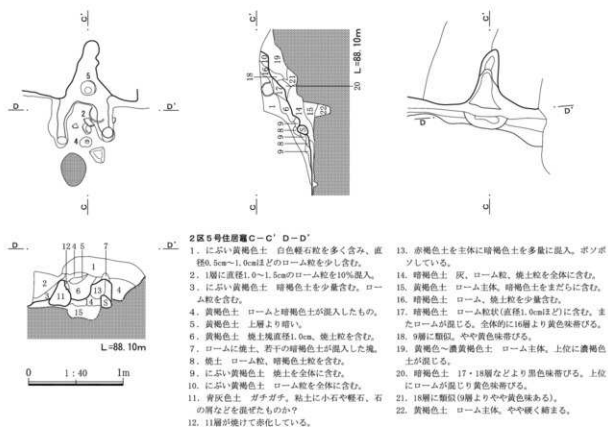


## 2区5号住居P2 F-F'

1. 黄褐色土 暗褐色土をやや多く混入。
2. 黄褐色土 暗褐色土を少量混入。

0 1:80 4m





第104図 2区5号住居層と出土遺物

られ、2本柱穴の構造の住居である。

**周溝** 周溝はほぼ全周しているが部分的でない。幅は概ね16cm、深さ13cmである。

**貯蔵穴** 住居北東隅に長径0.59m、短径0.57m、深さ0.52mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.35m、短径0.29mの隅円形である。

**床面** 床面は北東より緩やかに傾斜している。竈前に焼土があった。

**掘り方** 全体には平坦な掘り方であるが、P2の西側は深く掘り込まれていた。掘り方内は暗褐色土塊を斑に含む黄褐色土や、ローム塊を含む黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および北西隅寄りから出土した。北西壁際で土師器甕(第104図7)と甌(8)が床面直上で出土した。竈では土師器環(2)が右袖上2cmで、埴(4)が燃焼部使用面上16cmで、小型甕(5)が煙道部使用面10cmで逆位で出土した。また砥石(9)が埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほかに、縄文土器4点、弥生土器1点、土師器134点、砥石破片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒紙北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

## 2区6号住居

(第105～107図 PL61・165 遺物観察表P.565・566・611)

**位置** 2区2-9-A・B-14・15G

**形状** 長方形と推定。7・117号土坑に切られる。

**規模** 長軸5.65m 短軸4.83m 壁高0.54m

**面積** 26.83㎡ **長軸方位** N-70°-E

**埋没土** 上層は軽石粒を含む黄褐色土、下層はローム塊や褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 竈は検出されなかった。

**炉** 住居の中央南壁寄りに炉が検出された。炉の凹みは長径1.54m、短径1.02m、深さ0.06mの不定台形で、焼土の厚さは5cmほどである。

**柱穴** P1を床面で、P2を掘り方で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が24×22×29cm、P2が44×40×20cmである。

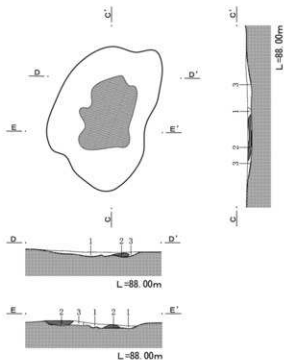
**周溝** 周溝は全周する。幅は概ね14cm、深さは13cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.87m、短径0.72m、深さ0.41mの不整長方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.32m、短径0.27mの隅丸方形である。

**床面** 床面は平坦である。粘土塊が中央北寄りに2箇所あった。北西部床面には炭化材が残っていた。

**掘り方** 底面はほぼ平坦。北壁の東寄り、西壁の中央部、南壁と炉西端の間の3カ所に、それぞれの壁に直交する小溝が検出された。北壁の溝は幅0.24m、長さ1.76m、西壁の溝は幅0.18m、長さ1.32m、南壁の溝は幅0.28m、長さ1.10mである。

**遺物と出土状況** 南東隅の貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器環(第107図1・2)は北西部のそれぞれ床面上13cm、16cmで出土した。2は北東部の床面上6cmで出土した破片とも接合した。土師器環(5)は南東部壁際で床面上2cm、土師器埴(10)

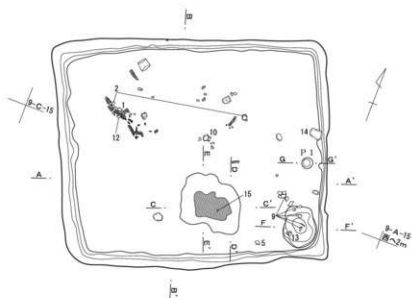
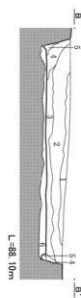


2区6号住居炉C-C' D-D' E-E'

1. 黒色～黒褐色土 炭主体層。ローム多く含むところは褐色味帯びる。締まり弱。
2. 赤褐色～淡赤褐色土 焼土主体層。締まり弱。
3. 暗褐色土 ロームとの混土で焼土や炭が混じる所もある。締まり中程度。

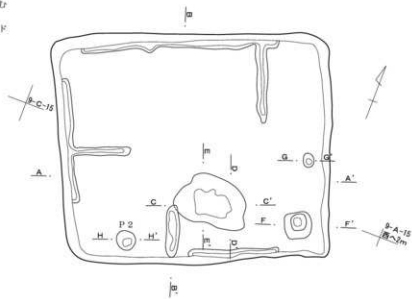
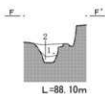
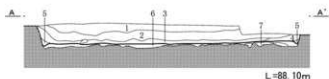
0 1:40 1m

第105図 2区6号住居炉



2区6号住居A-A' B-B'

1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒を多く含む。
2. にぶい黄褐色土 1層よりバミスが少ない。
3. 暗褐色土 ロームをまだらに含む。
4. 褐色土 暗褐色土をまだらに含む。
5. 黄褐色土 褐色土をまだらに含む。やや細まりがない。
6. にぶい黄褐色土 暗褐色土塊を全体的に含む(床面)。
7. 黄褐色土 ローム主体。ボソボソしたハードローム塊を含む。



2区6号住居貯蔵穴F-F'

1. 黄褐色土 ローム粒を全体に含む。
2. 黄褐色土 上層よりローム粒を多く含む。



2区6号住居P1G-G'

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

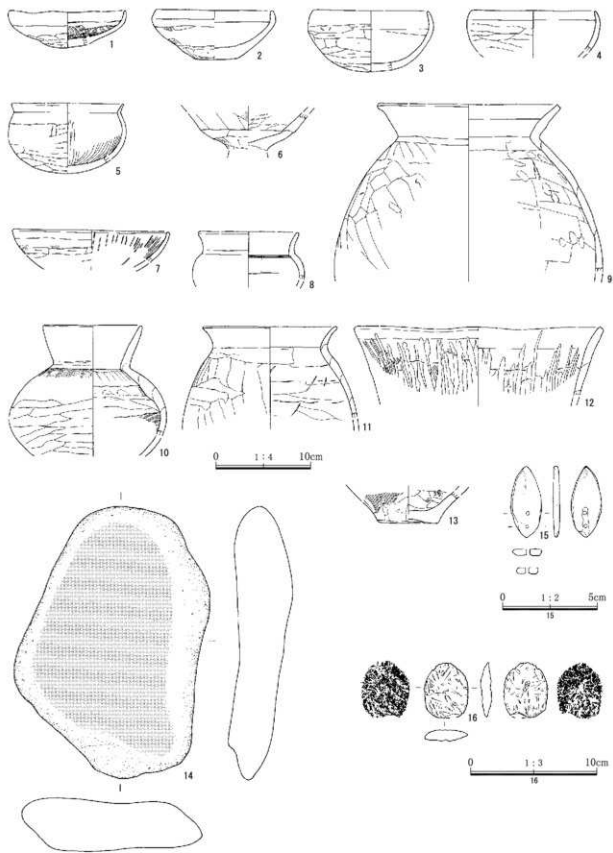
2区6号住居P2H-H'

1. にぶい黄褐色土 暗褐色土塊、ハード塊を全体に混入。ボソボソしている。



第106図 2区6号住居

3. 古墳時代の遺構と遺物



第107図 2区6号住居出土遺物

## 第5章 2区の遺構と遺物

は中央部床面上6cmで出土した。土師器甕(第107図9)は貯蔵穴内と貯蔵穴北側の床面上5cmで出土した破片が接合した。また炉のほぼ中央部焼土上面直上で剣形石製模造品(15)が出土している。また東壁際床面上2cmで台石(14)が出土した。その他の図示した遺物は埋没土中から出土した。16は扁平に押し潰された粘土塊でスサ状の圧痕が残る。

ここで図示した遺物以外に縄文土器10点、弥生土器1点、土師器396点、須恵器2点、剥片11点、礫2点が出土した。須恵器のうち1点は11号住居出土遺物(第114図9)と接合した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。柱穴はいずれも壁沿いにあり、一般的な主柱穴の位置にないが、P1は西壁に直交する小溝のほぼ延長線上にあり、P2は同じ小溝の東端と西壁からの距離が一致しており、何らかの住居構造に関わる柱穴である可能性が考えられる。

2区7号住居(第108図 PL62・165 遺物観察表P.566)

**位置** 2a区2-8-R-17・18G

**形状** 正方形か長方形と推定される。東側は調査区域外に伸びる。別遺構を切って構築される。

**規模** 長軸5.18m 短軸1.88m以上 壁高0.88m

**面積** 計測不能 **長軸方位** N-10°-W

**埋没土** ローム粒塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 調査範囲の中では竈は検出されなかった。

**柱穴** 調査範囲の中では主柱穴は検出できなかった。掘り方面で検出されたP2は位置から考えると主柱穴の可能性もある。

**周溝** 周溝は掘り方面で検出された。調査範囲の中では全周する。幅は概ね18cm、深さは17cmである。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 掘り方面で前述の周溝と、段差および小溝と柱穴を検出した。段差は南壁から幅1.1mに位置に南壁に平行しており、高さは7~10cmである。また小溝は段差の北側0.1mのところ段差に平行する方向に掘られていた。幅0.15m、長さ1.14m、深さ0.07

mである。柱穴のうちP1は住居南西隅にあり、P2は小溝の東端と段差の間に位置していた。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が18×22×12cm、P2が28×11以上×19cmで、P2内からは長さ12cmほどの礫が出土した。

**遺物と出土状況** 調査区の制約から調査は西壁周辺に限られたが、遺物は西壁の北寄りに比較的集中して出土した。土師器甕(第108図7)は西壁際中央部の床面直上で出土した。土師器坏(2)や甕(4・5)は床面上6~8cmで出土した。ここで図示した遺物以外に縄文土器9点、弥生土器1点、土師器323点、剥片3点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。周溝および柱穴は床面で調査・記録することはできなかったが、土層断面図を精査すると床面に伴うと判断できる。

## 2区8号住居

(第109・110図 PL62・63・165 遺物観察表P.566)

**位置** 2a区2-8-9-T・A-14・15G

**形状** 正方形と推定される。重複遺構なし。

**規模** 長軸3.90m 短軸3.53m 壁高0.40m

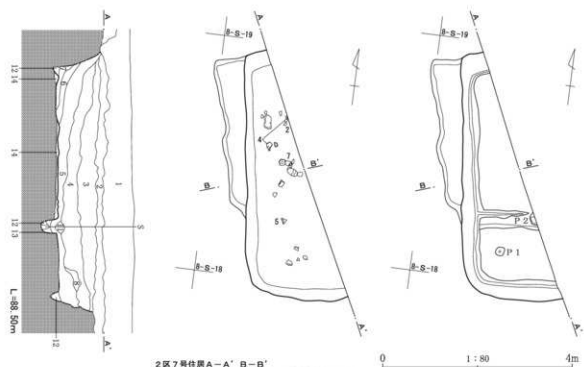
**面積** (13.63)㎡ **長軸方位** N-42°-W

**埋没土** ローム粒や塊、焼土粒を含む黒褐色土・暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居北東壁中央に竈が構築されていた。確認長1.51m、燃焼部幅0.49m。袖の残存長は向かって右側が0.98m、左側が0.64m。壁外に0.58m煙道が伸びる。左袖に比べ、右袖の残存状態は不良であった。燃焼部中央には円礫が立てられており、支脚として使用されていたと推定される。礫の上位には土師器坏(第110図1)が被せられていた。

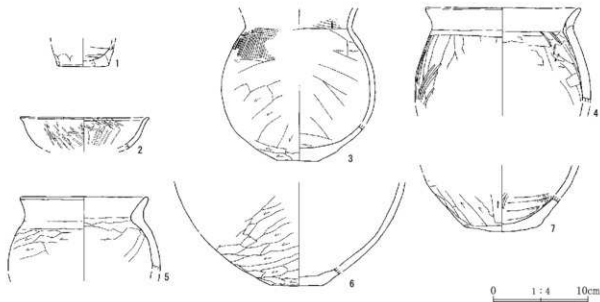
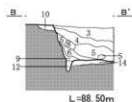
**柱穴** 主柱穴と推定されるP1・P2・P3・P4を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が23×21×59cm、P2が26×25×54cm、P3が26×22×46cm、P4が31×22×61cmである。

**周溝** 周溝はほぼ全周する。幅は概ね20cm、深さは13cmである。

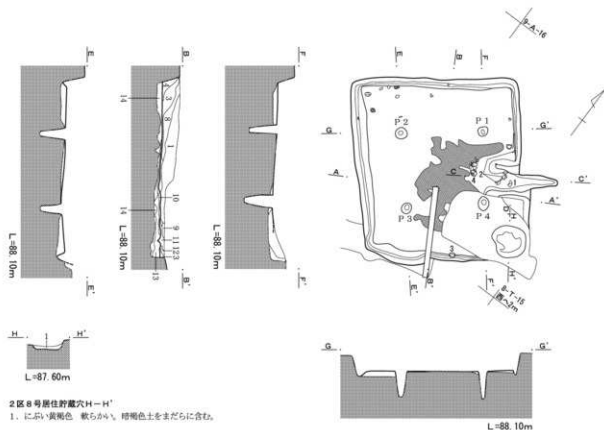


## 2区7号住居A-A' B-B'

1. 表土 浅間軽石を多く含み、ザラザラしている。
2. 旧耕作土 暗褐色土を呈する。浅間軽石を多く含み、ザラザラしている。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を少量含む。
4. 黄暗褐色土 ローム粒、ローム塊を多量に、黒褐色土塊をわずかに含む。
5. 黒褐色土 ローム塊、暗褐色土粒を含む。
6. 黄暗褐色土 暗褐色土とローム粒が混合したもの。黒褐色土塊を少量含む。
7. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
8. 暗褐色土 ローム粒が少量均一に混合したもの。粒子細かく締まっている。
9. ローム粒、ローム塊主体。暗褐色土若干混合。
10. (貯遺構)暗褐色土とロームが均一に混合したもの。黄褐色、軟らかい。
11. 黒褐色土 ローム粒少量含む。軟らかい。
12. 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合。軟らかい。
13. 黄褐色土と黒褐色土が不均等に混合。軟らかい。
14. ローム、黒褐色土が不均等に混合。ロームが多く黄褐色。締まっている。



第108図 2区7号住居と出土遺物

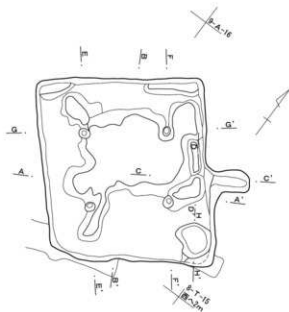
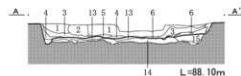


2区8号居住貯蔵穴H-H'

1. にぶい黄褐色 軟らかく、暗褐色土をまだらに含む。

2区8号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒を不均等にやや多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む、黄色味がかった。
4. 暗褐色土 3層よりロームの量やや少なく、やや暗い。
5. 黒褐色土 ローム粒を少量含む、軟らかく。
6. 暗褐色土 焼土、ロームの混合層。
7. 黄褐色土 ローム主体で全体的に暗褐色土が混合。
8. 暗褐色土 黒褐色土小塊、ローム小塊、ローム粒、灰の小塊を含む。
9. 暗褐色土 焼土を多く含む。
10. ローム主体の黄褐色土が焼けたもの、赤褐色を呈す。
11. 炭、焼土、暗褐色土の混合、全体として黒色。
12. ローム粒と暗褐色土が若干混合したものに焼土塊含む。
13. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土含む。
14. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土わずかに含む。
15. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土、黒褐色土混入。



第109図 2区8号住居

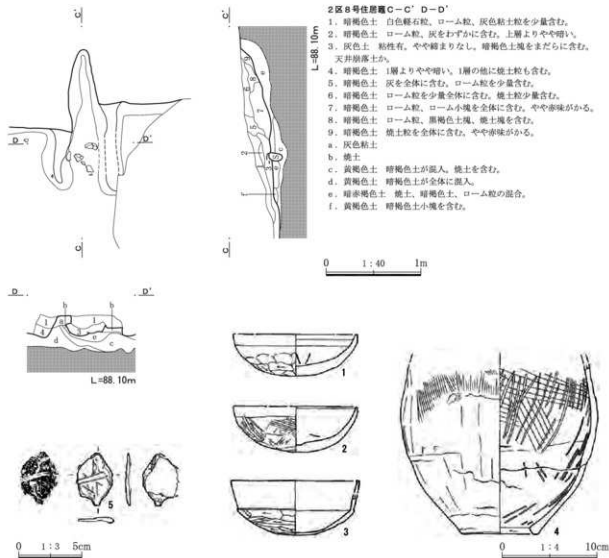
**貯蔵穴** 東隅に長径0.73m、短径0.70m、深さ0.21mの不整形形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.43m、短径0.30mの楕円形である。

**床面** 床面にはやや凹凸があったが、中央部は緩やかに凹み、硬化していた。竈前には比較的広く焼土が広がっていた。また西隅壁際に焼土や粘土の小塊が床面直上で出土した。なお、東部には攪乱が床面までおよんでいる部分があった。

**掘り方** 支柱穴の内側はほぼ平坦で、柱より外側が壁に沿って深く掘られていた。竈前もやや高く地山が残されていた。掘り方は厚さ5～13cmの黒褐色土塊を混入する黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は竈およびその周辺にまともっていた。土師器坏(第110図1・2)は竈燃焼部から、甌(4)は竈前床面直上で出土した。また東壁際で土師器坏(3)が床面上7cmで出土した。木葉形の粘土塊(5)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物以外に縄文土器2点、弥生土器4点、土師器126点、剥片6点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。



第110図 2区8号住居竈と出土遺物



## 第5章 2区の遺構と遺物

### 2区9号住居

(第111・112図 PL63・165 遺物観察表P.566・567)

**位置** 2a区2-8-S-13・14G、  
2-8-T-14G

**形状** 正方形と推定される。4号土坑に切られる。

**重複** 4号土坑より古く、10号住居より新しい。直接の埋没土による新旧関係の記録はないが、10号住居の床面が9号住居に及ばないことから、本住居が新しいと推定される。

**規模** 長軸3.77m 短軸3.74m 壁高0.69m

**面積** (14.09)㎡ **長軸方位** N-68°-E

**埋没土** ローム粒・小塊、軽石粒を含む暗褐色土。

**竈** 住居東壁中央に竈が構築されていたと推定される。確認長0.97m、燃焼部幅0.79m(焼土)。壁外に0.14m煙道が伸びる。両袖の残存状態は不良で、焼土が広がっていた範囲を竈燃焼部と推定した。

**柱穴** 調査できた範囲の中では主柱穴は検出できなかった。南東部の床面で視認できたビット状の落ち込みもあったが、柱穴との確信を得られなかった。

**周溝** 周溝は西壁と東壁の一部を除いて全周する。幅は概ね13cm、深さは7cmである。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面はほぼ平坦である。南東部には床面に及ぶ帯状の擾乱があり、床面等は復元して記録した。

**掘り方** 掘り方の調査を行ったところ、中央北寄りに長軸0.85m、短軸0.73m、深さ0.72mの楕円形の床下土坑が検出された。断面形は円筒形で、底面は平坦である。土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性がある。

**遺物と出土状況** 遺物は削平されてしまった竈右脇から南東隅に比較的多くまとまって出土した。土師器坏(第112図1)は竈右横の床面直上で出土した。土師器瓶(5)は住居南東隅竈右横の床面直上で出土した。図示した遺物以外に縄文土器2点、土師器171点、剥片8点が出土した。

**所見** 全体として削平が著しく残存状態は不良である。出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

### 2区10号住居

(第111・112図 PL63 遺物観察表P.567)

**位置** 2a区2-8-R・S-14G

**形状** 削平により、北東部の一部のみの確認にとどまった。北隅の形状から、正方形か長方形と推定される。9号住居、1・2・4号溝に切られる。

**重複** 9号住居より古い。

**規模** 長軸4.36m残存 短軸3.90m残存  
壁高0.36m

**面積** 計測不能 **長軸方位** N-19°-W

**埋没土** 白色軽石やローム塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 竈は検出されなかった。住居のほぼ中央部と推定される位置の床面に焼土が検出された。焼土の範囲は長径0.76m、短径0.33mの楕円形である。炉跡かどうかは確定できなかった。

**柱穴** 掘り方面でP1・P2を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が35×31×47cm、P2が28×23×22cmである。これらが主柱穴かどうかは確定できなかった。

**周溝** 周溝は北壁と東壁に検出された。本来は全周するものと考えられる。幅は概ね20cm、深さは13cmである。

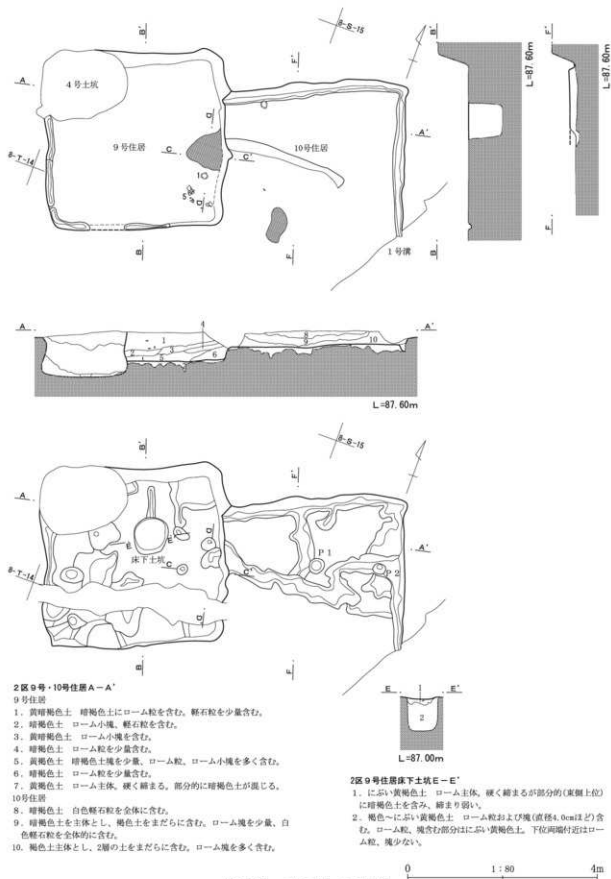
**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は北側から南側に向かって中央に段差があった。中央南西寄りには前述した焼土が検出された。

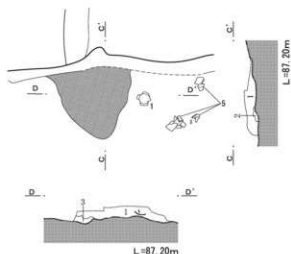
**掘り方** 掘り方面ではP1・P2のほか、北壁からP1に向かう溝と、それに直交しP2を通る溝を検出した。小溝の可能性も考えられる。壁方向に対して斜行する溝の性格は不明である。

**遺物と出土状況** 床面直上から出土した遺物はほとんど無かった。図示した土師器甕(第112図6)は埋没土中から出土した。図示した遺物以外に縄文土器4点、土師器71点、剥片3点が出土した。

**所見** 住居全体を調査できなかったもので、不明部分が多い。出土遺物も少ないことから、住居の時期を明らかにすることはできなかった。



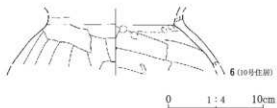
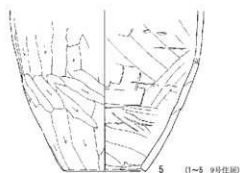
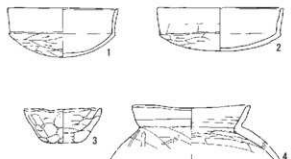
第111図 2区9号・10号住居



2区9号住居断C-C' D-D'

1. 褐色土 暗褐色土塊(欠)、焼土粒、ローム塊(中)、ローム粒を全体的に含む。
2. 褐色土 焼土を全体的に含む。
3. 濃い黄褐色土 直径0.5cmほどの焼土を少し含む。

0 1:40 1m



0 1:4 10cm

第112区 2区9号住居断と9号・10号住居出土遺物

### 2区11号住居

(第113・114図 PL64・165 遺物観察表P.567・611)

**位置** 2a区2-8・9-T・A-13-14G

**形状** 南半部を54・55号住居および攪乱に切られているが、正方形と推定される。

**重複** 54・55号住居より新しい。

**規模** 長軸4.48m 西壁残存長4.26m 壁高0.55m

**面積** (19.95)㎡ **長軸方位** N-76°-E

**埋没土** 暗褐色土粒・塊を含む黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 竈は検出されなかった。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3と、P1・P2間のほぼ中央にP4、西壁際でP5を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が40×38×55cm、P2が34×26×32cm、P3が34×39×37cm、P4が21×28×15cm、P5が26×21×28cmである。南東部の主柱穴は重複する55号住居の掘り方面精査の際にも確認できなかったが、検出漏れと思われる。

**周溝** 周溝は北・東壁と西壁の一部で検出した。幅は概ね12cm、深さは5cmである。南半部においては住居や攪乱との重複によって、検出が困難であった。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.71m、短径0.65m、深さ0.75mの正方形の貯蔵穴が検出された。底面は径0.57m、短径0.42mである。本貯蔵穴は55号住居掘り方面で検出したが、位置関係から11号住居の貯蔵穴と判断した。

**床面** 床面は平坦である。

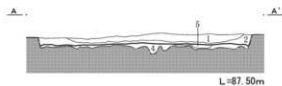
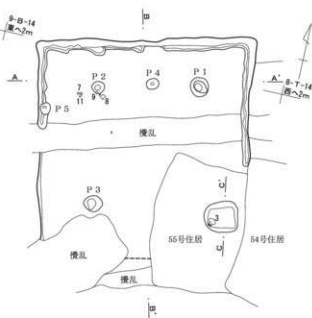
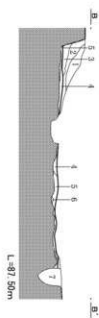
**掘り方** 掘り方は四隅と中央部を深く掘る傾向が見られたが、不定形で何らかの施設とは思われない。掘り方は厚さ3~22cmほどのローム塊を含む黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は貯蔵穴と主柱穴P2周辺にまとまって出土した。土師器環(第114図2)・埴(3)は貯蔵穴内より出土した。土師器環(1)・壺(4)・甎(5)は埋没土中からの出土である。須恵器甕破片(7~13)は本住居埋没土あるいは攪乱土中から出土した破片が接合した。これらのなかには6号住居・



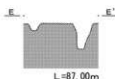
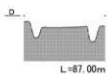
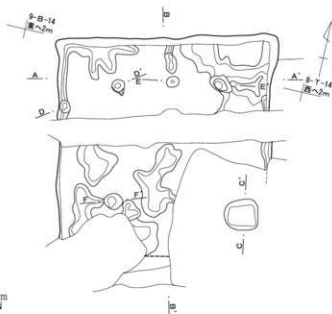
2区11号住居貯蔵穴C-C'

- 赤味がかった灰黄褐色土 ローム粒、反褐色土塊、ローム塊土中の鉄分がさびた赤黒色土含む。
- 黄褐色土 ローム主体、1層の土が入り込む。
- 1層に類似しているが、ローム塊の割合が少ない。
- にぶい黄褐色土 ローム主体、ローム塊、暗褐色土粒少量含む。粘性強い。

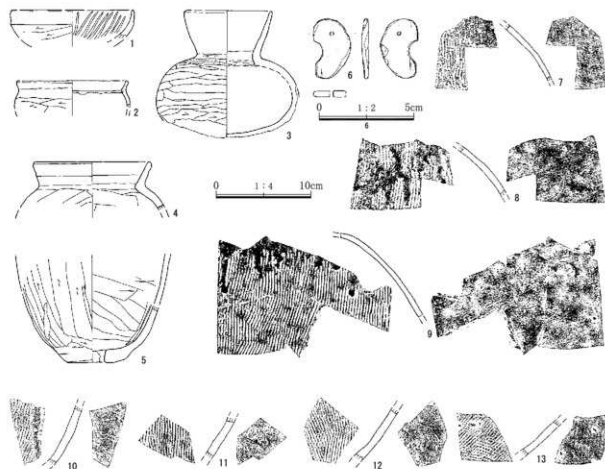


2区11号住居A-A' B-B'

- 暗褐色土 黄褐色土粒、黄褐色土塊を含む。
- 暗褐色土 上層よりも黄褐色土の量が多く、黄色味がかる。
- 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 黄褐色土 暗褐色土を全体に含む。
- 黄褐色土 暗褐色土をわずかに含む。
- 褐色土 軟らかい。ロームと暗褐色土が全体に混合したもの。
- 暗褐色土 ローム小塊を含む。軟らかい。



第113図 2区11号住居



第114図 2区11号住居出土遺物

4号土坑・110号土坑出土の破片と接合したものがあり、16号・19号住居出土遺物の中には接合できなかったが、同一個体と思われる破片が出土している。勾玉形石製製造品(第114図6)は攪乱土中から出土した。図示した遺物以外に土師器91点、剥片3点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。本住居の調査は、当初北半部のみを検出にとどまっていたが、54号・55号住居の精査を通して、掘り方面で主柱穴P3および貯蔵穴を検出したことから、全形の推定が可能となった。竈は検出されなかったが、位置を推定すれば東壁中央やや南寄りと推定される。55号住居確認面(埋没土上位)で竈を確認できなかったことから、本住居の竈は55号住居に壊されたものと推定される。

2区12号住居(第115図 PL64・166 遺物観察表P.567)

**位置** 2a区2-9-C-17・18G

**形状** 東隅が試掘トレンチで切られているが、長方形と推定される。

**規模** 長軸2.54m 短軸1.85m 壁高0.17m

**面積** (4.57)㎡ **長軸方位** N-48°-E

**埋没土** ローム粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。中央から南部にかけては暗褐色土を含むローム主体の土で埋まっていた。

**竈** 竈は検出されなかった。床面中央及び北東隅部寄りの2カ所に焼土が分布していた。炉跡である可能性もあるが、確定できなかった。

**柱穴** 調査できた範囲の中では主柱穴は検出できなかった。

**周溝** 周溝は検出できなかった。

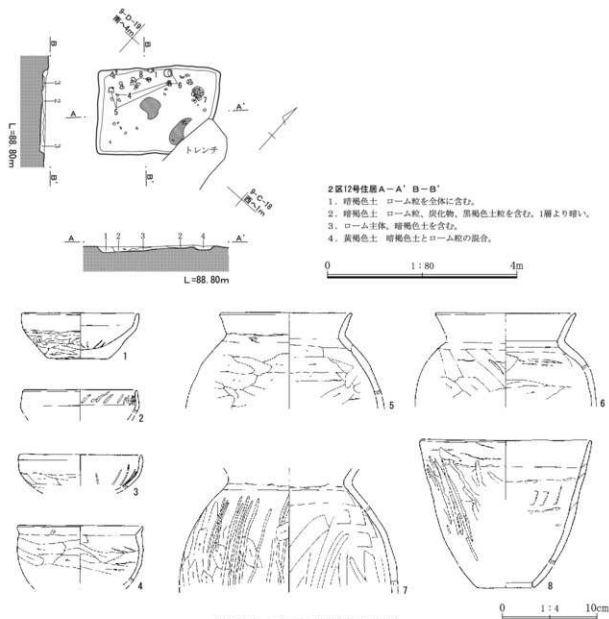
**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 掘り方は検出されなかった。

**遺物と出土状況** 北西壁際を中心に遺物が出土した。土師器環(第115図1)は西壁中央壁際床面上2cmで出土した。環(3・4)は北西部床面上4cmで出土した。土師器甕(5)・瓶(8)は北西部床面上5～8cmで出土した。甕(6)・壺(7)は北東部床面上4～7cmで出土した。図示した遺物以外に縄文土器1点、土師器146点、剥片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。遺構の名称は遺構確認時に12号住居としたが、調査が進行すると竈などを伴わない事が判明した。住居でないことも考えたが、遺構名はそのまま12号住居として調査を続行した。小型であること、炊飯施設を伴わないことから、通常の堅穴住居でない可能性が高い。



第115図 2区12号住居と出土遺物

## 第5章 2区の遺構と遺物

### 2区13号住居

(第116・117図 PL65・166 遺物観察表P.567・568・611・617)

**位置** 2区2-9-F-14・15G、G-14G

**形状** 長方形。26号・44号住居と重複する。

**重複** 26号・44号住居より新しい。

**規模** 長軸4.15m 短軸2.82m 壁高0.22m

**面積** 12.09㎡ **長軸方位** N-70°-E

**埋没土** ローム塊・黒褐色土塊を含む暗褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居南壁東側に竈が構築されていた。確認長(1.17)m、燃焼部幅(0.4)m。袖の残存長は向かって右側が0.7m。壁外に0.48m煙道が伸びる。

**柱穴** 主柱穴は検出できなかった。

**周溝** 周溝は検出できなかった。

**貯蔵穴** 北西隅に長径0.68m、短径0.62m、深さ0.21mの円形の貯蔵穴が検出された。

**床面** 床面は平坦で南に緩やかに傾斜している。

**掘り方** 不定型な凹凸があり、厚さ3~36cmの黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 竈周辺および中央部に比較的遺物が集中して出土した。土師器手づくね土器(第117図1)は中央部床面上15cmから出土した遺物と竈石袖前床面上8cmの遺物が接合した。高坏(5)は中央やや北より床面上7~14cmの遺物と南壁際の床面上7cmの遺物群が接合したものである。鉢(3・6・7)は中央部やや東より床面上10~15cmの遺物が接合した。須恵器甕破片(10・11)は床面上4~8cmで出土した。剣形石製模造品3点(12~14)はいずれも埋没土中からの出土である。砥石(16)は北東部床面上6cmで出土した。鉄製品(17)は埋没土中からの出土で、混入であろう。図示した遺物のほかに土師器520点、剥片2点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

### 2区14号住居

(第118~121図 PL66・67・166・167 遺物観察表P.568・569)

**位置** 2区2-9-F-G-15・16G

**形状** 正方形。28号住居と重複する。

**重複** 28号住居より新しい。

**規模** 長軸4.40m 短軸4.38m 壁高0.38m

**面積** 19.38㎡ **長軸方位** N-67°-E

**埋没土** ローム粒・軽石粒を含む暗褐色土。

**竈** 1カ所の竈(1号)と2カ所の竈痕跡(2号・3号)が検出された。1号竈は住居東壁中央に構築されていた。確認長1.19m、燃焼部幅0.4m。袖の残存長は向かって右側が0.86m、左側が1.0m。壁外に0.24m煙道が伸びる。1号竈の燃焼部に支脚と思われる石があり、その上に壺底部が底を上にして出土した。2号竈(跡)は住居西壁北寄りに構築されていた。確認残存長0.78m、燃焼部幅1.09m。2号竈の左右の袖は残っていなかった。3号竈(跡)は住居北西隅に構築されていた。確認残存長0.4m、燃焼部幅0.72m。3号竈の両袖も残っていなかった。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が34×29×54cm、P2が36×27×59cm、P3が38×31×65cm、P4が26×24×54cmである。

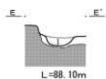
**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅に長径1.12m、短径0.86m、深さ0.61mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.42m、短径0.41mの隅丸正方形である。貯蔵穴の周囲には土師器小型甕(第120図18・19)、甕(29)が床面直上で出土し、さらに甕(28)が転がり落ちるような状況で出土している。

**床面** 床面はほぼ平坦である。主柱穴より内側の中央部は硬化が著しかった。

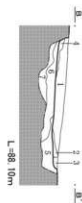
**掘り方** 中央およびやや北部に不定形な掘り込みがあった。全体としては6~30cmの厚さで濃黄褐色土が充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は住居全体から出土しているが、1号竈から貯蔵穴周辺にかけてまとまっていた。土師器甕(第120図21・24)、甕(第121図26)は住居中央部に散在して出土した破片が接合した。完形の坏(9)は住居北隅床面上11cmで出土した。また床面には棒状礫や扁平礫が散在して出土した。図示した遺



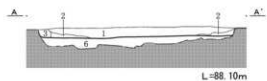
2区13号住居跡穴E-E'

1. 暗褐色土 ローム粒を全体的に混入。黒褐色土をまだらに少量含む。

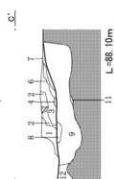
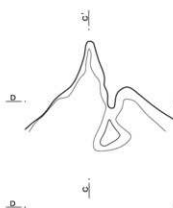
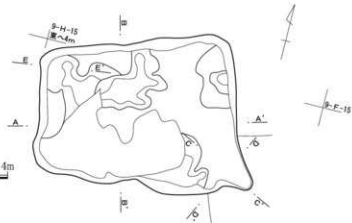


2区13号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒、黄暗褐色土塊を多く含む。
2. 暗褐色土 ローム塊、ローム粒、黒褐色土塊を含む。
3. 黄暗褐色土 ローム小塊を含む。
4. 黒褐色土 暗褐色土が塊状に混入。黒褐色土が多く混入。
5. 暗黄褐色土 ロームをまだらに含む。
6. 黄褐色土 ローム主体、白色軽石粒(直径1.0~1.5cmほど)少量含む。硬く締まる。
7. 黄褐色土 6層より濃黄褐色に近い色調で、締まりも弱い。

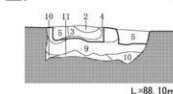


0 1:80 4m



2区13号住居跡C-C' D-D'

1. 暗褐色土 白色軽石粒、ローム粒を混入。やや締まっている。
2. 明黄褐色土 白色軽石粒を少量含む。暗褐色土を混入する(10%ほど)。
3. 暗褐色土(1層よりやや明るい) 黒褐色土小塊を少々含む。ローム粒、黒土粒、暗褐色土を混入。
4. 黒褐色土 土粒を少量含む。
5. 暗褐色土 白色軽石粒、黒土粒、ローム粒を含む。
6. 暗褐色土 5層に似るが、礎石を塊状(長径3.0cmほど)にも含む。
7. 暗褐色土 3~6層より黒色味が増える。黒土粒および塊(直径2.0cmほど)を含む。ローム粒を少量含む。
8. 濃黄褐色土 ローム主体。硬く締まる。
9. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径0.5cm、また長径2.5cmほど)均一に含む。白色軽石粒を少量含む。
10. 暗黄褐色土 ローム粒が混じる。直径0.5cmほどの礫山(起源の白色軽石粒を少量含む)。
11. 濃黄褐色土 ロームが多く混じる。また長径2.0cmほど混じる。
12. 黄褐色土 ローム主体、白色軽石粒(直径1.0~1.5cmほど)少量含む。硬く締まる。

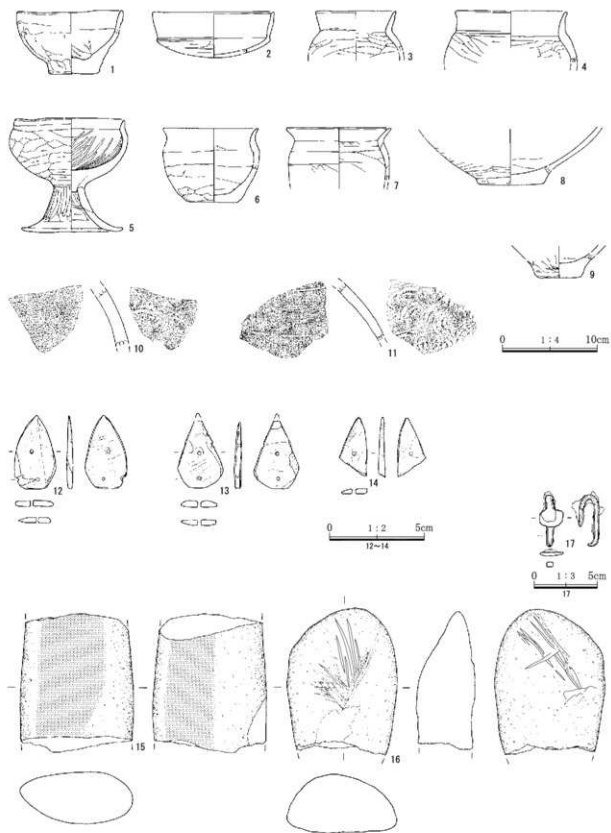


0 1:40 1m

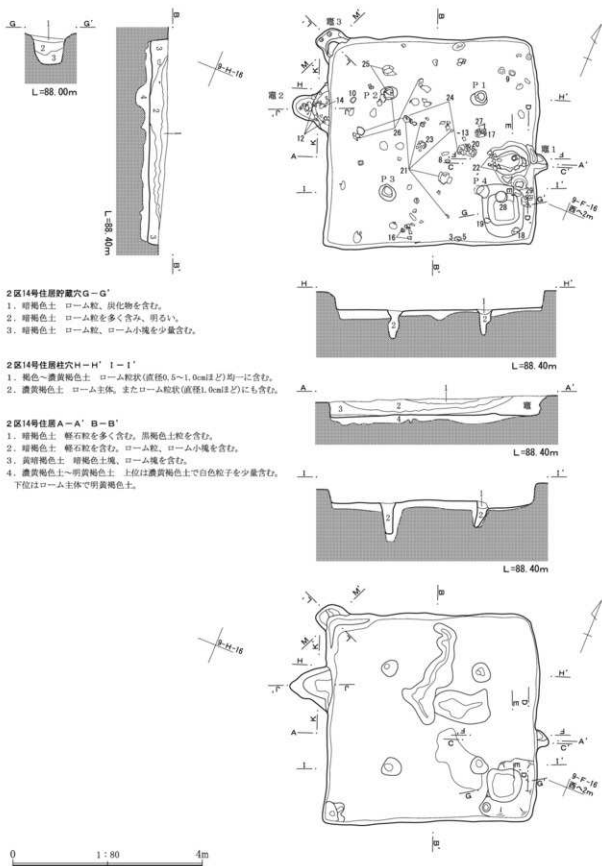
第116図 2区13号住居



第5章 2区の遺構と遺物

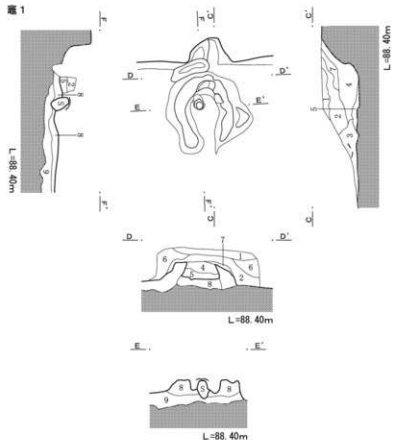


第117図 2区13号住居出土遺物



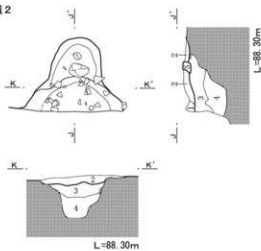
第118図 2区14号住居

遺1



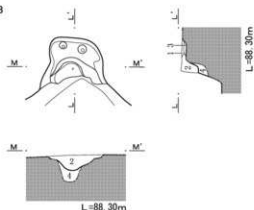
- 2区14号住居遺1 C-C' D-D' E-E' F-F'
1. 褐色土 白色軽石粒、ローム粒、焼土粒を含む。硬く締まっている。
  2. 灰黄褐色土 やや粘性有。粘土を全体的に混入している。白色軽石粒を全体的に含み、焼土粒を少量含む。
  3. やや明るい褐色土 直径1.0cmほどの焼土粒、暗褐色土をまだらに含む。
  4. やや暗めの灰黄褐色土 焼土塊、粘土塊を含む。
  5. 赤褐色土 焼土塊が50%ほど混入。黒褐色土(使用面の灰か?)を少量含む。
  6. 褐色土 白色軽石粒を全体的に混入。黒褐色土をまだらに含む。
  7. 2層に焼土塊を50%混入。
  8. 灰褐色～暗灰褐色土 焼土塊30～50%混入。特に下位に灰が混じる。白色軽石(直径10.0mmほど)を含む。
  9. 暗褐色土 ローム塊(直径1.0～2.0cmほど)均一に多く含む。白色軽石粒(直径1.0mmほど)均一に含む。

遺2



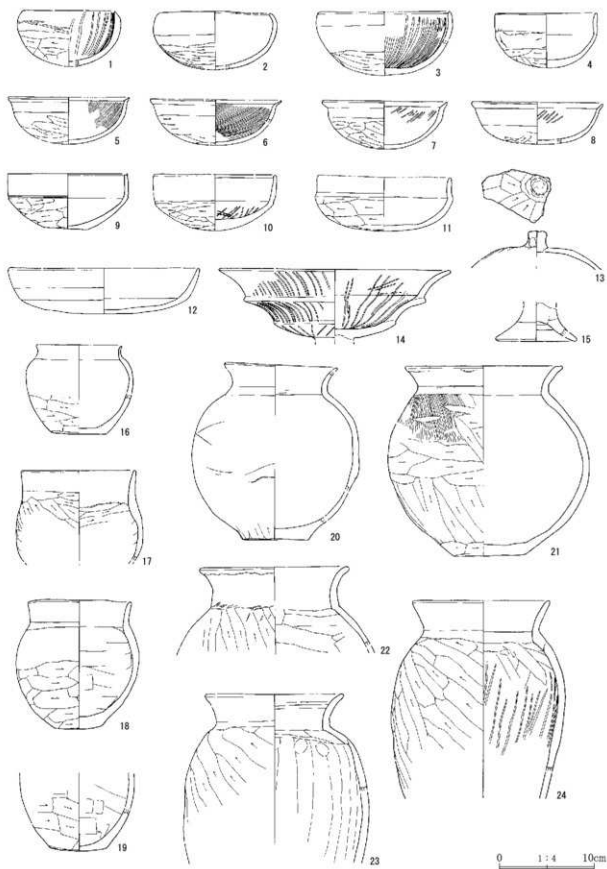
- 2区14号住居遺2 J-J' K-K'
1. 濃黄褐色土 ロームが混じる。直径1.0mmほどの白色粒子を均一に含む。焼土粒を含む。
  2. 遺3の2層に同じ。焼土粒の含み方は遺3の2層より多い(特に東側)。
  3. 濃黄褐色土 ローム塊(直径1.0～1.5cmほど)含む。硬く締まる。直径1.0～4.0mmほどの椀名山起面の白色軽石粒を均一に含む。焼土粒をごく少量含む。
  4. 黄褐色土 特に下位に濃褐色土混じる。ローム主体。焼土粒をごく少量含む。

遺3

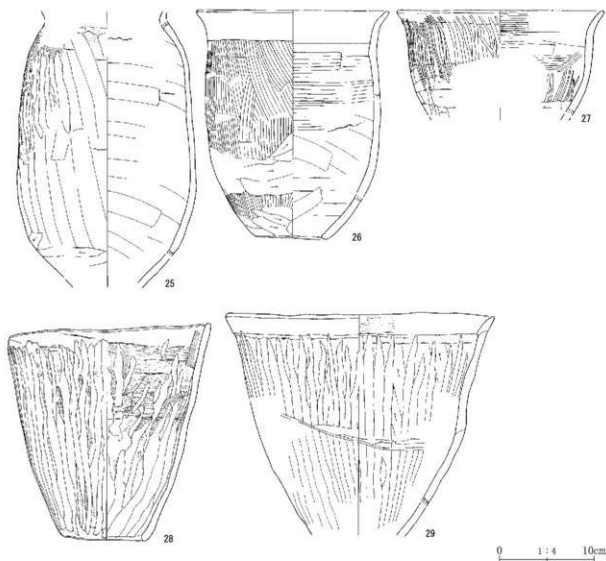


- 2区14号住居遺3 L-L' M-M'
1. 赤赤褐色土 焼土主体層。
  2. 暗黄褐色土～濃黄褐色土 ロームが混じる。ロームが多く混じる部分は濃黄褐色土(J-J' の2層、K-K' の北東側)。直径1.0～4.0mmほどの椀名山起面の白色軽石粒を上位にやや多く含む。焼土粒および塊(直径0.1～1.0cmほど)少量含む。炭化物をごく少量含む(K-K' 南西側に1点)。
  3. 黄褐色土 ローム主体で硬く締まる。
  4. 濃黄褐色土 白色軽石粒(直径1.0mm内外)含む。ロームが混じる。

第119図 2区14号住居遺



第120図 2区14号住居出土遺物(1)



第121図 2区14号住居出土遺物(2)

物のほかに縄文土器2点、土師器811点、須恵器1点、粘土塊2点、棒状礫・円礫13点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

#### 2区15号住居

(第122・123図 PL68・167 遺物観察表P.569・611)

**位置** 2a区2-9-H・I-15-16G

**形状** 正方形。27号住居、18号土坑と重複する。

**重複** 18号土坑より古く、27号住居より新しい。

**規模** 長軸4.58m 短軸4.56m 壁高0.40m

**面積** 21.34㎡ **長軸方位** N-87°-W

**埋没土** ローム粒・塊、軽石粒を含む暗褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長0.99m、燃焼部幅0.42m。袖の残存長は向かって右側が1.0m、左側が0.89m。壁外に0.04m煙道が伸びる。右袖先端には垂角礫が芯材に使われていた。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が24×23×48cm、P2が24×21×45cm、P3が30×26×57cm、P4が26×24×47cmである。掘り方面ではP3の北東側に隣接してP5を検出した。P5の規模(長径×短径×床面からの深さ)は32×25×

29cmである。

**周溝** 周溝は南壁中央から西壁中央にかけて巡る。幅は概ね19cm、深さは8cmである。

**貯蔵穴** 住居南東隅に長径0.77m、短径0.74m、深さ0.66mの円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.59m、短径0.53mの円形である。貯蔵穴底面で土師器甕(第122図8)が潰れた状態で出土した。

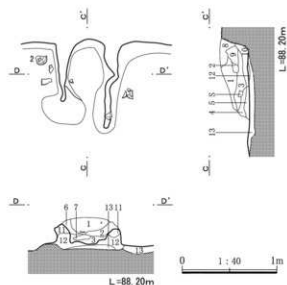
**床面** 床面はほぼ平坦である。主柱穴の内側はやや高まっており、硬化していた。

**掘り方** 掘り方の調査で、住居中央に長軸1.20m、短軸1.13m、深さ0.34mの不定円形の土坑が検出された。断面形は碗形で、底面は平坦。土坑の位置が

らすれば住居に伴う床下土坑の可能性がある。

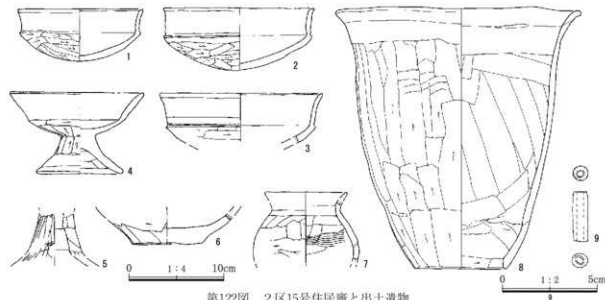
**遺物と出土状況** 南東隅の貯蔵穴周辺および竈左袖脇にまとまって遺物が出土した。土師器杯(第122図1)は南東隅床面上5cm、杯(2)は竈左脇床面上4cmで出土した。高杯(5)は貯蔵穴南西脇床面直上で出土した。甕(7)は竈右脇床面直上で出土した。管玉(9)は南中央部床面直上で出土した。ここで図示した遺物のほかに縄文土器6点、弥生土器1点、土師器527点、棒状礫1点、剥片11点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。



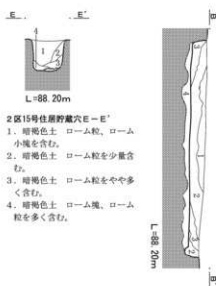
**2区15号住居竈C-C' D-D'**

1. 褐色土 直径0.5~2.0cmのローム粒を全体的にやや多く含む。焼土粒、炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒。直径0.5cm以上のローム粒を含む。
3. 1よりも明るい褐色土 粘土塊を含む。焼土粒、ローム粒ともわずかに含む。
4. 灰黄褐色土 焼土を混入。
5. 赤褐色土 焼土。
6. 褐色土 直径1.0~1.5cmのローム粒を含む。白色輝石粒も含む。
7. 粘土塊主体 2層の土を30%ほど含む。
8. 黄褐色土 ローム主体。焼土粒少量含む。
9. 暗褐色土 直径1.0~2.0cmのローム粒、ローム塊をやや多く含む。炭化物を少量含む。
10. ぶい暗褐色土 ローム塊を固に含む。焼土を少量含む。
11. 黄褐色土 ローム主体。硬く締まる。暗褐色塊状(直径1.0~3.0cmほど)に混じる。白色粒子が少量混じる。
12. 濃褐色土 ロームが固じる。また粒および塊状(直径2.0cmほど)にも混じる。白色粒子が少量混じる。
13. 濃褐色土 ローム主体。やや締まり弱い。



第122図 2区15号住居竈と出土遺物

第5章 2区の遺構と遺物

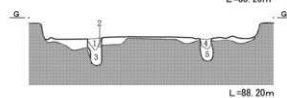
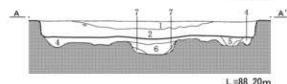
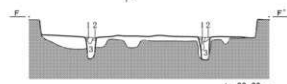
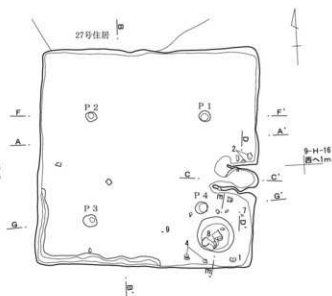


2区15号住居的藏穴E-E'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。
4. 暗褐色土 ローム塊、ローム粒を多く含む。

2区15号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を少量含む、軽石粒を少量含む。
2. 黄暗褐色土 ローム小塊、暗褐色土小塊を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
4. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土、ローム塊(長径1.0~3.0cmほど)少量含む、白色軽石(直径1.0cmほど)均一に少量含む、礫山起源の白色軽石塊(長径1.5cmほど)1点含む。
5. 暗褐色土 横土粒および塊(直径0.1~1.5cmほど)含む、ローム粒および塊(直径6.0cmほど)やや多く含む。
6. 暗褐色~暗褐色の間 下位にローム粒および塊(直径3.0cm)含む。
7. 黄褐色土 ローム主体、やや硬く締まる。



2区15号住居P1・P2 F-F'

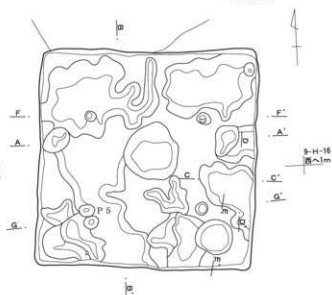
1. 黄褐色土 暗褐色土を全体に混合、暗い。
2. 黄褐色土 明るい(ほとんどローム粒)。
3. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。

2区15号住居P3 G-G' 左

1. 黄褐色土 暗褐色土を少量全体に混合。
2. 黄褐色土 暗褐色土をやや多く含む。
3. 黄褐色土 2層より暗褐色土を多く含む。

2区15号住居P4 G-G' 右

4. 黄褐色土 暗褐色土を全体に含む。
5. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。



第123図 2区15号住居

## 2区16号住居

(第124・125図 PL69・167・168 遺物観察表P.569・570)

**位置** 2区2-9-G・I-14G、  
2-9-H-13・14G

**形状** 長方形。32号住居と重複する。

**重複** 32号住居より新しい。

**規模** 長軸5.08m 短軸3.90m 壁高0.6m

**面積** 19.62㎡ **長軸方位** N-73°-E

**埋没土** ローム粒・塊を含む暗褐色土・黄褐色土。

**竈** 住居東壁中央やや南寄りに竈が構築されていた。確認長0.90m、燃焼部幅0.35m。袖の残存長は向かって右側が0.84m、左側が0.88m。燃焼部に支脚として長さ25cm、直径10cm大の棒状礎が立てられている。燃焼部からは土師器高坏(第125図12)、壺(16)が出土した。

**柱穴** P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が30×28×38cm、P2が64×30×40cm、P3が31×21×30cm、P4が58×55×14cm、P5が30×28×5cm、P6が26×24×7cm、P7が28×26×10cmである。住居中央部にあるP1・P2は両者を結ぶ線が南北壁に平行することから主柱穴の可能性が高い。またP5はP2と結ぶ線が東西壁と平行し、P4・P7は両者を結ぶ線が西壁と平行することから何らかの構造をもったピットと考えられる。

**周溝** 周溝は南東隅部分を除いてほぼ全周する。幅は概ね15cm、深さは14cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.70m、短径0.46m、深さ0.50mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.32m、短径0.18mの楕円形である。貯蔵穴東端では土師器坏(第125図10)が伏せた状態で出土した。

**床面** 床面は平坦である。中央部は硬化していた。南西部の床面には炭化材が遺存していた。

**掘り方** 鳥状に掘り残したような不定型な掘り込みが目立つ。北西部が特に掘り込まれている。全体としては厚さ4~22cmの黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 竈および貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器坏(第125図5)は南東隅床面直

上で出土した。また坏(6~8)は南壁沿いで出土した。壺(13)は竈右脇床面直上で出土した。また竈左横の床面直上で大型の扁平礫が二つに割れて出土した。明瞭な使用痕跡がなく、図化はしなかった。土玉(21)、粘土塊(22)は埋没土中から出土した。

図示した遺物のほかに縄文土器5点、弥生土器1点、土師器1171点、粘土塊2点、棒状礫2点、剥片7点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。2本主柱穴の堅穴住居であり、注意を要する。

## 2区17号住居

(第126~128図 PL70・71・168 遺物観察表P.570・571・612)

**位置** 2区2-9-D-16・17G、2-9-E-E-15~17G、2-9-F-17G

**形状** 平行四辺形。1号掘立柱建物、28号住居、21・29・30・104号土坑と重複する。

**重複** 1号掘立柱建物、21・29・30号土坑より古く、28号住居、104号土坑より新しい。

**規模** 長軸6.43m 短軸6.42m 壁高0.65m

**面積** 41.55㎡ **長軸方位** N-67°-E

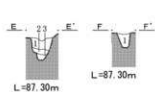
**埋没土** ローム粒・炭化物粒を含む暗褐色土・黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長1.23m、燃焼部幅0.49m。袖の残存長は向かって右側が0.72m、左側が1.03m。壁外に0.40m煙道が伸びる。竈前の床面には焼土が広がっていた。土師器坏(第127図9)が竈右脇床面上17cmで出土した。土師器壺(15・16)は竈右脇床面直上で出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が140×124×84cm、P2が74×68×83cm、P3が80×72×87cm、P4が67×47×67cmである。P1は規模が大きく、他の3カ所とは異質である。しかし土層断面をみると、通常の柱穴直径を示す円形の堆積土が認められることから、柱穴に関連する掘り込みと判断した。P1の断面形は整った台形で、底



第5章 2区の遺構と遺物

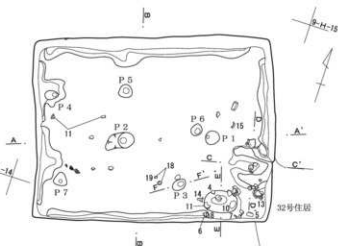
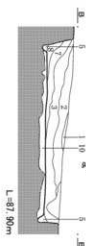


2区16号住居貯蔵穴E-E'

1. 暗褐色土 ロームが混じる。また粒および塊状(直径1.5cmほど)にも含む。炭化物粒、灰も少量含む。
2. 暗褐色土 下位は灰を含み、灰色味帯びる。
3. 濃黄褐色土 ロームやや多く混じる。焼土粒少量含む。

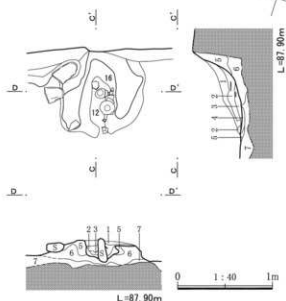
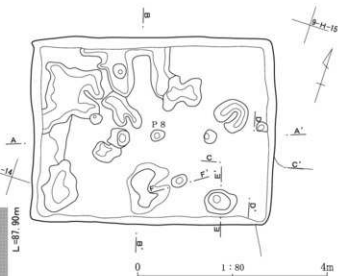
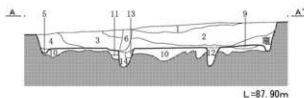
2区16号住居P3 F-F'

1. 濃褐色土 ローム中に下方に混じる。白色粒子均一に含む。



2区16号住居A-A' B-B'

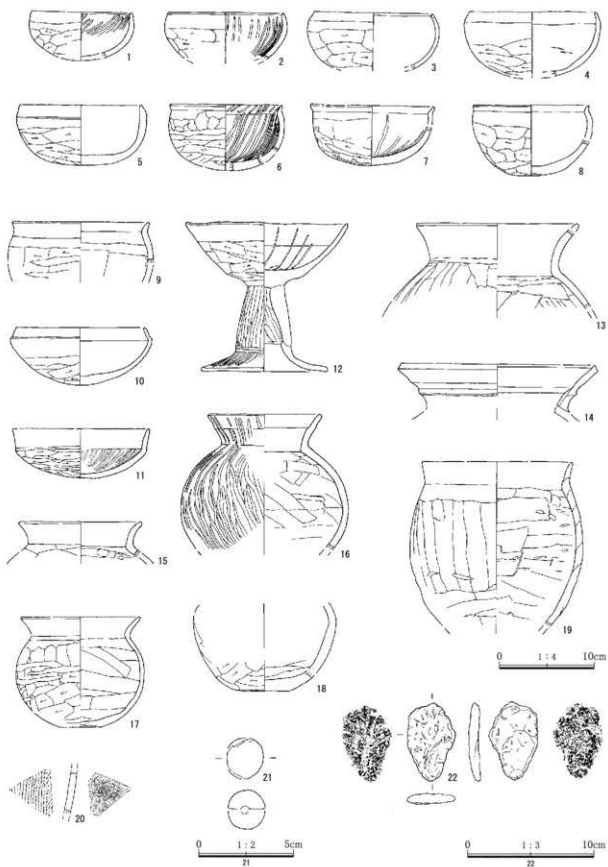
1. 暗黄褐色土 暗褐色土にローム粒、ローム小塊を含む。
2. 暗黄褐色土 上層よりローム粒、ローム小塊の量多く黄色っぽい。直径2.0~3.0cmの黒褐色土塊を含む。
3. 暗黄褐色土 2層に灰(黒色)を多く含む。
4. 暗黄褐色土 1層とはほぼ同じ。ローム小塊をやや多く含む。
5. ロームに暗褐色土が若干混在したもの。
6. 黄暗褐色土
7. 黄暗褐色土 炭化物を少量含む。
8. 黄暗褐色土 ローム粒を多く含む。黄色味がかっている。
9. 暗黄褐色土 暗褐色土にローム含む。白色軽石(直径1.0mmほど)少量含む。
10. 黄褐色土 ローム主体。硬く締まる。
11. 濃黄褐色土 ローム主体。10層より黒色味帯びる。
12. 暗褐色土 ローム特に東側に多く混じる。全体で約40%ほど。締まりやや強い。
13. 濃黄褐色土 ローム主体。締まり弱い。
14. 暗褐色土 根の擾乱やや締まり弱い。



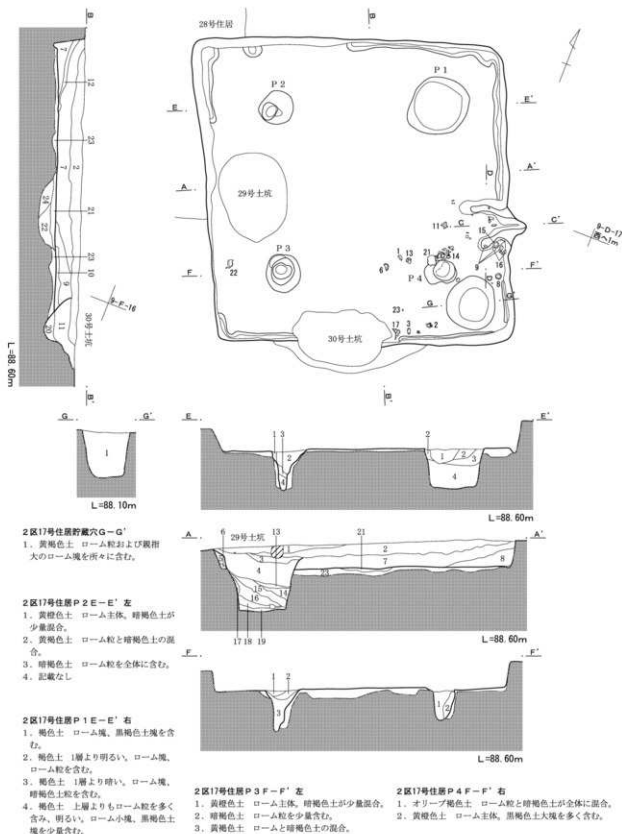
2区16号住居C-C' D-D'

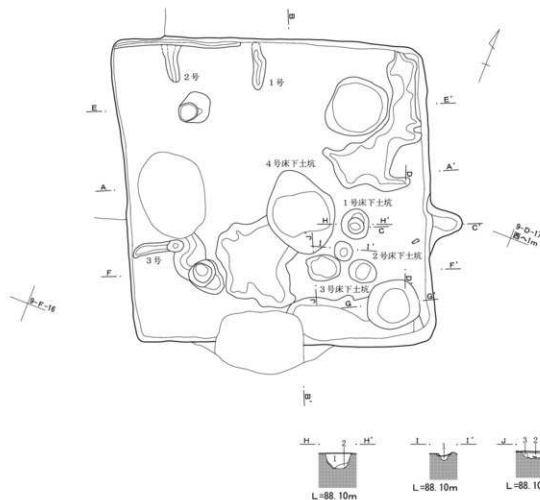
1. にぶい黄褐色土 締まりあり。白色軽石粒を含む。焼土粒、炭化物をわずかに含む。
2. 赤色土 焼土。天井の崩落したものと思われる。ローム塊をまだらに含む。
3. 赤味がかった褐色土 やや締まりなし。
4. 濃黄褐色土 焼土粒および塊(直径7.0mmほど)均一にやや多く含む。
5. 赤~赤褐色土 焼土。6層との間はロームとの混じり。白色軽石粒(直径1.0mmほど)均一に少量含む。
6. 濃黄褐色~暗黄褐色土 ローム主体。C-C' 東側は黒色味帯びる。ローム粒および塊(直径0.3~2.5cmほど)も含む。白色軽石粒(直径1.0mmほど)均一に含む。部分的に焼土粒を含む。
7. 黄褐色土

第124図 2区16号住居



第125図 2区16号住居出土遺物





## 2区17号住居・29・30号土坑A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒、軽石粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊、黒褐色土を斑状に含む。
3. 黄暗褐色土 ローム小塊、黒褐色土を含む。
4. 黄暗褐色土 ローム塊を含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を全体に混合。
6. 黄褐色土 ロームに暗褐色土が若干混合したもの。
7. 黄褐色土 ロームに若干の暗褐色土が混合したもの、ローム塊を含む。
8. 暗褐色土 黒褐色土塊、ローム塊を含む。
9. 黄褐色土 ローム主体、若干暗褐色土を混合、明るい。
10. 黄暗褐色土 ローム粒を全体に混合。
11. 黄暗褐色土 ローム粒を全体に混合、暗褐色土を斑状に含む。
12. 黄褐色土 暗褐色土を斑状に含む。
13. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径0.3~0.5cmほど)均一に含む、炭化物粒状に少量含む。
14. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土が少量混じる。
15. 暗褐色土 13層に似た土、14層層厚に含むが分層。
16. 暗褐色土 13層に似た土、13-15層より黒色塊少ない。
17. 黄褐色土 ローム主体、14層より細まり弱くアツカツしている。
18. 暗褐色土 13-15-16層に似ているが最も黒色塊強い、ローム塊は長さ1.0~2.0cmほどで、13-15-16層に比べ目立たない(少量含む)。
19. 黄褐色土 暗黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合。ローム多い部分は黄褐色土、暗褐色土の混じり多い部分は暗黄褐色土。
20. 黄褐色土 暗黄褐色土 ローム主体、暗黄褐色土斑状に含む、暗褐色土粒状(直径1.5cmほど)少量含む。
21. 黄褐色土 暗黄褐色土 暗褐色土をうすく斑状に含む、細まりあり。
22. 暗黄褐色土のローム主体として、暗褐色土ローム塊を多く含む、ボツボツしている。
23. に近い黄褐色土 明るい暗褐色土を少量まだらに含む。
24. 23層に類似。

## 2区17号住居

## 2区17号住居 1号床下土坑H-H'

1. 濃黄褐色土 ローム主体、またローム粒(直径1.0cmほど)均一に含む。上面付近と中心には焼土粒(直径1.0cmほど)を多く含む、炭化物を粒状(直径1.5cmほど)に少量含む。
2. 濃黄褐色土 ローム主体。

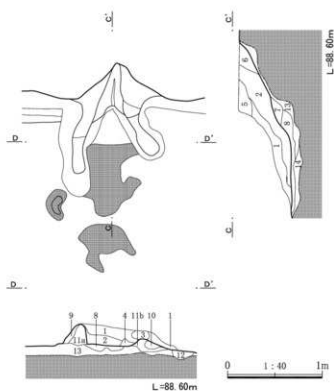
## 2区17号住居 2号床下土坑I-I'

1. 濃黄褐色土 上位に焼土粒少量含む、ローム主体、焼土を含む層を除き床下土坑No.1の2層と類似した土。

## 2区17号住居 3号床下土坑J-J'

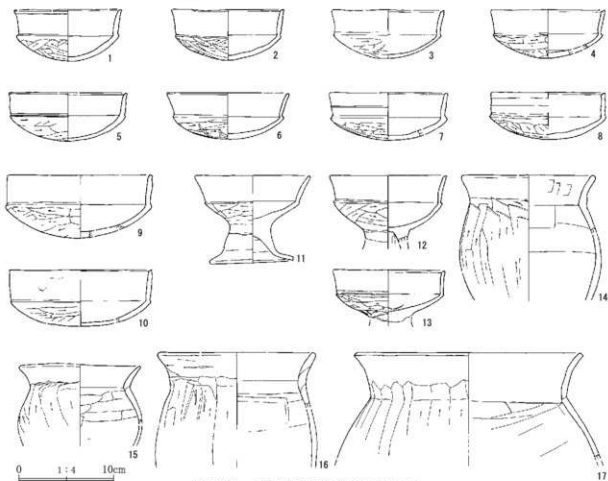
1. 濃黄褐色土 ローム主体で硬く締まる。陥床、焼土粒、白色砂子少量含む。
2. 赤褐色土 焼土主体層。また焼土粒(直径0.1~1.0cmほど)を均一に含む、黄褐色土混じる。
3. 濃黄褐色土 ローム主体、床下土坑No.1、2層に類似した土。

0 1:80 4m



2区17号住居竈C-C' D-D'

1. 暗褐色土 直径0.5~2.0cmの焼土塊、白色軽石粒を含む。
2. 赤褐色土 直径0.5~2.0cmの焼土塊を全体的に含む。炭化物、ローム粒を少量含む。
3. 焼土の塊
4. 褐色土 ローム主体、暗褐色土をまだらに含む。
5. 暗褐色土 白色軽石粒、ローム粒を含む。
6. 暗赤褐色土 焼土及び焼土粒(直径8.0cmほど)を均一に含む。下位にローム粒および塊(直径1.5cmほど)少量含む。
7. 暗赤褐色土 6層に類似した層。
8. 暗赤褐色土 6層に類似した層。但し炭が混じり、やや黄色味帯びる部分あり。6-7層に比べ含まれる焼土粒の粒径も大きめ。
9. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径3.0cmほど)少~中量含む。また焼土や灰色粘質土も少~中量含む。
10. 黒灰色粘質土塊 硬く締まる。
11. 濃黄褐色~暗黄褐色土 中位~下位にかけてロームが混じり、黄色味帯びる(濃黄褐色土)。11a層は上位に焼土が混じり赤色味あり。
12. 暗褐色土 上位に炭が少~混じる。ローム粒(直径0.1~1.0cmほど)少量含む。焼土粒をごく少量含む。
13. 暗褐色土 やや硬く締まる。推定付近より黄はローム粒および塊(直径1.0~5.0cmほど)含む。
14. 暗褐色土 13層に類似するが、ローム粒および塊(直径1.5~4.0cmほど)の含み方が多い。



第127図 2区17号住居竈と出土遺物(1)

面は平坦である。

**周溝** 周溝は西壁の中央部分を除いてほぼ全周する。幅は概ね13cm、深さは5cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径1.14m、短径1.01m、深さ1.0mのほぼ円形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.70m、短径0.60mの楕円形である。

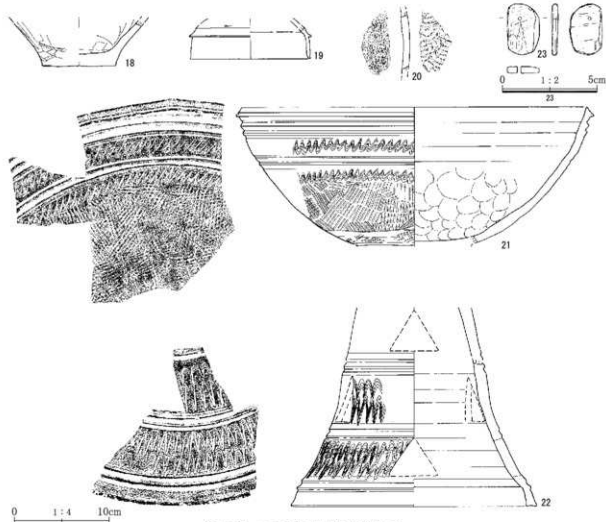
**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 掘り方面で4基の床下土坑と3条の小溝を検出した。1号床下土坑は南東部で検出された。長軸0.64m、短軸0.58m、深さ0.32mの楕円形。断面形は台形で、底面は平坦である。2号床下土坑も南東部で検出された。長軸0.43m、短軸0.39m、深さ0.14mの円形。断面形はロート状で、底面は平坦である。3号床下土坑も南東部で検出された。長軸0.70m、短軸0.54m、深さ0.12mの隅丸長方形。断

面形は皿形で、底面は平坦である。4号床下土坑は住居ほぼ中央で検出された。長軸1.84m、短軸1.44m、深さ0.37mの楕円形。断面形は皿形で、底面は平坦である。

3条の小溝は、北壁に2条、西壁に1条が検出された。北壁の2条は、東壁から3.5m、5.3mのところに掘られていた。東から1号・2号とすると、2号小溝はP2とP3の西縁を結ぶ線状にあたる。3号小溝はP1につながっている。1号小溝が幅0.26m、長さ1.02m、深さ0.36m、2号小溝が幅0.25m、長さ0.8m、深さ0.12mである。

西壁沿いの3号小溝は幅0.20m、長さ1.10m、深さ0.06mで、北壁から4.5mのところに掘られていた。東端は直径0.3m、深さ0.32mのビット状になっており、2号小溝の延長方向に一致する。



第128図 2区17号住居出土遺物(2)

**遺物と出土状況** 遺物は竈右袖脇およびP4周辺に集中していたほか南壁際中央から出土した。土師器高坏(第127図11)は竈前床面直上で出土した。土師器甕(14)は主柱穴P4の北縁床面直上で出土した。坏(2・3)は南壁際床面上2~3cmで出土した。また、須恵器器台の坏部の破片(第128図21)がP4北縁床面上4cmで、脚部(22)が南西部西壁寄り床面上16cmで出土した。21の坏部には1区古墳時代包含層で出土した破片が接合した。石製模造品(23)は南壁付近の床面直上で出土した。ここで図示した遺物以外に縄文土器53点、弥生土器2点、土師器1902点、須恵器3点、粘土塊5点、ミニチュア土器1点、棒状礫3点、剥片13点、礫片16点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

2区18号住居

(第129・130図 PL.72・169 遺物観察表P.571)

**位置** 2a区2-9-H・I-11・12G

**形状** 長方形。33・42号住居と重複する。

**重複** 33号・42号住居より新しい。

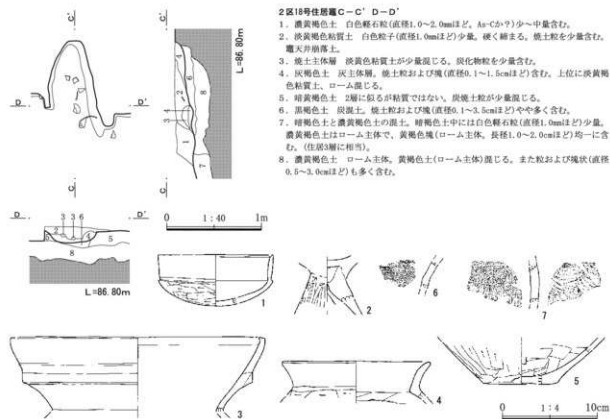
**規模** 長軸4.59m 短軸3.69m 壁高0.26m

**面積** 15.60㎡ **長軸方位** N-58°-E

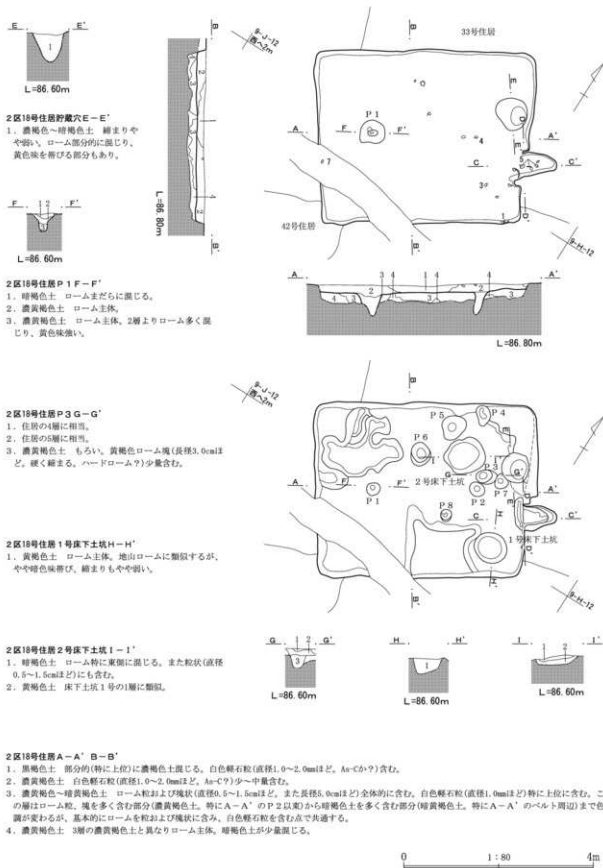
**埋没土** 白色軽石・ローム粒を含む黄褐色土。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長0.88m、燃焼部幅0.48m。袖の残存長は向かって右側が0.28m、左側が0.12m。壁外に0.64m煙道が伸びる。燃焼部使用面直上で土師器甕底部(第129図5)が出土した。

**柱穴** 床面でP1、掘り方面でP2・P3・P4・P5・P6・P7・P8を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が58×48×37cm、P2が34×29×28cm、P3が44×30×25cm、P4が44×28×12cm、P5が58×47×15cm、P6が50×42×35cm、P7が33×28×14cmが、P8が26×22×20cmである。P1・P2は中央で壁に平行な位置にある



第129図 2区18号住居竈と出土遺物



第130図 2区18号住居



ことから主柱穴と考えられる。またP3・P4はそれに直交する位置にあり、何らかの構造を示す柱穴と推定される。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 北東部東壁際に長径0.72m、短径0.65m、深0.62mの不整形形の土坑が検出された。竈の左脇にあたり貯蔵穴の可能性が高いと推定される。底面は長径0.40m、短径0.32mの楕円形である。

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 掘り方面で2カ所の床下土坑を検出した。南東隅で検出した1号床下土坑は長軸0.72m、短軸0.64m、深さ0.35mの楕円形、断面形は箱形で底面は平坦である。中央北寄りで検出した2号床下土坑は長軸0.88m、短軸0.73m、深さ0.14mの楕円形で

ある。断面形は皿形で、底面は平坦である。

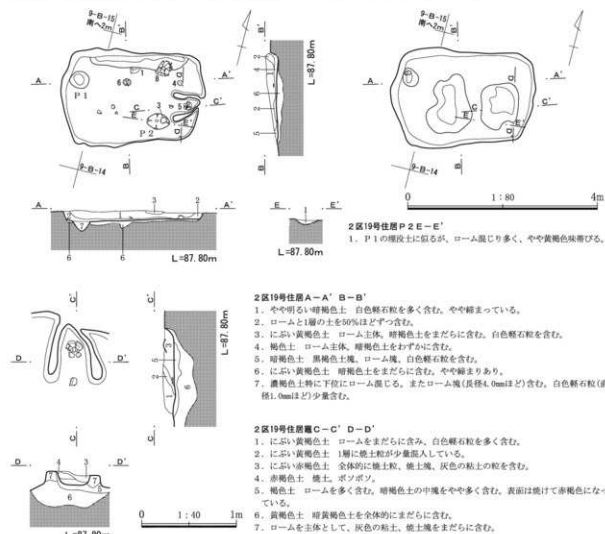
**遺物と出土状況** 遺物は全体に少量の出土であったが、東壁の竈周辺に比較的多くまとっていた。土師器坏(第129図1)は南東隅壁際床面上5.5cmで、竈前で出土した壺(3)は床面上7cm、甕(4)は床面上17cmと床面からやや浮いた位置で出土した。図示した遺物のほかに縄文土器3点、土師器299点、須恵器2点、剥片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

### 2区19号住居

(第131・132図 PL73・169 遺物調査表P.571・612)

**位置** 2a区2-9-A・B-14G



第131図 2区19号住居

**形状** 隅丸の長方形。重複遺構はなし。

**規模** 長軸3.02m 短軸1.97m 壁高0.17m

**面積** 5.37㎡ **長軸方位** N-70°-E

**埋没土** 白色軽石・ローム粒・黒褐色土塊を含む黄褐色土・暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁はほぼ中央に竈が構築されていた。確認長0.62m、燃焼部幅0.32m。袖の残存長は向かって右側が0.60m、左側が0.63mである。燃焼部中央使用面直上で土師器環(第132図5)が出土した。

**柱穴** P1・P2を検出した。それぞれの規模(長径

×短径×深さ)は、P1が41×36×13cm、P2が50×34×10cmである。ともに浅く柱穴の確証はない。

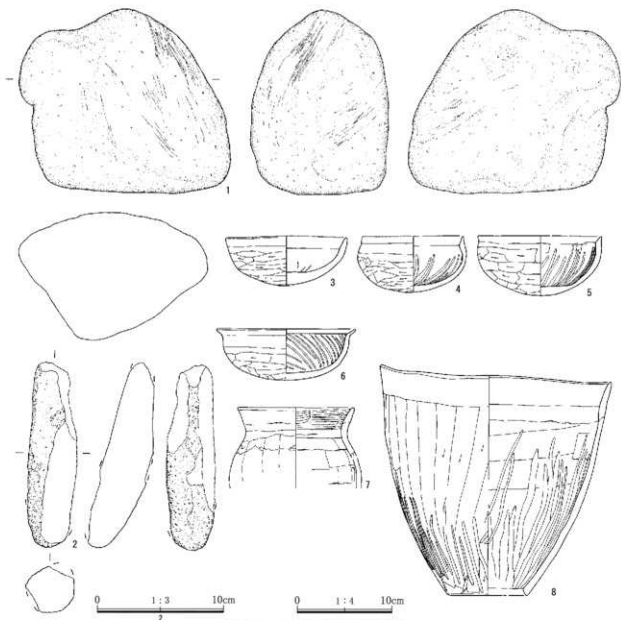
**周溝** 周溝は北壁のみ確認できた。幅は概ね24cm、深さは2cmである。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は検出されなかった。

**床面** 床面はほぼ平坦である。

**掘り方** 竈前および中央部の2カ所に不定形な掘り込みが検出された。全体としては厚さ4～15cmの暗褐色土を斑に含むにぶい黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 竈周辺および北壁寄りに比較的遺



第132図 2区19号住居出土遺物

物が集中して出土した。土師器環(第132図3)は南東隅P2底面上5cmで、環(6)は中央部やや北よりの床面上2cmで、環(4)は竈左脇床面上2cmで、土師器瓶(第132図8)は北壁周溝緑床面直上で出土した。北壁周溝緑床面直上で出土した環(1)は線状痕および敲打痕の残る環である。また須臾器甕破片が埋没土中から出土したが、2区11号住居の大型破片と接合している。図示した遺物のほかに土師器86点、剥片1点、環1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

## 2区20号住居

(第133～135図 PL74・169 遺物観察表P.571・572)

**位置** 2区2-9-G・H-10・11G

**形状** 正方形。35・36号土坑と重複する。

**重複** 35号・36号土坑より古い。

**規模** 長軸4.46m 短軸4.21m 壁高0.52m

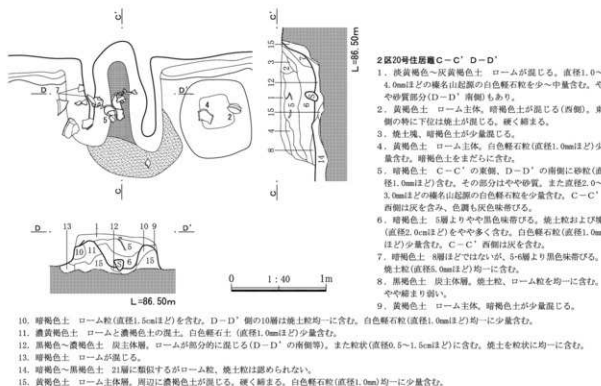
**面積** 17.94㎡ **長軸方位** N-68°-E

**埋没土** 上層はぶい黄褐色土、下層はローム粒・

塊を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁はほぼ中央やや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.13m、燃焼部幅0.53m。袖の残存長は向かって右側が1.0m、左側が0.94m。壁外に0.15m煙道が伸びる。燃焼部に支脚として礎が立てられていた。燃焼部中央からは土師器甕の大型破片(第135図5)が使用面上24～26cmで出土した。また瓶(7)は竈左袖上から出土した。

**柱穴** 掘り方面で柱穴と思われる小ピットを11基検出した。通例の4本柱構造ではなく、東壁に平行するP1・P2と、西壁に平行するP3・P4・P5・P6・P7の5本の柱列が基本構造と推定される。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が22×20×26cm、P2が34×32×28cm、P3が29×24×12cm、P4が29×26×24cm、P5が20×20×22cm、P6が35×28×16cm、P7が68×50×23cm、P3の南東側にあるP8が25×20以上×14cm、P7の東に確認されたP9が45×27以上×14cm、である。また北壁中央部壁際に深さが最もあるP10・P11が検出された。P10が32×26以上×33cm、P11が40×24以上

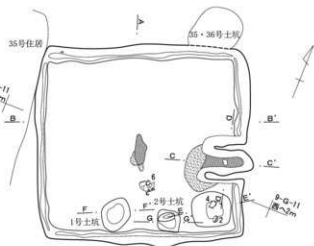
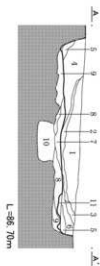


第133図 2区20号住居竈



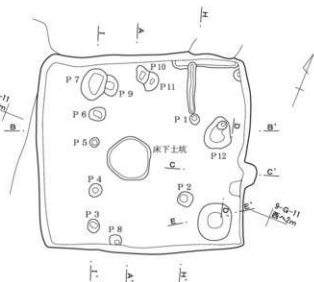
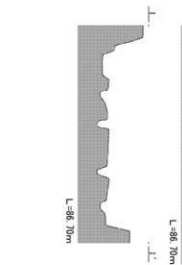
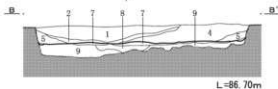
2区20号住居貯蔵穴E-E'

1. 暗褐色～黒褐色の間の土 白色軽石粒(直径1.0～5.0cmほど)均一に含む。やや砂質で、下に暗褐色砂粒含む部分あり。直径0.8～1.0cmほどの椀を山形風の白色軽石粒を含む(径～3.8)。
2. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径3.0cmほど)まばらに含む。炭化物を少量含む。上に白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。中ほどは黄褐色土混じりで黄色味あり。



2区20号住居1号土坑F-F'

1. 濃黄褐色土上位に炭混じり、黒色味帯びる。ローム粒および塊(直径2.0cmほど)均一に含む。焼土粒子(直径5.0cmほど)均一にやや多く含む。



2区20号住居A-A' B-B'

1. にぶい黄褐色土 ローム粒、直径0.5～2.0cmのローム塊を含む。暗褐色土粒を含む。
2. にぶい黄褐色土 やや砂質、粘性なし。にぶい黄褐色土を含む(塊状)。砂の塊を含む。
3. にぶい黄褐色土 やや砂質、粘性なし。にぶい黄褐色土を含む(塊状)。砂の塊を含まない。
4. 黄褐色土 上層よりロームの量が多い。
5. 暗褐色土 ローム粒、直径0.5～2.0cmのローム塊を含む。
6. 黒褐色土 黒色土塊(直径2.0cm)、ローム塊(直径0.5～1.0cm)、ローム粒を含む。
7. 濃黄褐色土 ローム(ハードローム?)を塊(直径2.0～5.0cm)状または層状に含む。硬く締まる。
8. 暗黄褐色～濃黄褐色土 ベルト周辺部には暗褐色土とロームの混じり、またローム塊(直径2.0～4.0cmほど)均一に含む。外側に行くに従いローム主体となる。
9. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土が部分的に混じる。
10. 暗褐色土 ロームを全体的に含む。やや黄色味帯びる。またロームを粒状(直径0.1～2.0cmほど)に均一に含む。
11. 濃黄褐色土上位に炭混じり、黒色味帯びる。ローム粒および塊(直径2.0cmほど)均一に含む。焼土粒子(直径5.0cmほど)均一にやや多く含む。



2区20号住居2号土坑G-G'

1. 灰褐色粘土 下位は黄褐色土(ローム主体)との混じり。上位に暗褐色土塊(直径2.0cmほど)少量含む。また炭(直径0.1～1.0cmほど)の混じる部分もあり。焼土粒を少量含む。硬く締まる。



上×32cmである。さらに東壁近くにはP12(67×54×15cm)が検出された。

**周溝** 周溝はほぼ全周する。幅は概ね7cm、深さは4cmである。

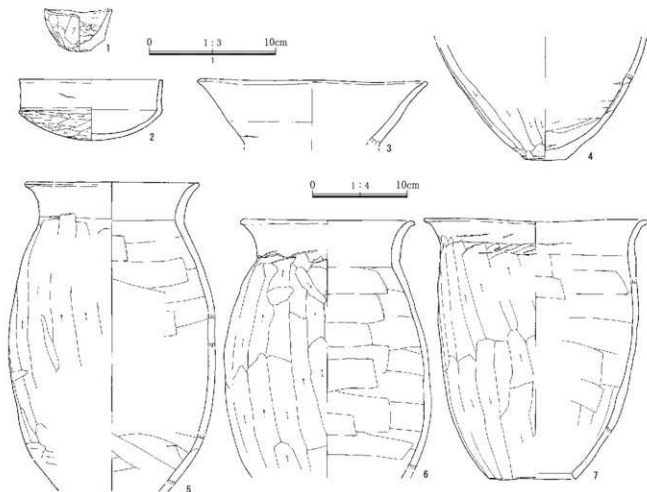
**貯蔵穴** 南東隅に長径0.83m、短径0.74m、深さ0.58mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.34m、短径0.34mである。貯蔵穴底面上30cmのところで土師器坏(第135図2)がほぼ完形で出土した。また甕底部(4)が底面上25cmで出土した。

**床面** 床面はほぼ平坦である。住居中央には焼土・灰が分布する地点があった。また南壁沿いに2基の土坑を検出した。西側にあった1号土坑は長軸0.74m、短軸0.59m、深さ0.16mの楕円形、断面形は皿形で、底面は平坦である。東側の2号土坑は長軸0.48m、短軸0.43m、深さ0.10mの隅丸正方形。断面形は皿形で、底面は平坦である。

**掘り方** 掘り方面では前述の柱穴を検出したほか、床下土坑1基と間仕切溝1条を検出した。床下土坑はほぼ中央にあり、長軸0.92m、短軸0.90m、深さ0.50mの円形である。断面形は箱形で、底面は平坦である。土坑の東縁が床面で検出した焼土・灰の分布域と重なる。小溝は北壁にあり、東壁から1.2mのところに掘られていた。南端はP1北縁に接する。幅0.17m、長さ1.08m、深さ0.10mである。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴からまともって出土した。住居中央の焼土の南側では床面上5cmで土師器甕(第135図6)が出土した。1の手づくね土器は埋没土中から出土した。図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器336点、須恵器1点、剥片2点、礫片3点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。



第135図 2区20号住居出土遺物

## 2区21号住居

(第136~138図 PL.75・170 遺物観察表P.572)

位置 2区2-9-G・H-9・10G

形状 長方形。60号住居、26・27号土坑、1号井戸と重複する。26・27号土坑は本住居より浅い。

重複 26・27号土坑、1号井戸より古く、60号住居より新しい。

規模 長軸5.22m 短軸4.36m 壁高0.31m

面積 (22.66)㎡ 長軸方位 N-77°-E

埋没土 ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.20m、燃烧部幅0.46m。軸の残存長は向かって右側が1.03m、左側が0.95m。壁外に0.23m煙道が伸びる。煙道先端にピットが検出されたが、埋没土の観察から竈埋没以降に掘られたピットと確認した。竈燃烧部には左壁に偏って支脚礎が置かれ、その上には土師器甕(第138図15)が、周囲から鉢(12)、甕(13・14)が破片で出土した。右側には土師器小型甕(10・11)が使用面直上で出土した。

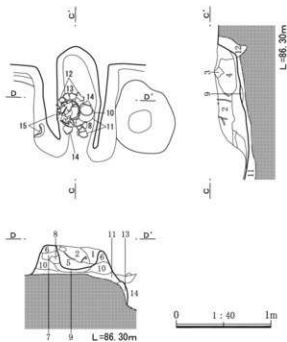
柱穴 掘り方面でP1・P2・P3・P4を検出したが、いずれも不規則な位置にあり、主柱穴とは考えられない。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が65×38×39cm、P2が36×24×11cm、P3が35×27×18cm、P4が46×41×13cmである。

周溝 周溝は西壁と北壁西隅部分を除いて全周する。幅は概ね18cm、深さは6cmである。

貯蔵穴 南東隅に長径0.80m、短径0.66m、深さ0.60mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.25m、短径0.23mの楕円形である。

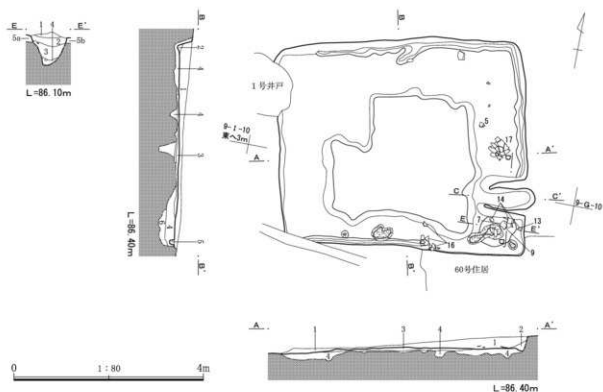
床面 床面は中央部が10cmほど盛り上がり硬化している。壁に沿って帯状にめぐる掘り方部分の床面が凹んだ結果と推定される。南壁際の4か所に粘土塊が出土した。

遺物と出土状況 遺物は竈および南東隅の貯蔵穴に集中して出土した。竈左脇の床面直上では土師器甕(第138図17)が出土した。貯蔵穴の周囲から、土師器甕(第138図13・14)や小型甕(9)等が出土した。埋没土中から、須志器甕破片(第137図2)やササ入り



## 2区21号住居竈C-C' D-D'

1. 暗褐色土 炭灰層。直径1.0~5.0cmほどの焼山灰面の白色軽石粒を少量含む。焼土粒を上位に含む。
2. 暗褐色~暗褐色土 全体的に1層より褐色味帯びる。白色軽石粒(直径1.0cmほど)均一に含む。
3. 灰褐色土 ややシルト質で硬く締まる。焼土粒を下に含む。
4. 淡赤褐色土 全体的に焼土混じり。赤色味帯びる。また焼土を粒および塊状(直径0.3~2.0cmほど)にやや多く含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)特に上位を含む。D-D'の下位には灰を含む。
5. 淡赤褐色土 全体的に焼土混じり。赤褐色味帯びる。D-D'の2層が灰を含み焼土粒および塊含む部分以外が灰色味帯びるのに対し、赤褐色味帯びており分離。硬く締まり竈軸構築上の可能性あり。
6. 褐色土~灰黄褐色土 灰色シルト主体層。硬く締まる。下位にロームや焼土混じる。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
7. 灰黄褐色土 ローム主体。内側は較熟の薄赤色味帯びる。白色軽石粒を少量含む(直径1.0cmほど)。
8. 赤褐色土 焼土主体層。ロームが少量混じる。
9. 暗褐色~赤褐色土 灰土主体層。直径1.0~5.0cmほどの焼土粒を含む。上位にロームを含む。
10. 灰黄褐色土 2層に類似(較熟による黄色はなし)。焼土粒(直径1.0~5.0cmほど)ごく少量含む。
11. 暗褐色~濃黄褐色土 C-C'の西端と東端両辺はローム主体で黄色味帯びる(濃黄褐色土)。その他の部分暗褐色土だが、ロームまじりに含む。
12. 暗褐色土 竈埋没以降のピットの埋没土。上位にロームが多く混じり黄色味帯びる。またまじりに含む。
13. 濃黄褐色土 貯蔵穴埋没土。ローム主体。下位に暗褐色土が混じる。
14. 灰黄褐色土 貯蔵穴埋没土。ロームまじりに含む。やや締まり強い。貯蔵穴セクションE-E'の2-3層に対応する。竈D-D'段階では分層できなかった。

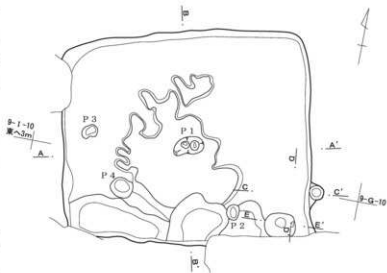


2区21号住居貯蔵穴E-E'

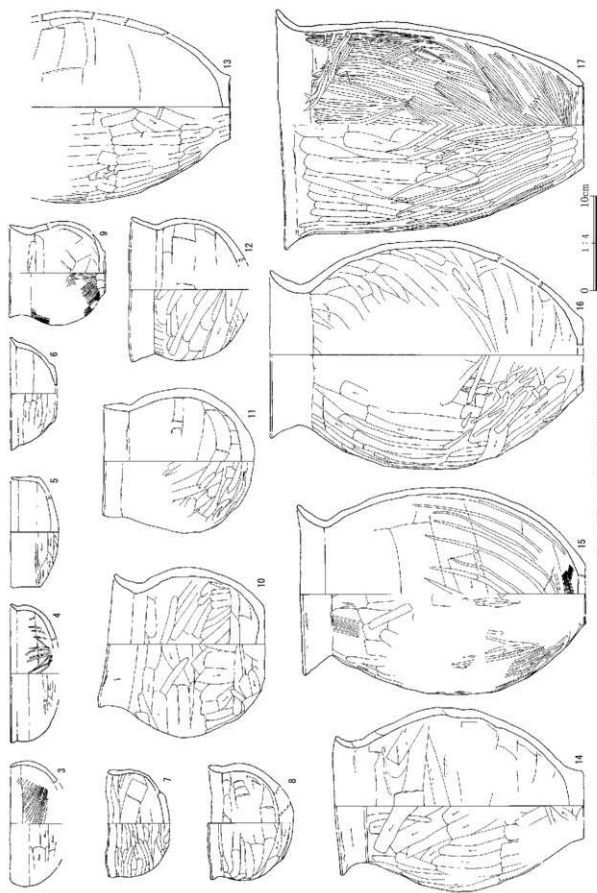
1. 暗褐色土 特上位は灰色シルトが主体。下位は暗褐色土主体でシルトをまだらに含む。
2. 暗褐色土 濃黄褐色土(ローム主体)をまだらに含む。灰土を粒状(直径0.5mmほど)に中ほど含む。白色軽石粒(直径1.0mmほど)少量含む。ロームを粒および塊状(直径2.0cmほど)に少量含む。
3. 暗褐色土 2層に類似するが、濃黄褐色土、黄褐色土を含まない。
4. 濃黄褐色土 ローム主体。暗褐色土混じりで、やや硬く締まる。
- 5a. 暗黄褐色土 濃黄褐色土をまだらに含む。白色軽石粒(直径1.0mmほど)特上位に少量含む。
- 5b. 濃黄褐色土 特上位に暗褐色土混じる。白色軽石粒(直径1.0mmほど)少量含む。

2区21号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 直径1.0~5.0mmほどの褐色山成面の白色軽石粒を均一に含む。ロームを粒状(直径5.0mmほど)またまだらに含む。
2. 濃黄褐色土 ローム主体。暗褐色土混じる(特上位)。
3. 暗褐色土 濃黄褐色土混じる。A-A'のバルトより東には濃黄褐色土が主体の部分もあり。硬く締まる。白色軽石粒(直径1.0~2.0mmほど)少量。
4. 濃黄褐色土~暗黄褐色土 濃黄褐色土はローム主体。暗黄褐色土もロームをまだらに含む。白色軽石粒(直径1.0~2.0mmほど)均一に少量含む。
5. 周辺の埋没土だが、2層より黒色味あり(暗褐色土)。ロームが混じり、やや黄色味帯びる。
6. 暗褐色土~暗黄褐色土 4層に類似するが、ロームをまだらに含んでいるのは特に下位の方で、全体的に4層より黒色味帯びる。また白色軽石粒は上位で少量認められるのみ。



第137図 2区21号住居と出土遺物(1)



第1388図 2区21号住居出土遺物(2)



第5章 2区の遺構と遺物

粘土塊(1)が出土した。図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器338点、剥片3点、礫2点、棒状礫1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

2区22号住居(第139図 PL76 遺物観察表P.572)

**位置** 2a区2-9-C-15・16G、9-D-16G

**形状** 台形。やや北東辺が南西辺より長い。(分類上

は長方形とした。)

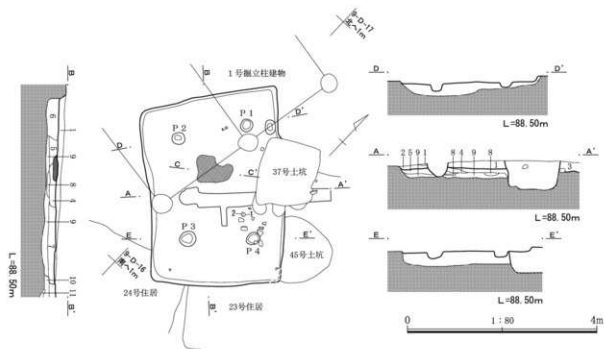
**重複** 23・24号住居より新しく、1号掘立柱建物、37・45・102・104号土坑より古い。

**規模** 長軸4.06m 短軸2.90m 壁高0.13m

**面積** (11.28)㎡ **長軸方位** N-47°-E

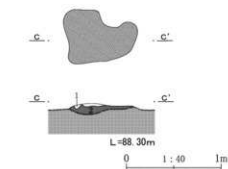
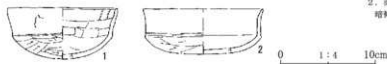
**埋没土** 白色軽石粒を含む暗黄褐色土。

**炉** 住居のほぼ中央に炉が検出された。炉の囲みは長径0.72m、短径0.54m、深さ0.07mの不定長方形で、焼土の厚さは7cmほどである。



2区22号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径1.0~5.0cmほど)を含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)均一に少~中量含む。
2. 暗黄褐色土 ローム主体。暗褐色土混じり、また塊状にも含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
3. 23号住居埋没土 暗褐色土 1層に似るがやや黒味帯びる。
4. 23号住居埋没土 暗黄褐色土 2層に類似するが、暗褐色土の混じりが少ない。
5. 濃黄褐色土 ローム主体。暗褐色が少量混じる。
6. 濃黄褐色土 3層に類似するが黄味少なく、全体的に黒味帯びる。根の濃長と思われる。5~6層も漸移的に変わる。
7. 3層に類似。粗し焼土粒および塊(直径0.5~2.0cmほど)ごく少量含む。
8. 暗褐色土 A-A'の8層は上位に黒褐色土を面状に含む。
9. 黄褐色土に近い黄褐色土 ローム主体。上位に黒褐色土を塊状に少量含む。
10. 9層に類似するが(に)黄褐色土、濃褐色土の混じりが多い。
11. 9層に類似(黄褐色土) ローム主体。



2区22号住居C-C'

1. 暗褐色土主体に焼土が全体的に混入。炭化物を少量混入。
2. 赤褐色土 焼土主体。灰色粘土塊を少量含む。明るめの暗褐色土を全体的に10%ほど含む。やや縮まりあり。

第139図 2区22号住居と出土遺物

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が26×25×10cm、P2が27×25×14cm、P3が36×32×14cm、P4が31×25×13cmである。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は検出されなかった。

**床面** 床面は平坦で、緩やかに南に傾斜している。

**掘り方** 南西隅が比較的深く掘られていた。黒褐色土塊を含む黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は全体に出土量が少なく、P4北西側周辺に比較的まとまって出土した。図示した土師器坯はいずれもP4北西の床面上7cmで出土した。図示した遺物のほか、土師器151点、礫3点、粘土塊1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。東壁中央に37号土坑が後出して掘られているために竈の有無は確定できなかった。出土遺物からは竈が敷設されている時期と考えられる。

2区23号住居

(第140・141図 PL77・170・171 遺物調査表P.573)

**位置** 2a区2-9-C-15・16G

**形状** 長方形と推定される。西隅は22号住居が後出するため、判然としなかった。

**重複** 22号住居、37号・38号・45号土坑より古い。

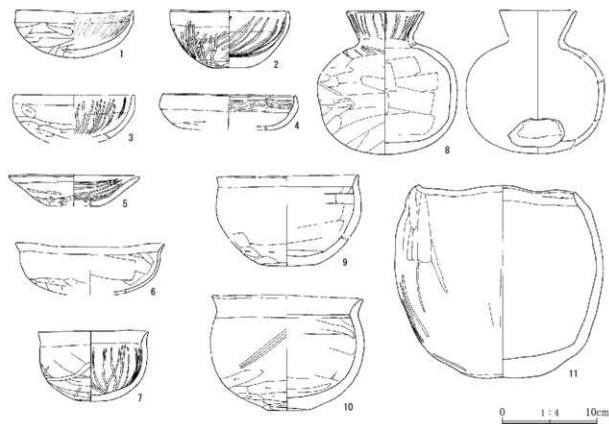
**規模** 長軸4.05m 短軸3.48m 壁高0.21m

**面積** (13.87)㎡ **長軸方位** N-35°-W

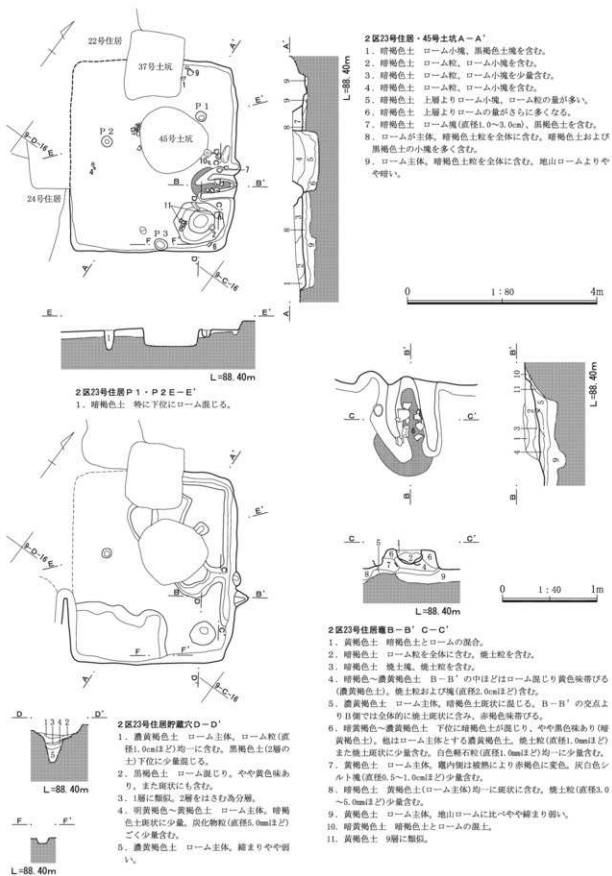
**埋没土** ローム粒・塊、黒褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居北東壁東寄りに竈が構築されていた。確認長0.86m、燃焼部幅0.28m。袖の残存長は向かって右側が0.79m、左側が0.85m。壁外に0.05m煙道が伸びる。燃焼部には支脚と思われる棒状礫が出土している。また燃焼部には土師器埴(第140図8)の破片が散在していた。使用面直上出土の破片もある。

**柱穴** P1・P2・P3を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が23×23×16cm、P2



第140図 2区23号住居出土遺物



第141図 2区23号住居

が24×21×40cm、P 3が29×23×11cmである。それぞれの位置からするとP 1以外は主柱穴とは考えにくい。P 1の深さが充分でない。いずれのピットも主柱穴とは断定できない。

**周溝** 周溝は掘り方部分の北西壁一部と東隅を除く北東壁を巡る。幅は概ね16cm、深さは8cmである。

**貯蔵穴** 東隅に長径1.06m、短径0.86m、深さ0.65mの不定楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.31m、短径0.25mである。貯蔵穴の周辺では土師器鉢(第140図11)が底面上21cmで、坏(2)が底面上15cmで、坏(6)が南東縁床面上7cmで出土した。

**床面** 床面は中央部分がやや高く、硬化していた。

**掘り方** 南隅が壁に沿って長軸2.04m、短軸1.29m、深さ0.05~0.08mの隅丸方形に掘り込まれていた。全体としては厚さ0.1~0.2mの暗褐色色粒を含む黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴周辺にまわって出土した。竈左脇で土師器鉢(第140図7)が床面上4cmで、鉢(10)が床面直上で出土した。北西壁際では土師器坏と鉢(1・9)が床面直上で出土した。南西部では土師器坏(4)が床面上3cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器3点、弥生土器1点、土師器114点、剥片7点、礫片2点が出土した。埋没土中から打製石斧1点も出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

## 2区24号住居

(第142・143図 PL78・171・172 遺物観察表P.573・612)

**位置** 2区2-9-C・D-15G

**形状** 長方形と推定される。北隅を22・23号住居に切られている。 **重複** 22号住居より古い。

**規模** 長軸3.55m 短軸3.03m 壁高0.12m

**面積** (10.76)㎡ **長軸方位** N-24°-W

**埋没土** 上層は白色軽石粒・ローム粒を含む黒褐色土、下層は白色軽石・焼土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**炉** 住居のほぼ中央に炉と推定される焼土の範囲が

検出された。二つの凹みが認められた。北側の炉の凹みは長径0.59m、短径0.32m、深さ0.07mの不定形で、焼土の厚さは6cmほどである。南側の炉の凹みは長径0.40m、短径0.39m、深さ0.08mの不定円形で、焼土の厚さは6cmほどである。南側の焼土の上3cmには長さ25cmほどの大型礫が出土しているが、炉に施設された礫とは断定できなかった。

**柱穴** 調査範囲の中では主柱穴は検出できなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

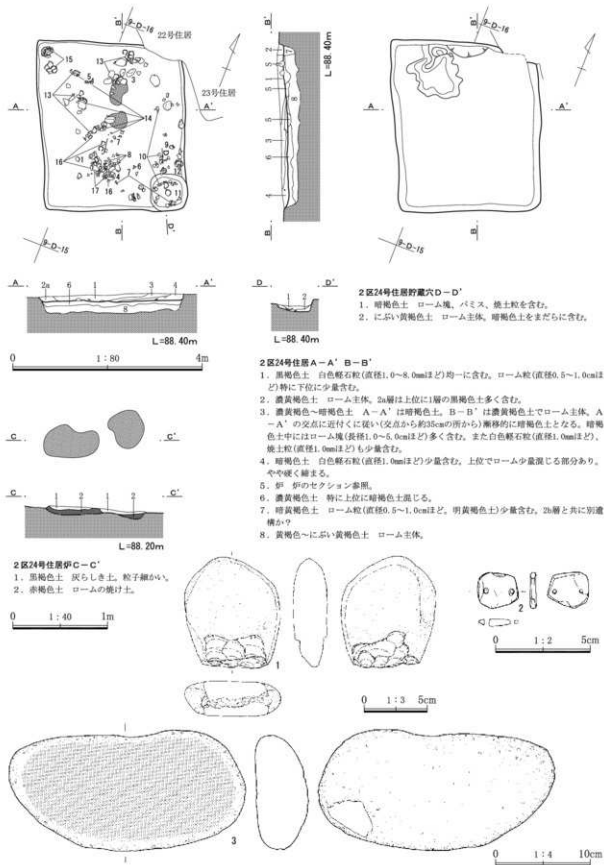
**貯蔵穴** 南東隅に長軸0.79m、短軸0.78m、深さ0.19mの隅丸正方形の掘り込みが検出された。その位置から貯蔵穴と判断した。底面も長軸0.67m、短軸0.63mの隅丸正方形である。底面直上で土師器甕(第143図11)が出土している。また底面で土師器埴の破片が出土した。

**床面** 床面は平坦である。中央部が硬化していた。

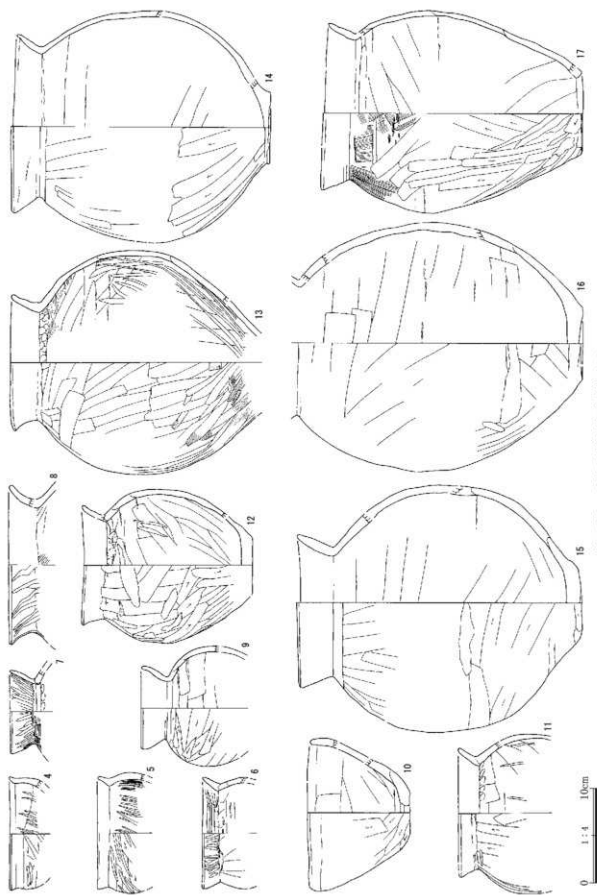
**掘り方** 北西隅が長軸2.2m、短軸1.9mの不定型な範囲が0.05~0.08mの深さで掘り込まれていた。全体としては厚さ0.1~0.2mの暗褐色色粒を含む黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は住居全体から多量に出土した。北部には礫が偏在して出土したが、使用痕跡のあるものは図示した2点のみであった。中央部が西寄りでは、土師器甕(第143図13・14・16)が床面直上で、敲石(第142図1)が床面上2cmで出土した。南部では土師器坏(第143図4)、鉢(6)が床面上2cmで、甕(16)、瓶(17)が床面直上で出土した。東部では埴(9)が床面上2cm、瓶(10)、甕(12)が床面直上で出土した。北壁寄りでは甕(13)が床面直上で、鉢(5)が床面上2cmで、擦石(第142図3)が床面直上で出土した。北西隅では壺(第143図15)が床面上5cmで出土した。また鏡形と推定される石製模造品(第142図2)が埋没土中から出土した。図示した遺物のほか、縄文土器6点、土師器568点、剥片3点、礫片12点、礫1点、スサ入り粘土塊1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。



第142図 2区24号住居と出土遺物(1)



第143図 2区24号住居出土遺物(2)

## 第5章 2区の遺構と遺物

### 2区25号住居

(第144・145図 PL79・172 遺物観察表P.574・612)

**位置** 2区2-9-G・H-12・13G

**形状** 長方形と推定。北西隅が攪乱に切られている。

**重複** 33号住居より新しい。

**規模** 長軸4.10m 短軸3.40m 壁高0.42m

**面積** 13.65㎡ **長軸方位** N-71°-E

**埋没土** 上層は白色軽石粒・焼土粒を含むぶい黄褐色土で、下層はローム粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居北壁中央に竈が構築されていた。確認長1.03m、燃焼部幅0.36m。袖の残存長は向かって右側が0.85m、左側が0.83m。壁外に0.19m煙道が伸びる。竈袖は地山を削りだして芯をつくり、粘土を貼って構築されていた。燃焼部奥には棒状礫を利用した支脚が立てて埋められていた。支脚上には土師器環破片(第145図2)がのっていた。燃焼部では土師器環(1)が使用面直上で出土した。左袖際には土師器甕(5)が使用面直上で出土したが、竈左脇の床面直上の破片と接合した。

**柱穴** 床面でP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が35×30×33cm、P2が38×32×58cm、P3が32×32×62cm、P4が50×42×37cmである。P1～3はその位置から主柱穴と考えられるが、P4はやや内側に偏っており、主柱穴とは断定できない。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 掘り方面で北西隅に長径0.96m、短径0.54m、深さ0.16mの楕円形の土坑が検出された。その位置から貯蔵穴と推定される。床面からの深さは0.26mとなる。

**床面** 床面は緩やかな凹凸がある。P1とP4の間の床面上には炭化材が残っていた。

**掘り方** 掘り方は埋没土の識別が困難であったことから、重複する33号住居とともに調査した。本住居掘り方の南半分はより深く掘られていた33号住居に切られることとなった。掘り方底面で南東部のP5を検出したが、位置が北側にずれており主柱穴とは

考えにくい。

**遺物と出土状況** 遺物は竈周辺およびP1・P4付近にまとまって出土した。土師器甕(第145図4)はP1東側床面直上で出土した。北東部には礫が偏っていたが、石器と判断できたのは図示した4点である。大型砥石(6)は東壁際床面直上で出土した。棒状の敲石(7)はP1南側床面上3cmで、石製模造品(8)は南部床面直上で、紡錘車(9)は中央部床面直上で出土した。図示した遺物のほか、縄文土器4点、弥生土器1点、土師器629点、須恵器1点、剥片6点、礫片2点、棒状礫2点、サス入り粘土塊1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

### 2区26号住居

(第146～148図 PL80・81・172・173 遺物観察表P.574・612)

**位置** 2区2-9-E・F-15G

**形状** 長方形と推定される。南西隅は後出する13号住居に切られている。

**重複** 13号住居・103号土坑より古い。

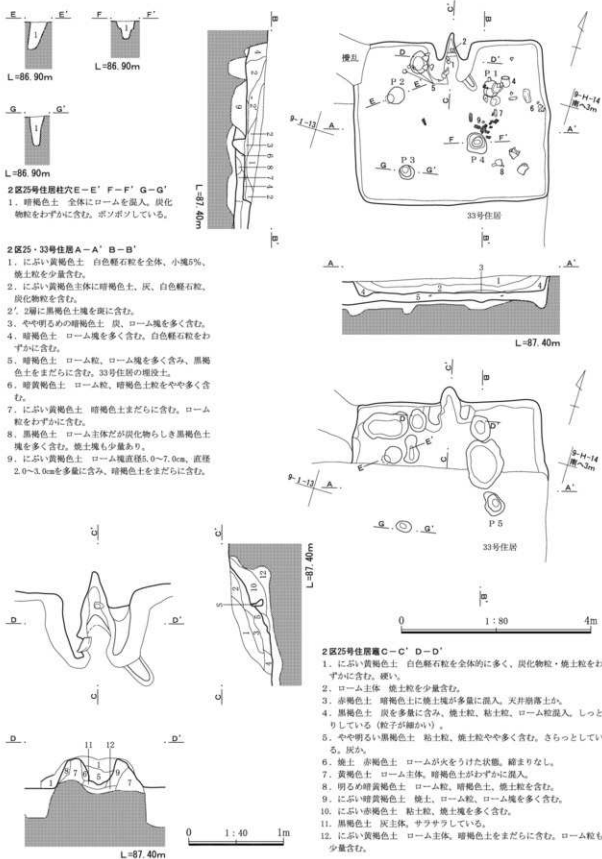
**規模** 長軸5.36m 短軸3.39m 壁高0.58m

**面積** 17.97㎡ **長軸方位** N-78°-E

**埋没土** 白色軽石粒・ローム粒・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長0.68m、燃焼部幅0.29m。袖の残存長は向かって右側が0.45m、左側が0.48m。壁外に0.23m煙道が伸びる。残存状態は不良であった。竈の北側に焼土の多く混じった赤褐色土が広がっていた。右袖内脇で土師器甕破片が出土した。

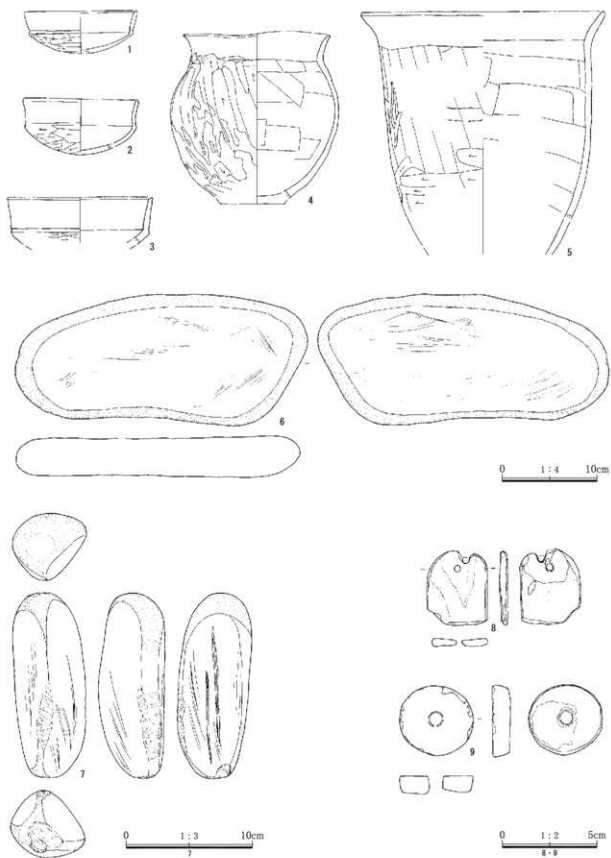
**柱穴** 床面でP1・P2・P3・P4・P5・P6を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が33×31×44cm、P2が53×41×10cm、P3が37×33×22cm、P4が43×41×63cm、P5が26×22×32cm、P6が29×25×41cmである。P1～P4は壁に近い四隅の規格的な位置にあり、主柱穴と判断した。



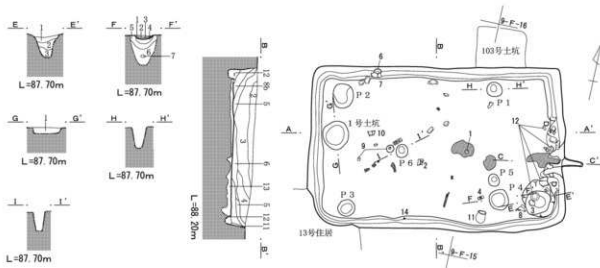
第144図 2区25号住居



第5章 2区の遺構と遺物



第145図 2区25号住居出土遺物



## 2区26号住居跡横穴E-E'

1. 暗褐色土 ローム塊20%、焼土塊50%を含む。白色軽石粒をわずかに含む。
2. 黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。ややあか。ボゾボゾしている。
3. やや暗いぶい黄褐色土 ローム塊を全体にまだらに含む。灰色粘土塊を少量含む。

## 2区26号住居跡P4 F-F'

1. 暗褐色土 炭化物、焼土粒を多く含む。
2. ぶい黄褐色土 ローム主体。暗褐色土をまだらに含む。
3. 濃黄褐色土 ローム主体で硬く締まる。
4. 濃黄褐色土 もろい。フカフカの土。ローム主体。
5. 暗黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。4層同様もろくフカフカの土。
6. 暗黄褐色土 5層に類似するが、灰色シルト塊(直径1.0cmほど)焼土塊(直径1.0~2.0cmほど)を含む。やはりもろくフカフカの土。
7. 灰色シルト塊 長径10.0cmほどで硬く締まる。

## 2区26号住居跡1号土坑G-G'

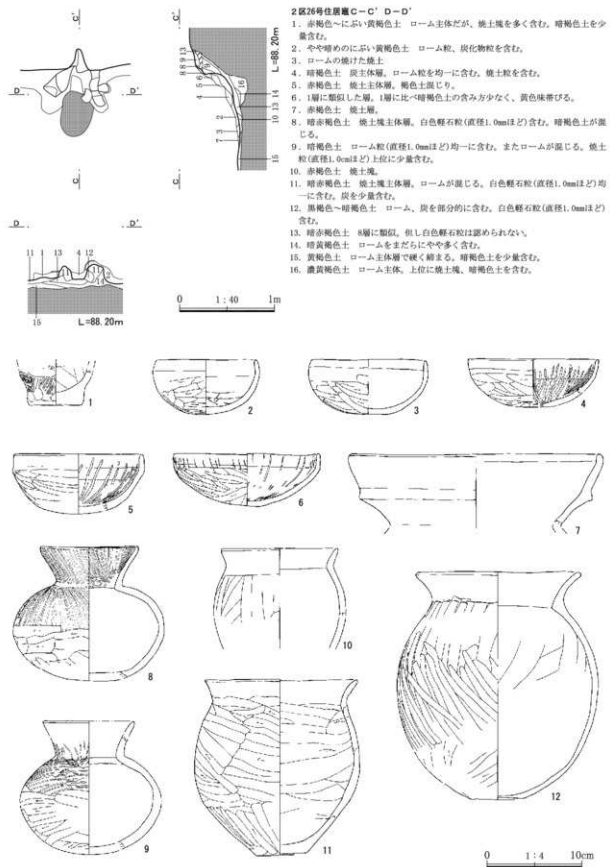
1. ぶい黄褐色土 灰色粘土塊を多く含む。暗褐色土を少量まだらに含む。

## 2区26号住居跡A-A' B-B'

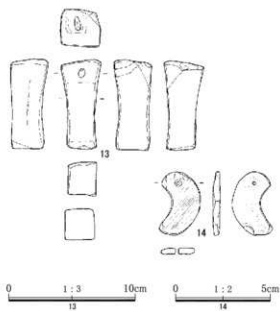
1. 濃黄褐色土~暗黄褐色土 主に下位はローム多く混じり黄色味帯びる(濃黄褐色土)。またロームを粒および塊状(直径0.5~1.0cm、長径2.0~5.0cmほど)均一に含む。白色軽石粒(直径1.0~3.0mmほど)均一に含む。
2. 暗黄褐色土~黒褐色土 A-A'のベルトより西側のベルトは炭を主体とする上が多く混じり黒色味帯びる(黒褐色土)。白色軽石粒(直径1.0~5.0mmほど)含む。特に黒褐色土の部分は均一にやや多く含む。ロームを粒および塊状(直径0.1~2.0cm、長径2.5~5.0mmほど)均一に含む。電付近(A-A'のA'付近)に焼土を少量含む。
3. 黒褐色土 暗黄褐色土部分的に認められる(特にA-A'のベルトより西)。2層同様白色軽石粒を含む。白色軽石粒を多く含む黒色土を塊状に含む。ロームも2層同様を含む。2層との違いは炭を主体とする黒色土の多少であり、白色軽石粒やローム粒および塊状の含み方は類似する。
4. 濃褐色土 白色軽石粒(直径1.0mmほど)均一に含む。ローム粒状(直径0.5~1.0cmほど)に少量含む。
5. 4層に類似するがやや黒色味帯びる。
6. 濃黄褐色土~黒褐色土 1層に類似するが、2~3層と同様炭を主体とする黒色土が混じる(B-B')。また塊状に含む(長径5.0~15.0cmほど)。A-A'ベルトより西)。
7. 5層に類似するが、下位に焼土を塊状(長径1.0~5.0cm)を含む。
- 8a. 暗褐色土 ローム粒状(直径0.1~1.0cmほど)を含む。またロームが少量混入する。
- 8b. 濃黄褐色土 8a層よりロームの混じりが多い。全体的に8a層より黄色味あり。
9. 暗黄褐色土~黒褐色土 2層に類似した層。
10. 明黄褐色土 ローム主体。
11. 黄褐色土 ローム主体で暗褐色土を含む(特に上位と下位)。
12. 黄褐色土~暗褐色土 A-A'の東側はローム主体の黄褐色土。西側はローム混じり。また粒状(直径1.0cmほど)を含む暗褐色土。
13. 黄褐色土 ローム主体。やや硬く締まる。暗褐色土を部分的に含む。

第146図 2区26号住居

0 1:80 4m



第147図 2区26住居断と出土遺物(1)



第148図 2区26号住居出土遺物(2)

**周溝** 周溝は全周する。幅は概ね18cm、深さは13cmである。南壁周溝内小穴から石製勾玉(第148図14)が出土した。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.70m、短径0.68m、深さ0.47mの不定形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.26m、短径0.24mである。底面上38cmで土師器甕(第147図12)と坏(3)が底面上38cmで出土した。甕は甕右脇および左脇の床面直上から出土した破片と接合している。また、西壁中央付近に長径0.60m、短径0.54m、深さ0.13mの楕円形の土坑が検出されている。断面形は箱形で底面は平坦である。その位置からすれば住居に伴う土坑の可能性があるが、出土遺物もなく、土坑の機能を判断する調査所見は得られなかった。

**床面** 床面は平坦である。住居中央やや東側に床面が焼けている厚さ1cmに焼土化している部分が2カ所検出された。西側の焼土は長径0.48m、短径0.32mの不整楕円形で、焼土面は硬化していた。焼土面上12cmで手づくね土器(第147図1)が出土した。東側焼土は長径0.32m、短径0.26mの楕円形である。また、住居中央西側部分には炭化材が比較的多く出土している。

**掘り方** 掘り方で、P7・P8を検出した。それ

ぞれの規模(長径×短径×掘り方面からの深さ)は、23×29×57cm、42×36×28cmである。やや軸はずれるが、住居中央に壁に沿って並ぶ位置にある。

また、小溝を北壁と南壁沿いの2カ所に検出した。北壁は中央やや東寄りに、幅0.21m、長さ0.96m、深さ0.17mと幅0.21m、長さ1.01m、深さ0.09mの二本の溝が、10～15cmの間隔を置いて検出された。南壁は中央やや西寄りに、掘り方底面を5cmほど掘り凹めたなかに、幅0.15m、長さ0.71m、深さ0.09mの溝と、幅0.24m、長さ0.96m、深さ0.10mの2本の溝が検出された。全体としては4～10cmの厚さの暗褐色土塊を含む黄褐色土で埋められていた。

**遺物と出土状況** 甕および貯蔵穴周辺にまとまって遺物が出土した。土師器埴(第147図8)は貯蔵穴西縁床面直上で、甕(11)はP4南の壁沿いの床面上10cmで出土した。坏(2)は中央部床面上3cmで、埴(9)はP6西側の床面直上で出土した。甕の口縁部(7)と坏(6)は北壁西部の周溝底面上から38～46cm浮いた位置で出土した。甕(10)は西部床面直上で出土した。砥石(第148図13)は埋没土中から出土した。なお埋没土中から打製石斧が出土した。

図示した遺物のほか、土師器241点、須恵器1点、剥片2点、礫4点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。

#### 2区27号住居

(第149・150図 PLS2・173 遺物観察表P.574)

**位置** 2a区2-9-H・I-16・17G

**形状** 正方形と推定される。南隅が15号住居、18号土坑に切られる。

**重複** 15号住居、18号土坑より古い。

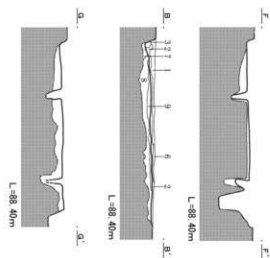
**規模** 長軸4.02m 短軸3.96m 壁高0.18m

**面積** (15.94)㎡ **長軸方位** N-26°-E

**埋没土** ローム粒・黒褐色土粒を含む黄褐色土。

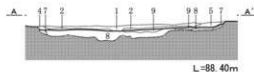
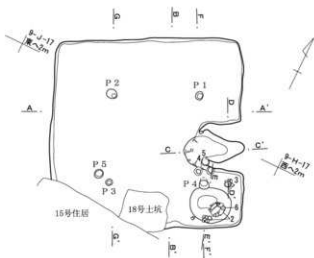
**竈** 住居東壁やや南寄りに竈が構築されていた。確認長0.98m、燃焼部幅0.62m。袖の残存長は向かって右側が0.84m、左側が0.95m。壁外に0.07m煙道

第5章 2区の遺構と遺物



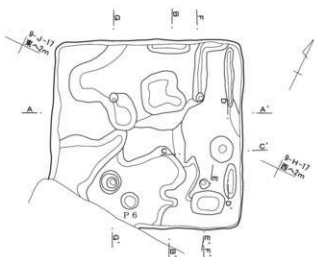
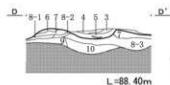
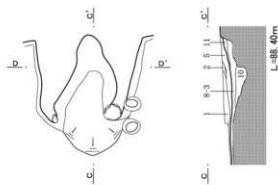
2区27号住居的竪穴 E-E'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
2. 暗褐色土 ローム小塊をやや多く含む。



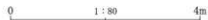
2区27号住居 A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊、黒褐色土、黒褐色土粒を含む。
2. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土粒、黒褐色土小塊を含み、硬く締まっている。
3. 黄褐色土 暗褐色土を全体に混合する。2層よりも薄い。
4. 黄褐色土 暗褐色土とロームが混合したもの、ローム塊を含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。直径0.5mm位のローム塊を含む。
6. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土を含む。2層よりもロームの量少ない。
7. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土をわずかに含む。
8. ローム塊主体、暗褐色土を少量含む。
9. 大きめのローム塊主体、暗褐色土を少量含む。

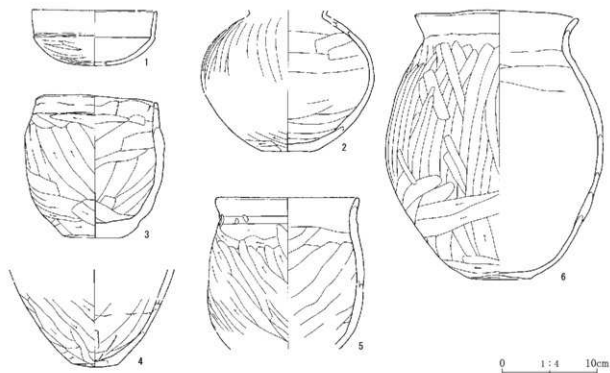


2区27号住居 C-C' D-D'

1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、焼土小塊を含む。
2. 灰層
3. 焼土
4. 暗褐色土 焼土と灰を混合。
5. 赤褐色土 暗褐色土、灰色粘土粒を多く含む。
6. 灰色粘土
7. 褐色土 粒子細かい。
- 8-1. 黄褐色土 黒褐色土、ローム小塊を含む。
- 8-2. 黄褐色土
- 8-3. 黄褐色土 暗褐色土、ローム塊を含む。
9. 黄褐色土 ロームが主体、暗褐色土を含む。
10. 褐色土 ローム塊を多く含む。
11. 焼土、暗褐色土の混合、赤褐色を呈す。



第149図 2区27号住居



第150図 2区27号住居出土遺物

が伸びる。竈前に火床面があり、右袖芯には土師器甕(第150図4・5)が立てられていた。右袖脇には粘土塊2カ所(床面上5cmと8cm)を図示したが、甕崩落土の可能性が高い。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が18×16×34cm、P2が23×19×33cm、P3が14×14×20cm、P4が21×20×23cmである。P3の南東にはやや大きいP5(20×18×21cm)が検出されているが、位置から主柱穴はP3の方と判断した。

**周溝** 床面で周溝は検出されなかった。掘り方面で東壁から0.2mほど内側に壁に飛行する周溝のような溝を竈の北と南で2カ所検出した。竈の北側では幅0.20m、長さ1.26m、深さ0.1~0.14mの規模で検出された。西側には小溝が平行する。竈の南側は、幅0.23m、長さ0.74m、深さ0.03mである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.88m、短径0.75m、深さ0.62mの不定長方形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.42m、短径0.27mの長方形で、底面上59cmで土師器壺(第150図2)と甕(6)が出土した。

**床面** 床面はほぼ平坦である。

**掘り方** 北西部と南西部に比較的大きな凹地が掘られている。全体としては、厚さ5~20cmの暗褐色土を含む黄褐色土で充填されていた。北壁からP1をつなぐ位置に小溝が検出された。幅0.28m、長さ1.05m、掘り方面からの深さ0.15mである。またP4の東側で37×35×12cmのP6を検出した。

**遺物と出土状況** 遺物は南東隅の貯蔵穴内部とその周辺に集中して出土した。土師器鉢(第150図3)は甕右脇床面上3cmで出土した。図示した遺物のほか、縄文土器4点、土師器153点、剥片1点出土した。

**所見** 出土遺物から荒縄北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

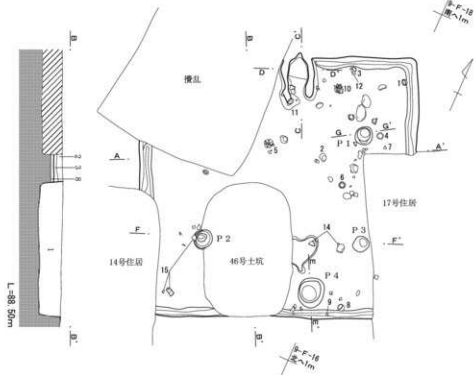
#### 2区28号住居

(第151・152図 PL83・173 遺物観察表P.575)

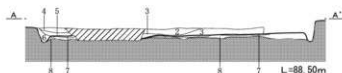
**位置** 2a区2-9-E・F・G-16・17G

**形状** ほぼ正方形と推定される。14号・17号住居、46号土坑、攪乱に切られる。

**重複** 14号・17号住居、46号土坑より古い。



W05 88-7



2区28号住居P4 E-E'

1. 暗褐色土 炭化物、焼土粒わずかに含む。ローム粒を少量含む、やや締まりなし。
2. 暗黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。ローム粒を少量含む、やや締まりなし。
3. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。締まりがなくフカフカしている。

2区28号住居P2・P3 F-F'

1. 暗黄褐色土 焼土粒、ローム粒、黒褐色土粒混入。やや締まりあり。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。締まりなくフカフカ。

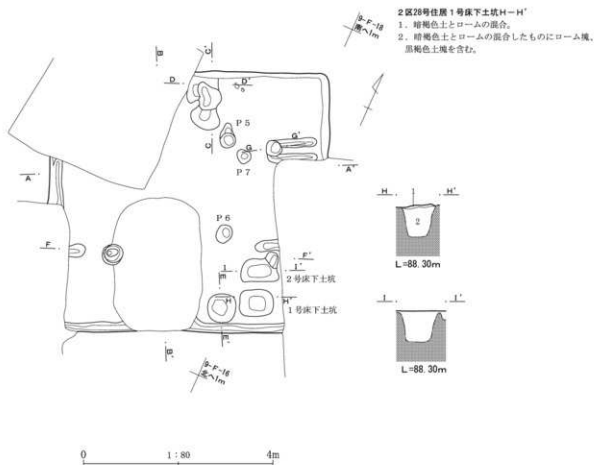
2区28号住居P1 G-G'

1. 黒褐色土 ローム塊、ローム粒を含む。炭化物、焼土粒をわずかに含む。やや締まりあり。
2. 暗黄褐色土 ローム塊を含む。暗褐色土をまだらに含む。やや締まりなし。
3. 暗褐色土 ローム粒を含む。やや締まりなし。

2区28号住居・46号土坑A-A' B-B'

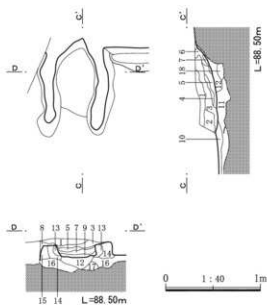
- 46号土坑
1. 明黄褐色土 数個大のローム塊を多く含む。
  2. 明黄褐色土 ローム粒をやや多く含む明るい。
  3. 明黄褐色土 黒褐色土塊、ローム粒を含む。
  4. にぶい黄褐色土 ローム粒、黒褐色土塊を含む。
  5. にぶい黄褐色土 4層よりも黒褐色土の最も多く、黒っぽい。
  6. にぶい黄褐色土 ローム塊、暗褐色土を含まず。
  7. 明黄褐色土 暗褐色土を少量含む。ローム主体。
  8. 明黄褐色土 暗褐色土をわずかに含む。ローム主体。

### 3. 古墳時代の遺構と遺物



#### 2区28号住居溝C-C' D-D'

1. 黄褐色土 ローム小粒を全体に含む。
2. 暗灰黄色 ローム小塊、黄土小塊を含む。
3. 暗灰黄色 2層より薄い、黒褐色土塊、黄土塊、ロームを含む。
4. 暗灰黄色 3層より黄土、ロームの多い。
5. 黄土が主体、黄褐色土、黒褐色土を少量含む。
6. 黄褐色土 黄土を含む。
7. 褐色土 暗褐色土に黄土が全体に混合したものの。
8. 暗褐色土 黄土を含む。
9. 黄褐色土 黄土含まず。
10. 黄土 褐色土を少量含む。
11. 暗褐色土 黄土塊、灰塊、ローム塊を多く含む。
12. 褐色土 黄土粒、ローム粒、黒褐色土小塊を含む。
13. 黄土、暗褐色土の混合層、締まっている。
14. 灰色粘質土 黄土をわずかに含み、ザラザラしているが締まっている。
15. 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土小塊を含む。
16. ローム、暗褐色土が混合したものの、黄土を若干含む。
17. ローム主体、黄土、黒褐色土をわずかに含む。
18. 暗褐色土、ロームの混合したものに黄土、灰、黒褐色土を少量含む。



#### 2区28号住居



**規模** 長軸5.88m 短軸5.53m 壁高0.27m

**面積** (32.74)㎡ **長軸方位** N-65°-E

**埋没土** ローム塊を含む明黄褐色土で埋まっていた。

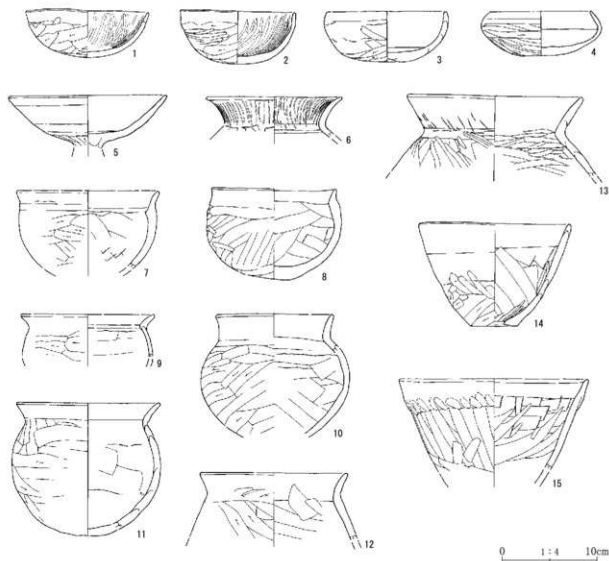
**竈** 住居北壁やや東寄りに竈が構築されていた。確認長1.14m、燃焼部幅0.45m。袖の残存長は向かって右側が0.89m、左側が1.05m。壁外に0.14m煙道が伸びる。左袖の先端で土師器甕(第152図11)が口縁を手前に倒れて出土した。竈袖補強かどうかは判断できなかった。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が40×38×67cm、P2が42×39×72cm、P3が35×30

×50cmである。北西部の主柱穴は攪乱がおよんでいるため確認できなかった。また南壁の竈に相対する位置にP4(62×55×54cm)を検出した。ピットの機能については明らかにできなかった。

**周溝** 周溝は調査できた範囲の南壁、東壁と北壁で確認できた。攪乱や14号・17号住居に切られた部分にも巡っていた可能性が高いと推定される。幅は概ね22cm、深さは19cmである。

**貯蔵穴** この時期の堅穴住居に一般的に貯蔵穴が検出される竈右脇には貯蔵穴は検出されなかった。前述したように南壁沿いに隅丸長方形の土坑が検出されている。これが貯蔵穴の可能性もある。



第152図 2区28号住居出土遺物

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 全体としては平坦な掘り方である。やや住居南東半が深く掘り込まれていた。暗褐色土を含む黄褐色土で充填されていた。掘り方面では、二カ所の小溝と、床下土坑2基が検出された。

P1と東壁をつなぐ位置には小溝と推定される溝が2列検出された。いずれも幅0.2mで北側は長さ0.78m、南側は長さ1.04mである。もう1カ所はP3北側に接した位置にあった。17号住居に切られているために全容は不明であるが、幅0.22m、長さは0.51mを確認できた。

また、P3の南西側に、南壁と軸を描いた隅丸長方形の床下土坑を2基検出した。南側を1号、北側を2号とした。1号床下土坑は長軸0.72m、短軸0.57m、深さ0.64mで、断面形は台形、底面は平坦である。2号床下土坑は長軸0.76m、短軸0.48m、深さ0.63mの不定隅丸長方形で、断面形は台形、底面は平坦である。壁と平行に並ぶ土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性が高いと判断した。

**遺物と出土状況** 竈周辺から北東隅にかけて比較的集中していたほか、南壁際中央のP4周辺から遺物が出土している。土師器杯(第152図1)は北東隅周溝脇床面上8cmで出土した。坏(2~4)は北東部に集中し、いずれも床面直上で出土した。鉢(8)はP4東側の壁際床面上8cmで出土した。高坏(5)は竈左前の住居中央部、床面上3cmで出土した。甕(10)は竈右脇床面直上で出土した。甕(14)はP3西側の床面直上で、甕(15)はP2西脇床面直上で出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、弥生土器1点(第267図23)、土師器728点、粘土塊2点、剥片69点、礫片11点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。

2区29号住居(第153~157図 PL84・85・173~175 遺物観察表P.575~577・612)

**位置** 2区2-9-C・E-13・14G、  
2-9-D-13~15G

**形状** 正方形と推定される。34・44号住居、40・41号土坑と重複するが、いずれも本住居が深いために全形を把握することができた。南壁は中央には長軸1.58m、短軸1.57m、深さ0.21mの正方形の張り出し部が掘り込まれていた。

**重複** 40号土坑より古く、34号・44号住居、41号土坑より新しい。

**規模** 長軸6.52m 短軸6.43m 壁高0.71m

**面積** 44.17㎡ **長軸方位** N-69°-E

**埋没土** 上層は白色軽石とローム粒を含む暗褐色土で、下層はローム塊・黒褐色土塊を含む黄褐色土。

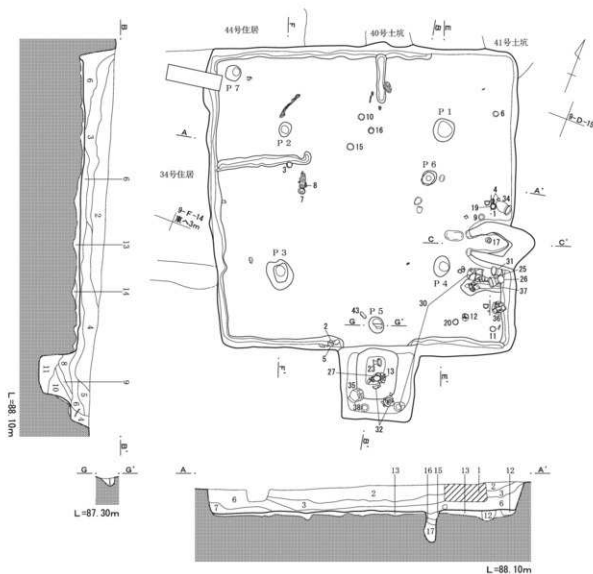
**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長0.99m、燃焼部幅0.46m。袖の残存長は向かって右側が1.0m、左側が0.97m。使用面では0.46m、掘り方面では0.46mの住居外に張り出す掘り込みがある。左右袖の先端には礫が1個ずつ芯として埋められていた。また、燃焼部中央やや左寄りに支脚の棒状礫が埋められた。この支脚礫の上位には土師器杯(第155図17)が伏せた状態で出土した。

竈の袖は地山を10~15cmほどの高さで掘り残り、袖を構築していた。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4と張り出し部の構造に関わりと推定されるP5を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が48×45×63cm、P2が32×24×63cm、P3が60×51×65cm、P4が45×33×65cm、P5が35×30×18cmである。P5は張り出し土坑の一辺のほぼ中央の壁から0.27m内側に入ったところに掘られていた。また、P6が中央北東寄りに、P7が北西隅に検出された。それぞれの規模はP6が34×29×73cm、P7が33×31×33cmである。

**周溝** 周溝は、東壁の竈より北側と北壁の東部分、南壁の張り出し土坑部分を除く四周の壁に検出された。幅は概ね20cm、深さは11cmである。

**貯蔵穴** 南壁中央やや東寄りの正方形張り出し部の北寄りに、貯蔵穴と推定される土坑が検出された。張り出し部底面は、住居床面より20cmほど掘り下げであり、幅0.2~0.32mのテラス状の縁部分を設けて、

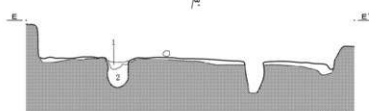
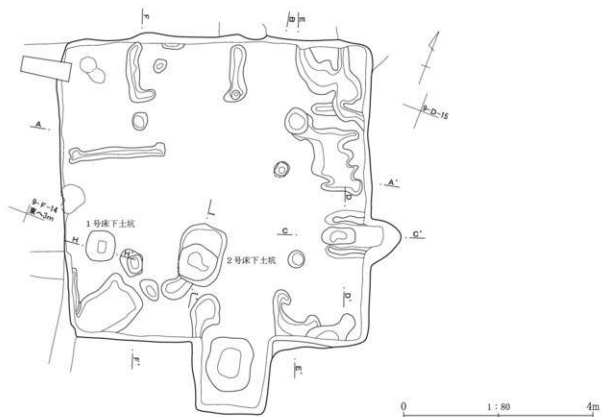


2区29号住居A-A' B-B'

1. 黒褐色土 シラサツの上。住居を切る雑土。
2. 暗褐色土 黒色味帯びるが13層ほどではない(特に上位が部分的に黒色味あり)。白色軽石粒(直径1.0~5.0mmほど)均一に含む。
3. 暗褐色~黒褐色土 1層と2層の間の色調(黒色味帯びるが1層ほどではない)。下位は濃黄褐色土(5層の上)へと漸移的に変化する。黄味帯びる。白色軽石粒(直径1.0mmほど)少量含む。
4. 暗褐色土 3層に類似するが、黒色味少ない(3層と5層の間の色調)。白色軽石粒(直径1.0mmほど)ごく少量含む。
5. 濃褐色土 白色軽石を少量含む。
6. 濃黄褐色土 ローム主体。ローム塊(長径0.5~2.0cmほど、ハードローム)含む。また黒褐色土(3層の土か?)を斑状に部分的に含む。
7. 5層に類似するが、主に東半分で黒色土(段主体土)を30%ほど含む。
8. 暗褐色~暗褐色土 白色軽石を少量含む。
9. 褐色土 粒子が細かく均一。夾雑物が少ない。締まりはやや弱い。
10. 暗褐色土 粒子が細かく均一。夾雑物が少ない。締まりはやや弱い。
11. 暗褐色土 粒子が細かく均一。夾雑物が少ない。締まりはやや弱い。上層に炭化物粒を少量含む。
12. 濃黄褐色土 締まりやや弱い。
13. にぶい黄褐色土 明黄褐色土(ハードローム)を斑状に含む。硬く締まる。
14. 濃黄褐色土 7層に類似。
15. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径0.5~1.0cmほど)均一に含む。締まりやや弱い。
16. 濃黄褐色土 ローム主体。ローム粒および塊(直径1.0~2.0cm、ハードローム)含む。締まりやや弱い。
17. 暗黄褐色土 ローム主体。P1の2層より暗色でローム粒および塊(直径0.5~2.0cmほど)少量含む。やはり締まり弱い。

2区29号住居P5 G-G'

1. 濃黄褐色土 ローム主体。ローム粒および塊(直径1.0~2.0cm、ハードローム)含む。締まりやや弱い。



L=88.10m



L=88.10m

## 2区29号住居P1・P2・P3・P4E-E' F-F'

1. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径0.5~1.0cmほど)均一に含む。締まりやや弱い。
2. 濃黄褐色土 ローム主体。ローム粒および塊(直径1.0~2.0cm, ハードローム)含む。締まりやや弱い。
3. 暗黄褐色土 ローム主体。P1の2層より暗色でローム粒および塊(直径0.5~2.0cmほど)少量含む。やはり締まり弱い。

## 2区29号住居

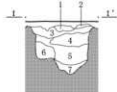
0 1:80 4m



L=87.30m

## 2区29号住居1号床下土坑H-H'

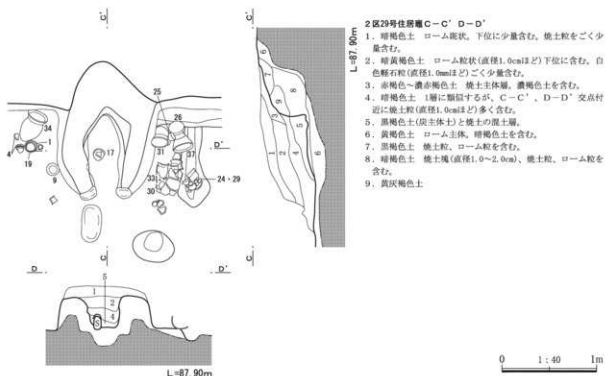
1. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。



L=87.30m

## 2区29号住居2号床下土坑I-I'

1. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土が少量混入。
2. 1層に同じ。
3. 黄褐色土 暗褐色土を斑状に含む。
4. 1層に同じ。
5. 暗褐色土にロームが混入したもの。それに直径1.0~3.0cmのローム塊を含む。
6. 5層よりもロームの量若干少ない。やや弱い。
7. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



第154図 2区29号住居

貯蔵穴が掘り込まれている。貯蔵穴は長径1.06m、短径0.87m、テラス部分からの深さが0.80mの隅丸長方形である。貯蔵穴は正方形張り出し部の北側に接する位置に掘られているため、住居床面からの深さは0.95mに達する。底面は長径0.58m、短径0.41mの整った長方形に掘られていた。

張り出し部を含めた貯蔵穴周辺からは、完形に近い土器が集中して出土した。テラス部分からは、土師器甕(第156図32・35)、小型甕(30)が底面直上で、須恵器甕(第157図38)が底面上10cmで出土した。貯蔵穴内からは、土師器高坏(第155図23)が底面上6cmで、鉢(27)が底面上11cmで、坏(13)が底面上9cmで出土した。

**床面** 床面は平坦である。中央部を中心に硬化していた。床面では主柱穴のほかに、小溝2条を検出した。北壁の東隅から5.4mのところには、幅0.16m、長さ1.04m、深さ0.12mの溝が検出された。南側の先端部周辺には炭化材が出土したが、小溝の構造との関連はつかめなかった。

西壁の北隅から4.6mのところには、幅0.21m、長

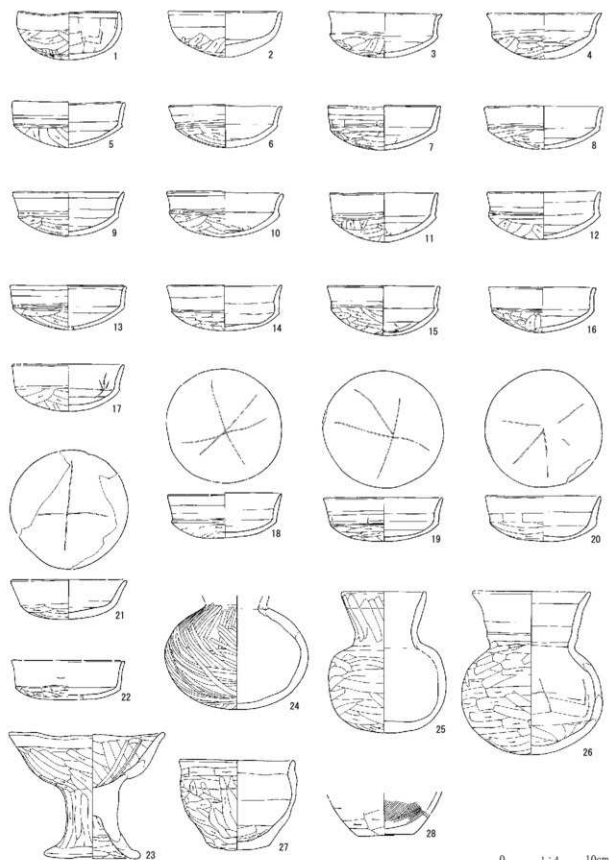
さ1.99m、深さ0.14mの溝が検出された。東端に直径8cmほどの小ピットをめぐるように彎曲していた。小ピットのある位置から南側には溝と直交するような位置に炭化材が出土した。溝の南縁からは土師器坏(第155図3)が、炭化材下から坏(8)が、炭化材南端で坏(7)がいずれも床面直上で出土した。

また、竈石袖から0.3m南のところに幅0.19m、長さ0.85m、深さ0.07mの溝が検出された。竈に近いことから小溝かどうかは不明であるが、小型甕(第156図29)や埴(第155図24)が溝底面に接して出土している。

**掘り方** 竈左脇や南西隅が不定型に掘り込まれていたが、全体としては厚さ4～10cmのローム塊を含む黄褐色土で充填されていた。

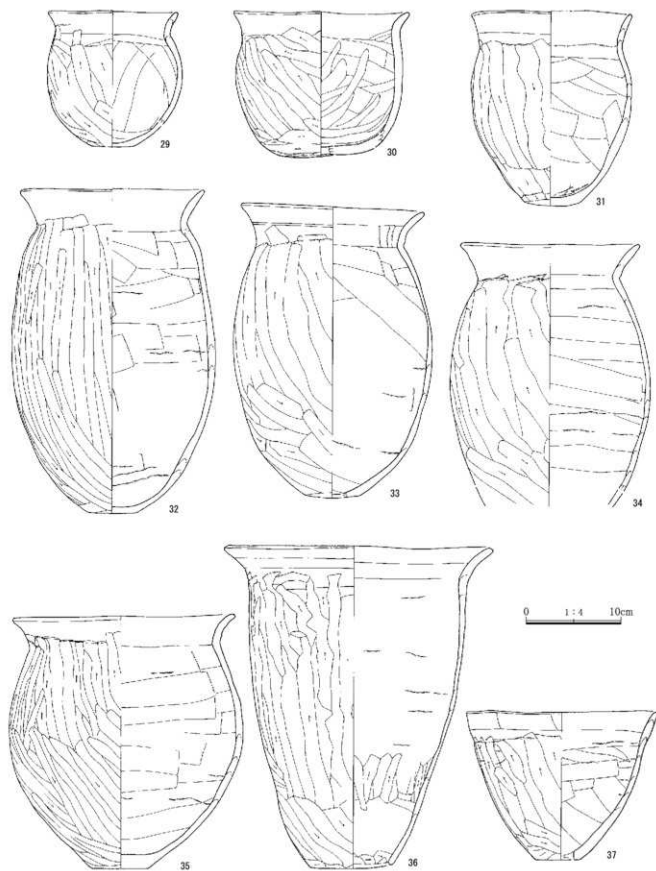
掘り方面では、床下土坑2基とあらたに小溝1条が検出された。南西部西壁寄りで検出された1号床下土坑は長軸0.64m、短軸0.62m、深さ0.58mの隅丸正方形で、断面形は不定箱形、底面は平坦である。南部中央で検出された2号床下土坑は長軸1.32m、短軸0.93m、深さ0.99mの隅丸長方形で、断面形は

3. 古墳時代の遺構と遺物

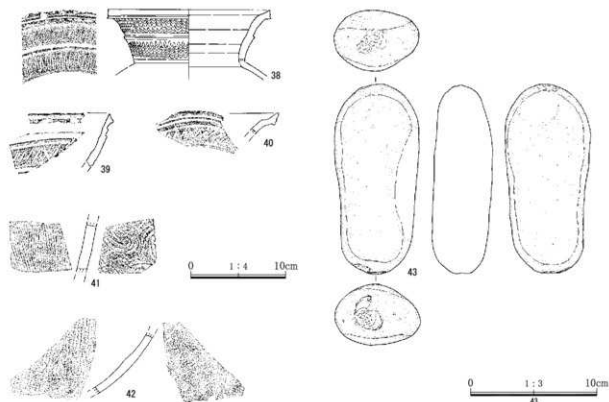


第155図 2区29号住居出土遺物(1)

第5章 2区の遺構と遺物



第156図 2区29号住居出土遺物(2)



第157図 2区29号住居出土遺物(3)

ロート状、底面は平坦である。いずれの土坑も土坑の位置からすれば住居に伴うと判断した。小溝は北壁とP2をつなぐ位置に、幅0.29m、長さ1.28m、深さ0.19mで、南端は東側にし字状に屈曲する。P2との間に0.2mの間隔が開いている。床面で検出された北壁東側の小溝の先端も掘り方面の精査によって、南端が西側に曲がるのがわかり、直径20cm、深さ20cmの小ピットも検出された。両者の長さもほぼ同一である。

**遺物と出土状況** 竈両脇に完形遺物が数多く置かれた状態で出土しているほか、南壁中央に付設された張り出し部と貯蔵穴からも集中して遺物が出土した。

竈左脇からは、土師器甕(第156図34)、坏(第155図1・4・9・19)が床面直上から床面上8cmで出土した。竈右脇では、土師器甕(第156図31・33)、瓶(37)、埴(第155図24・25・26)、小型甕(第156図29)が重なるように床面直上で出土した。また竈右横東壁際には瓶(36)が床面上3cmで出土した。坏類は21個体もの実測可能な土師器坏が出土しているが、前述した

竈支脚上の1個体、竈左脇の4個体、P2東の小溝周辺の3個体、貯蔵穴内の1個体の他、北東隅に第155図11・12・20が、P1・P2間で10・15・16が、P1北側で6が、東壁周溝内から2・5が床面直上か数cm浮いた状態で出土した。他の3個体は埋没土中から出土した。

須恵器破片は8片が出土したが、いずれも埋没土中から出土した。ミニチュア土器も1点出土したが小片のため、図化できなかった。敲石(第157図43)はP5の西脇、床面直上で出土した。

図示した遺物のほか、縄文土器2点、弥生土器1点、土師器1076点、須恵器2点、剥片1点、礫片11点、棒状礫2点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

本住居は調査区内で2番目に大きい住居で、張り出し部をもつことで注目される。煮沸具・供膳具ともに多くの土器を出土しており、遺跡内で中心的な機能を持つ住居であったことが推定される。



2区30号住居

(第158～160図 PL86・176 遺物観察表P.577・578・612)

位置 2a区2-9-E・G-12・13G

2-9-F-12～14G

形状 正方形と推定される。31・32・44号住居に切られる。31号住居と接する南壁および44号住居と接する東壁は不明瞭になった部分がある。

重複 31号・32号・44号住居より新しい。

規模 長軸6.87m 短軸6.80m 壁高0.47m

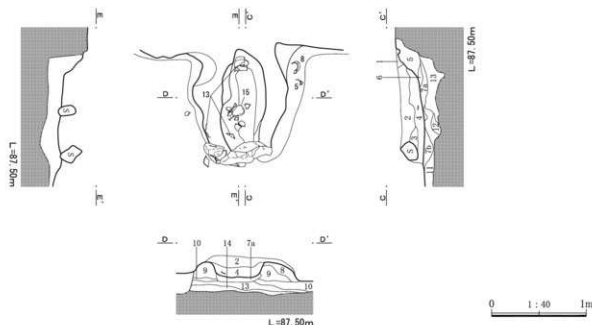
面積 47.92㎡ 長軸方位 N-70°-E

埋没土 上層はローム粒・軽石粒を含む暗褐色土で、下層はローム小塊・暗褐色土塊を含む褐色土で埋ま

っていた。

竈 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.23m、燃焼部幅0.49m。袖の残存長は向かって右側が1.24m、左側が1.24mである。煙道は壁外に突出しない。

両袖の先端には礫が芯に入れられていた。また、焚き口の天井部にあつたと推定される長さ57cmの礫が使用面まで落ち込んで出土した。燃焼部中央には支脚の礫が立てられていた。土師器版(第159図13)は燃焼部手前使用面と煙道部奥で出土した遺物が接合した。また支脚に立てられていた礫(15)には線状痕が認められ、砥石として使用された後、転用され

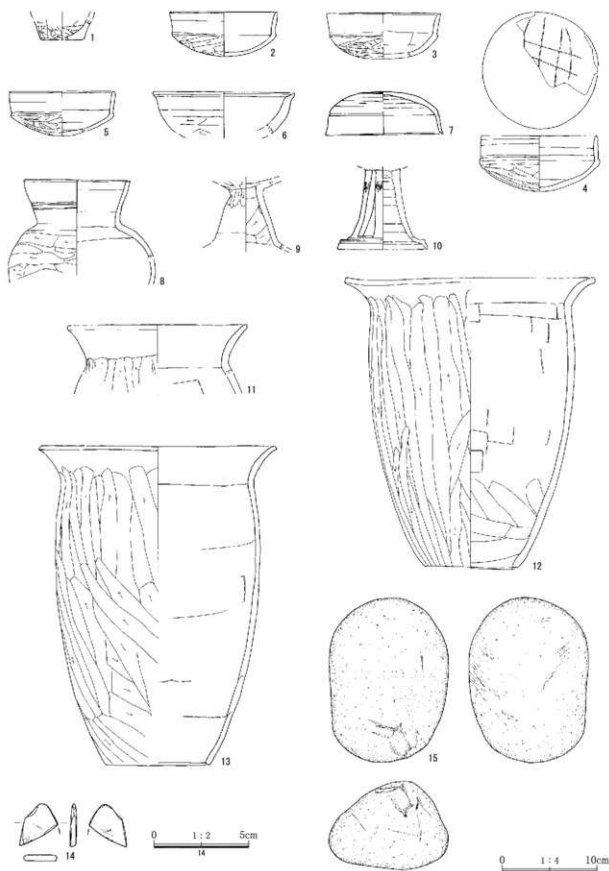


2区30号住居層C-C'・D-D'

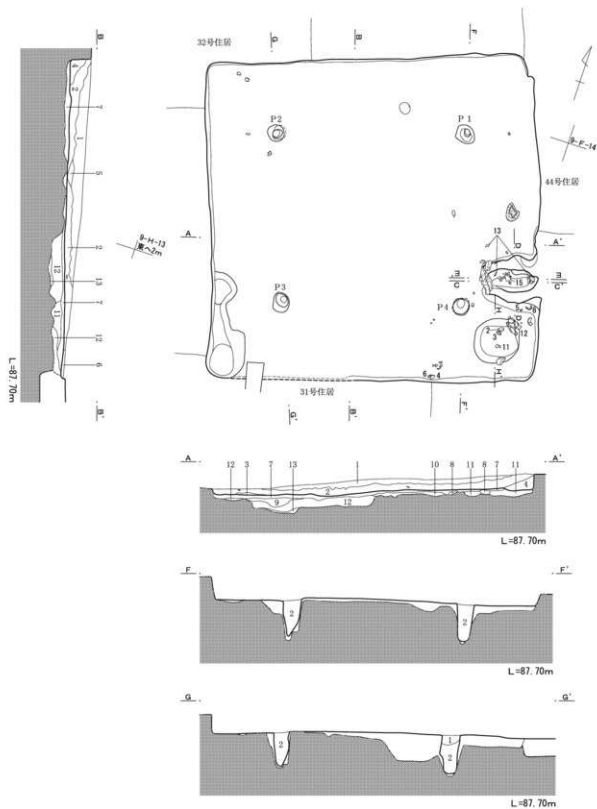
1. 暗褐色土 ローム混じり。焼土粒状(直径1.0cmほど)に均一にやや多く含む。
2. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径0.3～5.0cmほど)に均一に含む。またローム混じりの部分もあり。白色軽石粒(直径1.0～2.0cmほど)少量含む。C-C'・D-D' 交点付近の下位には焼土粒状(直径5.0cmほど)を含む。
3. 暗褐色～黒褐色土 2層に比べロームの混じり少ない。焼土が混じり、やや赤褐色味あり。また炭?が混じる部分もあり。
4. 暗褐色土 焼土を粒および塊状(直径1.5cmほど)を含む。特にC-C'・D-D' 交点付近は均一に多く含む。部分的に灰色シルト土や黒灰色土(炭灰主体土)が混じる。
5. 暗褐色土 焼土を粒および塊状(直径0.2～1.0cmほど)に特に中～下位に含む。
6. 5層に類似。但し焼土粒、塊は均一にやや多く含む。
- 7a. 暗褐色土 濃い黄褐色土(ローム主体)混じり。焼土粒(直径5.0cmほど)少量含む。7a層は焼土が均一に混じる。
8. 暗褐色土に濃い黄褐色土(ロームまたはハードロームを含む)の混じり。また濃い黄褐色土は粒状(直径0.5～1.0cmほど)にも含む。やや硬く締まる。
9. 黄褐色～濃い黄褐色土 ローム主体。ハードロームも混じる。暗褐色土少量含む。やや硬く締まる。内側壁土混じる。竜軸礫土。
10. 暗褐色土 7a層に類似し、7a層よりやや黒色味帯びる。黄褐色土(ハードローム)粒状(直径1.0cmほど)を含む。
11. 暗褐色土 ロームとの混じり。ロームは均一に混じる。
12. 暗褐色土 10層に類似。但しローム粒はほとんど認められない。
13. 暗褐色土 ローム混じり。また粒および塊状(直径0.5～4.0cmほど)を含む。
14. 暗褐色土 10層に類似。

第158図 2区30号住居竈

3. 古墳時代の遺構と遺物

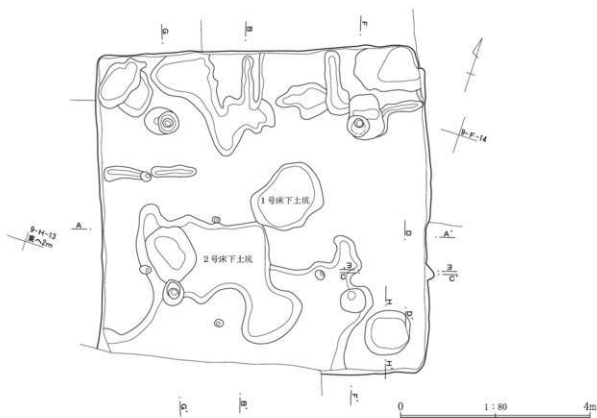


第159図 2区30号住居出土遺物



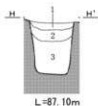
2030号住居 P1・P2・P3・P4 F-F' G-G'

1. 暗黄褐色土 暗褐色土とロームの混じり。またロームは粒および塊状(直径3.0cmほど)に均一に含む。
2. 暗褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に含む。1層よりは黒色味あり(黄色味がない)。



## 2区30号住居 A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒、軽石粒を含み、やや明るい。
2. 褐色土 ローム小塊、暗褐色土小塊を含む。
3. 黄褐色土 ローム主体、褐色土塊を含む。
4. 暗褐色土 ローム塊、黒褐色土塊(直径1.0cm前後)を含む。
5. 暗褐色土 1層に近いが、ローム粒の量やや多く明るい。
6. ローム塊、褐色土塊ともに直径3.0cm位の混土。
7. 暗褐色土 ローム混じり、また塊状(長径1.0~3.0cmほど、ハードローム塊も少量含んでいる)に多量を含む、硬く締まる。
8. 黄褐色土 ローム塊。
9. 暗褐色土とロームの混じり、またロームは塊状(長径1.0~3.0cmほど、ハードローム塊)にも含む、色調としては黄褐色~暗褐色土。
10. 黄褐色土 ローム主体、ハードローム塊も混じる。
11. 9層に類似。
12. 暗褐色土 ローム混じり、また粒および塊状(直径4.0cmほど、ハードローム塊も含む)に均一に含む。
13. ローム主体、地山に比べやや締まり弱い、特に上位に暗褐色土が少量混じる。



## 2区30号住居貯蔵穴 H-H'

1. 暗黄褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に少量含む。
2. 暗黄褐色土~暗褐色土 1層から3層への漸移層。上位暗黄褐色土主体で徐々にまだらに含むようになり、下位は暗褐色土主体。
3. 暗褐色土 ロームを粒状(直径1.5cmほど)に均一に含む、上位に硬土粒がごく少量認められる(直径0.5cmほど)。

## 2区30号住居

たものである。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長さ×短径×深さ)は、P1が46×37×78cm、P2が36×35×72cm、P3が42×34×81cm、P4が35×34×79cmである。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅に長軸0.95m、短軸0.93m、深さ1.12mの隅丸正方形の貯蔵穴が検出された。底面も長軸0.77m、短軸0.63mの隅丸方形に掘られている。

貯蔵穴からは、土師器坏(第159図2)が底面上11cmで、坏(3)が底面上4cmで、甕(11)が底面直上で出土した。また、土師器瓶(12)は北東縁の床面直上で出土した。

**床面** 床面は平坦であるが、南側にやや傾斜している。甕の前から中央部にかけて硬化していた。

**掘り方** 南壁沿いと北壁沿いの一部が不定形にやや深く掘り込まれていた。全体としては、厚さ10～20cmの、黄褐色土やローム塊を含む暗褐色土で充填されていた。

掘り方で検出された施設は、2基の床下土坑と3条の小溝である。1号床下土坑は住居ほぼ中央にあり、長軸1.60m、短軸1.16m、深さ0.32mの不定隅丸長方形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。長軸方向は住居対角線方向である。2号床下土坑は中央南西寄りのP3北側にあり、長軸1.14m、短軸0.94m、深さ0.32mの隅丸長方形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。短軸方向が1号床下土坑の長軸方向とほぼ一致する。

小溝は東壁とP1の間、北壁とP1西側の間、西壁とP2南側の間の3条が認められた。それぞれの規模(幅×長さ×深さ)は、0.20m×0.88m×0.14m、0.31m×1.43m×0.10m、0.23m×1.95m×0.13mである。西壁の溝にはほぼ中央に0.23m×0.19m×0.28mの小ピットが検出された。

**遺物と出土状況** 竈および貯蔵穴周辺から比較的まとまって遺物が出土した。土師器坏(第159図4・6)は南壁際、床面直上で出土した。その他図示した遺物は埋没土中から出土した。須恵器高坏(10)は貯蔵

穴埋没土中から出土したが、17号・29号・42号住居の埋没土中から同一個体とみられる破片が1片ずつ出土している。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器825点、スサ入り粘土塊1点、剥片7点、礫片5点、棒状礫2点、大型竈構築材3点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

2区31号住居(第161～165図 PL87・88・176～178 遺物観察表P.578・579・612)

**位置** 2a区2-9-E-11G、2-9-F-11・12G、2-9-G-10～12G

**形状** 正方形と推定される。33号住居、23・47・70号土坑に切り合う。

**重複** 23・47・70号土坑より古い。本住居のほうが深いため、47号土坑と重複する北西隅部分も平面形を確認することができた。

**規模** 長軸8.24m 短軸8.02m 壁高0.66m

**面積** 66.10㎡ **長軸方位** N-77°-E

**埋没土** 下層は白色軽石粒・黄褐色土塊を含む暗褐色土で、上層は白色軽石粒・ローム塊を含む黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.20m、燃焼部幅0.52m。袖の残存長は向かって右側が1.36m、左側が1.13m。左右とも袖の先端に礫が埋められていた。燃焼部中央の左寄りに支脚と思われる礫が立てられていた。竈掘り方に住居外に張り出す奥行き0.53m、上幅0.66m、深さ0.37mの掘り込みがあった。

燃焼部からは土師器甕(第163図27、第164図43)が出土した。また竈のすぐ左脇には土師器坏(第163図18・19)が床面上3～9cm、鉢(30)が床面直上で、小型甕(第164図36・37)が床面上4～8cmで、小型瓶(第165図47)が床面上12cmで出土した。

**柱穴** 本住居は大型で柱穴もしっかりしていたことから、貼り床・掘り方・柱穴埋没土の関係を観察する目的で床面での柱穴の掘り下げをやめ、輪郭の記

録だけにとどめた。この時点では南西側の柱穴P4の確認はできていなかった。

柱穴埋没土を半載するように土層観察を行ったところ、掘り方でP1・P2・P3・P4の主柱穴を再確認し、さらに主柱穴間の中央に柱筋の通るP5・P6・P7・P8を検出した。またP8の南東側にP9を検出した。

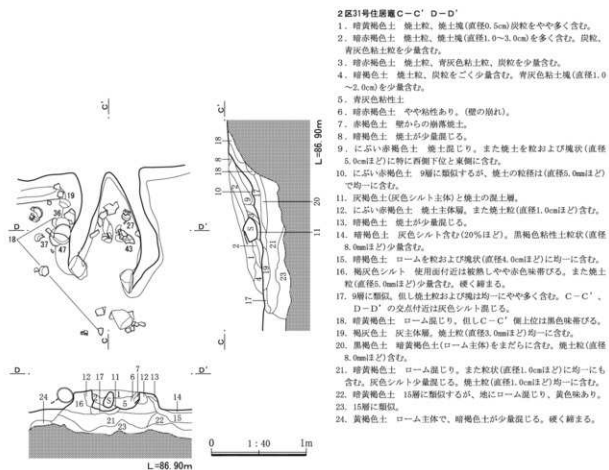
P1～P4は主柱穴と考えられる。二つの小穴に分かれる底面形状と埋没土の観察から、柱の立て替えがあったことが判明した。土層断面F・Gで、P3とP4の内側の柱穴が古く、外側の柱穴が新しいことが観察された。またP1・P2は床面の観察から同様であることが確認できた。P5～P8はP1～P4の新しい段階(外側)の柱穴間のほぼ中央に掘り方で検出された。これらは床面の精査では認識

できなかった。このうち北辺のP5のみ内側にもピットが検出された。これらの規模は主柱穴よりやや小さく、深さも半分程度である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、第162図第5表の通りである。

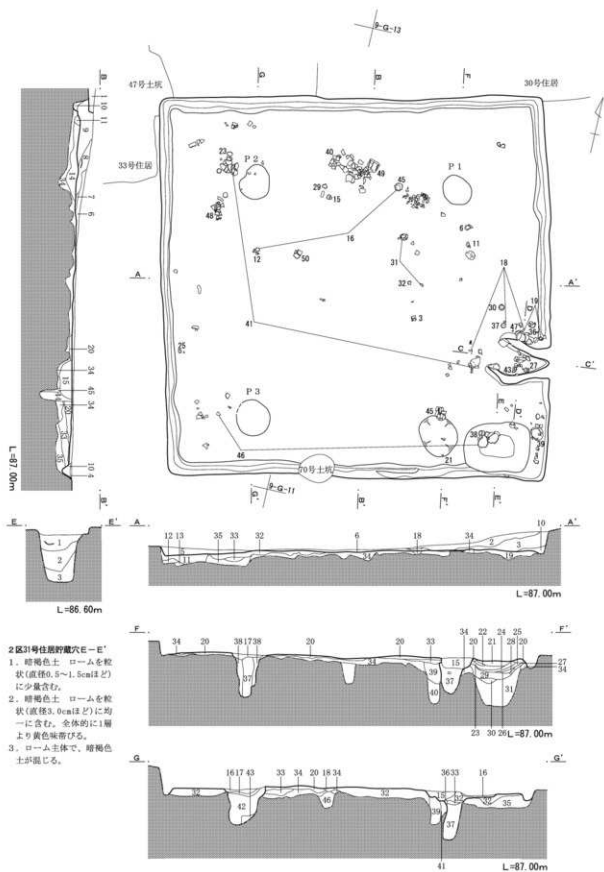
**周溝** 周溝は南東隅を除いて全周する。幅は概ね20cm、深さは8cmである。

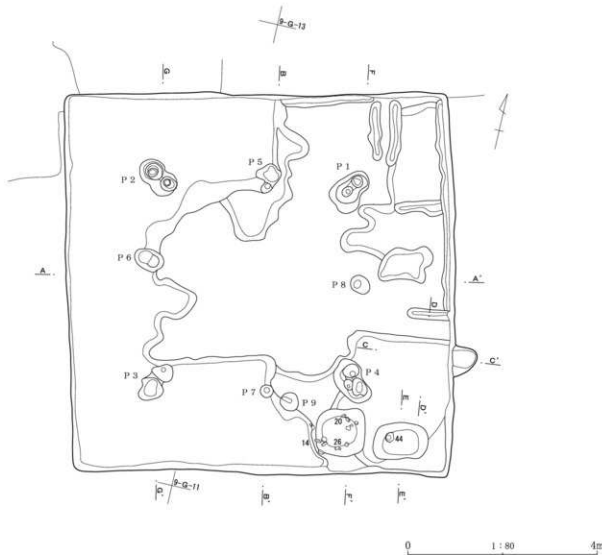
**貯蔵穴** 床面で南東隅に長軸1.38m、短軸1.02m、深さ1.03mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面も長軸0.72m、短軸0.47mの隅丸長方形である断面形は箱形で、底面が平坦であった。P4方向から土師器壺(第164図38)が落ち込んだ状態で貯蔵穴底面上0.61mから出土した。また掘り方調査時に底面を精査したところ、底面直上で土師器壺(第165図44)が出土した。

**床面** 床面は主柱穴を結んだ線の内側は平坦で、硬



第161図 2区31号住居跡





第5表 2区31号住居柱穴計測表

ピット間の距離(m)	柱穴概	直線計測値		廻り方計測値					
		規模(m)		壁幅(m)		床面からの深さ(m)	形状	次ピットとの間隔(m)	
		長径	短径	長径	短径				
北辺 4.34 3.80	P1	外側	0.67	0.57	0.48	0.4+	0.92	0.95	楕円形 1.8(P5外)
		内側			0.65	0.53+	0.66	1.07	楕円形 1.68(P5内)
		外側			0.48	0.38	0.26	0.42	不整形形状 2.5(P2外)
西辺 4.50 3.95	P2	外側	0.64	0.57	0.52	0.54	0.91	1.1	円形 1.8(P6)
		内側			0.56	0.36+	0.65	1.15	楕円形 3.97(P3外)
		外側			0.44	0.44	0.42	0.57	楕円形 2.8(P3外)
南辺 4.40 3.99	P3	外側	0.77	0.71	0.57	0.52	0.73	0.99	楕円形 2.42(P7)
		内側			0.45	0.36	1.02	1.64	楕円形 4.0(P4内)
		外側			0.28	0.29	0.35	0.69	円形 1.95(P4外)
東辺 4.34 3.86	P4	外側			0.56+	0.49	0.61	0.87	楕円形 2.2(P8)
		内側			0.61	0.46+	0.67	0.92	楕円形 3.86(P1内)
		外側			0.44	0.37	0.51	0.59	楕円形 2.18(P1外)
その他	P9			0.4	0.36	0.49	0.66	円形	

規模の「+」は隣接するピットを分断できないことから、それ以上であることを示す。

床面からの深さは東辺の床面からの換算値

次ピット間との間隔は軸を共通するピット間との計測値

2区31号住居A-A' B-B' F-F' G-G'

1. 濃黄褐色土 ローム混じり。またロームを粒および塊状(直径1.5cmほど)を含む。(30号住居掘り方発見土)。
2. 暗褐色土 直径0.5~5.0cmほどの礫山起源の白色軽石粒を均一に含む。特に下に暗黄褐色土をまだらに含む。
3. 暗黄褐色土 ローム混じりの土。またロームを粒および塊状(直径1.0cmほど)に均一に少量含む。白色軽石粒(直径0.5~1.0cmほど)を少量含む。
4. 濃黄褐色土 ローム混じり。暗褐色土層に夾雑する。またローム粒(直径0.5cmほど)にも含む。
5. 暗黄褐色土・濃黄褐色土 ローム混じり。6層に比べやや黄色味があり。ロームを粒および塊状(直径1.5cmほど)に均一に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
6. 黄褐色土・濃黄褐色土 ローム主体。またロームを粒および塊状(直径0.5~2.5cmほど、ハードローム)に含む。
7. 6層に類似するが、やや原色味帯びる(暗黄褐色土)。
8. 暗黄褐色土・濃黄褐色土 ローム混じり。またロームを粒および塊状(直径1.0cmほど)に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
9. 暗褐色土 2層に類似するが、6層との前後関係があるため別番号とする。但しロームを粒状(直径1.0cmほど)に含む。
10. 暗黄褐色土 ローム粒。ローム塊(直径0.5~2.0cm)を多く含む。
11. 暗黄褐色土と暗褐色土とローム塊(直径1.0~3.0cm)の混生。
12. 黄褐色土
13. 黄褐色土 暗黄褐色土を少量含む。
14. 11に似るが、ややロームの入り方が多い。
15. 31号住居を切る溝状の礫山。やや砂質の暗褐色土と黄褐色土(ローム主体)の混生。またロームを粒および塊状(直径0.5cmほど)に多く含む。
16. 暗褐色土 灰少土質土質土主体。
17. 暗褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に均一に含む。
18. 暗黄褐色土 ローム混じり。
19. 暗褐色土 暗黄褐色土とローム塊(直径3.0cmほど、直径0.5~1.0cmほどの土質)均一に含む。下位はローム混じり。やや黄色味帯びる。
20. 黄褐色土・暗黄褐色土 ローム主体で暗褐色土混じる。床面土で硬く締まる。
21. 暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0cmほど)均一に含む。下位にロームが少量混生。
22. 黄褐色土 ローム主体で硬く締まる。暗褐色土が少量混生。
23. 22層に類似するが、22層より暗褐色土混じり。軽石粒(直径0.6~1.0cmほど)も少量混生。
24. 22層に類似。
25. 暗黄褐色土 上位ローム混じり黄色味があるが、中~下位へと原色味帯びてくる。
26. 暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量。ローム少量混生。また土粒(直径0.5cmほど)特に北平分に含む。中ほどは粒が混じり、黒色味帯びる。
27. 29層に類似するが、土粒数は少量認められるのみ。28層の別番号。
28. 暗黄褐色土 ローム主体。
29. 暗黄褐色土 ロームを粒および塊(直径2.0cmほど)に。また土粒(直径0.5cmほど)も均一にやや多く含む。
30. 28層に類似。但し土は認められない。28層のように黒色味帯びている部分なし。
31. 暗褐色土・暗褐色土の間の土。ロームを粒および塊状(直径1.0cmほど、直径0.5~1.0cmほどのもの土質)に均一に含む。
32. 黄褐色土 ローム主体。ロームを塊状(直径0.5~1.0cmほど)に均一に多く含む。暗褐色土が混じり。やや黄色味帯びる所もあり。
33. 黄褐色土 部分的に黒色土混じり。ロームを粒状(直径1.0cmほど)に均一に含む。
34. 暗褐色土 ローム主体。32層に類似するが、暗褐色土の混じりがほとんど認められず、明るい色調。南端で32層はローム塊がはっきり認められるが、34層は似た色調の高。認めにくい。
35. 32層に類似するが、暗褐色土の混じりが多く、黄褐色土・暗黄褐色土が主体でローム塊を含んでいる。
36. 黄褐色土 ローム主体の塊。
37. 暗黄褐色土 ローム混じりの土。ロームを粒状(直径1.0cmほど)に均一にやや多く含む。
38. 37層に類似するが、やや黄色味あり。ローム粒の含み方などは37層と同じ。
39. 暗黄褐色土 37層に類似。やや暗色(黒色味あり)。
40. 暗褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に含む。
41. 37層に類似。37~39、41層は全て類似した土だが、若干の色調の明暗と地山の立ち上がり方、ローム粒の含み方などからラインを断断。
42. 暗黄褐色土 ローム混じりの土。ロームを粒および塊状(直径0.5cmほど)に均一にやや多く含む。37~39、41層などに比べ、地が黄色味帯びる。
43. 黄褐色土 ローム主体。ロームを塊状(直径0.5cmほど)に均一に含む。
44. 暗黄褐色土 37層に類似する。ローム粒は直径1.0cmほど。
45. 暗黄褐色土 ローム混じり。また土粒および塊状(直径1.0cmほど)に均一にやや多く含む。全体的に4層より黄色味あり、硬く締まる。
46. 暗黄褐色土(上位)・黄褐色土 ローム混じり。上位は暗褐色土とロームの混生で、漸層的にローム主体となる。またロームは粒状(直径1.0cmほど)に均一に含む。



化していた。その外側の壁沿いはやや凹み、床面の硬化はみられなかった。掘り方の凹みを反映したものと推定される。

**掘り方** 主柱穴を結んだ線より外側の壁沿いがやや深く掘り込まれていた。中央部は厚さ5～10cm、周縁部は厚さ20～35cmの黄褐色土やローム塊を含む暗褐色土で充填されていた。

掘り方で検出された施設は、前述したピットと1基の床下土坑、4条の小溝である。

床下土坑は長軸1.03m、短軸1.0m、深さ0.72mの隅丸正方形で、P4の南側で検出された。底面は長径0.73m、短径0.64mの楕円形で、断面形は箱形、底面は平坦であった。この部分は床面の段階でも凹んでおり、厚さ10cmほどの暗褐色土が堆積していた(第162図F-F'21層)が、その下位の埋没土層には硬く締まる22・23層が形成されていた。したがって土坑埋没後に床を貼ったことになり、床下の土坑と判断した。本床下土坑からは土師器杯(第163図20)、高坏(26)が土坑底面上30および32cmで出土した。また坏(14)が南西縁掘り方底面上4cmで出土した。

4条の小溝は北壁から南に2条、東壁から西に2条である。北壁の2条のうち西側は幅0.23m、長さ1.24m、深さ0.16m、東側は幅0.25m、長さ1.37m、深さ0.15mで両者の間隔は0.2mである。ともに東壁に平行するが、P1よりやや東寄りである。東壁の2条は北側が幅0.22m、長さ1.01m、深さ0.8m、南側が幅0.22m、長さ0.9m、深さ0.12mで、走向はそれぞれP1、P8の中心からは南にずれている。

**遺物と出土状況** 遺物は壺および貯蔵穴周辺にまわって出土しているほか、北部の主柱穴P1・P5・P2周辺から出土した。

土師器杯(第163図15)、壺(29)はP5西側の床面上4cm、7cmで出土した。壺(第164図40)はP5の北側に接する位置の床面直上で出土した。土師器杯(第163図23)はP2北西部床面上6cm、壺(第165図48)はP2南西部床面上2cmで出土した。壺(第164図41)はP2西部床面直上の破片群と壺前床面直上

の破片が接合している。鉢(第163図31・32)は中央部床面直上で出土した。土師器杯(第163図6・11)はP1南東部床面上4cmで出土した。壺(第164図39)は貯蔵穴東側の壁沿いの床面直上で出土した。

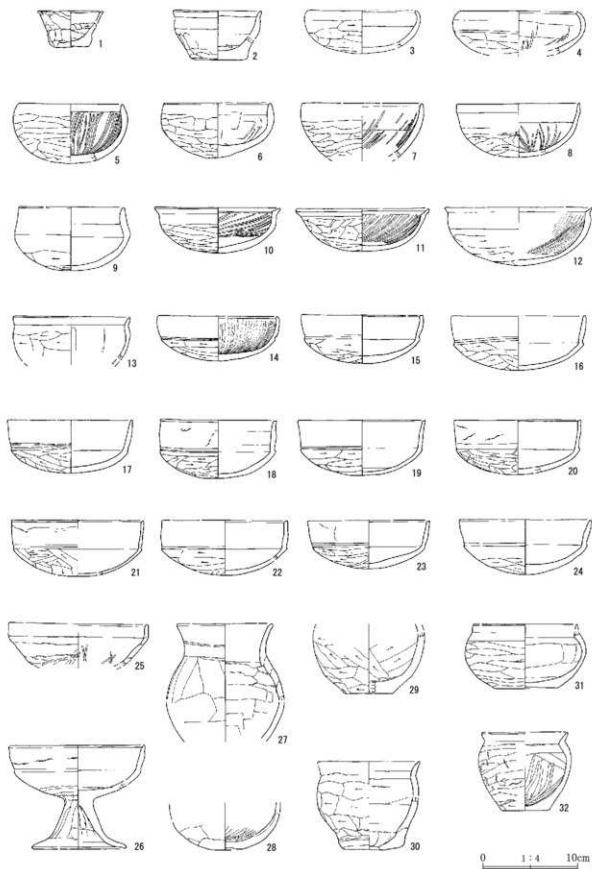
擦石(第165図51)、砥石(52)、剣形石製模造品(53)、鏡形土製品(54)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器1816点、須恵器1点、剥片11点、削器1点(第279図60)、礫片4点、棒状礫5点、大型竈構材5点が出土した。

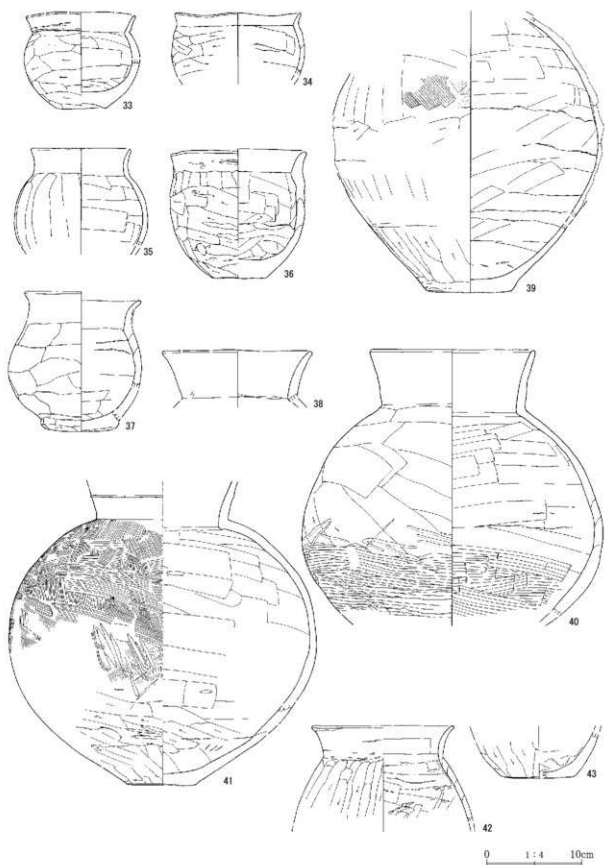
**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

本住居では、主柱穴が対角線上で心芯間で0.3mほど外側に掘り直されていることが判明した。柱の立て替えを伴う改築が行われたことが推定される。また、本住居では古墳時代の堅穴住居に一般的な4本柱穴に加えてP5～P8を掘り方で検出した。これらのピットが柱穴とすれば、柱間の中央に1本ずつ柱がある8本柱穴の住居の可能性がある。31号住居は本遺跡最大の堅穴住居であり、4本柱穴では構造的に問題があり、改築時に柱を増やした可能性はある。P5～P8については床面での検出については不明確で、掘削時期の特定に課題を残すところとなった。

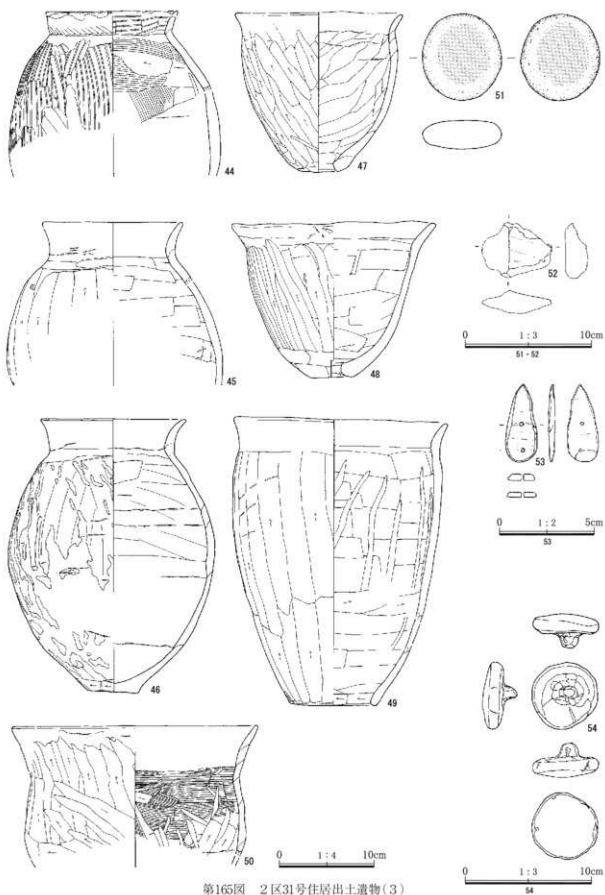
床下土坑は、住居が改築されていること、土坑から土器が出土していることなどから、改築前の貯蔵穴であった可能性もある。しかし、改築に伴う柱の移動は対角線上で行われていることから、改築前の住居も正方形であったと推定される。とすればこの床下土坑は古墳時代住居に一般的な位置にないことになり、改築以前の貯蔵穴と考えることは検討を要するだろう。床面上で出土している土器と床下土坑から出土している土器にほとんど時間差がないことから、改築は同一土器型式の時間幅の中で行われたと考えられる。



第163図 2区31号住居出土遺物(1)



第164図 2区31号住居出土遺物(2)



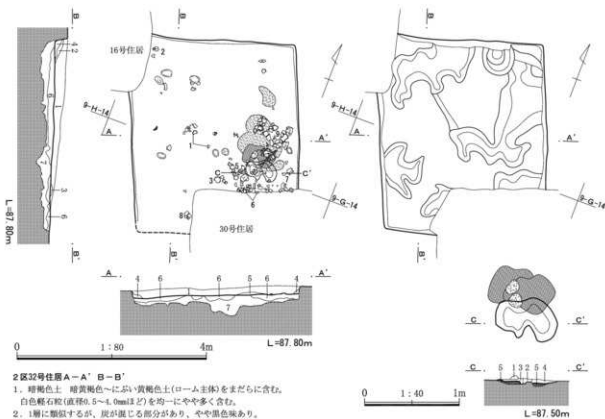
第165図 2区31号住居出土遺物(3)

## 2区32号住居

(第166・167図 PL89・178 遺物観察表P.579・580)

**位置** 2区2-9-G-13・14G、9-H-14G**形状** 長方形と推定。16号・30号住居に切られる。**重複** 16号・30号住居より古い。**規模** 長軸4.17m 短軸3.55m 壁高0.29m**面積** (14.50)㎡ **長軸方位** N-24°-W**埋没土** 上層は白色軽石粒・ローム粒を含む暗褐色土で、下層は黄褐色土で埋まっていた。**竈** 竈は検出されなかった。**炉** 住居の南東部に炉が検出された。炉の凹みは長径0.65m、短径0.37m、深さ0.11mの不定形で、焼土の厚さは7cmほどである。焼土上には被熱・硬化した灰黄褐色粘土塊が残されていた。炉の北側には

灰が床面に広がっていた。

**柱穴** 調査範囲内で主柱穴は検出できなかった。**周溝** 周溝は検出されなかった。**床面** 床面は平坦である。中央部は硬化していた。**掘り方** 不定形に掘り込まれていた。底面の凹凸が著しく、特に北部から中央部にかけてと南壁沿いが深く掘られていた。全体としては厚さ20~40cmの暗黄褐色土塊を含むにぶい黄褐色土で充填されていた。**遺物と出土状況** 炉の周辺および北東部に集中して遺物が出土した。土器器坏(第167図2)は北西隅床面上12cmで出土した。坏(1・3)は中央部床面直上で出土した。小型甕(5)、壺(6)は炉の南西隅床面直上で出土した。甕(7)は炉の東隅床面上4cm、甕(9)は炉の北東側に広がって床面直上で出土した。

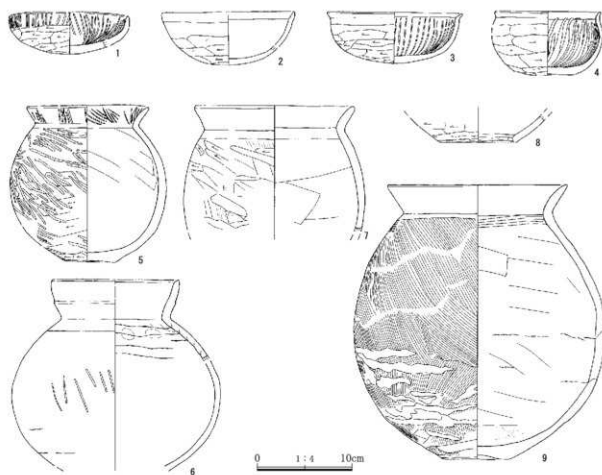
2区32号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 暗黄褐色にぶい黄褐色土(ローム主体)をまだらに含む。白色軽石粒(直径0.5~4.0mmほど)を均一にやや多く含む。
2. 1層に類似するが、灰が混じる部分があり、やや黒色味あり。
3. 黄褐色土 ローム主体。床面の土に類似するが、締まりやや弱い。
4. 暗黄褐色土 ロームが混じる。
5. 赤褐色土~暗黄褐色土 灰主体層。ローム混じり。ロームの混じり多い部分は暗黄褐色土。またロームは粒および塊状(直径4.0cmほど)にも含む。
6. にぶい黄褐色土 ローム主体。明ロームまだらに含む。やや硬く締まる。
7. 記載なし

2区32号住居炉C-C'

1. 灰黄褐色土 被熱している。
2. 暗黄褐色土 ローム混じり。やや締まり強い。
3. 暗褐色土 炭混じり。やや黒色味あり。東側下位と西側は焼土混じり。赤褐色味あり。
4. 赤褐色土~黒色土 灰主体層。中ほどは焼土混じり赤褐色味あり。
5. 赤褐色土 焼土層。粒子均一で硬く締まる。

第166図 2区32号住居



第167図 2区32号住居出土遺物

瓶(第167図8)は南西部床面直上で出土した。北西部で礫が5個床面直上で出土しているが、使用痕跡はなかった。ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器337点、スサ入り焼土塊8点、剥片1点、礫6点が出土した。粘土塊は小片のため図化することができなかった。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。

炉敷設住居であり、出土遺物からも本調査区内で最も古い住居群の1軒である。

#### 2区33号住居

(第168・169図 PL90・179 遺物観察表P.580)

**位置** 2a区2-9-G-12・13G、  
2-9-H・I-11~13G

**形状** ほほ正方形と推定される。やや東西方向が長い。18号住居に切れられ、全形は記録できなかった。25号住居にも切られるが、本住居の方が深かったので北壁を記録することができた。竈付近は47号土坑に切られて判然としなかった。

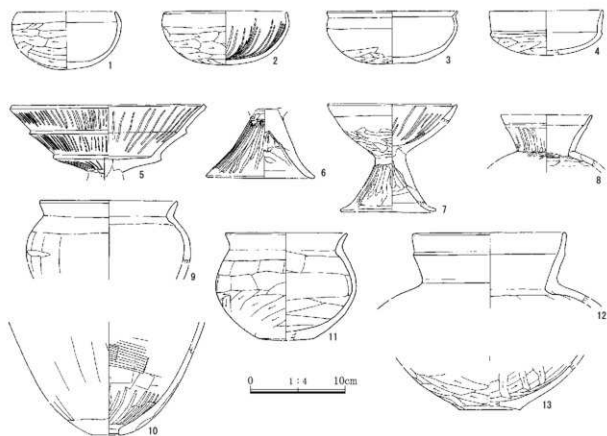
**重複** 18号・25号住居・47号土坑より古い。48号土坑とも重複するが、新旧関係は確認できていない。

**規模** 長軸6.78m 短軸6.15m 壁高0.48m

**面積** (42.17)㎡ **長軸方位** N-73°-E

**埋没土** 上層は炭化物粒・軽石粒・褐色シルト塊・焼土粒を含む褐色土で、白色軽石粒・ローム塊・厩黑色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁中央やや南よりに竈が構築されていた。後出する47号土坑に切られているために、遺存状態は極めて悪く、袖の先端部と燃焼部手前半分が残っ



第168図 2区33号住居出土遺物

ているのみである。確認長は推定1.21m、燃焼部幅推定0.40m。袖の残存長は向かって右側が推定1.13m、左側が推定1.16mである。燃焼部には支脚の礎が立てられていた。竈内の出土遺物は小片で図化できなかった。

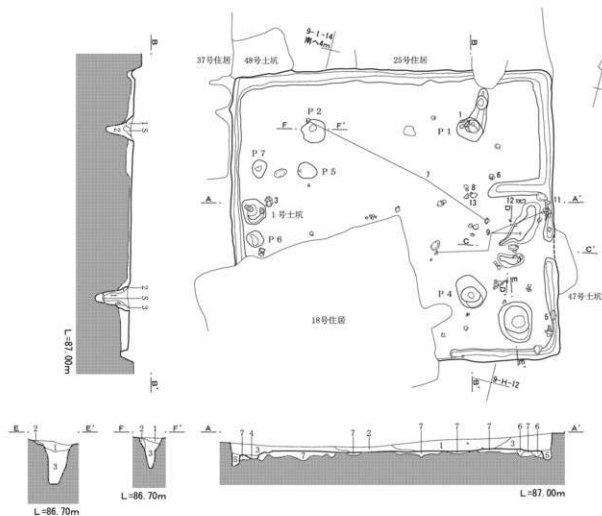
**柱穴** 主柱穴P1・P2・P4を床面で、P3を掘り方で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が114×55×59cm、P2が50×49×64cm、P3が48×38×37cm(掘り方面からの計測値)、P4が70×54×73cmである。P8は掘り方で検出したが、P3・P4の柱筋にのるビットで柱穴と考えられる。またP5・P6・P7が西壁際に検出された。それぞれの規模はP5が41×33×24cm、P6が37×32×27cm、P7が38×30×17cmである。P5～P7の機能は特定できなかった。また、P6とP7の間の西壁沿いに長径0.54m、短径0.5m、深さ0.22mの土坑が検出された。

**周溝** 周溝は18号住居と重複する西南部および47号土坑と重複する竈部以外では全周して検出された。幅は概ね21cm、深さは16cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.85m、短径0.7m、深さ0.9mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.27m、短径0.24mの円形である。貯蔵穴内の南側、床面から15cmほど下がった位置にテラスがある。出土遺物は検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。主柱穴を結んだ線の内側がやや高くなっており、硬化していた。周縁部はやや凹んでいたが、これは掘り方の底面形状を反映していると思われる。

床面で検出された施設は前述した西壁沿いの土坑のほか、小溝2条がある。北壁からP1を結ぶ線上に検出された小溝は、幅0.22m、長さ0.7m、深さ0.05mで、深さ0.2mの小ビットが検出された。P1とはつながっているが、走向は壁と平行していなか



2区33号住居 A-A'

1. 褐色土 明黄褐色土を粒状(直径2.0cmほど、ローム粒)に均一に少量含む。黒色土(炭主体土)を塊状に少量含む。褐色シルト塊(長径2.0cmほど)と粘土粒(直径5.0cmほど)ごく少量含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)均一に含む。
2. 黒褐色土 黒色土塊状を含む。明ローム塊状に少量含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)均一に含む。
3. 暗褐色土 黒色～黒褐色土を塊状に均一に含む。明ローム粒状(直径1.5cmほど)均一に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)含む。
4. 褐色土 明ローム粒状(直径1.0cmほど)また塊状に多く含む。(1号土坑の埋没土)。
5. 褐色土 4層に類似するが、明黄褐色土の含み方が4層より少ない。
6. 暗褐色土 黄褐色土(ローム主体)少量～中量混じる。
7. 明黄褐色土 ローム主体、特に上位に褐色土混じる。

2区33号住居 P1 B-B' 左

1. 褐色土(炭主体土) 中ほど焼土粒および塊(直径1.0～4.0cmほど)含む。また上、下位に暗褐色土混じる。
2. 暗褐色土(1層の暗褐色土に類似) 明黄褐色土(ローム主体)を粒状(直径1.0cmほど)に含む。細まりやや弱い。

2区33号住居 P4 B-B' 右

1. 暗褐色土 明黄褐色土(ローム主体)を粒状(直径5.0cmほど)に均一に少～中量含む。細まりやや弱い。P1の2層に類似。
2. 黄褐色土 ローム主体。黒褐色土を塊状に含む。
3. 1層に類似するが、明黄褐色土粒(直径5.0cmほど)は均一にやや多く含む。
4. 黒褐色土 明黄褐色土を粒および塊状(直径1.5cmほど、また長径4.0cmほど)を特に上位に含む。

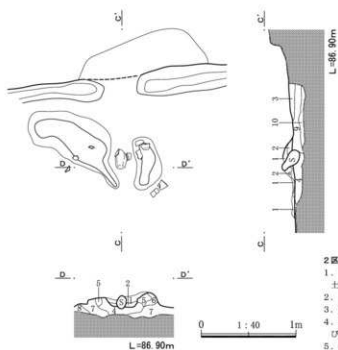
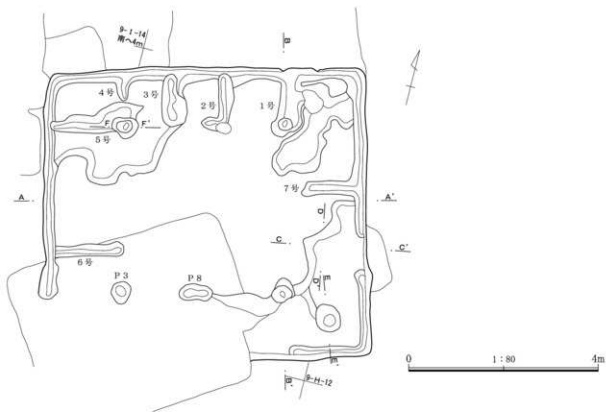
2区33号住居貯蔵穴 E-E'

1. 暗褐色土 褐色土(ローム主体)を塊状に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
2. 褐色土 ローム主体。焼土粒(直径5.0cmほど)ごく少量含む。
3. 暗褐色土 1層より黒色味帯びる。明ロームを粒状(直径5.0cmほど)に均一に含む。上位に焼土粒(直径5.0cmほど)少量含む。

2区33号住居 P2 F-F'

1. 暗褐色土 黄褐色土(ローム主体)を粒状(直径1.0cmほど)に含む。黒色土(炭主体)を粒状(直径5.0cmほど)に少量含む。
2. 濃黄褐色土 黄褐色土粒(直径1.0cmほど)。ハドローム均一に多く含む。
3. 暗黄褐色土 特に上位にローム混じる。細まりやや弱い。





## 2区33号住居 C-C' D-D''

1. 暗黄褐色土 ロームを粒および塊状(直径0.2~2.0cmほど)に含む。焼土粒状(直径4.0cmほど)に含む。
2. 赤褐色土 焼土主体層。B-B'の東側は暗黄褐色土やや多く含む。
3. にふい黄褐色土 ローム混じり。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
4. 明褐色~にふい黄褐色土 上位は焼土混じりで全体的に赤褐色土味帯びる(明褐色土)。下位は漸移的にローム主体となる。
5. 赤褐色土塊 焼土主体。
6. 褐色土 ローム混じり。下位に焼土混じる。
7. 暗褐色~褐色土 下位はローム主体(褐色土)。上位にも褐色土を塊状(直径1.0cmほど)に含む。焼土粒(直径1.0cmほど)中ほどに少量含む。灰白色シルト層(長径3.0cmほど)ごく少量。
8. 黄褐色土 ローム主体。上位に暗褐色土が少量混じり。地山ロームより顕著に弱い。
9. 10. 記載なし

2区33号住居

った。

東壁の小溝は、北壁から2.5mのところへ検出されたが、対応するピット等はない。幅0.29m、長さ1.36m、深さ0.2mで北壁に平行していた。

**掘り方** 掘り方は不定形ではあるが四隅を深く掘る傾向が見られた。中央部は比較的平坦面が残されていた。全体として厚さ5～18cmのローム塊を含む暗褐色土で充填されていた。

また、掘り方面で北壁沿いに新たに3条、西壁沿いに2条の小溝が検出された。北壁付近の掘り方面の調査は25号住居と同時にに行ったため、厳密に掘り方の重複を確認できていないが、3条の小溝は本住居のP1とP2を結んだ線ではほぼ止まることが共通していることから、本住居に伴う溝と判断した。新たに検出された3条は、東壁から3m、4.1m、5.1mのところへ掘られていた。床面で検出されたP1につながる溝を加えて北壁沿いには4条の小溝が並ぶことになる。東から1号・2号・3号・4号とすると、3号は2号と4号の中央にあり、4号は北壁とP2を壁に平行に結び位置にある。これらの溝の規模は、2号小溝が幅0.31m、長さ1.22m、深さ0.17m、3号小溝が幅0.3m、長さ1.10m、深さ0.12m、4号小溝は0.26m、長さ0.40m、深さ0.1mである。4号小溝は短い、後述する西壁からP2方向に掘られている小溝を避けていると推定される。

西壁沿いには2条の小溝が検出された。北側の溝は西壁とP2の間、南側は北壁から3.8mのところであった。北側の5号小溝は幅0.4m、1.92m、深さ0.13mで、東端はP2の北側にやや膨らむ。6号小溝は幅0.26m長さ1.44m、深さ0.1mである。

**遺物と出土状況** 主柱穴P2から竈、貯蔵穴周辺に遺物が集中して出土した。土師器杯(第168図3)は西壁中央際床面上3cmで、坏(1)はP1西縁床面上3cmの破片と掘り方埋没土中で出土した破片が接合した。本住居では高坏の出土が目立つが、高坏(5)は南東隅東壁周溝底面上14cmで出土した。高坏(6)は7号小溝の北縁床面上5cmで出土した。高坏(7)は主柱穴P2北西隅床面上5cmで出土した破片と竈

左前床面上4cmの遺物が接合している。増口縁部(8)と壺底部(13)はそれぞれ7号小溝西縁床面上直上と床面上14cmで隣接して出土した。壺(12)は7号小溝南縁床面上直上で出土した。鉢(9)は竈左脇際床面上3cmと、竈左脇床面上直上、中央部床面上直上の破片が接合した。図示した他の遺物は埋没土中の出土である。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、弥生土器1点、土師器583点、須恵器1点、剥片11点、棒状礫1点、敲打痕のある礫片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

本住居の床面・掘り方面で7条の小溝が検出された。これらはこれまで間仕切り溝と呼ばれてきたが、北壁の4条の小溝の間隔は0.7～1.0mで、何らかの生活空間を仕切るには細かいと思われる。これらの溝は間仕切りではなく、主柱穴P1・P2を結ぶ線より北側の奥行き1.2mほどの空間の床下構造と考えるべきであろう。低床があったとすれば、その根太材を据えた溝の可能性が高いと考えられる。

## 2区34号住居

(第170・171図 PL91・92・179 遺物観察表P.580・612)

**位置** 2a区2-9-E・F-13・14G

**形状** 方形と推定されるが東部が29号住居に切られており、全形を把握することができなかった。

**重複** 13号・29号住居より古く、44号住居より新しい。

**規模** 長軸4.41m 短軸3.67m以上 壁高0.28m

**面積** 計測不能 長軸方位 N-17°-W

**埋没土** 暗褐色土とローム塊を含む黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居南西隅に竈が構築されていた。確認長(0.88)m以上、燃焼部幅(0.3)m。袖の残存長は向かって右側が0.87m、左側が0.87mである。竈右袖構成土中から土師器甕(第171図4)が出土した。

**炉** 住居の中央に床面が焼土化した部分が不定形に確認された。竈が敷設された住居であるが、炉も併

併設されていたと判断した。炉の凹みは長径1.16m、短径0.48m、深さ0.19mの不定形で、焼土の厚さは6cmほどである。北側と南側には灰が厚さ4cmほど堆積した部分があった。焼土部分から土師器破片が出土しているが、いずれも小破片であった。

**柱穴** 床面では柱穴は確認できなかった。柱穴かどうかは不明であるが、南壁沿いの貯蔵穴の北側でP6を検出した。P6の規模(長径×短径×深さ)は、21×18×28cmである。

**周溝** 周溝は29号住居が重複している東部以外は全周する。幅は概ね32cm、深さは13cmである。

**貯蔵穴** 南壁際に長径0.94m、短径0.73m、深さ0.73mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.25m、短径0.22mの楕円形である。埋没土上層の一部に焼土が見られた。

**床面** 床面は平坦で、中央部は硬化していた。北壁には、西壁から3.46mのところ幅0.25m、長さ0.56m、深さ0.09mの西壁に平行する小溝が検出された。この溝の先端の位置には掘り方面でP4が検出されている。

**掘り方** 本住居の掘り方面の高さは先行する44号住居とはほぼ同一であり、両住居の掘り方調査は同時に行わざるを得なかった。したがって本住居の掘り方が44号住居の掘り方は明確にできなかった。

掘り方面では、明らかに29号住居のピットと判断できるものを除き、5基のピットを検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が62×49×58cm、P2が38×35×31cm、P3が44×27×30cm、P4が27×20×19cm、P5が28×23×38cmである。P1はその位置から34号住居の南東隅の主柱穴の可能性があるが、断定できなかった。P5は炉の北半にあった灰面の下層に検出された。炉の下部構造と見られる。P2～P4は後述するように44号住居の施設である可能性が高い。

**遺物と出土状況** 甕周辺から遺物がまとまって出土した。南西隅南壁沿いの周溝脇床面上6cmで土師器環(第171図1)が出土した。土師器環(2)は貯蔵穴埋没土中から出土した。高坏(3)、甕(5)は埋没土

中から出土した。叢石2点(7・8)は埋没土中から出土し、大型の砥石(6)は住居東部床面上5cmで出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器420点、剥片9点、棒状礫1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。須恵器模倣坏出現以前の住居である。炉と竈両者が施設されているのは過渡期の様相と考えられる。

#### 2区44号住居

(第170・171図 P191・92・179 遺物観察表P.581)

**位置** 2a区2-9-E・F-13・14G

**形状** やや台形にゆがんだ正方形と推定される。29号・34号住居に切られて、全形を把握することができなかった。

**重複** 13号・29号・34号住居より古い。30号住居より新しい。

**規模** 長軸6.44m 短軸6.29m 壁高0.43m

**面積** (40.07)㎡ **長軸方位** N-70°-E

**埋没土** ローム粒や黒褐色土塊を含む暗褐色土。

**竈** 調査できた範囲の中では竈は検出されなかった。

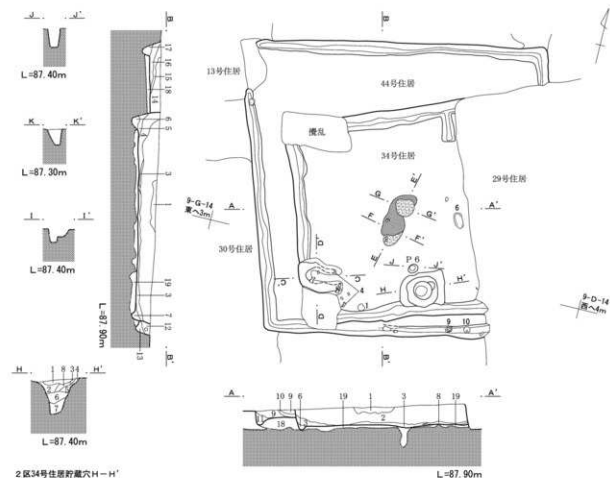
**柱穴** 床面の調査できた範囲の中では主柱穴は検出されなかった。

**周溝** 周溝は29号住居と重複する東部を除いて全周する。幅は概ね23cm、深さは16cmである。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 本住居の掘り方面は後出する34号住居とはほぼ同一であり、両住居の掘り方面調査は同時に行わざるを得なかった。掘り方面で検出されたのは5基のピットと北壁の2条の小溝である。5基のピットのうちP1とP5は前述したように34号溝の柱穴および炉の下部構造である可能性が高い。P2は44号住居の対角線にのる唯一のピットで、北東隅の主柱穴である可能性が高い。P3は34号溝北壁際の柱穴とも考えられるが、北壁からの小溝の先端にあたり、P2と結ぶ線が北壁と平行することから、44号住居

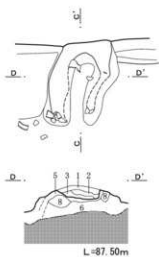
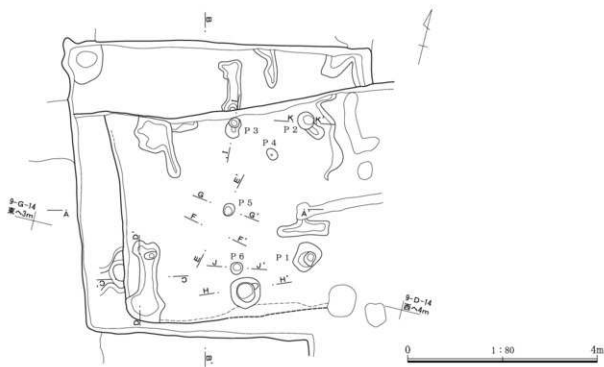


2区34号住居貯蔵穴H-H'

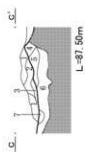
1. 褐色土 ローム粒、ローム塊多く含む。
2. 褐色土 ローム粒、ローム塊を含む。ローム、ローム塊を含まない褐色土塊を含む。
3. 焼土
4. 黒褐色土 炭、ローム、暗褐色土の混合層。
5. 黄褐色土 ローム塊、褐色土塊を含む。
6. 褐色土 ローム粒、ローム小塊、炭化物を含む。
7. 黄褐色土 5層と同じ。
8. 褐色土 ローム粒を含み、やや明るい。

2区34・44号住居A-A' B-B'

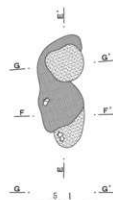
1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 黄褐色土 暗褐色土とロームが全体に混合したもの。ローム塊直径1.0cm内外を多く含む。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊をわずかに含む。
4. 黄褐色土 暗褐色土とロームが全体的に混合したもの。
5. 黄褐色土 ローム塊、黒褐色土塊を含む。
6. 黄褐色土 黒褐色土、ローム塊が不均等に混合したもの。
7. 2層と同じ。
8. 黒褐色土 黄褐色土を塊状に含む。
9. 黄褐色土 ローム小塊を含む。
10. 黒褐色土 黄褐色土を含む。
11. 黄褐色土 9層よりもローム塊少ない。
12. 暗褐色土 ローム粒を均一に含み明るい。
13. 黄褐色土 ローム小塊を含む。
14. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊、黒褐色土小塊を含む。
15. 暗褐色土 14層よりも暗く、黒褐色土塊(直径1.0cm内外)を多く含む。
16. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含み、14層より明るい。
17. 黄褐色土 下方に行くほどロームの量が多くなり、明るい。
18. 褐色土 ローム塊(直径1.0~5.0cm)を多く含む。
19. 黄褐色土 暗褐色土塊(直径1.0~3.0cm)を多く含む。



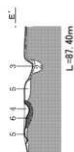
L=87.50m



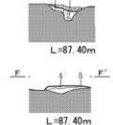
L=87.50m



L=87.40m



L=87.40m



L=87.40m

0 1:40 1m

## 2区34号住居層C-C' D-D'

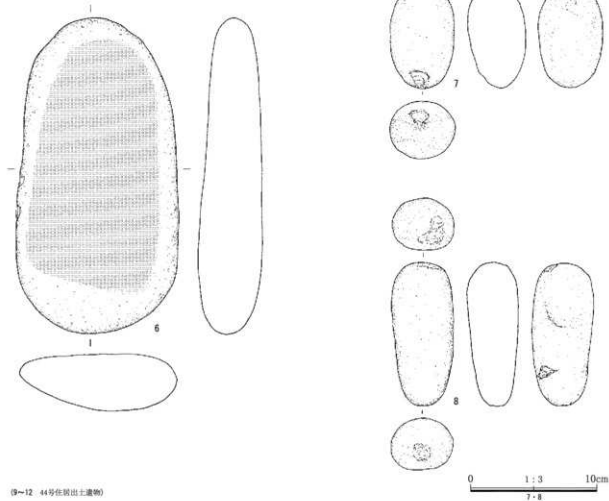
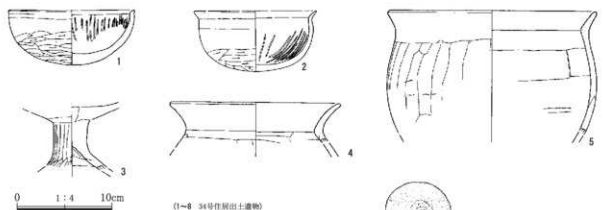
1. にぶい黄褐色～赤褐色土 ローム主体、焼土粒、白色軽石粒が少量混入。締まりあり。
2. 赤褐色土 焼土主体、ローム塊30%混入。
3. にぶい黄褐色土 ローム粒、炭化物粒、白色軽石粒、焼土粒が混入。  
(1層に比べ焼土の割合が低い)。
4. 暗褐色土 白色軽石粒、焼土塊、ローム粒を含む。
5. 黒褐色土 ローム粒を全体に含む。
6. 黄褐色土 塊の集合体、間に暗褐色土を含む。
7. 黄褐色土 褐色土、焼土を含む。軟らかい。
8. 褐色土 ローム小塊、黒褐色土小塊、焼土粒を含む。

2区34号・44号住居

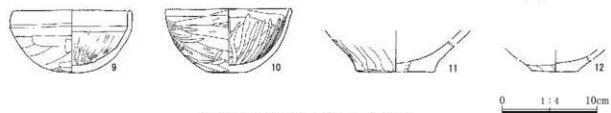
## 2区34号住居層E-E' F-F' G-G'

1. 青灰色土 灰主体、白色軽石粒、焼土粒、暗褐色土粒混入。サラサラしている。軟らかく締まりなし。細かい粒子。
2. 黒褐色土 ローム粒10%混入。灰を混入している。粒子細かく、サラサラ。軟らかく締まりなし。
3. にぶい黄褐色土 焼土、ローム粒、白色軽石粒が混入。ローム主体。
4. 黒褐色土 焼土塊、白色軽石粒を含む。炭、炭化物をやや多く含む。
5. 暗褐色土 白色軽石粒混入土に、ローム中塊30%含む。
6. 赤褐色土 ロームが壊れている。焼土。

第5章 2区の遺構と遺物



(9~12 44号住居出土遺物)



第171図 2区34号・44号住居出土遺物

に伴う柱穴と判断した。P4は他のピットと比べ浅いことから柱穴の可能性は低い。

**遺物と出土状況** 中央部の大部分を34号住居に切られているため、出土遺物の量は少ない。確実に44号住居の出土遺物と断定できるのは、南壁際周溝内から出土した数個体に限られる。土師器坏(第171図9)は南周溝内底面上20cm、坏(10)も南周溝内底面上21cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器46点、剥片3点、礫2点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。

2区35号住居(第172～176図 PL93・94・179～181 遺物観察表P.581・582・612・617)

**位置** 2a区2-9-H・I-10・11G

**形状** 正方形と推定される。1号井戸に南東部の壁の一部を切られている。

**重複** 42号住居より新しい。1号井戸と22号土坑、20号住居より古い。

**規模** 長軸6.55m 短軸6.39m 壁高0.55m

**面積** 41.31㎡ **長軸方位** N-3°-W

**埋没土** 上層は黄褐色土塊を含む黒褐色土で、下層は黄褐色土粒・ローム小塊・炭化物・焼土粒を含む褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居北壁はほぼ中央に竈が構築されていた。確認長1.55m、燃焼部幅0.46m。袖の残存長は向かって右側が0.86m、左側が1.0m。壁外に0.61m煙道が伸びる。左袖先端に袖石があった燃焼部から実測可能破片は出土しなかった。

**柱穴** 床面で主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×床面からの深さ)は、P1が73×49×75cm、P2が48×44×52cm、P3が58×46×66cm、P4が59×59×42cmである。またP5がP1の南側に検出された。規模は77×59×42cmである。どちらかが北西隅の主柱穴の掘り直しと考えられるが、P1とP5の新旧関係はとらえられなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 北東隅に長径0.86m、短径0.72m、深さ0.57mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.46m、短径0.23mの楕円形である。東縁床面直上で土師器壺(第175図23)がほとんど完形で出土した。

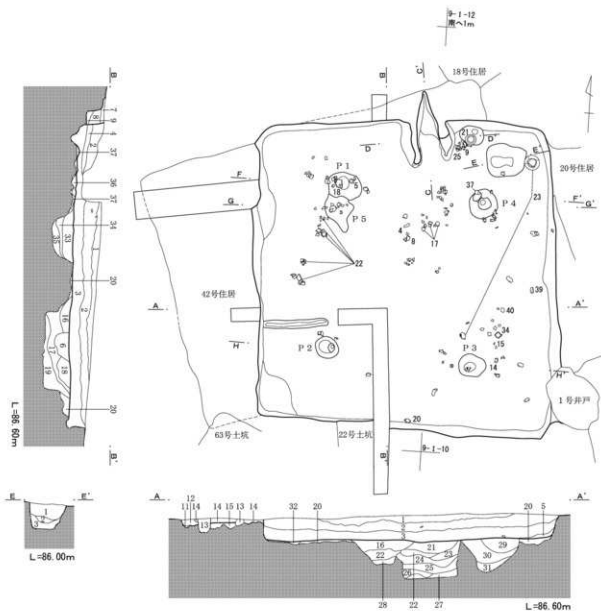
**床面** 床面はほぼ平坦である。床面では柱穴・貯蔵穴の他に、P2の北側に幅0.18m、長さ1.36m、深さ0.11mの小溝が検出された。溝の長さは、西壁とP2の中心の間の距離に一致している。

**掘り方** 掘り方でP6～P9を検出した。このうちP6～P8は、P3を除く主柱穴P1・P2・P4の南東方向に隣接して位置している。掘り方で検出したことを考慮すれば、P6～P8は元の主柱穴にあたり、P1・P2・P4は改築時に掘り直された主柱穴と考えられる。P6～P8の規模(長径×短径×掘り方面からの深さ)は、P6が38×32×21cm、P7が31×30×24cm、P8が43×39×25cmである。P9は直径25cm、深さ23cmの小ピットで機能は不明である。P10は先行する42号住居北東隅の主柱穴である可能性が高い。

また、掘り方面では4基の床下土坑が検出された。1号床下土坑は長軸1.98m、短軸1.76m、深さ0.75mの不整楕円形で竈前の床面下で検出された。断面形は楕形で、底面は平坦である。2号床下土坑は長軸1.98m、短軸1.60m、深さ0.76mの楕円形で、住居東部の床面下で検出された。断面形は台形で、底面は平坦である。3号床下土坑は長軸1.23m、短軸1.22m、深さ0.84mの隅丸正方形で住居中央やや南寄りの床下で検出された。断面形は箱形で、底面は平坦である。4号床下土坑は長軸2.13m、短軸1.77m、深さ0.46mの不整楕円形で、住居南部の床面下で検出された。断面形は箱形で、底面は平坦である。すべてが本住居に伴うかどうかは確定できないが、ここでは本住居に伴う土坑として報告した。

**遺物と出土状況** 竈および貯蔵穴周辺と主柱穴で囲まれた範囲に比較的遺物がまともに出て出土した。

土師器手づくね土器(第174図1)は埋没土中で、壺(18)はP1埋没土上層で、壺(22)はP5南西部床面直上に散在していた破片が接合した。壺(20)は南壁



2区35号住居A-A' B-B'

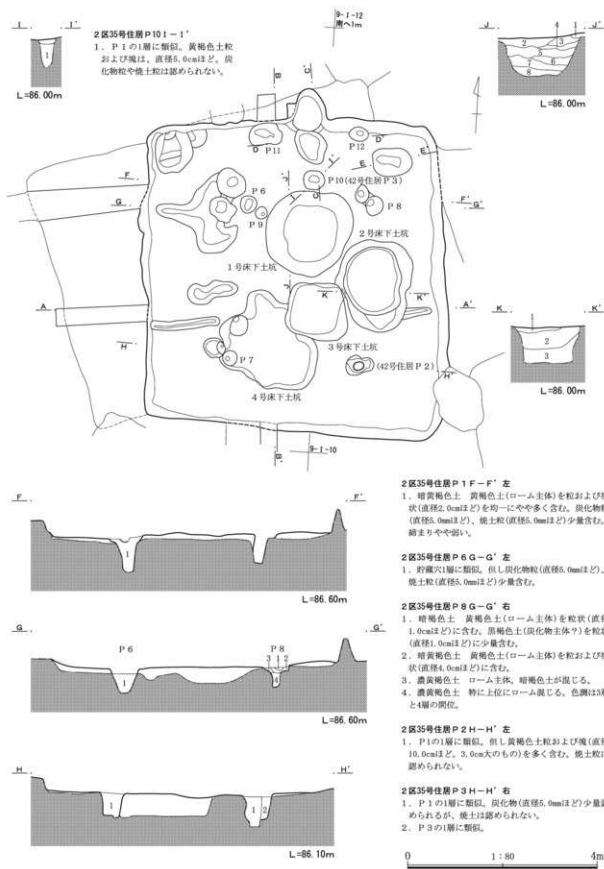
1. 黒褐色土 黄褐色土小塊、軽石粒を含む。
  2. 褐色土 黄褐色土塊を多く含む。
  3. 褐色土 黄褐色土塊、ローム塊、炭化物、榎土、ローム粒を若干含む。
  4. 黒褐色土 ローム粒、ローム小塊、榎土粒を含む。
  5. 暗褐色土 ローム塊、黒褐色土が不均等に混合したもの。
  6. オリーブ褐色土 直径0.5-3.0cmのローム塊、ローム粒を多く含む。炭化物を含む。
- 7-15. 2区42号住居埋没土
16. 褐色土 ローム塊(直径1.0cmほど)・炭を多く含む。
  17. ローム塊と褐色土塊の混合物、全体として黄褐色。
  18. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を含む。
  19. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を含む、18層とほぼ同じ。
  20. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土が混入。
  21. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
  22. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土をまだらに含む。
  23. 褐色土 ローム粒、ローム塊を含む。
  24. 暗褐色土 ローム塊、ローム粒を含む。
  25. 褐色土 ローム塊を多く含む。
  26. 暗褐色土 ローム塊を含む。

27. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を少量含む。26層より暗い。
28. 褐色土 大きなローム塊を含む。
29. 褐色土 暗褐色土塊を含む。
30. 褐色土 29層より明るい。
31. 褐色土 29-30層より暗い。
32. 褐色土 ロームと暗褐色土が全体に混合。軟らかい。
33. 黄褐色土 ローム主体、黒褐色土小塊、暗褐色土塊を含む。
34. 褐色土 ロームに黒褐色土が全体に混合したもの。
35. 褐色土 34層に類似するが黒色味帯びる。
36. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊(直径1.0cmほど)をまだらに含む。
37. 黄褐色土 ローム主体、地山ロームに比べ軟らかい(締まりやや弱い)。

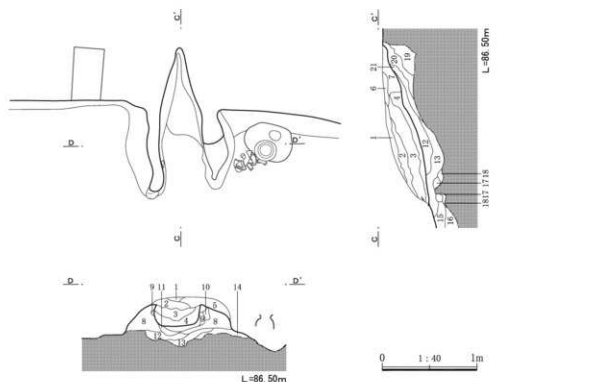
2区35号住居貯蔵穴E-E'

1. 黒褐色土 濃褐色土斑状を含む。黄褐色土(ローム主体)を粒状(直径5.0cmほど)に均一に少量含む。白色軽石粒(直径4.0cmほど)を少量含む。桶名山紋面の白色軽石粒を含む。
2. 暗褐色土 黒褐色土の間 1層と3層の漸移層。
3. 暗黄褐色土 ローム主体、締まりやや弱い。





2区35号住居



2区35号住居層C-C' D-D'

1. 暗灰褐色土 焼土、炭化物を少量含む。
2. 明褐色土 焼土小塊、ローム粒、暗褐色土小塊を含む。
3. 黄褐色土 焼土小塊、明灰褐色土塊を含む。炭化物を含む。
4. 黄褐色土 焼土塊、焼土粒を多く含む。
5. 明褐色土 焼土粒、炭化物を含む。2層よりも焼土の量少ない。
6. 黄褐色土 焼土小塊、焼土粒をやや多く含む。
7. 黄褐色土 黒褐色土、焼土小塊を含む。
8. 黄褐色土 ローム主体、硬く締まっている。ローム塊、褐色土塊を含む。
9. 焼土が主体、ロームを含む。
10. 褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。
11. 黄褐色粘質土塊、焼土、暗褐色土の混合。
12. 暗褐色土 ローム黒褐色土、焼土粒を含む。
13. 赤褐色土 焼土とロームの混合層。比較的織らがらみ。
14. 暗褐色土 ローム塊、焼土粒を含む。
15. 暗褐色土 ローム小塊、焼土塊を含む。
16. 黄褐色土 ローム主体、焼土が少量混入。
17. 褐色土 ローム塊、焼土塊を含む。
18. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土を少量含む、織らがらみ。
19. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。
20. 暗褐色土 1層よりもローム粒の量や多く、明るい。
21. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土を少量含む。比較的締まっている。

2区35号住居1号床下土塊J-J'

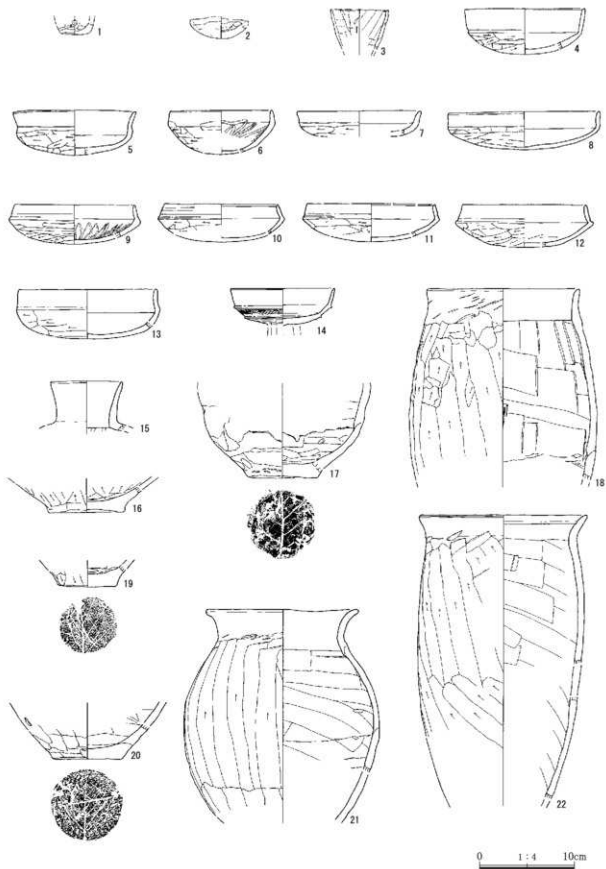
1. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径4.0cmほど)に均一に含む。白色粒子(直径0.5mmほど)を均一に含む。焼土を粒状(直径1.0cmほど)時に中〜下位に含む。
2. 褐色土とロームの混じり。またロームは粒状(直径1.0cmほど)にも含む。
3. 褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に含む。
4. ローム主体、褐色土混じり。
5. 暗黄褐色土 暗褐色土とロームの混じり。黒褐色土を粒および塊状(直径2.0cmほど)に含む。
6. ローム主体、褐色土混じり。4層に類似。
7. 4層に類似するが、褐色土は比較して多く含む。また黒褐色土を粒および塊状(直径0.5〜1.0cmほど)に少量含む。
8. ローム主体、褐色土混じり。4層に類似。

2区35号住居2号床下土塊K-K'

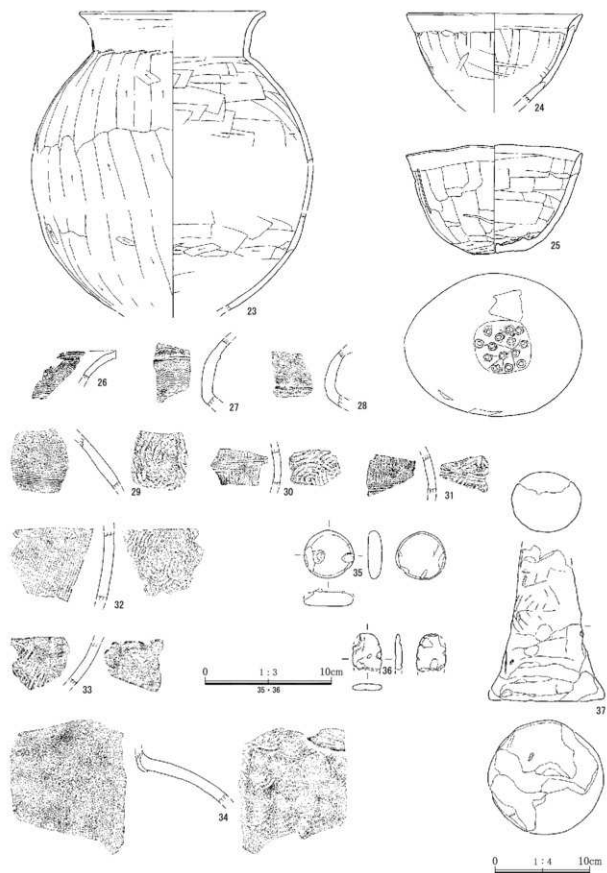
1. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径1.5cmほど)に均一にやや多く含む。また黒褐色土を粒状(直径0.5〜1.0cmほど)にごく少量含む。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土とロームの混じり。またロームは粒および塊状(直径2.0cmほど)に均一に含む。黒褐色土を粒状に(直径1.0cmほど)に少量含む。
3. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径5.0cmほど)に均一に多く含む。黒褐色土を粒状(直径1.0cmほど)にごく少量含む。

第173図 2区35号住居層

3. 古墳時代の遺構と遺物



第174図 2区35号住居出土遺物(1)



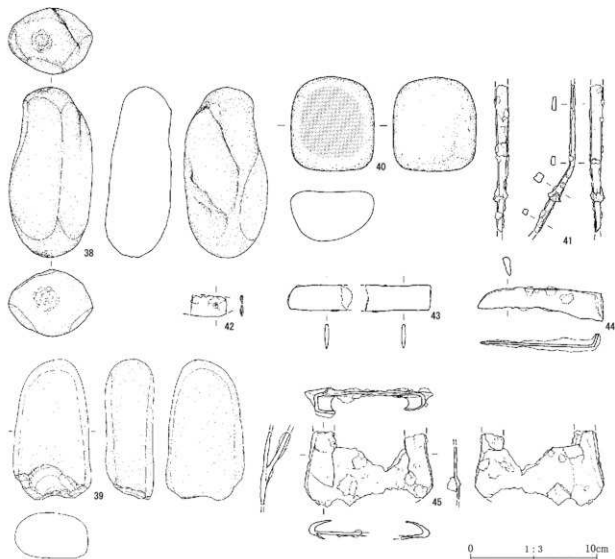
第175図 2区35号住居出土遺物(2)

中央壁際床面上28cmで出土した。須恵器高坏(14)、土師器埴(15)、須恵器横瓶(34)はP3北東脇でそれぞれ床面上20cm、18cm、18cmで出土した。礫器(第176図39)は東壁中央壁際床面上9cmで、搦石(40)は東部床面上3cmで出土した。土製支脚(第175図37)はP4北西縁床面上10cmで出土した。土師器甕(第174図21)、小型瓶(第175図25)は甕右脇床面上4cm、坏(第174図9)は甕(21)の内部から出土した。土師器坏(8)は中央部床面上2cm、甕(17)は中央部床面上6cmで出土した。須恵器は21点が出土したが、そのうちの10点を図化した。敲石(第176図38)は床下の4号土坑埋没土中から出土した。図化した他の遺物は埋没土中から出土した

鉄製品は5点を図示したが、確実に本住居の出土遺物といえるものは不明鉄製品(第176図42)で、P4東側床面直上で出土した。また、鉄鎌(44)も1号・2号床下土坑埋没土中から出土した。一方、刀子(43)は住居埋没土中から出土し、鉄鍬(41)および鉄製方形楯鐮先(44)は35号住居内の攪乱土中から出土した。これらは厳密に本住居出土とするには不明部分が残ることから、注意を要する。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器5点、土師器2203点、剥片21点、棒状礫4点、小礫1点、礫片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡6期の住居と考えられる。



第176図 2区35号住居出土遺物(3)

2区36号住居

(第177-179図 PL95・181 遺物観察表P.582・583・612)

**位置** 2区2-9-J・K-12~14G、  
2-9-L-12・13G

**形状** 正方形に近い長方形と推定される。38・43号住居、44・61・64・67・68・69号土坑に切られる。

**重複** 43号住居、44・61・64・67・68・69号土坑より古い。38号住居より新しい。

**規模** 長軸7.35m 短軸6.96m 壁高0.40m

**面積** 52.15㎡ **長軸方位** N-19°-W

**埋没土** 上層は白色軽石・暗褐色土塊を含む黒褐色土、下層は白色軽石・ローム粒塊を含む濃黄褐色土。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長(1.20)m、燃焼部幅(0.64)m。袖の残存長は向かって右側が0.96mである。竈は遺存状態が極めて悪く、特に左半分は焼土粒・焼土塊を含む黄褐色土が堆積しているのみ。燃焼部壁も明確に残っていない。焚き口部と推定される位置に土師器坏(第178図4・5)がそれぞれ使用面上17cm、11cmで出土した。また甕(14)が竈左脇床面上6cmで出土した。

**柱穴** 床面で支柱穴P1を検出した。P1の規模(長径×短径×深さ)は52×47×32cmである。また、43号住居の掘り方で支柱穴P2・P3を検出した。P2・P3の規模(長径×短径×深さ)は、掘り方面の計測でP2が34×25×36cm、P3が34×30×22cmである。北西隅の支柱穴は後出する64号土坑と重複したために確認できなかった。深さからすれば土坑底面に検出できた可能性はある。

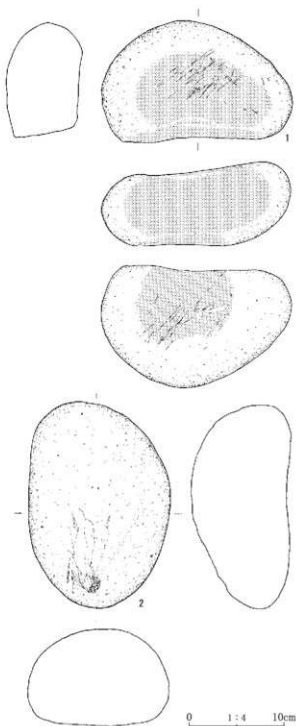
**周溝** 周溝は西壁北寄り的一部と南壁中央の一部で検出された。幅は概ね15cm、深さは4cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径1.24m、短径1.0m、深さ1.10mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.63m、短径0.55mの楕円形である。貯蔵穴からは遺物が集中して出土した。

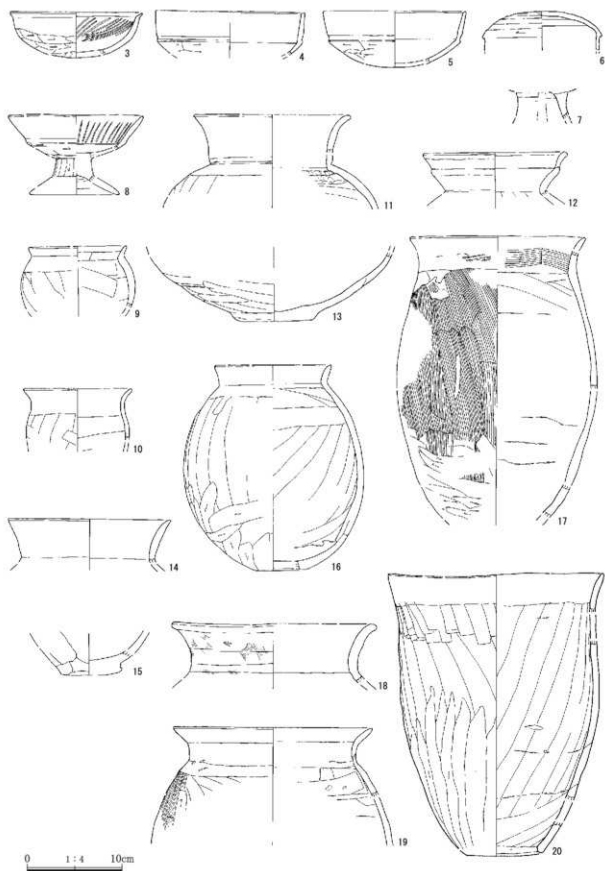
貯蔵穴埋没土層では人頭大の礫4点が出土した。そのうちの1点は線状痕が残る砥石(第177図2)である。他の3点には使用痕跡がなかった。礫の下層からは、甕(第178図17)が住居床面から20cmほど貯

蔵穴に落ち込んだ状態で出土した。さらに土師器坏(3)と甕(19)が貯蔵穴下半の底面上19cmで出土した。貯蔵穴東側壁際床面直上では土師器鉢(9)が、南西縁の床面直上では壺(11・18)が出土した。

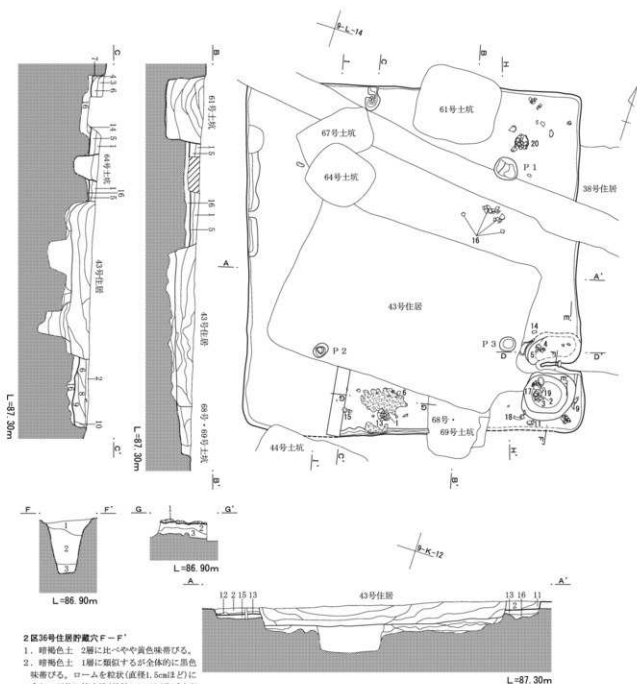
**床面** 床面は平坦である。全体に硬化していた。南壁際の、西壁から3mほどの位置に、長軸1.0m、短



第177図 2区36号住居出土遺物(1)



第178図 2区36号住居出土遺物(2)



2区36号住居貯蔵穴 F-F'

1. 暗褐色土 2層に比べやや黄色味帯びる。
2. 暗褐色土 1層に類似するが全体的に黒色味帯びる。ロームを粒状(直径1.5cmほど)に含む。下位に焼土塊(長径1.0cmほど)ごく少量-1点のみ。
3. 暗褐色土 灰混じりのあか?灰色味帯びる。1-2層に比べやや締まり弱い。

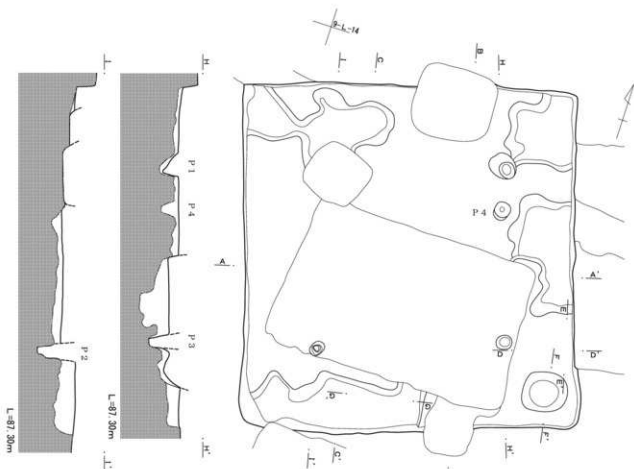
2区36号住居貯蔵穴 G-G'

1. 白灰色粘質土 部分的に暗褐色土が混じる。焼土粒を少量含む。硬く締まる。
2. 暗黄褐色土~暗褐色土 ロームを粒状(直径3.0cmほど)に含む。特に下位に暗褐色土が混じり、暗褐色土中には白色軽石粒を含む。
3. 暗黄褐色土 2層に類似するが黒褐色土含まない為、2層より黒色味ない。

2区36号住居 A-A' B-B' C-C'

1. 黒褐色土 暗褐色土をまだらに含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)を均一中~やや多く含む。
2. 暗黄褐色土 黒褐色土をまだらに含む。ロームを粒状(直径0.3~1.0cmほど)に均一に含む。白色軽石粒(直径1.0~2.0cmほど)を少量。炭化物粒をごく少量含む。
3. 濃黄褐色土 黒褐色土をまだらに含む。ロームを粒状(直径5.0cmほど)に均一に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
4. 濃黄褐色土 3層に類似するがロームをやや多く含む。黄色味あり。
5. 濃黄褐色土~暗黄褐色土 黒褐色土が混じり、黒色味を帯びる部分もあり(暗黄褐色土)。ロームを粒状および塊状(直径4.0cmほど)だが、直径1.0cmほどが主軸に少量含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)を少~中量(35層より少ない)含む。
6. 暗黄褐色土 暗褐色土とロームの混土。ロームは均一に混じる。
7. 暗黄褐色土 6層に類似するが、ロームを6層より多く含む。黄色味あり。

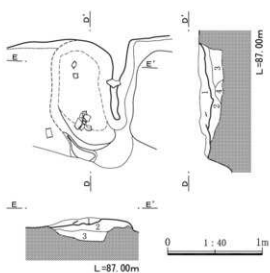




8. 暗褐色土 6層と異なり盛り方均一でない。上位は暗褐色土でロームを粒および塊状に含み。下位はローム主体。色調は漸移的に変化。
9. 黒褐色土 ロームを粒および塊状(直径0.5~8.0cmほど)に含む。白色軽石粒(直径1.0~5.0cmほど)少量含む。
10. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土が混じる。
11. 濃黄褐色土~黒褐色土 濃黄褐色土は上位で認められ、ロームを粒および塊状(直径5.0cmほど)に含む。中位以下は黒褐色土主体で、やはりロームを粒および塊状(直径2.0cmほど)に含む。濃黄褐色土~黒褐色土の色調の変化は漸移的。
12. 黒褐色土 焼瓦土。
13. 暗褐色土とロームの混じり。またロームは粒および塊状(直径2.0cmほど)に含む。黒褐色土をまだらに少量含む。黒褐色土中には白色軽石粒が認められる。結核の土。
14. 暗褐色土 ローム粒。ローム塊(直径1.0cmほど)を含む。
15. 濃黄褐色土 暗褐色土とロームの混土。暗褐色土が主体の所はロームまだらに混じり。焼土を粒状(直径0.5~1.0cmほど)に少量含む。ローム主体の所は硬く締まる。
16. 黄褐色土 ローム主体。ハードローム塊(直径1.0~2.0cmほど)含むが、色調ではあまり区別できない(押すと硬く締まっている)。上位に暗褐色土が少量混じる。

## 2区36号住居層D-D' E-E'

1. 淡黄褐色~黄褐色土 下位やや黒色味あり(黄褐色土)。焼土粒および塊状(直径0.1~1.5cmほど)に含む。灰黄褐色シルト粒および塊状(直径0.1~1.0cmほど)に含む。
2. 褐色土 ロームを粒状(直径1.5cmほど)に含む。
3. 暗褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に均一に含む。
4. ロームと暗褐色土の混土。黄褐色土主体(70%)。



軸0.5mの不定型な範囲で厚さ3~10cmの粘土塊が床面直上で出土した。粘土塊の周辺には土師器壺(第178図13)が床面直上で、砥石(第177図1)が粘土面直上で、須置器杯蓋(第178図6)が床面直上で出土した。また粘土塊の西側床面直上で土師器甕(15)が出土した。この粘土塊についてはその機能を明らかにすることはできなかった。

**掘り方** 南東隅を除く三隅がやや深く掘り込まれている傾向がある。前述のように掘り方でP4を検出した。全体としては厚さ6~20cmの暗褐色土塊を混じる濃黄褐色で充填されていた。

また、本住居掘り方でP4を検出したが、38号住居の北西隅の主柱穴である。P4の規模(長径×短径×深さ)は40×32×28cmである。

**遺物と出土状況** 住居の中央部に43号住居が重複しているため、遺物の残存状態はあまり良好ではないが、南東隅寄りの竈および貯蔵穴周辺に比較的多く出土した。竈や貯蔵穴の出土遺物は先述したが、その他の遺物では甕(第178図20)はP1北側の床面上16cm、甕(16)はP1南側床面直上で出土した。他の図化した遺物は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器470点、剥片3点、棒状礫1点、礫片2点が出土した。また、重複する43号住居と分けられない埋没土出土遺物、土師器469点、剥片2点がある。この中には実測できる遺物はなかった。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

## 2区37号住居

(第180・181図 PL96・181・182 遺物観察表P.583)

**位置** 2区2-9-I・J-12・13G

**形状** 正方形と推定される。33・38号住居、48号土坑と重複するが、本住居のほうがいずれの遺構より深いことから全形を記録することができた。

**重複** 33号・38号住居より新しい。48号土坑との新旧関係は確認できなかったが、本住居のほうが新しいと推定される。

**規模** 長軸4.72m 短軸4.69m 壁高0.49m

**面積** 21.49㎡ **長軸方位** N-80°-E

**埋没土** 上層はローム粒を含む暗褐色土で、下層は白色軽石・ローム塊・暗褐色土塊を含む黄褐色土で埋まっていた。中位には直径1mmほどの灰色細砂を主体とする厚さ2~10cmの褐灰色土が凹地埋没土の凹地を覆うように堆積していた。

**竈** 住居東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長0.99m、燃焼部幅0.55m。袖の残存長は向かって右側が0.99m、左側が0.91m。壁外に0.03m煙道が伸びる。燃焼部中央には支脚として礎が立てられていた。支脚の上には土師器杯(第180図3)と甕(9)口縁部破片がかぶさるように出土した。当初天井部が残っている可能性を考慮し掘り下げたが、断面で詳細を確認・記録することはできなかった。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が39×23×68cm、P2が23×18×50cm、P3が31×27×43cm、P4が27×19×32cmである。

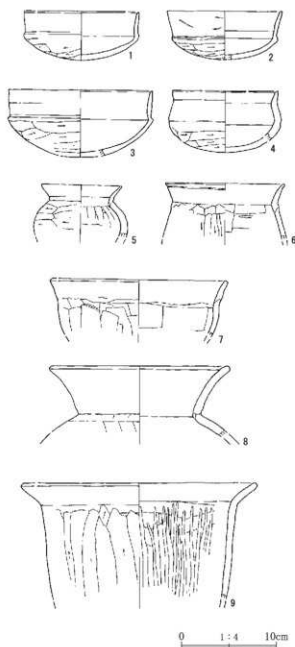
**周溝** 周溝は北東隅を除いて検出された。幅は概ね19cm、深さは12cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.71m、短径0.56m、深さ0.74mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.23m、短径0.20mの楕円形である。貯蔵穴南の南壁際床面直上で土師器杯(第180図1)が出土した。

**床面** 床面は平坦である。床面では3基の土坑を検出した。東壁北半の壁際で検出された1号土坑は長軸1.45m、短軸0.92m以上、深さ0.30mの楕円形で、ローム粒・塊を含む暗褐色土で埋まっていた。断面形は楕円形である。長軸が東壁に一致しており、本住居の施設である可能性が高いが、古墳時代の竪穴住居のこの位置に土坑が検出されることは希である。

また南壁中央寄りに検出された2号土坑は長軸0.58m、短軸0.53m、深さ0.19mのほぼ円形で断面形は楕円形、底面は平坦である。壁に接しており、本住居に伴う土坑と判断した底面近くで土師器破片が出土しているが、図化はできなかった。南壁東寄りに検出された3号土坑は長軸0.59m、短軸0.49m、深さ

### 3. 古墳時代の遺構と遺物



第180図 2区37号住居出土遺物

0.17mのほぼ円形で断面形は箱形である。埋没土が2号土坑と似ていた。

**掘り方** 掘り方は主柱穴を結んだ線の外側がやや深く掘られていた。全体としては厚さ8～18cmローム塊・焼土粒を含む暗褐色土とローム主体の黄褐色土で充填されていた。P2付近が不定形に掘り込まれていたほか、P3西側に、長径0.88m、短径0.83m、深さ0.22mの楕円形の床下土坑が検出された。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴周辺にまと

まって出土した。前述したもの以外の図化遺物は埋没土中の出土である。ここで図示した遺物のほか、縄文土器4点、土師器802点、剥片4点、礫3点、焼土塊1点、石板1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

2区38号住居 (第182図 PL97・182 遺物調査表P.583)

**位置** 2a区2-9-J・K-12・13G

**形状** 36・37・43号住居に切られており、全形を記録することはできなかったが、後述するように重複住居の掘り方面を含め、すべての主柱穴を確認することができたことから、正方形と推定される。

**規模** 長軸4.78m 短軸1.63m以上 壁高0.31m

**面積** 計測不能 **長軸方位** N-14°-W

**埋没土** ローム粒・塊を含む暗褐色土。

**竈** 竈は検出されなかったが、東壁のほぼ中央に焼土と灰が床面に分布していた。これが竈の痕跡である可能性もあると推定される。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が35×24×41cm、P2が34×28×39cmである。北東部および南東部の主柱穴は36号住居に西半の床面を壊されていることから、床面で検出することはできなかった。しかし、後述する36号住居と43号住居の掘り方面の調査で、本住居の北東部の主柱穴P3を検出することができた。P3の規模(長径×短径×深さ)は、掘り方面からの計測で、P3(36号住居P4)が40×32×28cmである。南東部の主柱穴P4は43号住居の貯蔵穴が重複して遺存していないと判断した。掘り方面から33cm下の底面は柱穴部分を残していると考えられる。

**周溝** 周溝は調査できた範囲では、北壁と東壁を巡る。幅は概ね16cm、深さは5cmである。

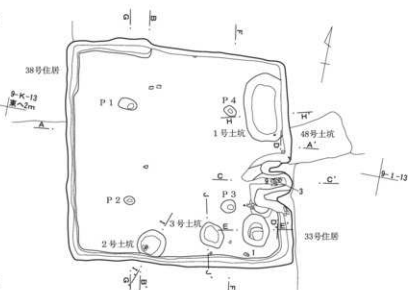
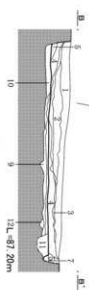
**貯蔵穴** 南東隅に長軸0.88m、短軸0.77m、深さ0.75mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面も長軸0.42m、短軸0.29mの隅丸長方形である。

貯蔵穴からは多くの遺物が出土した。土師器鉢(第



2区37号住居跡竪穴E-E'

1. 暗褐色土 ローム塊多く含む。炭化物、焼土を少量含む。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。ローム塊を多く、灰色粘土を少量混入。
3. にぶい黄褐色土 ローム主体。灰色粘土多く含む。粘性あり。



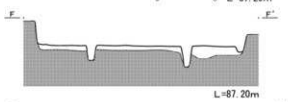
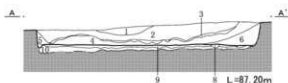
2区37号住居2号土坑1-1'

1. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土をまだらに含む。炭化物、焼土をわずかに含む。床面に類似している。締まりあり。
2. 暗黄褐色土 焼土粒を少量混入。ローム塊を多く含む。やや締まりなし。
3. 黄褐色土 ローム主体。ややボソボソしている。暗褐色土がわずかに混入。



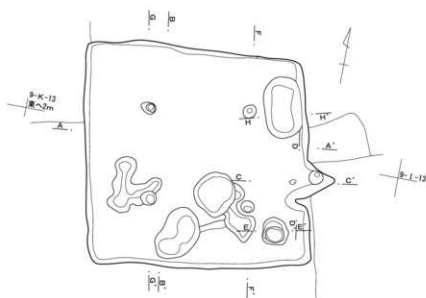
2区37号住居3号土坑J-J'

1. 暗黄褐色土 ローム混じり。また粒状(直径0.5~1.0cmほど)を含む。特に下位に焼土粒(直径0.3~1.0cmほど)少量含む。上位に部分的に黒褐色土認められる。
2. 濃黄褐色土 ローム主体。焼土粒(直径0.5cmほど)均一に含む。
3. 濃黄褐色土 2層に類似するが、焼土粒を含まない。



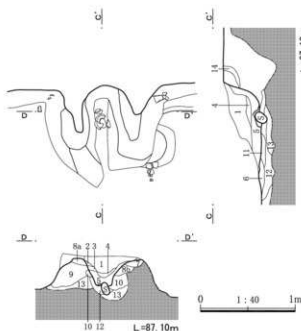
2区37号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 直径1.0~6.0mmほどの燻名山起源の白色軽石粒を均一に含む。ロームを粒および塊状(直径0.5~2.0cmほど)に少~中量含む。黒褐色土を粒および塊状(直径1.0~2.0cmほど)に含む。
2. 暗黄褐色土 1層に類似するがローム塊(直径1.0~3.0cmほど)やや多く含む全体的に1層より黄色味帯びる。
3. 褐色土 直径1.0mmほどの灰色細砂粒~砂粒が主体。暗黄褐色土含む。直径1.0~8.0mmほどの燻名山起源の白色軽石粒を含む。
4. 濃黄褐色土 1~2層に類似。ローム粒および塊、黒褐色土粒および塊はほとんど認められない(少量含む)。白色軽石粒(直径1.0mmほど)も上位に少量のみ。
5. 黒褐色土 ローム混じり。部分的に黄色味帯びる。白色軽石粒(直径1.0mmほど)均一に含む。
6. 暗黄褐色~黒褐色土 中ほどが黒褐色土(全体の50%ほど)。上位と下位は漸移的に暗黄褐色土となる。ローム塊(直径2.0~4.0cmほど)を特に黒褐色土中に多く含む。白色軽石粒(直径1.0~4.0mmほど)上位に含む。
7. 暗黄褐色土 ロームと黒褐色土の混入。他の層に比べ均一に混じる。
8. 暗褐色土 特に下位にローム塊(直径1.0~2.0cmほど)含む。焼土粒(直径5.0mmほど)少量含む。
9. にぶい黄褐色土 ローム主体。硬く締まる。白色軽石粒(直径1.0mmほど)少量含む。粘味。
10. にぶい黄褐色土 9層に類似するが、締まりやや弱い。
11. 土坑状の落ち込み。
12. にぶい黄褐色土 黒褐色土を特に下位に含む。全体的にやや黄色味あり。根の擾乱か?



## 2区37号住層H-H'

1. 暗褐色土 ローム粒および塊(直径0.5~5.0cmほど、ハードローム)またローム均一に含み、全体的にやや黄色味帯びる。焼土粒(直径0.5cmほど)少量含む。



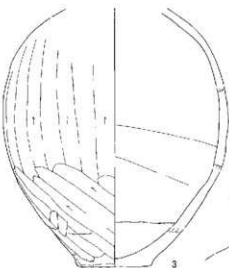
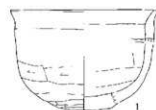
## 2区37号住層C-C' D-D'

- 暗黄褐色土 焼土粒(直径0.3~1.0cmほど)特に下位に含む。白色軽石粒(直径1.0~3.0cmほど)少量含む。
- 濃黄褐色土 ローム主体、やや硬く締まる。
- 暗黄褐色土 1層より黒灰色味帯びる(灰を含む場合)。焼土が少量混じる。
- 濃黄褐色土 2層に類似するが焼土が少量混じる。
- 赤褐色~暗褐色土 主に東半分は焼土主体層。西半分は焼土が全体的に混じるが、暗褐色土(東~西への変化は漸移的)。淡褐色シルトをまだらに含む(主に西半分)。
- 黒褐色~褐灰色土 上位は灰主体の黒褐色土。漸移的に灰を主体とする褐灰色土へ。褐灰色土は焼土全体的に含み、やや赤褐色味帯びる。
- 濃黄褐色土~暗黄褐色土 ローム主体。黒褐色土が混じり、全体的に黒色味帯びる。中ほどに焼土混じる。
- にぶい黄褐色土 8a層は下位に少量、8b層は均一に焼土を含む。ローム主体。
- 暗黄褐色土 上位は黒褐色土を斑状に少量含む。中位~下位にかけてロームを斑状に含む。
- 赤褐色土 焼土主体層。ロームを斑状に少量含む。灰白色シルト粒および塊(直径0.5~1.0cmほど)少量含む。5層に類似。
- 褐色土 焼土粒(直径1.0cmほど)均一に含む。灰白色シルト粒(直径0.5cmほど)少量含む。
- 濃黄褐色土~暗黄褐色土 11層に類似するが、ロームが全体的に混じり、黄色味帯びる。焼土粒(直径8.0mmほど)少量、灰白色シルト粒(直径0.5cmほど)少量含む。また支脚付近は灰が混じりやや赤褐色味帯びる。
- 濃黄褐色土 12層に類似するが、焼土、灰の類はほとんど認められない。
- 暗褐色土 上位はややローム混じる。フカフカではないが、締まり強くはない。

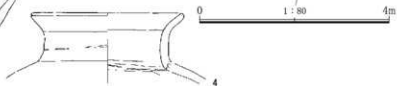
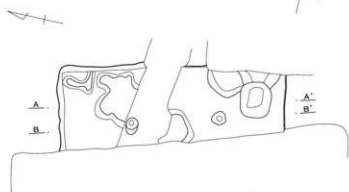
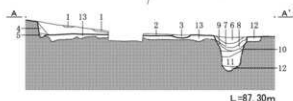
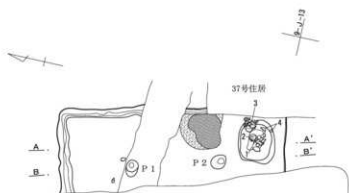
第5章 2区の遺構と遺物

2区38号住居A-A'

1. 暗褐色土 ローム混じり、また粒状(直径5.0cmほど)に含む。白色軽石粒(直径0.5~1.0cmほど)含む。
2. 暗黄褐色土 ローム主体、またロームは粒および塊状(直径0.5~3.0cmほど)にも含む。白色軽石粒(直径0.5~1.0cmほど)特に上位に含む。
3. 灰、焼土層。主に上位に焼土が、下位に灰(炭主体土)が堆積。
4. 暗黄褐色土 2層に類似するが、比較して黒色味帯びる。
5. 黄褐色土 ローム主体、特に上位に暗褐色土混じる。
6. 暗黄褐色土 色調は4層に類似。焼土粒および塊(直径0.5~2.0cmほど)ごく少量含む。ロームを粒および塊状(直径0.5~1.5cmほど)にごく少量含む。
7. 暗褐色土 焼土粒(直径1.0cmほど)を均一にやや多く含む。ロームを粒状(直径0.5cmほど)にごく少量含む。
8. 7層に類似するが、焼土粒はほとんど認められない(ごく少量)。ロームを粒および塊状(直径1.5cmほど)に少量含む。
9. 暗褐色土 ローム混じり。
10. 7層に類似。焼土粒は均一に含む。7層に比較して少ない。
11. 暗褐色土 焼土粒(直径1.0cmほど)ごく少量含む。
12. 黄褐色土~暗黄褐色土 ローム主体、硬く締まる。
13. 濃黄褐色土 ローム主体。灰色シルト混じる。



0 1:4 10cm



第182図 2区38号住居と出土遺物

182図1)と小型甕(2)は貯蔵穴底面上16cmで出土した。壺(第182図4)は貯蔵穴底面上52cmで出土した。甕(3)は貯蔵穴東脇床面直上で出土した。

**床面** 床面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 住居の大半が43号住居によって壊されているため、遺物の残存状態は不良である。貯蔵穴内部から遺物が出土しにすぎない。ここで図示した遺物のほか、土師器86点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

2区39号住居 (第183~185図 PL.97・98・182・183 遺物調査表P.583・584・612)

**位置** 2a区2-9-J-9・10G

**形状** 長方形と推定される。41号住居に切られているために全形を記録することができなかった。

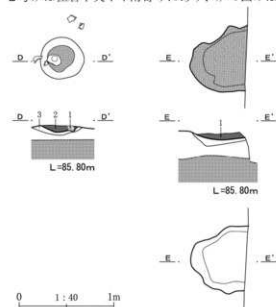
**重複** 41号住居よりも古い。

**規模** 長軸4.73m 短軸3.56m 壁高0.27m

**面積** 計測不能 **長軸方位** N-10°-W

**竈** 竈は検出されなかった。

**炉** 床面で2カ所の炉が検出された。1号炉はP1の南西にあり、炉の凹みは長径0.46m、短径0.44m、深さ0.08mの円形で、焼土の厚さは9cmほどである。2号炉は住居中央やや南寄りにあり、炉の凹みは長



第183図 2区39号住居炉

径0.62m以上、短径0.69m、深さ0.16mの楕円形で、焼土の厚さは6cmほどである。いずれの炉からも土師器破片が出土しているが、炉の使用状態を示すような出土状態ではなく、固化するほどの大きさの破片でもなかった。

**柱穴** P1・P2・P3を検出したが、いずれも主柱穴とするには位置に問題がある。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が24×23×30cm、P2が30×20×25cm、P3が30×25×26cmである。

また、主柱穴が対角線上に位置するとすれば、北側の後出する41号住居P13が本住居の北西隅の主柱穴の可能性もある。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。南東部床面には一部で焼土が分布していた。

**掘り方** 掘り方面は南壁沿いややや深く掘り下げられていた。全体としては厚さ14~25cmの黄褐色土塊を含む褐色土で充填されていた。

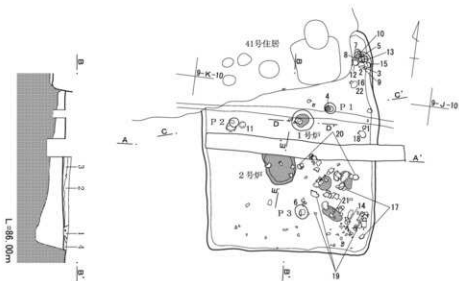
**遺物と出土状況** 住居中央から南東隅にかけて、北東隅に遺物が集中して出土した。北東隅には手づくね土器(第185図2・3)や坏(5・7~10・12・13・15)が、重なるように床面上3~22cmで出土した。また、埴(16)が床面直上で出土し、その中の土から剣

**2区39号住居炉D-D'**

1. 黒褐色土塊 炭主体土。焼土粒および塊(直径0.3~2.0cmほど)含む。にがい黄褐色土凝状に含む。
2. 赤褐色~淡赤褐色土 焼土主体層。硬く締まる。黒褐色土、特に上位に少量混じる。
3. 淡黄褐色土 似し焼土凝状に含む。跡まわりや強くサラサラの上。

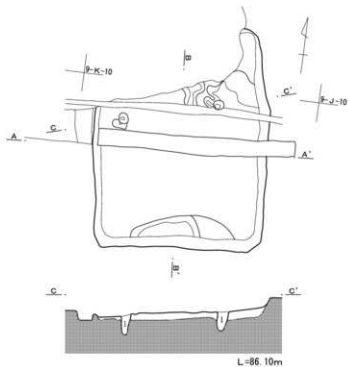
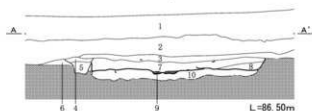
**2区39号住居炉E-E'**

1. 赤褐色土 焼土層。下位に褐色土(サラサラの土)が混じる。



2区39号住居A-A'

1. 表層土 褐色土 明黄褐色土(ローム粒、直径5.0mmほど)均一に含む。直径0.1~1.0cmほどの礫名山起原の白色軽石粒を少量含む。特に上位に黒色土を粒および塊状(直径0.5~2.0cmほど)に含む。このA-A'内では中位ほどに直径0.5~2.0cmほどの礫を多く含む。黒褐色砂質土が3.0~5.0cmほどの厚さで堆積。それより下位は黒褐色土と褐色土(ローム混じり)が交互に堆積。いずれも直径1.0mmほどの白色軽石粒と明黄褐色土粒(直径1.0cmほど)を均一に含む。
2. 暗褐色土~黒褐色砂質土 直径1.0~5.0mmほどの礫名山起原の白色軽石粒を少量含む。下位はやや色調が黒色味を帯び、砂質でなくなっていく。
3. 暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0~4.0mmほど)含む。
4. 暗褐色土 3層より黒色味少ない。下位漸移的に5層へ、白色軽石粒(直径0.5~5.0mmほど)ごく少量含む。
5. 褐色土 黄褐色土斑状に少量含む(20~30%ほど)。6層に類似した土。黄褐色土中に白色軽石粒(直径1.0mmほど)ごく少量含む。
6. 褐色土 5層に類似するが、混じりのない地山土。5層よりやや黒色味少ない。上位はやや黒褐色味帯び、漸移的に褐色土となる。
7. 暗褐色土 1~11層中最も全体的に黒色味帯びる。粘土粒(直径5.0mmほど)下位に少量含む。白色軽石粒(直径0.1~2.0mmほど)均一に含む。
8. 褐色土 他の褐色土層(1~5~6層)に比べ、やや赤褐色味帯びる。粘土粒(直径1.0~8.0mm)少量。炭化物粒(直径5.0mmほど)ごく少量含む。白色軽石粒(直径1.0mmほど)含む。にぶい黄褐色土斑状に含む。
9. 赤褐色土 粘土土体層。暗褐色土が混じる。炭化物粒(直径5.0mmほど)少量含む。
10. 褐色土と暗褐色土の間に、にぶい黄褐色土斑状に少量含む。また黄褐色土だが前述のそれに比べ硬く締まる。長径1.0~3.0cmほどの塊も含む。



2区39号住居B-B'

1. 黒炭砂質土 (水堀?埋没土)
2. 白色軽石粒(塊形?軽石か)。粘土粒を多く含む黒色土。
3. 少量の白色軽石粒、黄褐色粘質土小塊を含む。暗褐色土。
4. 直径2.0~3.0cmの黄色粘質土塊を含む。褐色土。

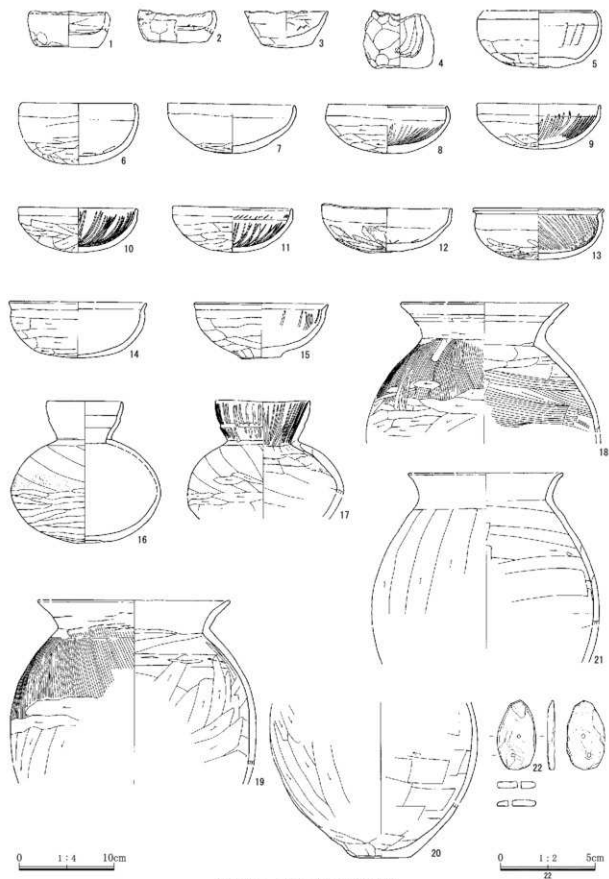
2区39号住居P1・P2C-C'

1. にぶい黄褐色土 ロームと褐色土の混土。やや硬く締まる。中位にローム粒(直径0.5~1.0mmほど)。ハーフローム)少量含む。

0 1:80 4m



3. 古墳時代の遺構と遺物



第185図 2区39号住居出土遺物

第5章 2区の遺構と遺物

形石製模造品(第185図22)が出土した。手づくね土器(1)は東壁際床面上22cmで、壺(18)も東壁際床面上5cmで出土した。手づくね土器(4)はP1埋没土上層床面上3cmで出土した。甕(20)は住居中央部床面上4cm、甕(19・21)は住居南東部床面直上で出土した。埴(17)も南東部床面直上で出土した。坏(14)は南東部床面上5cmで、坏(6)はP3北脇床面直上で出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器258点、剥片3点、礫2点が出土した。また、打製石斧(第276図17)1点が南東部床面上5cmで出土している。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。

2区41号住居(第186~188図 PL99・100・183・184 遺物観  
察表P.584・585・612)

**位置** 2a区2-9-J・K-9~11G

**形状** 正方形と推定される。39号住居を切る。

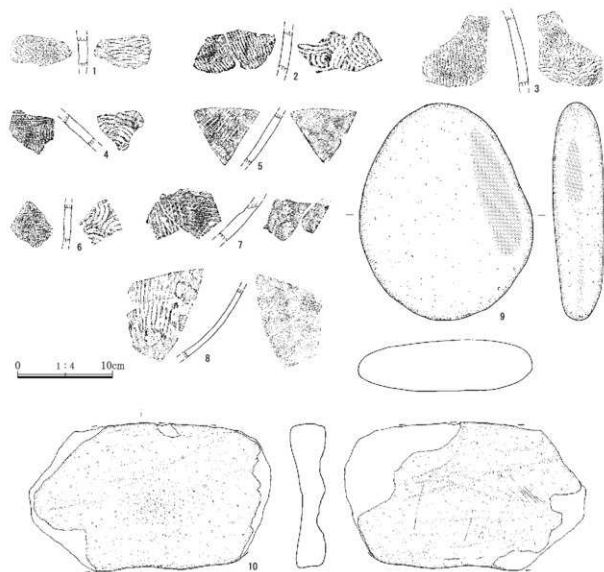
**重複** 39号住居より新しい。

**規模** 長軸5.53m 短軸5.50m 壁高1.38m

**面積** 29.80㎡ **長軸方位** N-72°-E

**埋没土** 上層は黒色土、黒色土塊・黄褐色土塊を含む暗褐色土で、下層は黄褐色土塊を含む濃黄褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁はほぼ中央に竈が構築されていた。左壁及び袖の崩落が著しく遺存状態は不良であった。竈

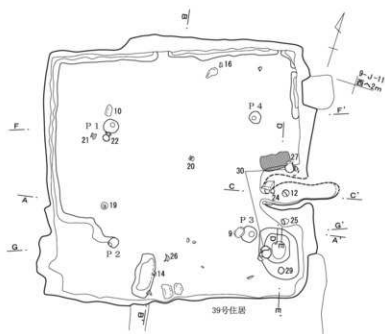
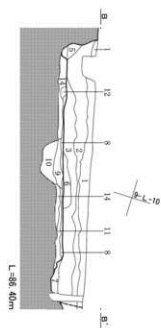


第186図 2区41号住居出土遺物(1)

3. 古墳時代の遺構と遺物

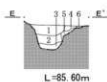
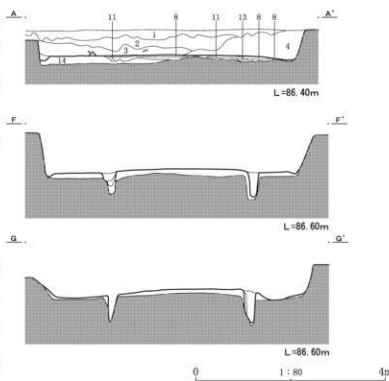


第187図 2区41号住居出土遺物(2)



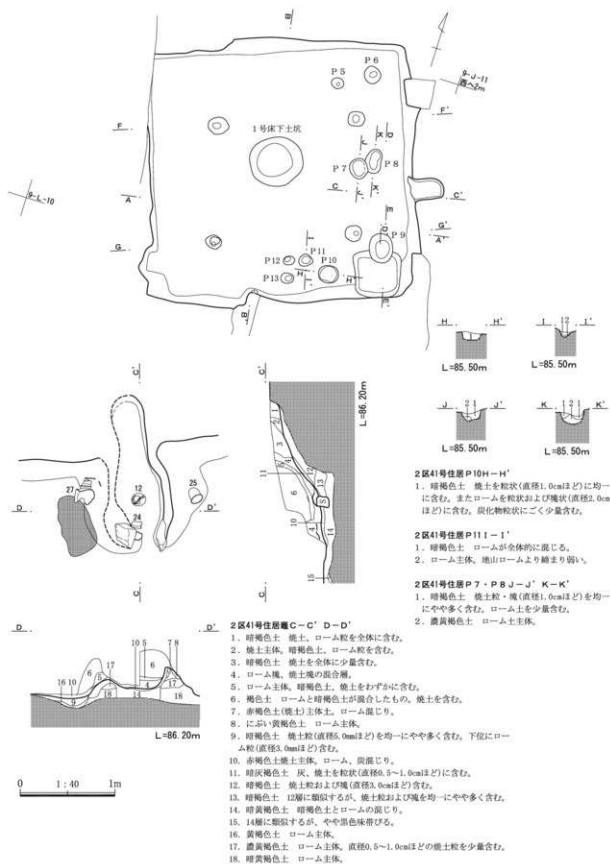
2区41号住居A-A' B-B'

1. 黒褐色土 中に下位に濃黄褐色土(ローム主体)底状に含む、黄色味帯びる。白色軽石粒(直径1.0~4.0mmほど)均一に含む。
2. 暗黄褐色土 上位に黒褐色土少量混じる(1層の土)。黄褐色土粒および塊(直径0.5~5.0cmほど、ハードローム)少量含む。白色軽石粒(直径1.0~8.0mmほど)均一に含む(1層より少量)。濃黄褐色土(ローム主体)底状に多く含む(均一)→そのため全体的に黄色味あり。
3. 暗黄褐色土 黄褐色土粒および塊(直径1.0~5.0cmほど、ハードローム)少量含む。また特に上位に濃黄褐色土底状に含む。白色軽石粒(直径1.0~5.0mmほど)ごく少量含む。
4. 濃黄褐色土(2層より黄色味あり)黄褐色土粒(直径1.0~2.0cmほど、ハードローム)少量含む。
5. 黒褐色土と濃黄褐色土の混。底状に混じる。黄褐色土粒および塊(直径0.5~3.0cmほど、ハードローム)少量含む。
6. 濃黄褐色土 2層に類似。
7. 暗黄褐色土 黒褐色土塊(直径2.0~3.0cmほど)少量含む。明黄褐色土塊(直径2.0~5.0cmほどのハードローム)含む。1層含む落ち込みは別遺構か?
8. 褐色~暗褐色土 凝床の土。硬く締まる。黄褐色ロームを粒~塊状(直径3.0cmほど)に均一に多く含む。直径1.0cm程度の白色軽石粒を含む。
9. 暗褐色土 黄褐色ロームを粒~塊状(直径2.5cmほど)に含む。
10. 暗黄褐色土 黄褐色ロームを粒~塊状(直径3.0cmほど)に均一に多く含む。黒褐色土粒(直径1.0cmほど)を少量含む。
11. 暗褐色土 黄褐色ロームを粒~塊状(直径2.0cmほど)に均一に多く含む。直径1.0cm程度の白色軽石粒を少量含む。
12. 暗褐色土 黄褐色ロームを粒~塊状(直径1.0cmほど)に含む。直径1.0cm程度の黒褐色土塊を少量含む。
13. 暗褐色土 ローム土固じる。
14. 濃黄褐色土 ローム主体。黒褐色土を粒~塊状(直径1.0cmほど)に少量含む。直径1.0cm程度の白色軽石粒を少量含む。ロームを粒~塊状(直径1.0~2.0cmほど)に含む。



2区41号住居断面E-E'

1. 暗褐色土 黄褐色土(ローム主体。直径2.0cmほど)含む。
2. 1層の土と黒褐色土の混じり(1層の土が主体)。
3. 暗褐色土 1:2層に比べ黄褐色土はほとんど認められない(上位に少量)。
4. 2層に類似。
5. 褐色土 ローム主体でやや黄色味帯びる。黒褐色土少量混じる。
6. 黒褐色土~暗褐色土の混。2層の土が均一に混じったような土。



2区41号住居

の規模は復元して計測すると、確認長(1.68)m、燃焼部幅(0.47)m。袖の残存長は向かって右側が1.11m、左側が1.03m。壁外に0.6mほど煙道が伸びると推定される。両袖先端には芯材の礎が残っていた。燃焼部中央には支脚と思われる礎が立てられていた。支脚礎の上には土師器環(第187図12)が被せられて出土した。焚き口部左側使用面上6cmで小型甕(24)が出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が33×28×32cm、P2が21×19×54cm、P3が33×32×73cm、P4が26×24×54cmである。

**周溝** 周溝は西壁北半分から北壁東壁一部にかけて巡る。幅は概ね16cm、深さは4cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径1.04m、短径0.82m、深さ0.52mの不整楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.35m、短径0.28mの楕円形である。床面では調査不十分で不整楕円形の記録となったが、掘り方面では外形が一辺1.0mの整った隅丸正方形で、底面も長軸0.8m、短軸0.73mの隅丸方形である。

貯蔵穴と竈右袖の間には小型甕(第187図25)が床面上8cmで出土した。貯蔵穴南西部では貯蔵穴が埋まりきった、床面直上と同レベルの位置で、土師器壺(30)と甕(29)が出土している。

**床面** 床面は平坦である。南西隅は床面が不明瞭で、住居の壁も明確にとらえられなかった。

**掘り方** 掘り方は北東部がやや高くなっている傾向があるが、全体としては5～20cmの掘り方充填土が確認できた。掘り方面では9基のビットと床下土坑1基を検出した。ビットはP5～P13でP5とP6は住居北東隅、P7とP8がP3とP4の間に、P9は貯蔵穴北脇、P10～13は貯蔵穴西側で検出された。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は掘り方面での計測で、P5が27×24×12cm、P6が39×35×13cm、P7が42×37×21cm、P8が51×32×28cm、P9が42×50×43cm、P10が42×36×14cm、P11が28×24×17cm、P12が25×20×19cm、P13が28×23×19cmである。P13は南側に先行する39号住居北西

隅の主柱穴の可能性がある。

住居中央部に検出された1号床下土坑は、長径1.11m、短径1.02m、深さ0.40mのほぼ円形である。断面形は皿形で、底面は平坦である。土坑の位置からすれば住居に伴う土坑の可能性はある。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴周辺と主柱穴P1際からまとまって出土した。土師器環(第187図16)は北壁周溝際床面上16cmで出土した。土師器高環(21)・須恵器高環(22)は主柱穴P1南西脇床面直上で出土した。擦石(第186図10)はP1北脇床面上3cmで出土した。土師器高環(第187図19)はP2北側床面上3cmで出土した。土師器環(14)と甕(26)は南壁付近でそれぞれ床面上38cm、21cmと浮いた状態で出土した。擦石(第186図9)はP3埋没土の上層床面直上の位置で出土した。土師器高環(20)は中央部床面上29cmで出土した。須恵器破片(第186図1～8)は埋没土中から出土した。また土製支脚破片1点が埋没土中から出土したが、これは35号住居出土の支脚(第175図37)に接合した。

ここで図示した遺物のほか縄文土器3点、土師器1883点、須恵器破片8点、棒状礫1点、剥片7点、大型礫4点、礫片10点が出土した。また、尖頭器(第277図32)、打製石斧(第276図19)、削器4点が出土している。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

## 2区42号住居

(第189・190図 PL101・179・184 遺物観察表P.585)

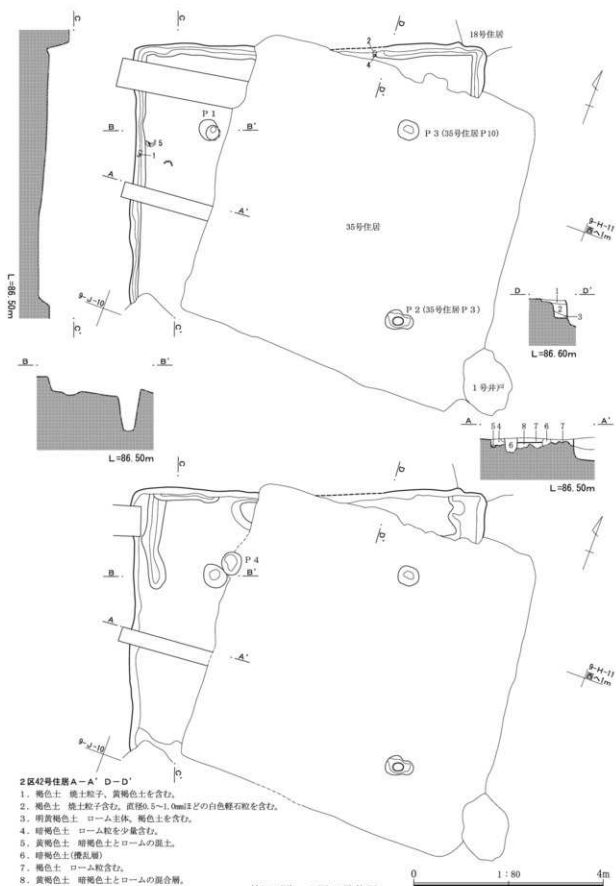
**位置** 2a区2-9-I・J-10・11G

**形状** 正方形と推定される。35号住居・63号土坑に切れ、南壁・東壁を確認することができなかった。しかし、35号住居掘り方面で北東・南東隅の主柱穴を検出することができたことから、対角線に主柱穴があるとなれば、正方形と推定される。

**重複** 35号住居・63号土坑より古い。

**規模** 長軸7.60m 短軸5.56m以上 壁高0.29m

**面積** 計測不能 長軸方位 N-19°-W



**竈** 竈は検出されなかった。東壁あるいは南壁に敷設されていたと推定される。

**柱穴** 床面でP1、35号住居掘り方面でP2・P3を検出した。南西隅の主柱穴は63号土坑周辺やその南側の遺存状態が不良であったため、確認することができなかった。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が57×46×75cm、掘り方面からの計測でP2(35号住居P3)が59×59×42cm、P3(35号住居P10)が43×42×62cmである。P2は35号住居の南東隅の主柱穴とほぼ重なっている。

**周溝** 周溝は調査範囲の北壁と西壁を巡る。幅は概ね14cm、深さは7cm。西壁中央やや北寄りの周溝内で土師器環(第190図1)が底面上12cmで出土した。

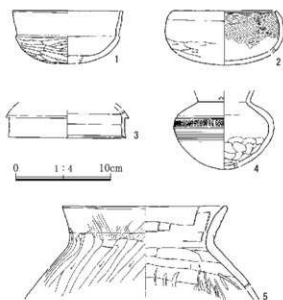
**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。

**掘り方** 掘り方面は北東隅と南西部がやや深く掘られていた。全体としては5～10cmほどの暗褐色土とローム塊の混土で充填されていた。掘り方面ではP1の北東側にP4を検出した。P4の規模(長径×短径×深さ)は48×42×11cmである。また、北西隅には壁から0.2m内側に西壁と平行する小溝を検出した。幅0.36m、長さ2.0m、深さ0.05mである。

**遺物と出土状況** 住居の大半が35号住居によって壊されている上に、遺物の出土量が少なく、西壁際とP3北側の壁際から遺物が出土したにすぎない。土師器甕(第190図5)はP1南西部の壁際床面上4cmで出土した。須恵器環蓋(3)は掘り方埋没土中から出土した。この須恵器蓋は36号住居出土の須恵器蓋(第178図6)と同一個体の可能性がある。土師器環(2)・須恵器甕(4)は北壁際床面上15cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器4点が出土。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。本住居の北東隅は当初別の住居と判断し調査した。そのため、本住居の全景写真や遺構平面図は西側と北東隅の二つに分けて記録することとなった。前述のように、整理作業時に35号住居掘り方面平面図の精査によって主柱穴を検出したことから、1軒の住居と判断し、両者の平面図を合成した。



第190図 2区42号住居出土遺物

#### 2区43号住居

(第191・192図 PL102・103・184 遺物観察表P.585・586)

**位置** 2a区2-9-J・K-12・13G

**形状** やや西壁が斜行するが、長方形と推定される。36号住居、64・68号土坑を切る。

**重複** 36号・38号住居より新しい。64号土坑より古い。68号土坑との新旧関係は不明である。

**規模** 長軸5.04m 短軸3.26m 壁高0.34m

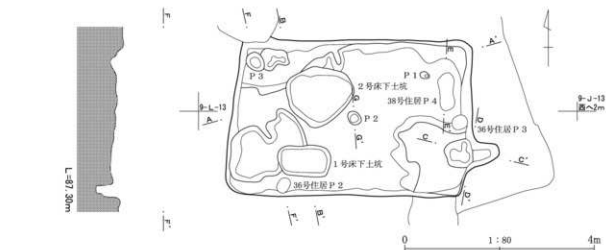
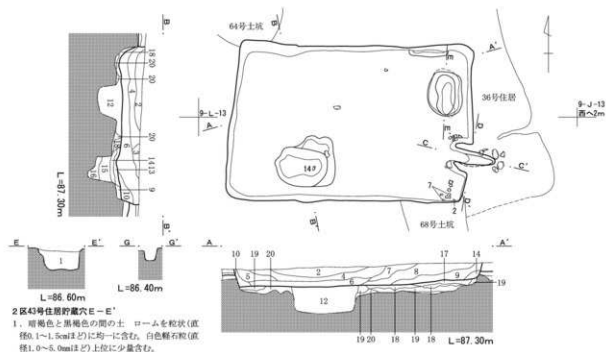
**面積** 16.66㎡ **長軸方位** N-89°-E

**埋没土** ローム粒・白色軽石を含む暗黄褐色土。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.01m、燃焼部幅0.32m。袖の残存長は向かって右側が0.48m、左側が0.46m。壁内に0.54m煙道が伸びる。右袖先端には芯材とした礫が残っていた。煙道部外側には4点の大型礫が出土したが、竈構築材であったかどうかは不明である。また燃焼部左壁脇および左袖脇に土師器甕破片が出土したが、図化できなかった。

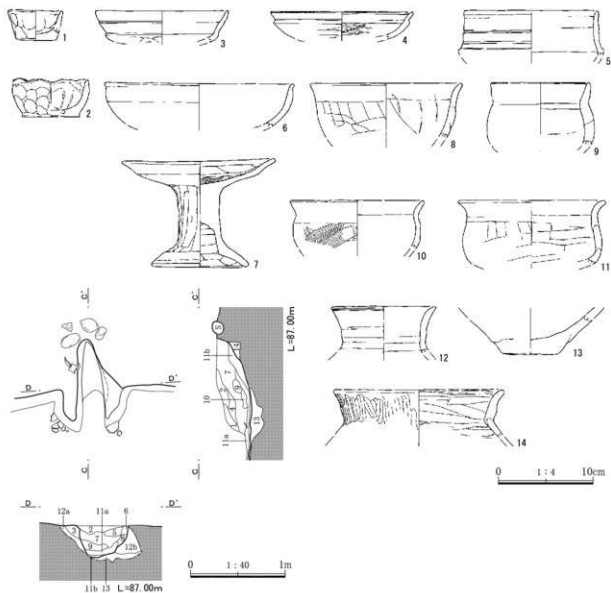
**柱穴** 床面では主柱穴は検出されなかった。掘り方面で5基のピットを検出したが、そのうち2基は重複する36号・38号住居の主柱穴と考えられるものである。本住居の間わるP1～P3のうち、P1は対角線上にあり、主柱穴の可能性はある。P2も対角





2. 濃黄褐色~暗黄褐色土 ロームを粒および塊状(直径0.5~3.0cmほど)に含む、黒褐色土をさらに少量含む。
3. 暗褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に少量含む、白色輝石粒(直径1.0mmほど、礫名山起源の白色輝石粒を含む?)を少量含む。
4. 暗黄褐色土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)に均一に含む、直径1.0~5.0mmほどの礫名山起源の白色輝石粒を少量含む、黒褐色土をさらに少量含む。
5. 黒褐色土 ロームを粒状(直径5.0mmほど)に少量含む。
6. 2層に類似、但しローム粒は均一に含む、直径1.0~5.0mmほどの礫名山起源の白色輝石粒を少量含む、炭化物粒をごく少量含む。
7. 濃黄褐色土 ロームを粒状(直径0.5~1.0cmほど)に均一に含む、直径1.0~5.0mmほどの礫名山起源の白色輝石粒を少量含む、黒褐色土をさらに少量含む。
8. 4層に類似。 9. 7層に類似。
10. 黒褐色土 ロームを粒および塊状(直径5.0cmほどだが、直径5.0mmほどが主体)に含む、白色輝石粒(直径1.0mmほど)少量含む、A-A'、B-B'中の10層は全体的にローム混じり、やや黄色味あり。
12. 暗褐色(上位)~濃黄褐色(下位)土 色調の変化は漸移的、ロームを粒および塊状(直径8.0cmほどだが、直径0.5~1.0cmほどが主体)に均一に多く含む、上位に直径1.0~5.0mmほどの礫名山起源の白色輝石粒を少量含む。
13. 濃黄褐色土 硬く締まる、ロームをさらに含む。
14. 13層に類似、やや硬く締まる(13層ほど硬く締まらない)。
15. 13層に類似、但しロームは粒および塊状(直径2.0cmほど)に均一に含む。
16. 12層の上位に類似(暗褐色土のローム塊混じり)。
17. 13層に類似、13層が床下土埋没土の為、別番号を付けた。
18. 暗褐色~黒褐色の間の土 ロームを粒状(直径1.0cmほど)にさらに含む。
19. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径5.0cmほど)に多く含む、ローム塊のすき間に暗褐色土が認められるといった状態。
20. ローム主体 硬く締まり、部分的に暗褐色土を混じる。

第191図 2区43号住居



2区43号住居層C-C'・D-D'

1. 暗黄褐色土 焼土粒(直径0.1~1.0cmほど)少量均一に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
2. 濃黄褐色土 ローム主体。焼土粒(直径0.1~1.0cmほど)均一に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。やや硬く締まる。
3. 濃黄褐色土 ローム主体。2層より更にロームが主体の土で、黄色味帯びる。硬く締まる。
4. 暗黄褐色土 焼土粒(直径0.1~1.0cmほど)均一に含む。黒褐色土夾状に少量含む。1層に比べ焼土粒多く含む。全体的に黒色味帯びる。
5. 淡褐色土 焼土粒(直径5.0cmほど)含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)少量含む。
6. 5層に類似。やや黒色味あり。5~6層とも似ている土だが、8~12層が電軸構築土と考え分層。
7. 赤褐色土 焼土主体層。濃黄褐色土(ローム主体)を縦状に含むが、E-E'ではローム主体で、焼土粒(直径1.5cmほど)均一に多く含む。この赤褐色土から黄褐色土の変化は漸移的。
8. 淡褐色土 焼土粒(直径1.0cmほど)を特に下位に多く含む。
9. 褐灰色土 灰土体層。焼土粒(直径0.5cmほど)均一に含む。また黄褐色土(ローム主体)も中に少量混じる。
10. 赤褐色土 7層に類似する焼土主体層。7層に比べ、より焼土の割合高い。塊状に含んでいる。
- 11a. 灰黒色土 灰土体層。締まりやや弱い。やや灰色味帯びる事から灰も混じっていると思われる。
- 11b. 灰土主体層。D-D'東側上位は崩ってしまった為掘り方セクション写真に残っていない。
- 12a. 淡褐色土 5層に類似。
- 12b. 淡褐色~暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0~5.0cmほど)含む。a・b層とも電軸構築土。
13. 暗褐色土 ロームを縦状(直径4.0cmほど)に含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)ごく少量含む。
14. 濃褐色土 ややシルト質で硬く締まる。

第192図 2区43号住居層と出土遺物

線上にはほほのるが、住居中央部に主柱穴があるのは考えにくい。P3は北西隅にあり、主柱穴の可能性は低い。住居構造に関わる主柱穴を確認することはできなかった。P1～P3の規模(長径×短径×深さ)は、掘り方面の計測で、P1が22×14×32cm、P2が31×25×31cm、P3が43×34×14cmである。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 北東隅に長軸0.94m、短軸0.72m、深さ0.44mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.68m、短径0.18mである。

**床面** 床面はほぼ平坦であるが、貯蔵穴西側がやや凹む。また、南西部に長径1.27m、短径1.04m、深さ0.09mの不整形円形の凹みを検出した。これは床下土坑の掘り込み反映したものと見られ、住居使用時には硬く締まる床面(第191図b-b'13層)が形成されていた。

**掘り方** 掘り方は南西隅と北西隅がやや深く掘り込まれていた。また甕前がやや浅くなっていた。全体としては8～28cmの厚さのローム粒・塊を含む暗褐色土で充填されていた。掘り方面で2基の床下土坑を検出した。南西部で検出された1号床下土坑は長軸1.12m、短軸0.65m、深さ0.47mの隅丸長方形である。断面形はルート状で、底面は平坦である。北西部で検出された2号床下土坑は長軸1.43m、短軸1.31m、深さ0.38mの不整形形で、断面形は楕円形、底面は平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は甕周辺から南東隅にかけて比較的まとまって出土した。土師器高坏(第192図7)と、土師器手づくね土器(2)は甕右側住居南東隅床面直上で出土した。土師器壺(14)は南西隅の凹みの東端の底面上13cmで出土した。他の図化遺物は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器738点、須恵器1点、礫3点、剥片5点が出土した。須恵器は蓋破片で36号住居(第178図6)と同一個体の小破片で、甕掘り方から出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡6期の住居と考えられる。

(2区44号住居はP, 241)

#### 2区45号住居

(第193図 PL103・184 遺物観察表P.586)

**位置** 2-9-C-E-10・11G、9-D-9-11G

**形状** 東半分は後世の削平により失われており、輪郭が明確にとらえられなかった。また先行する46号住居の埋没土が遺構確認面に露出した部分もあった。南隅および北隅を52号・85号土坑に切られている。正方形に近い長方形と推定される。

**重複** 46号住居より新しい。52号・85号土坑より古い。

**規模** 推定長軸6.49m 短軸5.77m 壁高0.36m

**面積** (39.71)㎡ **長軸方位** N-69°-E

**埋没土** 埋没土はローム粒・塊を含む暗褐色土で、西半分にしか残っていなかった。

**甕** 住居東壁中央やや南寄りに、焼土塊や焼土粒を混じる暗褐色土が分布していた。これが甕の痕跡の可能性が高いと考えられる。住居東半分は削平がおよび、甕の遺存状態は極めて悪かった。確認長、燃焼部幅は不明である。袖も明確に残存していなかった。壁外に0.35mほど掘り込みが突出する。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4・P5を床面で検出した。それぞれ、P1が35×31×68cm、P2が33×30×76cm、P3が35×31×60cm、P4が27×26×61cmである。

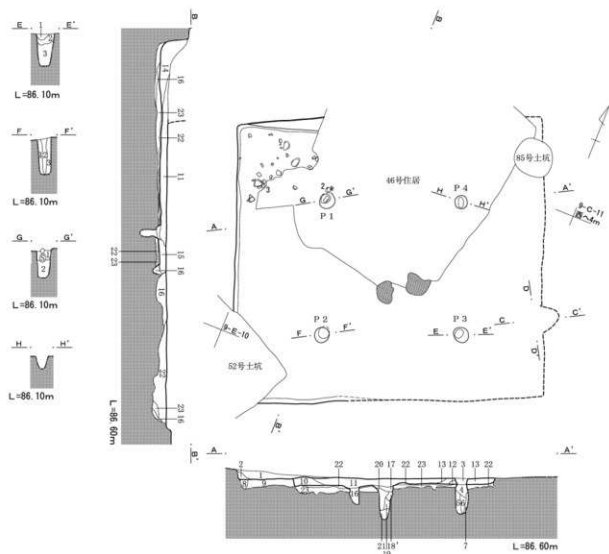
**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。住居中央部に長径1.0m、短径0.4mの不整形円形に焼土が2カ所検出された。炉の可能性もあるが、断定はできなかった。

**掘り方** 掘り方は壁沿いに幅1.0～1.3mの帯状に掘られていた。中央部が方形に掘り残される形になっている。北東部の掘り方は残存していなかった。全体としては厚さ中央部で10cm、周縁部で20cmの黒色土塊・ローム塊を含む褐色土で充填されていた。また、P1とP2の間でP5を検出した。P5の規模(長径×短径×深さ)は26×25×27cmである。

**遺物と出土状況** 東壁と南壁の大半が削平され、46号住居と重複しているため、北東隅を中心に遺物が



2区45号住居P3 E-E'

1. 黒褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
2. 黄褐色土 ローム粒と若干の黒褐色土が全体的に混合したもの、ローム小塊含む。
3. 黄褐色土 2層と比べて黒褐色土の量多量や多い。

2区45号住居P2 F-F'

1. 黄褐色土 ロームに暗褐色土が混合したもの、ローム塊(直径3.0~5.0cm)を多く含む。
2. 褐色土 ローム粒を含む。下方に行くに従い多くなる。
3. 黄褐色土 ロームに暗褐色土が混合したもの、ローム塊を含む。1層よりも多い。

2区45号住居P1 G-G'

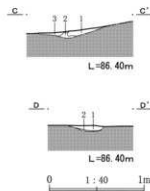
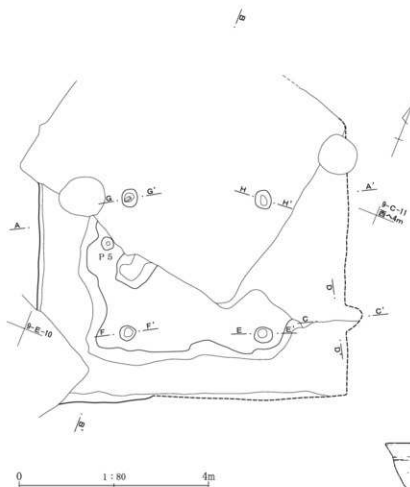
1. 黄褐色土 ロームと暗褐色土が混合したもの、直径1.0cm内外のローム塊を多く含む。
2. 黄褐色土 1層よりもローム粒、ローム塊の量が少なく、暗い。

2区45号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊、黒褐色土塊を含む。
  2. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を多く含む。1層より明るい。
  3. 暗褐色土 ローム塊含む。
  4. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
  5. 黄褐色土 ロームと暗褐色土が混合したもの。
  6. 暗褐色土 1層よりもロームの含有量が少ない。
  7. 黄褐色土 直径5.0cm位のローム塊を含む。
- 廻り方
8. ローム粒直径0.5~1.0cmのローム小塊を含む黄褐色土。
  9. 直径3.0~5.0cmの黒褐色土塊、直径1.0~2.0cmのローム塊を含む褐色土。(床面上層の3と同じと思われる)。

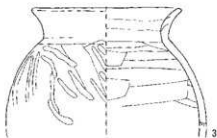
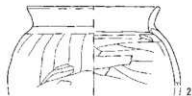
46号住居

10. 褐色土 ローム塊、黒褐色土塊を含む。
11. 褐色土 3層より暗い。3層よりロームの量少ない。
12. 灰、粘土混合層 灰色
13. 暗褐色土 ロームを多く含む。4層より明るい。
14. 黄褐色土 ロームが主体。
15. 暗褐色土 ローム、黒色土粒を含む。



2区45号住居層C-C' D-D'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊、焼土粒を含む。
2. 暗褐色土 1層よりも細かい、焼土粒をわずかに含む。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊をやや多く含む、焼土粒を含む。



0 1:4 10cm

16. 褐色土 直径1.0~2.0cmのローム粒を少量含む。
17. 黒色土 白色軽石粒を含む。
18. 褐色土 炭化物粒、焼土粒を含む。
- 18' 暗褐色土 焼土粒を含まない、ローム粒を含む。
19. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊を含む。
20. 褐色土 ローム粒、直径1.0~2.0cmのローム塊を含む。
21. 黄褐色土 直径1.0~2.0cm黒色土小塊を含む。
22. 直径1.0~2.0cmのローム塊と暗褐色土の混土。硬く締まっている。
23. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊を含む。

2区45号住居と出土遺物

出土した。土師器鉢(第193図1)は掘り方埋没土中、土師器甕(2)はP1北脇床面上6cmで出土した。甕(3)は北西隅床面直上で出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器222点、礫4点が出土した。この他に、45号・46号住居を同時に掘り下げた際に埋没土中から出土した遺物がある。どちらの住居の出土遺物が特定できない。これらの遺物は土師器862点、粘土塊3点、直径6~7cmの軽石5点、小円礫5点、礫片7点、剥片3点である。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。本住居の東半分は削平が床面近くまで及んでいて床面の把握が困難であった。したがって、先行する46号住居の埋没土まで一緒に掘り下げ、一部は46号住居の床面まで検出してしまった部分がある。第193図に記載した46号住居の輪郭は46号住居外形ではなく、本住居の床面を確認できた範囲を示している。

## 2区46号住居

(第194・195図 PL104・105・184 遺物観察表P.586・587・612)

**位置** 2a区2-9-D・E-10・11G

**形状** 正方形。北東隅が85号土坑に切られている。

**重複** 45号住居・85号土坑より古い。

**規模** 長軸5.31m 短軸4.89m 壁高0.58m

**面積** 25.22㎡ **長軸方位** N-76°-W

**埋没土** ローム粒を含む褐色土で埋まっていた。

**竈** 住居東壁はほぼ中央に竈が構築されていた。竈部分は全体に攪乱されており、遺存状態が不良であった。特に左袖は痕跡がなく、右袖のみを残す。確認長1.02m、燃焼部幅不明。袖の残存長は向かって右側が0.86m、左側が不明。壁外に0.12m煙道が伸びる。右袖は灰白色粘性土が残っていた。焼土塊や、焼土粒を含む黒褐色土が散乱し、中央部には土器が散乱していた。土師器杯(第194図1・6・7)、高杯(9・10)、甕(15)が竈部で床面直上~床面上14cmで出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、

P1が50×46×37cm、P2が30×22×54cm、P3が49×40×73cm、P4が49×43×38cmである。またP5とP6が南壁寄りに検出された。これら機能は判然としなかった。それぞれの規模はP5が27×25×36cm、P6が26×17×25cmである。

**周溝** 周溝は南壁中央のみ検出された。幅は概ね13cm、深さは9cmである。北壁西半分から西壁にかけて、周溝状の凹みを検出したが、溝状の掘り込みとしてはとらえられなかった。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.80m、短径0.67m、深さ0.70mの不整楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.16m、短径0.12mの楕円形である。貯蔵穴の北東側は弧状に、上幅0.1~0.2m、下幅0.38~0.40m、高さ0.25cm前後の土堤が巡っていた。貯蔵穴からは図化できる遺物は出土しなかった。

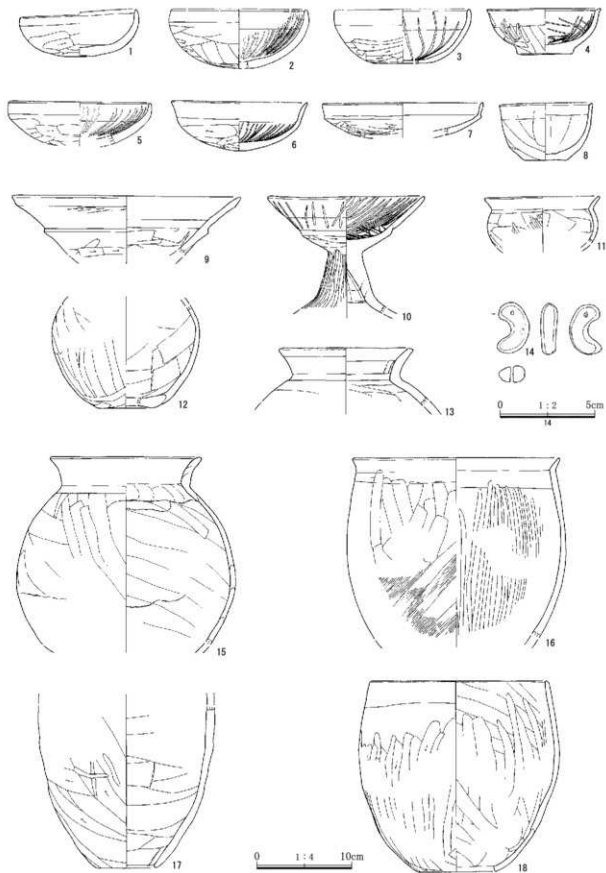
**床面** 床面は平坦である。南西隅には、長軸0.66m、短軸0.58m、深さ0.12mの楕円形の凹地が検出された。機能については不明である。

**掘り方** 掘り方は壁沿いを幅0.6~1.2mで一段深く掘り、住居中央が長軸3.2m、短軸2.8mの不定楕円形に一段高く掘り残されている。また北東隅を除く三隅が一段高く三角形に掘り残されている。掘り方面は厚さ9~15cmほどのローム塊を含む褐色土で充填されていた。

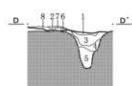
掘り方面では3基の床下土坑を検出した。1号床下土坑は長径1.08m、短径0.86m、深さ0.1mの不整楕円形、2号床下土坑は長径1.33m、短径1.03m、深さ0.11mの楕円形で住居中央部にあった。3号床下土坑は南西部の壁にかかる位置で検出された。長径0.98m、短径0.85m、深さ0.17mの楕円形である。位置からすれば本住居に伴う土坑とは考えにくい。詳細不明と言わざるを得ない。

**遺物と出土状況** 竈および主柱穴で囲まれた範囲に比較的遺物が集中して出土した。土師器杯(第194図3・5)は中央部それぞれ床面上3cm、13cmで出土した。壺(12・13)はそれぞれ中央部床面直上、床面上4cmで出土した。甕(16)は中央部床面上6cmで出土した。土師器鉢(8)は北部床面上6cm、勾玉(14)

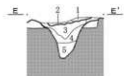
3. 古墳時代の遺構と遺物



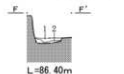
第194図 2区46号住居出土遺物(1)



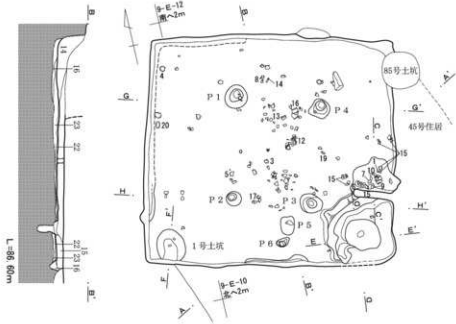
L=86.10m



L=86.10m



L=86.40m

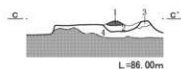
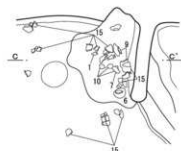


2区46号住居的藏穴D-D' E-E'

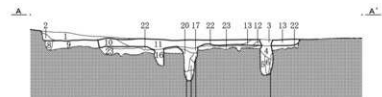
1. 焼土
2. 黒色土 白色軽石粒を含む。
3. 褐色土 白色軽石粒、黄色土粒を含む。締まりなく軟らかい。
4. 褐色土 直径1.0~3.0cmの黄色土小塊を含む。締まりなく軟らかい。
5. 褐色土 直径2.0~5.0cmのローム塊を含む。締まりなく軟らかい。
6. ローム塊
7. 褐色土微土粒を含む。
8. ローム小塊と褐色土の混土

2区46号住居1号土坑F-F'

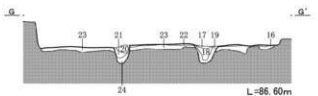
1. 黒色土 直径1.0~2.0cmの黄色粘土小塊、黄色土粒を含む。
2. 灰褐色土と黒色土の混土



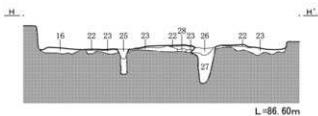
L=86.00m



L=86.60m



L=86.60m



L=86.60m

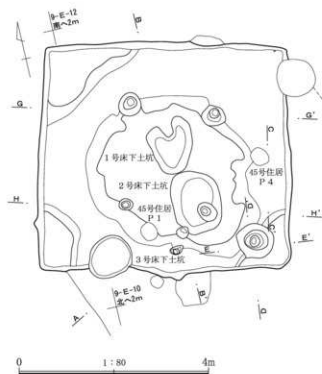
2区46号住居藏C-C'

1. 赤褐色土(焼土塊)
2. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
3. 灰白色粘性土 焼土粒を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~3.0cm)をやや多く含む。





### 3. 古墳時代の遺構と遺物



#### 2区46号住居A-A' B-B' G-G' H-H'

##### 45号住居

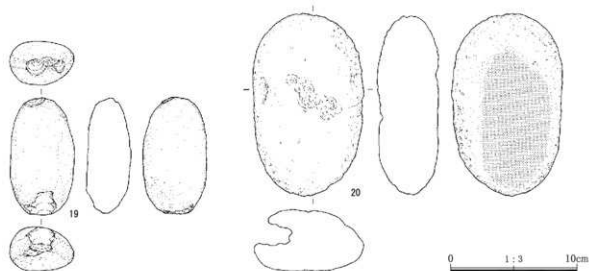
1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊、黒褐色土塊を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を多く含み、1層より明るい。
3. 暗褐色土 ローム塊含む。

##### 45号住居 P.4

4. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
5. 黄褐色土 ロームと暗褐色土が混合したものの。
6. 暗褐色土 1層よりロームの含有量が少ない。
7. 黄褐色土 直径5.0cm位のローム塊を含む。
8. 灰褐色土 ローム粒直径0.5~1.0cmのローム小塊を含む。
9. 褐色土 直径3.0~5.0cmの黒褐色土塊、直径1.0~2.0cmのローム塊を含む。

##### 46号住居

10. 褐色土 ローム塊、黒褐色土塊を含む。
11. 褐色土 3層より暗い、3層よりロームの最少ない。
12. 灰色土と粘土の混土。
13. 暗褐色土 ロームを多く含み、4層より明るい。
14. 黄褐色土 ロームが主成分。
15. 暗褐色土 ローム、黒色土粒を含む。
16. 褐色土 直径1.0~2.0cmのローム粒を少量含む。
17. 黒色土 白色軽石粒を含む。
18. 褐色土 炭化物粒、粘土粒を含む。
19. 黒褐色土 焼土粒を含まない、ローム粒を含む。
20. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊を含む。
21. 褐色土 ローム粒、直径1.0~2.0cmのローム塊を含む。
22. 黄褐色土 直径1.0~2.0cm黒色土小塊を含む。
23. 暗褐色土 直径1.0~2.0cmのローム塊と黒褐色土の混土 硬く締まっている。
24. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊を含む。
25. 黄褐色土 締まりない。
26. 褐色土 ローム粒を含む、締まりない。
27. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。
28. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
29. 黒褐色土 塊状である。



2区46号住居と出土遺物(2)

## 第5章 2区の遺構と遺物

も北部床面上7cmで出土した。甕(17)はP2東側床面上7cmで出土した。土師器坏(4)は北西隅床面上4cmで、凹石(第195図20)は西壁際床面上4cmで出土した。敲石(19)はP3・P4の間の床面直上で出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器4点、土師器359点、粘土塊2点、大型礫1点、礫1点、礫片4点、剥片2点が出土した。この他に、45号・46号住居を同時に掘り下げた際に埋没土中から出土した遺物がある。どちらの住居の出土遺物が特定できない。これらの遺物は土師器862点、粘土塊3点、直径6～7cmの軽石5点、小円礫5点、礫片7点、剥片3点である。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

### 2区旧47号住居 (PL105)

**所見** 本遺構は、PL105-7・8のように48号住居南西部に重複して検出された。調査時には住居として調査・記録を行ったが、整理作業を実施した結果、住居と認定できる情報は極めて少ない。むしろ遺物分布および掘り込みの形状は48号住居の一部である可能性をより強く示していると考えられる。

本遺構および隣接する50号住居北西部周辺は著しく削平を受けており、確認面は斜面になっていた。本遺構と48号住居の確認時には、削平部分を埋めていた砂質の暗褐色土が本遺構部分に残っており、48号住居とは別の遺構の埋没土であると判断されたものとみられる。(PL105-6)しかし、その下位の埋没土は48号住居の埋没土と共通しており、土器群の分布も48号住居の遺物分布に連続している。(第197図)それらの中には接合例もあり、本遺構北壁際で出土した土器は48号住居南部の床面直上で出土した土師器埴(第198図17)に接合した。

また、本遺構の床面および掘り方面で10基の小ピットを検出しているが、いずれも本遺構を住居と判断させるような柱穴ではない。それぞれの規模(長さ×短径×深さ)は、P1が32×20×52cm、P2が30

×25×25cm、P3が22×20×60cm、P4が28×20×18cm、P5が32×27×5cm、P6が26×20×25cm、P7が32×20×5cm、P8が27×26×10cm、P9が24×20×16cm、P10が36×16×24cmである。

以上のように、本遺構は単独に住居としては不十分であることから、報告書では住居としての扱いはとらないこととし、48号住居の記述にあたっては本遺構のデータを合成して報告することとした。

なお、47号住居としてとりあげた遺物は図化した土師器2点と、土師器82点、須恵器甕破片1点、粘土塊1点、剥片1点である。図化した2点は48号住居の出土遺物とともに掲載した。(第198図8・19)

2区48号住居 (第196～201図 PL106・107・184・186 遺物観  
察表P.587・588・612)

**位置** 2a区2-9-B・C-11・12G

**形状** 長方形。南西部は掘削により切られているが、掘り方面の調査で輪郭をとらえることができた。

**重複** 49・50号土坑より古い。

**規模** 長軸4.29m 短軸3.39m 壁高0.57m

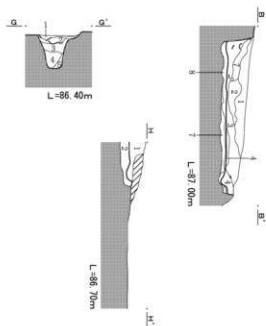
**面積** (15.53)㎡

**長軸方位** N-85°-E

**埋没土** 上層はローム粒・軽石粒を含む褐色土で、下層は暗褐色土塊を含む黄褐色土で埋まっていた。特に上層下部の3層は西半分に堆積し、土器破片や小礫を多量に含み、本住居埋没時に土器廃棄に伴って堆積した埋没土と推定される。

**竈** 住居東壁中央やや南寄りに竈が構築された。確認長0.89m、燃焼部幅0.34m。袖の残存長は向かって右側が0.86m、左側が0.72m。壁外に0.07m煙道が伸びる。竈の主軸は東壁と直交せず、75度ほど南に傾いていた。

燃焼部内左側には土製支脚(第200図38)が立てられていた。また、焚き口部使用面直上で扁平な棒状の土製品(37)が竈主軸に直交する位置で出土した。出土位置や形状から焚き口部の上部縁に使われた竈部品と推定される。左右の袖先端には芯材として礫が配置されていた。



## 2区48号住居 A-A' B-B'

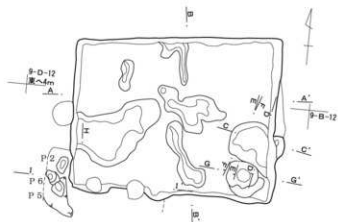
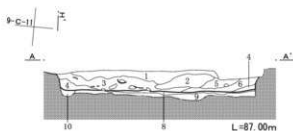
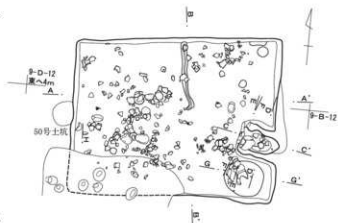
1. 褐色土 ローム粒、軽石粒、ローム塊を含む。
2. 褐色土 ローム塊を多量を含む。全体としては明るい。
3. 褐色土 暗褐色土塊、ローム塊、土器、石を多く含む。
4. 黄褐色土 暗褐色土塊を含む。
5. 暗褐色土 褐色土大塊を含む。
6. 黄褐色土 4層と同じであるが、暗褐色土塊を含む。
7. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
8. 暗黄褐色土 暗褐色土塊を少量混入。硬く締まっている。ローム主体。
9. 黄褐色土 ローム主体、ハードローム塊を含む。
10. にぶい黄褐色土 ハードローム塊が混入。

## 2区48号住居 H-H'

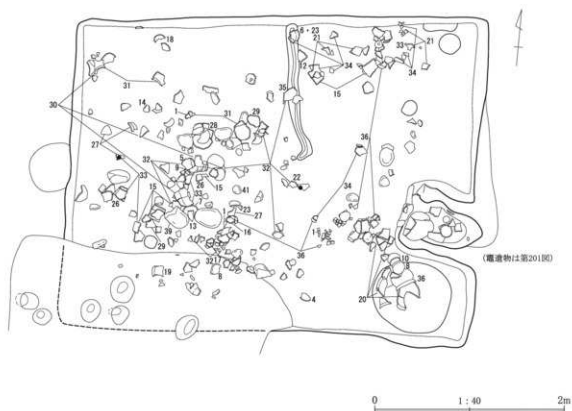
1. 暗褐色土-黒褐色土 ローム塊、固化物粒、ローム粒を含む。
2. 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土をわずかに混入。

## 2区48号住居貯蔵穴 G-G'

1. 暗黄褐色土 小ローム粒、多く混入。固化物粒、焼土粒をわずかに含む。締まりが強く、表面が硬いような硬さ。
2. やや明るい暗褐色土 黒褐色土まだらに10%混入。中ローム粒、全体に20%含む。
3. にぶい黄褐色土 大ローム塊混入。やや締まりなし。灰色粒土粒を少量含む。
4. 暗黄褐色土 中ローム粒を全体に混入。粘性やや強い。黒褐色土粒も少量混入。
5. 暗黄褐色土 少ローム粒が混入。やや締まりなし。粘性やや強い。



0 1:80 4m



第197図 2区48号住居遺物出土状態

甕に残されていた土器はほとんど完形に近い状態で出土した。土師器大型壺(第199図25)の破片が、焚き口付近燃焼部左右の使用面直上で伏せた状態で出土した。坏(第198図2)が燃焼部中央、支脚脇使用面直上で正位で出土した。甕底部(24)は燃焼部奥右壁沿いで出土した。

**柱穴** 調査できた範囲の中では主柱穴は検出できなかった。旧47号住居の床面および掘り方で10基の小ピットを検出しているが、本住居の構造に関わるピットと判断できるものはない。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.82m、短径0.75m、深さ0.7mのはほぼ円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.28m、短径0.26mの円形である。上層には西側から落ち込むような状態で完形に近い土器が出土した。土師器甕(第200図36)は貯蔵穴底面上50cmと甕前床面直上さらに北東部床面上8cm、中央部南の床面直上

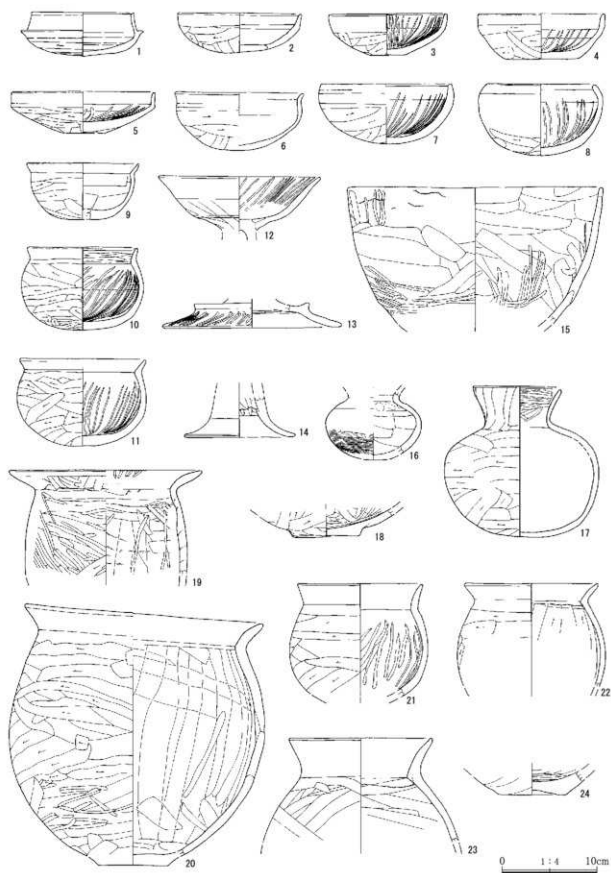
の破片が接合した。甕(第198図20)は貯蔵穴底面上64cm、甕前床面直上出土の遺物が接合した。また坏(10・11)は合口の状態で貯蔵穴北西縁床面直上で出土した。

**床面** 床面は平坦で、中央部を中心に硬化していた。また北壁には東壁から2.1mのところに壁に直交する小溝が検出された。小溝の幅0.1m、長さ1.45m、深さ0.07mで、南端はやや西側に回り込んでいる。

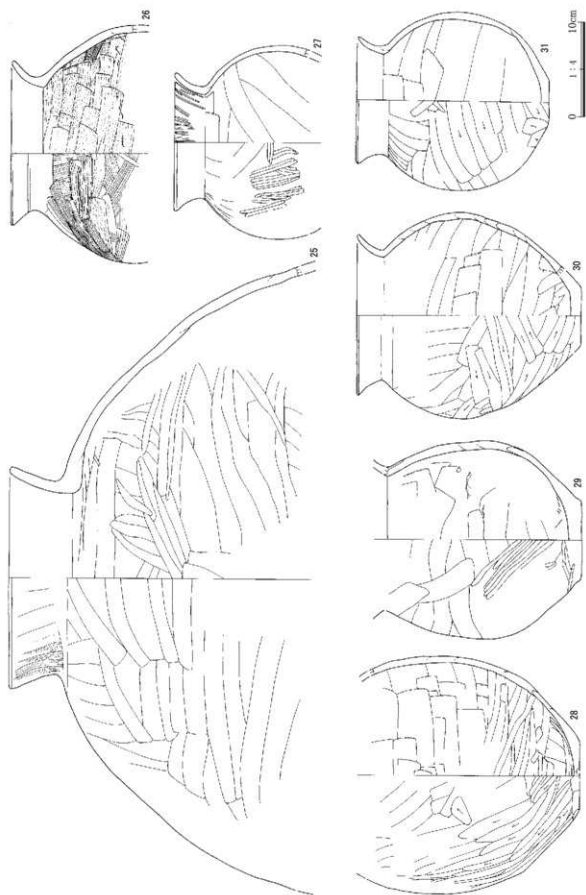
**掘り方** 掘り方面では中央部と南西隅に不定形にやや深く掘り込んでいた。全体としては厚さ5～18cmのローム塊を含む暗黄褐色土・黄褐色土で充填されていた。掘り方面でも主柱穴を確認することはできなかった。

**遺物と出土状況** 住居全体から多量の遺物が出土した。埋没土中で出土した遺物が多いが、特に3層に含まれて遺物が住居西側を中心に出土した。第197図に、床面直上およびそれらに接合した遺物の接合状

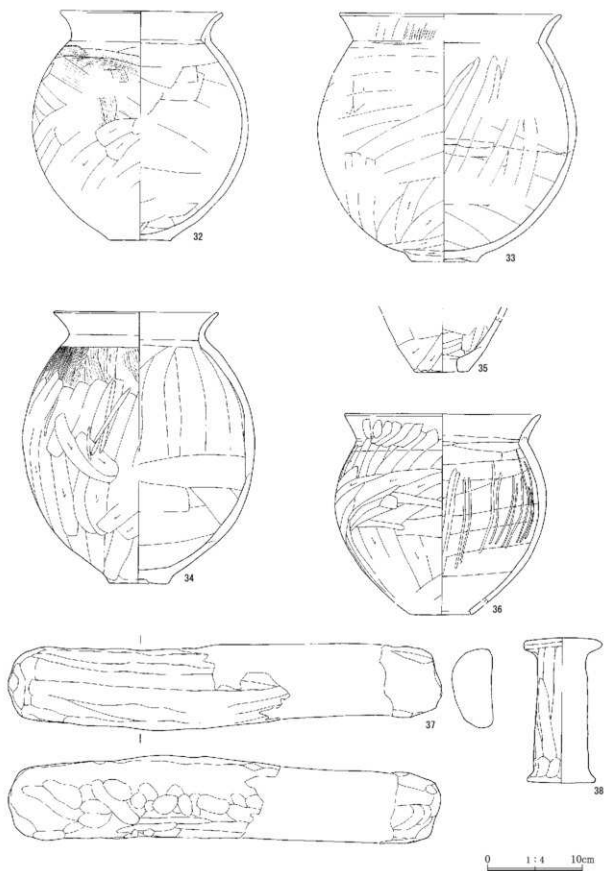
3. 古墳時代の遺構と遺物



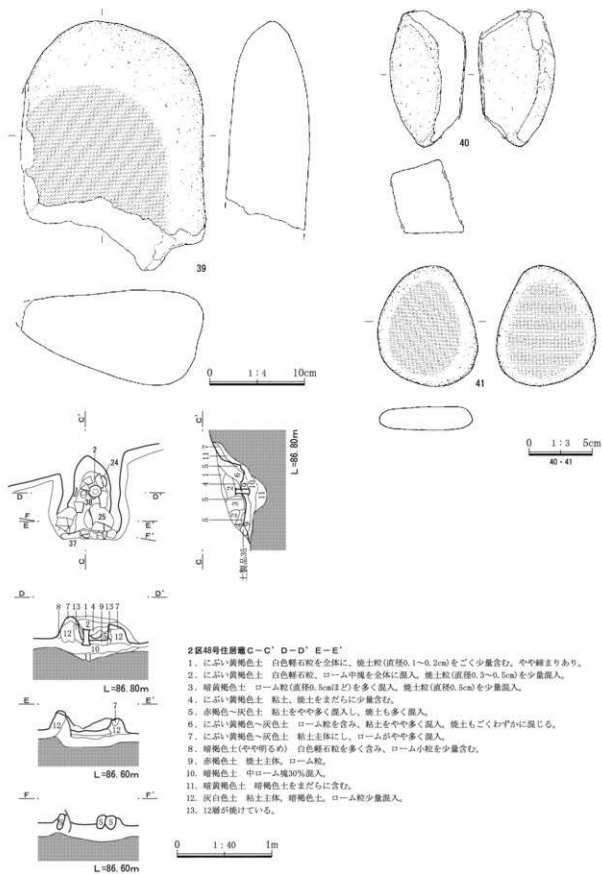
第198図 2区48号住居出土遺物(1)



第199図 2区48号住居出土遺物(2)



第200図 2区48号住居出土遺物(3)



2区48号住居遺構C-C' D-D' E-E'

1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒を全体に、焼土粒(直径0.1~0.2cm)をごく少量含む。やや締まりあり。
2. にぶい黄褐色土 白色軽石粒、ローム中塊を全体に混入。焼土粒(直径0.3~0.5cm)を少量混入。
3. 暗黄褐色土 ローム粒(直径0.5cmほど)を多く混入。焼土粒(直径0.5cm)を少量混入。
4. にぶい黄褐色土 粘土、焼土をまだらに少量含む。
5. 赤褐色~灰色土 粘土をやや多く混入し、焼土も多く混入。
6. にぶい黄褐色~灰色土 ローム粒を含み、粘土をやや多く混入。焼土もごくわずかに混じる。
7. にぶい黄褐色~灰色土 粘土主体にし、ロームがやや多く混入。
8. 暗褐色土(やや明るめ) 白色軽石粒を多く含む、ローム小粒を少量含む。
9. 赤褐色土 焼土主体、ローム粒。
10. 暗褐色土 中ローム塊30%混入。
11. 暗黄褐色土 暗褐色土をまだらに含む。
12. 灰白色土 粘土主体、暗褐色土、ローム粒少量混入。
13. 12層が壊れている。

第201図 2区48号住居出土遺物(4)と遺



態と図化遺物の出土位置を示した。床面近くで出土した遺物は、前述した竈・貯蔵穴で出土した遺物のほか、中央部に散乱した破片が接合した須恵器坏身(第198図1)・土師器甕(第200図32)、北壁小溝上面で出土した瓶(35)と、南東部で出土した土師器埴(第198図17)である。この埴には旧47号住居出土遺物の破片が接合した。また、楢石(第201図39)も中央部床面直上で出土した。

図化できた遺物のなかで埋没土中の遺物は22個体を数えるが、土師器坏(第198図7)を除き出土位置を記録しなかった。これらの土師器は北壁沿いから西部にかけて床面から5~25cmほど浮いた状態で出土した。これらは礫を混じる埋没土の3層に含まれている。器種は坏・鉢・高坏・甕・壺があり、一部に偏る傾向はない。これらの埋没土中から出土した土器は、先述した床面直上で出土した土器と時期が大きく異なることはなく、48号住居廃絶後さほど時間を置かずに廃棄されたものと推定される。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器416点、粘土塊3点、小型礫9点、棒状礫2点、礫片6点、剥片11点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

## 2区49号住居

(第202~204図 PL106・109・187 遺物観察表P.589)

**位置** 2a区2-8-S・T-8・9G

**形状** 正方形

**重複** 北側で51号住居と重複。本住居の方が新しい。

**規模** 長軸4.18m 短軸4.14m 壁高0.66m

**面積** 17.69㎡ **長軸方位** N-67°-E

**埋没土** 上層は白色軽石・ローム粒を含む暗褐色土、下層はローム粒・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。北半部の2層・6層の堆積は水平で不自然であり、人為的な埋め戻しがあった可能性もあるが、確定できなかった。

**竈** 住居東壁中央やや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.09m、燃焼部幅0.44m。袖の残存長は向か

って右側が0.87m、左側が0.84m。壁外に0.23m煙道が伸びる。燃焼部のほぼ中央には土師器埴の下半部(第203図4)が支脚とその直上には鉢(8)の破片がのっていた。燃焼部焚き口付近には土師器小型甕(7・9)、甕(11)の破片が重なるようにして出土した。9と11の破片は竈左脇および右脇の床面直上で出土した破片と接合した。また、燃焼部奥の埋没土中位で、土師器鉢(6)に小型瓶(10)がのせられたままの状態でも倒位で出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を掘り方で検出した。それぞれの規模(掘り方面での長径×短径×床面からの深さ)は、P1が20×18×32cm、P2が27×26×62cm、P3が33×33×32cm、P4が37×35×44cmである。

床面では柱穴の輪郭だけを記録し、床面一掘り方一柱穴との関係を確認するために、新たに土層確認用のセクションF-Fを設定して掘り下げた。柱間の距離がP1-P2間とP3-P4間で異なることから周辺を精査したが、柱穴は検出できなかった。

**周溝** 周溝は西壁と南壁を巡る。幅は概ね18cm、深さは16cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.74m、短径0.72m、深さ0.52mの隅丸正方形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.53m、短径0.46mの隅丸方形である。断面形は箱形で、底面は平坦である。

中層には炭化材が出土し、上層には土師器瓶(第204図16)が完形で出土した。口縁部を下にして斜めに落ち込んだような状態であった。また、南西縁では甕(第203図14)が正位で出土した。

炭化材については取り上げられる状態ではなく樹種等のデータをとることができなかった。

**床面** 床面は平坦である。主柱穴を結んだ線の内側を中心に床面が硬化していた。貯蔵穴西側の南壁沿いは、不定形に2~4cm凹んでいた。何らかの施設があった可能性があるが、詳細は不明であった。

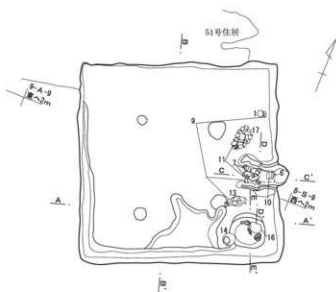
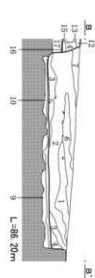
**掘り方** 中央部が東西に帯状に5~15cmほど深く掘り込まれていたほか、四隅の一部も不定形に深くなっている部分があったが、規則性のある掘り込みで

第5章 2区の遺構と遺物



2区49号住居貯蔵穴E-E'

1. 暗褐色～黒褐色の間の土  
ロームを粒状(直径1.0cm  
ほど)均一に少量含む。

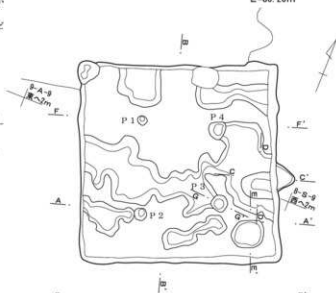
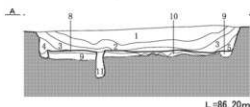


2区49号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色～暗黄褐色土 小ローム塊、白色軽石粒、ローム粒、黒褐色土塊10%混入。
2. 暗褐色土 ローム粒を全体的に5%混入、白色軽石粒を含む。
3. 暗褐色～黒褐色土 ローム塊、ローム粒、粘土20%混入。
4. 黒褐色土 ローム塊30%混入。
5. 黒褐色土 炭土塊やや多く混入。(35～40%)
6. 暗褐色～黒褐色土 白色軽石粒を多く含む、ローム粒をわずかに混入。
7. 暗黄褐色土 におい黄褐色土と暗褐色土を2:3の割合でまじらに含む。白色軽石粒が混入。
8. 黒褐色土プラスローム塊 やや硬く締まっている。
9. 黒褐色土プラスローム塊(黒褐色土の割合がやや多い)。
10. におい黄褐色土 暗褐色土を少量混入。
11. におい黄褐色土 小ローム塊を少量含む。

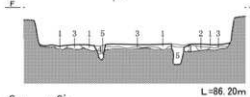
51号住居

12. 暗褐色土 中ローム塊少量混入、やや砂質、白色軽石粒を含む。
13. 暗黄褐色土 ローム塊、黒褐色土塊、炭化物粒、従土粒を含む(ローム塊の方が多し)。粘土がまじらに混入。
14. 暗黄褐色土 パミスを含む、黒褐色土とローム塊を多量に含む、におい黄褐色土をまじらに混入。
15. やや明るい暗黄褐色土 ローム粒、粘土粒、粘土粒が混入。
16. 暗黄褐色土 暗褐色塊、粘土塊含む、硬く締まっている。
17. 暗黄褐色土 ローム塊、暗褐色塊を多く含む。



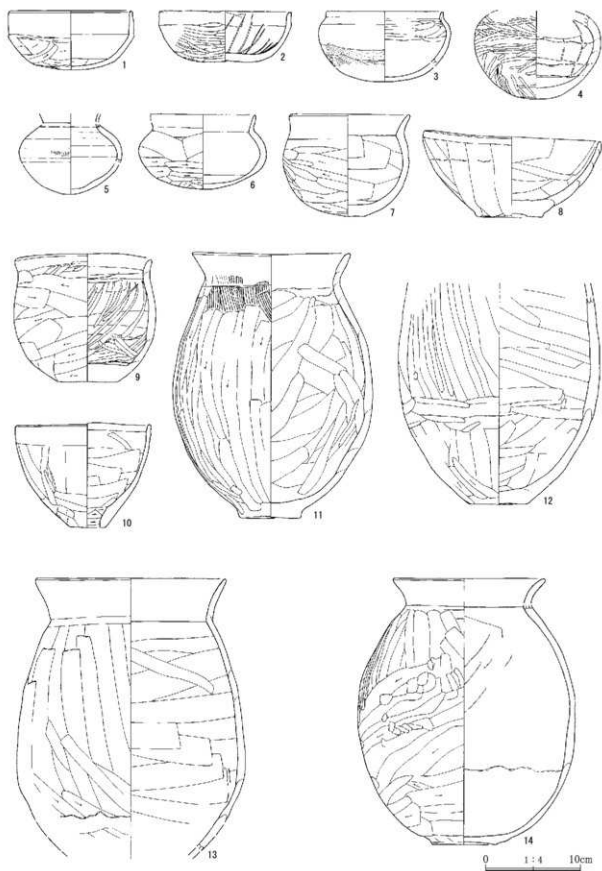
2区49号住居F-F'

1. 黒褐色土プラスローム塊 やや硬く締まっている。
2. 黒褐色土プラスローム塊(黒褐色土の割合がやや多い)。
3. におい黄褐色土 暗褐色土を少量混入。
4. 暗黄褐色土 暗褐色土、炭土粒が混入。
5. におい黄褐色土 小ローム塊を少量含む、植物繊維が水分で黒く変化したものを全体に含む。

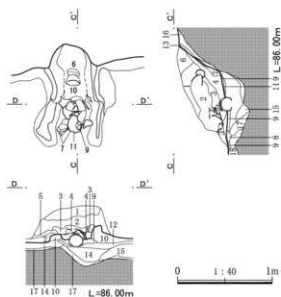
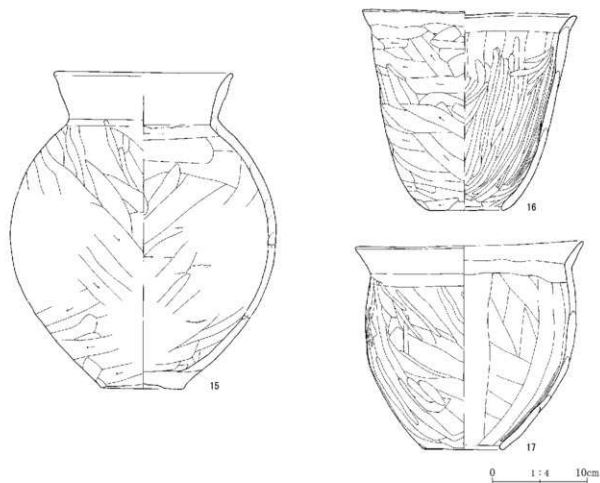


0 1:80 4m

第202図 2区49号住居



第203図 2区49号住居出土遺物(1)



2区49号住居遺C-C' D-D'

1. 灰色の強い暗褐色土 粘土をやや多く含む。ローム粒少量混入。
2. 暗褐色土 ローム粒、粘土粒、焼土粒が混入。
3. 灰色粘土主体 天井崩落土と思われる。
4. 赤灰色褐色土 粘土が抜け、焼土化したもの。
5. 3層と4層を1:1で混入。
6. 暗黄褐色土 焼土塊、粘土塊、ローム塊が混入。
7. 暗褐色土 炭化物粒、粘土を少量含む。
8. 赤褐色土 焼土主体。
9. 暗褐色～黒褐色の間 炭、焼土(粒状にも含む、直径5.0cmほど)混じり、全体的に赤褐色味あり(焼土の高)。
10. 褐色シルト 黄褐色(ローム)粒(直径1.0cmほど)、焼土が混入。硬く締まる。腐植層粘土。
11. 褐色シルト 10層と同じ。腐植層粘土でない為別番号。
12. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径5.0cmほど)に少量含む。
13. 褐色シルト 11層と同様の理由で別番号にした。
14. 黒褐色土 ロームを粒および塊状(直径2.0cmほど)に含む。
15. 暗黄褐色土 暗褐色土とロームの混じり。またロームは粒および塊状(直径2.0cmほど)に均一にも含む。
16. 暗褐色土 この辺りのローム上層の暗褐色地山に類似するが、褐色シルト塊(直径1.0～3.0cmほど)を少量含む。
17. 暗黄褐色土 ローム主体、暗褐色土少量混入。
18. 15層に類似。17層を挟む為別番号を付ける。

第204図 2区49号住居出土遺物(2)と竈

はなかった。全体としては厚さ6~20cmの濃い黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 竈および貯蔵穴周辺から遺物が集中して出土した。土師器甕(第204図17)は竈左袖脇床面直上で出土した。坏(第203図1)は東壁中央壁際の床面直上で出土した。甕(13)は竈右側P3脇床面上4cmで出土した。須恵器甕(5)など他の固化した遺物は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器243点、粘土塊3点、打製石斧1点(第275図14)、削器1点(第279図58)、三角錐形石器破片1点、剥片9点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。

#### 2区50号住居

(第26図 PL109・110・188 遺物観察表P.589)

**位置** 2区2-8-T-10・11G、  
2-9-A・B-9~11G

**形状** 長方形。北西隅を攪乱に壊されている。また全体に攪乱がおよび、北壁の西半部と西壁の大部分の立ち上がりを確認することはできなかった。

**重複** 51号住居より新。71・72・73・86号土坑より古。

**規模** 推定長軸8.28m 短軸7.15m 壁高0.42m

**面積** (60.06)㎡ **長軸方位** N-76°-E

**竈** 住居東壁中央よりやや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.20m、燃焼部幅0.50m。袖の残存長は向かって右側が1.17m、左側が1.12m。壁外に0.04m煙道が伸びる。竈主軸は東壁に直交せず、75度南に傾いていた。燃焼部中央左壁沿いで土師器甕(第205図4)が使用面直上で出土した。これには竈右脇床面直上で出土した破片が接合した。また坏(2)が竈右袖脇床面上6cmで出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3と、機能は不明であるがP4を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が44×34×40cm、P2が39×35×53cm、P3が46×38×61cm、P4が42×40×44cmである。床面では柱穴の輪郭だけを記録し、床面-掘り方-柱穴との関係を確認するため

に、新たに土層確認用のセクションA-A'、B-B'を設定して掘り下げた。

また掘り方でP5とP6を南壁際で検出した。それぞれの規模はP5が34×24×24cm、P6が58×36×35cmである。南壁中央壁際にあることから、入り口施設とも考えられるが、確定はできなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は周辺の攪乱により、南西隅から南壁にかけて、北壁の東半部および東壁沿いの2カ所で検出できたにとどまった。中部は硬化面が剥がれた面の記録となった。主柱穴3基が検出できたことから復元的に住居の範囲を想定して調査した。

**掘り方** 中央部・竈部・北壁沿いの一部がやや高く、北東部や南西部はやや深く掘り込まれていた。全体としては厚さ4~23cmの濃黄褐色土で充填されていた。前述のように南壁沿いでP5・P6を検出した。北西隅の主柱穴については掘り方面での検出に努めたが、検出できなかった。深い攪乱部分にあたり消失したものと推定される。本住居の掘り方は51号住居と一緒に掘り下げた。51号住居の掘り方が深かったため、本住居掘り方の記録ができなかった。

**遺物と出土状況** 遺物は竈右袖に集中して出土した。土師器坏(第205図1)と鉢(3)は埋没土中から出土した。図示した遺物のほか、縄文土器5点、土師器194点、粘土塊2点、礫片1点、剥片6点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

#### 2区51号住居

(第206~208図 PL110・111・188 遺物観察表P.590・612)

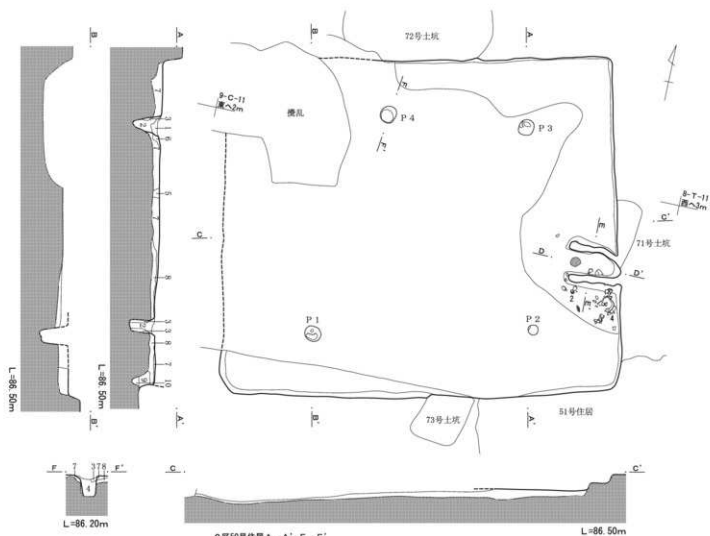
**位置** 2区2-8-S・T-8~10G、  
2-9-A-9・10G

**形状** ほゞ正方形。南東隅は49号住居に切られて記録できなかった。

**重複** 49号・50号住居より古い。

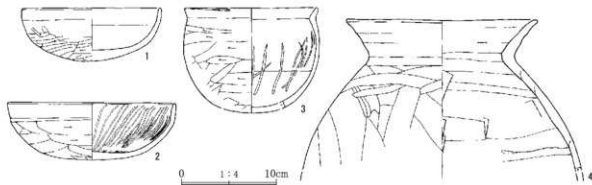
**規模** 長軸6.84m 短軸6.14m 壁高0.70m

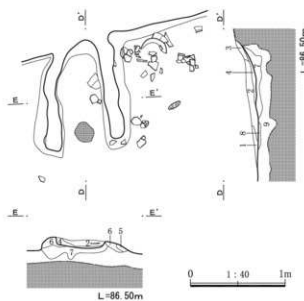
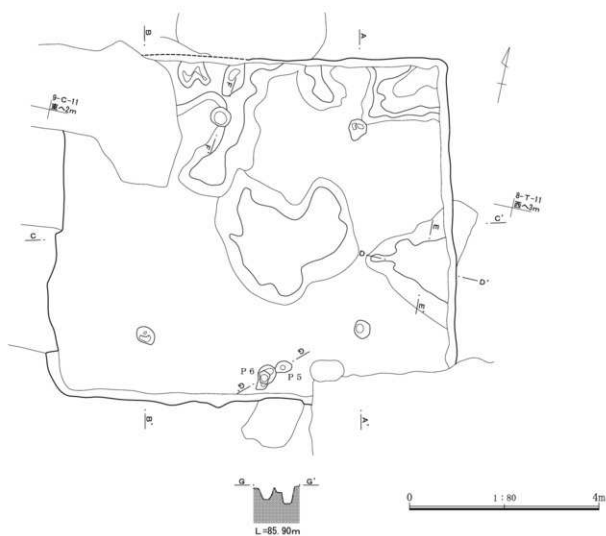
**面積** (41.73)㎡ **長軸方位** N-74°-E



2区50号住居A-A' F-F'

1. 暗黄褐色土 4層に類似するがやや黒色味あり。
  2. 濃黄褐色～暗黄褐色の間の色調の土 ロームが均一に混じる。
  3. 濃黄褐色土 ローム主体。
  4. 黒褐色土 ローム混じり。また粒および塊状(直径10.0cmほど)にも含む。締まり強い。
  5. 黒褐色土 ビットの埋設土(中心にかかっている)。ややサラサラしている。
  6. 暗黄褐色土 ロームが均一に混じる。ビット掘削時に塵り込んだ部分か。
  7. 濃黄褐色土 ローム主体。
  8. にがい黄褐色土 ローム主体。5層よりは締まり強い。
- 51号住居
9. 暗褐色土 ローム混じり。またまだらにも含む。
  10. 暗黄褐色土 11層よりロームの混じり多い(均一に)。暗褐色土とロームの混土。





2区50号住居と出土遺物

## 2区50号住居D-D' E-E'

1. 暗褐色～黒褐色土 炭化物、焼土粒をやや多く混入。小ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色～暗黄褐色土 焼土を多く含む。ローム粒、炭化物粒を少量混入。
3. 灰褐色～薄赤色土 粘土を多く含む(やや塊けており、ピンク色っぽい)。灰色粘土粒、焼土粒、黒褐色粒を少量含む。やや粘性あり。
4. 暗褐色土 中ローム塊、粘土(焼土、ローム粒を含んでいる)塊を混入。
5. 灰色シルトとロームの混土。
6. 灰色シルト 硬く締まる。
7. 暗褐色土 ロームを粒状(直径0.5～1.0cmほど)に含む。
8. 赤褐色土 焼土層。
9. 暗褐色土 暗褐色土とロームの混土。ロームが主体の部分。暗褐色土が主体の部分があるが、基本的にはローム主体の所が多い。

**埋没土** 上層はローム粒・白色軽石を含む暗褐色土、下層はローム粒・塊、黒褐色土塊を含む暗黄褐色土。

**竈** 住居東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.36m、燃焼部幅0.68m。袖の残存長は向かって右側が0.91m、左側が1.05m。壁外に0.39m煙道が伸びていた。左袖先端には芯材として礎が置かれていた。また燃焼部中央やや左に寄った位置に支脚の礎が立てられていた。焚き口部には竈焚き口の天井枠に使われていたと推定される大型の礎が出土した。燃焼部焚き口付近には多くの礎や遺物が出土した。土師器坏(第207図5・6)は竈前床面直上で出土した。甕(16)は燃焼部中央使用面上8cmで出土した。小型甕(17)は燃焼部使用面直上の破片と竈前出土の破片が接合した。壺(18)は燃焼部使用面直上の破片と左袖脇出土の破片が接合した。壺(19)も燃焼部奥使用面直上の破片と左袖脇出土の破片が接合した。

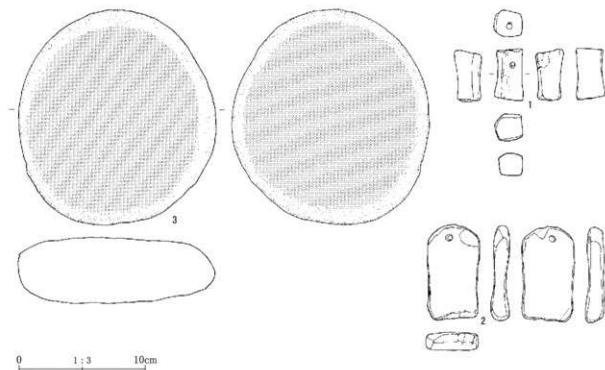
**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が56×41×53cm、P2が52×50×58cm、P3が58×44×58cm、P4が42×35×43cmである床

面では柱穴の輪郭だけを記録し、床面-掘り方-柱穴との関係を確認するために、新たに土層確認用のセクションG-G'、H-H'を設定して掘り下げた。また、掘り方面でP5とP6を南壁際で検出した。それぞれの規模はP5が27×25×23cm、P6が31×23×23cmである。南壁中央壁際にあることから、入口施設とも考えられるが確定はできなかった。

**周溝** 周溝は床面では検出されなかった。掘り方面の南西隅の一部に巡る。幅は概ね12cm、深さは4cm。

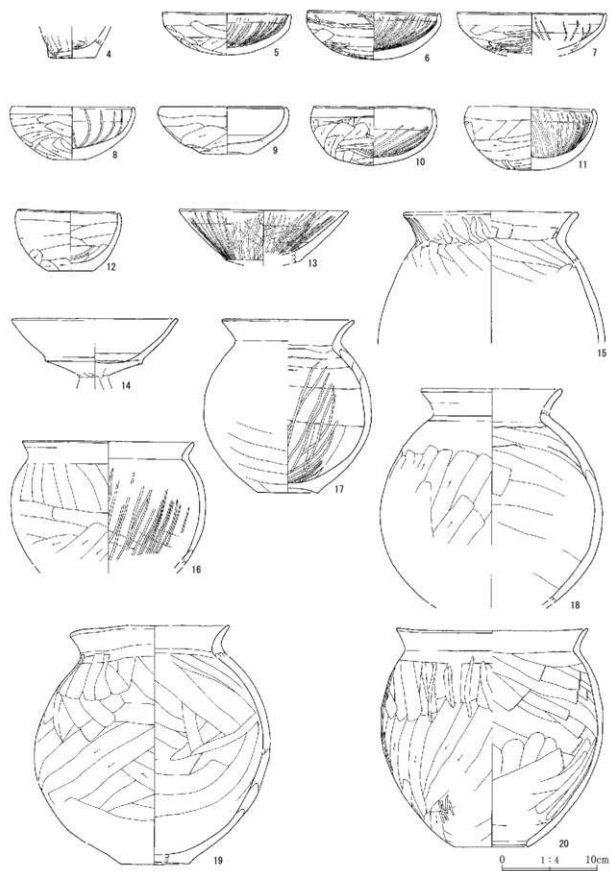
**貯蔵穴** 南東隅に長軸0.55m、短軸0.45m、深さ0.40mの隅丸長方形の貯蔵穴が掘り方面で検出された。底面も長軸0.39m、短軸0.31mの隅丸方形である。この位置は後出する49号住居に重複するところで、掘り方調査でその痕跡を検出した。床面からの深さを復元すると0.68mである。貯蔵穴からの出土遺物はなかった。

**床面** 床面は平坦である。北壁東隅と西半分および南西隅に厚さ10~15cmの炭化物が混じった焼土が堆積していた。北東隅には土器や炭化材も出土したが、焼土層に下半部が埋もれるような状況で出土した。

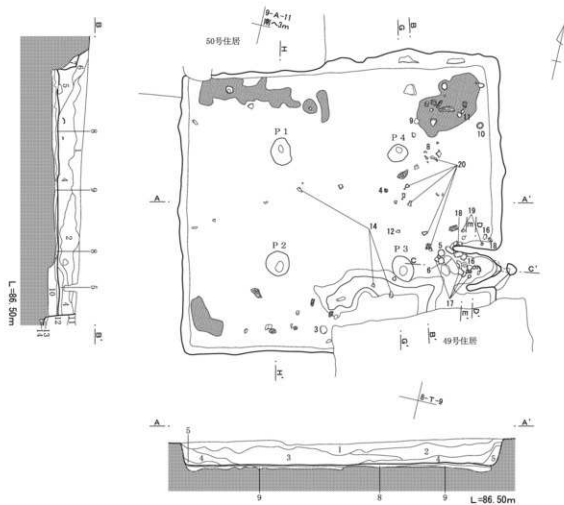


第206図 2区51号住居出土遺物(1)





第207図 2区51号住居出土遺物(2)



2区51号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 中ローム塊少量混入。やや砂質。白色軽石粒を含む。
2. 暗黄褐色土 ローム塊、黒褐色土塊、炭化物粒、焼土粒を含む(ローム塊の方が多い)。粘土がまだらに混入。
3. 暗黄褐色土 ローム塊(10%)、黒褐色土塊(15~20%)混入(黒褐色土の割合が高い)。
4. 暗黄褐色土 パミスを含む。黒褐色土とローム塊を多量に含む。にぶい黄褐色土をまだらに混入。
5. やや明るい暗黄褐色土 ローム粒、焼土粒、粘土粒が混入。
6. にぶい黄褐色土 ロームと暗褐色土をまだらに混入。パミス含む。
7. 黄褐色~にぶい黄褐色土 ローム主体。暗褐色土塊が混入。
8. 暗黄褐色土 暗褐色塊、粘土塊含む。硬く締まっている。
9. にぶい黄褐色土 ローム主体。ローム塊が混入。
10. 暗黄褐色土 ローム塊、暗褐色塊を多く含む。

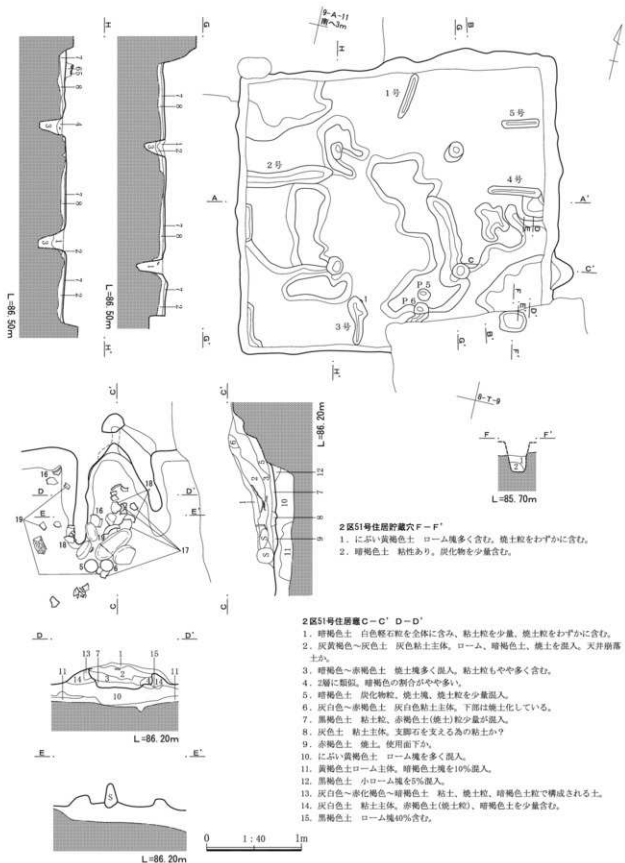
49号住居

11. 暗黄褐色土 にぶい黄褐色土と暗褐色土を2:3の割合でまだらに含む。白色軽石粒が混入。
12. 暗褐色土 ローム粒を含体的に5%混入。白色軽石粒を含む。
13. 暗褐色~黒褐色土 ローム塊、ローム粒、焼土粒20%混入。
14. にぶい黄褐色土 暗褐色土を少量混入。

2区51号住居G-G' H-H'

1. 暗褐色土 ローム粒、炭粒、ローム塊が混入。
2. にぶい黄褐色土 ローム主体。暗褐色土塊が少量混入。やや粘性あり。
3. 暗黄褐色土 ボソボソしている。
4. 暗褐色土 ローム粒、炭粒が混入。
5. 焼土
6. やや明るい暗黄褐色土 ローム粒、焼土粒、粘土粒が混入。
7. 暗黄褐色土 暗褐色塊、粘土塊含む。硬く締まっている。
8. にぶい黄褐色土 ローム主体。ローム塊が混入。





2区51号住居

南壁中央よりやや東寄りには、方形にめぐる周堤状の高まりを検出した。この高まりの内側、壁沿いに掘り方面でP5・P6が検出されている。ここでは土師器高坏(第207図14)の破片が2片、床面上6～10cmで出土した。また床面直上で使用痕跡のない棒状礫が出土した。

**掘り方** 掘り方面は、北西隅と南東隅がやや深く掘られているほか、中央部やや東側と西壁近くが帯状に周囲より10cmほど高く掘り残されていた。全体としては厚さ15～27cmほどの暗褐色土塊・粘土塊を含む暗褐色土とローム塊を含むいぶい黄褐色土で充填されていた。また、掘り方面で5条の小溝を検出した。1号小溝は北壁にやや斜行して検出され、幅0.16m、長さ0.99m、深さ0.15mであった。南端部はP1とP4の中間方向に向いている。2号小溝は西壁にはほぼ直交し、北壁から2.1mのところ検出された。幅0.29m、長さ1.84m、深さ0.06mであった。東端はP1の南側に達している。3号小溝は南壁にはほぼ直交し、西壁から2.4mの位置に検出された。幅0.16m、長さ1.02m、深さ0.14mで、北端は直径0.34の円形になっていた。この位置は南壁沿いで検出されたP5・P6の位置と一致している。4号小溝は東壁にはほぼ直交し、北壁から2.8mのところにあった。幅0.17m、長さ1.17m、深さ0.12mである。5号小溝も東壁にはほぼ直交し、北壁から1.4mで、4号小溝との中間の位置にある。

**遺物と出土状況** 竈および北東隅を中心に遺物が出土した。土師器手づくね土器(第207図4)は中央部床面上3cmで出土した。坏(8・9・10)は北東部焼土の南側で床面上4～10cmで出土した。鉢(12)はP3北側の床面直上で出土した。甗(20)は東部で散在して床面直上で出土した。砥石(第206図1)は南壁周堤状の遺構の西側床面上10cmで出土した。擦石(3)は南壁周堤状遺構の西側床面直上で出土した。砥石(2)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器24点、土師器376点、粘土塊1点、鉄滓1点、竈用材大型礫5点、礫3点、礫片4点、小型礫片12点、剥片15点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。

#### 2区52号住居

(第209・210図 PL111・189 遺物観察表P.590・612)

**位置** 2区2-8-T-11・12G、

2-9-A-11・12G

**形状** 北壁が南壁より短い台形。西壁の一部が彫らむが、これが住居の施設かどうかの調査所見は得られなかった。 **重複** なし

**規模** 長軸4.40m 短軸3.18m 壁高0.42m

**面積** 13.02㎡ **長軸方位** N-79°-W

**埋没土** 上層は黒褐色土塊を多く含む褐色土で埋まっていた。下層はローム塊・黒褐色土塊・暗褐色土塊を含む黄褐色土で埋まっていた。

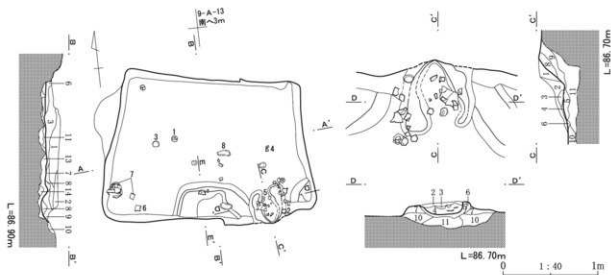
**竈** 住居南壁東部に竈が構築されていた。確認長0.76m、燃焼部幅0.41m。袖の残存長は向かって右側が0.62m、左側が0.72m。壁外に0.09m煙道が伸びる。竈左袖部を中心に遺物が出土した。土師器坏(第210図2)は左袖推定土砂の上で出土した。またり左袖周辺では土師器甕の破片は多く出土したが、図化できなかった。土師器高坏(5)は燃焼部使用面直上で出土した。

**柱穴** P1・P2・P3・P4を検出した。いずれもその位置からすれば、主柱穴とは考えられない。P2～P4は後述する南壁の周堤状遺構の下位に掘られていた。P1～P4の規模(長径×短径×深さ)は、P1が36×29×10cm、P2が41×22以上×11cm、P3が47×31×39cm、P4が44以上×28×11cmである。主柱穴は掘り方面でも検出できなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった

**貯蔵穴** 明確な貯蔵穴は検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。南壁はほぼ中央に長軸1.56m、短軸0.66mの隅丸方形の範囲を幅10cmほどの周堤状の高まりで区画する施設が検出された。中央部は深さ0.17mの半円形の凹みになっていた。これが貯蔵穴と同様な機能をもっているかどうかは判断できなかった。

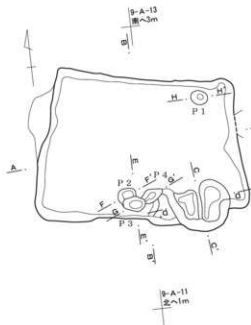
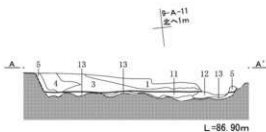


## 2区52号住居C-C' D-D'

1. 褐色土 ローム小塊、焼土粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム小塊、焼土粒を含む。
3. 焼土塊の集合、間に暗褐色土を含む。
4. 焼土塊の集合、間に暗褐色土を含むが少ない。
5. 赤褐色土 焼土主体塊、褐色土が混じっている。
6. 5層に類似する、焼土塊。
7. 暗褐色土 下位には黒褐色土、上位には黄褐色土が混じる、5層付近には黄褐色土がある。
8. 暗褐色土 直径5.0mmの焼土粒を下位に含む。
9. 暗褐色土 褐色土を含む。
10. 暗褐色土 ローム下位をまだらに含む。
11. 褐色土 ローム主体、暗褐色土をまだらに含む。

## 2区52号住居A-A' B-B'

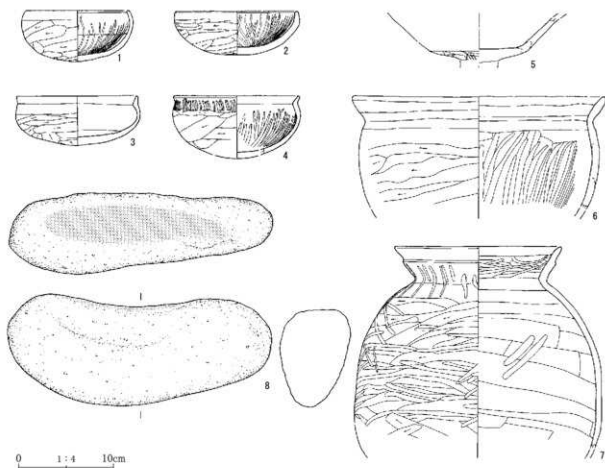
1. 褐色土 黒褐色土塊を多く、ローム塊を少量含む。
2. 褐色土 ローム粒を全体に含む。
3. 黄褐色土 ローム塊を多く含む、黒褐色土塊、暗褐色土塊を少量含む。
4. 黄褐色土 暗褐色土小塊、ローム小塊を含む。
5. 褐色土 暗褐色土塊、黒褐色土塊を含む。
6. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を含む。
7. 暗褐色土 黒褐色土小塊を含む。
8. 黄褐色土 暗褐色土小塊を含む。
9. 褐色土 2層よりやや暗い。
10. 黄褐色土 ロームと暗褐色土が混合したもので、ロームが多い。
11. 褐色土 ロームを粒および塊状(直径4.0cmほど)に均一にやや多く含む。
12. 褐色土 11層に類似、ロームの含有量は11層より少ない。
13. 褐色土 ローム主体、堆山のロームに比べあまり固い、11-12層より黄色味あり。
14. 暗褐色土 攪乱土?ロームを物に上位に含む。



0 1:80 4m



第209回 2区52号住居



第210図 2区52号住居出土遺物

**掘り方** 掘り方面もほぼ平坦で、一部を深く掘り込んだところもなかった。P2～P4が検出されたのみである。全体としては厚さ6～20cmのローム粒・下位を含む褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 甕および南西隅から遺物がまともに出土した。土師器杯(第210図4)は東部床面上4cmで出土した。壺(7)は南西隅床面上5cmで出土した。甕と思われる大型破片(6)が床面上10cmで出土した。西部で出土した土師器杯(1・3)はそれぞれ床面上31cm、27cmで出土しており、本住居に直接伴わないと推定される。砥石(8)は中央部の床面直上で出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器148点、礫3点、礫片2点、剥片3点が出土。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の住居と考えられる。南壁周堤状遺構は51号住居にも検出された。いずれも下層には小ピットが掘られている。

2区54号住居(※2118 PL112)

**位置** 2-8-S・T-13G

**形状** 長方形

**重複** 11号住居より古く、55号住居より新しい。

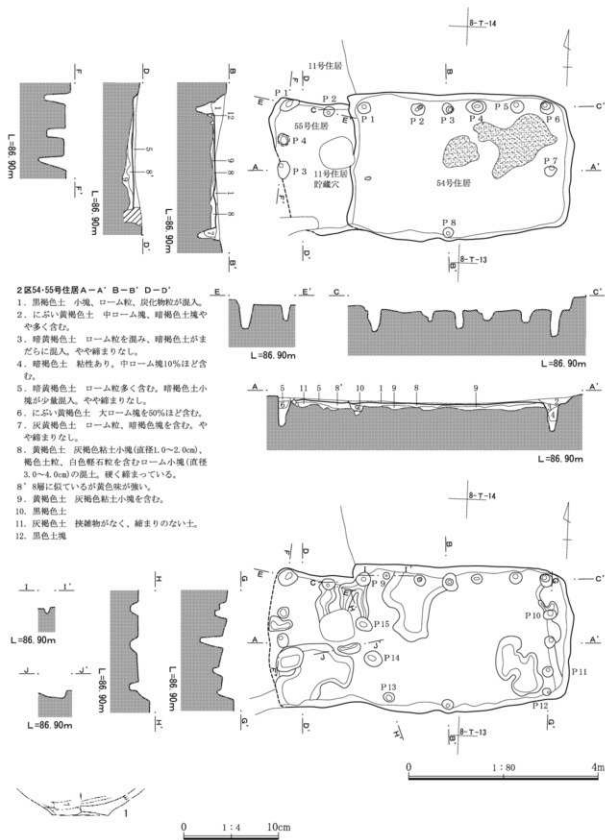
**規模** 長軸4.66m 短軸3.09m 壁高0.28m

**面積** 13.67㎡ **長軸方位** N-88°-E

**埋没土** ローム粒・塊、炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

**甕** 甕および炉は検出されなかった。

**柱穴** 床面で、P1～P8を検出した。これらは壁沿いに並び、中央部には主柱穴が検出されなかったことから、本住居は壁柱穴の構造であったと推定される。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が28×24×46cm、P2が27×25×22cm、P3が24×23×38cm、P4が44×29×21cm、P5が28×26×25cm、P6が30×28×56cm、P7が26×21×48cm、P



第211図 2区54号・55号住居と出土遺物

8が22×22×36cmである。

掘り方でこれらの柱列の間を埋める位置で、P9～P15が検出された。P9が14×14×12cm、P10が40×27×24cm、P11が23×23×16cm、P12が18×16×9cm、P13が38×32×18cm、P14が37×27×16cm、P15が32×29×15cmである。

P1とP2の間があいていることや、南西部の柱穴が検出できなかったことから、本住居の構造を推定することは困難である。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は検出されなかった。

**床面** 床面は中央部がやや高くなっており、壁周辺は2～4cm凹んでいた。北東部および中央部に粘土が広がっていた。

**掘り方** 掘り方底面は凹凸が著しく、北西部および南東部が不定形に3～5cm深く掘られていた。全体として褐灰色粘土塊を含む黄褐色土で充填されていた。また前述したように、掘り方で東壁・西壁沿いの壁柱穴が補完的に検出された。

**遺物と出土状況** 遺物は土師器8点、棒状礫1点が埋没土中から出土したのみである。いずれも小破片のため図化できなかった。

**所見** 遺構の構造は壁柱穴が巡る特異なものであり、古墳時代の一般的な堅穴住居の形態ではないが、調査では住居として番号を付し、記録した。遺構の時期についても、少ない出土遺物のなかに土師器の須恵器模倣杯の破片が1点含まれていたことから、古墳時代と考えることとした。遺構の機能や時期を確定するためには類例の調査をする必要があろう。

#### 2区55号住居(第211図 PL112 遺物観察表P.591)

**位置** 2区2-8-T-13G

**形状** 長方形と推定される。54号住居に切られる。11号住居と重複するが、本遺構の方が深いために記録することができた。南西隅は乱れがおよび、形状を明確にとらえることはできなかった。

**重複** 11号住居、54号住居より古い。埋没土の観察では、54号住居が後出する重複関係と

考えることができた。しかし、境界部分にちょうど掘り方のP5がかかり、観察を複雑にしたとも考えられ、54号住居との重複関係の判断は困難であった。しかし、埋没土の違いは明確であったことから、本遺構が古いと判断して調査した。

**規模** 長軸2.76m 短軸1.46m以上 壁高0.12m

**面積** 計画不能 長軸方位 N-2°-W

**埋没土** ローム粒・暗褐色土小塊を含む暗黄褐色土で埋まっていた。黒褐色土で埋まっていた54号住居とは対照的であった。

**竈** 竈および炉は検出されなかった。

**柱穴** 床面でP1・P2・P3・P4を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が44×22×52cm、P2が25×20×33cm、P3が37×26×55cm、P4が25×21×39cmである。西壁が明確でなかったが、P1・P2は北壁沿いにあり、55号住居も壁柱穴の構造であったと推定される。

**周溝** 周溝は検出されなかった

**貯蔵穴** 貯蔵穴は検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。本住居の床面で後出する11号住居の貯蔵穴を検出した。

**掘り方** 掘り方は凹凸が著しく、特に南半部は10cmほど不定形に掘り込まれていた。前述した柱穴列上で不定型なビットP5・P6・P7を検出したが、いずれも不定形で浅いため、柱穴とは考えられない。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP5が48×21×15cm、P6が59×46×16cm、P7が49×26×14cmである。全体としては5～25cmの灰褐色粘土小塊を含む黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は図示した土師器壺底部(第211図1)のほか、土師器10点が出土したのみである。土師器破片には内斜口縁の坏破片が含まれている。壺(1)は掘り方埋没土中から出土した。

**所見** 本遺構も54号住居同様、壁柱穴を持つ建物であり、一般的な古墳時代の堅穴住居とは異なる。住居として使われたかどうかは検討を要する。また、54号住居との関係についても、最終的な掘り方での壁柱穴の規則性からすれば、重複する別遺構では



なく、一連の遺構である可能性が高い。調査時に重複を判断した土層断面では、両遺構の境界部分にちょうど掘り方のP5がかかり、観察を複雑にしたとも考えられる。いずれにしても、古墳時代の壁柱穴の建物の類型を調査し、平地式建物との関連等も加味して総合的に判断する必要がある。

2区56号住居 (第212~215図 PL112・113・189・190 遺物観察表P.591・592・612)

**位置** 2a区2-8-Q・R-9・10G

**形状** 東壁より西壁がやや長い台形を呈する。ほぼ正方形と推定される。53号土坑に切られるが、本住居の方が深いので記録することができた。

**規模** 長軸6.14m(東壁6.20m・西壁5.76m)  
短軸5.81m 壁高0.70m

**面積** 36.44㎡ **長軸方位** N-84°-E

**埋没土** ローム粒・黒褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 東壁南寄りに竈が構築されていた。確認長1.34m、燃焼部幅0.55m。袖の残存長は向かって右側が1.12m、左側が1.13m。壁外に0.18m(推定)煙道が伸びる。左袖の残存は著しく悪く、ほとんど検出できなかった。右袖は積まれた粘土が良好に残り、やや焼き口部に回り込むように検出された。被熱が著しく焼土化していた。竈の主軸は東壁と直交せず、12度ほど南に傾いていた。

燃焼部中央に横並びに2箇所の支脚が設置されていた。また、竈焼き口部の天井にのせられていたと推定される大型礫が床面直上で出土した。竈の左右の袖先端には芯材として礫が入れられていた。

竈左脇には燃焼部出土の遺物と接合する例が多く、左袖の崩壊に伴って燃焼部の遺物が左脇に動いたと推定される。土師器杯(第213図12)は左袖北脇床面上10cmで出土した。杯(6)は袖北脇床面直上で出土した。甕(第214図37・38)は燃焼部と袖左脇床面直上出土遺物が接合した。甕(第215図45)は竈左脇床面直上で出土した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を

床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、掘り方面の計測でP1が23×19×32cm、P2が24×21×28cm、P3が26×25×50cm、P4が29×23×38cmである。床面では柱穴の輪郭だけを記録し、床面-掘り方-柱穴との関係を確認するために、新たに土層確認用のセクションF-F'・G-G'を設定して掘り下げた。

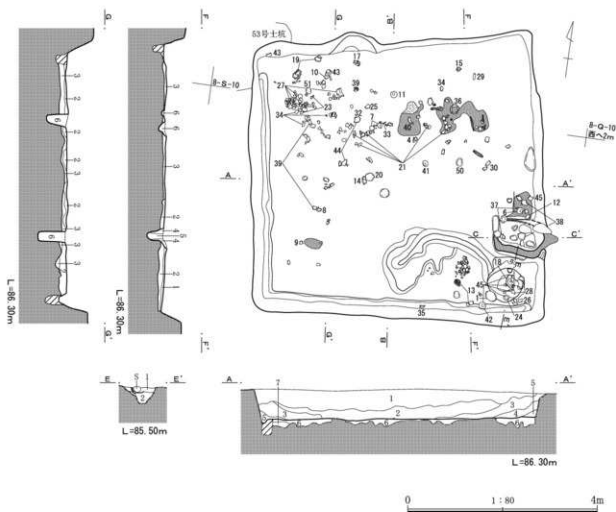
**周溝** 周溝は西壁と南壁をL字状に巡っていた。幅は概ね23cm、深さは10cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長径0.72m、短径0.70m、深さ0.30mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面も長径0.44m、短径0.42mである。貯蔵穴周辺からは遺物がまとまって出土した。土師器甕(第215図45)は南壁際床面直上の破片と貯蔵穴底面上10~18cmで出土した破片が接合した。鉢(第213図18)は底面上15cmで出土した。埴(26)・鉢(24)・甕(28)・擦石(第212図1)は南縁床面直上で出土した。

**床面** 床面は平坦である。北東部に焼土が広がっていた。貯蔵穴西側の南壁沿いには東西長軸1.9m、南北短軸1.4mの半円状の範囲に、上幅10cm、高さ5cmの周堤状の高まりが検出された。内側の床面上には土師器甕破片が散在し、杯(第213図13)が床面直上で出土した。

**掘り方** 不定形に掘り込まれていた。中央部から北東部にかけては周囲から20cmほど高くなっている。南壁沿いは深く掘り込まれていた。全体としては厚さ4~20cmのローム塊を多量に含む暗褐色土や黄褐色土で充填されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は住居北半部に集中しているほか、竈、貯蔵穴周辺からまとまって出土した。北半部の遺物はやや床面から浮いた遺物もあるが、床面近くで出土した遺物が多い。土師器杯(第213図14)・鉢(20)は中央部床面直上で出土した。杯(4)・甕(第214図36・第215図41)・杯(第213図11)・鉢(21)は北東部床面直上で出土した。杯(7)・甕(第214図33)・甕(39)・小型甕(第215図44)・擦石(51)も北西部床面直上で出土した。勾玉(46)、羽口(47)、砥石(48)は埋没土中から出土した。



2区56号住居的竈穴E-E'

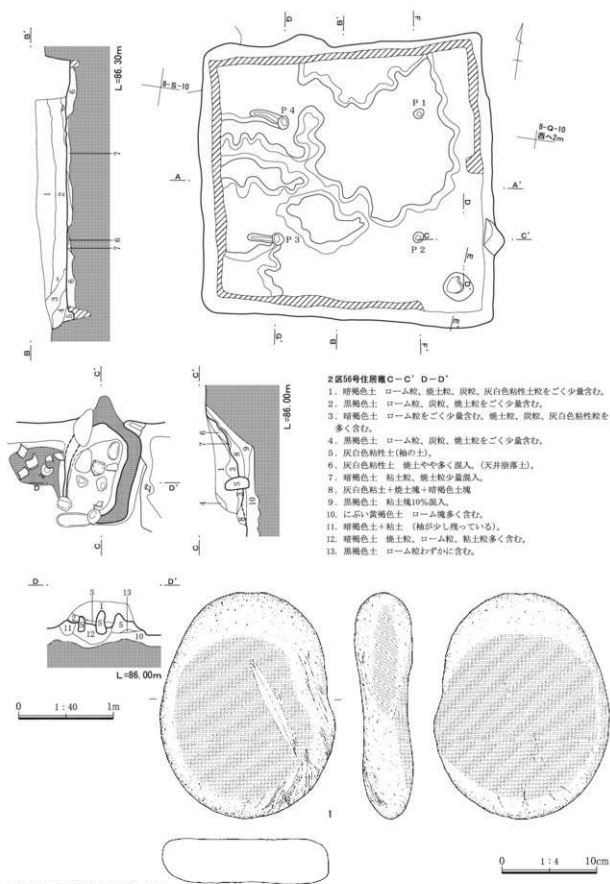
1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒わずかに含む。
2. 暗褐色土 やや硬く締まる。

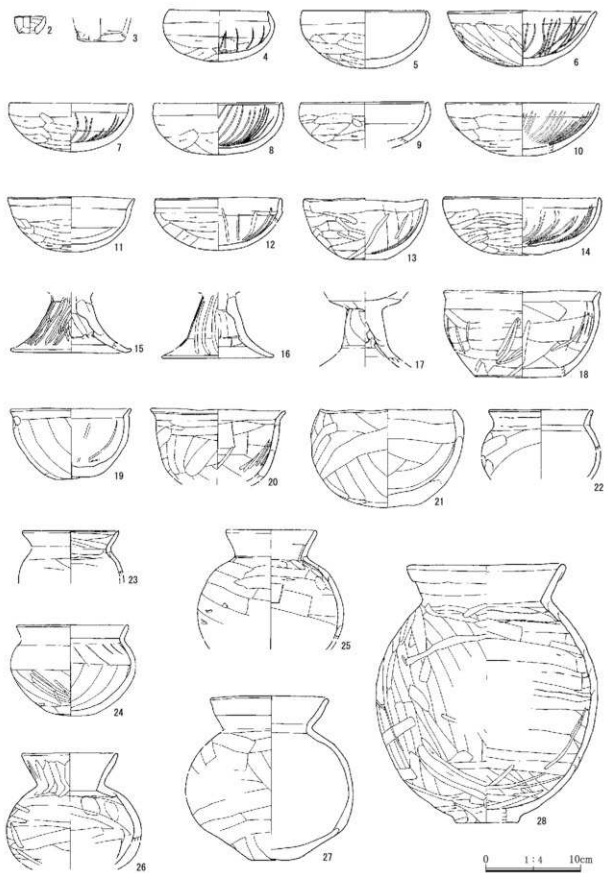
2区56号住居A-A' B-B'

1. 灰色味の強い暗褐色土 白色軽石粒、中ローム塊、ローム粒全体に含む。
2. 暗黄褐色～暗褐色土 黒褐色土塊、ローム塊、ローム粒を多く混入。
3. 暗褐色土 ローム粒、焼土塊やや少なく含む。
4. 黒褐色～暗黄褐色土 黒褐色土塊の中に中ローム塊、ローム粒混入。
5. 暗褐色土 ローム塊少数含む。
6. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径5.0cmほど)多量に含む。B-B' 南側では鉄分沈着の高赤褐色味帯びる。
7. に近い黄褐色土 ローム主体、特に上位に暗褐色土混じる部分あり。やや硬く締まる。

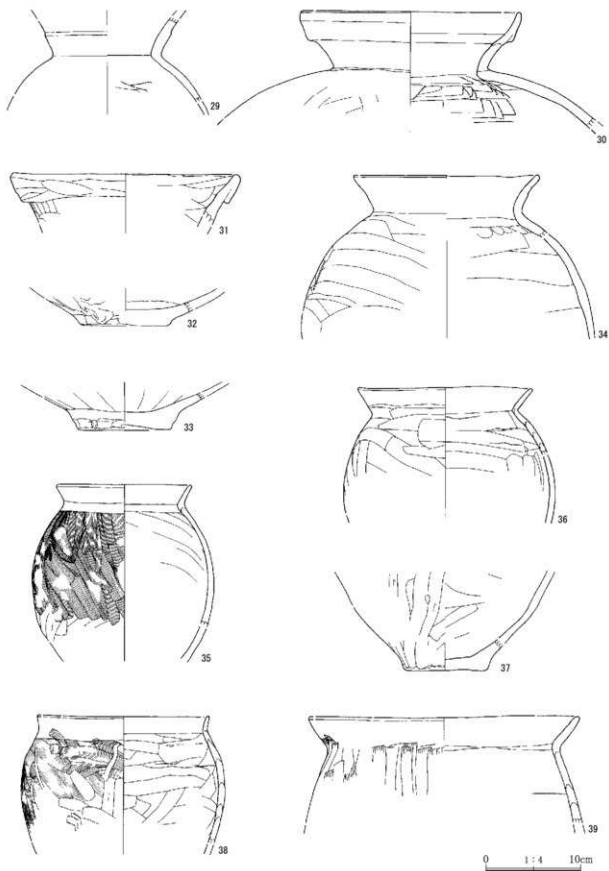
2区56号住居F-F' G-G'

1. に近い黄褐色～暗褐色土 住居A-A'、B-B'の6層に類似するが、ロームは主に層状に認められる部分(に近い黄褐色土)と、暗褐色土中にロームが粒状(直径1.0cmほど)に多く含む部分がある。硬く締まる。全体的にA-A'、B-B'の6層より黄色味あり。
2. 暗褐色土 ロームを粒および塊状(直径5.0cmほど)に多量に含む。B-B' 南側では鉄分沈着の高赤褐色味帯びる。
3. に近い黄褐色土 ローム主体、特に上位に暗褐色土混じる部分あり。やや硬く締まる。
4. 3層に類似する(ローム主体)。柱穴の埋没土の高、3層と別番号付ける。
5. 暗褐色土～暗褐色土の間の土 ローム混じり。また粒状(直径1.0cmほど)に含み、全体的にやや黄色味帯びる。
6. 暗黄褐色土 5層よりローム多く混じり、黄色味強い。やや締まり弱い。

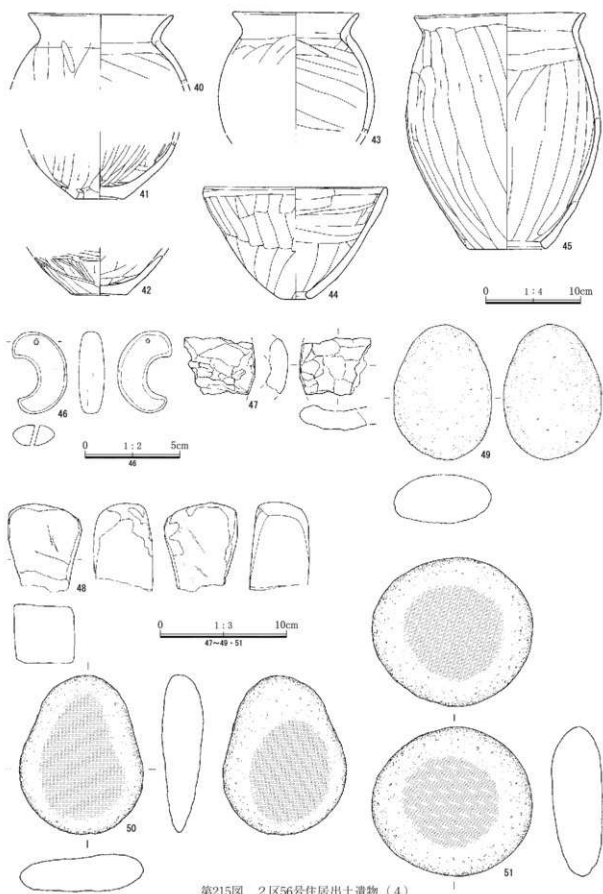




第213図 2区56号住居出土遺物(2)



第214図 2区56号住居出土遺物(3)



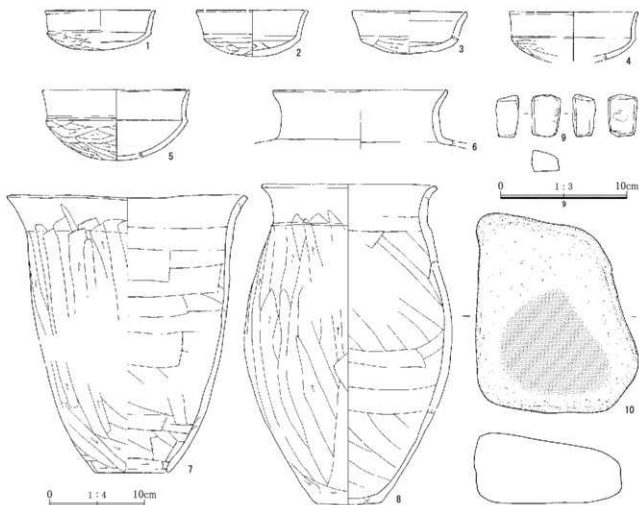
第215図 2区56号住居出土遺物(4)

ここで図示した遺物のほか、土師器2017点、須恵器1点、粘土塊4点、遮用材大型磚7点、棒状礫1点、小円礫3点、礫片8点、剥片25点が出土した。また縄文時代の打製石斧1点(第276図21)・削器1点(第279図56)・石核2点(第281図84・86)が埋没土中から出土している。

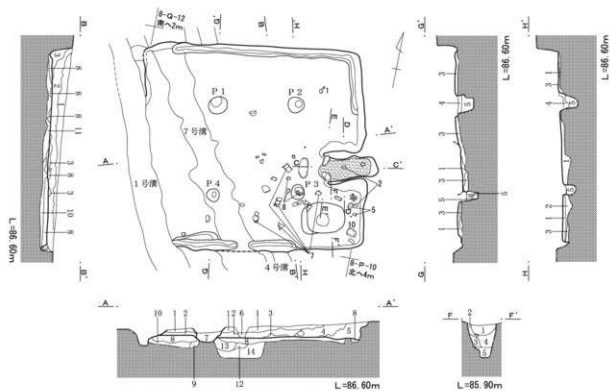
**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。調査中は湧水が著しく、掘り方面の調査時には排水用溝を掘らざるを得なかった。この排水溝については掘り方面の平面断面図に斜線で表示した。

## 2区57号住居

(第216・217図 PL114・191 遺物観察表P.592・593・612)

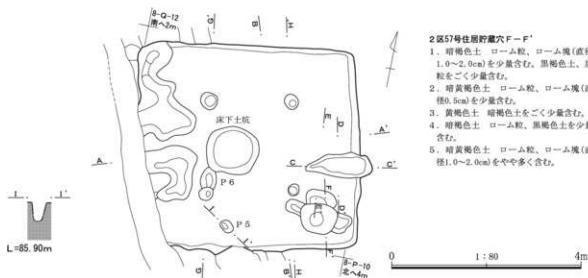
**位置** 2a区2-8-O・P-10・11G**形状** 南西隅が1号溝に切られているが、正方形に近い長方形と推定される。**重複** 1号・4号・7号溝より古い。**規模** 長軸4.57m以上 短4.26m 壁高0.45m**面積** (19.44)㎡ **長軸方位** N-80°-E**埋没土** ローム粒・焼土粒・軽石粒を含む暗褐色土で埋まっていた。床面直上や壁際にはローム粒・塊を多く含む黄褐色土が堆積していた。**竈** 住居東壁中央やや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.19m、燃焼部幅0.43m。袖の残存長は向かって右側が0.90m、左側が1.0m。壁外に0.23m煙

第216図 2区57号住居出土遺物



2区57号住居層穴F-F'

1. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~2.0cm)を少量含む。黒褐色土、炭粒をごく少量含む。
2. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5cm)を少量含む。
3. 黄褐色土 暗褐色土をごく少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土を少量含む。
5. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~2.0cm)をやや多く含む。



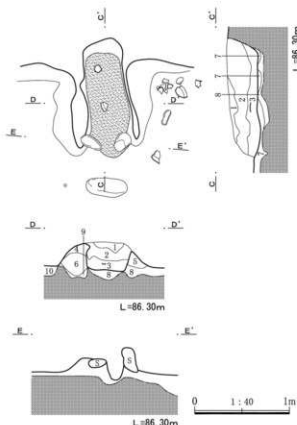
2区57号住居A-A' B-B'

1. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。焼土粒、炭を少量含む。ローム塊(直径1.0~2.0cm)をごく少量含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多量に含む。炭粒、焼土粒をやや多く含む。(層に近い為、炭、焼土が多い)。
5. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~5.0cm)を多量に含む。炭粒、焼土粒を多く含む。(層に近い為、炭、焼土が多い)。
6. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。(2号溝埋没土)
7. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5cm)を少量含む。(7号溝埋没土)
8. 暗褐色土 ローム粒および塊状(直径4.0cmほど)を中~多量に含む。黒褐色土を粒および塊状(直径1.0~5.0cmほど)に少~中量含む。
9. 黄褐色土 ローム主体。堆山ロームに比べやや締まり弱い。
10. 暗褐色土 8層に類似するが、ロームは粒状に(直径1.0cmほど)に認められ、黒褐色土は認められない。全体の8層より黄色味帯り多い。
11. 濃い黄褐色土 黄褐色土 ローム主体。
12. 暗褐色土 ロームだらけを含む。
13. 暗褐色土と黒褐色土の間の色調。ローム粒および塊(直径2.5cmほど)を含む。
14. 記載なし。



## 2区57号住居柱穴G-G'・H-H'

1. 暗褐色土 ローム粒および塊状(直径4.0cmほど)を中～多量に含む。黒褐色土を粒および塊状(直径1.0～5.0cmほど)に少～中量含む。
2. 黒褐色土 1層よりローム粒の含まれ方少なく(少量)、黒色味帯びる。
3. に近い黄褐色～黄褐色土 ローム主体。
4. 黒褐色土 ローム粒状(直径0.5cmほど)に少量含む。締まりやや弱い。
5. 暗黄褐色土 ローム混じりの土。4層に比へて締まる。



## 2区57号住居欄C-C'・D-D'

1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒を少量含む。
2. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5～2.0cm)を多く含む。焼土粒、炭粒をやや多く含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。焼土粒、炭粒をやや多く含む。
4. 暗褐色土 内側(E-E')側に焼土粒(直径1.0cmほど)、黄褐色シルト土、炭化物粒(直径1.0cmほど)混じる。焼土塊混入。
5. 黒褐色土 白色粒子(直径1.0cmほど、ほとんど直径0.5cm以下)均一に含む。硬く締まる。焼土塊混入。
6. 暗褐色～濃黄褐色土 上位(暗褐色)～下位(濃黄褐色)。ローム主体へ漸移的に。上位は濃黄褐色土がまだらに混じり、下位は逆に暗褐色土がまだらに混じる。硬く締まる。焼土塊混入。
7. 黒褐色土 5層に類似。硬く締まる。ローム混じり。
8. 7層に類似するがロームの混じりは認められない。
9. に近い黄褐色土 ローム主体で硬く締まる。暗褐色土少量混じる。
10. 暗褐色土 住居8層に類似するが、ロームは粒状に(直径1.0cmほど)認められ、黒褐色土は認められない。全体的に住居8層より黄色味帯びる。

## 2区57号住居

道が伸びる。竈主軸は東壁に直交する。両袖の先端には芯材にしたと見られる礎が出土した。竈前には長さ90cm、幅40cmほどの大型円礎が床面直上で出土した。被熱した痕跡があることから、竈焚き口天井部にのせられていた可能性が高い。竈の掘り方は長径1.4m、短径0.56m、深さ0.05mの楕円形の土坑状になっていた。

竈出土遺物は多くない。図示した土師器環(第216図2)は焼焼部使用面上7cmで出土した破片と、竈石脇東壁沿い床面上6cmの破片が接合した。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が37×34×34cm、P2が32×28×38cm、P3が26×24×28cm、P4が32×27×38cmである。床面では柱穴の全掘を避け、床面～掘り方～柱穴との関係を確認するために、新たに土層確認用のセクションG-G'、H-H'を設定して掘り下げた。

また、掘り方でP5・P6を検出した。P5は南壁寄りであり、何らかの施設の可能性があるが、判断できる所見はなかった。またP6がP4の北側に検出された。それぞれの規模はP5が30×21×40cm、P6が43以上×34×16cmである。

**周溝** 周溝は北壁と東壁北寄りの一部と、南壁西部の一部で検出された。幅は概ね12cm、深さは4cmである。

**貯蔵穴** 南東隅に長軸0.91m、短軸0.64m、深さ0.71mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面は半径0.26mの円形である。貯蔵穴内で出土した遺物で、図化可能な遺物はなかった。土師器環(第216図5)と擦石(10)は、貯蔵穴東縁、東壁沿いの床面上3cmで出土した。

**床面** 床面には小さな凹凸があるが、ほぼ平坦で、中央部は硬化していた。後出する1号・4号溝が床面を壊している。

**掘り方** 掘り方は北東部がやや高く、南東部がやや深く掘り込まれていた。また西壁沿いも不定形に掘り込まれていた。全体としては厚さ10～25cmのローム塊・黒褐色土塊を含む黄褐色土で充填されてい

## 第5章 2区の遺構と遺物

た。貯蔵穴の周囲には深さ3～8cmの小型の掘り込みがとり囲んでいた。

掘り方面中央やや西寄りに長軸1.09m、短軸1.0m、深さ0.36mの隅丸正方形の床下土坑が検出された。断面形は箱形で、底面は平坦である。土坑の位置からすれば住居に伴うと判断した。出土遺物はなかった。ローム塊と黒褐色土塊を混じる暗褐色土で埋まっていた。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴周辺からまともに出土した。土師器甌(第216図7)は竈右袖前床面上3cmで出土した。甕(8)は竈前床面5cmで出土した破片や、中央部床面上3cmで出土した破片、南部床面上5cmで出土した破片が接合した。また坏(1)は北東部床面上10cmで、土師器坏(3・4)、甕(6)、砥石(9)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器4点、土師器175点、大型礫3点、棒状礫2点、小門礫3点、礫片8点、剥片25点が出土した。また縄文時代の加工痕ある剥片(第280図73)が埋没土中から出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。

### 2区58号住居

(第218・219図 PL115・191 遺物観察表P.500・612)

**位置** 2a区2-9-F・H-8G、  
2-9-G-8・9G

**形状** 南半部を削平によって失われているが、正方形と推定される。南半部は圃場整備事業に伴って、荒砥北三木堂遺跡2区18号住居として調査されている。(第92図参照)

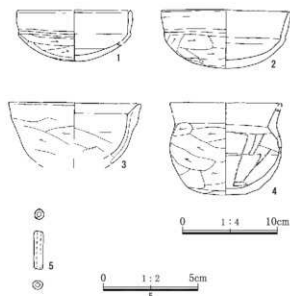
**重複** 60号住居・88号土坑より新しい。

**規模** 長軸6.52m以上 短軸4.53m以上  
壁高0.69m

**面積** 計測不能 **長軸方位** N-68°-E

**埋没土** ローム塊・焼土粒・炭化物粒を含む褐色土で埋まっていた。中位には厚さ20cmのローム粒・焼土粒を含む黒褐色土が堆積していた。

**竈** 竈は調査できた範囲の中では検出されなかった。



第218図 2区58号住居出土遺物

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が33×31×16cm、P2が77×51×90cmである。P1は試掘時のトレンチにかかり上半部が削平されてしまっており、規模や深さが小さくなってしまっている。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

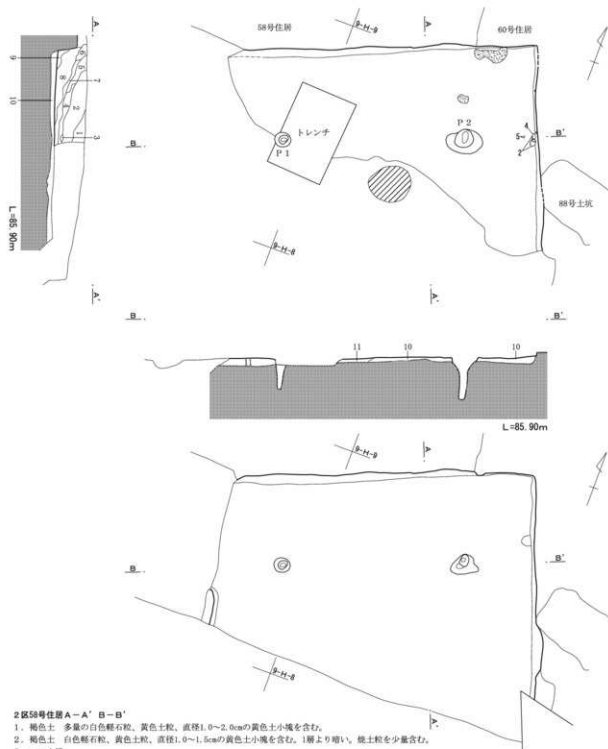
**床面** 床面は平坦である。北壁沿いに焼土を検出。

**掘り方** 掘り方面も平坦で、特に深く掘り込まれた部分はない。削平の深さが掘り方埋没土内とどまっていることから、床面よりも広い範囲で掘り方面を検出することができた。しかしそれでも南部1/3には削平がおよび、掘り方面も検出できなかった。

**遺物と出土状況** 遺物は少量しか出土しなかった。図示可能な遺物は東壁際から出土した。土師器坏(第218図2)・小型甕(4)は東壁際床面上3cmで出土した。管玉(5)も上記土器の西側床面直上で出土した。坏(1)・鉢(3)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器7点、土師器363点、礫片12点、剥片3点が出土した。また縄文時代の削器(第279図54)が埋没土中から出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の住居と考えられる。



## 2区58号住居 A-A' B-B'

1. 褐色土 多量の白色軽石粒、黄色土粒、直径1.0~2.0cmの黄色土小塊を含む。
2. 褐色土 白色軽石粒、黄色土粒、直径1.0~1.5cmの黄色土小塊を含む。1層より薄い。微土粒を少量含む。
3. ローム塊
4. 黒褐色土 ローム粒、微土粒を少量含む。褐色土小塊も含む。
5. 黄褐色土 白色軽石粒、ローム粒を少量含む。
6. 褐色土 白色軽石粒、ローム粒を含む。
7. 灰褐色土 直径1.0~3.0cmのローム小塊を含む。
8. 褐色土 直径0.5~1.0cmのローム小塊、ローム粒、炭化物粒、直径1.0~3.0cmの灰白色粘土塊を含む。やや積層。
9. 黒褐色土 ローム粒、直径1.0~2.0cmの灰白色粘土塊、炭化物粒を含む。
10. 暗褐色土とローム(黄褐色土)の混土。
11. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~3.0cm)を多く含む。

第219図 2区58号住居

## 2区59号住居

(第220～222図 PL115・116・191・192 遺物観察表P.593・612)

位置 2a区2-9-E・F-9・10G

**形状** 大型方形土坑と重複するために外形形状が不明となった部分はあるが、正方形と推定される。特に89号土坑と重複する北壁部分が確定できなかったが、調査の進捗に伴い、本住居が89号土坑に後出することが判明した。南隅は先行する60号住居との識別が困難で明確に記録することができなかった。

**重複** 60号住居・89号土坑より新しい。83号・84号土坑より古い。

**規模** 長軸4.80m 短軸4.59m 壁高0.50m

**面積** 21.59㎡ **長軸方位** N-64°-E

**埋没土** ローム粒・塊を含む暗黄褐色土。

**竈** 北東壁中央やや南寄りに竈が構築されていた。確認長1.26m、燃焼部幅0.49m。袖の残存長は向かって右側が0.98m、左側が1.02m。壁外に0.25m煙道が伸びる。燃焼部中央には支脚の円礫が立てられていた。竈からの出土遺物はほとんどなかった。土師器環(第222図8)が燃焼部中央使用面直上で、坏(4)が竈前の床面直上で出土した。

竈の掘り方は、地山を袖の形に掘り残していた。

**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3を掘り方面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が24×21×34cm、P2が44×22×27cm、P3が32×27×59cmである。北隅の主柱穴は84号土坑の掘り込みによって失われていた。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 東隅に長軸0.86m、短軸0.74m、深さ0.52mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面は長径0.28m、短径0.24mの楕円形である。貯蔵穴からは、土師器環(第222図5)が底面上53cmで出土した。また坏(1)が西縁床面上3cmで出土した。

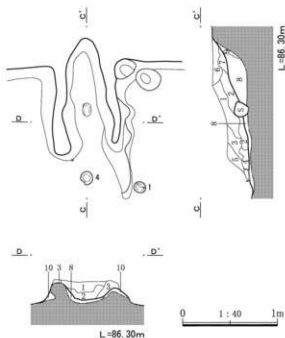
**床面** 床面はほぼ平坦で、竈の周辺がやや高くなっている。大型の83号・84号土坑によって本住居の床面の多くの部分が壊されていた。

**掘り方** 掘り方は四隅とくに南部が広い範囲で深く掘り下げられていた。89号土坑と重複している部分

は埋没土の識別が困難で、89号土坑まで掘り下げた。掘り方面でP2とP3の間に長径0.73m、短径0.54m、深さ0.1mの楕円形の土坑が検出された。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴周辺からまとまって出土した。北西壁沿いで白玉2点(第222図16・17)が床面直上で出土した。また飯(15)も北壁際床面直上で出土した。甕(13)は北壁際床面上3cmで出土した。剣形石製模造品(19)は西部床面上19cmで出土した。その他の固化した遺物は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器1188点、須石器燧石片1点、粘土塊1点、礫片4点、剥片16が出土した。また縄文時代の石鏃(第277図34)・礫器(第282図89)・多孔石(95)が埋没土中から出土した。

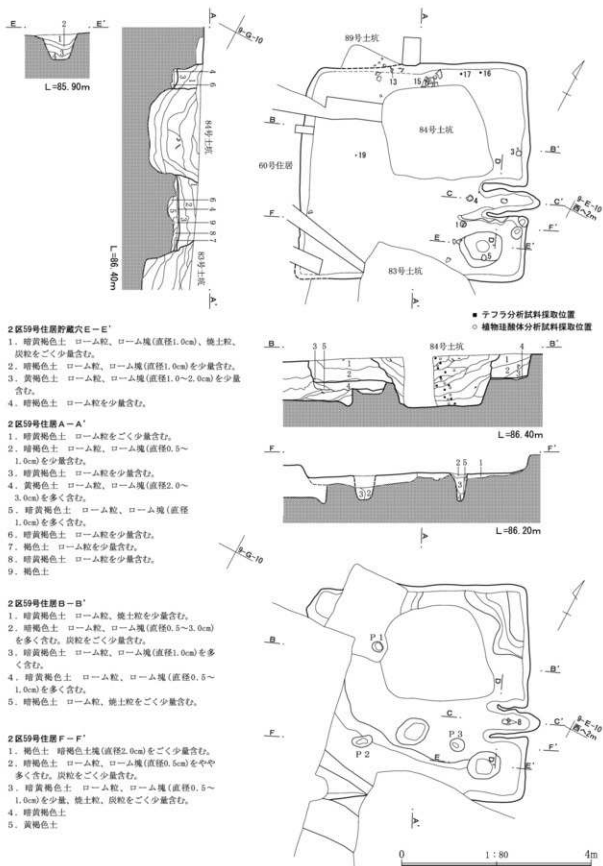
**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の住居と考えられる。



2区59号住居層C-C'・D-D'

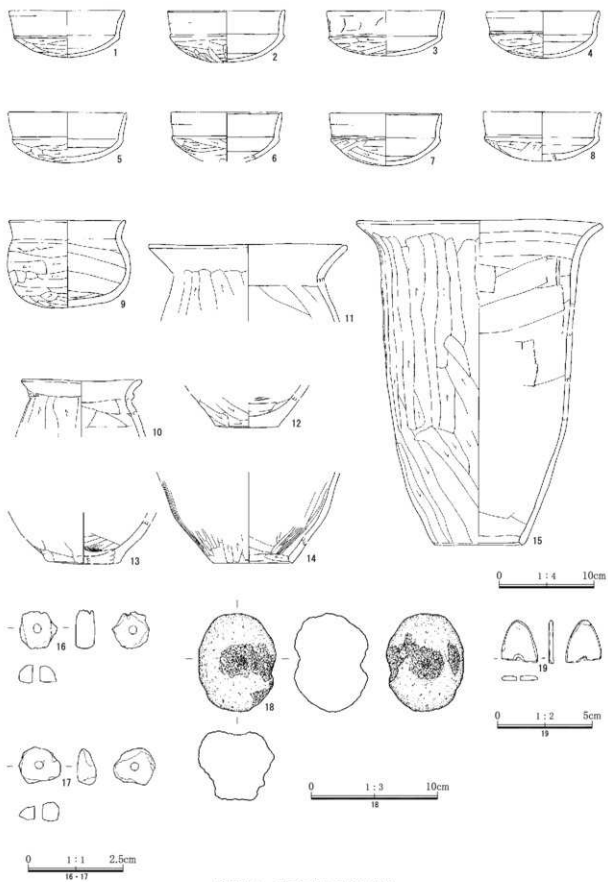
1. 暗褐色土と黄褐色土の混土。焼土粒。炭粒をやや多く含む。
2. 赤褐色土と黄褐色土の混土。焼土粒を多く含む。炭粒をやや多く含む。
3. 暗褐色土 ローム粒。焼土粒をごく少量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒をやや多く含む。炭粒を少量含む。
5. 暗黄褐色土 ローム粒。焼土粒を少量含む。
6. 暗黄褐色土 焼土粒をごく少量含む。
7. 暗黄褐色土 焼土粒。炭粒をごく少量含む。
8. 褐色土 焼土粒。焼土小塊(直径0.5cm)を多く含む。
9. 褐色土 焼土粒。暗褐色土を少量含む。
10. 暗黄褐色土 焼土粒をごく少量含む。

第220図 2区59号住居竈



第221図 2区59号住居

第5章 2区の遺構と遺物



第222図 2区59号住居出土遺物

## 2区60号住居

(第223~226図 PL117・192・193 遺物観察表P.594・595・612)

位置 2区2-9-F・G-8・9G

形状 南西隅を後出する58号住居と88号土坑に切られているために、全形をとられられなかったが、正方形と推定される。

重複 21号・58号・59号住居より古い、21号・59号住居より深かったため、全形を記録することができた。77号・88号土坑より古い。

規模 長軸6.20m 短軸6.03m 壁高0.84m

面積 (38.44)㎡ 長軸方位 N-82°-E

埋没土 上層は焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土で、下層はローム粒を含む褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が構築されていた。確認長1.07m、燃焼部幅0.50m。袖の残存長は向かって右側が0.89m、左側が0.79m。壁外に0.23m煙道が伸びる。両袖先端には芯材の角礫が立てられていた。燃焼部中央にはほぼ完形の土師器甕(第226図24)が、その右側にはほぼ完形の甕(25)が正立・使用面直上で出土した。燃焼部奥の使用面直上では土師器壺(第225図22)が出土した。焚き口部では鉢(第225図16)が使用面直上で出土した。

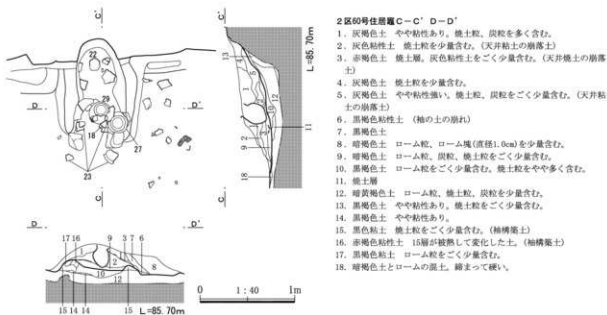
竈掘り方は低平な方形の掘り込みであったが、その底面では土師器鉢(16)の破片と支脚と思われる土製品(第226図27)が底面直上で出土した。

柱穴 床面で主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4を検出した。床面では柱穴の全掘を避け、床面掘り方-柱穴との関係を確認するために、新たに土層確認用のセクションF-F'・G-G'を設定して掘り下げた。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、掘り方面の計測でP1が93×27×97cm、P2が50×26×90cm、P3が55×40×106cm、P4が24×23×75cmである。

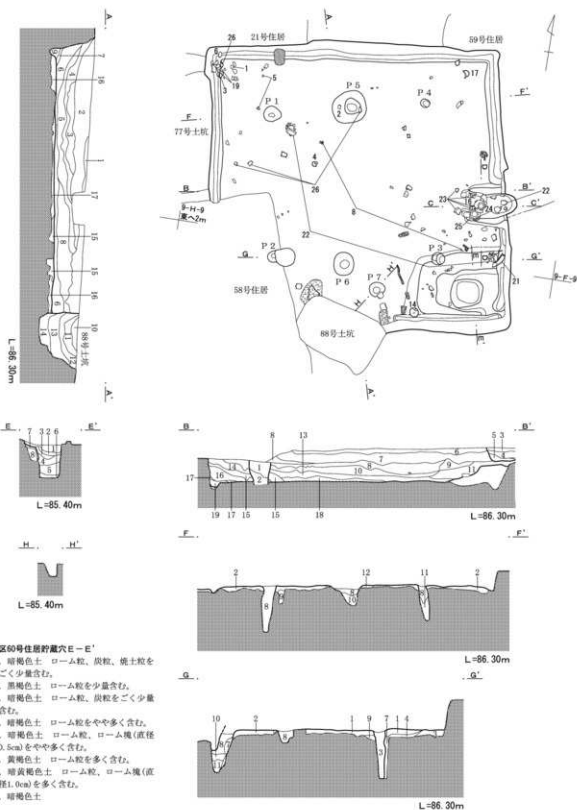
また床面でP5・P6・P7を検出した。P5は主柱穴P1とP4を、P6は主柱穴P2とP3を結ぶ線にある。これらは後述するように掘り方面で壁に直交する小溝の先端部に位置しており、何らかの構造に関わるピットである。P7は南壁近くで検出された。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、掘り方面の計測でP5が34×33×43cm、P6が34×28cm、P7が32×30×27cmである。

周溝 周溝は調査できた範囲ではほぼ全周する。幅は概ね20cm、深さは9cmである。

貯蔵穴 南東隅に長軸0.66m、短軸0.58m、深さ0.69

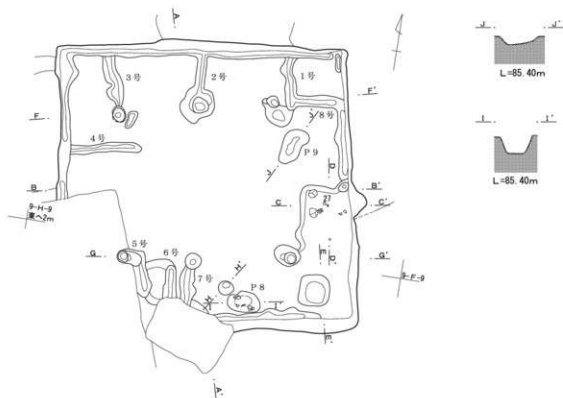


第223図 2区60号住居竈





### 3. 古墳時代の遺構と遺物



#### 2区60号住居A-A'

1. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を多く含む。
  2. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒をごく少量、白色軽石粒を多く含む。
  3. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)をやや多く含む。
  4. 黒褐色土 直径3.0~5.0cmの黄褐色土小塊、少量の白色軽石粒、焼土粒を含む。
  5. 黒褐色土 直径1.0~3.0cmの黄色土小塊、白色軽石粒、ローム粒、少量の炭化物を含む。
  6. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊、直径1.0~2.0cmのローム小塊を含む。
  7. 黒褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
  8. 褐色土 ローム粒を多く含む。
  9. 反黄褐色土 直径1.0~2.0cmのローム小塊、炭化物を含む。
- 88号住居
10. 黒褐色土 黄褐色砂を少量含む、白色軽石粒をやや多く含む。
  11. 暗褐色土 炭褐色粘土、焼土粒、炭粒を多く含む、白色軽石粒を少量含む。
  12. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊(直径1.0cm)を少量含む、焼土粒をごく少量含む。
  13. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒をごく少量含む。
  14. 暗褐色土とロームの混土。
  15. 暗褐色土と黄褐色土が層状に混じる、ローム粒を多量に含む。
  16. 暗褐色土とロームの混土。締まって硬い。
  17. 黄褐色土 暗褐色土をごく少量含む、締まって硬い。

#### 2区60号住居F-F' G-G'

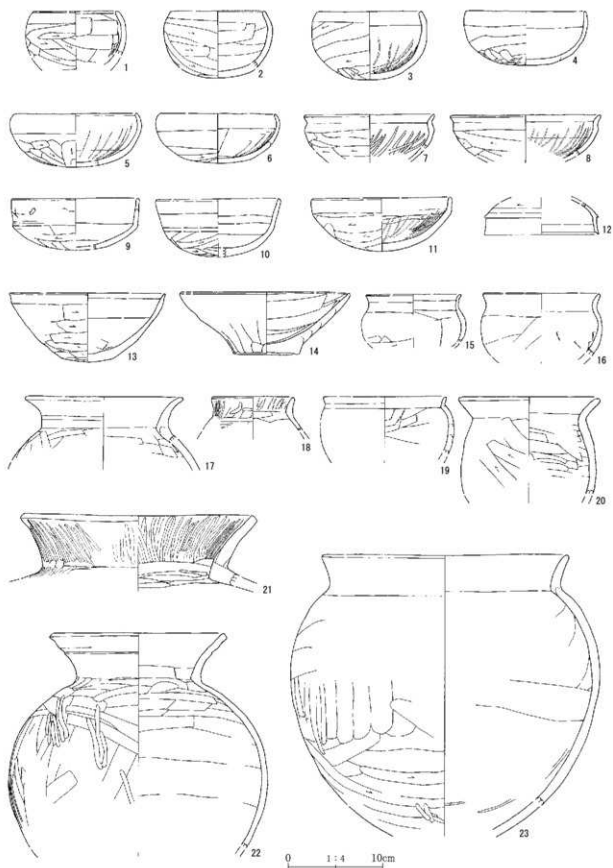
1. 暗褐色土と黄褐色土が層状に混じる、ローム粒を多量に含む。
2. 暗褐色土とロームの混土。締まって硬い。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5cm)をやや多く含む。
4. 黒褐色土 ローム粒をやや多く含む。
5. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径2.0~5.0cm)を多く含む。
6. 黒褐色土 ローム粒をごく少量含む。
7. 暗黄褐色土 暗褐色土塊(直径1.0~5.0cm)を多く含む。
8. 暗褐色土 暗褐色土を少量含む。
9. 暗黄褐色土 暗褐色土塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
10. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
11. 暗黄褐色土 ローム粒、暗褐色土塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
12. 黄褐色土 暗褐色土をごく少量含む、締まって硬い。

#### 2区60号住居B-B'

- 58号住居
1. 褐色砂質土 白色軽石粒、黄色土粒、直径1.0~2.0cmの黄褐色土小塊を含む。
  2. 褐色土 黄色土粒、直径1.0~2.0cmのローム塊、黄褐色土小塊を含む。
- 59号住居
3. 褐色土 白色軽石粒、少量の焼土粒、直径3.0~5.0cmの黄褐色土塊を含む。
  4. 褐色土 白色軽石粒、ローム粒、少量の焼土粒を含む。
  5. 茶褐色土 白色軽石粒、ローム粒を含む。
- 60号住居
6. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。
  7. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒をごく少量、白色軽石粒を多く含む、焼土粒を含む。
  8. 黒褐色土 直径3.0~5.0cmの黄褐色土小塊、少量の白色軽石粒、焼土粒を含む。
  9. 焼土粒、ローム粒を多く含む暗褐色土(庭近くの土)。
  10. 直径1.0~3.0cmの黄色土小塊、白色軽石粒、ローム粒、少量の炭化物を含む黒褐色土。
  11. 焼土粒、炭粒をやや多く、ローム粒を少量含む暗褐色土。
  12. ローム粒を多く含む褐色土。
  13. 直径1.0cmのローム小塊、焼土粒を含む灰褐色土。
  14. 直径1.0~3.0cmの褐色土小塊を含む黒色土、白色軽石粒を少量含む。
  15. 焼土粒、炭化物粒を含む灰褐色土。
  16. 黒褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
  17. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊、直径1.0~2.0cmのローム小塊を含む。
  18. 黒褐色土 直径1.0~2.0cmのローム小塊、炭化物を含む。

#### 2区60号住居

第5章 2区の遺構と遺物



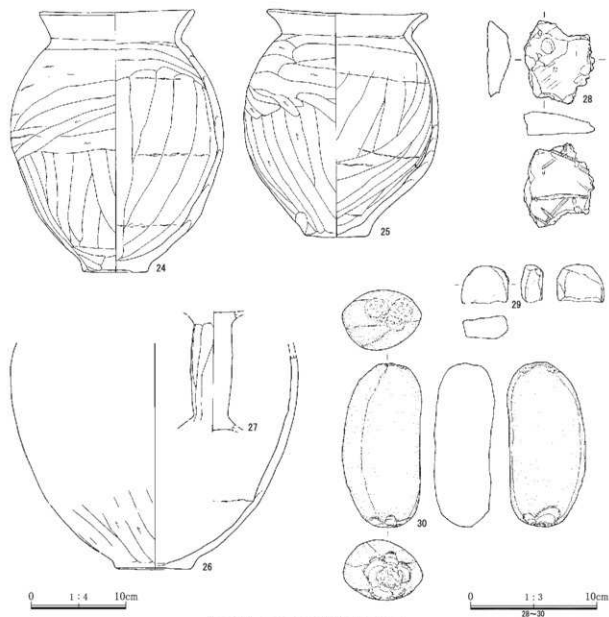
第225図 2区60号住居出土遺物(1)

mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。底面も長軸0.47m、短軸0.44mの方形である。貯蔵穴の北側・西側・南側には、貯蔵穴を中心に長軸2.0m、短軸1.4mの長方形の範囲をU字形に囲むように周堤状の高まりが巡っていた。高まりの上幅は北側・西側で0.4m、南側で0.1m、下幅は西側で0.9m、北側で0.54m、南側で0.18mである。高さは4～11cmである。この周堤状の高まりの北東隅には土師器壺(第225図21)が床面直上で南西隅には鉢(14)が床面直上で出土した。

**床面** 床面は平坦で、中央部は硬化していた。

**掘り方** 掘り方面はわずかな凹凸はあるが、厚さ2～15cmのローム粒・塊を含む暗褐色土で充填されていた。掘り方面ではあらたに2基のピットと、8条の小溝が検出された。

P 8は南壁際で検出された。長軸0.68m、短軸0.44m、深さ0.38mの楕円形の土坑状である。長軸が南壁に平行しており、何らかの施設と考えられるが、詳細は明らかにできなかった。底面上13cmで土師器坏(第225図13)が出土している。P 9も長軸0.82m、



第226図 2区60号住居出土遺物(2)

短軸0.42m、深さ0.18mの不定楕円形の土坑状である。

8条の小溝は、北壁に3条、西壁に1条、南壁に3条、東壁に1条が検出された。北壁の3条の小溝は、東壁から1.2m、3.1m、4.9mのところ掘られていた。東から1号・2号・3号とすると、1号小溝はP4、2号小溝はP5、3号小溝はP1につながる。これらの溝の規模は、1号小溝が幅0.19m、長さ1.13m、深さ0.1m、2号小溝が幅0.19m、長さ0.9m、深さ0.09m、3号小溝は幅0.24m、長さ1.10m、深さ0.07mである。1号小溝は東壁の8号小溝とP4の東側でL字形につながっていた。

西壁沿いには4号小溝が検出された。4号小溝は幅0.19m、長さ1.75m、深さ0.09mである。北壁から1.13mのところ掘られており、東壁沿いのP9の位置とは対応するが、主柱穴P1とP2を結んだ線より東側に出ている。主柱穴との関係は希薄である。

南壁の3条は主柱穴P2につながる5号、P6につながる7号と、7号のすぐ西に平行する6号小溝である。これらの溝の規模は、5号小溝が幅0.28m、長さ1.0m、深さ0.06m、6号小溝が幅0.28m、長さ0.7m以上、深さ0.15m、7号小溝は幅0.30m、長さ0.78m以上、深さ0.06mである。6号・7号小溝は88号土坑に壊されているため、全形は不明であるが、5号小溝は壁に接する長さではない。

東壁には、北壁から1.0mのところ8号小溝が検出された。主柱穴P4にはつながっていないが方向はP1とP4を結ぶ線に一致している。幅0.25m、長さ1.31m、深さ0.06mである。

**遺物と出土状況** 遺物は竈および貯蔵穴周辺からまとまって出土したほか、北西隅に集中していた。

土師器環(第225図2)はP5の凹み底面直上で出土した。環(4・8)は中央部床面直上で出土した。壺(22)はP1東側の床面直上で出土したが、貯蔵穴周堤北東隅床面上3cmの破片も接合している。土師器壺(第226図26)はP5底面直上、西部床面直上、

北西隅床面上7cmに加えて、後出する77号土坑の底面上17~24cm、88号土坑上層出土の散在する破片が接合している。北西隅では、ほかに土師器環(第225図1)が床面上11cm、環(3)・鉢(19)が床面上3cm、環(6)が床面上33cmで出土している。土師器壺(17)は北東隅床面上9cmで出土した。その他の固化した遺物は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器12点、土師器1830点、須恵器壺破片1点、粘土塊4点、礫片16、剥片15点が出土した。また縄文時代の尖頭器(第277図33)が埋没土中から出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。

本住居は77号・88号土坑との重複があり、それぞれの土坑出土の遺物と接合する例がみられた。77号・88号土坑ともに本住居より新しいので、基本的にはそれぞれの遺構の埋没土出土遺物間で接合した場合は土坑出土として扱った。土師器壺(第226図24)は77号土坑埋没土中で出土した遺物が、本住居床面直上の遺物と接合しており、これについては本住居出土遺物として扱った。

本住居の掘り方で検出された小溝群は、2区33号住居の小溝群と酷似している。本住居のほう若干小型であるが、住居規模や形態も同類といえる。33号住居の所見でも述べたが、これらの溝は間仕切りとしては間隔が狭いことから、低床をのせる根太材の据え溝とも考えられる。両住居以外にも17号・20号・29号・30号・51号・56号住居に同様の小溝が確認できた。これらの住居は大型の正方形住居であることが共通している。

竈燃焼部で出土した壺(24)は使用面に底部が接する高さで出土している。口縁部の位置は竈掛け口より低くなることになる。壺はほとんど完形で、この出土状態は住居が機能を失った時点での原位置と思われる。この壺の出土状態は、この壺が竈をのせる壺として常時据えられていたか、支脚として転用されたか等が考えられよう。

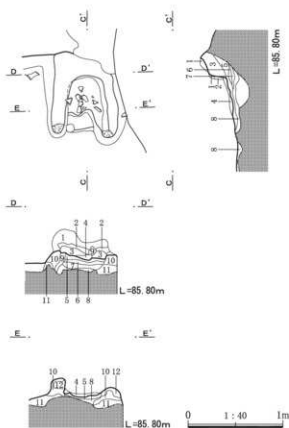
## 2区61号住居

(第227・228図 PL118・193 遺物観察表P.506)

位置 2区2-9-C・D-7・8 G

**形状** 南半部を削平で失われているために全形はとえられなかったが、方形と推定される。西壁は159号土坑に切られるが、本住居が深かったため、記録することができた。

**重複** 96・97号土坑・159号土坑より古い。96号土坑は本住居より浅いので第228図の平面図には表現しなかった。



## 2区61号住居層C-C'・D-D'・E-E'

1. 黄褐色土(天井崩落土)
2. 焼土層
3. 黒褐色土 炭粒、炭粒をやや多く含む。
4. 焼土と青灰色粘性土(硬く焼けた)の混土。炭粒を少量含む。(天井崩落土)
5. 黒褐色土 炭粒、焼土粒を多く含む。炭粒をやや多く含む。
6. 青灰色粘性土(使用面高底土) 焼土粒、炭粒をごく少量含む。
7. 黒褐色土 炭粒、ローム粒をやや多く含む。焼土粒をごく少量含む。
8. 黒褐色土とロームの混土。
9. 暗褐色土 焼土粒、炭粒を少量含む。(壁、天井崩落土)
10. 黄褐色土 粘高底土。1層よりやや台びい。
11. 黄色土と黒褐色土の混土。
12. 赤褐色土(ロームが焼けた土)

第227図 2区61号住居竈

**規模** 長軸4.29m 短軸2.50m以上 壁高0.72m**面積** 計測不能 **長軸方位** N-87°-E

**埋没土** 黒褐色土粒・白色軽石・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**竈** 東壁に竈が構築されていた。確認長0.89m以上、燃焼部幅0.44m。軸の残存長は向かって右側が0.78m以上、左側が0.90mである。竈の主軸は東壁に直交せず、10度南に傾いていた。竈燃焼部から土師器壺破片が出土したが、図化できなかった。

**柱穴** 床面で支柱穴と思われるP1・P2の輪郭を検出した。掘り方で規模や深さ、埋没土を記録する予定であったが、P1は床下土坑と重なり判然とせず、P2は掘り方底面より浅かったために記録できなかった。

**周溝** 周溝は調査範囲の中では検出されなかった。

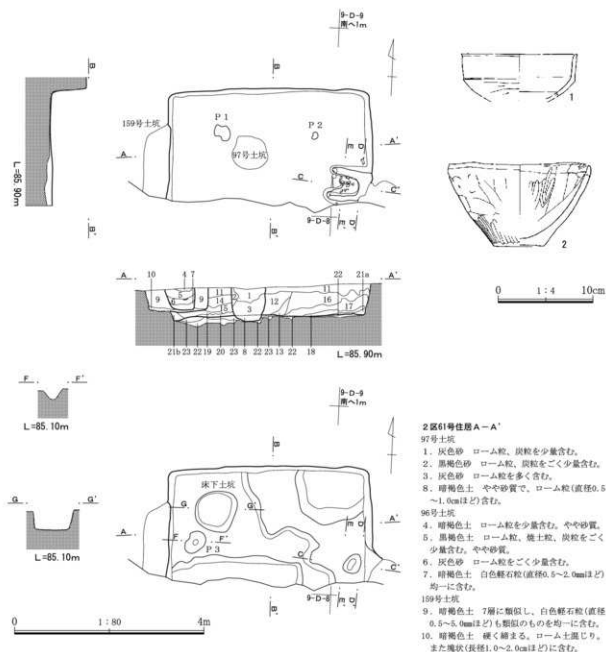
**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。竈前は硬化していた。

**掘り方** 掘り方は北東隅および西部がやや深く掘り込まれていた。全体としては厚さ2~20cmのローム粒を含む暗褐色土で充填されていた。掘り方でP3と床下土坑1基を検出した。P3は西壁際があり、その規模(長径×短径×深さ)は、52×35×20cmである。床下土坑は北西部で検出された。長径0.94m、短径0.9m、深さ0.42mのはほぼ円形で、断面形は箱形である。

**遺物と出土状況** 遺物は竈を中心に出土した。床面に近い位置で出土した遺物はなかった。図化した土師器杯(第228図1)と鉢(2)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器8点、土師器105点、焙烙破片1点、小礫・礫片3点、剥片3点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の住居と考えられる。本住居西側に後出して重複する159号土坑は、調査時には62号住居として番号を付して記録していたが、土層断面の観察に至り、小型であることが判明した。本報告では土坑として報告することにした。



2区61号住居A-A'

- 97号土坑
1. 灰色砂 ローム粒、炭粒を少量含む。
  2. 暗褐色砂 ローム粒、炭粒をごく少量含む。
  3. 灰色砂 ローム粒を多く含む。
  4. 暗褐色土 やや砂質で、ローム粒(直径0.5~1.0cmほど)含む。
- 96号土坑
5. 暗褐色土 ローム粒を少量含む、やや砂質。
  6. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む、やや砂質。
  7. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
  8. 灰色砂 ローム粒をごく少量含む。
- 159号土坑
9. 暗褐色土 7層に類似し、白色軽石粒(直径0.5~5.0mmほど)も類似のものを均一に含む。
  10. 暗褐色土 硬く締まる。ローム土混じり。また塊状(長径1.0~2.0cmほど)を含む。

61号住居

11. 暗褐色土 白色軽石粒(直径0.5~1.0mmほど)少量を特に上位に含む。ローム粒~塊(直径2.0cmほど、混じりのあるきたないローム)均一に含む。暗褐色土(黒色味帯びる)~暗褐色土混じり。
12. 暗褐色土 11層に類似するが、塊は漸移的に黒色味を帯び、ローム塊(長径3.0~5.0cmほど)が認められる。白色軽石はほとんど認められない。
13. 黄褐色土(ローム混じり)と黒褐色土の混じり。部分的に交互に層状に堆積している。
14. 暗褐色土 黄褐色土(ローム主体)粒~塊(直径2.5cmほど)を均一にやや多く含む。暗褐色土粒(直径0.5~1.0cmほど)少量含む。白色軽石粒(直径1.0mmほど)ごく少量含む。
15. 暗褐色土 ローム粒(直径1.0cmほど)少量均一に含む。
16. 暗褐色土 白色軽石粒(直径0.5~5.0mmほど)均一にやや多く含む。中位を中心に黒色土混じり。ローム粒(直径1.0cmほど)含む。
17. 16層に類似するが、黒色土の混じり16層より少なく、全体的に黒色味は弱い。白色軽石粒も16層より少ない(均一に少~中量)。
18. 暗褐色土 17層に類似。但しローム粒、白色軽石はほとんど認められない。
19. 暗褐色土~黒褐色土間の土。ローム土粒状(直径0.5mmほど)またマープル状に含む。
20. 黄褐色土 ローム土主体。
21. 暗褐色土 ローム土粒状(直径0.5mmほど)に含むが、21aは少量、21bは均一に含むが、21bの方がやや黄色味帯びる。
22. 暗褐色土 ローム粒~塊(直径3.0cmほど)含む。
23. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を少量含む。

第228図 2区61号住居と出土遺物

## 2区62号住居 (旧82号土坑)

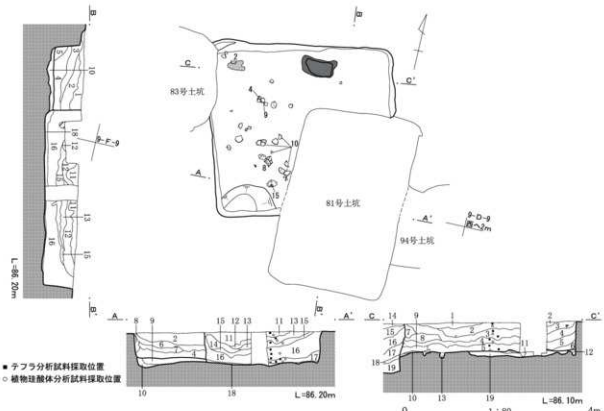
(第229・230図 PL118・193 遺物観察表P.506・612)

位置 2区2-9-D・E-8・9 G

形状 北西隅を83号土坑に、南東隅を81号土坑に切

られているが、正方形に近い長方形と推定される。

重複 81号・83号土坑より古い。



## 2区62号住居 (旧82号土坑) A-A' B-B'

62号住居

1. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
  2. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
  3. 暗黄褐色土 ローム粒、炭粒をごく少量含む。
  4. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。焼土粒をやや多く含む。
  5. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
  6. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒をごく少量含む。炭粒をやや多く含む。
  7. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~3.0cm)を少量含む。炭粒、焼土粒をごく少量含む。
  8. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
  9. 褐色土 黒褐色土と暗褐色土を少量含む。
  10. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
- 81号土坑
11. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
  12. 褐色土 ローム塊(直径1.0~2.0cm)を少量含む。
  13. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を少量含む。
  14. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む。やや粘質。
  15. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
  16. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)、炭粒、焼土粒をごく少量含む。やや粘質。
  17. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。やや粘質。
  18. 暗黄褐色土と黄褐色土(ローム)の混土。

規模 長軸3.97m 短軸3.66m 壁高0.81m

面積 計測不能 長軸方位 N-79°-E

埋没土 上層はローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で、下層は焼土粒・炭化物粒と多量のローム塊を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

電 調査できた範囲の中では検出されなかった。

## 2区62号住居 (旧82号土坑) C-C'

62号住居 (旧82号土坑)

1. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む。
  2. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
  3. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
  4. 暗黄褐色土 ローム粒、炭粒をごく少量含む。
  5. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。炭粒、焼土粒をやや多く含む。
  6. 黒褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~5.0cm)を多く含む。
  7. 黄褐色土
  8. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
  9. 暗黄褐色土 ローム粒、炭粒をごく少量含む。
  10. 灰層。焼土粒をごく少量含む。
  11. 暗黄褐色土と黄褐色土(ローム)の混土。
  12. 褐色土 黒褐色土と暗褐色土を少量含む。
  13. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
- 83号土坑
14. 暗褐色土 やや粘質。ローム粒をごく少量含む。
  15. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
  16. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
  17. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒を少量含む。
  18. 暗黄褐色土 ローム粒、炭粒を少量含む。
  19. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)をやや多く含む。炭粒、焼土粒をごく少量含む。

**柱穴** 調査できた範囲の中では検出できなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は調査範囲では検出されなかった。

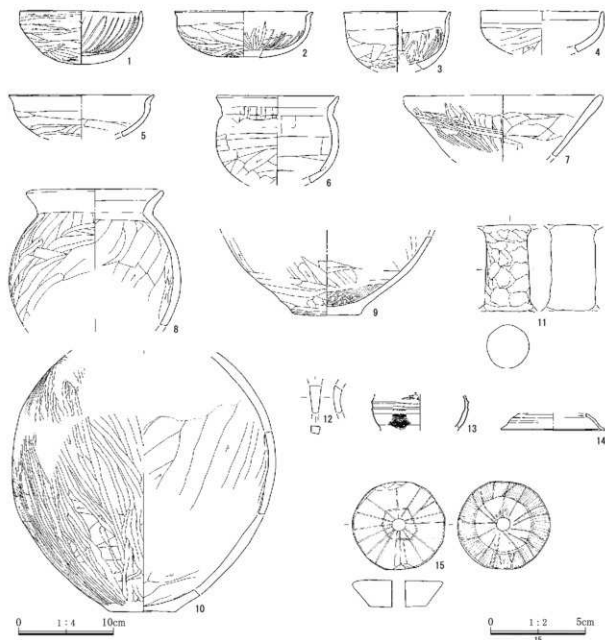
**床面** 床面は平坦。中央部は硬化していた。北壁沿いに焼土が検出された。南西隅は半円状に深さ4cmほど凹んでいた。床面で支柱穴は検出されなかった。

**掘り方** 掘り方面はほぼ平坦で、厚さ0～15cmのロームと暗褐色土の混土や暗褐色土粒を含む黄褐色土で充填されていた。掘り方面でも支柱穴は検出でき

なかった。

**遺物と出土状況** 南西部を中心に遺物が出土したが、床面直上で出土した遺物は少ない。土師器壺(第230図8)は南西部の、甕(9)は北西部の床面直上で出土した。また放射状の線刻がある紡錘車(15)が南西隅床面直上で出土した。壺(10)、坏(4)は北西部床面上20cmで、坏(2)は北西隅床面上20cmで出土した。その他の固化遺物は埋没土中から出土した。

須恵器破片3点はいずれも小片であるが、12は二



第230図 2区62住居出土遺物



重甕の胴部破片、13は把手付腕の胴部破片、14は小型の蓋破片とみられる。これらの器種の須恵器は県内でも出土例が少ないが、本遺跡では二重甕の破片は2区81号・95号土坑で、把手付腕の破片は2区32号住居でも出土している。本住居出土の二重甕の破片は2区81号土坑出土の破片と同一個体の可能性がある。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器810点、粘土塊4点、鏝片5点、剥片11点が出土した。他に縄文時代の打製石斧破片が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。本住居は調査時には82号土坑として番号を付して記録した。しかし、①床面と掘り方面が土層断面図で明確に分かれること、②ここまで大型の正方形の土坑が他に検出されていないこと、③竈支脚が出土していること等から、住居として報告することとした。しかし本遺跡では主柱穴が検出できないうち住居は希であり、主柱穴を検出することができなかった本遺構が住居でない可能性も残される。

また、本住居の埋没土壌のテフラ分析と植物珪酸体分析をおこなった。これは古墳時代の大型土坑の用途について資料を得るために実施したもので、本住居のほか大型土坑6基について分析した。詳細は第7章の分析報告書に記載されているが、本住居の

土壌に含まれる軽石はAs-Cで、Hr-FAが含まれないことから、本住居はAs-C降下以降、Hr-FA降下以前に掘られていることが判明した。

植物珪酸体は、底面近くでネザサ節型が多量に検出され、中層から上層ではオオムギ族(ムギ類、穎の表皮細胞)が検出された。他の土坑ではイネが検出された試料もあった。このような植物珪酸体の検出状況から、草原のような環境に遺跡があり、周辺でムギやイネが栽培されていたと推定されている。

#### 2区63号住居

(第231・232図 PL119-193 遺物観察表P.596)

**位置** 2a区2-9-K・L-14・15G

**形状** ほぼ正方形と推定される。重複遺構はなし。

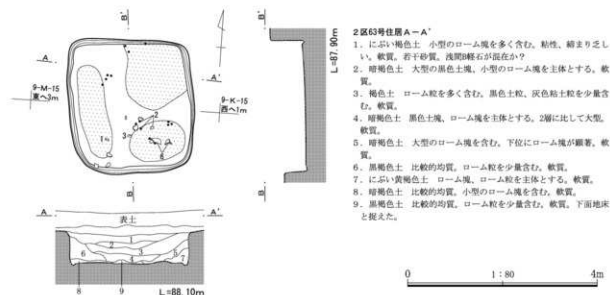
**規模** 長軸2.86m 短軸2.64m 壁高0.56m

**面積** 7.02㎡ **長軸方位** N-6°-W

**埋没土** 全体にローム塊が目立つ。6層が際立つが、5・7層とともに、周辺住居の掘削廃土等が入り込んだものと見られる。

**竈** 竈は検出されなかった。東壁中央やや南寄りに遺構確認時に焼土と炭化物が散布した。竈の存在を想定し土層観察を試みたが、抽煙道など構築物を検出できなかった。

**柱穴** 柱穴は検出されなかった。



第231図 2区63号住居

**周溝** 周溝は全周する。幅は概ね18cm、深さは16cm。

**貯蔵穴** 貯蔵穴は検出されなかった。

**床面** 床面は平坦である。西壁際、北東部、南東隅に硬化面が検出された。

**掘り方** 埋没土である黒褐色土の下面を地床と認識した。掘り方は検出されなかった。

**遺物と出土状況** 遺物は住居南半部に比較的まとまって出土した。土師器坏(第232図2)は中央部床面上20cmで出土した。坏(1・3)はそれぞれ南部床面上5cm・6cmで出土した。甕(6)は南東部床面上35cmで出土した。坏(4)・鉢(5)は埋没土下層から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器608点、焼土塊1点、礫片3点、剥片2点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の住居と考えられる。本遺構の規模は小さく、調査区内で検出された住居のなかでは最小の部類に入る。本遺構が住居であったかどうかは①火処である竈や炉が検出されなかったこと、②他の住居にある掘り方が検出されなかったこと、③柱穴が検出されなかったこと等からも検討の余地が残されている。

2区64号住居(第233図 PL119・193 遺物観察表P.596)

**位置** 2b区2-29-M・N-9G

**形状** 隅丸長方形。重複遺構はなし。

**規模** 長軸3.40m 短軸2.79m 壁高0.17m

**面積** 7.72㎡ **長軸方位** N-71°-E

**埋没土** 上層は白色軽石を含む暗茶褐色土で埋まっていた。下層はローム粒・塊を多く含む黄褐色土で埋まっていた。

**炉** 炉は検出されなかった。

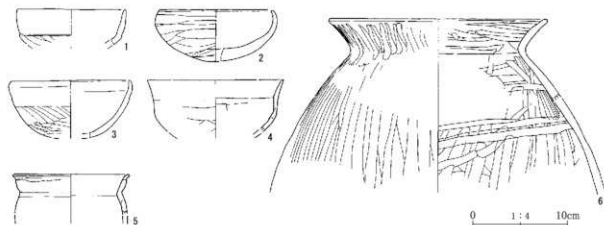
**柱穴** 主柱穴と思われるP1・P2・P3・P4が検出された。いずれの柱穴も住居隅に近い位置に掘られており特徴的である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が28×16×36cm、P2が29×24×15cm、P3が36×33×9cm、P4が30×27×39cmである。主柱穴のうち、P1とP4の外側には扁平な角礫が1個ずつ床面直上で出土した。P2・P3の中間の壁際にも同様な礫が床面直上で出土した。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**貯蔵穴** 一般的な貯蔵穴の位置には土坑は検出されなかったが、P1とP2を結んだ線上でP2の西側に長軸0.72m、短軸0.68m、深さ0.18mの不整隅丸方形の土坑が検出された。貯蔵穴かどうかは不明であるが、床面が幅0.5m、長さ1.3mの範囲で高まっている床面に接している。

**床面** 床面は区画ごとに段が認められた。北西隅は壁沿いに幅0.8m、長さ1.8mの帯状の範囲が深さ6cmほど掘り込まれている。南東隅も南壁沿いに幅0.96m、長さ0.84mの長方形の範囲が深さ3cmほど凹んでいた。前述したようにP2と1号土坑の南側が相対的に高くなっている。

**掘り方** 掘り方は基本的に四隅と中央を残して掘ら



第232図 2区63号住居出土遺物

れている。特に北東隅と南東隅は一辺1.0m前後の平行四辺形あるいは扇形に掘り残されている。また、中央部は長径1.8m、短径1.24mの楕円形に掘り残されていた。全体としては厚さ2~16cmのローム塊をふくむ黄褐色土で充填されていた。

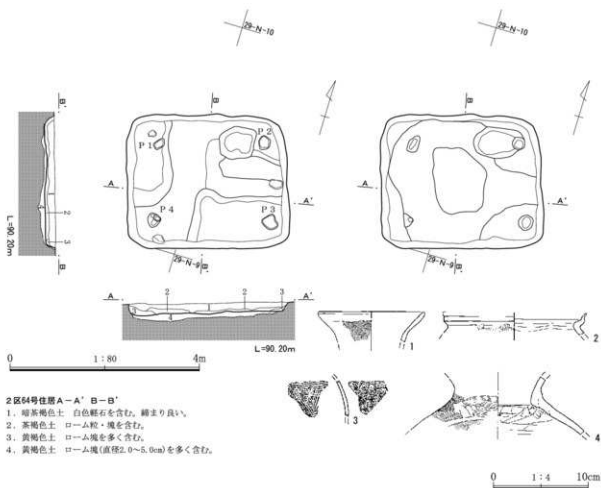
**遺物と出土状況** 床面近くから出土した遺物はなかった。図示した遺物はすべて埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器3点、弥生土器2点、土師器37点が出土した。

**所見** 出土遺物から4世紀中葉の住居と考えられる。出土遺物が少なく時期を決める資料に乏しいが、出土した破片資料は古式土師器がほとんどであることから、時期は4世紀中葉とした。しかし、4世紀に一般的な住居形態は正方形であり、炬も設置されている。本住居はそのいずれにも反しており、検討の余地を残している。

また、本住居は2b区の北端にあり、2b区南半に群在する63号住居までの住居群とは分布域を異にする。時期も2b区南半の住居群が古墳時代中・後期であるのに対して、本住居は古墳時代前期と考えた。本遺跡1区ではAs-C直下水田が検出されており、そこを生産域と考えるなら、2区南半の低地沿いに古墳時代前期の住居が立地する蓋然性が高いであろう。一方、西側に接する2c区北部には中世と考えられる65号住居があり、周辺に井戸や遺跡が展開している。本住居の柱穴の位置や扁平礎の存在などは古墳時代の住居とは異なるものであり、中世のものとする余地もある。

本住居の時期を少ない埋没土中の遺物で決定していることについては、今後の変更もあり得ることを付記しておきたい。



第233図 2区64号住居と出土遺物

(3) 堅穴状遺構

2区1号堅穴状遺構

(第234図 PL120・195 遺物観察表P.506・612)

**位置** 2区2-9-B・C-8・9G

**形状** 隅丸長方形。南東隅は2号堅穴状遺構と重複し、形状をとられられなかった。中央を水道管による攪乱が貫く。

**重複** 検出状況から2号堅穴状遺構より新しいと推定されるが、埋没土の観察では南壁の立ち上がりは明確でない。

**規模** 長軸2.57m以内 短軸2.0m 壁高0.47m

**面積** 16.42㎡ **長軸方位** N-5°-W

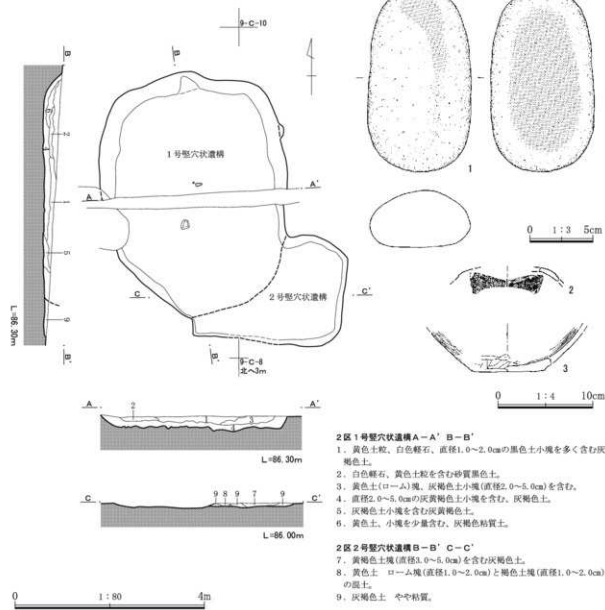
**埋没土** 上層は白色軽石・黄色土粒を含む灰褐色土、下層は灰黄褐色土塊を含む灰褐色土で埋まっていた。

**炉等** 炉や竈は検出されなかった。

**柱穴** 柱穴は検出されなかった。壁際に5カ所の小ピットが検出されたが、規格的な位置でなく深さも一定しないことから、遺構に伴うと判断しなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**床面** 床面はほぼ平坦である。



第234図 2区1号・2号堅穴状遺構と出土遺物

**掘り方** 掘り方は検出されなかった。

**遺物と出土状況** 床面近くから出土した遺物はなかった。図示した須恵器蓋破片(第234図2)・擦石(1)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器2点、土師器85点、打製石斧1点(第275図12)、礫片1点、剥片4点が出土した。

**所見** 古墳時代の遺構との確証はないが、埋没土中から出土した土師器は古墳時代のもの、ここでは古墳時代の遺構として報告した。

#### 2区2号竪穴状遺構

(第234図 PL120 遺物観察表P.596)

**位置** 2a区2-9-B・C-8・9G

**形状** 北西部は1号竪穴状遺構に切られているため、形状を確認できなかったが、長方形と推定される。

**重複** 検出状況から1号竪穴状遺構より古いと推定されるが、埋没土の観察では1号竪穴状遺構の南壁の立ち上がりは明確でない。

**規模** 長軸1.56m 短軸1.14m 壁高0.19m

**面積** 計測不能 長軸方位 N-85°-W

**埋没土** 上層は黄褐色土塊を含む灰褐色土で、下層はやや粘質の灰褐色土で埋まっていた。

**炉等** 炉や竈は検出されなかった。

**柱穴** 柱穴は検出されなかった。

**周溝** 周溝は検出されなかった。

**床面** 床面はほぼ平坦である。

**掘り方** 掘り方は検出されなかった。

**遺物と出土状況** 床面近くから出土した遺物はなかった。図示した土師器壺底部破片(第234図3)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器4点、焙烙破片1点、土師器4点、剥片2点が出土した。

**所見** 焙烙の破片が出土しており、古墳時代の遺構とは考えにくい、編集の都合上ここで記載した。

#### (4)土坑

2区では全部で148基の土坑が検出された。このうち108基は出土遺物がなく掘削時期を特定することが

できなかった。これらは浅間山起源と推定される軽石を多く含み、やや砂質の埋没土で埋まっていることが共通し、中世以降の土坑として報告した。

4基は塚状にローム塊を含む土壌によって埋没する縄文時代の土坑である。残りの44基は、古墳時代住居と共通する炭化物粒・焼土粒を顕著に含む土壌で埋没している特徴が確認でき、古墳時代の遺物が出土したことから、古墳時代の土坑と判断した。

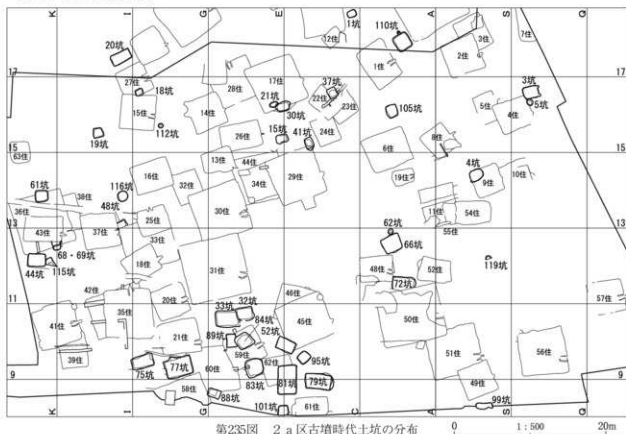
古墳時代の土坑は平面形によって、長方形・隅丸方形・円形・楕円形の4つの形態に分けることができた。長方形18基、隅丸方形11基、円形5基、楕円形3基である。68号・69号・115号土坑は埋没土や出土遺物から古墳時代の土坑と思われるが、全形が把握できなかったので分類からは除外した。また、28号土坑は平面図の記録が漏れ、遺憾ながら断面図と出土遺物(第264図)のみの報告となった。

ここでは、古墳時代の土坑について、形態ごとに特徴を記載し、個々の遺構について調査所見を報告する。個々の遺構の位置や規模は次頁第6表および遺構一覧表を参照されたい。

#### 長方形の土坑

長方形の土坑は18基検出された。隅丸方形との分類は、長軸短軸比が1.25以上のもので、比較的角張って掘られている土坑を長方形とした。32号土坑は平面形からは他の長方形土坑より方形に近い印象を受けるが、隅丸方形に分類された土坑の長軸短軸比は1.01~1.19であることから長方形とした。また長方形土坑は規模によって3.5m以上の特大型、2.73~3.14mの大型、2.18~2.50mの中型、1.8m以下の小型の4種に分けることができる。断面形は壁がほぼ直立する箱形である。

2区12号住居は長軸2.54m、短軸1.86mで長軸短軸比は1.37で、規模や形態からは長方形土坑大型の可能性もある遺構である。12号住居調査時には、古墳時代の大型土坑が未検出であったことから、土坑との認識をもたなかったために住居として記録しており、本報告書では住居として報告した。



第6表 2 a 区古墳時代土坑一覽

遺構番号	形状	長軸方位	長軸 m	短軸 m	残存壁高 m	長軸/ 短軸	出土遺物	植物性遺体 分析	
81	土坑	長方形 特大	N-0°-E	3.81	2.49	0.80	1.53	土師器・須恵器二重罐	○
77	土坑	長方形 特大	N-73°-E	3.59	2.48	0.71	1.46	土師器・須恵器壺碎片・粘土塊、割形石製模造品・磁石	○
79	土坑	長方形 特大	N-6°-E	3.57	1.99	0.89	1.79	土師器・須恵器高坏・壺碎片・磁石	○
33	土坑	長方形 大	N-88°-E	3.14	2.19	0.75	1.43	土師器・粘土塊・磁石・磨石	
72	土坑	長方形 大	N-87°-W	2.92	1.90以上	0.44		須恵器壺碎片	
75	土坑	長方形 大	N-74°-E	2.90	1.67	0.94	1.74	土師器・粘土塊	
20	土坑	長方形 大	N-63°-E	2.73	1.40	0.34	1.95	土師器・粘土塊	
52	土坑	長方形 大	N-85°-W	2.50	1.64	0.72	1.52	土師器	
3	土坑	長方形 大	N-78°-E	2.58	1.89	0.14	1.60	土師器・粘土塊	
44	土坑	長方形 大	N-87°-W	2.34	1.63	0.80	1.44	磁石	
99	土坑	長方形 大	N-88°-E	2.22	0.82以上	0.30			
32	土坑	長方形 大	N-79°-E	2.18	1.75	1.07	1.25	須恵器把手付甕	
88	土坑	長方形 中	N-71°-W	1.80	1.14	0.82	1.68	土師器・須恵器把手付甕・割形石製模造品・磨石	
89	土坑	長方形 中	N-2°-W	1.76	1.40	0.68	1.26	土師器	
15	土坑	長方形 中	N-77°-E	1.62	1.05	0.71	1.54	土師器	
41	土坑	長方形 中	N-20°-W	1.39	1.08	0.52	1.29	土師器	
48	土坑	長方形 中	N-63°-E	1.28以上	0.84以上	0.57			
1	土坑	長方形 小	N-67°-E	1.23	0.95	0.19	1.29	土師器	
86	土坑	隅丸方形大	N-62°-E	2.51	2.27	0.79	1.11	土師器	
83	土坑	隅丸方形大	N-73°-E	2.36	2.23	0.99	1.01	土師器・磨石	○
84	土坑	隅丸方形大	N-58°-E	2.13	1.93	0.66	1.10	土師器・須恵器壺碎片	○
110	土坑	隅丸方形大	N-32°-E	2.19	2.09	0.54	1.05	土師器・粘土塊・炭素焼土	
61	土坑	隅丸方形中	N-88°-E	1.71	1.54	0.89	1.11	土師器・須恵器高坏・炭素焼土	
95	土坑	隅丸方形中	N-46°-E	1.55	1.41	0.76	1.10	土師器・須恵器二重罐碎片	
101	土坑	隅丸方形中	N-2°-W	1.29以上	1.31	0.56			
106	土坑	隅丸方形中	N-77°-W	1.66	1.47	0.51	1.13	土師器	
19	土坑	隅丸方形中	N-78°-E	1.37	1.24	0.36	1.10	石製模造品	
37	土坑	隅丸方形小	N-30°-W	1.39	1.19	0.80	1.17		
18	土坑	隅丸方形小	N-70°-E	1.02	0.86	0.22	1.19		
80	土坑	方形と推定	計測不能	計測不能	1.09	0.19			
69	土坑	方形と推定	計測不能	計測不能	0.86	0.20			
115	土坑	方形と推定	N-30°-W	1.48以上	1.09	0.41		土師器・磨石	
116	土坑	円形 大?	N-33°-E	1.45	1.37	0.37	1.06	土師器・須恵器壺・磨石・合石	
115	土坑	円形 大	N-48°-W	0.91	0.79	0.29	1.15	土師器	
82	土坑	円形 小	N-26°-E	0.76	0.69	0.33	1.10	土師器	
112	土坑	円形 小	N-85°-E	0.67	0.58	0.32	1.16	土師器	
119	土坑	円形小と推定	N-2°-W	0.45以上	0.73	0.14		土師器	
4	土坑	楕円形 大	N-68°-E	1.62	1.41	0.85	1.29	須恵器壺碎片	
21	土坑	楕円形 小	N-70°-E	1.15	0.70	0.19	1.64	土師器	
30	土坑	楕円形 大	N-75°-E	1.92	1.23	0.99	1.56		
28	土坑	不明	不明	不明	不明	0.41		土師器・磁石	

特大型の3基は長軸短軸比が1.45~1.79と幅があり、やや細長さが異なるが、特に大型の土坑である。竪穴住居に匹敵する規模であるが、掘り方がなく貼り床を構築しないこと、柱穴が検出できないこと、炬等の火処が検出できないことから、竪穴住居とは区別した。これらの3基の土坑は2a区のなかでも南端に偏在している。やや離れる77号土坑の長軸は斜行するが、隣接する79号土坑と81号土坑の長軸は北および東でほぼ直交する。

大型の9基は、20号土坑の長軸短軸比が1.95で細長い。他は1.43~1.74でほぼ似た形態をもつ。分布は20号・44号土坑がやや北に、3号土坑が東に離れるが、他は特大型の3基と同様に2a区南端に集中する傾向がある。3号土坑は残存壁高が0.14mと浅い。中型の5基は、長軸短軸比が1.25~1.59でほぼ同様な形態をもつ。分布は2a区に散在する。

1号土坑はやや小さいので小型に分類したが、新移的な変化である。発掘区の最も北側で検出された。20号土坑とともに北に隣接して調査された尻紙北三木堂遺跡の遺構分布も考慮する必要がある。

## 2区81号土坑

(第236・237回 PL120・195 遺物観察表P.596)

**位置** 2a区2-9-D・E-8・9G

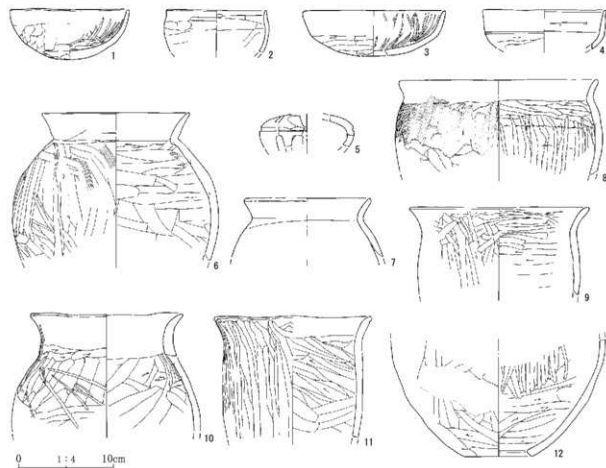
**形状** 長方形 **重複** 62号住居より新しい。

**規模** 長軸3.81m 短軸2.49m 残存壁高0.80m

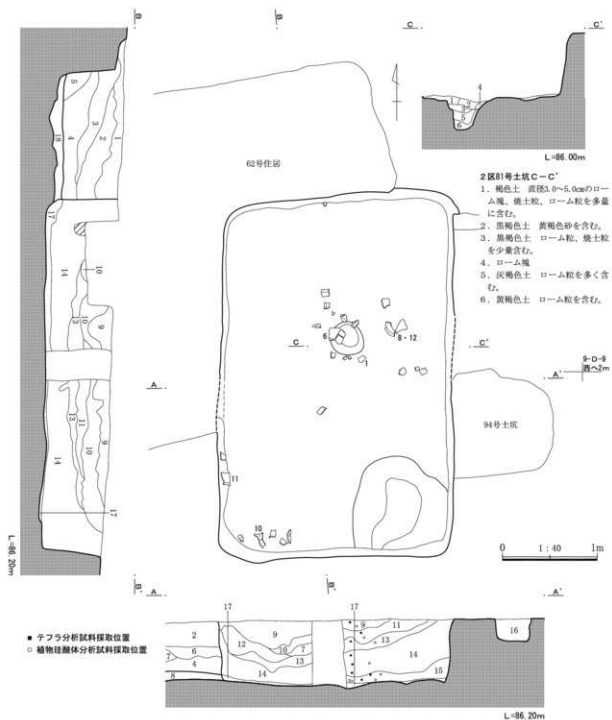
**長軸方位** N-0°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 下層はローム粒・ローム塊・炭粒・焼土粒を含む暗褐色土で、ローム粒・ローム塊を含む褐色土と黒褐色土の互層が堆積していた。特に中層に堆積した黄褐色土(13層)は際立つ。



第236図 2区81号土坑出土遺物



2区81号土坑・62号住居 A-A' B-B' C-C'

1. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、炭粒をごく少量含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒、炭粒をごく少量含む。
4. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む、焼土粒、炭粒をやや多く含む。
5. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
6. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒をごく少量含む、炭粒をやや多く含む。
7. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0~3.0cm)を少量含む、炭粒、焼土粒をごく少量含む。
8. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
9. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。

10. 褐色土 ローム塊(直径1.0~2.0cm)を少量含む。
11. 黒褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を少量含む。
12. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む、やや粘質。
13. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
14. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)、炭粒、焼土粒をごく少量含む、やや粘質。
15. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む、やや粘質。
16. 黒色土 砂質。
17. 暗黄褐色土と黄褐色土(ローム)の層土。
18. 褐色土 黒褐色土と暗褐色土を少量含む。

第237図 2区81号土坑



**底面** ほぼ平坦である。底面中央やや北寄りに規模(長径×短径×深さ)が37×35×38cmの円形ピットを検出した。南東隅は直径1.1mほどの不整形円形に深さ8cmほど凹んでいた。

**遺物と出土状況** 遺物は中央部やや北よりの円形ピット周辺と、南西隅に比較的多く出土した。円形ピット周辺には底面直上で土師器破片が出土したが、少破片のために図示できなかった。土師器環(第236図1)は中央部底面上5cmで出土した。また土師器甕(6)、瓶(8・12)も中央部から東部で出土したが、底面からそれぞれ8cm、22cm上で出土した。土師器甕(10・11)は南西隅壁際、底面上24cm、21cmで出土した。須恵器二重甕(5)破片を含む、他の図示遺物は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器357点、粘土塊4点(P L 194)、礫片4点、剥片4点が出土した。他に縄文時代の石鏡

1点(第277図35)が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2期の土坑と推定される。本土坑は北西部が64号住居と重複しているが、埋没土の観察からは64号住居が少なくとも残存壁高以上まで埋まりきった段階で掘り込まれたと見なすことができる。また埋没土のテフラ分析と植物遺存体分析を実施したところ、埋没土上層でHr-FAの降灰層準を確認した。また、多量のネザサ節やススキ属、少量のイネの植物遺存体を検出した。

#### 2区77号土坑

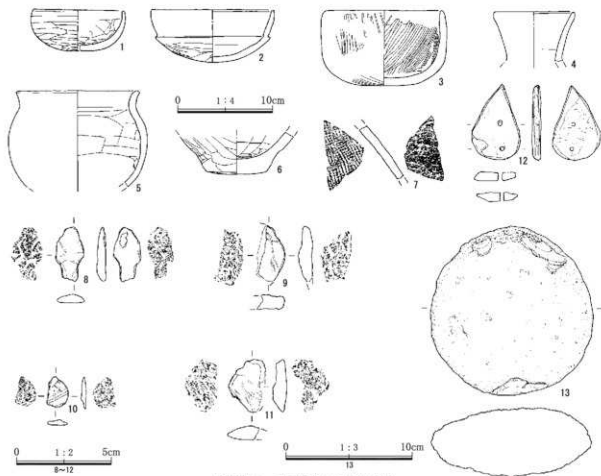
(第238・239図 PL121・195 遺物観察表P.597・612)

**位置** 2a区2-9-G・H-9G

**形状** 長方形。北側はやや影らむところがある。

**重複** 60号住居より新しい。

**規模** 長軸3.59m 短軸2.48 残存壁高0.71m



第238図 2区77号土坑出土遺物

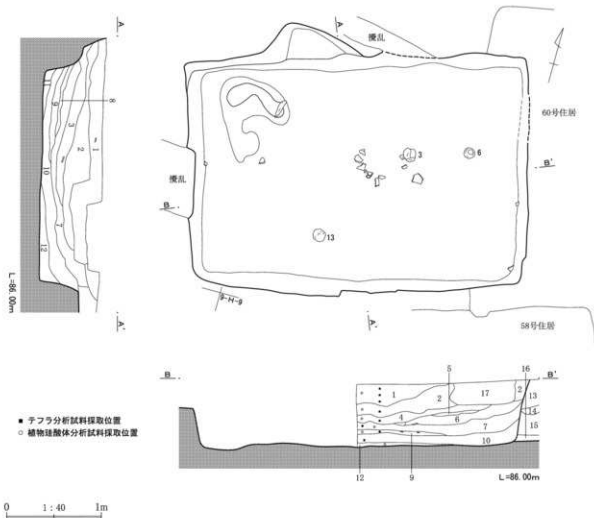
**長軸方位** N-73°-E断面形 壁がほぼ直立する箱形。北側の一部は壁上半部がやや開く。

**埋没土** 上層はローム粒を含む暗褐色土で、下層はローム粒・焼土粒を含む黄褐色土あるいは暗褐色土。

**底面** はほぼ平坦である。凹凸いがやや深い。

**遺物と出土状況** 遺物は中央部に比較的まとまって出土した。中央部には底面直上で出土した土師器破

片があったが、少破片のために図示できなかった。土師器環(第238図3)は中央部底面上21cmで出土した。また土師器甕(6)が東部底面直上で出土した。円盤状の軽石(13)は顕著な使用痕跡はなかったが、南部底面直上で出土した。図示した他の遺物は埋没土中から出土した。粘土塊(8-11)や刺形石製模造品(12)も埋没土から出土した。



2区77号土坑 A-A' B-B'

77号土坑

1. 黒褐色土 砂質。ローム粒をごく少量含む。(新しい土坑)。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。2層よりやや暗い。
4. 黄褐色砂質土
5. 黒褐色土 炭化物粒、焼土粒を含む。
6. 褐色土 ローム粒、直径0.5~1.0cmのローム小塊を多く含む。
7. 暗褐色土 焼土粒、炭粒をやや多く含む。ローム粒を少量含む。
8. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
9. 暗黄褐色土 ローム粒をやや多く含む。

10. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒をごく少量含む。
11. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を多く含む。
12. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒を含む。
- 60号住居
13. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒をごく少量含む。白色軽石を多く含む。
14. 黒褐色土と暗黄褐色土の混土。ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
15. 褐色土 直径3.0~5.0cmのローム塊、直径1.0~2.0cmのローム小塊を含む。
16. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
- 土坑
17. 黒色砂質土 サラサラしている。白色軽石を含む。ごく新しい土坑。

### 3. 古墳時代の遺構と遺物

ここで図示した遺物のほか、縄文土器 8 点、土師器 586 点、棒状礫 2 点、礫片 3 点、剥片 4 点が出土。

**所見** 重複関係から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡 3 期以降の土坑と考えられるが、確定はできなかった。本土坑も東部が 60 号住居と重複しているが、埋没土の観察からは、60 号住居が少なくとも残存壁高以上まで埋まりきった段階で掘り込まれたと見なすことができる。また埋没土のテフラ分析と植物遺存体分析を実施したところ、埋没土上層で Hr-FA の降灰層準を確認した。また、多量のネザサ節やススキ属、比較的多い量のイネ、少量のオオムギ族の植物遺存体を検出した。

2 区 79 号土坑 (第 240 図 PL121・194・196 遺物観察表 P. 597・612)

**位置** 2 a 区 2-9-C・D-8・9 G

**形状** 長方形。東半分に 2 号井戸が後出して掘られているために、外形が歪んでいる。

**重複** 2 号井戸より古い。

**規模** 長軸 3.57m 短軸 1.99m 残存壁高 0.85m

**長軸方位** N-95°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 下層はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土で、上層は白色軽石粒・焼土粒・ローム粒を含む褐色土で埋まっていた。

**底面** ほぼ平坦であるが 2 号井戸の周辺の凹凸が著しい。南西部と南東部の底面は深さ 3~10cm、不定楕円形に凹んでいた。

**遺物と出土状況** 底面近くで出土した遺物は少ない。図示した遺物は埋没土中から出土した。須恵器破片(第 240 図 4)は 77 号土坑出土の破片(第 238 図 7)や、住居出土の同一個体と思われる破片があるが、接合はできなかった。須恵器坏(第 240 図 2)は、本住居埋没土中の破片と 1 c 区 18 号溝出土の破片が接合した。2 区 2-9-C グリッド出土遺物にも同一個体が検出されたが、接合しなかった。ここで図示した遺物のほか、縄文土器 4 点、土師器 281 点、粘土塊 2 点(P L 194)、礫片 4 点、剥片 2 点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡 6 期の土坑

と推定される。埋没土のテフラ分析と植物遺存体分析を実施したところ、埋没土上層で Hr-FA の降灰層準を確認した。また、多量のネザサ節やススキ属、比較的高い密度のイネの植物遺存体を検出した。

2 区 32 号土坑 (第 241 図 PL121・196 遺物観察表 P. 597)

**位置** 2 a 区 2-9-D・E-10 G **形状** 長方形

**重複** 33 号土坑より新しく、31 号土坑より古い。

**規模** 長軸 2.18m 短軸 1.75m 残存壁高 1.07m

**長軸方位** N-79°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 下層はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土、黒色土と暗褐色土の混土で埋まっていた。上層はローム粒・白色軽石を含む黄褐色土・黒褐色で埋まっていた。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は北東隅にまともに出土したが、いずれも底面から 8~60cm 上から出土した少破片で、図示することはできなかった。図示した須恵器把手付椀(第 241 図 1)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器 75 点、粘土塊(P L 194)が出土した。他に縄文時代の石器 1 点(第 278 図 53)が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡 2 期の土坑と推定される。後出する 31 号土坑と重複しているために外形形状はやや乱れているが、長方形と分類した。長軸短軸比が 1.25 と長方形としては低い値であるが、隅丸方形の長軸短軸比は 1.05~1.11 であり、明らかに隅丸方形とは異なる。長方形と隅丸方形の中間的な形状を示す。

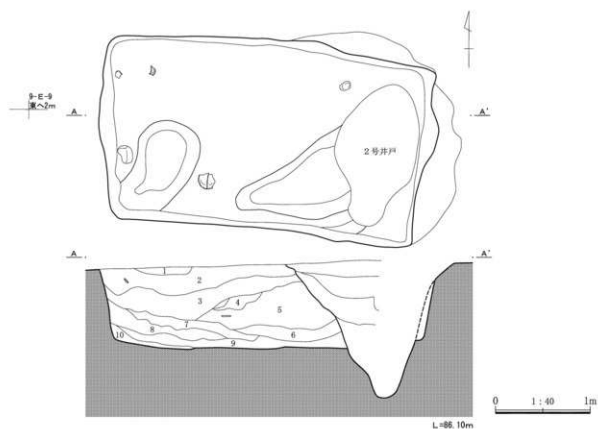
2 区 33 号土坑

(第 241・242 図 PL121・122・196 遺物観察表 P. 597・612)

**位置** 2 a 区 2-9-E-10 G

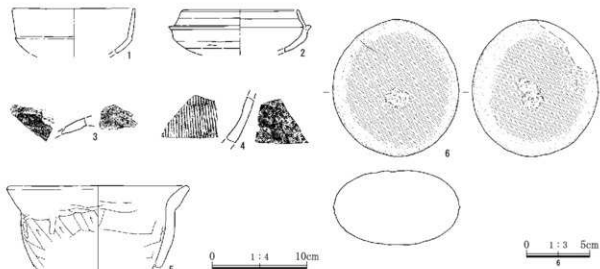
**形状** 長方形。北東隅が 32 号土坑に切られているために形状は不明であるが、全体形状は長方形と推定される。

**重複** 32 号土坑より古い。

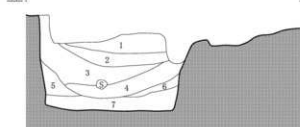
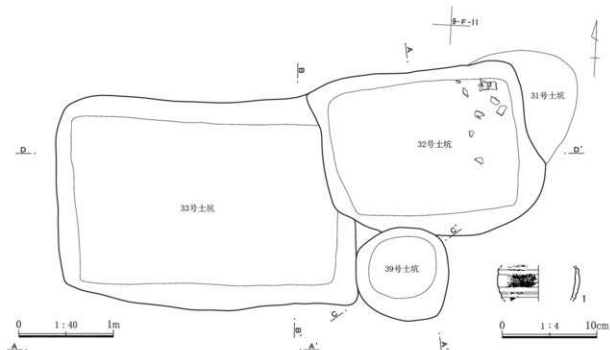


2区79号土坑A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石を含む。
2. 褐色土 白色軽石、直径1.0~2.0cmの焼土小塊、直径1.0cmの炭化物片、焼土粒、黄色土粒を含む。
3. 直径0.8~1.0cmの黄色粒、黄色土粒、少量の焼土粒、直径1.0~2.0cmの灰白色粘土塊を含む。
4. 黄褐色粘質土
5. 直径3.0~5.0cmの白色軽石を含む黒色土塊、直径1.0~2.0cmの黄色土塊、白色軽石、黄色土粒を多く含む。
6. 褐色土 直径5.0~10.0cmの黒色土塊、直径1.0~2.0cmの黄色土塊を含む。
7. 褐色土 直径2.0~3.0cmの黄色土塊、直径2.0~3.0cmの灰白色粘土塊、直径1.0~2.0cmの黒色土塊を含む。
8. 褐色土 直径3.0~5.0cmの黒色土塊、直径1.0cmの黄色土小塊、黄色土粒を含む。
9. 黒褐色土 直径3.0~5.0cmの黄色土塊、少量の直径3.0~5.0cmの黒色土塊を含む。
10. 褐色土 直径1.0~2.0cmの黄色土塊を含む。

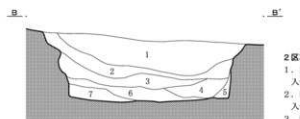


第240図 2区79号土坑と出土遺物



## 2区32号土坑A-A'

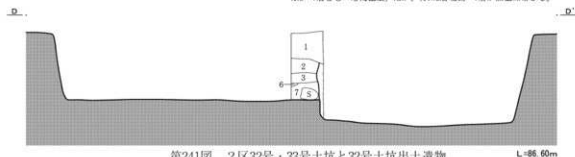
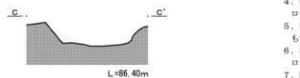
1. 濃黄褐色土 ローム土と濃褐色土の混土。上位にローム土多い。白色粒子(砂又は珪石含む)均一に含む。
2. 黒褐色～濃黄褐色土 層辺が1層に似た暗黄褐色土。黒褐色、濃黄褐色土共に白色粒子(砂又は珪石含む)均一に含み、黒褐色土中には焼土粒(直径1.0～3.0mmほど)少量含む。
3. 濃黄褐色土 ローム土。暗褐色土を塊状に含む。白色粒子少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒(直径0.1～1.0mmほど、0.1～0.2cmのもの主体)均一に少量含む。北端にはローム塊も混じる。白色粒子少量含む。3・4層間の「S」は線系系の軽石(角閃石含む)。
5. 黄褐色土 ローム土主体。濃褐色土部分的(中央中心)に混じる。
6. 濃黄褐色土 ローム土と濃褐色土との混じり。
7. 暗褐色土 黒土が南側の一部及び北側に混じる。(全体の約40%)ローム粒～塊(直径0.1～3.0cmほど)、特に下に含む。白色粒子少量含む。



## 2区32号土坑B-B' D-D'

1. 濃褐色土 北側やや黒色味帯びる。白色軽石粒(直径1.0～5.0mmほど、角閃石混入せず)を、特に北側に多く含む。
2. 暗褐色土 北側やや黒色味帯びる。白色軽石粒(直径1.0～3.0mmほど、角閃石混入せず)を、特に北側に含む。
3. 暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0～3.0mmほど、角閃石混入せず)均一に少量含む。ローム粒(直径1.5cmほど)均一に少量含む。南側やや砂質。
4. 暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0～3.0mmほど、角閃石混入せず)均一に少量含む。ローム粒(直径3.0mmほど)均一に少量含む。
5. 暗褐色土 ローム土サーブ状に含む。また、上位には塊状(長径5.0cmほど)にも含む。全体の60%以上ロームが混じる状態。
6. 暗褐色土 3層南側に混るが、砂質ではない。白色軽石粒はごく少量含まれる。ローム粒は平均径1.0cm内外のものを中心で、他の層に比べ目立つ。
7. 暗褐色土 ローム粒(直径1.0cmほど)少量含む。

※2～7層と「暗褐色土」だが、特に2層北側・7層が黒色味帯びる。



第241図 2区32号・33号土坑と32号土坑出土遺物

**規模** 長軸3.14m 短軸2.19m 残存壁高0.75m

**長軸方位** N-88°-E

**断面形** 下半分の壁はほぼ直立し箱形を呈するが、上半は外側に広がっている。

**埋没土** 下層はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土で、上層は白色軽石粒・ローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 底面近くで出土した遺物はほとんどない。図示した遺物は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器519点、剥片3点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の土坑と推定される。

2区72号土坑(第243図 PL122・196 遺物観察表P.597)

**位置** 2a区2-9-A・B-11G

**形状** 長方形。南部が後世の水路掘削のために削られている。P1が北壁沿いにあることから、P2が南壁沿いにあると仮定すれば全体形状は長方形か。

**規模** 長軸2.92m 短軸1.90m以上

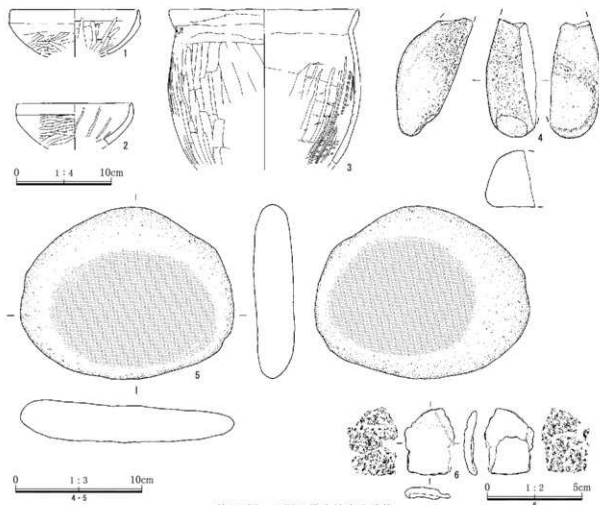
残存壁高0.44m

**長軸方位** N-87°-W

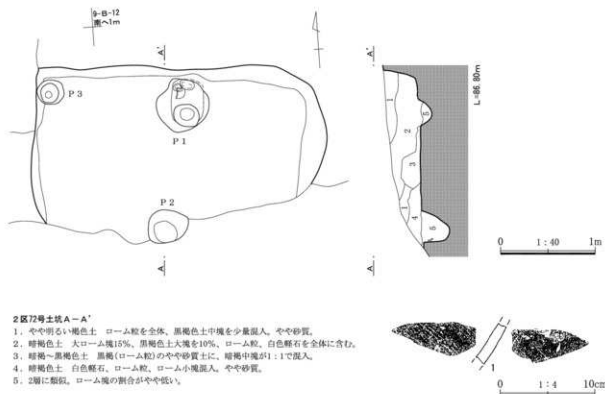
**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 下層はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土で、上層は黒褐色土塊・ローム粒を含む褐色土。

**底面** ほぼ平坦である。底面には北壁中央壁際にP1、南部にP2、北西隅にP3が検出された。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が57×57×33cm、P2が47×38以上×32cm、P3が27×27×24



第242図 2区33号土坑出土遺物



第243図 2区72号土坑と出土遺物

cmである。P1は深さ33cmのところ中段があり、さらに30×25×41cmのビットになっていた。この中段には円礫が3個出土した。

**遺物と出土状況** 底面近くで出土した遺物は少ない。図示した須恵器甕破片(第243図1)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器45点、剥片2点が出土した。

**所見** 重複関係からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期以降の土坑と考えられるが、確定はできなかった。

2区75号土坑(第244図 PL122・196 遺物観察表P.597・598)

**位置** 2区2-9-H・I-9G

**形状** 長方形 **重複** 76号・80号土坑より古い。

**規模** 長軸2.9m 短軸1.67m 残存壁高0.94m

**長軸方位** N-74°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 下層はローム粒・ローム塊・白色軽石を含む砂質の暗褐色土で、上層はローム塊・黒褐色土塊を含む暗褐色土とローム粒を含む明褐色土で埋まっ

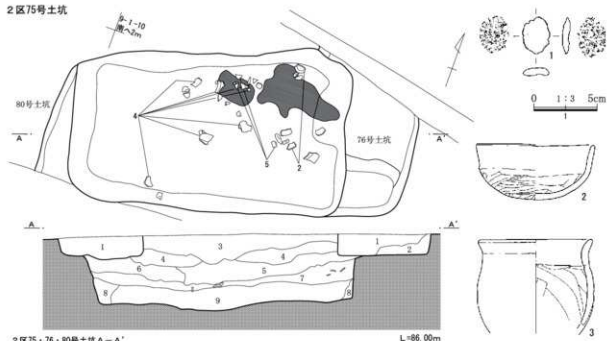
ていた。

**底面** ほほぼ平坦である。北西隅と中央部北壁際に焼土混じりの暗褐色土が厚さ15cmほど堆積していた。

**遺物と出土状況** 遺物は北東部にまとまって出土した。底面近くから出土した遺物は少なく上層出土物が多い。上層出土物のいくつかは、下層出土物と接合する。土師器甕(第244図4)は中央部北壁際・中央・西南部出土の底面上7~64cmの8点の破片が接合した。坏(2)は北東隅の底面上4cmの遺物と東部底面上26cmの遺物が接合した。小型甕(3)も北部壁際初下面上11cm、26cmの破片と中央部底面上26cmで出土した遺物が接合した。粘土塊(1)と甕(3)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器144点、礫1点、礫片4点が出土した。なお、重複する76号・80号土坑とともに掘り下げたために、上層出土遺物は3基の土坑一括で取りあげている。その内訳は土師器115点、礫・礫片9点である。図示した粘土塊(1)はこの出土遺物である。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3~4期の

2区75号土坑



2区75・76・80号土坑 A-A'

L=86.00m

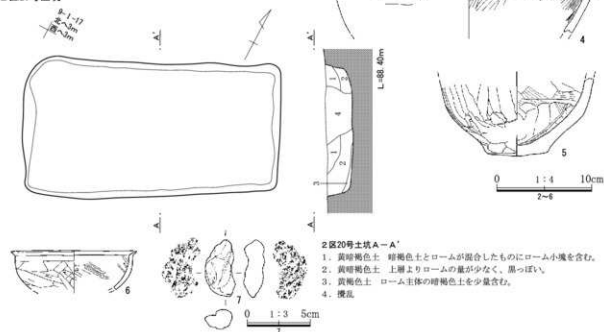
80号土坑・76号土坑

1. 黒灰色砂質土 白色軽石、黄色粘土粒、直径1.0cmの黄色粘土小塊を含む。
2. 灰褐色土 黄色粘質土小塊(直径1.0~2.0cm)を多く含む。

75号土坑

3. 黒褐色土 白色軽石、直径3.0~5.0cmのローム塊を含む。
4. 褐色土 白色軽石、直径3.0~5.0cmのローム塊を含む。
5. 褐色土 白色軽石、粘土粒、直径3.0~5.0cmのローム塊を多く含む。
6. 黄褐色土 白色軽石、焼土小塊、黒色土小塊(1.0~2.0cm)を含む。
7. 褐色粘質土 白色軽石、焼土小塊、黒色土小塊(3.0~5.0cm)を多く含む。
8. 褐色土 直径1.0~3.0cmの黄色ローム小塊を含む。
9. 直径3.0~5.0cmのローム塊と褐色土塊の混土。

2区20号土坑



2区20号土坑 A-A'

1. 黄褐色土 暗褐色土とロームが混在したものにローム小塊を含む。
2. 黄褐色土 土層よりロームの量が少なく、黒っぽい。
3. 黄褐色土 ローム主体の暗褐色土を少量含む。
4. 攪乱

第244図 2区75号・20号土坑と出土遺物



土坑と推定される。しかし、本土坑の出土遺物は上下層間での接合例が多く、埋没土の層界が弧状ではなく水平に近いことから、自然埋没でない可能性を示唆している。遺物出土状態からも、遺物を含んだ土砂が埋填された可能性が考えられる。

2区20号土坑 (第244図 PL123・196 遺物観察表P.598)

**位置** 2a区2-9-I-17G

**形状** 長方形。新しい溝が斜めに縦断して掘られているが、全体形状はとらえることができた。

**規模** 長軸2.73m 短軸1.40m 残存壁高0.34m

**長軸方位** N-63°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層はローム塊と暗褐色土が混合した黄褐色土で、下層は上層よりロームが少ない黄暗褐色で埋まっていた。

**底面** 底面にも攪乱土が残るが、それ以外の残存する底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。図示した坏(第244図6)と粘土塊(7)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器33点、礫片2点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3~4期の土坑と推定される。本土坑は出土遺物が少なく、古墳時代の土坑と断定できる根拠に乏しいが、形態的な特徴や27号住居との主軸の一致などの状況証拠から、ここでは古墳時代の遺構として報告した。

2区52号土坑 (第245図 PL123・196 遺物観察表P.598)

**位置** 2a区2-9-D・E-9・10G

**形状** 長方形。隅は角張って掘られている。

**重複** 45号住居より新しい。

**規模** 長軸2.50m 短軸1.64m 残存壁高0.72m

**長軸方位** N-65°-W

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層はローム粒・白色軽石粒を含む暗褐色土で、下層はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。図示した遺物はいずれも埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器309点、粘土塊1点(P.L194)、銅片1点が出土した。

**所見** 重複関係や出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の土坑と推定される。本土坑は調査工程の異なる地点の境界にあったことから、土層断面A-A'のラインの北側と南側の調査を連続的に実施することができなかった。全掘状況の写真は撮影漏れである。

2区44号土坑 (第246図 PL123・197 遺物観察表P.612)

**位置** 2a区2-9-K-11・12G

**形状** 長方形

**重複** 36号住居と重複するが、新旧関係は判然としなかった。

**規模** 長軸2.34m 短軸1.63m 残存壁高0.80m

**長軸方位** N-87°-W

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形。南壁上半は溝状の攪乱により掘り広がっていて、残存していなかった。

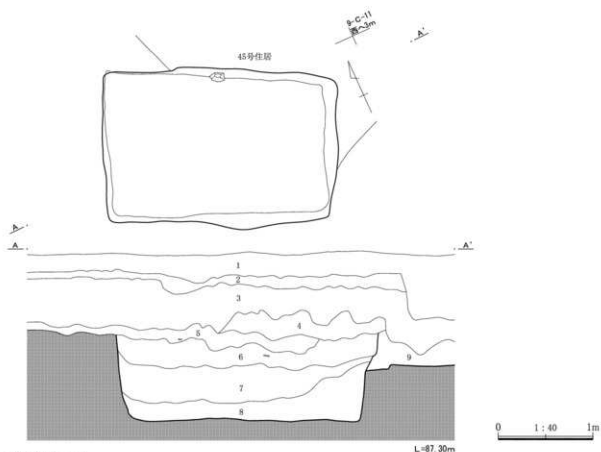
**埋没土** 上層はローム塊と濃褐色土の混土で埋まっていた。下層埋没土は土層観察用ベルトが崩落し記載できなかったため、不明である。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物は、図示した敲石(第246図1)と、取りあげなかったが、縦15cm、横20cm、厚さ15cmほどの礫である。後者の礫は底面にやや埋まるように置かれており、台石であった可能性がある。ここで図示した遺物のほか、土師器137点、礫片2点が出土した。

**所見** 出土遺物は3期以降の様相を示すが、重複関係が明確でなく時期は特定できなかった。出土遺物の図示はできなかったが、土師器壺・甕の破片が多数出土している。土師器坏は須器模倣坏、半球形の坏、内斜口縁の坏などが混在している。

埋没土上半のローム塊主体の土層は、埋没途中の凹地に一括埋填されたものと見られる。



2区52号土坑A-A'

1. 腐土および覆瓦土

2. 腐土 ローム主体、暗褐色土含む。

3. 圓形敷織目の瓦土(砕作土)、As-Bを全体に含む。

4. 暗褐色土 As-Bを全体に含む、ザラザラしている。

5. 暗褐色土と暗褐色土がまだらに混合、As-Bを全体に含む、ザラザラしている。

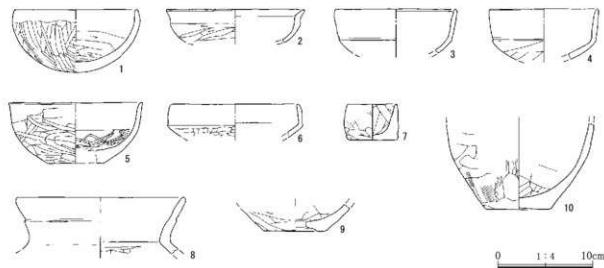
6. 暗褐色土 ローム粒を全体に含む、As-Bを少量含む。

7. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を少量含む、砂粒を含む。

8. 暗褐色土 ローム粒、ローム小塊を全体に含む、7層より黄色っぽい。

45号住居

9. 暗褐色土 ローム小塊、ローム粒を多く含む。



第245図 2区52号土坑と出土遺物

## 2区99号土坑 (※24600 PL123)

位置 2a区2-8-S-8G

形状 南部が後世の水路掘削のために削られている。四隅が丸く掘られているが、壁がほぼ垂直に立ちあがる断面形の共通性から、長方形と推定した。

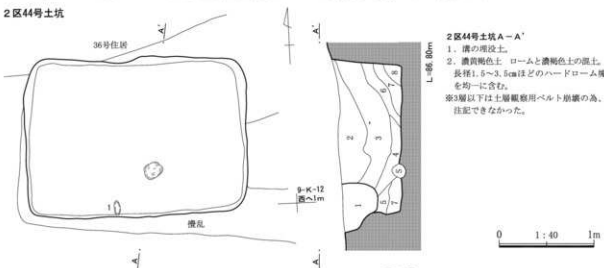
規模 長軸2.22m 短軸0.82m以上

残存壁高0.30m 長軸方位 N-88°-E

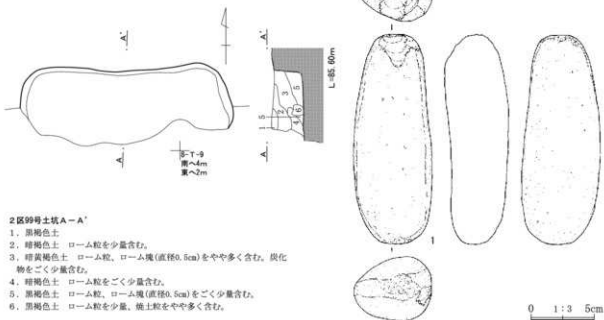
断面形 壁がほぼ直立する箱形

埋没土 上層は黒褐色土・ローム粒を含む暗褐色土で、下層はローム塊・ローム粒を少量含む黒褐色土

## 2区44号土坑



## 2区99号土坑



第246図 2区44号・99号土坑と44号土坑出土遺物

で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。図示できる埋没土中出土の遺物もなかった。埋没土中から出土した遺物は土師器2点で、甕と須恵器模倣杯の口縁部破片のみである。

所見 本土坑は出土遺物が少なく、古墳時代の土坑と断定できる根拠に乏しいが、形態的な特徴や他の古墳時代遺構の埋没土との共通性から、ここでは古墳時代の遺構として報告した。

第5章 2区の遺構と遺物

2区3号土坑 (第247図 PL124・197 遺物観察表P.598)

**位置** 2a区2-8-R-16G

**形状** 長方形。四隅はやや丸く掘られているが、長軸短軸比が1.29であり、長方形土坑に分類した。

**規模** 長軸2.05m 短軸1.59m 残存壁高0.14m

**長軸方位** N-76°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形と推定される。

**埋没土** 白色軽石・ローム塊・炭化物粒を少量含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。中央部やや南側に長軸20cm、短軸15cmの範囲に厚さ2cmほどの焼土が認められた。また、東壁に柱穴P1・P2を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が51×38×29cm、P2が39×27×5cmである。P2の上層には土師器甕破片が出土した。

**遺物と出土状況** 遺物は西半部にまとまって、ほとんど底面直上で出土した。ほとんどの遺物がその場で割れている状態であり、完形に近い形に復元できた。土師器環(第247図2)・高杯(3)・甕(9)は西壁際で出土した。環(2)にはP1埋没土出土の破片と接合した。甕(5)は北西部で、甕(10)は南東隅で出土した。甕(10)には5号土坑で出土した破片が接合した。甕(4)は焼土の北縁、甕(6)は中央部やや北寄りで出土した。粘土塊(1)は甕(4)の破片の中から出土した。甕(7)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器144点、礫片1点が出土した。土師器は図示した土師器環(2)の他はすべて壺・甕の破片であった。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2～3期の土坑と推定される。P1・P2は埋没土との関係を厳密に精査できなかったため、本土坑に伴うかどうか確定はできないが、ピットの位置と規模の共通性から、ここでは土坑に伴う遺構として報告した。

2区88号土坑 (第248図 PL124・197 遺物観察表P.599)

**位置** 2a区2-9-F-G-8G

**形状** 長方形。東壁はやや掘り広がり不定形。

**重複** 58号住居・60号住居より新しい。

**規模** 長軸1.80m 短軸1.14m 残存壁高0.82m

**長軸方位** N-71°-W

**断面形** 壁の上方が開く逆台形。南側の壁には凹凸があり、不定形である。

**埋没土** 上層はローム粒と焼土粒を含む暗褐色土で、下層は暗褐色土とロームの混土で埋まっていた。

**底面** 底面にも凹凸がある。中央やや南西寄りには長径0.4m、短径0.34m、深さ0.2mのピットが検出された。ピットの東縁には粘土塊が残されていた。

**遺物と出土状況** 遺物は埋没土上層から底面上まで出土しているが、底面直上で出土した遺物はない。図示した埴(第248図4)と剣形石製模造品(7)は埋没土上層から出土した。手づくね土器(1)は西壁際底面上9cmで、棒状礫(8)は中央部底面上11cmで出土した。須恵器把手付椀(2)と土師器杯(3)は埋没土中から出土した。これらは先行する60号住居埋没土出土の破片とも接合したが、後出する本土坑の出土遺物とした。

ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器185点、粘土塊1点(P.L194)、礫片6点、礫片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の土坑と推定される。本土坑は58号・60号住居調査中に検出されたため、本来の位置で土層断面を記録することができなかった。58号住居との新旧関係は土坑の確認状況の写真記録による。(P.L124)

2区89号土坑 (第248図 PL124)

**位置** 2a区2-9-F-9・10G

**形状** 長方形。南西隅、東壁の一部を確認できなかったが、長方形と推定される。長軸短軸比が1.26で、32号・41号・1号土坑とともに方形に近い。

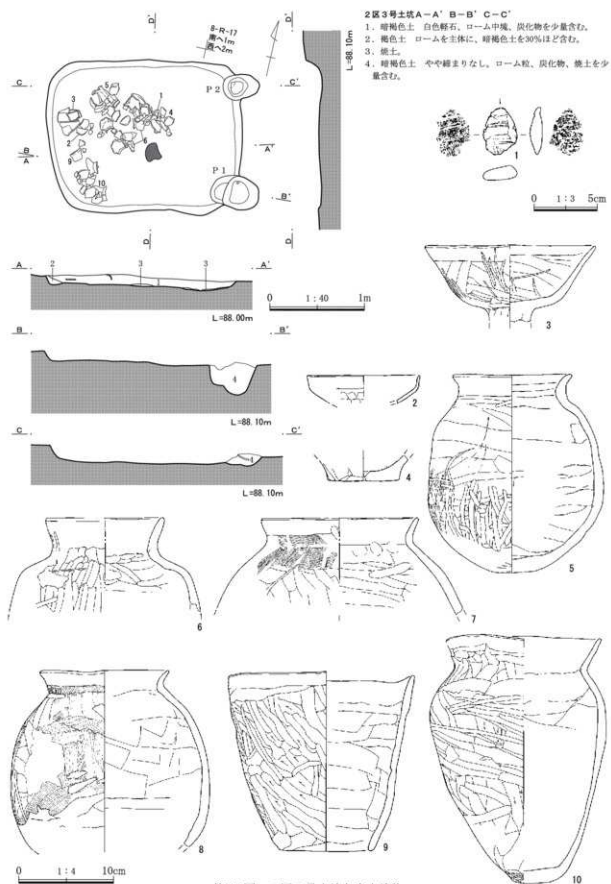
**重複** 84号住居・59号住居より古く、60号住居より新しい。

**規模** 長軸1.76m 短軸1.40m 残存壁高0.68m

**長軸方位** N-2°-W

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形。壁際がやや深くくなっている。

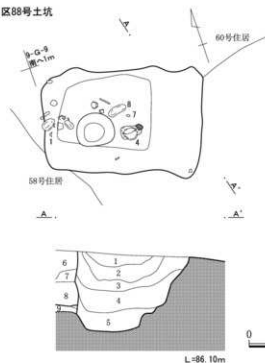
3. 古墳時代の遺構と遺物



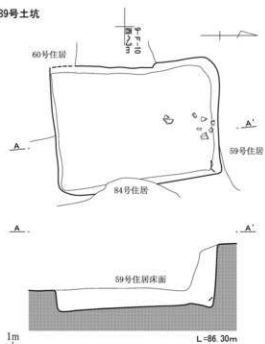
第247図 2区3号土坑と出土遺物

第5章 2区の遺構と遺物

2区88号土坑



2区89号土坑



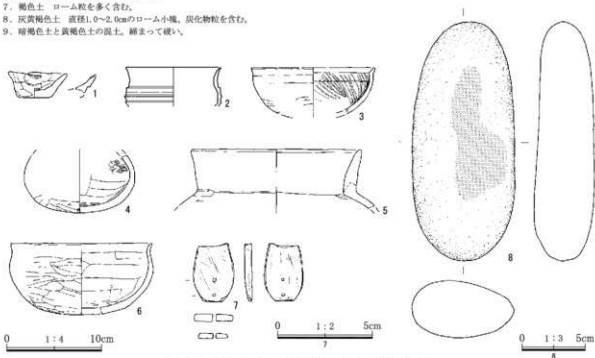
2区88号土坑・60号住居A-A'

88号土坑

1. 黒褐色土 黄褐色砂を少量含む、白色軽石をやや多く含む。
2. 暗褐色土 灰褐色粘土、焼土粒、炭粒を多く含む(土器土層)。
3. 白色軽石を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を少量含む、焼土粒をごく少量含む。
5. 暗褐色土と黄褐色土(ローム)の混土。

60号住居

6. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。
7. 褐色土 ローム粒を多く含む。
8. 灰黄褐色土 直径1.0~2.0cmのローム小塊、炭化物粒を含む。
9. 暗褐色土と黄褐色土の混土。締まって硬い。



第248図 2区88号・89号土坑と88号土坑出土遺物

**埋没土** 59号・60号住居調査中に検出されたため、十分な土層断面を記録することができなかった。

**底面** 底面はほぼ平坦である。南東隅にピットが検出されたが、これは59号住居の主柱穴P1である。

**遺物と出土状況** 北壁沿いにまとまって遺物が出土したが、底面近くから出土した遺物はない。図示できる破片もなかった。埋没土中から土師器31点が出土した。これには須恵器模倣坏口縁部破片が含まれている。

**所見** 重複関係から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の土坑と推定される。本土坑は59号・60号住居の調査途中に検出された。89号土坑と重複部分の59号住居の床面が明確でなかったため、89号土坑の出土遺物に59号住居の遺物が混在することとなった。全景写真にある上位の遺物は60号住居の出土遺物である。

#### 2区15号土坑

(第249図 PL125・197・198 遺物観察表P.599)

**位置** 2a区2-9-D-E-15G

**形状** 長方形。南壁上半部は一部掘り広がっており、定型的でないが、底面の形状は長方形である。

**規模** 長軸1.62m 短軸1.05m 残存壁高0.71m

**長軸方位** N-77°-E

**断面形** 壁上部が外側に開く逆台形

**埋没土** 上層はローム塊・ローム粒を含む暗褐色土で、下層はローム塊・ローム粒・暗褐色土塊の混土で埋まっていた。

**底面** 底面は、西半分が12cmほど深く凹んでいた。

**遺物と出土状況** ほとんどの遺物は埋没土上層で出土した。底面近くから出土した遺物はない。土師器坏(第249図1)は東壁際底面上45cm、坏(2)は中央部やや西寄り底面上45cmで出土した。甕(3)は南壁寄り底面上20cm、甕(4)は中央部底面上31cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器82点、剥片2点が出土した。土師器破片のなかには坏の破片29点が含まれているが、須恵器模倣坏と判断できる破片はなかった。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の土坑

と推定される。埋没土上層に遺物が集中することは、土坑埋没途中で一括廃棄された可能性が考えられよう。

#### 2区41号土坑 (第249図 PL125・198 遺物観察表P.599)

**位置** 2a区2-9-D-15G

**形状** 長方形。南壁は調査時に掘り過ぎた可能性がある。

**重複** 13号土坑より古い。

**規模** 長軸1.39m 短軸1.08m 残存壁高0.52m

**長軸方位** N-20°-W

**断面形** やや上方に壁が開く逆台形と推定される。

**埋没土** 上層はローム塊と白色軽石を含む暗褐色土で、下層はローム主体の黄褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は中央部と北東隅にまとまって底面から8~18cm上で出土した。底面近くから出土した遺物はない。土師器坏(第249図5)は北東隅底面上14.5cmで、小形甕(6)は北東隅底面上8cmで出土した。甕(7)は中央部底面上8cmと北壁際底面上11.5cmで出土した4片の破片が接合した。台付甕(8)は北東隅底面上18cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器25点、礫片1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の土坑と推定される。本土坑の出土遺物は比較的古い様相を示している。2a区の古墳時代遺構のなかでは最も古い段階の遺構と見られる。西南部の一部は底面の検出が困難で、全景写真では掘り過ぎている部分がある。

#### 2区48号土坑 (第249図 PL125)

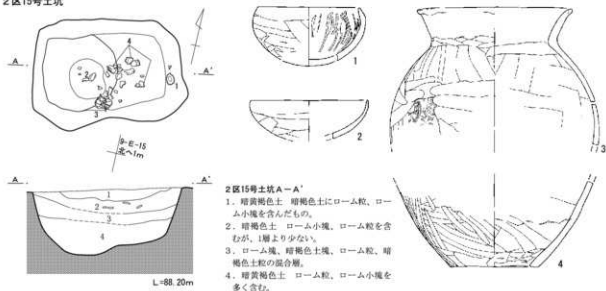
**位置** 2a区2-9-I-12・13G

**形状** 37号・33号住居と重複しているため、西壁と南壁は確認できなかったが、北壁・東壁の状況から長方形と推定される。

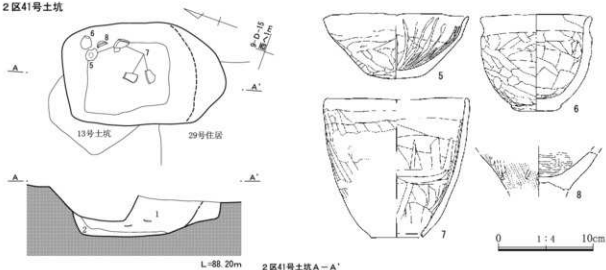
**重複** 37号住居より古い。33号土坑との新旧関係は不明である。

**規模** 長軸1.28m以上 短軸0.84m以上

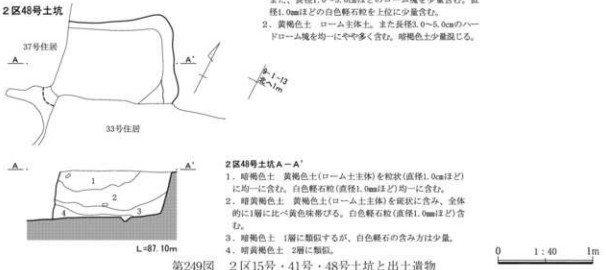
2区15号土坑



2区41号土坑



2区48号土坑



第249図 2区15号・41号・48号土坑と出土遺物



残存壁高0.57m

長軸方位 N-63°-E

断面形 壁がやや上方に開く逆台形と推定される。

埋没土 上層はローム塊と白色軽石粒を含む暗褐色土で、下層は上層より白色軽石が少ない暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。埋没土中の遺物も小破片で、図示しなかった。埋没土中から出土した遺物は縄文土器2点、土師器24点が出土した。土師器は半球形のタイプで、壺には有段口縁の破片が含まれている。

所見 本土坑は出土遺物が少なく、古墳時代の土坑と断定できる根拠に乏しいが、形態および埋没土の特徴から古墳時代の遺構として報告した。

2区1号土坑(第250図 PL125・126・197 遺物観察表P.599)

位置 2区2-9-C-18G

形状 長方形。四隅はやや丸く掘られているが、長軸短軸比が1.29であり、隅丸方形とは区別した。

規模 長軸1.23m 短軸0.95m 残存壁高0.19m

長軸方位 N-67°-E

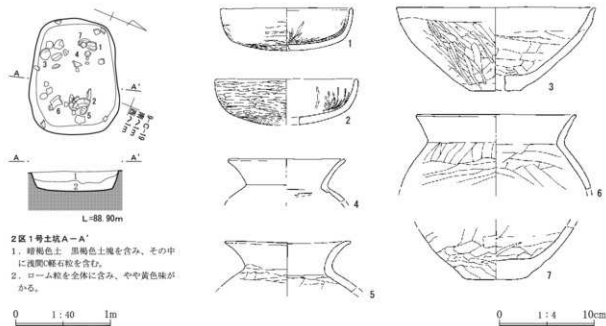
断面形 壁はやや上方に開くが、残存壁高が少ないため、全体形状は不明である。

埋没土 上層は白色軽石を含む黒褐色土塊を含む暗褐色土で、下層はローム粒を含む黄暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 遺物は土坑全体に出土した。土師器(第250図2)・壺(5)は東壁際底面上7cmで出土した。壺(1)は北西部底面直上で出土した破片と東壁際底面上10cmで出土した破片が接合した。壺(4)・甕(7)は北西部底面直上で出土した。甕(6)は南東部底面上11cmで出土した。瓶(3)は南西部壁際底面上11cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器74点、ミニチュア土器1点が出土した。

所見 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期の土坑と推定される。土坑のなかでは比較的多量の土器が出土した土坑である。発掘区北側で検出されたが、荒砥北三木堂遺跡2区と接する位置にある。



第250図 2区1号土坑と出土遺物

隅丸方形の土坑

隅丸方形の土坑は11基が検出された。長軸短軸比は1.01～1.19で、隅は丸く掘られている。規模によって、長軸が2.13m以上を大型、1.55～1.71mを中型、1.02～1.39mを小型の3種に分けることができる。形状は整った隅丸の方形の土坑と、台形や平行四辺形に近い平面形を示す土坑の2種類がある。整った方形の土坑が少ないが、底面に焼土が残されている。断面形はやや上方に開く逆台形である。

なお、2区63号住居は長軸2.86m、短軸2.64m、長軸短軸比は1.08で、規模や形態からは隅丸方形土坑大型の可能性のある遺構である。63号住居は2a区調査時に未買収地で調査できなかった地点にあり、次年度別途調査された。調査時には古墳時代の住居として記録しており、本報告書ではそのまま住居として報告した。

大型の隅丸方形土坑は4基を検出した。残存壁高が0.55m以上あり、特に深い印象を受ける。110号土

坑は整った方形で、他の3基が台形であるのとは異なっている。83号・84号土坑は2a区南部に近接して分布し、66号土坑は中央部に、110号土坑は北東部にあり、全体としては散在している。

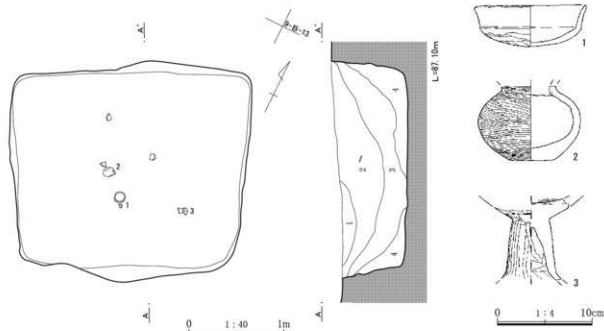
中型の隅丸方形土坑は3基を検出した。101号土坑は南側を水路によって壊されているが、南東部の壁が隅部の様相を示していることから、隅丸方形と推定した。95号・101号土坑は2a区南部に近接しているが、61号土坑は西部に、105号土坑は北部にあり、全体としては大型土坑と同様に2a区内に散在している。

小型の隅丸方形土坑は3基を検出した。3基とも北西部に分布していた。

2区66号土坑(第251図 PL126・198 遺物観察表F.599)

位置 2a区2-9-A・B-12G

形状 隅丸方形。北壁が南壁よりやや長く、台形に近い形状を呈する。



2区66号土坑A-A'

1. 窪状の糠丸土。暗褐色土。サラサラした土。黄褐色土(ローム主体)を粒状(直径0.5～1.0cmほど)均一に少量含む。
2. 黒褐色土。褐色と暗褐色の間の土(ローム混じりの土)まだらに含む。白色軽石粒(直径1.0～5.0cmほど)を特に中位～下位に含む。
3. 黒褐色土。2層よりも黒色味あり(2層はローム混じりの土の為、やや黄色味あり)。2層同様に暗褐色～暗褐色の間の色調の土をまだらに含むが、2層より少量。白色軽石粒(直径1.0～5.0cmほど)を上位に少量含む。
4. 黒褐色土。上位には黄褐色～褐色土(ローム土主体)まじり。またローム塊(直径0.5～10.0cmほど)の状でも含む。

第251図 2区66号土坑と出土遺物

**規模** 長軸2.51m 短軸2.27m 残存壁高0.79m

**長軸方位** N-62°-E

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層は白色軽石を含む暗褐色土塊を含む黒褐色土で、下層はローム粒を含む黒褐色土。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。図示した土師器坏(第251図1)は中央部底面上38cmで出土した。甕(2)は中央部底面上35cmで出土した。高坏(3)は南東部底面上11cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器183点、ミニチュア土器破片5点、剥片4点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の土坑と推定される。

2区83号土坑(第252図 P.126・198 遺物観察表P.600・612)

**位置** 2a区2-9-E・F-9-G

**形状** 隅丸方形。南西隅は角張っているが、他の三隅は丸く掘られている。

**重複** 59号・62号住居より新しい。

**規模** 長軸2.35m 短軸2.33m 残存壁高0.99m

**長軸方位** N-73°-E

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層はローム塊・ローム粒を含む黄褐色土で、下層はローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はほとんどない。図示した土師器坏(第252図2)は北壁際底面上19cmで出土した。権石(1)は中央部底面上5cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器346点、棒状礫1点、礫小片3点、剥片4点が出土した。

**所見** 重複関係と出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期以降の土坑と推定される。また埋没土のテフラ分析と植物遺存体分析を実施したところ、埋没土中にはHr-F Aの降灰層を確認できなかった。また、

多量のネザサ節やスキ属、少量のイネの植物遺存体を検出した。

2区84号土坑

(第253・254図 P.126・198 遺物観察表P.600)

**位置** 2a区2-9-E・F-9・10G

**形状** 隅丸方形。南東隅が突出しており、南壁が北壁より長い台形を呈する。

**重複** 59号住居より新しい。

**規模** 長軸2.13m 短軸1.93m 残存壁高0.66m

**長軸方位** N-58°-E

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形。西壁下部は緩やかな傾斜で掘られており、箱形にはなっていない。

**埋没土** 上層はローム粒・少量の焼土粒を含む暗黄褐色土で、下層はローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はほとんどない。図示した土師器坏(第254図1)と甕(5)は南部底面上36cmで出土した。高坏(4)、甕(3)、須器甕(6)は中央部底面上46cmおよび53cmで出土した。高坏(4)には近接する52号土坑の埋没土出土破片が接合している。ここで図示した遺物のほか、土師器191点、粘土塊(P.194)、板状礫1点、礫片1点、剥片6点が出土した。

**所見** 重複関係と出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期以降の土坑と推定される。また埋没土のテフラ分析と植物遺存体分析を実施したところ、埋没土中にはHr-F Aの降灰層を確認できなかった。また、多量のネザサ節やスキ属、少量のイネとオオムギの植物遺存体を検出した。

2区110号土坑(第255図 P.127・198 遺物観察表P.600)

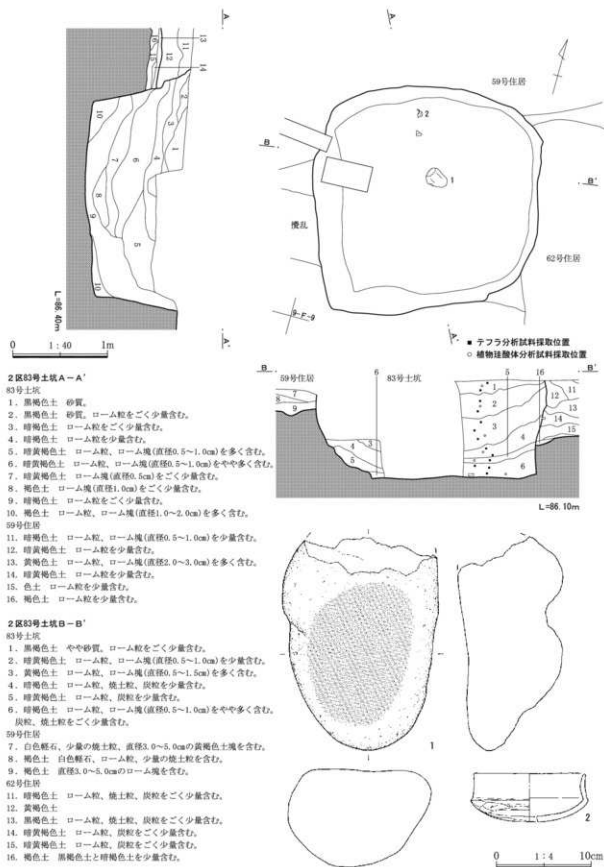
**位置** 2a区2-9-A・B-17・18G

**形状** 隅丸方形。整った方形を呈する。

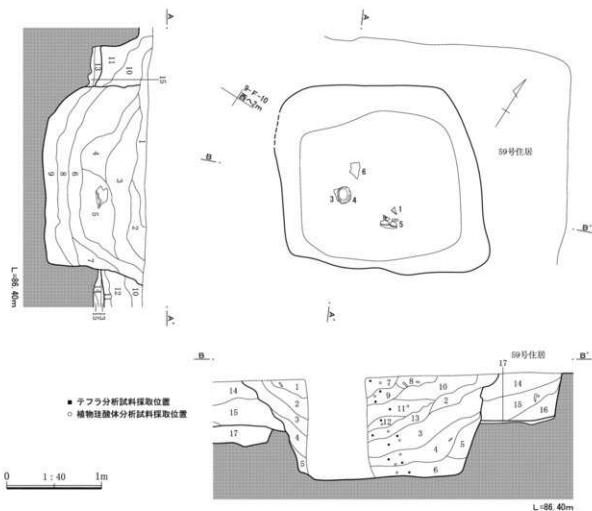
**規模** 長軸2.19m 短軸2.09m 残存壁高0.54m

**長軸方位** N-32°-W

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形



第252図 2区83号土坑と出土遺物



## 2区84号土坑A-A'

84号土坑

1. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊を多く含む。
2. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊をやや多く含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒をごく少量含む。
6. 暗黄褐色土 ローム粒をやや多く含む。
7. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む、焼土粒をごく少量含む。
8. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む、焼土粒、炭粒を少量含む。
9. 褐色土 ローム粒、ローム塊(直径2.0~3.0cm)を多く含む。

59号住居

10. 暗黄褐色土 ローム粒をごく少量含む。
11. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む。
12. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
13. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径2.0~3.0cm)を多く含む。
14. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を多く含む。
15. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む。

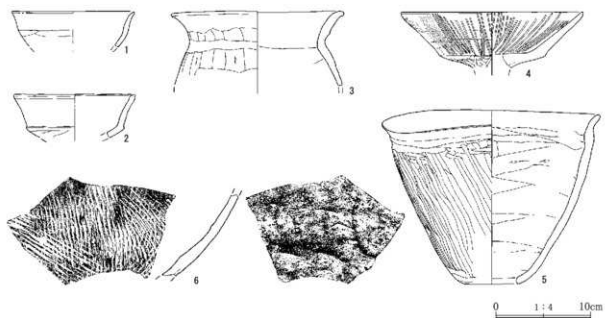
## 2区84号土坑B-B'

84号土坑

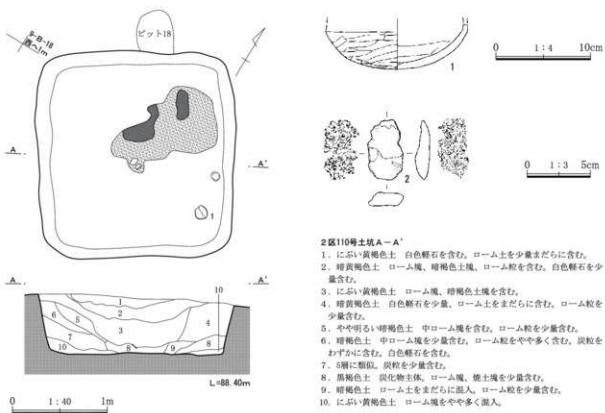
1. 褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒をごく少量含む。
2. 暗黄褐色土 ローム粒をやや多く含む、焼土粒をごく少量含む。
3. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
4. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を少量含む。
5. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
6. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径2.0~5.0cm)を多く含む。
7. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
8. 黄褐色土 暗褐色土を少量含む。
9. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を多く含む。
10. 暗褐色土 焼土粒をごく少量含む。
11. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~2.0cm)を少量含む。
12. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
13. 黒褐色土 ローム粒を少量含む、焼土粒、炭粒をやや多く含む。

59号住居

14. 暗黄褐色土 ローム粒を少量含む。
15. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(直径0.5~3.0cm)を多く含む、炭粒をごく少量含む。
16. 暗黄褐色土 ローム粒、ローム塊(直径1.0cm)を多く含む。
17. 暗黄褐色土 ローム粒をごく少量含む。



第254図 2区84号土坑出土遺物



2区110号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 白色軽石を含む。ローム土を少量まだらに含む。
2. 暗黄褐色土 ローム塊、暗褐色土塊を含む。白色軽石を少量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム塊、暗褐色土塊を含む。
4. 暗黄褐色土 白色軽石を少量、ローム土をまだらに含む。ローム粒を少量含む。
5. やや明るい暗褐色土 中ローム塊を含む。ローム粒を少量含む。
6. 暗褐色土 中ローム塊を少量含む。ローム粒をやや多く含む。炭粒をわずかに含む。白色軽石を含む。
7. 5層に類似。炭粒を少量含む。
8. 黒褐色土 炭化物主体。ローム塊、堆土塊を少量含む。
9. 暗褐色土 ローム土をまだらに混入。ローム粒を少量含む。
10. にぶい黄褐色土 ローム塊をやや多く混入。

第255図 2区110号土坑と出土遺物

**埋没土** 上層はローム塊・ローム粒・暗褐色土塊・白色軽石を含む黄褐色土で、下層はローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。中央部の最下層には炭化物主体層が堆積していた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。北西部底面直上に炭層が広がっていた。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はほとんどない。図示した土師器環(第255図1)は南東隅寄り底面上8cmで出土した。粘土塊(2)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器191点、扁平礫1点、礫3点が出土。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の土坑と推定される。隅丸方形の土坑のうち、本土坑と後述する61号土坑は整った方形を呈することで共通している。底面には炭化物が広く堆積していることも同じであり、共通の機能をもった土坑と考えられる。

また、本土坑の埋没土の上半部はローム塊の含有が多い黄褐色土である。これは自然埋没では考えにくいことであり、何らかの埋没条件があったと考えられる。

2区61号土坑(第256図 PL127・198 遺物観察表P.600・612)

**位置** 2a区2-9-K-13G

**形状** 隅丸方形。整った方形を呈する。

**重複** 36号住居より新しい。

**規模** 長軸1.71m 短軸1.54m 残存壁高0.89m

**長軸方位** N-88°-E

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層はローム塊・ローム粒・暗褐色土塊・白色軽石を含む黄褐色土で、下層はローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。中央部の最下層には炭化物主体層が堆積していた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。中央部北寄りに炭化物層が、南西部に焼土が底面直上に広がっていた。最下層の炭化物層の下位は底面がやや凹んでいた。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はほとんどないが、土師器甕(第256図3)は北東部底面上3cmで出土した。土師器甕(4)は北

西部中央寄りの底面上11cmで出土した。須恵器高坏(2)・葎石(1)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器161点、手づくね土器1点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の土坑と推定される。隅丸方形の土坑のうち、本土坑と前述した110号土坑は整った方形を呈することで共通している。底面に炭化物が広く堆積していることも同じであり、共通の機能をもった土坑と考えられる。

2区95号土坑(第257図 PL127・198 遺物観察表P.600)

**位置** 2a区2-9-D-9G

**形状** 隅丸方形。やや南壁が北壁より長く台形を呈する。

**規模** 長軸1.55m 短軸1.41m 残存壁高0.76m

**長軸方位** N-46°-E

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層はローム塊・ローム粒を含む暗褐色土と黄褐色土で、下層はローム粒を含む暗褐色土と黒褐色土で埋まっていた。塊状のロームを含むいくつかの色の土壌が重なって堆積していた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。図示した土師器環(第257図1・2)および須恵器二重甕破片(3)は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器54点、礫片3点が出土した。須恵器二重甕破片は81号・82号土坑から出土した破片と同一個体と思われたが、接合はできなかった。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期の土坑と推定される。

2区101号土坑

(第257図 PL127・128・199 遺物観察表P.600)

**位置** 2a区2-9-D-E-8G

**形状** 隅丸方形。南壁は後世の水路掘削によって壊されているため、検出できなかった。東壁南端部が西寄りにまわりこんでいることから、方形になるも

第5章 2区の遺構と遺物



2区61号土坑A-A'

61号土坑

1. 褐色土 白色軽石粒(直径1.0cmほど)を含む。
  2. 黒褐色(左側)～濃褐色(右側)土 色調の変化は漸移的。黒褐色土の感じは1層に似る。
  3. 濃褐色土と黄褐色土(ローム土主体)の混じり。ローム土は塊状に混じる。
  4. 濃褐色土～暗黄褐色土 白色軽石粒(直径1.0～5.0cmほど、FPがF4軽石含む)少量含むが、右側上位はやや多く含む。炭化物粒ごく少量含む。
  5. 濃褐色土 黄褐色土(ローム土)を粒状(直径1.0～2.0cmほど)に少量含む。また上位にローム土混じる。1・2・4・5層は似た感じの土。
  6. 濃黄褐色土 黄褐色土(ローム土)を粒状(直径1.0cmほど)を含む。白色軽石粒(直径3.0cmほど)少量含む。
  7. 4層に類似。但し炭化物は認められず。
  8. 濃黄褐色土 黄褐色土(ローム土)を粒状(直径1.0cmほど)に均一に含む。白色軽石粒(直径5.0cmほど)少量含むなど。26層に類似する層。
  9. 炭化物
- 36号住居
10. 黒褐色土 暗褐色土をまだらに含む。白色軽石粒(直径1.0cmほど)を均一に中～やや多く含む。
  11. 暗黄褐色土 黒褐色土をまだらに含む。黄褐色土(ローム土)を粒状(直径0.3～1.0cmほど)に均一に含む。白色軽石粒(直径1.0～2.0cmほど)少量、炭化物粒をごく少量含む。
  12. 黄褐色土 ローム塊を含む。

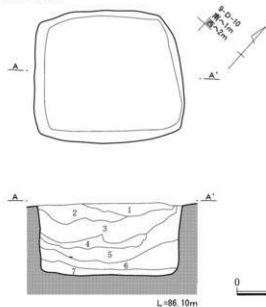
2区61号土坑B-B'

1. 暗黄褐色土(ローム土主体)と黒褐色土(黒主体)の混土。塊土粒状(直径1.0cmほど)を含む。
2. 黒色土 炭層。
3. 暗黄褐色土 ローム主体上。炭・塊土少量混じる。

第256図 2区61号土坑と出土遺物



2区95号土坑

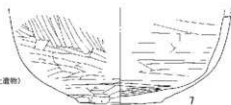


2区95号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒, ローム塊(直径0.5cm)をごく少量含む。
2. 暗黄褐色土 ローム粒, ローム塊(直径0.5cm)をやや多く含む。
3. 黒褐色土 ローム粒, ローム塊(直径1.0~1.5cm)を少量含む。
4. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
5. 黒褐色土 ローム粒, ローム塊(直径0.5cm)をごく少量含む。
6. 暗褐色土 ローム粒, ローム塊(直径2.0~3.0cm)を少量含む。
7. 褐色土 やや粘性あり。ローム粒をごく少量含む。



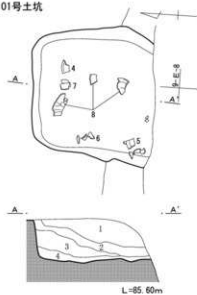
(1~3 95号土坑出土遺物)



(4~8 101号土坑出土遺物)

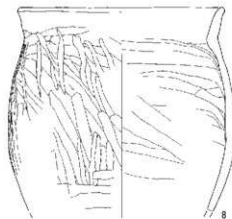
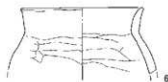
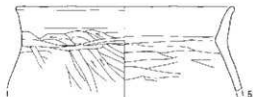
0 1:4 10cm

2区101号土坑



2区101号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒, ローム塊(直径0.5~3.0cm)をやや多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒, ローム塊(直径0.5~1.0cm)を少量含む。
3. 黒褐色土 ローム粒, 白色軽石をごく少量含む。
4. 黒褐色土 焼土粒, 炭粒, 炭塊, 焼土塊をやや多く含む。



第257図 2区95号・101号土坑と出土遺物

## 第5章 2区の遺構と遺物

のと推定した。

**規模** 長軸1.28m以上 短軸1.31m

残存壁高0.56m

**長軸方位** N-2°-W

**断面形** 壁はほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層はローム塊・ローム粒を含む暗褐色土で、下層はローム粒・白色軽石・焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は全体に散在していた。底面直上でなく5~18cmほど土で出土した。土師器瓶(第257図4)は北東部底面上12cmで出土した。甕(5)は南西部底面上12cmで出土した。甕(8)は北部底面上11cm出土の1点と、中央部の底面上5cm・10cm出土の3点の破片が接合した。小型甕(6)は西壁際底面上13cmで出土した。壺(7)は北部底面上15cmで出土した。これらの遺物は4層上面に集中している。ここで図示した遺物のほか、土師器37点が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の土坑と推定される。

### 2区105号土坑(第258図 PL128)

**位置** 2a区2-9-A・B-15・16G

**形状** 隅丸方形。北壁が南壁より長く台形を呈する。

**規模** 長軸1.66m 短軸1.47m 残存壁高0.51m

**長軸方位** N-17°-W

**断面形** 壁はやや上方に開く逆台形

**埋没土** 底面付近にはローム塊と炭化物粒をわずかに含む暗黄褐色土が平に堆積し、それより上位はローム塊・黒褐色土塊・炭化物粒を含む暗褐色土が東側から斜めに流れ込んだような状態で堆積していた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。埋没土中からは縄文土器9点、土師器24点が出土したが、図化できる遺物はなかった。

**所見** 本土坑は出土遺物が少なく、古墳時代の土坑と断定できる根拠に乏しいが、形態的な特徴や他の古墳時代遺構の埋没土との共通性から、ここでは古

墳時代の遺構として報告した。

### 2区19号土坑(第258図 PL128・199 遺物観察表P.612)

**位置** 2a区2-9-I・J-15G

**形状** 隅丸方形。南壁が北壁より長く台形を呈する。

**規模** 長軸1.37m 短軸1.24m 残存壁高0.36m

**長軸方位** N-76°-E

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層は黒褐色土・白色軽石を含む暗褐色土で、下層はローム粒を多く含む暗褐色土。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物は少ない。北東部底面直上からは土師器甕破片が出土したが、小破片のため図示できなかった。勾玉形石製模造品(第258図1)は南壁際底面上6cmで出土した。ここで図示した遺物のほか、土師器44点が出土した。このなかには須恵器模倣坏口縁部小破片が含まれている。

**所見** 本土坑は出土遺物が少ないが、破片資料から古墳時代の遺構と判断した。

### 2区37号土坑(第258図 PL128)

**位置** 2a区2-9-C-16G

**形状** 隅丸方形。南壁が北壁より長く台形を呈する。

**規模** 長軸1.39m 短軸1.19m 残存壁高0.80m

**長軸方位** N-30°-W

**断面形** 壁がやや上方に開く逆台形

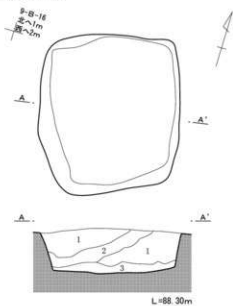
**埋没土** ローム塊・白色軽石粒を多く含む暗褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面は平坦ではなく南側が全体にやや凹む。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物は少ない。中央部やや北寄りでの底面直上で土師器甕破片が出土したが、小破片のため図示できなかった。そのほか埋没土中から縄文土器1点、土師器110点、剥片1点が出土した。

**所見** 本土坑は出土遺物が少なく時期を判断できないが、重複関係からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3期以降の土坑と推定される。

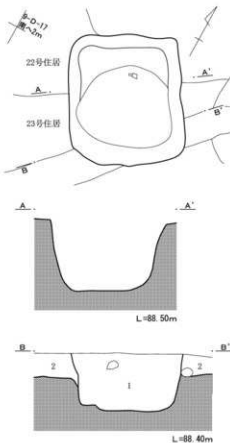
## 2区105号土坑



## 2区105号土坑A-A'

1. 暗黄褐色土 ローム塊、暗褐色土塊混入。白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム塊、黒褐色土塊混入。炭粒をわずかに含む。
3. 暗黄褐色土 ローム塊混入。炭粒をわずかに含む。

## 2区37号土坑

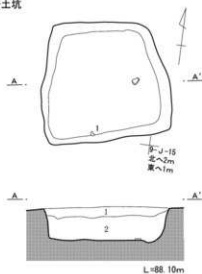


## 2区37号土坑B-B'

37号住居

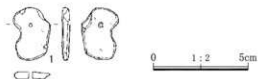
1. 暗褐色土 ローム土を全体に多くまだらに混入。白色軽石を多く含む。
2. 暗褐色土 ローム塊を20%混入。白色軽石を含む。

## 2区19号土坑

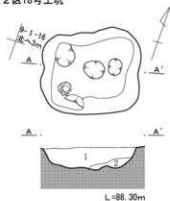


## 2区19号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黒褐色土、軽石粒含む。2層より深い。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。明るい。

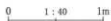


## 2区18号土坑



## 2区18号土坑A-A'

1. 暗黄褐色土 ローム塊を多く含む。
2. 暗黄褐色土 ローム塊を含まない。



第5章 2区の遺構と遺物

2区18号土坑 (№25800 P1129)

位置 2a区2-9-H-15・16G

形状 隅丸方形

規模 長軸1.02m 短軸0.86m 残存壁高0.22m

長軸方位 N-70°-E

断面形 壁がやや上方に開く逆台形

埋没土 ローム塊を多く含む暗黄褐色土で埋まっていた。

底面 底面の中央部に凹凸が検出された。

遺物と出土状況 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物は少ない。南西部底面上20cmで土師器残破

片が出土したが、小破片のため図示できなかった。そのほか埋没土中から土師器11点が出土した。半球形の土師器残破片が含まれている。

所見 本土坑は出土遺物が少なく、時期を判断できないが、重複関係からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期以降の土坑と推定される。

2区68号・69号土坑 (№25900 P1129)

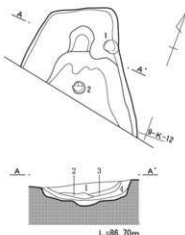
位置 2a区2-9-J・K-12G

形状 北部を43号住居に壊されているが方形と推定した。

2区68・69号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黒褐色土まだらに含む。白色軽石(直径1.0~3.0cm)を均一に含む。
2. 濃黄褐色土 ローム粒(直径0.5~1.0cm)を含む。白色軽石(直径1.0cm)を均一に少量含む。焼土粒(直径3.0~5.0mm)を少量含む。
3. 暗黄褐色土 下位にローム土を混じる。焼土粒(直径3.0~5.0mm)を含む。
4. 濃黄褐色土
- 43号住居
5. 濃黄褐色土 ローム粒(直径0.5~1.0cm)を均一に含む。白色軽石(直径1.0~5.0mm)を少量含む。黒褐色土をまだらに少量含む。
6. 黒褐色土 ローム塊(直径0.5~5.0cm)を含む。白色軽石(直径1.0cm)を少量含む。
7. 暗褐色~黒褐色土 ローム粒(直径1.0cm)をまだらに含む。

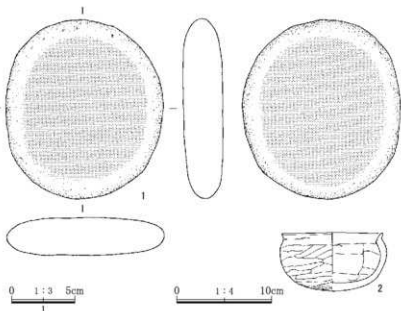
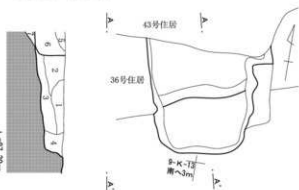
2区115号土坑



2区115号土坑A-A'

1. やや明るい暗褐色土 白色軽石を多く含む。炭粒。焼土粒を多く含む。
2. 赤褐色~ぶい黄褐色土 ローム土の中に焼土が多く混じる。
3. 暗褐色土 白色軽石少量混入。黒褐色土まだらに含む。
4. ぶい黄褐色土 暗褐色土まだらに混入。ローム塊を少量含む。

2区68号・69号土坑



第259図 2区68号・69号・115号土坑と115号土坑出土遺物

**重複** 43号住居より古い。36号住居との新旧関係は不明である。

**規模** 長軸1.26m以上 短軸1.09m 残存壁高0.19m

**長軸方位** 計画不能

**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層は黒褐色土塊・白色軽石・焼土粒を含む暗褐色土で、下層はローム塊・焼土粒を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面の中央部に凹凸が検出された。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物はない。埋没土中から土師器10点が出土した。土師器破片5点には、半球形の坏と内斜口縁の坏の両者が含まれている。

**所見** 本土坑は出土遺物が少なく、時期を判断できないが、重複関係からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期以前の土坑と推定される。埋没土の特徴や重複関係からも古墳時代の遺構と考えられる。当初の土層断面の観察では4層を別遺構と考え69号土坑としたが、確定はできない。ここでは一括して報告した。

2区115号土坑 (第259図 PL129・197 遺物観察表P.600・612)

**位置** 2a区2-9-K-11・12G

**形状** 南西部を捜査で壊されたが方形と推定した。

**規模** 長軸1.45m以上 短軸1.05m  
残存壁高0.41m

**長軸方位** N-30°-W **断面形** 皿形

**埋没土** 上層は白色軽石・焼土粒・炭化物粒を多く含む暗褐色土で、下層は焼土化したロームを混じる赤褐色土や暗褐色土塊・ローム塊をまだらに混じるにぶい黄褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面の中央部から南東部にかけて凹みが検出された。

**遺物と出土状況** 撞石(第259図1)は北東壁際底面上5cmで、坏(2)は中央部底面上29cmで出土した。図示した遺物のほか、埋没土中から土師器9点が出土した。

**所見** 本土坑は出土遺物が少ないが、出土遺物からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期の土坑と推定される。

円形の土坑

円形の土坑は5基が検出された。正円のものはないが、長軸短軸比1.06~1.15のものを円形とした。楕円形に分類した土坑の長軸短軸比が1.29~1.64であり、形状の差は歴然としている。長軸が0.91m以上を大型、0.69m以下を小型の2種に分けることができる。断面形は、大型は箱形、小型はボール形である。

大型の円形土坑は2基を検出した。両土坑とも比較的多くの土器が出土した。116号土坑は2a区西部に分布し、5号土坑2a区東端部に分布している。小型の円形土坑は3基を検出した。これらの土坑にも比較的大きな土器破片が出土した。62号土坑は中央やや東寄りに、112号土坑は北西部に、119号土坑は東部に分布しており、全体としては2a区内に散在している。

2区116号土坑

(第260図 PL129・199 遺物観察表P.601・612)

**位置** 2a区2-9-I-13G **形状** 円形

**規模** 長軸1.45m 短軸1.37m 残存壁高0.37m

**長軸方位** N-33°-E

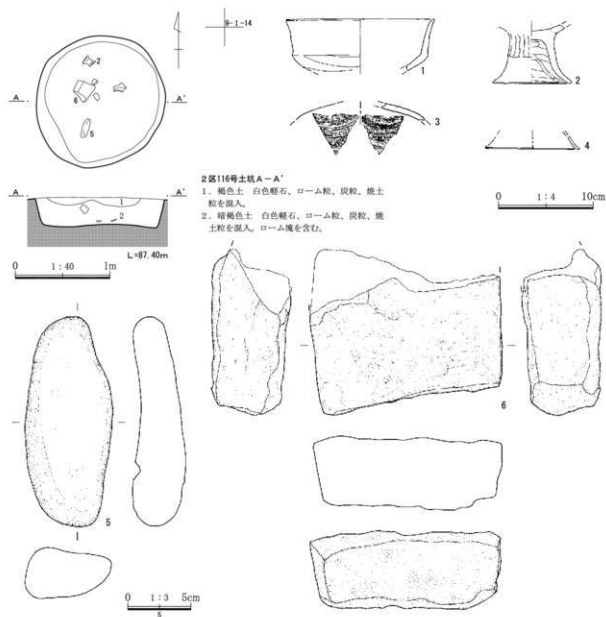
**断面形** 壁がほぼ直立する箱形

**埋没土** 上層は白色軽石・ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む褐色土で、下層は白色軽石・ローム塊・ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 遺物は中央部から北部にかけて出土したが、いずれも数cm底面より上で出土した。土師器高坏(第260図2)は北部底面上8cmで出土した。撞石(5)は南部底面上2.5cmで、台石(6)は中央部底面上12cmで出土した。土師器坏(1)や須恵器蓋(3)・不明破片(4)は埋没土中から出土した。図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器204点、粘土塊(P.L194)が出土した。

**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の土坑と推定される。



2区116号土坑A-A'

1. 褐色土 白色軽石、ローム粒、炭粒、焼土粒を混入。  
2. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒、炭粒、焼土粒を混入。ローム塊を含む。

第260図 2区116号土坑と出土遺物

2区5号土坑

(第261図 PL.129・130・199 遺物観察表P.601)

位置 2区2-8-R-16G

形状 円形に分類したが、やや北西方向に長い。

重複 4号住居より新しい。

規模 長軸0.91m 短軸0.79m 残存壁高0.29m

長軸方位 N-48°-W

断面形 壁がやや上方に開く逆台形

埋没土 白色軽石・ローム粒を含むやや砂質の暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 遺物は北西半に集中して出土した。この土器集中のなかには、3個体の土師器甕(第261図1~3)が重なり潰れて残されていた。個体ごとの出土状況は記録がないが、最も下位の土器は底面から15cmほど上で出土している。

これらの甕は3個体とも異なる形態を示す。2の甕は広口で器壁が薄く、夾雑物の少ない土で作られている。3は砂粒を含んだ土で作られており、下半部には縄か籠の痕跡が残る。

図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器75点、剥片1点が出土した。土師器には須恵器模倣坏口縁部破片1点、半球形坏口縁部破片1点、手づくね土器破片1点が含まれている。

**所見** 重複関係と出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期の土坑と推定される。埋没土は単一の1層であることから、土器を入れて人為的に一括埋填あるいは廃棄したと推定される。

2区62号土坑 (第262図 PL130 遺物観察表P.601)

**位置** 2a区2-9-B-12G

**形状** 円形

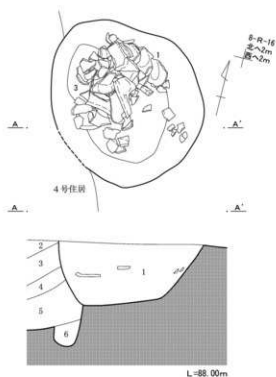
**規模** 長軸0.76m 短軸0.69m 残存壁高0.33m

**長軸方位** N-26°-E

**断面形** 壁がほぼ直立するが、底面はボール形

**埋没土** 上層は白色軽石・少量の焼土粒を含む暗褐色土、下層は黄褐色土塊を含む暗黄褐色土で埋没。

**底面** 底面はほぼ緩やかな凹みになっていた。



2区5号土坑 A-A'

5号土坑

1. 暗褐色土 やや砂質。ローム粒、白色軽石を含む。

4号住居

2. 褐色土主体、ローム塊を全体的に含み、焼土を少量含む。人為的埋没土。

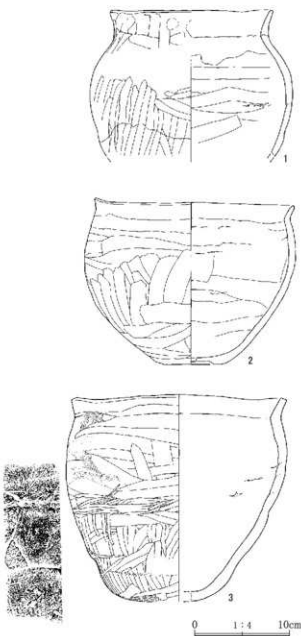
3. 褐色土主体、ローム塊を全体的に含み、焼土および炭化物を少量含む。人為的埋没土。

4. 暗褐色土 褐色土をまだらに含む。ローム粒少量含む。

5. にぶい黄褐色土 ローム塊を30%ほど全体的に含む。

6. にぶい黄褐色土 締まりなし。フカフカ。褐色土まだらに含む。

0 1:20 50cm



第261図 2区5号土坑と出土遺物

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くから出土した遺物は少ない。東壁際底面上16cmで土師器甕口縁部破片(第262図1)が出土したくらいである。埋没土中からは、土師器48点が出土した。この土師器破片は甕破片がほとんどで、椀が1点含まれていた。  
**所見** 出土遺物からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1～2期の土坑と推定される。

2区112号土坑(第262図 PL130 遺物観察表P.601)

**位置** 2a区2-9-H-15G **形状** 円形  
**規模** 長軸0.67m 短軸0.58m 残存壁高0.32m

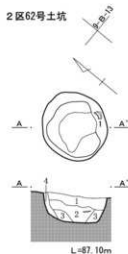
**長軸方位** N-85°-E **断面形** ボール形  
**埋没土** 上層は多くの白色軽石・まだらなローム粒・少量の焼土粒を含む暗褐色土で、下層は少量の白色軽石・まだらなローム粒を含む暗褐色で埋まっていた。

**底面** 底面は小さな凹み状になっていた。

**遺物と出土状況** 北部底面上3cmで土師器壺下半部破片(第262図2)が出土した。図示した遺物のほか土師器8点が出土した。

**所見** 出土遺物からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期あるいはそれ以前の土坑と推定される。

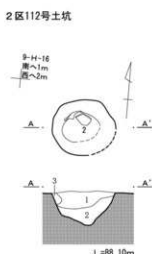
2区62号土坑



2区62号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石粒(直径1.0mmほど)均一に含む。焼土を粒状(直径0.5～1.0cmほど)に少量含む。やや硬く締まる。
2. 暗褐色土 1層に類似するが、白色軽石粒・焼土粒とほとんど認められない。
3. 黄暗褐色土 暗褐色土に黄褐色土(ローム主体)がまだらに認められる。
4. 濃黄褐色土 黄褐色土(ローム主体)と暗褐色土の混じり。

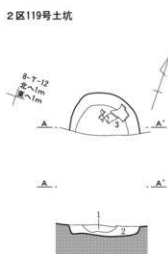
2区112号土坑



2区112号土坑A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石を多く含む。ロームをまだらに含む。焼土粒わずかに混入。
2. やや明るい暗褐色土 ロームをまだらに含む。白色軽石を少量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム塊を含む。

2区119号土坑



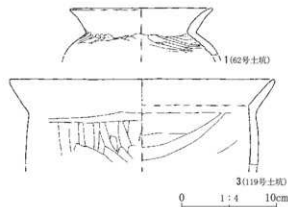
2区119号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム塊を20%混入。白色軽石を含む。
2. 暗黄褐色土 ローム:暗褐色土を1:1で混入。炭灰やや多く混入。

0 1:40 1m



2(112号土坑)



3(119号土坑)

0 1:4 10cm

第262図 2区62号・112号・119号土坑と出土遺物



## 2区119号土坑

(第262回 PL130・131・199 遺物観察表P.601)

**位置** 2a区2-8-S-12G**形状** 南半分が攪乱によって壊されているが、北半分の形状から円形と推定した。**規模** 長軸0.45m以上 短軸0.73m 残存壁高0.14m**長軸方位** N-22°-W **断面形** ボール形**埋没土** 上層は白色軽石・ローム下塊を含む暗褐色土で、下層は炭化物粒を含む暗褐色土とローム塊の混土で埋まっていた。**底面** 底面はほぼ平坦である。**遺物と出土状況** 北東部底面上7cmで土師器壺口縁部破片(第262回3)が出土した。図示した遺物のほか土師器7点が出土した。**所見** 出土遺物は荒砥北三木堂Ⅱ遺跡5期に時期が考えられる。

## 楕円形の土坑

楕円形の土坑は3基が検出された。長軸短軸比が1.29~1.64であり、円形とした土坑の長軸短軸比1.06~1.15とは異なる。長軸が1.82m以上を大型、1.15m以下を小型とした。断面形は、4号土坑はややフラスコ形であり、30号・21号土坑は箱形である。

大型の楕円形土坑は2基を検出した。両土坑とも残存高が深い。4号土坑は2a区東部に分布し、30号土坑は2a区北部に分布している。

小型の楕円形土坑は1基を検出した。完形に近い土師器鉢が出土している。21号土坑は北部、30号土坑の東側に分布している。

## 2区4号土坑(第263回 PL131・199 遺物観察表P.601)

**位置** 2a区2-8-S・T-14G**形状** 楕円形**重複** 9号住居より新しい。**規模** 長軸1.82m 短軸1.41m 残存壁高0.85m**長軸方位** N-68°-E **断面形** フラスコ形**埋没土** 上層は白色軽石・黄褐色土塊を多く含む暗褐色土で、下層は暗褐色土とローム塊の混土で埋ま

っていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くで出土した遺物はない。埋没土中からは縄文土器1点、土師器68点、須恵器壺破片2点、銅片2点が出土した。須恵器壺破片2点の内1点は図示した。(第263回1)**所見** 本土坑は出土遺物が少なく、古墳時代の土坑と断定できる根拠に乏しいが、出土遺物および埋没土の特徴から古墳時代の遺構として報告した。重複関係からは荒砥北三木堂Ⅱ遺跡4期以降の時期が考えられる。

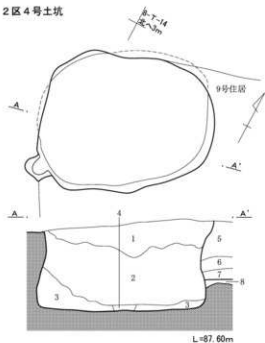
## 2区21号土坑(第263回 PL131・199 遺物観察表P.601)

**位置** 2a区2-9-D・E-16G**形状** 楕円形**重複** 17号住居より新しい。**規模** 長軸1.15m 短軸0.70m 残存壁高0.19m**長軸方位** N-70°-E **断面形** 皿形**埋没土** 上層は白色軽石を含むやや砂質の黒褐色土で、下層は黒褐色土塊をまだらに含む黄褐色土で埋まっていた。**底面** 底面はほぼ平坦である。**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くで出土した遺物はない。埋没土中からは土師器36点、土師器坏1点(第263回2)が出土した。**所見** 出土遺物は荒砥北三木堂Ⅱ遺跡1期と考えられるが、重複関係は5期の17号住居より新しく、時期を特定できる根拠に乏しい。出土遺物および埋没土の特徴から古墳時代の遺構として報告した。

## 2区30号土坑(第263回 PL131・197 遺物観察表P.601)

**位置** 2a区2-9-E・F-16G**形状** 楕円形**重複** 17号住居より新しい。**規模** 長軸1.92m 短軸1.23m 残存壁高0.99m**長軸方位** N-75°-E**断面形** 箱形。南壁はややフラスコ形**埋没土** 埋没土の観察は十分ではなかったが、17号

2区4号土坑

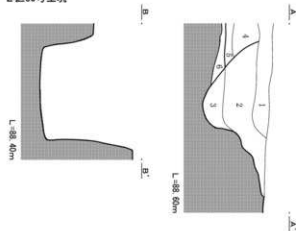


2区4号土坑A-A'

4号土坑

1. 暗褐色土 黄褐色土を混入。軽石粒を多く含む。
2. 黄褐色土 ロームと暗褐色土が混合したもの。ローム塊、暗褐色土塊を含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を全体に混入。ローム塊を含む。
4. 2層にはほぼ同じ。2層よりロームの量多い。
- 9号住居
5. 黄褐色土 暗褐色土にローム粒を含む。軽石粒を少量含む。
6. 暗褐色土 ローム小塊、軽石粒を含む。
7. 黄褐色土 暗褐色土塊を少量、ローム粒、ローム小塊を多く含む。
8. 黄褐色土 ローム主体土。硬く締まる。部分的に暗褐色土を混じる。

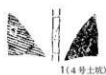
2区30号土坑



2区30号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒・ローム小塊・黒褐色土を塊状に含む。
2. 黄褐色土 ローム粒を全体に含む。暗褐色土を塊状に含む。
3. 暗黄褐色土 ローム主体。暗黄褐色土を塊状に含む。暗褐色土粒を少量含む。
- 17号住居
4. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少量含む。
5. 黄褐色土 ローム粒を全体に含む。
6. にぶい黄褐色土 明るい褐色土を塊状に含む。

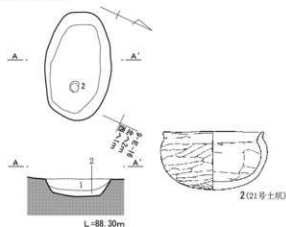
0 1:40 1m



1(4号土坑)

0 1:4 10cm

2区21号土坑

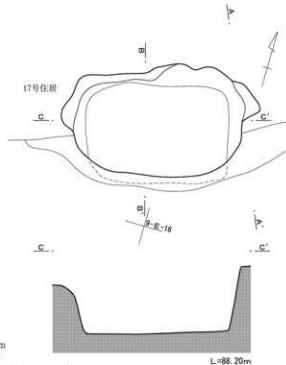


2区21号土坑A-A'

1. 黒褐色土 やや砂質。白色軽石を含む。
2. にぶい黄褐色土 1層の土をただらに含む。崩りすぎか？



3(30号土坑)



第263図 2区4号・21号・30号土坑と出土遺物

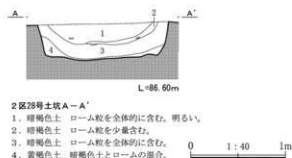
住居の埋没土セクションに本土坑東端がかり、上半部の埋没土を観察することができた。上層はローム粒・暗褐色土塊を含む黄褐色土で、下層は暗黄褐色土とローム塊の混土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 本土坑に伴って底面近くで出土した遺物はない。埋没土中からは土師器36点、須恵器蓋1点(第263図3)が出土した。

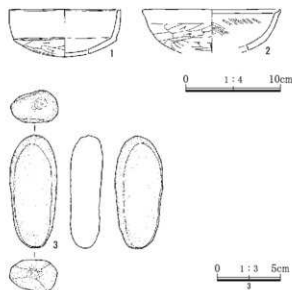
**所見** 出土遺物から荒砥北三木堂Ⅱ遺跡6期の土坑と推定される。本土坑は出土遺物が少なく、古墳時代の土坑と断定できる根拠に乏しいが、出土遺物および埋没土の特徴から古墳時代の遺構として報告した。

#### 2区28号土坑 (第264図 PL199 遺物観察表P.601・612)



2区28号土坑A-A'

1. 暗褐色土 ローム粒を全体的に含む。明るい。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を全体的に含む。
4. 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合。



第264図 2区28号土坑土層断面と出土遺物

#### (5) 遺構外の出土遺物

(第265・266図 PL200 遺物観察表P.601・603・612)

2区で遺構に伴わないで出土した古墳時代の遺物は、土師器10029点(埴輪2点含む)、須恵器77点である。石器類は時期の明確な石器以外は、剥片・砕片・礫片・礫を縄文時代の遺物として、大型の加工礫を古墳時代以降として計数した。(P.553 2表)

土師器は表採資料として遺構確認時等に採集された遺物が最も多く7619点に達する。他に古墳時代以外の遺構から1044点、グリッドから1366点が出土した。これらは壺・甕類の破片がほとんどで、実測できる破片は極端に少ない。比較的大型で、実測できるものを選んで掲載したのが第265・266図である。ほとんど2区に展開していた古墳時代中後期の集落の時期のものである。住居埋没過程で混入した、あるいは後世の耕作等で混入したものであろう。ただし第265図16は酸化焙焼成の土師器坏で小破片であるが、平安時代のもつと見られる。2区で古墳時代以外の土師器はほとんど出土していないので、時期は異なるがここに掲載した。

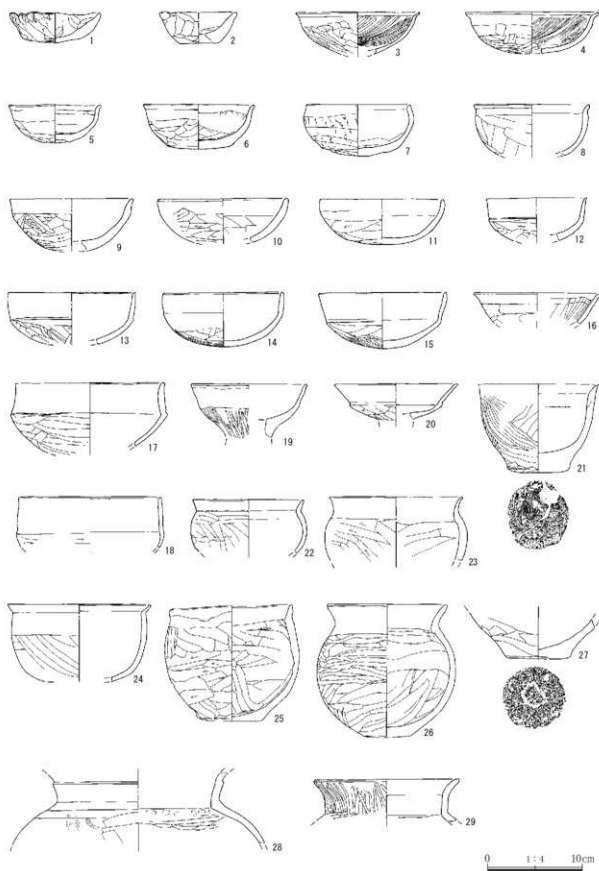
埴輪は円筒埴輪破片2片(第266図48・49)が近世以降の井戸と溝の中から出土している。

須恵器は60点が2区表採資料として出土した。他に古墳時代以外の遺構から23点、グリッドから4点が出土した。須恵器は甕の破片が多く、胴部・口縁部がある。ここでは11点(第266図36～46)を選んで掲載した。荒砥北三木堂遺跡は須恵器の出土が多いことで知られているが、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡でも全体で231点の須恵器が出土した。このうち古墳時代の遺構からは出土したのは89点で、その他は時期の異なる遺構から表採で出土している。遺構外の須恵器の接合作業をおこなったところ全体で6例の接合が認められた。須恵器もほとんどが2区の古墳時代中後期集落の時期のものである。

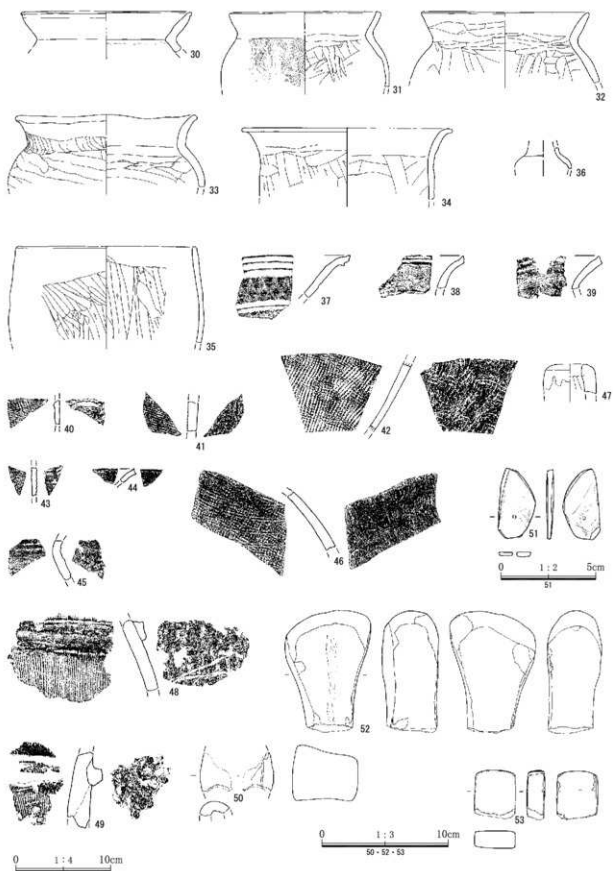
羽口(第266図47)は2区南端の表土内で出土した。古墳時代の遺物と断定できないが、ここで報告した。

石器類はグリッドから出土した石製模造品1点(51)と砥石2点(52・53)を図示した。

第5章 2区の遺構と遺物



第265図 2区古墳時代遺構外出土遺物(1)



第266図 2区古墳時代遺構外出土遺物(2)

4. 弥生時代の遺物

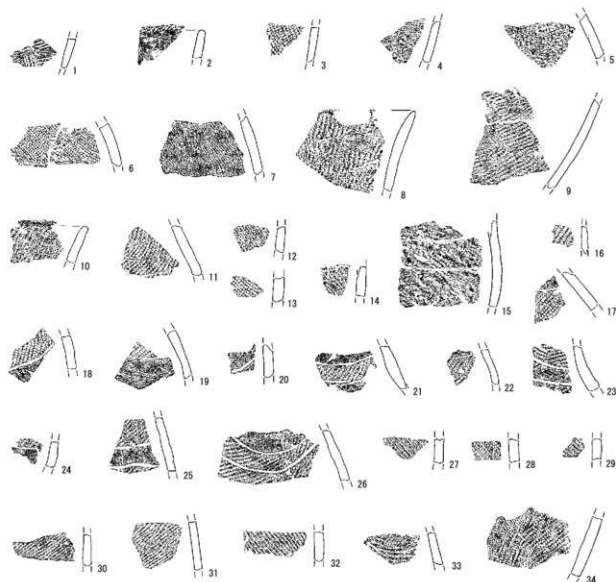
(第267図 PL200 遺物観察表P.604・605)

2区でも1区同様に、弥生時代の遺構は検出されなかったが、弥生土器と見られる破片が34点出土した。古墳時代初頭にまで下る帯状縄文帯だけでなく、沈線区画のなかを縄文で充填する破片があり、明らかに弥生時代中期後半の遺物が含まれている。出土位置は、表面採集で3点、古墳時代の遺構埋没土中から26点、それ以外の遺構内から4点、グリッドから1点である。

本遺跡の北側に隣接して発掘調査された荒砥北三

木堂遺跡2区では弥生時代中期後半の住居が5軒検出されており、それらの使用土器が混入して出土したものであろう。なお、台地内部にあたる荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3区では、弥生土器は出土しなかった。

1区から出土した7点を含め、41点の弥生土器は器形の判明するものはほとんど見られず、すべてが破片資料のため明確な型式認定や時期認定が困難なものが多い。文様で分類すると、縄文、沈線区画縄文充填、櫛描文、沈線文の4種で構成されていることがわかる。このうち、主体を占めるのは、壺ないし甕の器面の広い範囲に横帯縄文を重ねる文様構成(第267図5～11、15)である。8、10はおそらく深



第267図 2区出土の弥生土器

鉢形に近い形状の甕で、口縁直下から横帯単節斜縄文を重ね、胴部中位付近まで文様帯が連続すると思われる。この種の文様構成は中期中頃の池上式、中期後半の北島式(吉田豊2003「北島式土器とその時代」埼玉考古別冊7)、及び吉ヶ谷式に見られる。群馬県内では、本遺跡2区や荒砥前原遺跡から出土した縄文施文甕が最も近似する例だが、これは口縁か頸屈曲部を無文帯とするのが特徴で、両者はとりあえず別型式として分離しておくべきと考える。

沈線区画で横線ないし連弧文を描き、内区を縄文で充填する文様構成は、大部分が甕と考えられる。本遺跡では、肩から胴部の破片に限られており、これから文様構成を類推すると、頸〜肩に横帯、胴部に連弧文が配置された可能性が高い。この文様構成は、本遺跡2区でも判明している長頸長胴の壺形に描かれるものと同一であろう。第56図5(P.99)のように、弧文頂部に刺突充填円形貼付文を付した例があることから、栗林式に典型的の下彫れ形胴をもつ壺形が存在した可能性も注意しておくべきだろう。第267図27〜34の8点は、付加条第1種ないし絡条体を回転施文した例である。いずれも壺ないし妻胴部文様と思われるが、先述のように口縁破片は単節斜縄文のみなので、これらは胴部文様帯に限定されるのではないだろうか。櫛描文は羽状構成の1点(第267図1)のみで、縦位か横位かは判明しないが、甕胴部文様であろう。沈線波状文は第56図2(P.99)の口縁部に見られる。

以上にみられた弥生土器は、主体を占める縄文充填沈線区画文から中期後半に位置づけられ、2区で判明している縄文施文系土器群のなかで理解できる。ただし、口縁〜底部に縄文帯を重ねる甕に見られるように、埼玉県北部地域の諸型式(特に同時期ということから北島式)との関連性は無視できないことといえよう。また付加条や絡条体施文例は関東地方東部太平洋岸地域の足洗式以降の諸型式に通じるものではないだろうか。

## 5. 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 土坑

2区では縄文時代の土坑4基が検出された。2a区で2基、2c区で2基と分布に偏りが見られる。2a区の2基は大型隅丸長方形の土坑で陥穴と見られるが、底面にピットはない。時期は一方の2区108号土坑で花積下層式土器・摺糸文系土器・諸磯a式土器の破片が出土していることから、縄文時代前期と考えられる。2c区の2基は、円形および楕円形の土坑で、埋没土の特徴から、縄文時代の土坑と判断した。土器は出土しなかったが、2区142号土坑からは打製石斧が出土している。

これらの土坑の分布には、既に調査されている荒砥北三木堂遺跡の縄文時代の遺構との関連性が認められる。第268図に示したように、本遺跡2a区の楕円形土坑2基は、荒砥北三木堂遺跡2区の2軒の諸磯a式期の住居の谷間に位置し、うち1基からは前期諸磯a式の土器が出土している。また2c区の3基の土坑の東側には、荒砥北三木堂遺跡4区で1軒の住居が検出されている。住居の時期は不明であるが、近接する分布状況が見られる。

この他に荒砥北三木堂Ⅱ遺跡3b区では、大型楕円形土坑6基が並ぶように分布していた。

#### 2区104号土坑(第269図 PL133)

**位置** 2a区2-9-D-16G

**形状** 隅丸長方形。北西隅が古墳時代の17号土坑に切られている。

**規模** 長軸2.85m 短軸1.88m 残存壁高1.30m

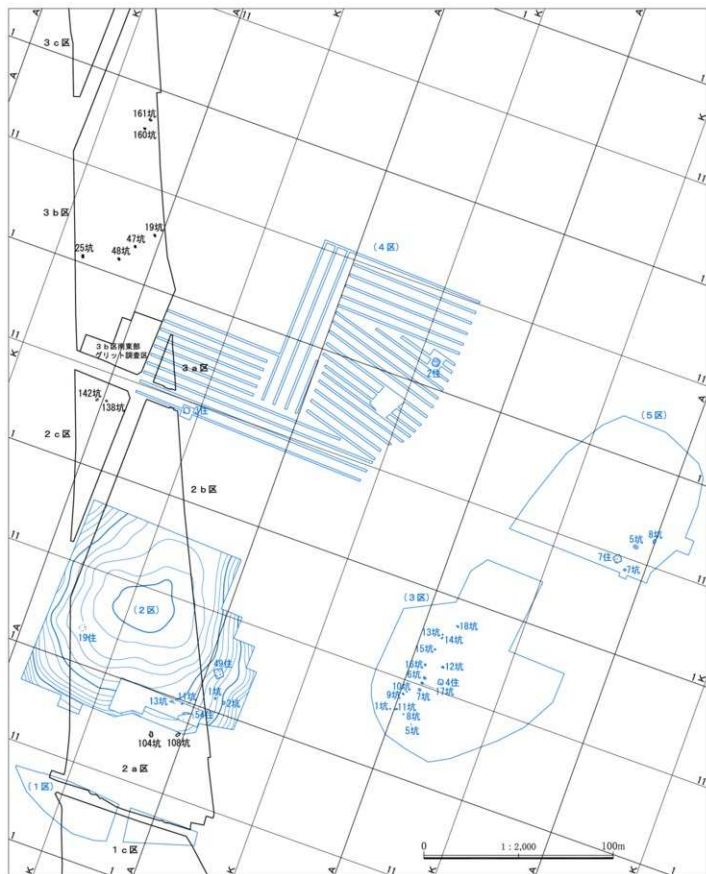
**重複** 17号住居より古い。

**長軸方位** N-25°-W

**断面形** 下半部は直立し、上半部は外方に開く。

**埋没土** 白色軽石・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土・にぶい黄褐色土で、下層はハードローム塊を含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。底面の小ピットは検出されなかった。



第268図 2区・3区および周辺の縄文時代遺構分布





第269図 2区104号・108号・138号・142号土坑と出土遺物

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 土坑の形態や埋没土の状況から縄文時代前期の陥穴と考えられる。

#### 2区108号土坑

(第269図 PL133・202・203 遺物観察表P.615)

**位置** 2a区2-9-A-17G

**形状** 隅丸長方形

**規模** 長軸2.38m 短軸1.35m 残存壁高1.03m

**長軸方位** N-37°-E

**断面形** 壁はほぼ直立するが上方がやや外方に開く。

**埋没土** 上層は白色軽石・ローム粒を含む暗褐色土で、下層は炭化物粒をわずかに含む暗黄褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。底面の小ピットは検出されなかった。

**遺物と出土状況** 埋没土中から、縄文土器7点、剥片1点、土師器2点が出土した。縄文土器の内訳は花積下層式土器1点、捻糸文系土器1点、諸磯a式土器5点である。このうち2点(第269図1・2)を図示した。土師器は混入と判断した。

**所見** 出土遺物および土坑の形態や埋没土の状況から縄文時代前期の陥穴と考えられる。

#### 2区138号土坑(第269図 PL133)

**位置** 2a区2-29-T-8G

**形状** ほぼ円形

**規模** 長軸1.14m 短軸1.00m 残存壁高1.16m

**長軸方位** N-98°-E

**断面形** 皿形

**埋没土** 上層は白色軽石・ローム塊を含む暗褐色土で、下層は炭化物粒を含む暗褐色土とローム塊の混土で埋まっていた。

**底面** 底面はほぼ平坦である。

**遺物と出土状況** 出土遺物はなかった。

**所見** 埋没土の状況から縄文時代の円形土坑と判断した。

#### 2区142号土坑(第269図 PL133・201 遺物観察表P.612)

**位置** 2a区2-30-A-7・8G

**形状** 楕円形。やや南側がすぼまる。

**規模** 長軸1.58m 短軸0.89m 残存壁高0.28m

**長軸方位** N-28°-E

**断面形** やや上方に開く皿形

**埋没土** 黄褐色土を少量含む黒褐色土で埋まっていた。

**底面** 底面にはやや凹凸がある。

**遺物と出土状況** 打製石斧(第269図3)が出土したが、遺憾ながら出土位置の図記録はない。出土状況の写真記録はPL133-8に掲載した。

**所見** 出土遺物および埋没土の特徴から縄文時代の土坑と判断した。

#### (2)遺構外出土遺物

2区で検出された縄文時代の遺構は土坑が5基にとどまるが、817点の縄文土器と、543点の縄文時代のものと考えられる石器類が出土した。石器類のうち鏢や鏢片は縄文時代のものとの確認は得られないが、石器と出土位置や層位が一致していることから、報告の便宜上、本項であつた。また各遺物の特徴は、最も資料数の多い2区(本項)でまとめて記載した。

#### a. 縄文土器

(第270~273図 PL202~204 遺物観察表P.606~609)

**土器型式と分布** 2区遺構外出土の縄文土器817点の出土位置の内訳は、表採資料や遺構確認時に取りあげられた破片が206点、古墳時代の遺構から出土した破片が300点、中世以降の遺構から出土した破片が72点、グリッドで取りあげた破片は232点である。このほかに縄文時代の土坑から出土した破片7点が出土している。本来の出土位置を示す出土状況でない破片が大半を占めることから、今回の調査では、微視的な分布状況を把握できるデータをとっていないが、土器型式と出土位置との関連を示したのが第7表である。

2区で出土した縄文土器で最も古いのは早期井草式土器で、1点が古墳時代の2区3号住居埋没土中から出土している。また捺糸文系・押型文系・条痕文系の土器がそれぞれ5点・14点・17点出土した。

2区では数は少ないながらも早期から遺物が出土し始める。前期の黒浜式土器・諸磯a式土器の出土数はそれぞれ161点・353点で最も多く、全体の62%にあっている。千葉県に分布する植房式土器とみられる破片1点が含まれていた。諸磯c式土器・浮島式土器の破片はそれぞれ3点・1点が認められた。また中期は加曾利E式土器15点、後期は称名寺式土器43点が認められた。このような出土傾向は、早期の遺物が認められなかった1区・3区とは対照的である。なお、小破片である等の理由で型式を認定できなかった遺物が164点(20%)ある。

縄文土器が出土した遺構はその大半が古墳時代以降の住居や土坑・溝であるが、これらにグリッド出土遺物も含めた473点について、型式ごとに分布状況を示したのが第270図である。縄文土器が古墳時代以降の遺構埋没土に混入した経緯は明らかでないが、周辺に縄文時代の遺構や包含層があった可能性を重視して、分布状況確認の資料とした。

2区で土器が集中して出土したのは2a区と2c区の2カ所である。2b区では中世以降の土坑に混入して黒浜式土器2点、諸磯a式土器1点が出土しているのみである。2a区と2b区の間は、圃場整備調査地区(荒砥北三木堂遺跡2区)であり、今回の調査除外地区であった。このため2a区に縄文土器分布が偏在しているように見える。しかし、荒砥北三木堂遺跡2区には縄文時代の遺構が検出されており、縄文土器の出土分布も広がっていたことが推定される。

2a区からは早期から後期までの比較的多くの縄文土器が出土しているが、型式ごとに偏在傾向が認められた。早期の土器は出土数が少ないが、捺糸文系土器が全体に散在しているのに対して、押型文系土器は2a区東縁部に、条痕文系土器は南東部に偏在している。前期の土器は最も多数出土している。

このうち黒浜式土器は北部から西部にかけての古墳時代住居から39%が出土し、南東部にはほとんど出土していない。諸磯a式土器は全体には散在しているが北東部に顕著に偏在している。諸磯b式土器は極端に出土量が減るが、諸磯a式土器と同様に北東部に偏在している。諸磯c式土器は古墳時代の15号土坑埋没土から1点出土しているだけである。中期の加曾利E式土器は少数ではあるが、西南部と東南部の一部に集中して出土した。後期の称名寺式土器も少数ではあるが、2a区南縁部に偏在していた。

荒砥北三木堂遺跡2区の南東隅には諸磯a式期の住居2軒が検出されている。荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2a区の諸磯a式土器の偏在は、これらの住居群との関連で理解することができるであろう。また、称名寺式土器は1c区に6点が偏在して出土しており、2a区南縁部に出土した称名寺式土器と一連の分布とみることができよう。

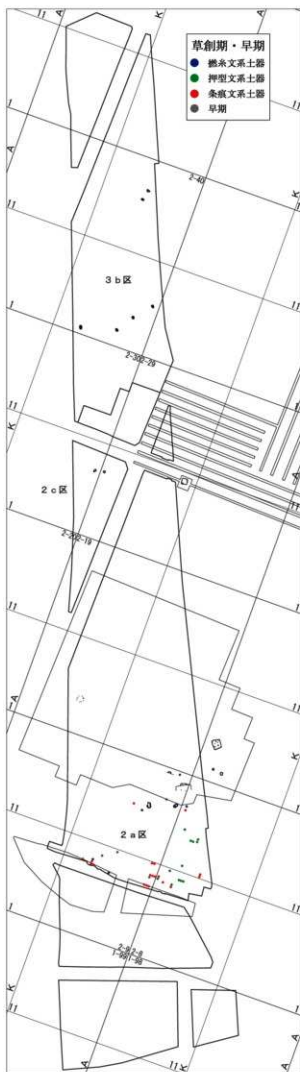
一方、2c区の集中は3b区南東部から続くと推定される更新世の凹地に堆積した淡色黒ボク土層に包含されていた土器群である。2-29・30・39・40-T・A-19・20・1-5グリッドに帯状に分布している。内訳は、黒浜式土器25点、諸磯a式土器1点、諸磯b式土器1点、加曾利E式土器1点、不明3点で、黒浜式土器の偏在傾向が認められる。3b区南東部の包含層調査の結果でも、黒浜式土器の偏在が認められている。2c区の黒浜式の偏在は3b区の黒浜式の集中に連続するものではないが、同一地形内の同様な要因によって形成された遺物包含層と理解できる。

**縄文土器の特徴** 2区遺構外で出土した縄文土器は817点である。このうち、各型式および文様を網羅するように配慮して図化・採拓し、111点(13.5%)を第271~273図に掲載した。各型式の掲載点数は次頁第7表の通りである。小破片であることから型式を同定できなかった破片が164点(20%)ある。ここでは、図示した資料を中心に、1区から3区の出土土器の特徴について、型式別に概観しておくことにしたい。

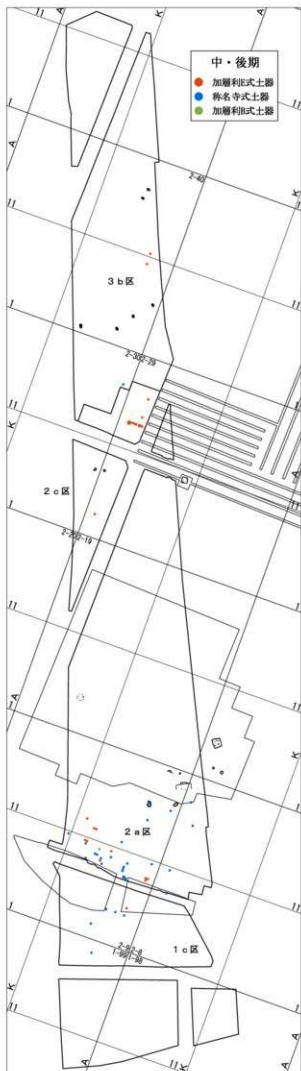
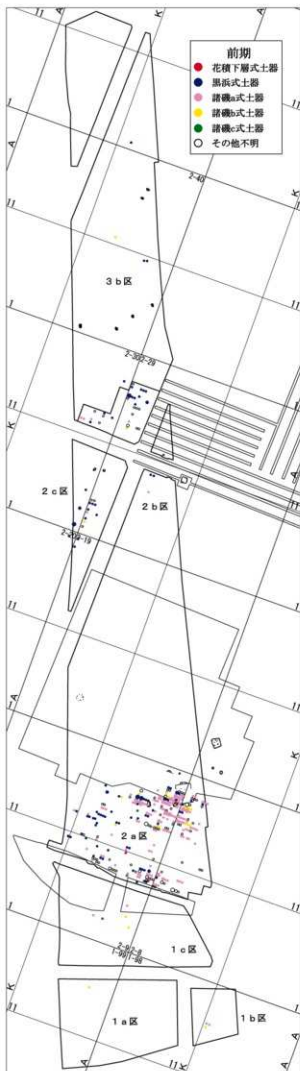
第5章 2区の遺構と遺物

第7表 縄文土器型式別一覧表

式名	出土層	1区			2区			3区			合計						
		出 土 数	埋 藏 数	計	出 土 数	埋 藏 数	計	出 土 数	埋 藏 数	計							
早期	出土数	0		3	3	6				0	6						
	埋藏数	0		3	2	5				0	5						
弥文系	出土数	0	1	3	2	1	7	2			2	9					
	埋藏数	0	1	1	2	1	5	1			1	6					
押型文系	出土数	0	2	8	4	14					0	14					
	埋藏数	0	2	6	3	11					0	11					
垂文系	出土数	0	6	10	7	23					0	23					
	埋藏数	0	4	5	1	10					0	10					
早期小計	出土数	0	0	0	0	9	24	16	1	50	2	52					
	埋藏数	0	0	0	0	7	15	8	1	31	1	32					
前期	出土数	0				1	1				0	1					
	埋藏数	0				1	1				0	1					
花縄下層式	出土数	0		3	1	4					0	4					
	埋藏数	0		3	1	4					0	4					
美形式	出土数	1	1	43	75	46	164	9	3	29	41	206					
	埋藏数	1	1	2	11	3	16	0	3	0	3	20					
縄縄口式	出土数	1	4	5	109	166	277	352	2	4	6	363					
	埋藏数	1	3	4	7	20	7	34	0	1	1	39					
縄縄口式	出土数	2	2	4	2	17	4	23	4	1	2	7	34				
	埋藏数	1	2	3	1	2	2	5	2	1	0	3	11				
縄縄口式	出土数	0		3	3	5	1	3	5	1	6	9					
	埋藏数	0		1	1	2	1	2	1	1	3	4					
深溝式	出土数	0		1			1	3			3	4					
	埋藏数	0		0	1		1	3			3	4					
前期小計	出土数	0	3	7	0	10	155	261	126	0	549	23	5	35	0	63	621
	埋藏数	0	2	6	0	8	11	37	13	1	62	7	5	1	0	13	83
中期	出土数			0	1		1				0	1			0	1	0
	埋藏数			0	0		0				0	0			0	0	0
加賀利E式	出土数	1		1	3	11	14	13	1	21	35	50					
	埋藏数	1		1	2	6	6	0	1	0	1	10					
手刷小計	出土数	1	0	0	1	4	11	0	0	15	13	1	21	0	35	51	
	埋藏数	1	0	0	1	2	6	0	0	8	0	1	0	0	1	10	
駒形寺式	出土数	6		6	11	24	8	43		1	1	50					
	埋藏数	6		6	2	7	2	11		0	0	17					
加賀利B	出土数			0	1		1				0	1			0	1	
	埋藏数			0	1		1				0	1			0	1	
後期小計	出土数	0	6	0	0	6	11	25	8	0	44	0	0	1	0	1	51
	埋藏数	0	6	0	0	6	2	8	2	0	12	0	0	0	0	0	18
不明	出土数	0	26	59	83	166	16	1	15		32	200					
	埋藏数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
合計	出土数	1	9	7	0	17	205	383	235	2	825	54	7	72	0	133	975
	埋藏数	1	8	6	0	15	22	66	23	2	113	8	6	1	0	15	143



第270図 2区出土縄文土器の分布の変遷



①撚糸文系土器

井草式土器(第271図1)が1点認められた。口唇端部が欠損するが、口縁部形態から井草Ⅱ式土器に相当する。同図2～6は条間隔が粗いことから、稲荷台式土器に、第307図1は節の状態から稲荷原式土器に位置付けられるものと観察される。

②押型文系土器

いずれも山形押型文である。胴部片のみのため文様構成は不明であるが、縦位施文とし、1cm前後の無文帯をもつ。

③沈線文系土器

あまり明確ではないが、第271図18～20の刺突文を施す土器が相当する。いずれも繊維は含まず、器面調整は良好である。刺突文の形状から植物茎を工具とし、18は斜位に、19、20は垂直に刺突する。

沈線文系土器に伴う資料と観察される。

④条痕文系土器

第271図21～32の各資料が相当する。21～24、27は繊維を含まず、28～32は胎土中に繊維を含む。

22は胴部に段をもつ器形を呈し、野島式土器に位置付けられる資料であろう。21、23、24、27についても、これに伴う資料であるとみられる。

28～32は器内外面に条痕のみ認められる資料であり、茅山系土器に相当するものだろう。

⑤花積下層式土器

良好な出土例ではないが、2区108号土坑出土土器(第269図1)と遺構外出土の第271図33の2点が相当する。破片のため縄文以外の文様は不明であるが、施される羽状縄文について各縄文帯が短いことから、同式と観察した。

⑥黒浜式土器

第57図1、第271図33～43、第307図2～4が同期資料である。出土点数は多いが、やはり破片資料であり、器形が判断できるものはない。いずれも繊維含有量は多く、器内外に繊維痕が露出する例が多い。破片であるため、縄文についてもRLないしLRのみが観察される資料が多い。第272図45は附加条第1種により羽状縄文が構成される同図35～41に

は、連続爪型文、横走線文などが施される。41に加えられる円形文は、半載竹管の回転手法によるものである。

⑦植房式土器

半載竹管によりコンパス文状の波状文が施されるもので、出土土器のなかで1点のみ検出された。胎土中に繊維を含む。

⑧諸磯a式土器

第57図2～5、第272図51～84、第307図5が同期資料である。山形文、肋骨文、入組状木葉文を施す資料が含まれる。別項(第7章-6)に文様と施文具について考察した。

⑨諸磯b式土器

第273図85～89が該当する。平行線文(86、87)と浮線文(88、89)がある。85は有孔浅鉢であると観察される。

⑩諸磯c式土器

第273図90、第307図9～11が該当する。90は貼付される貝殻状突起部片である。9の貼付文には半載竹管によるとみられるコの字状の刺突が加えられ、10の貼付文は無文である。

⑪浮島式土器

第273図91、第307図12～14が該当する。貝殻文はいずれもロッキングにより表出される。なお、91には貝殻文とともに縄文が施される。

⑫加曾利E式土器

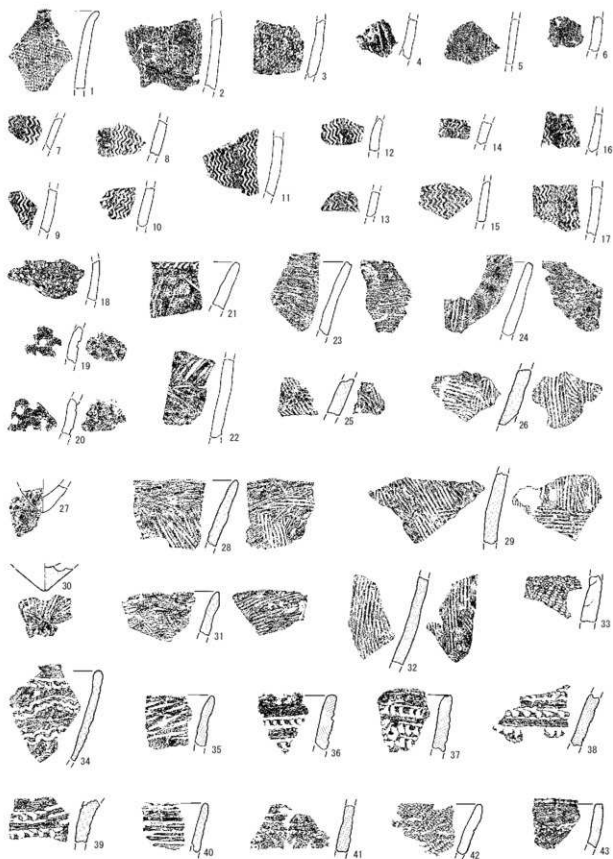
出土資料では、加曾利E3式土器が多いが、第273図98の両耳壺は加曾利E4式土器に相当しよう。

⑬称名寺式土器

第57図14、15、第273図100～110などが該当する。区画文内が無文のもの(14、15、100～103)、区画文内に刺突文を施すもの(104～109)が含まれる。これらは称名寺Ⅱ式土器に位置付けられる。

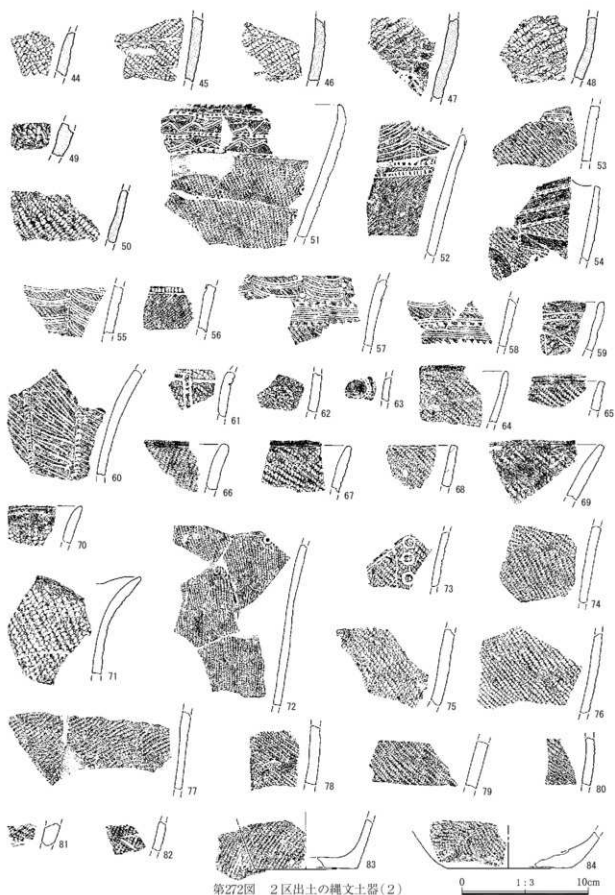
⑭加曾利B式土器

第273図111が同期に相当するものと考えられる。以上のように荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土の縄文土器には、断片的ながら早期から後期にわたる資料が含まれる。近隣に各時期の集落が十分想定できる。



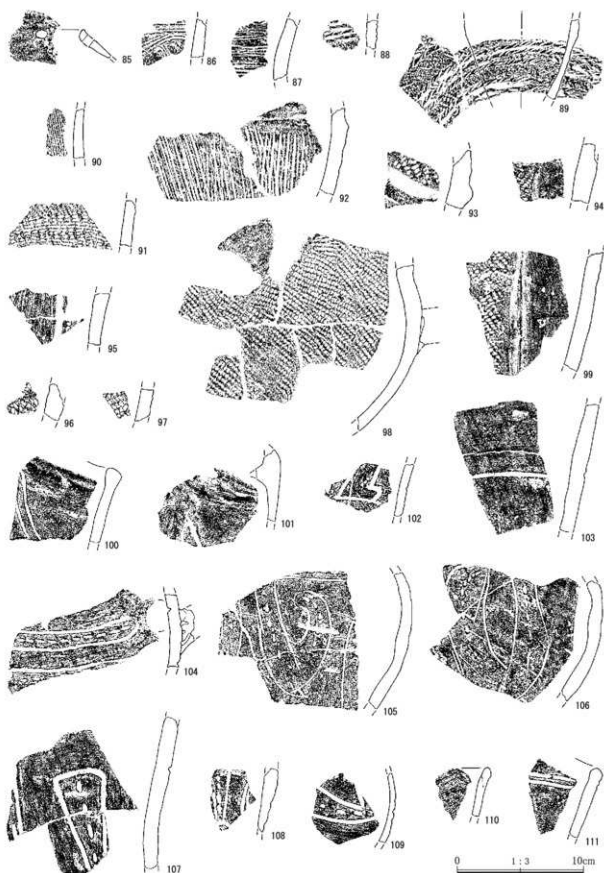
第271図 2区出土の縄文土器(1)

0 1:3 10cm



第272図 2区出土の縄文土器(2)





第273図 2区出土の縄文土器(3)

## b. 石器類

(第274～282図 PL205～213 遺物観察表P.612～614)

**石器類の器種と分布** 2区遺構外出土の石器類は、石器146点、剥片151点、砕片167点、礫片58点、礫42点、合計566点が出土した。

剥片・砕片・礫片・礫は縄文時代のものとの確証はないが、出土分布傾向や石材に共通性が縄文時代の石器と共通していることから、ここでは縄文時代の石器類に含めて計数した。しかし、これらの石器類は包含層や古墳時代以降の遺構から出土したものであり、石器製作の実態を示すような資料でないと判断し、接合等の作業および石材分布等の分析はおこなわなかった。

石器には打製石斧・尖頭器・石匙・石鏃・削器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・スタンプ形石器・石核・凹石・擦石・敲石・砥石・多孔石が認められた。全部で146点の石器が出土したが、このうち98点の石器を図化掲載し、その他は写真のみ掲載した。

石器も縄文土器と同様に、本来の出土位置を示す出土状況でない資料が大半を占めることから、今回の調査では、微視的な分布状況を把握できるデータをとっていないが、器種と出土位置との関連を示したのが第8表である。縄文時代の遺構から出土しているのは142号土坑の打製石斧1点のみで、その他は表採およびグリッド出土資料が78点、古墳時代以降の遺構から出土した48点、グリッド出土が69点である。

石器類の表採資料を除く出土位置のわかる375点について、器種ごとに分布状況を示したのが第274図である。石器は器種ごとのドット、剥片・砕片・礫片・礫は1グリッドごとの出土数で粗密を図示した。古墳時代以降の遺構出土の石器類は混入であるが、グリッド出土の303点は基本土層I b層からなる褐色土中から出土した資料が大半であり、本来の出土地点に近い分布状況を示していると考えられる。

分布図からは、2区の石器類は2a区の台地縁辺と2c区に偏在している。このような分布状況は前期から後期にかけての縄文土器の分布(第270図)と

同じであり、石器の時期も対応するものと推定される。2a区への石器が偏在して見えるのは、縄文土器分布と同様に、北側にある圃場整備調査地区(荒砥北三木堂遺跡2区)の遺物分布が図示できないからである。荒砥北三木堂遺跡2区には南東隅に縄文時代の遺構が検出されており、石器出土分布も広がっていたことが推定される。

また2c区東半分から3b区の南東隅には、縄文時代には凹んでいたと見られる埋没凹地(P.L.132-7・8)があり、縄文土器とともに石器類も比較的集中して出土した。また縄文土器の出土がなかった3c区にも少量の石器および剥片類が出土した。

器種別に見ると、打製石斧が台地縁辺の2a区に多く出土しているのが看取できる。また、石核は出土位置のわかる22点を図示したが、2a区南端部に偏在している。石核はすべて黒色頁岩であり、石核の出土したグリッドのほぼ全てに黒色頁岩の剥片類が出土している。

**石器の分類とその特徴**

①打製石斧 計56点が出土した。56点中41点が2区に、うち15点(36.6%)が縄文時代の包含層となっている淡色黒ボク土中からの出土であった。打製石斧については従来の分類基準に従い3形態に分類したが、短冊・撥・分銅に加えて途中「鋸形」様の石斧を認定、最終的には4形態に分類することとなった。各類の打製石斧は、短冊形8点・撥形31・分銅形6・鋸形2点・不明9であった。

短冊形、及び、撥形の打製石斧については、形態変化が暫時的であり、その分類基準は明確にはできないという難点がある。今回も短冊形を広く、撥形を限定的に捉えるという状況は隣接する今井道土II遺跡の報告の時と変らなかった(『今井道土II遺跡』2006、群理工報書326集)。

短冊形の打製石斧は8点が出土した。8点中7点が2区から出土。石材は黒色頁岩が8点中5点で、このほかには細粒輝石安山岩3点が出土した。石斧に黒色頁岩を多用する傾向は、赤城山南麓における縄文石器の特徴となっているが、細粒輝石黒色安山

岩についても石斧素材になることが多く、使用石材の傾向のひとつとして取り上げることができる。今回、報告する同石材製石斧3点中2点(1点は刃部欠損)は刃部に最大幅を有する直刃タイプのそれであり、頁岩製石斧が弧刃となるものが多い状況とは対照的で、出土資料からみた一つの傾向ということになるかもしれない。

短冊形の石斧は完成状態にあるものが大部分であったが、概して使用頻度が低かったようであり、明確な刃部磨耗痕は図示した短冊形石斧5例中2例(第276図17・23)に見られたのみであった。石斧の稜線もシャープなものが多く、先の刃部磨耗の状況を表づけているかのようであった。側縁加工については片側が潰れるものがあるが、典型的な両極打撃を示唆するものは見られなかった。

撥形の打製石斧は31点が出土した。31点中21点が、しかもその2/3程度(14点)が淡色黒ボク土の出土であった。石器石材は黒色頁岩が28点と圧倒的で、このほか細粒輝石安山岩が2点、粘板岩が1点となっている。出土地点が黒浜～諸磯の包含層ということを考えるなら、おおよその帰属時期が想定されて

くるだろう。

撥形の石斧は小～中形品が多い。石器のサイズは長さ10cm、重さ200g未満であり、それらの数値を越える大形品は少ないようである。石器は明らかに刃部を再生使用するために、必然的に徐々に小型化したようであるが、明確な磨耗痕が少ないことも特徴のひとつとなっている。さらに、裏面側の剥離角が浅く、背面側剥離角が反対に深い点が石器製作上の技術的特徴となっており、結果的に側縁が裏面側に偏る点も特徴のひとつとなるだろう。その製作手順は裏面側側縁加工→背面側側縁加工→刃部加工の順となっているが、素材剥片の縁辺をそのまま刃部とすることも多い。側縁のエッジはシャープで潰れた状態にはなく、直接石器を柄に巻縛するような装着法は想定できない。

撥形の石斧も短冊形の石斧同様、完成状態にあるものが多い。最新の剥離が明らかに刃部にあるもの(第275図4・7・8・10・11)が大部分であるが、未加工のエッジを刃部としたもの(3・9)も少数存在する。刃部形態は直刃様であるが、弧状刃部(13～16)となるものもあり、多様性に富む。稜線等はシャープであることが多く、概して使い込まれた状態にはないが、未加工のエッジを刃部とした2点については、刃部磨耗が明らかであった。

第275図13～16については、形態的特徴と側縁加工の類似性を下に便宜的に分類したものである。

14の石器下端には器体長軸方向の擦痕があり、ここに刃部が想定可能で、機能的には撥形のそれと遜色ないものと考えているが、一方では側縁加工が錯交的であるという技術的差異も明らかである。上記4点については槌器的機能も想定すべきであり、検討の余地を残している。

分銅形の打製石斧は6点が出土した。半数が2区に出土しているが、1点(第276図27)を除いてすべて古墳時代以降の遺構埋土の出土である。石器石材は黒色頁岩が5点・細粒輝石安山岩が1点と、他の石斧類同様の石材構成となっている。出土資料に限って言えば、サイズ的には長さ10～12cm、重さ

第8表 石器の器種と細分

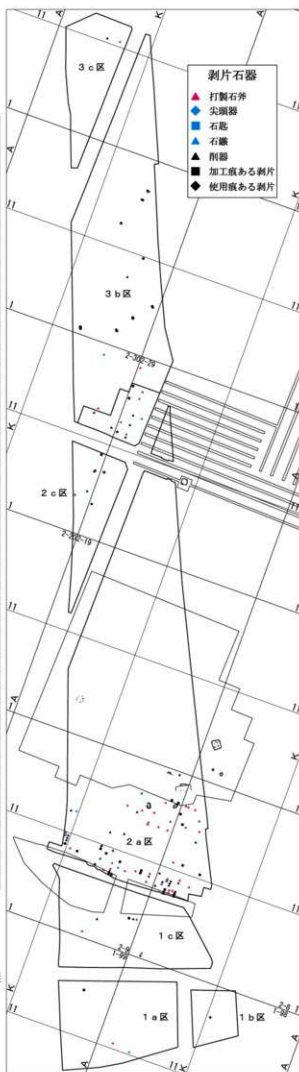
器種	大分類	中分類	小分類
打製石斧	形態	短冊形	小型
		分銅形	中型
削器	形態	刃部加工位置	大型
			特大
			不明
			横角
			短長
			不明
			側片側部
			三角
			両面
			右側縁
加工痕ある削片 使用痕ある削片	形態	加工部位置	側片側部
			三角
			両面
			右側縁
			左側縁
			左右側縁
			側片側部
			三角
			両面
			右側縁
石核	形態	分銅縁 原縁	
凹石	大きさ	凹みの種類	大型
			中型
			小型
			不明
			不明
磨石	大きさ	磨り面の位置	大型
			中型
			小型
			不明
			不明
石斧	大きさ	刃部位置	集合打撃
			コート状
			集合打撃+
			コート状
			片面
			両面
			側打撃の位置
			小口
			側縁
			無し

第5章 2区の遺構と遺物

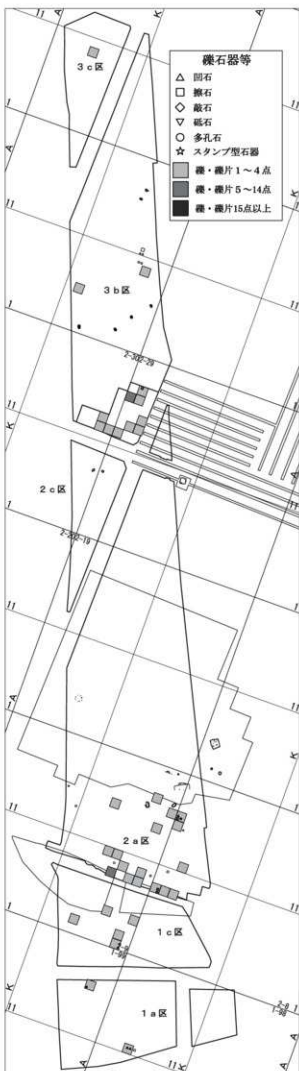
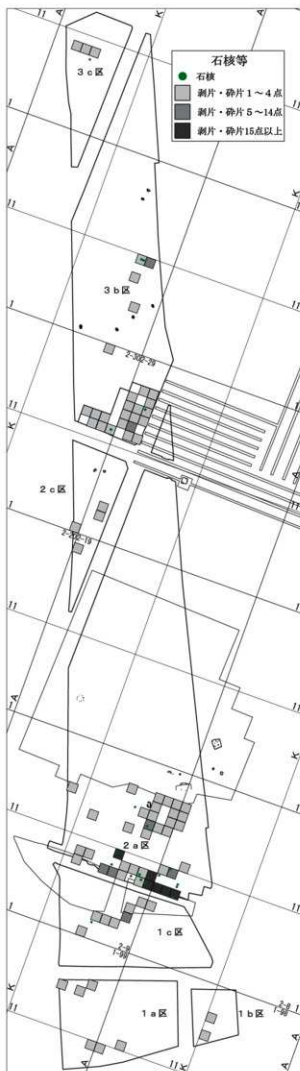
第9表 縄文時代石器器種別一覧表

器種	出土層	1区			2区			3区			合計						
		出土数	検出数	検出率	出土数	検出数	検出率	出土数	検出数	検出率							
打製石斧	出土数	2	5	1	1	9	6	15	19	1	4	1	1	6	56		
	検出数	2	5	1	1	9	4	14	12	1	3	1	1	5	45		
尖頭器	出土数				0	3									0	3	
	検出数				0	3									0	3	
石匙	出土数				0			1	1	1					1	2	
	検出数				0			1	1	1					1	2	
石鏃	出土数	1	1		2	3	3	1	7	1				6	7	16	
	検出数	1	1		2	3	3	1	7	1			5	6	15		
削器	出土数	2		2	1	5	6	12	11	29		1	7	8	42		
	検出数	2		1	1	4	3	12	5	20		0	5	5	29		
加工直条	出土数	6	1	2	9	5	4	17		26	5	1	3	9	44		
	検出数	1	1	1	3	0	4	9	13	2	1	1		4	20		
使用直条	出土数	1	1		1	1		3	4	2		1	3	9	0		
	検出数	0	0		0	1	2	3	2	0	0	2	5	2	5		
スタンプ	出土数		1	1		1	1	1	1					0	2		
	検出数		0	0		0	1	1	1					0	1		
石核	出土数		1	1	5	5	11	21	4	2	3	9	3	9	31		
	検出数			1	1	2	5	6	13	2	2	1	5	19			
凹石	出土数	1	2	3		2		2	2	2				2	7		
	検出数	1	2	3		3		1	1	1				1	5		
磨石	出土数	1	1	1	3	1	2	4	5	1				6	13		
	検出数	1	1	0	2	0	0	1	1	4	1			5	8		
斫石	出土数	1			1	3	2	1	6	2				2	9		
	検出数	1			1	2	1	0	3	1				1	5		
砥石	出土数				0	1		1						0	1		
	検出数				0	1		1						0	1		
多孔石	出土数				0	1		1						0	1		
	検出数				0	1		1						0	1		
石器小計	出土数	13	9	11	3	36	30	47	69	147	17	14	22	0	53	236	
	検出数	7	9	6	3	25	15	44	39	1	99	11	10	14	0	35	159
剥片	出土数	51	13		24	51	1	115		167	14	6	39		59	250	
	検出数	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	
削片	出土数	20	22	14	13	69	60	2	89	151	24	13	27		64	284	
	検出数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	
磨片	出土数	33	21		54	36		22	58	13	9	15		37	149		
	検出数	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0		0	0		
鏃	出土数	5	46	10	37	98	13	21	8	42	1	5		6	146		
	検出数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0		
合計	出土数	82	77	69	53	281	190	71	303	1	565	69	42	108	0	219	1065
	検出数	7	9	6	3	25	15	44	39	1	99	11	10	14	0	35	159

第274図 2区出土縄文石器の分布の変遷



第274図 縄文石器の分布の変遷



150g前後と、他の石斧類より大形である。

1区から出土した2点(第58図7・8)は欠損資料で、7は器体下半を、8は上半を破損している。7の左側縁「挟り部」は磨耗しており、再生段階で破損したものと考えている。8は表裏両面を被熱で欠いており、シルエットのみ分銅形としてのそれを残している。2区から出土した3点は1点が完形品(第276図30)、2点が破損品(25・28)であった。30は風化が激しく断定は困難だが、刃部が磨耗しているように見える。破損品の25・28については剥離面の形成する後部の磨耗が見られないことから、製作途中の破損と考えておきたい。3区から出土した1点(第308図5)は、背面側中央・右下を大きく破損したのちに、周辺加工を行い石器として再生したものである。

鉞形とした石斧は3区から2点(第308図2・4)のみ出土した。2はグリッド出土石器で、器体下半を破損。後縁に磨耗が見られないことから製作途中に破損した可能性がある。3は近世井戸の出土で、刃部や側縁下半部に著しい磨耗痕がある。表裏両面とも左右の両側縁を再生加工している。石器重量は97.5gと軽量であるが、再生以前の重量は+20~30gと考えておきたい。

鉞形様石斧の認定は、弥生石鉞の存在を意識してのことである。本遺跡出土資料は量的にも少なく、また、その帰属時期も不明であり、検討すべき要素の大半を欠いており、詳細は不明とせざるを得ないが、出土資料2点について石鉞と推定するには素材が薄く軽量すぎるだろうというのが結論であり、単純な形態的類似性に基づく分類には限界があるということかもしれない。

②石鉞 16点が出土した。内訳は1区2点・2区7点・3区6点・不明1点である。形態的には1区の2点が凹基無茎鉞1・有茎鉞1、2区の7点は平基無茎鉞3、凹基無茎鉞3、不明1、3区の6点は凹基無茎鉞6(1点は鉞形鉞、第308図11)という内訳になっている。先端部破片(第277図40)を除く15点については優品であり、少なくとも遺跡内製作

した石鉞未成品という捉え方は妥当ではない。1区出土の有茎鉞(第58図11)の側縁は鋸歯状となっており、特徴的である。

③尖頭器 3点が2区から出土している。3点とも住居埋土の出土であるが、いわゆる草創期尖頭器であり、荒砥北三木堂遺跡から出土した尖頭器石器群(昭和57年2月に圃場整備関連で発掘調査)と同列に位置づけるものである。

形態的には木葉形状(第277図31)を呈するものと、柳葉形状(32・33)を呈するものからなり、完形品1・欠損品2という内訳になっている。3点ともやや作りが雑だが、ほぼ完成状態にある。

④石匙 2・3区から各1点が出土した。第277図41は横型の石匙。いわゆる粗製石匙であり、つまみ部の作りは雑である。削器としての分類が妥当かもしれない。第308図6は縦型の石匙。縦長剥片を素材に用い、打面側の両側縁を加工、つまみ部のみ作出している。

⑤削器 41点が出土した。区毎に見た内訳は、1区5点・2区29点・3区7点となっているが、半数以上が住居埋土の出土で、包含層となっている淡色黒ボク土の出土は15点と少ない。幅10cm程度の幅広剥片を用いて、その剥片端部に刃部を作出するものが主体となっているが、縦長剥片の側縁を刃部とするもの(第58図12・第278図48)や、台形状剥片の2辺を刃部とするもの(第278図45)など多様で、剥片形状に応じ刃部を作出しているというのが実態である。加工量は概して少なく、剥片縁辺に限られることがほとんどであるが、中にはバルブを除去するよう加工するもの(44・49)もあり、また、刃部形態も直刃状・弧状・鋸歯状とさまざまであり、柔軟な素材選択と刃部の再生使用等、加工具特有の創造性が顕著である。

⑥加工痕ある剥片 44点が出土した。2区の出土量が最も多く、また、黒色頁岩を多用する石材構成、素材剥片の形状・加工部位等、削器と共通する要素が多い。製作意図の不明な加工剥片すべてについて加工痕ある剥片として分類しており、結果的に各種

石器の未製品等を含んでしまっていることが、上記要素の共通する背景となっている。

第59図1は石鏃用素材(黒曜石製)を用い加工したものの、第280図69は片側縁を欠損することにより器種認定できなかったもの、74は加工意図が不明、77は石斧様だが石核の可能性もあり、ここでは加工意図ある剥片とした。

⑦使用痕ある剥片 9点が出土した。区毎の出土量は2～4点であった。他の加工具類に比べて、その出土量が極めて少なかったのは、単純に実態を反映したという見方も可能であるが、包含層が住居群によって壊されているということが影響した可能性を想定しておきたい。使用痕は剥片形状に規定され、縦長剥片の場合には左右の側縁に、横長剥片の場合には剥片端部に使用痕が付く場合が多い。石材は全点が黒色頁岩。

⑧石核 31点が出土した。各区の出土量は1区1点・2区31点・3区9点となっている。2区では31点中10点が、3区では最大で3点が淡色黒ボク土から出土した。石核は、大形剥片を石核に用いるもの(第281図78～84)、分割鏢を用いるもの(同図85)、偏平鏢を用いるもの(同図86・88)等の他、側縁に打痕を有するもの(第282図91)等、さまざまであった。

⑨鏢石器類 スタンプ形石器・磨石・凹石・敲石・多孔石・砥石を鏢石器類として一括した。

スタンプ形石器は2点が出土した。1・2区から各1点が出土している。第282図90は偏平鏢を半割、機能部を作出する。この分割面(底面)には磨耗が、またそのエッジには小割離痕が生じている。石英閃緑岩。写真のみを掲載した1点(PL159)は片側縁を加工するものである。底面部については欠損するため、不明。変質安山岩。

磨石は13点が出土した。3区から最も多く出土しており、6点が出土した。磨石は600g前後を測る中型品、300g以下の小型品、900g以上の大型品に3分類され、略円形を呈するものが多い。一般的には凹石も同型で、磨耗面が生じているが、凹部のな

いものについて磨石とした。1600gを越える大型品(第311図33)については手持ち使用より台石的に使用した可能性が、また、小型品(同図34・35)の2点については石皿とセットになる磨石的な使用は難しいと考えている。

凹石は7点が出土した。前期後半の石器組成からみて出土量は明らかに少なく、発掘資料が部分的であることを示唆している可能性が高い。鏢サイズは600g前後の掌サイズであるが、凹部が片側2ヶ所にある典型例は少なく、片側のみ(第59図25)というものや、打痕が点在するもの(同図24)、普通は中心部を外れる凹部が中心にあるもの(同図22)など、多様である。

多孔石は2区から1点(第282図95)のみが出土した。破片資料で、表裏両面とも磨面を有する。

敲石は13点が出土した。棒状鏢の側縁や小口部に打痕を有するものを一括した。これについても鏢サイズによる3分類が可能であったが、ここでは鏢形状により分類、棒状鏢・偏平鏢の2種を確認した。第282図97については黒色片岩製のそれであり、小口部や側縁に打痕を有することから敲石と捉えたが、石棒等の片岩製石製品の素材としての可能性も考えるべきかもしれない。

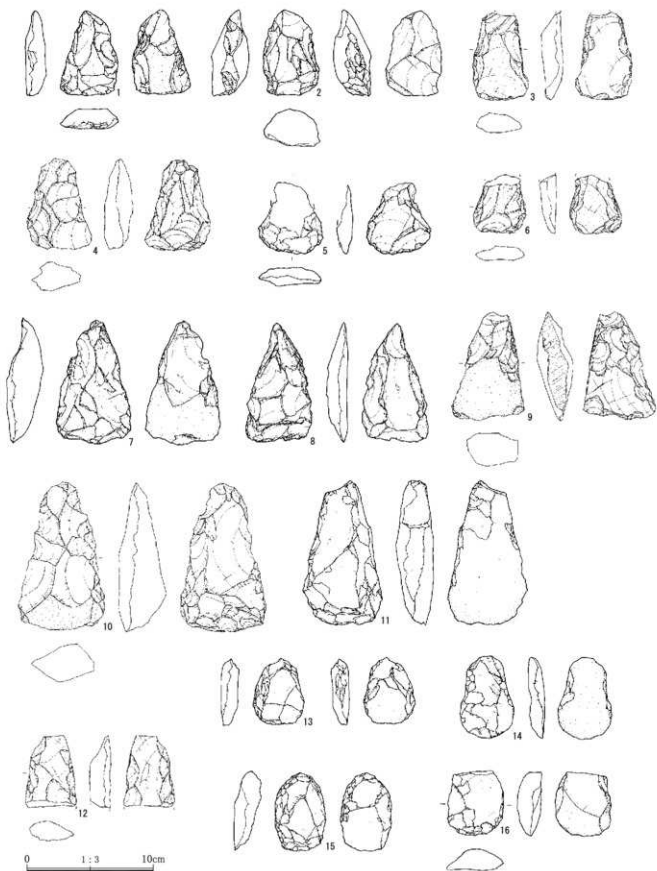
砥石(?)は1点のみ出土した。長さ6cm・幅2cm・重さ35.5gを測る小型の棒状鏢を用いる。鏢の右辺は直線的であり、長円形を呈する偏平鏢を半割したように見える。この右辺の半割面に石器長軸方向に直交する線状痕(第282図98、PL213)が見られ、また、これと同様な線状痕が左辺の表裏両面とも存在するようである。鏢の右辺(半割面)及び左辺はチヨコレート頁岩特有の光沢を有し、この部分に線状痕が顕著であるが、本来的には全面に線状痕が広がっている可能性が高い。機能的には線状痕の方向性が整っていることから手持ち使用したものと思われるが、その用途については判然としない。

(岩崎泰一)

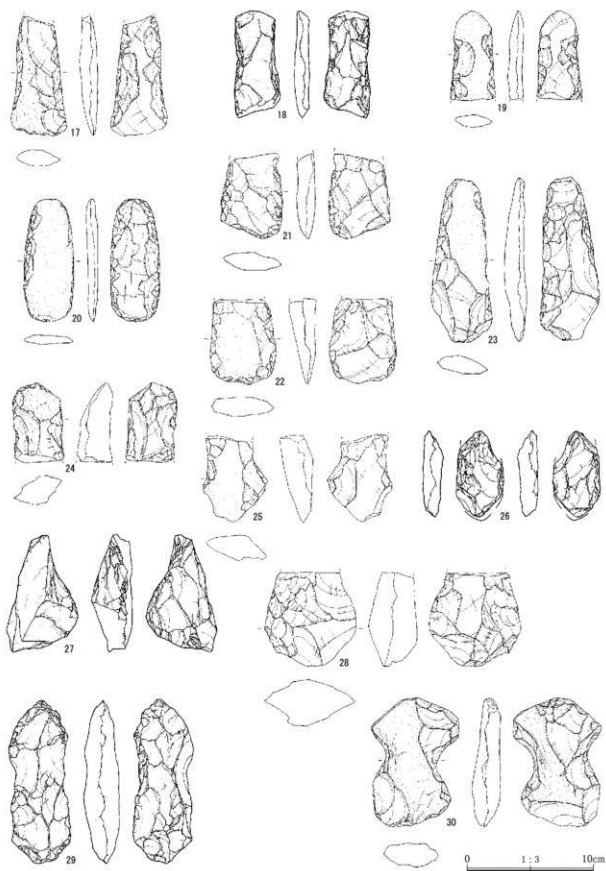




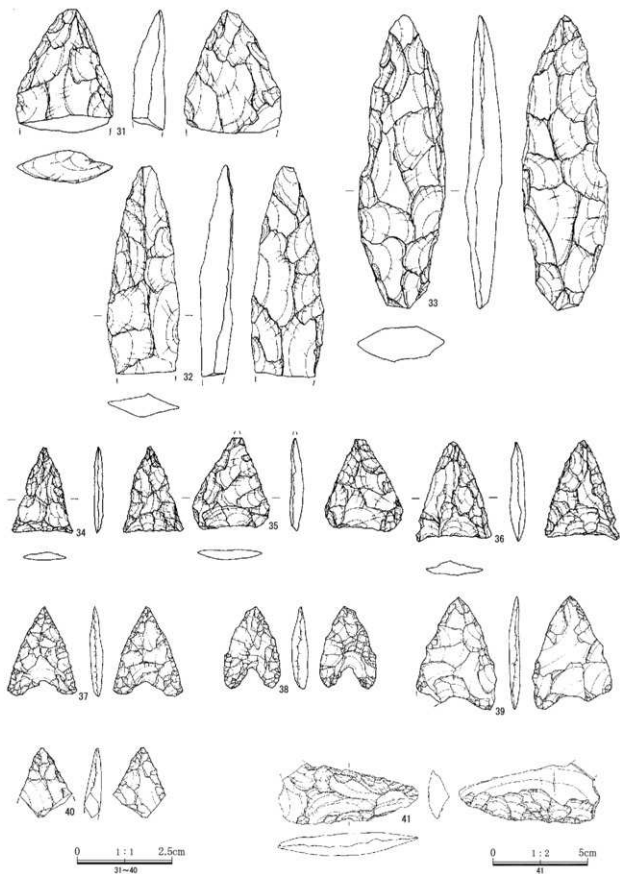




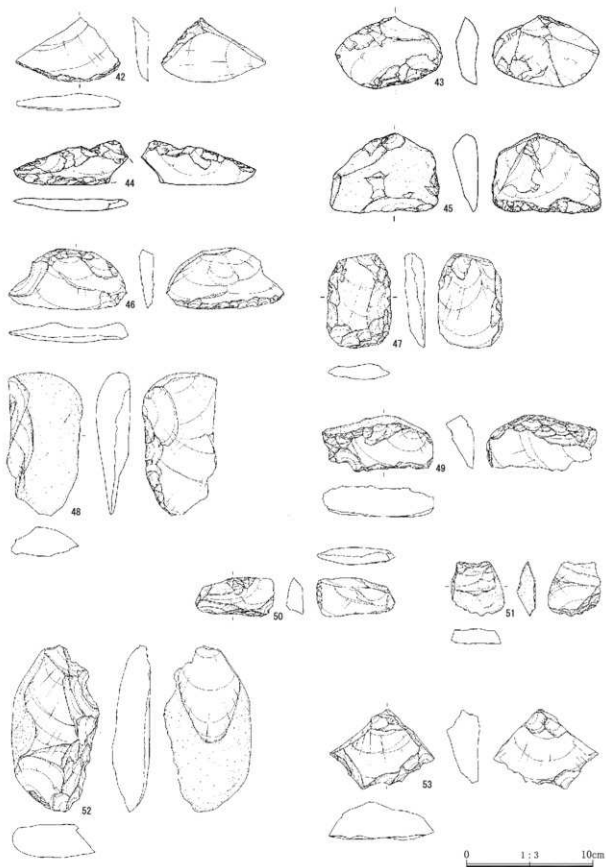
第275図 2区出土の縄文石器（1・打製石斧）



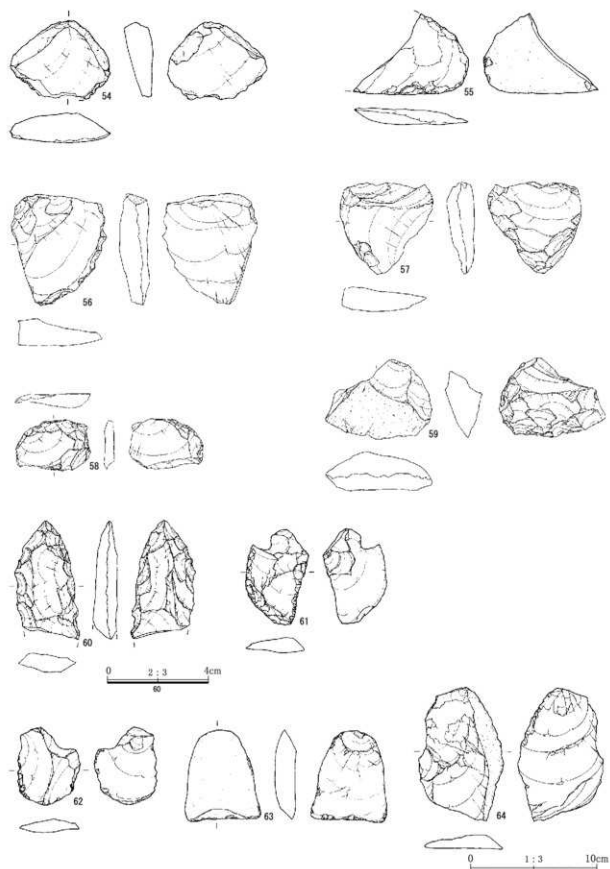
第276図 2区出土の縄文石器(2・打製石斧)



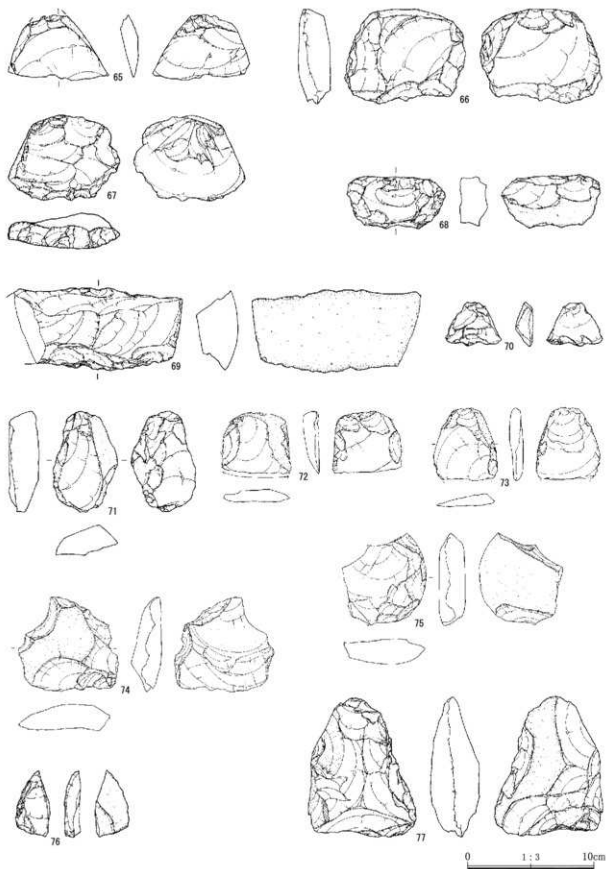
第277図 2区出土の縄文石器(3・尖頭器・石鎌・石匙)



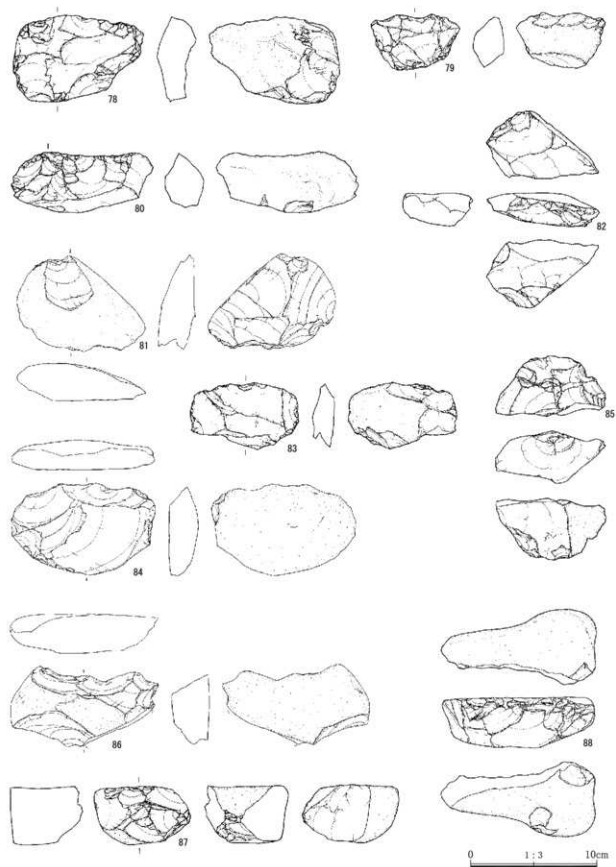
第278図 2区出土の縄文石器(4・削器)



第279図 2区出土の縄文石器(5・削器・使用痕ある剥片)

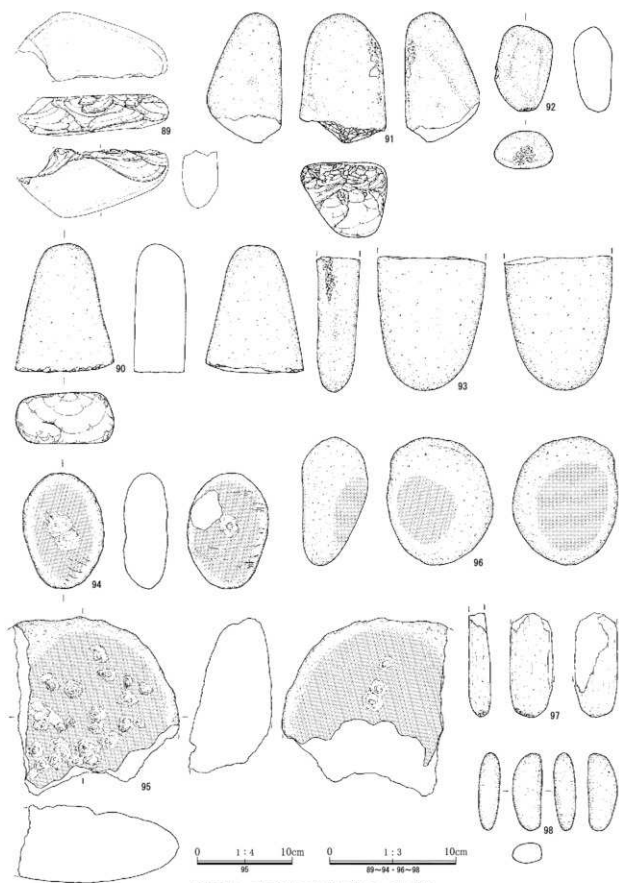


第280図 2区出土の縄文石器(6・加工痕ある剥片)



第281図 2区出土の縄文石器(7・石核)





第282図 2区出土の縄文石器(8・礫石器)